公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（42）

南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

六反ヶ丸（ろくたんがまる）遺跡３

―Ｃ・Ｄ地点―

（出水市六月田町）

2022年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（東側上空から）





小型仿製鏡と鈴

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道（芦北出水道路）の建設事業に伴って，平成29年度から実施した出水市六月田町六月田下に所在する六反ヶ丸遺跡Ｃ・Ｄ地点発掘調査の記録です。

本遺跡は，出水平野を流れる米ノ津川の右岸，標高約６ｍの自然堤防上に位置する縄文時代～近代までの複合遺跡であり，発掘調査により発見された遺構・遺物は，当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。

本報告書では，遺跡の東側にあたるＣ・Ｄ地点についての調査成果を報告しています。調査区全体の中で最も多くの遺構・遺物が発見されました。古墳時代の竪穴建物跡が多数発掘され，他地域の影響を受けた多くの土器や小型仿製鏡など多数の遺物も出土しており，九州北部・中部などとの交流が盛んであった集落の様相が窺える貴重な資料であると考えます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに，文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から報告書刊行まで，御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，出水市教育委員会，並びに調査において御指導いただいた先生方や，発掘作業，整理作業に従事された方々に対し，厚くお礼申し上げます。

令和４年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　中　村　和　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	ろくたんがまるいせき３
書名	六反ヶ丸遺跡３　-Ｃ・Ｄ地点-
副書名	南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第42集
編著者名	小田裕人　眞邉彩　浦博司　百枝勇一　池畑耕一
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-70-0574
発行年月日	西暦2022年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	発掘原因
ろくたんがまるいせき 六反ヶ丸遺跡	かごしまけん 鹿児島県 いずみし 出水市 ろくがつだまち 六月田町	46208	208-73	32° 6’ 27”	130° 20’ 29”	本調査 20180507～ 20190130	567	南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う記録保存調査
						本調査 20190507～ 20191128	1129	
						本調査 20201001～ 20201126	230	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地 集落跡	縄文時代	－	南福寺式土器・西平式土器・磨製石斧	
	弥生時代	－	突帯文土器・板付式土器 磨製石鏃・打製石斧	
	古墳時代	竪穴建物跡10軒 竪穴状遺構１基 土坑33基 土器溜６か所 埋納遺構１基	土師器・石皿・砥石・台石・磨石 鉄鏃・小型仿製鏡・ガラス小玉	小型仿製鏡の埋納された建物などの集落
	古代	掘立柱建物跡１棟 礫敷遺構１か所 土坑７基 土器焼成土坑２基	土師器 須恵器 緑釉陶器，青磁（越窯），瀬戸焼，土錘，転用硯	礫敷遺構や土器焼成土坑など検出 転用硯・越窯青磁・緑釉陶器など出土
	中世	－	青磁・白磁・瓦質土器・滑石製石鍋片	
	近世～近代	掘立柱建物跡３棟 土坑５基 溝状遺構２条 石列遺構５か所 石垣１か所	陶磁器(薩摩焼・伊万里焼・琉球焼など），石臼，石硯，石製田の神像（笠），キセル，青銅鈴，鉄製品，古銭	モイドンと呼ばれる祭祀遺構
	時期不詳	ピット380基	－	

遺跡の概要

出水平野を流れる米ノ津川の右岸，標高約６ｍの河岸段丘上に位置し，縄文時代後期から近代までの複合遺跡である。発掘調査対象部分は東西に細長く，生活道を挟んで西側からＡ～Ｄ地点に分けられ，本報告書は，Ｃ・Ｄ地点の調査結果である。

調査区全体に古墳時代の竪穴建物跡，土器溜，古代の礫敷遺構，土器焼成土坑，近世の掘立柱建物跡，近世～近代の石列遺構及び時期の異なる多数のピットが検出された。遺物は流れ込みのものも多く含まれるが，古墳時代の甕や壷，高坏，小型仿製鏡，ガラス小玉，古代の土師器・須恵器，転用硯，近世～近代の陶磁器，古銭，キセル，青銅鈴などが出土した。



六反ヶ丸遺跡位置図 (1:25,000)

例　言

1　本書は，南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う六反ヶ丸遺跡Ｃ・Ｄ地点の調査報告である。
　六反ヶ丸遺跡は，鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。

2　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」という）へ調査委託した。

3　発掘調査は，発掘調査支援業務を平成30年度・令和元年度に株式会社島田組へ委託し，調査センターの指揮・監督のもとで行った。令和２年度は調査センターが調査を行った。

4　整理・報告書作成事業は，平成30年度から令和３年度まで調査センターが実施した。

5　掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
　遺構番号はＡ地点からの連番とする。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

9　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ．）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。空中写真撮影は，平成30年度・令和元年度に株式会社ふじたに再委託した。

11　本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは眞邉彩・浦博司・小田裕人・百枝勇一の指示・確認のもと，調査センターの整理作業員が行った。

12　本書に係る出土遺物の実測・トレースは，眞邉・浦・小田・百枝の指示・確認のもと，調査センターの整理作業員が行った。なお，報告書の作成には，adobe社製の「IllustratorＣＣ」，「PhotoshopＣＣ」を使用した。

13　出土遺物の写真撮影は，福永修一が行った。

14　金属製品の保存処理は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の中村幸一郎・永濵功治が実施し，銅鏡・銅鈴等一部は公益財団法人元興寺文化財研究所にＸ線透過撮影・実測図作成とともに委託した。

15　本書に係る自然科学分析は，年代測定及び樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社加速器分析研究所，金属製品の蛍光Ｘ線分析・鉛同位体比測定を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

16　本書の執筆は次のように分担し，編集は小田・眞邉が行った。
　第Ⅰ～Ⅲ章　百枝
　第Ⅳ章　小田　眞邉　浦　池畑
　第Ⅴ章　パリノ・サーヴェイ株式会社
　　株式会社加速器分析研究所
　　埋文センター南の縄文調査室
　　公益財団法人元興寺文化財研究所
　第Ⅵ章　小田　眞邉

17　使用した土色は『新版標準土色帖』（1970　農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。

18　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号は以下のとおりである。
　ＳＩ　：竪穴建物跡　　ＳＫ　：土坑
　ＳＢ　：掘立柱建物跡　　ＳＤ　：溝状遺構
　ＳＸ　：土器溜，石列遺構，石垣
　Ｐ　：ピット

19　遺構図の縮尺は，以下を基本とし，各図に縮尺を示した。
　竪穴建物跡　：１/40，１/60
　竪穴状遺構　：１/80
　掘立柱建物跡：１/60
　土坑　　：１/20，１/40
　溝状遺構　：１/50，１/80
　土器溜　　：１/20，１/40
　石垣　　：１/80
　石列遺構　：１/20，１/30
　礫敷遺構　：１/125，１/20

20　遺物の縮尺は，以下を基本とし，各図にも縮尺を示した。
　土器　：１/３　　土師器：１/３
　土製品　：１/３　　陶磁器：１/３
　金属製品：１/２　　古銭　：１/１
　石器　：１/３，１/４

21　観察表のうち，口径・底径が括弧書きのものは復元径，器高が括弧書きのものは残高である。

22　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に付け替えた。

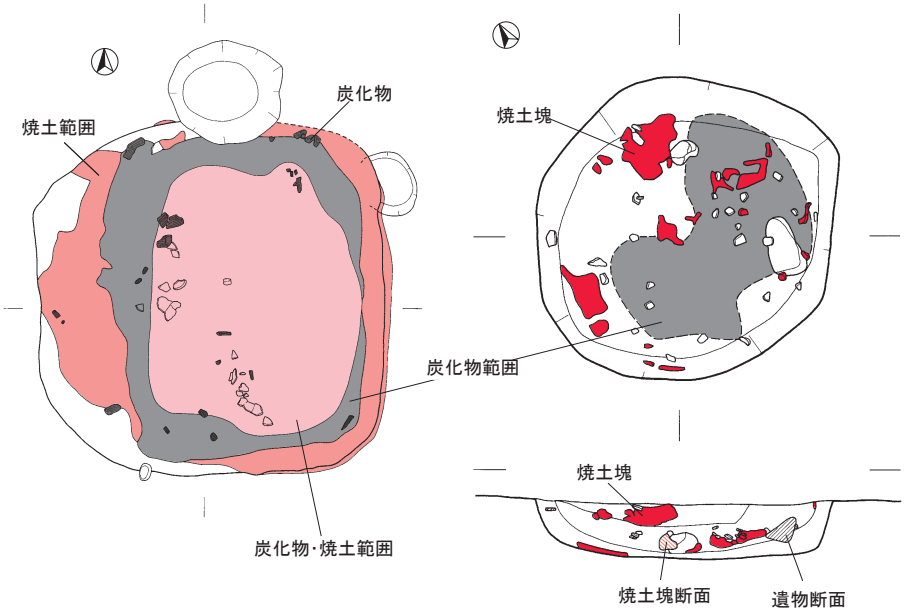
23　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ロク」である。

24　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

25　遺構の時期でない遺物については，包含層の遺物として扱った。（観察表参照）

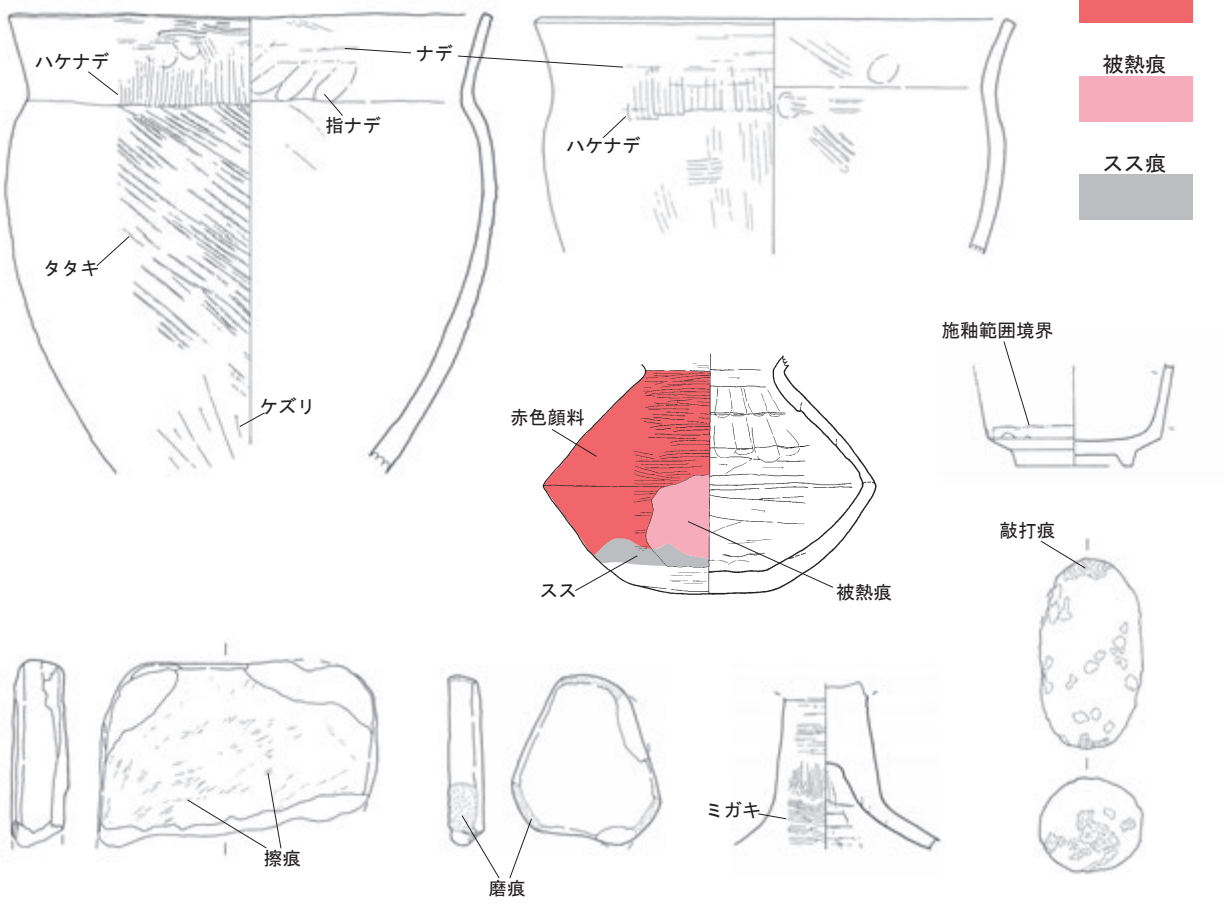
凡　例

［遺構］



炭化物
炭化物範囲
焼土塊
焼土範囲
炭化物・焼土範囲
焼土塊断面
炭化物断面
遺物断面
赤色顔料
被熱痕
スス痕

［遺物］



目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言・凡例
第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　調査の組織…… 1
1　分布調査…… 1
2　試掘調査…… 2
3　本調査…… 2
第３節　発掘調査の経過…… 3
第４節　整理作業の経過…… 6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 9
第１節　地理的環境…… 9
第２節　歴史的環境…… 9
第３節　鹿児島と熊本の県境～野田ＩＣ間の遺跡
…… 14
第Ⅲ章　調査の方法と層序…… 16
第１節　確認調査…… 16
1　確認調査の方法…… 16
2　確認調査の結果…… 16
第２節　本調査…… 16
1　発掘調査の方法…… 16
2　遺構の検出方法…… 18
第３節　整理・報告書作成作業…… 18
1　整理作業の方法と内容（令和元年度）…… 18
2　報告書作成作業の方法と内容（令和２年度）…… 19
3　報告書作成作業の方法と内容（令和３年度）…… 19
第４節　層序…… 19
第Ⅳ章　調査の成果…… 26
第１節　概要…… 26
第２節　縄文時代の調査成果…… 27
第３節　弥生時代の調査成果…… 27
第４節　古墳時代の調査成果…… 30
第５節　古代の調査成果…… 135
第６節　中世の調査成果…… 156
第７節　近世・近代の調査成果…… 158
第８節　ピット…… 182
第９節　その他の出土遺物…… 182
第Ⅴ章　自然科学分析…… 213
第Ⅵ章　総括…… 235
写真図版…… 259

挿図目次

第１図　六反ヶ丸遺跡　周辺地形図…… 8
第２図　六反ヶ丸遺跡　周辺遺跡位置図（１：25,000）…… 13
第３図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…… 15
第４図　六反ヶ丸遺跡　確認トレンチ配置図…… 16
第５図　六反ヶ丸遺跡　全体図及び年度別調査範囲…… 17
第６図　六反ヶ丸遺跡　Ｃ・Ｄ地点グリッド配置図…… 18
第７図　土層断面図１…… 20
第８図　土層断面図２…… 21
第９図　土層断面図３…… 22
第10図　土層断面図４…… 23
第11図　土層断面図５…… 24
第12図　土層断面図６…… 25
第13図　Ⅱｃ層の地形図…… 26
第14図　縄文時代の土器・石製品…… 27
第15図　弥生時代の土器（１）…… 28
第16図　弥生時代の土器（２）・石製品…… 29
第17図　古墳時代の遺構配置図…… 30
第18図　竪穴建物跡３号の平面図・断面図…… 31
第19図　竪穴建物跡３号のピット断面図…… 32
第20図　竪穴建物跡３号の土器出土状況・断面図…… 33
第21図　竪穴建物跡３号・土器溜３出土の土器（１）…… 34
第22図　土器溜３出土の土器（１）…… 35
第23図　竪穴建物跡３号・土器溜３出土の土器（２）…… 37
第24図　土器溜３出土の土器（２）…… 38
第25図　土器溜３出土の土器（３）…… 39
第26図　土器溜３出土の土器（４）・石製品…… 40
第27図　竪穴建物跡４号の平面図・断面図…… 41
第28図　竪穴建物跡４号出土の土器…… 42
第29図　竪穴建物跡５号の平面図・断面図…… 43
第30図　竪穴建物跡５号出土の土器（１）…… 44
第31図　竪穴建物跡５号出土の土器（２）…… 46
第32図　竪穴建物跡５号出土の土器（３）・石製品…… 47

第33図　竪穴建物跡６号の平面図・断面図…… 48
第34図　竪穴建物跡６号の土器出土状況・断面図…… 49
第35図　竪穴建物跡６号出土の土器（１）…… 50
第36図　竪穴建物跡６号出土の土器（２）…… 51
第37図　竪穴建物跡６号出土の土器（３）…… 52
第38図　竪穴建物跡６号出土の土器（４）…… 53
第39図　竪穴建物跡６号出土の土器（５）…… 54
第40図　竪穴建物跡６号出土の土器（６）…… 55
第41図　竪穴建物跡６号出土の土器（７）…… 56
第42図　竪穴建物跡６号出土の土器（８）と石製品…… 57
第43図　竪穴建物跡７号の平面図・断面図と出土の土器…… 59
第44図　竪穴建物跡８号の平面図・断面図…… 60
第45図　竪穴建物跡８号出土の土器…… 61
第46図　竪穴建物跡９号の平面図・断面図…… 61
第47図　竪穴建物跡10号の平面図・断面図…… 62
第48図　竪穴建物跡10号のピット配置図・断面図…… 63
第49図　竪穴建物跡10号出土の土器（１）…… 64
第50図　竪穴建物跡10号出土の土器（２）…… 65
第51図　竪穴建物跡10号出土の土器（３）…… 67
第52図　竪穴建物跡10号出土の土器（４）…… 68
第53図　竪穴建物跡10号出土の土器（５）…… 69
第54図　竪穴建物跡11号の平面図・断面図…… 70
第55図　竪穴建物跡11号出土の土器…… 71
第56図　竪穴建物跡12号の平面図・断面図…… 72
第57図　竪穴建物跡12号出土の土器（１）…… 73
第58図　竪穴建物跡12号出土の土器（２）と鉄製品・玉…… 74
第59図　竪穴状遺構の平面図・断面図…… 75
第60図　竪穴状遺構出土の土器（１）…… 76
第61図　竪穴状遺構出土の土器（２）…… 77
第62図　竪穴状遺構出土の土器（３）…… 78
第63図　竪穴状遺構出土の土器（４）…… 79
第64図　竪穴状遺構出土の土器（５）…… 80
第65図　竪穴状遺構出土の土器（６）と石製品・鉄製品…… 81
第66図　土坑18号～20号…… 82
第67図　土坑20号出土の土器と土坑21号～24号…… 83
第68図　土坑25号～27号…… 84
第69図　土坑28号～31号と土坑28号（422・423）・30号（424）
出土の土器…… 85
第70図　土坑32号～38号…… 86
第71図　土坑39号…… 87
第72図　土坑39号のピット配置図…… 88
第73図　土坑39号出土の土器…… 89
第74図　土坑40号…… 89
第75図　土坑41号と出土の土器…… 90
第76図　土坑42号（１）…… 90
第77図　土坑42号（２）・43号…… 91
第78図　土坑42号・43号出土の土器…… 92
第79図　土坑44号・45号と45号出土の土器…… 93
第80図　土坑46号～50号と50号出土の土器…… 94
第81図　埋納遺構出土の小型仿製鏡…… 96
第82図　土器溜３…… 96
第83図　土器溜４（１）…… 97
第84図　土器溜４（２）…… 98
第85図　土器溜４出土の土器（１）…… 99
第86図　土器溜４出土の土器（２）…… 100
第87図　土器溜４出土の土器（３）…… 101
第88図　土器溜５（１）…… 102
第89図　土器溜５（２）と出土の石製品…… 103
第90図　土器溜５出土の土器（１）…… 104
第91図　土器溜５出土の土器（２）…… 105
第92図　土器溜５出土の土器（３）…… 106
第93図　土器溜５出土の土器（４）…… 107
第94図　土器溜７…… 108
第95図　土器溜７出土の土器（１）…… 109
第96図　土器溜７出土の土器（２）…… 110
第97図　土器溜７出土の土器（３）…… 111
第98図　土器溜７出土の土器（４）…… 112
第99図　土器溜７出土の土器（５）…… 114
第100図 土器溜７出土の土器（６）と土製品･鉄製品 …… 115
第101図 土器溜８出土の土器（１）…… 116
第102図 土器溜８出土の土器（２）と鉄製品…… 117
第103図 包含層出土の古墳時代の土師器（１）…… 118
第104図 包含層出土の古墳時代の土師器（２）…… 121
第105図 包含層出土の古墳時代の土師器（３）…… 122
第106図 包含層出土の古墳時代の土師器（４）…… 123
第107図 包含層出土の古墳時代の土師器（５）…… 125
第108図 包含層出土の古墳時代の土師器（６）と土製品…… 126
第109図 包含層出土の石製品（１）…… 127
第110図 包含層出土の石製品（２）…… 128
第111図 礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（１）…… 129
第112図 礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（２）…… 131
第113図 礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（３）…… 132
第114図 礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（４）…… 133
第115図 古代の遺構配置図…… 135
第116図 掘立柱建物５号…… 136
第117図 土坑51号の土器出土状況…… 137

第118図 土坑51号の焼土範囲・断面図……138
第119図 土坑51号のピット配置図と出土の土器（１）……139
第120図 土坑51号出土の土器（２）と土坑52号の平面図・断面図……140
第121図 土坑53号～56号……141
第122図 土坑57号……142
第123図 土坑58号と出土の土器……143
第124図 土坑58号のピット配置図と土坑59号及び出土の土器……144
第125図 礫敷遺構……146
第126図 礫敷遺構　入口（１）……147
第127図 礫敷遺構　入口（２）……148
第128図 礫敷遺構出土の遺物……149
第129図 包含層出土の土師器……150
第130図 包含層出土の内黒土師器・土錘・青磁・硯など……151
第131図 包含層出土の須恵器（１）……153
第132図 包含層出土の須恵器（２）……154
第133図 包含層出土の須恵器（３）……155
第134図 中世の出土遺物（１）……156
第135図 中世の出土遺物（２）……157
第136図 近世・近代の遺構配置図……158
第137図 掘立柱建物跡６号……159
第138図 掘立柱建物跡６号出土の磁器と青銅・鉄製品・古銭……160
第139図 掘立柱建物跡７号……161
第140図 掘立柱建物跡８号……162
第141図 土坑60号と出土の鈴……163
第142図 土坑61号～63号……164
第143図 土坑64号……165
第144図 祭祀遺構……166
第145図 石列遺構１号……167
第146図 石列遺構２号……168
第147図 石列遺構３号と出土の石製品……169
第148図 石列遺構４号……170
第149図 石列遺構５号……171
第150図 祭祀遺構出土の遺物と青銅製品・古銭……172
第151図 溝状遺構３号・４号の平面図・断面図……173
第152図 溝状遺構４号の出土の陶磁器……174
第153図 溝状遺構４号の出土の遺物……175
第154図 石垣出土の陶磁器等……176
第155図 包含層出土の近世・近代の陶磁器（１）……177
第156図 包含層出土の近世・近代の陶磁器（２）……178
第157図 包含層出土の近世・近代の陶磁器（３）……179
第158図 包含層出土の近世・近代の陶磁器（４）……180
第159図 包含層出土の近世・近代の石製品・鉄製品・古銭 …181
第160図 その他の出土遺物……182
第161図 炭化材・木材……215
第162図 暦年較正結果……216
第163図 暦年較正年代グラフ（参考）……220
第164図 炭化材……222
第165図 小型仿製鏡（青丸：微小部観察箇所，赤丸：試料採取箇所……226
第166図 試料採取状況（小型仿製鏡）……226
第167図 銅鈴（赤丸：試料採取箇所）……226
第168図 試料採取状況（銅鈴）……226
第169図 蛍光X線スペクトル（小型仿製鏡）……227
第170図 蛍光X線スペクトル（銅鈴）……227
第171図 鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（Ａ式図）　227
第172図 鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（Ｂ式図）　227
第173図 鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比（Ａ式図）……227
第174図 鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比（Ｂ式図）……227
第175図 弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布（Ａ式図）……228
第176図 弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布（Ｂ式図）……228
第177図 銅鈴と平安時代資料との比較（Ａ式図）……228
第178図 銅鈴と平安時代資料との比較（Ｂ式図）……228
第179図 鈕穴の微小部観察像……228
第180図 IRSL感度変化法による被熱温度推定の測定手順 …230
第181図 №１のTLグローカーブ（a,c）と生長曲線（b,d）…230
第182図 №２のTLグローカーブ（a,c）と生長曲線（b,d）…231
第183図 各資料における段階加熱によるIRSL強度の感度変化……231
第184図 №３のTLグローカーブ（左）と生長曲線（右） …232
第185図 №４のTLグローカーブ（左）と生長曲線（右） …232
第186図 スペクトルチャート……233
第187図 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）……233
第188図 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）……234
第189図 Ｘ線撮影結果（Ｘ線透過装置）……234
第190図 六反ヶ丸遺跡　土器分類……238
第191図 六反ヶ丸遺跡　古墳時代土器編年（甕形土器）……238
第192図 六反ヶ丸遺跡周辺における古代官道想定図……256
第193図 九州および南九州の古代官道関係図……257
第194図 礫敷遺構断面模式図……258

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表１…… 11
第２表　周辺遺跡一覧表２…… 12
第３表　鹿児島と熊本の県境～野田ＩＣの間の遺跡…… 14
第４表　Ｃ調査区層序…… 20
第５表　Ｄ調査区層序…… 23
第６表　古墳時代竪穴建物跡・竪穴状遺構番号新旧対応表　32
第７表　古墳時代土器溜遺構番号新旧対応表……134
第８表　古墳時代土坑遺構番号新旧対応表……134
第９表　古代遺構番号新旧対応表……136
第10表　近世・近代遺構番号新旧対応表……161
第11表　土器・土師器・須恵器観察表……183
第12表　土器・土師器・須恵器観察表……184
第13表　土器・土師器・須恵器観察表……185
第14表　土器・土師器・須恵器観察表……186
第15表　土器・土師器・須恵器観察表……187
第16表　土器・土師器・須恵器観察表……188
第17表　土器・土師器・須恵器観察表……189
第18表　土器・土師器・須恵器観察表……190
第19表　土器・土師器・須恵器観察表……191
第20表　土器・土師器・須恵器観察表……192
第21表　土器・土師器・須恵器観察表……193
第22表　土器・土師器・須恵器観察表……194
第23表　土器・土師器・須恵器観察表……195
第24表　土器・土師器・須恵器観察表……196
第25表　土器・土師器・須恵器観察表……197
第26表　土器・土師器・須恵器観察表……198
第27表　土器・土師器・須恵器観察表……199
第28表　土器・土師器・須恵器観察表……200
第29表　土器・土師器・須恵器観察表……201
第30表　土器・土師器・須恵器観察表……202
第31表　土器・土師器・須恵器観察表……203
第32表　土器・土師器・須恵器観察表……204
第33表　土器・土師器・須恵器観察表……205
第34表　土器・土師器・須恵器観察表……206
第35表　土器・土師器・須恵器観察表……207
第36表　土器・土師器・須恵器観察表……208
第37表　土器・土師器・須恵器観察表……209
第38表　陶磁器観察表……210
第39表　陶磁器観察表……211
第40表　石器観察表……212
第41表　鉄器観察表……212
第42表　樹種同定結果……214
第43表　放射性炭素年代測定結果……216
第44表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}Ｃ補正値）……218
第45表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}Ｃ未方正値，暦年較正用^{14}Ｃ年代，較正年代）……219
第46表　樹種同定結果……222
第47表　蛍光Ｘ線分析による検出元素及び検出元素のピーク強度……225
第48表　鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した試料の鉛同位体比……225
第49表　FPM定量結果……233
第50表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（１）……240
第51表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（２）……241
第52表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（３）……242
第53表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（４）……243
第54表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（５）……244
第55表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（６）……245
第56表　礫敷遺構構成礫及び遺物の総数……246
第57表　礫敷遺構構成礫及び遺物の重量……247
第58表　礫敷遺構構成礫及び遺物の体積……248
第59表　礫敷遺構構成礫数１……249
第60表　礫敷遺構構成礫数２……250
第61表　礫敷遺構出土遺物総数……251
第62表　礫敷遺構出土土器数……252
第63表　礫敷遺構出土須恵器数……253
第64表　礫敷遺構出土土師器数……254
第65表　自然礫層（礫敷遺構下位）の礫数……255

図版目次

図版１　Ｃ・Ｄ調査区……259
図版２　調査区……260
図版３　土層断面……261
図版４　古墳時代　竪穴建物跡……262
図版５　古墳時代　竪穴建物跡……263
図版６　古墳時代　竪穴建物跡……264

図版７　古墳時代　竪穴建物跡……265
図版８　古墳時代　竪穴建物跡……266
図版９　古墳時代　小型仿製鏡……267
図版10　古墳時代　竪穴建物跡……268
図版11　古墳時代　竪穴建物跡……269
図版12　古墳時代　竪穴建物跡……270
図版13　古墳時代　竪穴状遺構……271
図版14　古墳時代　土坑……272
図版15　古墳時代　土坑……273
図版16　古墳時代　土坑……274
図版17　古墳時代　土坑・土器溜……275
図版18　古墳時代　土器溜……276
図版19　古墳時代　土器溜……277
図版20　古墳時代　土器溜・古代　土坑51号……278
図版21　古代　土坑51号……279
図版22　古代　土坑……280
図版23　古代　土坑58号……281
図版24　古代　土坑58号……282
図版25　古代　礫敷遺構……283
図版26　古代　礫敷遺構……284
図版27　古代　礫敷遺構……285
図版28　古代　礫敷遺構……286
図版29　古代　礫敷遺構……287
図版30　古代　礫敷遺構……288
図版31　近世・近代　掘立柱建物跡……289
図版32　近世・近代　掘立柱建物跡・土坑……290
図版33　近世・近代　土坑・溝状遺構・石垣……291
図版34　近世・近代　祭祀遺構・石列遺構……292
図版35　縄文時代・弥生時代　出土遺物……293
図版36　古墳時代　竪穴建物跡３号・土器溜３　出土遺物
……294
図版37　古墳時代　土器溜３　出土遺物……295
図版38　古墳時代　竪穴建物跡３号・土器溜３　出土遺物
……296
図版39　古墳時代　竪穴建物跡４号・５号・６号・土器溜３
出土遺物……297
図版40　古墳時代　竪穴建物跡５号　出土遺物……298
図版41　古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物……299
図版42　古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物……300
図版43　古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物……301
図版44　古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物……302
図版45　古墳時代　竪穴建物跡７号・８号　出土遺物……303
図版46　古墳時代　竪穴建物跡10号　出土遺物……304
図版47　古墳時代　竪穴建物跡10号　出土遺物……305
図版48　古墳時代　竪穴建物跡11号・12号・竪穴状遺構　出土
遺物……306
図版49　古墳時代　竪穴状遺構　出土遺物……307
図版50　古墳時代　竪穴状遺構　出土遺物……308
図版51　古墳時代　土坑28号・30号・39号・42号・43号　出土
遺物……309
図版52　古墳時代　土器溜４　出土遺物……310
図版53　古墳時代　土器溜４・５　出土遺物……311
図版54　古墳時代　土器溜５　出土遺物……312
図版55　古墳時代　土器溜７　出土遺物……313
図版56　古墳時代　土器溜７　出土遺物……314
図版57　古墳時代　土器溜７　出土遺物……315
図版58　古墳時代　土器溜８　出土遺物……316
図版59　古墳時代　包含層　出土遺物……317
図版60　古墳時代　包含層　出土遺物……318
図版61　古墳時代　礫敷遺構・包含層　出土遺物……319
図版62　古代　土坑51号　出土遺物……320
図版63　古代　土坑58号・礫敷遺構　出土遺物……321
図版64　古代　包含層　出土遺物……322
図版65　古代　包含層　出土遺物……323
図版66　中世　出土遺物……324
図版67　近世・近代　掘立柱建物跡６号・祭祀遺構・石列遺構
３号　出土遺物……325
図版68　近世・近代　溝状遺構４号　出土遺物……326
図版69　近世・近代　溝状遺構４号・石垣　出土遺物……327
図版70　近世・近代　包含層　出土遺物……328
図版71　古墳時代　埋納遺構・土坑60号
近世・近代　祭祀遺構・包含層　出土遺物……329
図版72　近世・近代　包含層　出土遺物……330

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき，鹿児島国道事務所は，南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設の施工計画に基づき，事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター以下「埋文センター」が，平成26年度に計画路線（芦北出水道路のうち，県境～出水ＩＣ間）の分布調査を実施した結果，事業区内には周知の遺跡を含め10か所の遺物散布地の存在が判明した。このうち六反ヶ丸遺跡は周知の遺跡にあたる。分布調査の結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて，鹿児島国道事務所，県文化財課，埋文センターの三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することとした。

なお，平成21年度まで当該事業の確認調査は，事業の円滑な推進を図る観点から本調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが，平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を導入し，「県内遺跡事前調査事業」として県文化財課が実施している。

これを受けて，遺跡の残存状況をより詳細に把握するため，県文化財課が平成28年12月21日に試掘調査，埋文センターが平成29年５月８日から５月28日にかけて確認調査をそれぞれ行ったところ，事業区域内の表面積7,000㎡の範囲に遺物包蔵地が存在することが判明した。

試掘調査，確認調査の結果，本調査は，県文化財課からの委託を受けて鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター以下「調査センター」が担当することとなった。平成21年度に埋文センターは，出水阿久根道路建設に伴う中郡遺跡群の発掘調査を「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき，民間調査組織と支援業務委託契約を締結して実施した実績があった。また，平成25年度に設立された調査センターは東九州自動車道建設に伴う発掘調査において，増大する事業量に伴う発掘調査の円滑かつ効率的な実施と事業推進の調整を図るため，民間組織と支援業務委託契約を結んで実施してきた実績があった。このような経緯のもと，鹿児島国道事務所からの要望を受け，平成29年６月に鹿児島国道事務所と県文化財課，調査センターの三者で協議を行った結果，六反ヶ丸遺跡の本調査においても民間支援組織を導入し，支援業務委託契約を締結して実施することとなった。

本調査が必要と判断された総表面積7,000㎡（延面積14,000㎡）のうち，平成29年度は，調査着手のための条件が整った範囲（Ａ地点＋Ｂ地点の一部），表面積1,609㎡（延面積4,747㎡）の調査を行い，終了した。調査期間は，平成29年９月１日（金）から平成30年１月30日（火）（実働85日間）である。

平成30年度は，Ｂ・Ｃ地点及び一部Ｄ地点の本調査を行い，表面積2,849㎡（延面積4,131㎡）の調査を終了した。調査期間は，平成30年５月７日（月）から平成31年１月30日（水）（実働146日間）まで，Ｃ地点の調査表面積は567㎡（延面積2,285㎡）である。

令和元年度は，Ｂ・Ｃ地点の未調査部分とＤ地点の調査を行い，表面積1,776㎡（延面積2,124㎡）の調査を終了した。調査期間は，令和元年５月７日（火）から11月28日（木）（実働81日間）である。その中で，Ｃ・Ｄ地点の調査表面積は1,632㎡（延面積1,980㎡）である。

令和２年度は，Ｃ・Ｄ地点の現道下の調査を行い，表面積230㎡（延面積458㎡）の調査を終了した。調査期間は，令和２年10月１日（木）から令和２年11月26日（木）（実働33日間）である。ただし，迂回路建設に必要な接続部の２か所については，本調査前９月末に各一日ずつ先行調査を行った。

第２節　調査の組織

１　分布調査（平成26年度）

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調　査　者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　黒川　忠広
　　県立埋蔵文化財センター
　　調査課第一調査係長　大久保浩二
　　文化財研究員　眞邉　彩
立　会　者　出水市教育委員会生涯学習課
　　主査　岩崎　新輔
　　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
　　企画係長　井久保和博
　　技官　下平　恭平
　　南九州西回り自動車道（出水～阿久根）
　　プロジェクト推進室

建設専門官　原田　修

2　試掘調査（平成28年度）

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調査者　〃
文化財主事　黒川　忠広
立会者　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
計画課専門職　西森　功
調査協力　出水市教育委員会生涯学習課
主査　岩崎　新輔

3　本調査

平成30年度

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　前迫　亮一
調査企画　総務課長兼総務係長　中村伸一郎
調査課長　中原　一成
調査第二係長　福永　修一
調査担当　文化財専門員　平木場秀男
調査事務　主査　小牧　智子

発掘調査の実施にあたり，調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，株式会社島田組へ本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお，調査センター職員１名が常駐し，調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委託先　株式会社　島田組
調査体制　〃
主任技術者　山本　瞬
主任調査支援員　宮下　貴浩
調査支援員　高見澤太基
丹生　泰雪
委託期間　平成30年４月８日～平成31年３月13日
委託内容　記録保存調査　１式
測量業務　１式
土工業務　１式
検査　中間検査　平成30年10月16日（火）
完成検査　平成31年２月25日（月）
（実地検査）
平成31年３月１日（金）
（成果物検査）

令和元年度

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中原　一成
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
調査課長　寺原　徹
調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　眞邉　彩
調査事務　主査　有川　剛弘

発掘調査の実施にあたり，調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，株式会社島田組へ山ノ段遺跡と併せて本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお，調査センター職員１名が常駐し，調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委託先　株式会社　島田組
調査体制　〃
主任技術者　岩佐　篤志
主任調査支援員　宮下　貴浩
（～５月）
〃　土居　和幸
（５～７月）
〃　堀井　泰樹
（７月～）
調査支援員　丹生　泰雪
〃　三ツ股正明
（５～６月）
〃　井上　索裕
（６月～）
委託期間　平成31年４月５日～令和２年３月６日
（六反ヶ丸遺跡調査期間は令和元年５月９日～10月31日）
委託内容　記録保存調査　１式
測量業務　１式
土工業務　１式
検査　中間検査　令和元年11月15日（金）
完成検査　令和２年２月25日（火）
（実地検査）
令和２年２月28日（金）

（成果物検査）

令和２年度

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原　一成
調査企画	総務課長兼総務係長	中島　　治
	調査課長	寺原　　徹
	調査第二係長	有馬　孝一
調査担当	文化財専門員	浦　　博司
	〃	百枝　勇一
調査事務	主事	上園　慶子

第３節　発掘調査の経過

発掘調査の経過については，日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

調査の過程（日誌抄　Ｃ・Ｄ地点関係のみ記載）

平成30年度（５月～１月までＣ地点，一部１月Ｄ地点）

30年５月

Ｄ－23～26区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa～Ⅱb層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ，遺構検出先行トレンチ設定掘り下げ（北壁）
Ｄ・Ｅ－27・28区
石列遺構部分の人力による表土剥ぎ，遺構検出，調査方法の検討，樹根除去作業，一部実測
16日　調査区幅杭打ち直し作業

６月

Ｄ－23～26区
Ⅱb～Ⅱc層掘り下げ，遺構検出写真撮影，遺物取り上げ，写真撮影
Ｃ－23～27区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa～Ⅱb層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，土器溜実測
Ｃ・Ｄ－26区　西壁土層断面実測
Ｄ・Ｅ－27・28区
人力による精査，樹根除去作業，写真撮影，実測準備
23日　安全パトロール
26日　監理業務　堂込秀人埋文センター所長

７月

Ｃ－23区
竪穴建物跡３号検出，写真撮影，遺物取り上げ，実測
Ｃ～Ｅ－24・25区　礫敷遺構検出，遺物取り上げ
Ｃ・Ｄ－25～27区
掘立柱建物跡６号検出，実測・掘り下げ，土器溜４・５号実測
Ｄ・Ｅ－27・28区　石列遺構１・２号検出，実測
23日　監理業務　平美典県文化財課文化財主事

８月

Ｃ－23区　竪穴建物跡３号実測・遺物取り上げ
Ｃ～Ｅ－24・25区　礫敷遺構検出・写真撮影
Ｃ～Ｅ－26・27区
掘立柱建物跡６号写真撮影，竪穴建物跡６号・掘立柱建物跡６号・土器焼成土坑検出・掘り下げ・写真撮影
Ｄ・Ｅ－27・28区　石列遺構１・２号検出・実測
２日　現地指導　成尾英仁氏（伊集院高教諭）
16日　現地指導　近江俊秀調査官（文化庁）
　　監理業務　森幸一郎県文化財課文化財主事
21日　現地指導　永山修一氏（ラ・サール学園教諭）
23日　産業医夏期現場視察　安全パトロール

９月

Ｃ－23区　　竪穴建物跡３号掘り下げ・実測
Ｃ～Ｅ－24・25区　礫敷遺構トレンチ設定掘り下げ
Ｃ～Ｅ－26・27区
竪穴建物跡６号掘り下げ・遺物取り上げ，掘立柱建物跡７号実測・写真撮影，土器焼成土坑検出・掘り下げ，土坑18号検出・掘り下げ・写真撮影
Ｄ・Ｅ－27・28区
石列遺構１・２号検出，樹根の除去，実測・写真撮影
19日　監理業務　中村和美埋文センター係長

10月

Ｃ－23区　竪穴建物跡３号掘り下げ・実測
Ｃ～Ｅ－24・25区
礫敷遺構一部掘り下げ・実測・写真撮影
Ｃ～Ｅ－26・27区
竪穴建物跡６号実測・写真撮影，土器焼成土坑掘り下げ・遺物取り上げ，竪穴建物跡４・５号検出・掘り下げ・写真撮影
Ｄ・Ｅ－27・28区
石列遺構１・２号検出，樹根の除去，実測・写真撮影，表土剥ぎ，Ⅱｃ層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，竪穴建物跡８号，土坑52・64号検出・写真撮影，小型仿製鏡出土
24日　監理業務　堂込秀人埋文センター所長
　　安全パトロール

31日　遺物指導　小田裕樹氏（奈良文化財研究所）

11月

Ｃ－23区　竪穴建物跡３号掘り下げ・実測

Ｃ～Ｅ－24・25区

礫敷遺構清掃・一部礫面剥ぎ・一部断面図作成・写真撮影

Ｃ～Ｅ－26・27区

竪穴建物跡４・５号掘り下げ・実測・写真撮影，土器焼成土坑小ピット検出・掘り下げ・写真撮影，遺物取り上げ

Ｄ・Ｅ－27・28区

石列遺構１号検出，石列遺構２号実測・写真撮影，竪穴建物跡８号，土坑52・64号掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影，小型仿製鏡検出・現地保存処理実施

１日　現地指導　深野信之氏（姶良市教育委員会）
　　小田裕樹氏（奈良文化財研究所）

８日　現地指導　森脇　広氏（鹿児島大学名誉教授）
　　〃　　中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センターセンター長）

　　空中写真撮影

10日　現地説明会

12月

Ｃ－23区　竪穴建物跡３号掘り下げ・実測

Ｃ～Ｅ－24・25区

礫敷遺構清掃・一部礫面剥ぎ・一部断面図作成・写真撮影

Ｃ～Ｅ－26・27区

竪穴建物跡４・５号掘り下げ・実測・写真撮影，土器焼成土坑小ピット検出・掘り下げ・写真撮影，遺物取り上げ

Ｄ・Ｅ－27・28区

石列遺構１号検出，石列遺構２号　実測・写真撮影，竪穴建物跡８号，土坑52・64号掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影，小型仿製鏡検出・現地保存処理実施

12日　安全パトロール

14日　現地指導　小鹿野　亮氏
（筑紫野市教育委員会）

１月

Ｃ～Ｅ－24・25区

礫敷遺構路面剥ぎ取り，路盤掘り下げ，遺物取り上げ，下層一部掘り下げ（青灰色土），Ⅲ層地形図測量，礫面３Ｄ用写真撮影，路盤面高度測定，下層確認・埋め戻し（重機使用）

Ｄ・Ｅ－27・28区

竪穴建物跡８号北側部分のみ実測・写真撮影，調査終了，竪穴建物跡９・10号検出，遺物取り上げ，実測・写真撮影，調査終了，土坑64号掘り下げ，遺物取り上げ，実測・写真撮影，調査終了，土坑54・67・55～57号検出，遺物取り上げ，実測・写真撮影，調査終了

Ｄ地点

一部重機による表土剥ぎ，遺構検出，遺物取り上げ，実測・写真撮影，埋め戻し（重機使用）

９日　現地指導　北村良介氏（鹿児島大名誉教授）

24日　遺跡検討会

　　県文化財課　　係長
　　県埋文センター　所長他３名
　　埋文調査センター　センター長他３名

令和元年度

５月

【Ｃ地点】

Ｃ～Ｅ－25～27区

復旧作業・排水作業及び環境整備，南壁沿いのトレンチ掘り下げ，礫敷遺構テラス状残部外周トレンチの復旧作業，礫敷遺構グリッド設定

Ｄ・Ｅ－26～28区　竪穴建物跡８号精査・土層確認

【Ｄ地点】

Ｂ～Ｆ－28～35区

整地作業，東端北壁沿いのトレンチ掘り下げ・表土剥ぎ（重機使用），壁面整形及び精査，調査区境の土嚢設置，地形測量，散水及びシート養生

Ｅ－30区　表土剥ぎ（重機使用）

Ｅ－31区

人力による赤褐色層（水田床土）の掘り下げ

６月

【Ｃ地点】

Ｄ・Ｅ－26～28区

南壁断面掘り下げ，壁面精査，竪穴住居跡８号検出

Ｃ～Ｅ－25～27区

礫敷遺構東部掘り下げ・遺物取り上げ・下面の精査および写真撮影，土坑20・21・63号検出・掘り下げ・実測・写真撮影・遺物取り上げ，排水及び環境整備

【Ｄ地点】

Ｂ～Ｆ－28～35区

表土剥ぎ，排水，西端部の遺構（竪穴状遺構・土坑42・43・44・45号・ピット他）検出，調査区壁際養生，排土搬出，グリッド杭設置，ベルト東側のトレンチ掘り下げ・精査，人力による赤褐色層（水田床土）の掘り下げ，竪穴建物跡17・18号・掘立柱建物跡４号・土坑40・41・46～50号・58・59号・ピット他精査及び検出・写真撮影

7月

【C地点】

D・E－26～28区　調査区東壁を復旧及び精査

C～E－25～27区

礫敷遺構テラス状下部実測・礫取り上げ・下層確認，埋め戻し，南壁Ⅱc層以下遺物取り上げ，調査区北壁トレンチ掘り下げ，北壁の精査及び分層

【D地点】

B～F－28～35区

排土搬出，南北ベルト壁面整形，竪穴建物跡11・12号・掘立柱建物跡4号・土坑40～42号・46～50号・58・59号・ピット他検出・掘り下げ・写真撮影・実測・遺物取り上げ，壁面整形，調査区西壁の精査，土坑48号の獣骨検出・写真撮影，D－Ⅳ層範囲確認掘り下げ，南壁トレンチ掘り下げ，竪穴建物跡12号掘り下げ，土坑43・44・45号・ピット他検出

D・E－34・35区

表土剥ぎ（重機使用），溝状遺構4号・土器溜8号・石垣検出

C・D－31～33区　表土剥ぎ（重機使用），排土搬出

16日　産業医夏期現場視察

17日　監理業務　宗岡克英埋文センター係長

8月

【C地点】

D・E－26～28区

台風養生，竪穴建物跡8号掘り下げ

C～E－25～27区

調査区北壁土層断面図作成，台風養生，埋め戻し

調査終了

【D地点】

B～F－28～35区

竪穴状遺構・溝状遺構4号掘り下げ，竪穴建物跡11・12号・土坑42・43・44・46・48・58号・石垣・ピット・土器溜7号検出・掘り下げ・写真撮影・実測・遺物取り上げ，調査区西側礫層掘り下げ，台風養生，南北トレンチ掘り下げ

20日　監理業務　三垣恵一埋文センター係長

21日　安全パトロール

9月

【C地点】

D・E－26～28区

竪穴建物跡8号掘り下げ・実測・写真撮影，環境整備

【D地点】

B～F－28～35区

竪穴状遺構掘り下げ，竪穴建物跡11・12号・土坑42・43・47・48・58号・土器溜7号・石垣・溝状遺構4号掘り下げ・精査・実測・遺物取り上げ・写真撮影，ピット8基掘り下げ・写真撮影，Ⅰ～Ⅲ層・D－Ⅳ層掘り下げ・検出・写真撮影，D－Ⅲ層掘り下げ，東側南北ベルト実測・写真撮影，表土剥ぎ及び人力によるD－Ⅱb層掘り下げ，Ⅲ層検出，地形測量，環境整備

C・D－28区　ピット群精査・写真撮影・実測

26日　空中写真撮影

10月

【C地点】

D・E－26～28区

竪穴建物跡8号掘り下げ・写真撮影・実測，地形測量，埋め戻し，調査終了

C－27・28区

表土剥ぎ（重機使用），環境整備，土坑63号・ピット3基検出・写真撮影・掘り下げ・実測，埋め戻し

調査終了

【D地点】

B～F－28～35区

土坑40～46号・50・58・59号・ピット・土器溜7号掘り下げ・写真撮影・実測，竪穴建物跡10・11号，竪穴状遺構掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影・実測，土器溜8号掘り下げ・検出・遺物取り上げ・写真撮影，石垣周辺土器溜り・小ピット掘り下げ・写真撮影，表土剥ぎ・D－Ⅱb層掘り下げ（重機使用），Ⅰ層断面作成，壁面整形，地形測量，調査終了

C・D－28区　ピット掘り下げ

調査終了

9日　安全パトロール

15・16日　現地指導　趙　哲済氏

（一般財団法人大阪市文化財協会）

23日　監理業務　前迫亮一埋文センター所長

令和2年度

9月

【現道下】

B・C－29・30区

先行調査（写真撮影・遺物回収）及び現状復旧

D・E－26・27区

先行調査（写真撮影・遺物回収）及び現状復旧

10月

【現道下】

D・E－28・29区

表土剥ぎ及びⅡb層・Ⅱc層掘り下げ

C－28区

ピット4基検出・掘り下げ・実測・写真撮影

Ｄ－27区　竪穴建物跡７号検出・掘り下げ
Ｄ－28区　東側拡張，竪穴状遺構・土坑28・29号・ピット３基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｄ・Ｅ－28区　西壁土層断面写真撮影及び実測，西側拡張部掘り下げ
Ｅ－28区　土坑31・33～36号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｅ－29区　東側拡張，土坑37～39号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｅ－28・29区　埋め戻し・道路復旧
Ｃ－28・29区　表土剥ぎ・Ⅱｂ層掘り下げ
Ｄ－26・27区　表土剥ぎ
Ｄ－27・28区　Ⅱｂ層掘り下げ，台風養生，遺構配置図作成
５日　国土交通省協議　重黒木幸英監督官・立神倫史文化財主事・有馬孝一埋文センター係長
自主安全衛生点検
13日　監理業務　前迫亮一埋文センター所長
27日　監理業務　中村和美埋文センター課長

11月
【現道下】
Ｄ－26～28区
Ⅱｂ層・Ⅱｃ層掘り下げ及び遺物取り上げ
Ｄ－27区
竪穴建物跡６号（ピット４基を含む）検出・掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影，竪穴建物跡７号（ピット２基を含む）掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影，土坑19・22・25・26号・ピット７基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｄ－28区
竪穴状遺構・掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影，土坑32・30号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｃ－28区　土坑27号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｅ－26区　Ⅱｂ層掘り下げ，ピット１基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
Ｄ・Ｅ－28区　西側拡張及び表土剥ぎ
Ｃ－28・29区及びＤ・Ｅ－28区　東側調査終了写真撮影
Ｂ・Ｃ－28・29区及びＤ・Ｅ－28区　埋め戻し
Ｄ－27・Ｅ－26区　埋め戻し
遺構配置図作成，調査範囲図作成
11日　監理業務　　三垣恵一埋文センター係長
16日　国土交通省協議　重黒木幸英監督官・立神倫史文化財主事・有馬孝一係長
17日　安全衛生パトロール
24日　監理業務　前迫亮一埋文センター所長
調査終了

第４節　整理作業の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，調査センターで行った。

平成30年度～令和元年度は，出土遺物の水洗い，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業を行った。

令和２年度は，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，遺物の実測及び拓本，トレース，遺構のトレース，レイアウト，写真撮影，原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を行った。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

平成30年度
調査組織

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	前迫　亮一
調査企画	総務課長兼総務係長	中村伸一郎
	調査課長	中原　一成
	調査第二係長	福永　修一
調査担当	文化財専門員	有馬　孝一
事務担当	主査	小牧　智子
	事業推進員	川﨑　麻衣

作業の経過
水洗い，注記
遺構……図面チェック，一部遺物実測，トレース
遺構配置図作成
遺物……土器分類，接合，実測，拓本，トレース
石器実測，一部トレース
土層断面・下図面作成，トレース
原稿執筆

令和元年度
調査組織

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原　一成
調査企画	総務課長兼総務係長	中島　　治
	調査課長	寺原　　徹
	調査第二係長	有馬　孝一
調査担当	文化財専門員	平木場秀男

〃　倉元　良文
事務担当　主査　有川　剛弘
事業推進員　川﨑　麻衣

作業の経過

遺構……トレースチェック，修正，レイアウト
遺物……土器トレースチェック，レイアウト
石器一部トレース，トレースチェック
遺物レイアウト，遺物観察表作成
土層断面‥トレースチェック，レイアウト
図版……レイアウト（現場・遺物），遺物写真撮影
原稿執筆
自然科学分析委託……実測分析１件，
鉛同位体比分析１件，
樹種同定分析１件，
年代測定分析１件
遺物指導　久住猛雄氏（福岡市経済観光文化局）
石田智子氏（鹿児島大学）

報告書作成指導委員会　調査課長他５名
６月11日・８月７日・10月３日
報告書作成検討委員会　センター長他５名
６月17日・８月22日・10月９日・10月31日

令和２年度

調査組織

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中原　一成
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
調査課長　寺原　徹
調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　眞邉　彩
〃　浦　博司
〃　小田　裕人
〃　百枝　勇一
事務担当　主査　有川　剛弘
事業推進員　塩屋奈諸美

作業の経過

遺構……図面チェック，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺構配置図作成
遺物……土器分類，接合，実測，拓本，復元，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺物観察表作成
土層断面‥図面チェック，トレースチェック，レイアウト
図版……レイアウト（現場・遺物）
原稿執筆
自然科学分析委託……樹種同定分析１件，
年代測定分析１件
遺物指導　中村直子氏
（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）
檀　佳克氏（八女市教育委員会）

報告書作成指導委員会　調査課長他８名
６月２日・８月５日・10月７日・11月４日
２月１日
報告書作成検討委員会　センター長他５名
６月11日・８月11日・10月13日・11月10日
11月19日・２月９日

令和３年度

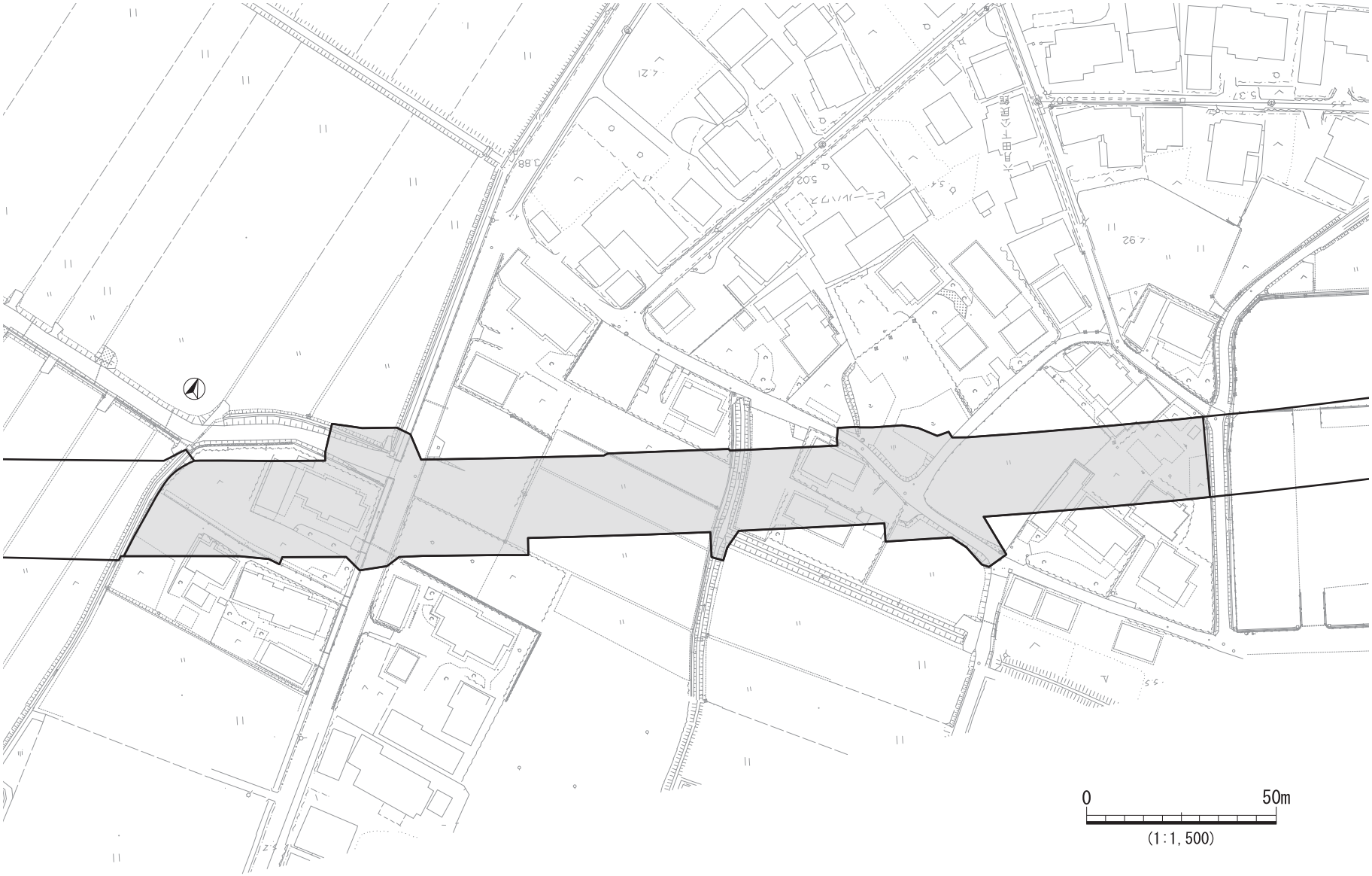
調査組織

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中村　和美
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
調査課長　福永　修一
調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　小田　裕人
事務担当　主事　上園　慶子
事業推進員　市成　英加

作業の経過

遺構……レイアウト，遺構配置図作成
遺物……実測，拓本，復元，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺物観察表作成
土層断面‥図面チェック，トレースチェック，レイアウト
図版……レイアウト（現場・遺物），遺物写真撮影
原稿執筆・校正
遺物・写真・図面等の整理及び収納

報告書作成指導委員会　調査課長他８名
６月２日・８月６日・10月５日
報告書作成検討委員会　センター長他５名
６月10日・８月11日・10月13日



第１図　六反ヶ丸遺跡　周辺地形図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

六反ヶ丸遺跡は，鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。本遺跡の所在する出水市は，1954（昭和29）年に出水町と米ノ津町が合併し，誕生した。その後，2006（平成18）年には出水市と野田町・高尾野町が合併し，現在の出水市となった。市域は東西約27㎞，南北約23㎞で面積は329.98㎢ある。令和３年４月時点で世帯数25,504世帯，人口52,765人である。

出水市の北東部には矢筈岳を主峰とする肥薩山塊があり，北は熊本県水俣市に，東は伊佐市に接する。南部には北薩一の高峰である紫尾山を中心とする紫尾山地が横たわり，薩摩川内市，さつま町と接する。西は阿久根市と接し，北西側には八代海（不知火海）が広がり，長島や天草諸島を望む。紫尾山地の北側では，南九州で広く見られるシラス台地がわずかしか存在せず，これに代わって標高100m以下には出水扇状地・高尾野扇状地・野田扇状地・米ノ津扇状地が形成され，出水平野の大半を占める。扇状地の周辺には知識面と呼ばれる河岸段丘が細長く形成される。六反ヶ丸遺跡は米ノ津川（広瀬川）の中流域の右岸に位置するが，この付近は米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達している。下流域では氾濫原により沖積低地が発達し，県内でも有数の穀倉地帯となっている。さらに，河口付近には三角州や海岸平野も見られ，遠浅な海岸部は江戸時代から干拓が行われ，現在の水田地帯となっている。なかでも，荒崎地区は国の特別天然記念物として指定されているツルの越冬地として有名である。また，紫尾山地と扇状地との間には，熊本県水俣市から出水市野田町へと延びる出水断層がある。その長さは約20㎞で，ほぼ北東－南西方向に延びる。六反ヶ丸遺跡においても，平成29年度及び令和元年度の調査で噴礫跡が確認されている。

米ノ津川は出水市上大川内朝日嶽に源を発し，その大半は山地である。途中，出水市広瀬で平良川と合流し，下流部は扇状地の出水平野となる。出水平野を八代海へ北流する間，沖田と六月田付近で２度西側へ蛇行する。本遺跡は六月田付近で蛇行する米ノ津川の自然堤防上に形成された遺跡で，周辺の標高は６ｍ前後となる。遺跡の所在する「六月田」という字について『出水郷土誌』では柳田國男『地名の研究』によると“信仰上の用途に指定された耕地の名”といわれ，“毎年其日に祭を営む社があって其日の費用を弁ずる為に設けられた田の所在である”とすれば，六月田付近に「社」があったことが予想され，その歴史が古くなる可能性を指摘している。また，石田三成の文禄検地によるものと思われる慶長４（1599）年の『御知行目録』の中には当時の村落名と石高が記されているが，出水関係では36ヶ村の記載があり，うち六月田村は約604石と最も石高が高く，穀倉地帯であったことが分かる。遺跡周辺には沖田溝・下知識溝・六月田溝と呼ばれる灌漑用水路が17～18世紀に整備されている。

現在，遺跡周辺は集落が形成され，遺跡の東側には米ノ津川と並行するように国道447号が走り，大型店舗が立ち並んでいる。

第２節　歴史的環境

出水市の東部，標高約500ｍの上場高原一帯は，上場遺跡を核に半径４㎞圏に狸山遺跡，大久保遺跡，郷田遺跡，池ノ段遺跡等の旧石器・縄文時代を主とする40か所以上の遺跡が集中する。上場遺跡は県内で初めて旧石器時代の発掘調査が実施された遺跡である。調査の結果，爪形文土器と細石器の共伴やナイフ形石器，台形石器・細石器等を包含する７時期の文化層の存在が明らかになった。大久保遺跡では，細石器時代の逆茂木痕をもつ落とし穴が検出された。カラン迫遺跡ではナイフ形石器・台形石器が出土している。上場高原の伊佐市日東及び下青木一帯には黒曜石原産地が所在する。

縄文時代の遺跡は河岸段丘や山麓縁辺・裾部に集中している。早期の遺跡は上場高原の狸山遺跡で撚糸文土器や塞ノ神式土器などが出土しているが，河岸段丘でも牟田尻遺跡・カラン迫遺跡・出水貝塚・尾崎Ａ遺跡・前原遺跡で押型文土器が出土している。前期になると荘貝塚で轟式土器期の貝塚が形成され，貝とともに獣骨なども出土している。石鏃や石匙などの石器も出土しているが，多く出土している双角状石器は貝の採取具と考えられており，有明海地域との関連を示す特徴的な石器である。中期では前原遺跡で上水流タイプの土器とともに船元Ⅱ式や北裏ＣⅡ式が，沖田岩戸・牟田尻遺跡では並木式土器が出土している。後期前半の出水式土器の標式遺跡である出水貝塚は大正時代に発見され，数回の調査が行われている。マガキ・ハマグリなどの貝殻やイノシシ，シカなどの獣骨とともに埋葬遺構から人骨６体も出土している。人骨は中期末のものとされている。他に牟田尻や出水貝塚・沖田岩戸などの遺跡で南福寺式・出水式・西平式・松山式土器などが出土している。後期後半から晩期にかけて米ノ津川流域には大規模な外畠遺跡が出現してくる。外畠遺跡は市来式・北久根山式・磨消縄文土器などの土器と，石鏃・石匙・磨製石斧・磨石などが出土しているが，土坑26基・配石状遺構４基も検出さ

れている。土坑の中には石皿や台石を立位に置いたり，完形の小型壷が石皿・台石とともに出土しており，その配置から祭祀的遺跡とも考えられている。沖田岩戸遺跡に隣接する大坪遺跡では上加世田式・入佐式・黒川式土器が主体となり，底部に穿孔のある深鉢を埋設した遺構が37基発見されている。このなかには浅鉢を蓋としたものもある。この遺跡では多くの玉類も出土しており，その中には未製品とともに，原石・薄片などもあることから玉製作遺跡だろうといわれている。上加世田式土器と入佐式土器の分布が分かれ，石材や仕上げの状況に差がみられることから長期にわたる製作地と考えられている。前原・外畠・中尾遺跡では入佐式・黒川式土器が，出土している。

弥生時代になると遺跡数は減少し，土器の出土数も少ない。六反ヶ丸遺跡では突帯文土器や板付式土器など早・前期の土器や，打製石斧が出土している。牟田尻遺跡では中期の黒髪式土器甕と磨製石鏃５・砥石２点の入った土坑が検出されている。外畠遺跡では入来式土器・黒髪式土器など，前原遺跡では入来式，六反ヶ丸・尾崎Ａ・尾崎Ｂ遺跡で黒髪式など中期の土器が出土している。他に市来・山ノ田・野添・安原鐙・正八幡・成願寺・田中などの遺跡で土器が散布している。

古墳時代の集落も米ノ津川周辺の河岸段丘などで多く発見されている。竪穴建物跡が六反ヶ丸遺跡で12軒，老神遺跡で２軒，溝下古墳群・芝引a遺跡・下部遺跡・下郡山遺跡で各１軒検出されている。これらの遺跡では成川様式の土器だけでなく畿内系の土器も多く含まれている。墓では米ノ津川左岸台地に短甲や金環・銀環・鉄剣等の副葬品が出土した板石積石棺墓が群集した溝下古墳群がある。円形が多いが，方形・楕円形のものもある。海岸沿いには箱式石棺が検出された切通古墳群が知られている。前原遺跡では前期の土坑が２基検出され，他にも後期までの小型土器などが出土している。

古代には薩摩国出水郡に所属しているが，役所的遺跡は未発見である。外畠遺跡では掘立柱建物跡１棟と溝状遺構１条，土坑６基が検出され，土坑の中には完形の土師甕と刀子・青銅製品が出土したものや土師甕・坏・皿などの入ったものもあり，火葬墓群の可能性も指摘されている。ここでは墨書土器・焼塩土器・紡錘車・縦耳石鍋なども出土している。大坪遺跡では竪穴建物跡１軒，掘立柱建物跡９棟，土師器焼成土坑３基，土坑75基，溝状遺構34条などが検出されている。尾崎Ｂ遺跡では多くの土師器・須恵器とともに焼塩土器や４点の墨書土器がある。墨書土器の中には古代役所で出土する「厨」に似たものもあり注目されている。古代官道は確定されていないが，出水郡には市来駅・莫禰駅がある。出水市にあると想定される市来駅の位置も確実でないが，六反ヶ丸遺跡では道の可能性も考えられている礫敷遺構がある。式内社である加紫久利神社が六反ヶ丸遺跡の北1.8ｋｍの所にある。市来駅と字名が同じであり，所在が注目されている市来遺跡では８世紀中葉から９世紀前半の土師器・須恵器などが出土しているが，遺構は検出されていない。隣接する老神遺跡でも同時期の遺物が出土しており，その中には焼塩土器も含まれている。大坪遺跡では波板状凹凸面や条里型地割も検出されている。

出水の地名が文献資料に明記されるのは，『続日本紀』である。奈良時代後期の宝亀９（778）年11月の条に，遣唐使船が出水海岸に漂着したとされている。その後『和名類聚抄』に「伊豆美」とあり，『薩摩国建久図田帳』に「和泉郡」として登場する。平安時代には山門院が設置され，和泉郡から独立し荘園となる。12世紀には，鎌倉幕府により島津荘が成立し山門院は消滅する。文治元（1185）年に，惟宗忠久が島津荘下司職に補任され，初代島津氏になる。忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させ，木牟礼城は五代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。中世になると島津氏が木牟礼城に進出してくる。この隣接地にあたる中郡遺跡群では中世前半期の掘立柱建物跡や竪穴建物跡等が検出され，同時期の貿易陶磁器の中には全国的にも出土例の少ない龍首水注が出土している。外畠遺跡では掘立柱建物跡４棟，方形竪穴建物跡１基，土坑３基，土師器埋納柱穴１基と土坑墓２基が検出されている。前原遺跡では土師器皿を副葬した土坑墓１基が検出されている。出水貝塚では徳之島で焼かれたカムイヤキが出土している。

近世になると，外畠遺跡では寛永通宝の副葬された土坑墓15基が検出されている。

明徳３（1392）年に南北朝の統一後，島津氏は薩摩総州家と大隅奥州家の間で内部抗争が起き，永享２（1430）年に総州家の久林を殺害した忠国は，弟の用久に薩州家を興させ出水地方を支配させる。それと共に荘園は崩壊する。その後，戦国期を通して，出水地方では豊臣秀吉による薩州家改易まで薩州島津家の支配が続くこととなる。秀吉の死後，出水は島津本家の領地となり，藩政期には，島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め，藩内外から派遣された郷士が居を構える県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至った。麓を構成する武家集落は現在も受け継がれ，平成７年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され，令和元年には「薩摩の武士が生きた町」として日本遺産に認定された。

明治10（1877）年２月に西南戦争が勃発すると，出水地方でも激戦が繰り広げられた。陸軍が矢筈山系と米ノ津の二方面から進出し，海軍が米ノ津・阿久根に入港し砲撃，上陸したため，薩軍は出水郷の青壮年士族を主とする郷士部隊と強制徴募された在郷士族らが戦った。６月には麓で攻防戦が行われたが敗れ，出水兵児の名を

もって謳われた薩摩藩最強の出水外城もついえ去り，この地域は政府軍の支配下となる。大坪遺跡では，このとき使用されたと考えられる鉛の球形弾が出土している。

昭和に入ると，旧海軍は水田地帯を収容し，昭和15年に出水基地飛行場を建設した。昭和18年に練習航空隊の出水海軍航空隊が設置され，昭和20年には戦況の悪化で特攻隊基地となるも度重なる空襲により基地は壊滅する。当時の遺構として滑走路跡の一部や司令部壕，掩体壕等が現在も残り，平成25年出水市が掩体壕の調査・実測を行い，これら戦争遺跡の保存活用を開始している。

戦後は，復興と共に経済成長と農地の圃場整備や工場誘致も行われ，地元の雇用拡大につながった。行政区画の変遷として，昭和29年出水町・米ノ津町が出水市に，平成18年出水市・高尾野町・野田町が合併して新しい出水市となり，現在に至る。

第３図は，南九州西回り自動車道（出水・芦北道路）建設関係の遺跡位置図である。これに係る発掘調査として本遺跡の近隣に中尾遺跡，前原遺跡がある。中尾遺跡は平成25年度に発掘調査が実施され，縄文時代晩期の土坑１基が検出され，土器片及び黒曜石の剥片が確認された。また，前原遺跡は平成25・26年度に調査が実施され，縄文時代晩期と考えられる集石２基，土坑１基等と縄文時代中期から晩期にかけての遺物が主に出土した。

－引用参考文献－

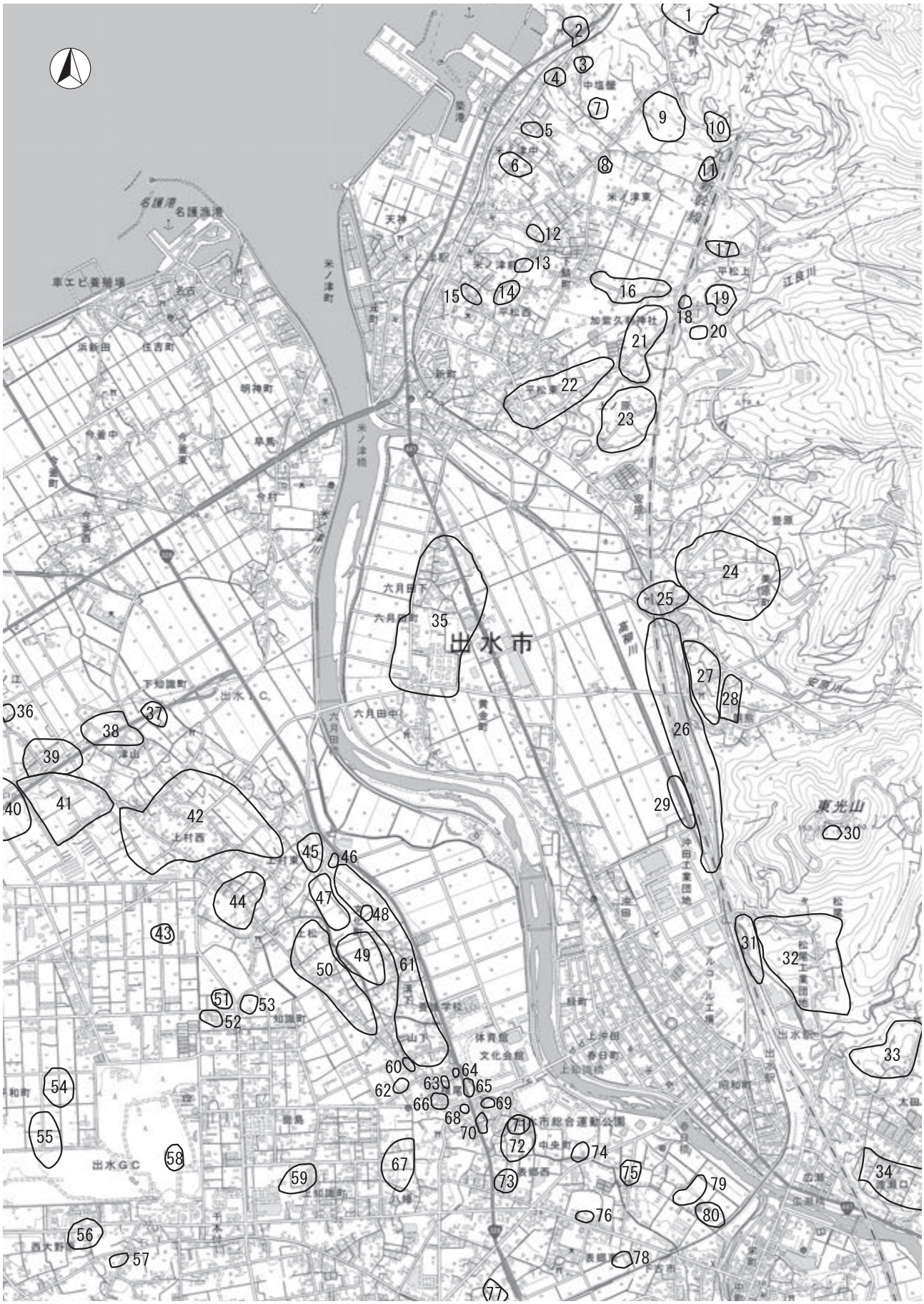
出水市郷土誌編集委員会『出水郷土誌』1968
出水市郷土誌編集委員会『出水の歴史と物語』1984
山川出版社『県史46　鹿児島県の歴史』1999
出水市教育委員会『出水貝塚』2000
鹿児島県立埋蔵文化財センター『大坪遺跡』2005
鹿児島県教育委員会『先史・古代の鹿児島』2006
出水市教育委員会『出水麓遺跡』2010
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群』2014
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群Ⅱ・中尾遺跡・前原遺跡』2016

第１表　周辺遺跡一覧表１

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
1	208	203	坂元Ａ	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代，近世
2	208	205	中塩屋	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代，古代，中世
3	208	206	供養元	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代
4	208	207	外間	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代，古代
5	208	213	野間	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代
6	208	214	坪ノ後	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津中	散布地	縄文時代
7	208	208	上窪	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代，近世
8	208	117	野間の関跡	鹿児島県出水市下鯖町堀之内	その他	安土桃山，近世
9	208	209	永坂下元段	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代，近世
10	208	210	孫山	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代
11	208	211	永坂	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代
12	208	215	坪ノ前	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	古墳時代
13	208	216	野畑Ａ	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代，近世
14	208	217	野畑Ｂ	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代，中世，近世
15	208	218	野畑Ｃ	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代，中世，近世
16	208	219	加紫久利山	鹿児島県出水市下鯖町平松西	散布地	縄文時代，近世
17	208	212	野間原	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代，近世
18	208	221	狩集	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代
19	208	222	山ノ田Ａ	鹿児島県出水市下鯖町上ノ原・平松上	散布地	縄文時代
20	208	223	山ノ田Ｂ	鹿児島県出水市下鯖町上ノ原・平松上	散布地	旧石器時代，縄文時代，近世
21	208	220	山ノ段	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代，近世
22	208	83	平松	鹿児島県出水市下鯖町平松東	散布地	縄文時代，古墳時代，古代，古代(奈良・平安)
23	208	224	美原上ノ原	鹿児島県出水市美原町上ノ原	散布地	縄文時代
24	208	31	安原城跡	鹿児島県出水市美原町上ノ原	城館跡	中世
25	208	39	安原鐙	鹿児島県出水市美原町安原	散布地	縄文時代，弥生時代，古墳時代
26	208	51	大坪	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期)，古代(奈良・平安)
27	208	23	朝熊城跡	鹿児島県出水市美原町朝熊	城館跡	中世
28	208	84	諏訪後	鹿児島県出水市美原町朝隈	散布地	縄文時代，古代
29	208	8	沖田岩戸	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期)，古代(奈良・平安)

第２表　周辺遺跡一覧表２

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
30	208	122	牛ヶ迫東平	鹿児島県出水市上鯖淵山頂	散布地	中世
31	208	47	宮ノ脇	鹿児島県出水市上鯖淵松尾	散布地	弥生時代
32	208	30	松尾城跡	鹿児島県出水市上鯖淵松尾	城館跡	中世
33	208	26	太田城跡	鹿児島県出水市上鯖淵太田	城館跡	中世
34	208	85	井手ノ原	鹿児島県出水市上鯖淵渡瀬口	散布地	縄文時代，古墳時代
35	208	73	六反ヶ丸	鹿児島県出水市六月田町六月田下	散布地	古墳時代，古代
36	208	89	長松寺	鹿児島県出水市福ノ江町福ノ江	散布地	縄文時代
37	208	90	西宮ノ脇	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	古墳時代
38	208	360	野添	鹿児島県出水市下知識町	散布地	縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代
39	208	361	前原	鹿児島県出水市下知識町	散布地	弥生時代，古墳時代，古代
40	208	362	中尾	鹿児島県出水市福ノ江町	散布地	古墳時代，古代，中世
41	208	258	穴水	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	縄文時代
42	208	92	御堂	鹿児島県出水市下知識町上村西	散布地	古墳時代，中世
43	208	252	抉六	鹿児島県出水市平和町上村	散布地	縄文時代，近世
44	208	93	庵木園	鹿児島県出水市知識町上村東	散布地	縄文時代，古墳時代
45	208	28	谷城跡	鹿児島県出水市下知識町上村西	城館跡	中世
46	208	69	川除	鹿児島県出水市文化町上村東	散布地	古墳時代，古代
47	208	257	拝松	鹿児島県出水市下知識町上村	散布地	古墳時代
48	208	11	溝下古墳群	鹿児島県出水市文化町399	板石積石室棺墓	古墳時代
49	208	256	下春川	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	古墳時代
50	208	94	上松	鹿児島県出水市文化町上松	散布地	縄文時代
51	208	251	堤原	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	中世
52	208	250	北吉子	鹿児島県出水市平和町鹿島	散布地	縄文時代，古代
53	208	249	堀込	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	縄文時代，古代
54	208	253	下大野原下	鹿児島県出水市浦田町掛腰	散布地	近世
55	208	115	金松	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場北	散布地	古墳時代
56	208	246	会所	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	古代，近世
57	208	247	会所前	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	縄文時代
58	208	124	高見下	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場内	散布地	縄文時代
59	208	248	西茶園堀	鹿児島県出水市知識町茶園堀	散布地	古代
60	208	55	正八幡	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代
61	208	95	下郡山	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	縄文時代，古墳時代
62	208	56	再願	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代
63	208	57	山下	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代，中世
64	208	58	野中田	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代
65	208	68	尾崎Ｂ	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	縄文(後期・晩期)，古代(奈良・平安)，中世，近世
66	208	59	慶頭原	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
67	208	102	八幡	鹿児島県出水市上知識町八幡	散布地	古墳時代，中世
68	208	60	新村Ａ	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
69	208	61	新村Ｂ	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
70	208	67	尾崎Ａ	鹿児島県出水市中央町表郷西	散布地	縄文(後期・晩期)，古代(奈良・平安)，中世，近世
71	208	1	出水貝塚	鹿児島県出水市中央町尾崎	貝塚	縄文(早期・中期・後期)，中世
72	208	27	尾崎城跡	鹿児島県出水市中央町尾崎	城館跡	中世
73	208	123	表郷東	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	中世
74	208	103	一町樋	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	古墳時代
75	208	9	成願寺	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代，古墳時代，安土桃山，近世
76	208	104	天神原	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代
77	208	106	塚込	鹿児島県出水市中央町西町	散布地	古墳時代
78	208	105	並松	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代，古代
79	208	10	田中	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代
80	208	32	内城跡	鹿児島県出水市中央町八坊	城館跡	中世



第２図　六反ヶ丸遺跡　周辺遺跡位置図（１：25,000）

第３節　鹿児島と熊本の県境～野田ＩＣ間の遺跡

南九州西回り自動車道の県境～野田ＩＣ間には，第３表に示すとおり８か所の遺跡が存在する。ここでは，その遺跡の概要を記載する。

第３表　鹿児島と熊本の県境～野田ＩＣの間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査面積 発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要 時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	山ノ段	出水市下鯖町 平松上 散布地	4215㎡ 確認調査 2019.05.07～05.29 本調査 2019.11.01～2020.01.30	整理 2020年 報告書刊行2021 (公財)埋文調査センター36	旧石器時代	－	細石刃核，剥片
					縄文時代 早期～晩期	－	前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，政所式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，塞ノ神式，無文，轟式，曽畑式，深浦式，松山式土器,編物圧痕底部，粗製深鉢，精製浅鉢 石鏃（打製・磨製），石錐，削器，楔形石器，剥片，原石，尖頭器，石斧（打製・磨製），錐状石器，磨敲石類，石皿
					弥生時代以降	－	台付甕，壷，甕
					時期不詳	炭化物集中 焼土集中，硬化面	砥石，凹石，鉄滓
		縄文時代を中心とした遺跡である。土石流の影響を受けやすい地形に位置し，流れ込んだ可能性のある遺物も出土している。前平式土器，加栗山式土器，政所式土器や，県内ではこれまで例を見ない大型の尖頭器など，縄文時代早期前葉～中葉を中心とした遺物が出土しており，当時の人々の生活の様子を知る上で貴重な遺跡である。					
2	六反ヶ丸	出水市六月田町 六月田下 集落	7000㎡ （延14000㎡） 確認調査 2017.05.08～05.30 本調査 2017.09.01～2018.01.30 2018.05.07～2019.01.30 2019.05.08～10.31 2020.10.01～11.26	整理 2018年～2021年 報告書刊行 Ａ地点2020 (公財)埋文調査センター29 Ｂ地点2021 (公財)埋文調査センター42 Ｃ・Ｄ地点 本報告書	縄文時代後期	土坑	阿高式，南福寺式，西平式，条痕文，黒川式土器 石鏃，磨製石斧，打製石斧，石皿，磨石・敲石，凹石，砥石，石錘，石製垂飾品
					弥生時代	－	突帯文土器，板付式，黒髪式，磨製石鏃，打製石斧
					古墳時代	竪穴建物跡，土坑 埋設土器，溝状遺構， 遺物集中	布留式系，中津野式～東原式土器，石皿，砥石，石錘，磨敲石，硯状石製品，小型仿製鏡
					古代	掘立柱建物跡，土坑	土師器，内黒土師器，須恵器，土錘
					中世	溝状遺構	土師器，瓦質土器，青磁，羽口
					近世～近代	掘立柱建物跡，土坑 溝状遺構	陶磁器，古銭，羽口，鈴
					時期不詳	ピット	砥石，凹石，鉄滓
		Ａ地点は，縄文時代晩期の土坑，弥生～古墳時代の竪穴建物跡，土坑，埋設土器，溝状遺構，古代の土坑や多数のピットを検出した。遺物は流れ込みのものも多く含まれるが，縄文時代晩期の黒川式土器や石器，弥生～古墳時代の庄内・布留式土器や中津野～東原式土器の甕や壷，高坏，古代の土師器・須恵器，近世の陶磁器，古銭などが出土した。Ｂ地点は，竪穴建物跡，土坑，中・近世の掘立柱建物跡，土坑及び時期不詳の多数のピットを検出した。遺物は流れ込みのものも多く含まれるが，縄文土器，古墳時代の脚台付甕や丸底甕・壷形土器・高坏，古代の土師器・須恵器，中・近世の陶磁器などが出土した。					
3	西宮ノ脇	出水市下知識町 津山　散布地	試掘調査	－	古墳時代	－	－
4	野添	出水市下知識町 散布地	試掘調査	－	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代	－	－
5	前原	出水市下知識町 散布地	5500㎡ 本調査 2013.07.01～09.13 2014.05.12～10.10	整理・報告書刊行 2016 (公財)埋文調査センター10	縄文時代 早期～晩期	土坑４基，集石２基 中世土坑墓１基 掘立柱建物跡1棟 溝状遺構６条	中原式・押型文土器，阿高式，船元式，北裏Ｃ Ⅱ式，南福寺式，北久根山式，鐘崎式，西平式，市来式，入佐式，黒川式土器，石鏃，楔形石器，石斧，磨石，石皿
					弥生時代		入来式土器
					古墳時代		成川式土器
					古代		土師器・須恵器・土師甕
					中世		青磁・白磁・陶器
		縄文時代中期の瀬戸内・近畿系の船元式土器と東海系の北裏Ｃ Ⅱ式土器など県外系統の土器が出土した。縄文時代中期前半期の東海系の土器は県内で初めての出土である。					
6	中尾	出水市福ノ江町 散布地	2600㎡ 本調査 2013.05.13～09.13	報告書刊行 2016 (公財)埋文調査センター10	縄文時代晩期	土坑１基	入佐式土器，黒川式土器，石鏃，楔形石器
		縄文時代晩期の遺跡。土坑が１基確認され，埋土中から黒川式土器の深鉢や浅鉢などが出土した。					
7	外畠	出水市境町関外 散布地	試掘調査 135.5㎡ 本調査 10500㎡ 試掘調査 2010.05.06～05.11 本調査 2010.05.10～2011.01.28	報告書刊行 2012 県立埋文センター 発掘調査報告書 175	縄文時代 後期～晩期	土坑26基 配石状遺構４基	市来式土器，北久根山式土器，磨消縄文土器，三万田式土器，黒川式土器，入佐式土器 石鏃，磨石・敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿・台石
					弥生時代	－	入来式土器，黒髪式土器
					古墳時代	－	成川式土器
					古代	土坑６基 掘立柱建物１棟 溝状遺構１基	土師器，内黒土師器，須恵器，刀子，青銅製品
					中世	掘立柱建物跡４棟 土師器埋納柱穴１基 方形竪穴建物１基 竪穴状遺構３基 土坑墓２基 土坑３基，焼土２基	土師器，瓦質土器，青磁，白磁，滑石製石鍋，洪武通寶，鉄釘
					近世	土坑墓15基 区画溝１基	陶磁器類，寛永通寶，鉄釘，人骨
		縄文時代は後期を中心に，土器や石器と共に，石材を伴う土坑が多数検出されている。なかでも，小型壷形土器が納められているものや，２枚の石皿・台石が立位で配置されているものなど，特殊な事例も発見されている。後期の祭祀・精神活動を解明する上で貴重な資料となった。 古代の土坑群と掘立柱建物，自然流路を利用した溝状遺構が検出されており，土坑からは土師の甕が出土しており，墓としての機能が想定される。中世の方形竪穴建物や掘立柱建物跡，土坑墓などが検出された。当遺跡の近辺が「荘」という地名であり，古代から中世にかけての調査成果は，当地域における土地利用の変遷過程を示す貴重な資料である。					
8	中郡遺跡群	出水市野田町 下名　集落 散布地	本調査 260㎡ 16100㎡ 4810㎡ 本調査 2013.05.13～09.13 2014.07.01～07.24 2009.05.08～2010.03.19 2012.07.02～12.21	報告書刊行 2016 (公財)埋文調査センター10	旧石器時代	礫群１基	ナイフ形石器，台形石器，チップほか
					縄文時代早期	土坑６基，集石11基 落とし穴状遺構５基 横転内礫集中３基	石坂式，中原式，押型文，塞ノ神式土器，石鏃，磨製石斧，打製石斧，石斧未製品，磨石・敲石，石皿
					縄文時代前期 ～晩期	－	轟式，沈線文，入佐式，黒川式土器
					弥生時代	－	弥生土器
					古墳時代	－	成羽式，古式土師器，須恵器
					古代	土坑１基	土師器，楠葉型黒色土器，須恵器，布目瓦
					中世	掘立柱建物跡５基 竪穴建物跡５基 竪穴状遺構１基 土坑22基 土坑状遺構７基 大型土坑状遺構３基 堀跡２条 溝状遺構16条 杭列跡１条 道状遺構１条	土師器，須恵器，瓦質土器，瓦，白磁，青磁，青白磁，青白磁龍首水注，中国陶器，国産陶器，滑石製石鍋，滑石製品，輪羽口，砥石，鉄製品，木製品，杭
					近世	帯状硬化面２基 溝状遺構３条	陶磁器，寛永通寶
		中世には島津氏初代の居館跡「屋地の館跡」に比定される。 縄文時代は，主に八代海沿岸や中九州地域に分布圏を持つ中原式土器や押型文土器群など早期を中心とする。 弥生・古墳時代では，布地土器のほか，肥後地域の弥生終末期土器や古式土師器が出土している。古代では土師器を一括して埋納した土坑が検出され，楠葉型黒色土器や瓦等も出土している。中世では，堀跡や掘立柱建物跡，竪穴建物跡等の遺構が検出され，貿易陶磁器の中には青白磁の龍首水注等の稀少な資料もある。また，低湿地では，杭列が検出され，木製品も多く出土している。					



第３図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

本章では，確認調査の方法と結果，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業，Ｃ・Ｄ地点の層序について簡潔に述べる。

第１節　確認調査

１　確認調査の方法

遺跡の確認調査は，平成29年５月８日から28日までの10日間，本調査が必要とされた総表面積7,000㎡のうち4,900㎡を対象として行った。調査対象区を市道や用水路を挟んで３つのエリアに分け，Ｂ～Ｅ－12～15区を南北に縦断する市道を境に，西側をＡ地点，中央をＢ地点，東側をＣ地点として，Ａ地点に２か所，Ｂ地点に３か所，Ｃ地点に２か所の計７か所にトレンチを設定した。いずれも現況は住宅地跡や耕作地であり，トレンチの大きさは２×５ｍを基本とし，必要に応じて拡張を行った。トレンチの表面積合計は80㎡である。調査は，トレンチ部分の表土を重機により剥いだ後，人力掘削を基本として遺構・遺物の検出を行った。

２　確認調査の結果

確認調査の結果は以下のとおりである。

Ａ地点（１Ｔ・２Ｔ）

１Ｔでは，縄文時代晩期，弥生時代から古墳時代の土器片や時期不明の土器片が多数出土した。２Ｔは，削平により表土が薄かったが，包含層が安定して堆積し遺物の残存も見られた。下層には流れ込みによる自然堆積の砂礫層が厚く堆積していた。

Ｂ地点（３Ｔ～５Ｔ）

３Ｔは，宅地造成のため削平・盛土が行われており，古代～近代までの遺物が混在して出土した。４Ｔは旧水田地であり，遺物の出土はわずかであったが，中世以降と思われる柱穴を確認した。５Ｔでは，弥生時代～古墳時代の土器片が多数出土した。

Ｃ地点（６Ｔ・７Ｔ）

他のトレンチと異なり住宅地に隣接し，造成土の層が厚く堆積していた。６Ｔでは，砂礫層から摩耗の激しい遺物が多く出土する事が確認された。７Ｔは，住宅地のため大きく削平を受け，遺物は確認されなかった。

確認調査の結果，調査対象とした全体を本調査が必要と判断した。

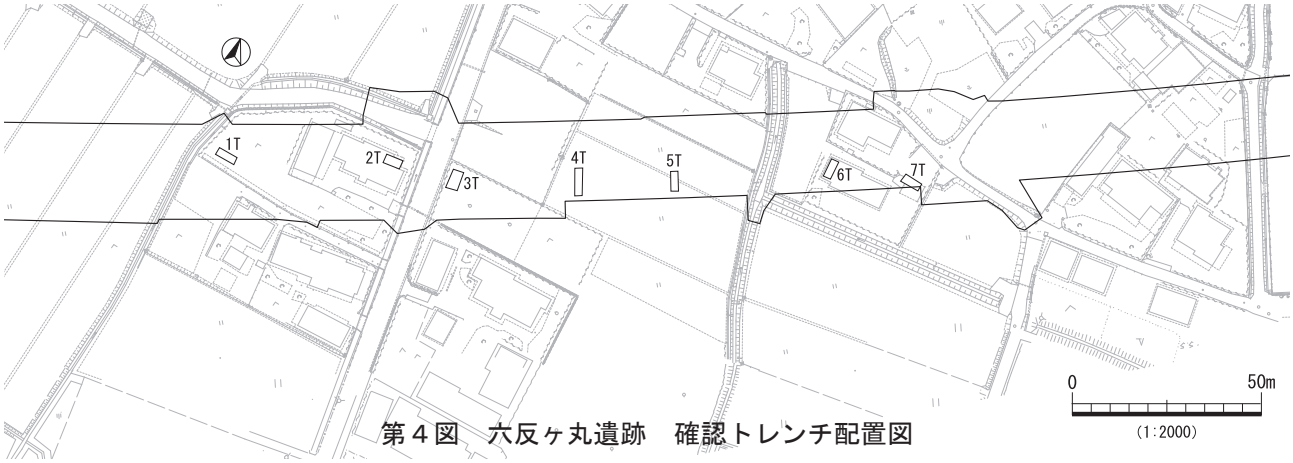
第２節　本調査

１　発掘調査の方法

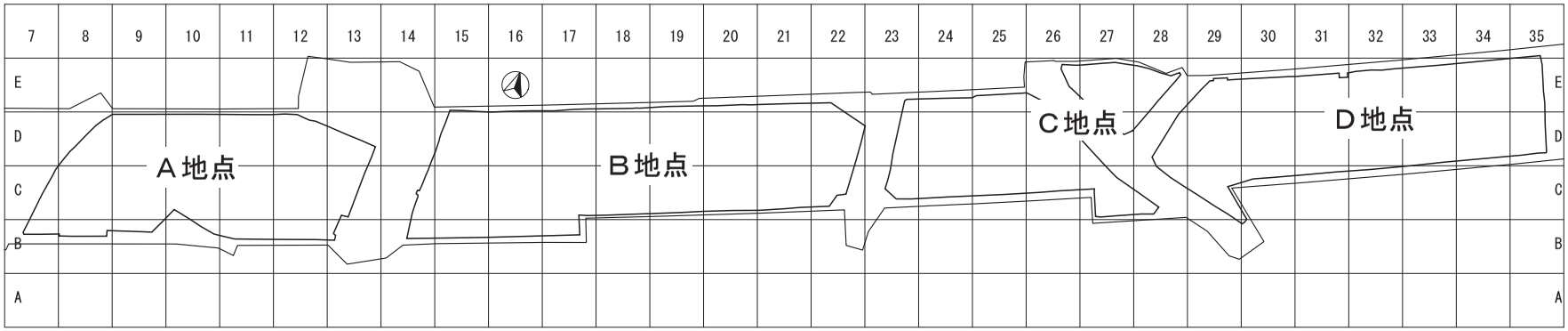
調査に先立ち，鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STA№345（-98828.424・-62292.445）」と「STA№346（-98835.044・-62311.326）」を結ぶ線を基準に，調査区内に10ｍ間隔の区画（以下グリッドという）を設定し，この延長線を中心に南側から北側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・列，西側から東側に向かって１，２，３・・・列と設定し呼称することとした。

調査は，確認調査の結果に基づき，重機で表土（耕作土・造成土）を遺物包含層上面まで除去した後，遺物包含層については人力で掘り下げ（山鍬，鋤簾，ねじり鎌，手鍬等の発掘道具）を行った。出土した遺物については，必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後，Ａ地点のみ５ｍ間隔のグリッドを再設定し，実測が必要なものを除き，原則として層ごとに一括で取り上げた。さらに，遺物包含層の調査と並行して，下層確認用の先行トレンチを設定し，掘り下げを行った。検出遺構については，移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し，調査の進捗に応じて，検出状況，半截状況，完掘状況等の写真撮影を行い，図化作業等の記録保存を行った。さらに，無遺物層の一部を重機及び人力で除去し，基盤層が無遺物の砂礫層であることを確認し調査を終了した。

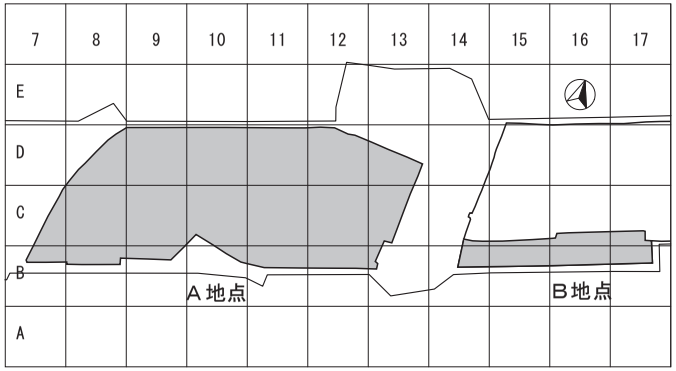
調査が終了した調査区については，重機及び人力による埋め戻しを行った。



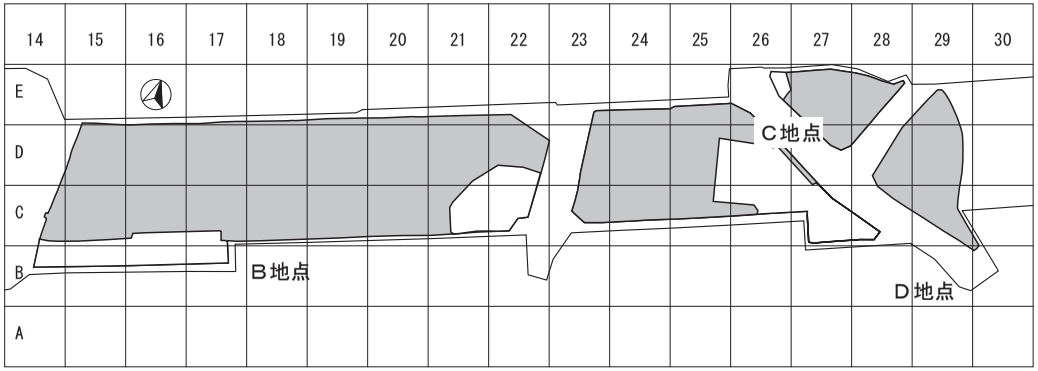
第４図　六反ヶ丸遺跡　確認トレンチ配置図



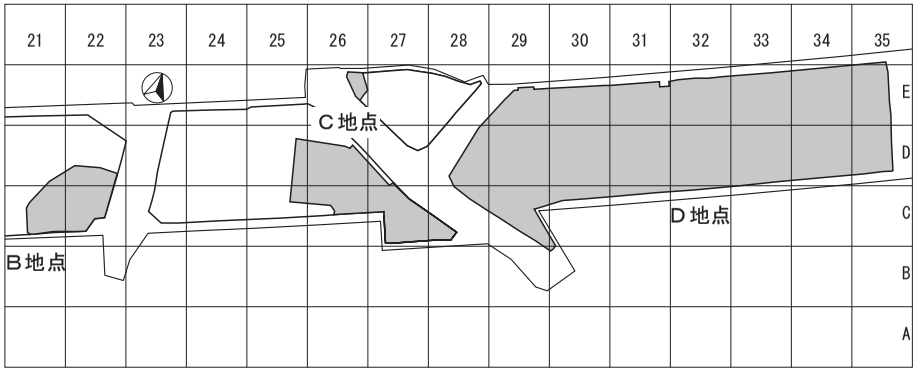
全 体 図



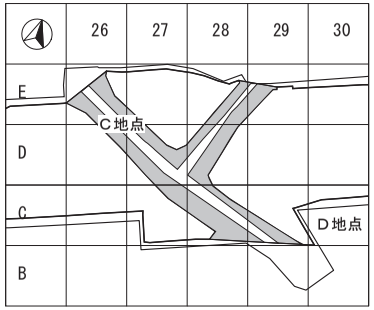
H. 29 年度



H. 30 年度



R. 元年度



R. 2 年度



第５図　六反ヶ丸遺跡　全体図及び年度別調査範囲

２　遺構の検出方法

遺構の検出については，調査方法として当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，全体として宅地造成や耕作地整備のための削平や造成が大規模に行われており，包含層が良好に残存する場所が部分的なものであったため困難であった。また，沖積地特有の河川の氾濫による土砂の流入が頻繁に繰り返されていたため，遺構上位にも遺物がたまるような状況であった。そこで，上位に堆積した遺物を取り上げながら慎重に検出を行い，確実な遺構面を記録した後で，再度ベルト断面の再検討を行い，遺構の全体像を確定させた。沖積地における調査は，大量の遺物や地層の乱れなどを考慮した遺構検出が求められることから，これまで以上に調査のあり方を再検討し，その後の調査に生かした。

遺構の認定は，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，担当職員で検討したうえで行った。竪穴建物跡は，埋土や形状，床面の有無や構造，遺物の出土状況など総合的に判断した。土坑及びピットは，ほぼ円形で径50㎝程度のものをピット，それ以上のものを土坑とした。溝は，筋状に細長く掘り込まれたものとした。掘立柱建物は，埋土ごとに分類したピットの配置等から，範囲を確定した。

第３節　整理・報告書作成作業

Ｃ・Ｄ地点の整理・報告書作成作業は，令和元～３年度の３年にわたり，調査センター第一整理作業所で実施した。

１　整理作業の方法と内容（令和元年度）

図面整理は，遺構実測図，遺物出土分布図，土層断面図，地形図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。

注記は，水洗いと並行して未注記のものに対して順次行った。遺物量が多いため，手注記の他にジェットマーカーを使用し効率を高めた。薬品を使用したため換気に注意しながら進めた。その際，包含層遺物の摩耗が激しものや小片のものは注記対象から外し，小グリッドごとに一括で重量測定のみ実施し記録した。記号については，これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ロク」とした。

土器の分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，遺構内遺物を中心に行い，包含層出土土器については，土器の胎土や器種，文様等で分類し接合した。その後，掲載遺物の抽出を行った。石器については，種類ごとに分類した。その後，掲載遺物の抽出を行った。脆弱な資料については，接合前段階で薬剤含浸による強化を行った。

当初は機械計測による一点取り上げを行っていたが，流れ込みと思われる遺物が大量に出土し，遺構または小グリッドごとの一括取り上げに変更していたため，遺物出土状況図は，重量による分布状況とした。

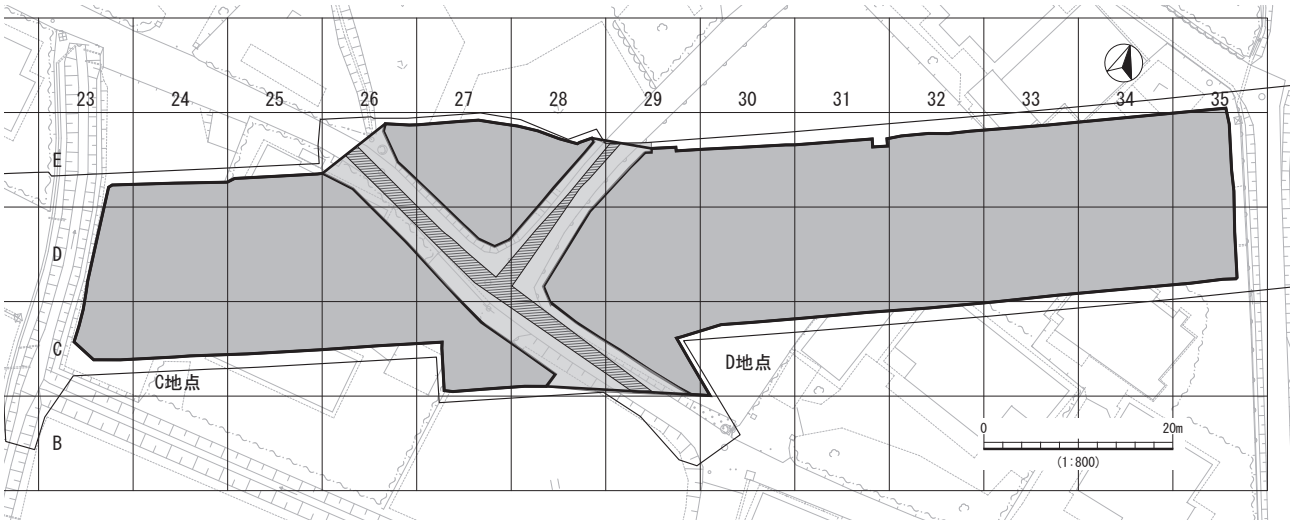
遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて再検討し確定した。掲載スケール決定後，それにあった下図面を鉛筆トレースで作成し，点検・修正後，ペントレースまたはデジタルトレースを行った。基本的にペントレースで行ったが，一部の遺構ではデジタルトレースで行った。

遺構配置図，土層断面図，地形図は，鉛筆トレースで下図を作り，点検・修正後，トレースを行った。

写真図版については，現場写真の抽出を行った。

本編の報告書作成作業も同時に行い，一部原稿執筆も開始した。

なお，整理作業の方法や遺物については，鹿児島大学埋蔵文化財センター長中村直子氏，鹿児島大学法文学部石田智子氏，福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課久住猛雄氏に指導を受けた。



第６図　六反ヶ丸遺跡　Ｃ・Ｄ地点グリッド配置図

２　報告書作成作業の方法と内容（令和２年度）

遺構図については，図面チェックを行い，検討を重ねた上で，トレースを行った。

掲載遺物については，土器・陶磁器・石器の実測・トレースを行った。必要に応じて修正・再トレースを行った。

遺構内出土遺物については，埋土と出土位置を精査し，遺構ごとに掲載した。また，出土位置が確定できるものについては，遺構図内に明示した。

包含層出土の掲載土器については，時代別，器種別，部位別，特徴別の順番で分類した後，レイアウトを行った。土器ごとに残存状況が異なるので，特徴を考慮しながら１個体や接合資料を優先的に配置した。

石器については，上流からの流れ込みの可能性も高いことから，時期判定が困難なものが多かった。器種別に分類した後，実測・トレース，レイアウトを行い，遺構に伴う石器は，検討を行い掲載した。

鉄製品については，調査区内から数点出土しているが，石器同様時期判定が困難であった。時期不明遺物として一部掲載した。

写真図版については，現場写真のレイアウト，遺物写真のレイアウト・写真撮影を行った。その際，接合資料については，写真撮影用の復元を部分的に行った。

原稿執筆，観察表作成，写真撮影等終了後，Ｂ地点に関しては印刷・製本を行った。

なお，整理作業の方法や遺物については，中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）や檀佳克氏（八女市教育委員会）に指導を受けた。

３　報告書作成作業の方法と内容（令和３年度）

昨年度実施した現道部分出土の遺物について，再度隣接部分出土の遺物との接合・復元をやり直した。その後遺物の実測・トレースを行い，レイアウトの修正をした。

原稿執筆，観察表作成，写真撮影等の作業を実施後，原稿の修正等を行い，Ｃ・Ｄ地点についての報告書作成作業，校正・印刷・製本を行った。

第４節　層序

本遺跡は，出水市北部を南から北へ流下する米ノ津川右岸の微高地に立地する。このため遺跡を構成する地層は米ノ津川が運んできた砂礫及びシルトからなり，礫層遺跡といえる。現在は耕作地，または住宅地として使用されている。近世・近代及び昭和40年代以降の圃場整備や耕作，宅地造成，攪乱削平を受けた箇所が広範囲に認められたため，地層の堆積・残存状況が好ましくない。

また，六反ヶ丸遺跡の調査対象区は東西に長く，Ａ・Ｂ調査区のある西側へ向かって低くなり，Ｃ・Ｄ調査区のある東側に向かって高くなる傾斜地である。

なお，本調査着手後，確認調査の結果を補完するため，先行トレンチを設定し，地層の堆積状況と層厚の確認を行った。その結果，遺跡の西側を流れる米ノ津川に近い調査区において，運搬・堆積作用によるシルト質の堆積層が複数枚観察された。以前は米ノ津川の氾濫により，土砂が流されたり，逆に流れ込んだ土砂が堆積したりを繰り返していたと想定される。

Ｃ調査区とＤ調査区では地形が安定していないため，Ａ調査区やＢ調査区のように基本層序を明確に分けることができなかった。そこで，Ｃ調査区とＤ調査区について，それぞれ層序を記載することにした。

Ｃ調査区，Ｄ調査区の層序は大きく３つに分けることができる。表土，砂質シルト質土，砂礫土の３つである。

基盤となる砂礫層は，広い範囲で堆積している。礫種は四万十累層群由来の砂岩・頁岩及びホルンフェルス化したものを主体とし，それ以外に花崗岩や安山岩・石英片である。礫はいずれも円摩され角がとれたものであり，最大径15㎝程度のものである。全般的には径２～３㎝程度のものが多く，それらの間に10～15㎝の礫が散在している。調査区によっては礫層と砂層が互層することもある。

砂礫層の上面は，遺物包含層で，砂質シルト土である。マンガン粒を含む。古墳時代の遺物を含む層である。調査区によっては細かく分層される。色調は，黄褐色，灰黄褐色，黒褐色などである。

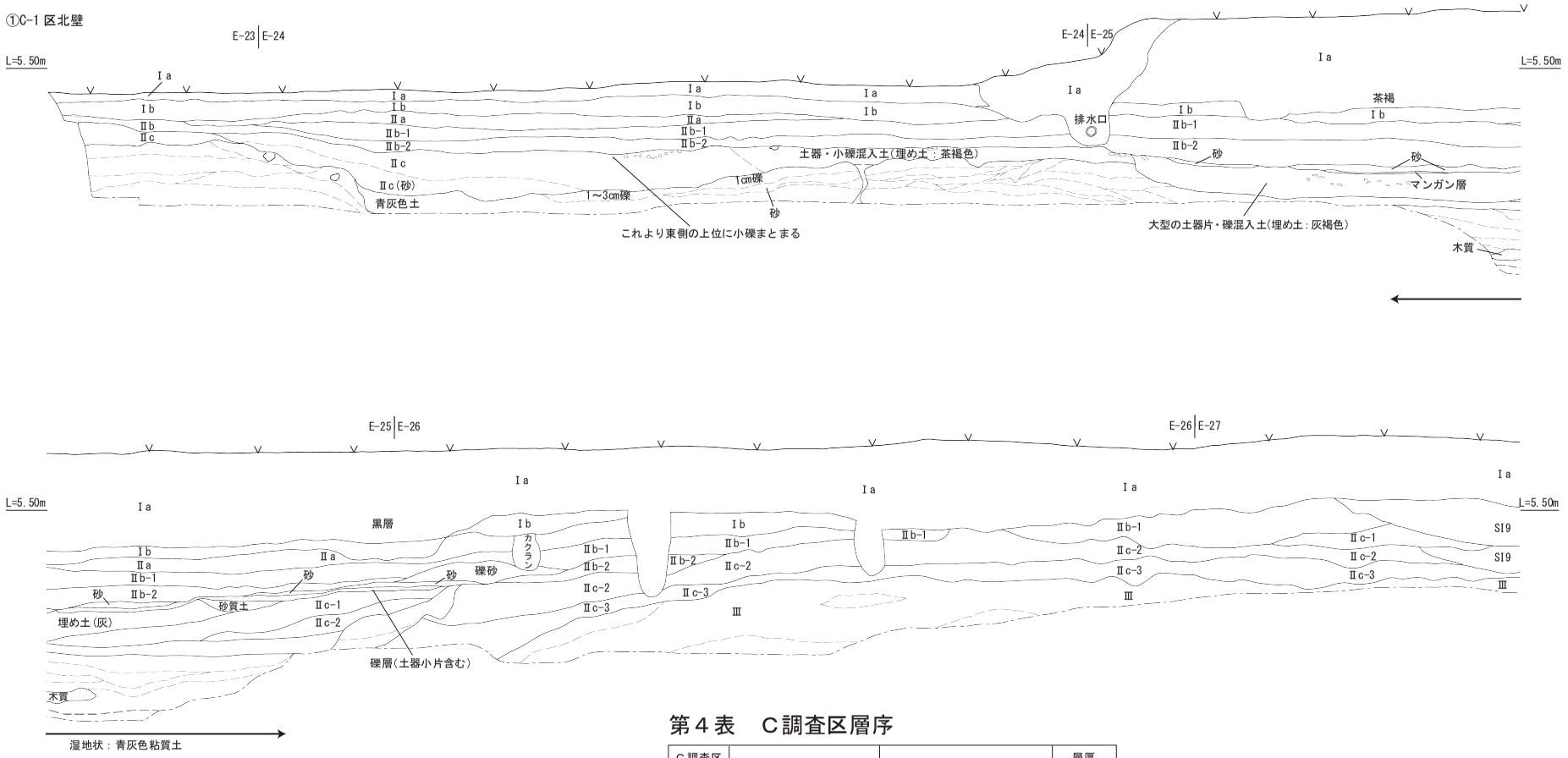
その上面は表土である。表土は宅地造成や盛土などの攪乱土であり，水田層も含む。色調は，灰黄褐色，灰褐色などである。

河川堆積の特性上，一部にしか存在しない層が観察されるため，それらについては基本層序には記載せず，土層断面中に枝番を設け記載するのに留めた。また，基盤の地形が不安定なため，層厚も一定ではない。

表土・水田層は，西側Ｃ調査区が厚く堆積し，Ｄ調査区東側は薄く堆積している。また，Ｃ調査区からＤ調査区にかけて，砂礫層が厚く堆積している。

Ｃ調査区は，24・25区が凹地となり，26区から東へ向かって丘陵上に上がっていく。26区から27区にかけて古墳時代の多くの遺物を伴う建物跡が多数検出され，近世～近代にかけての遺構も検出された。また，24・25区の凹地部分で古代の礫が敷き詰められた平坦面が確認された。古代の遺物は，礫が敷き詰められた平坦面から東側で確認されている。

Ｅ27区からＥ28区にかけては，東側に向かって一旦下降し，Ｄ調査区の29区からは平坦となる。地形は安定せず凹凸を繰り返している。また，堆積状況を見ると，砂礫土が厚く堆積している。そのため，29区から34区にかけては，遺構が確認されていない。

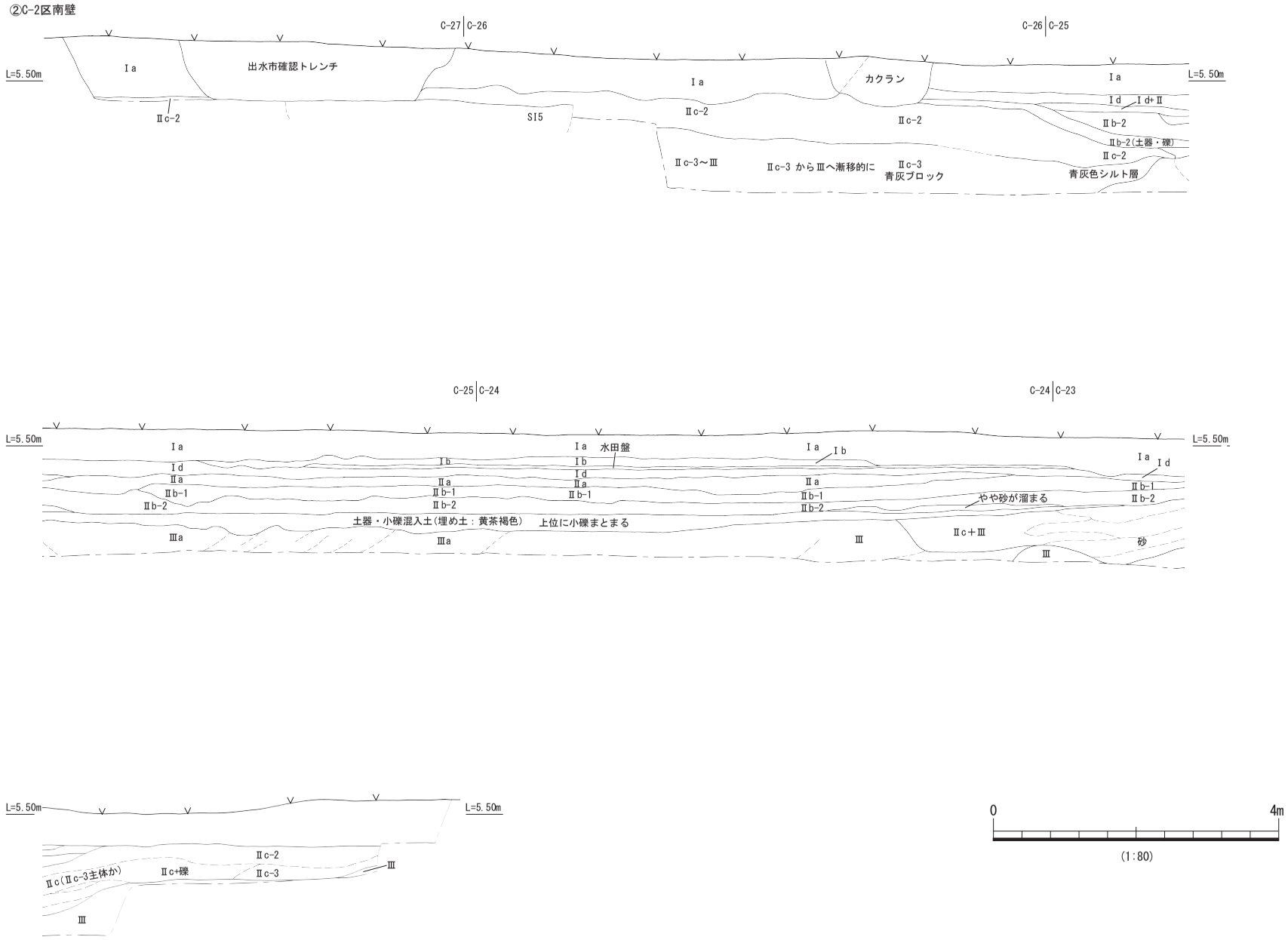


第４表　C調査区層序

C調査区 層名	色調・土質等	特　　徴	層厚（平均）
Ⅰa層	褐色土（砂質）	表土（耕作土・造成土）	30cm
Ⅰb層	灰色土（シルト質）	旧水田層	10cm
Ⅰc層	灰褐色土（砂質）	旧表土	5cm
Ⅰd層	灰色土（シルト質）	旧水田層	10cm
Ⅱa層	黄褐色土（砂質）	古代～中世を含む遺物包含層	10cm
Ⅱb-1層	灰黄褐色土（シルト質）	古代～中世を含む遺物包含層	10cm
Ⅱb-2層	灰黄褐色土（シルト質）	古代～中世を含む遺物包含層	15cm
Ⅱc-1層	黄褐色土（シルト質）	古墳時代主体の遺物包含層	15cm
Ⅱc-2層	暗灰黄褐色土（シルト質）	古墳時代主体の遺物包含層	20cm
Ⅱc-3層	黄灰色土（砂質）	－	30cm
Ⅱd層	青灰色土（シルト質）	－	10cm
Ⅲa層	砂礫土	河川堆積層	―

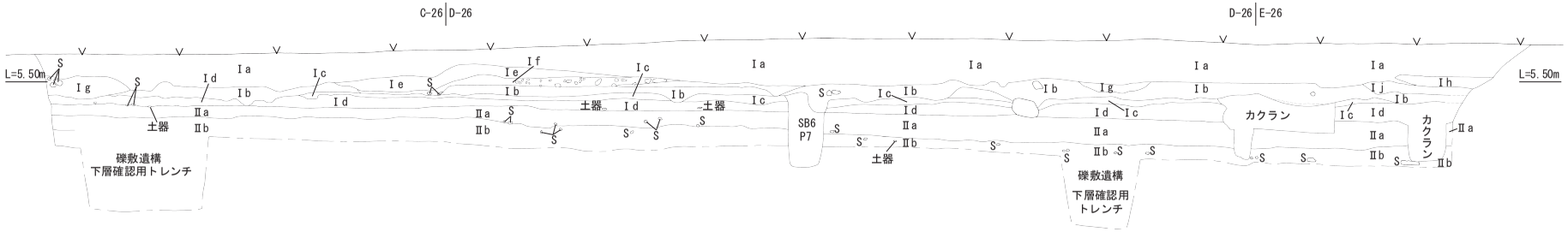
0　4m
(1:80)

第７図　土層断面図１

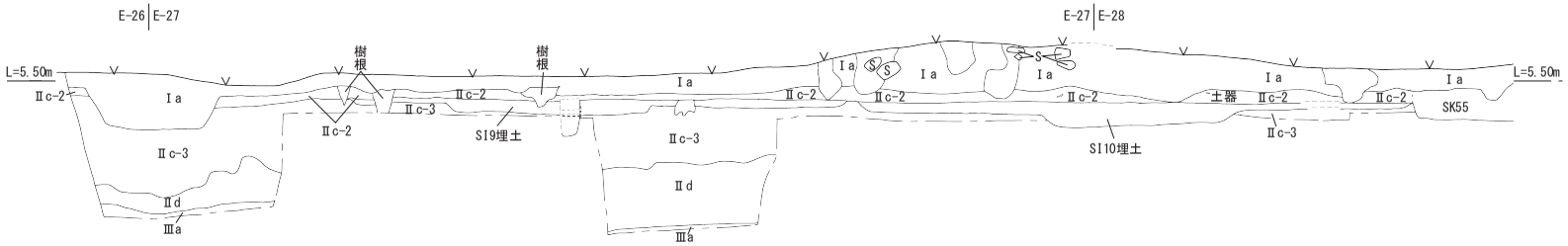

②C-2区南壁
C-27
C-26
C-25
C-24
C-23
L=5.50m
Ⅰa
出水市確認トレンチ
Ⅱc-2
SI5
カクラン
Ⅰd
Ⅰd+Ⅱ
Ⅱb-2
Ⅱb-2(土器・礫)
Ⅱc-3～Ⅲ
Ⅱc-3 からⅢへ漸移的に
Ⅱc-3
青灰ブロック
青灰色シルト層
水田盤
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb-1
Ⅱb-2
土器・小礫混入土(埋め土；黄茶褐色)
上位に小礫まとまる
Ⅲa
Ⅲ
Ⅱc+Ⅲ
やや砂が溜まる
砂
Ⅱc(Ⅱc-3主体か)
Ⅱc+礫
Ⅱc-3
0
4m
(1:80)

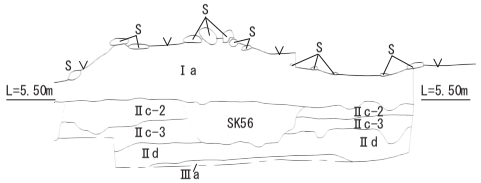
第８図　土層断面図２

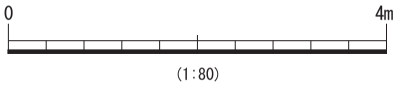
③26 グリッド西側ベルト



④C-3区北壁

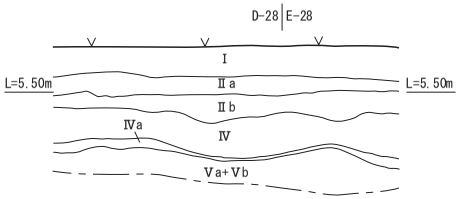


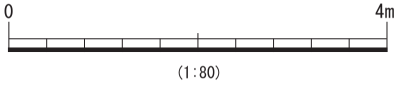


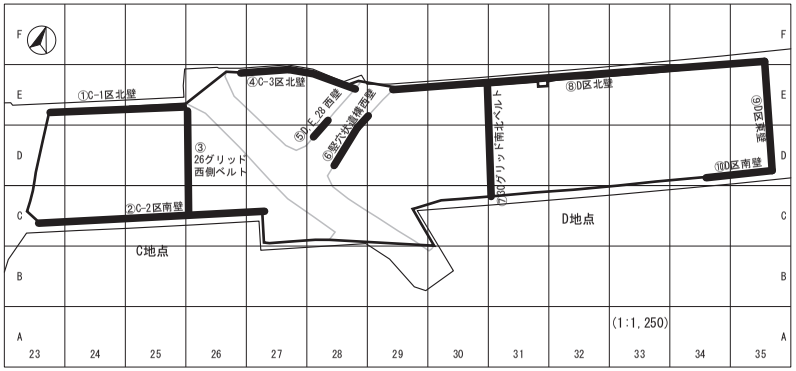


第９図　土層断面図３

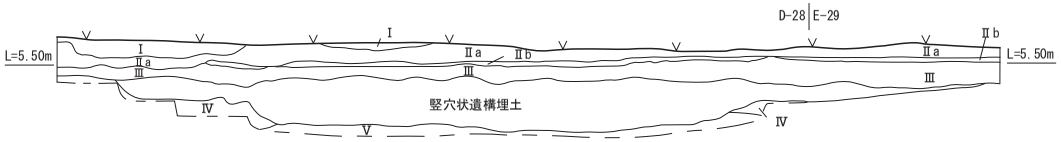
⑤D,E_28 西壁







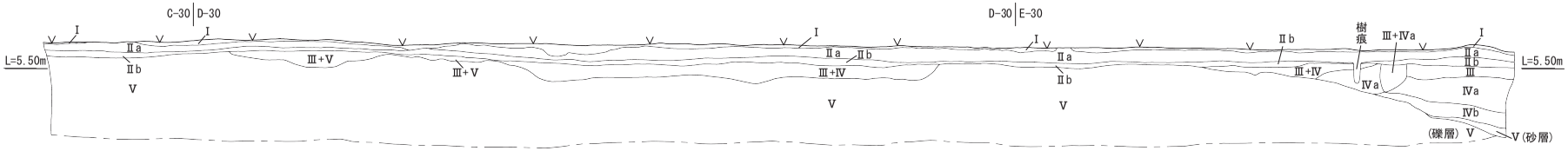
⑥竪穴状遺構西壁



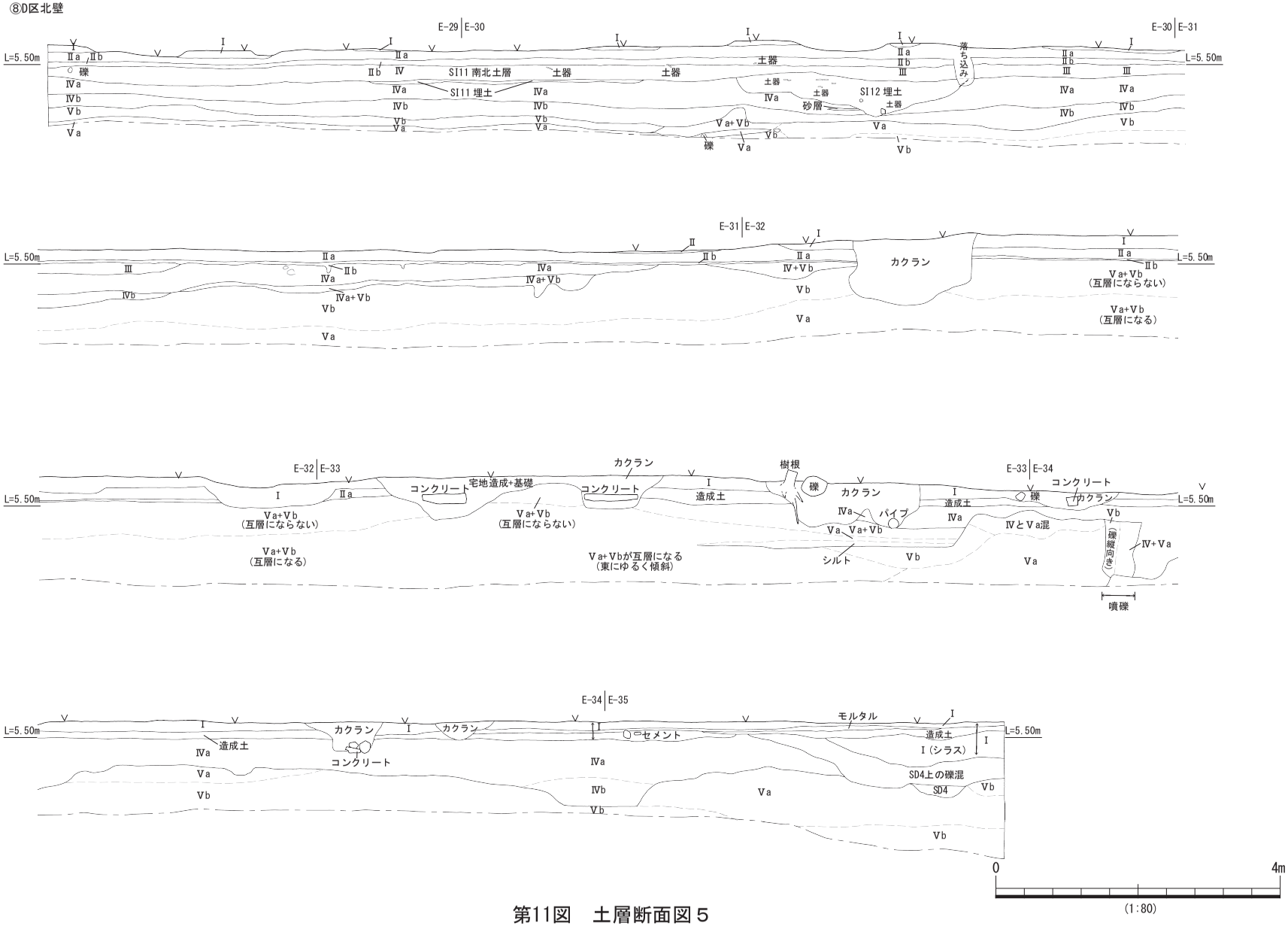
第５表　Ｄ調査区層序

Ｄ調査区 層名	色調・土質等	特　　徴	層厚（平均）
Ⅰ層	褐色土（砂質）	表土（耕作土・造成土）	30cm
Ⅱa層	灰色土（シルト質）	旧水田層	10cm
Ⅱb層	灰褐色土（砂質）	旧表土	5cm
Ⅲ層	灰黄褐色土（シルト質）	古代～中世を含む遺物包含層	10cm
	灰黄褐色土（シルト質）	古代～中世を含む遺物包含層	15cm
Ⅳa層	暗灰黄褐色土（シルト質）	古墳時代主体の遺物包含層	20cm
Ⅳb層	黄灰色土（砂質）	－	30cm
Ⅴ層	砂礫土	河川堆積層	―

⑦30 グリッド南北ベルト

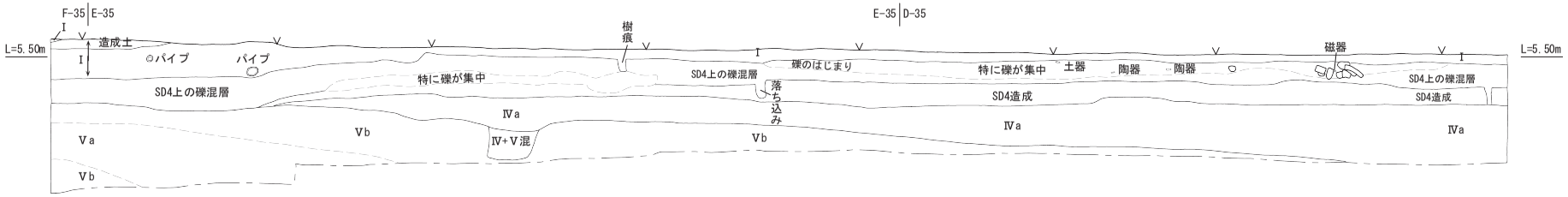


第10図　土層断面図４

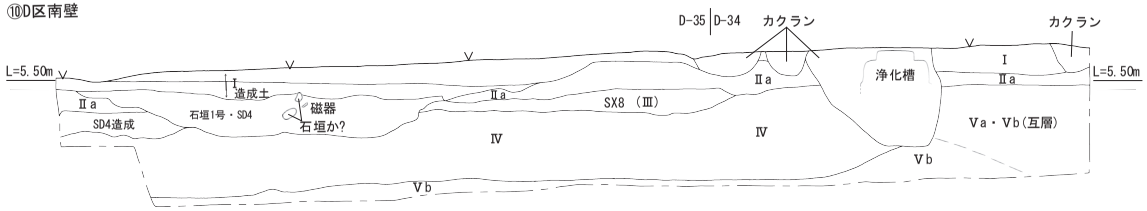

⑧D区北壁
E-29
E-30
E-31
E-32
E-33
E-34
E-35
L=5.50m
礫
SI11 南北土層
SI11 埋土
土器
SI12 埋土
砂層
落ち込み
カクラン
コンクリート
宅地造成+基礎
造成土
樹根
パイプ
シルト
モルタル
セメント
SD4上の礫混
SD4
I (シラス)
Va+Vb
(互層にならない)
(互層になる)
Va+Vbが互層になる
(東にゆるく傾斜)
礫縦向き
噴礫
0
4m
(1:80)

第11図　土層断面図５

⑨D区東壁



⑩D区南壁





(1:80)

第12図　土層断面図６

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　概要

Ｃ地点とＤ地点は標高６ｍほどの平坦地であるが，26区から29区にかけて交叉する生活道が通っているため，道路を境として西側をＣ地点，東側をＤ地点とした。弥生～古墳時代の遺構検出をしたⅡc層での地形はほぼ平坦であるが，西側に向かってやや下降している。28・29区にはやや窪んだ部分がある。

Ｃ・Ｄ地点における各時代の遺構や遺物は西側のＡ・Ｂ地点と比べると，遺構数も出土量も多い。

縄文時代から近代まで連綿と遺物は出土しているが，主体となる時期は古墳時代前期と古代・近代である。縄文時代から弥生時代の出土遺物は少なく，縄文時代と弥生時代，中世に比定される遺構は検出されなかった。

縄文時代から弥生時代の遺物は，他の層に混ざって出土したが，ほとんどの遺物は土器片である。出土量は少なく，摩滅したものが多いため，河川の堆積作用により運ばれた可能性がある。

縄文時代の遺物は，主に後期中葉の土器や石器と想定される。弥生時代の遺物は，早期から後期にかけての遺物が出土しているが，黒髪式土器の甕形土器が主体で，突帯を有するものやスス痕が付着しているものである。他に石器もあるが，数は少ない。

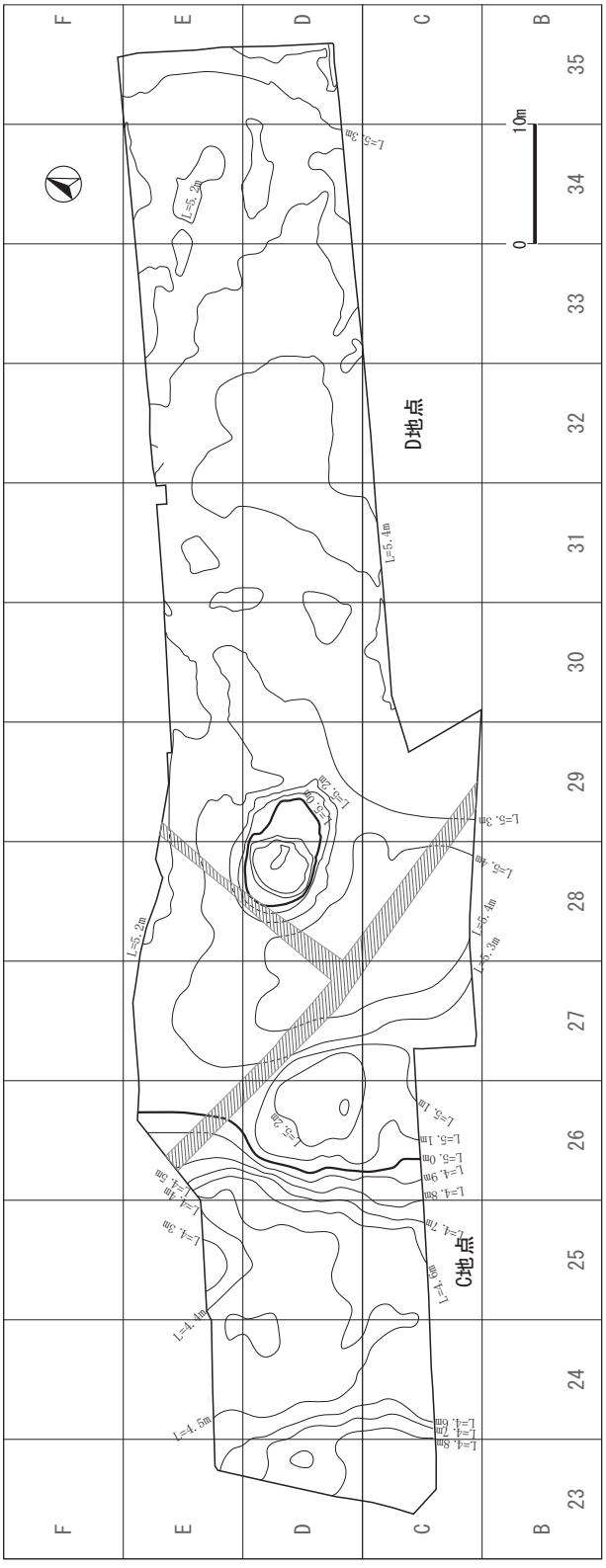
古墳時代前期の集落はＡ地点から続いているが，26区から30区に集中して存在する。竪穴建物跡10軒，竪穴状遺構１基，土坑33基が検出され，６か所で土器溜が確認された。出土遺物も多く，甕形土器・壷形土器・高坏形土器などが主体的で，他に蓋形土器や円盤形土製品，石器，小型仿製鏡，鉄製品などもある。これらは南九州在地のものもあるが，畿内系のものも多く，製法を真似た在地土器もある。

古代の遺構は，24区～29区の限られた範囲に掘立柱建物跡１棟，土坑９基，礫敷遺構１か所が検出された。土坑の中には土器焼成土坑が含まれている。古代の出土遺物は多くが土師器・須恵器だが，他に越州窯系青磁・緑釉陶器・土錘などもある。須恵器坏蓋や甕のなかには転用硯もある。

中世の出土遺物には土師器の他に青磁・備前焼・瓦質土器があるが，数は少ない。

近世～近代も26区～30区付近に多く存在しているが，35区にも溝状遺構がある。Ｅ－27～29区には石列遺構が５基ある。遺構は掘立柱建物３棟，土坑５基，溝状遺構２条，石列遺構５基，石垣１か所がある。

遺物掲載については，遺構，包含層ごとに総出土点数を数え，実測対象遺物を選別し図示した。各遺物の出土



第13図　Ⅱｃ層の地形図

地点及び層位については第11～41表を参照されたい。

第２節　縄文時代の調査成果

縄文時代の遺構は検出されず，遺物も縄文土器２点と石器１点が出土したのみであった。

１は後期の南福寺式土器深鉢の突起部である。口唇部には三つ編み状の粘土紐で突起が作出され，そこから二条の凹線文様が左右に展開するモチーフである。口縁部の下に突帯が貼り付けられ肥厚し，文様帯を２段構成している。突帯の下に端部を押さえる凹線で横あるいは縦の凹線文がある。表面は橙色を呈し，焼成良好である。表面は摩滅が目立つ。Ｄ－28区で検出された竪穴状遺構で出土した。

２は口縁部が内側に屈曲し，口縁外面には横方向と波状の沈線文が施される。内外とも丁寧にナデられている。表が黄橙色，裏が灰黄褐色を呈し，茶色石や白色石などを含む胎土である。Ｄ－33区で出土しており，後期中葉の西平式土器に比定される。

３は長さ8.4㎝，幅2.3㎝，厚さ1.4㎝の緑泥片岩製両刃の定角式磨製石斧で，重さは48ｇである。敲打によって形を整え，全面を丁寧に研磨している。刃部は鋭く，一部に刃こぼれがみられる。Ｅ－27区にあった近世の掘立柱建物跡７号の柱穴で出土した。周辺で出土している土器や，石斧の形状から後期のものと思われる。

第３節　弥生時代の調査成果

遺構は検出されなかったが，早期から後期までの弥生土器63点と石器３点が出土している。出土した土器のほとんどは中期中葉のものである。このうち弥生土器45点と石器３点を図化した。

４は早期の突帯文土器で，口唇部直下に１条の刻目突帯が貼り付けられている。口唇部はナデ調整により，中央が筋状に凹んでいる。分厚い作りで，内外面とも工具横ナデ調整である。橙色を呈しており，白色石を多く含み，灰色石・茶色石もある胎土である。

５は前期の板付式土器小型壷形土器である。５は長頸壷の可能性のある胴部上半の破片で，横位の数条の沈線と重弧文の一部が残存する。薄い作りで，沈線は細い。外面は黄灰色，内面は浅黄橙色を呈している。

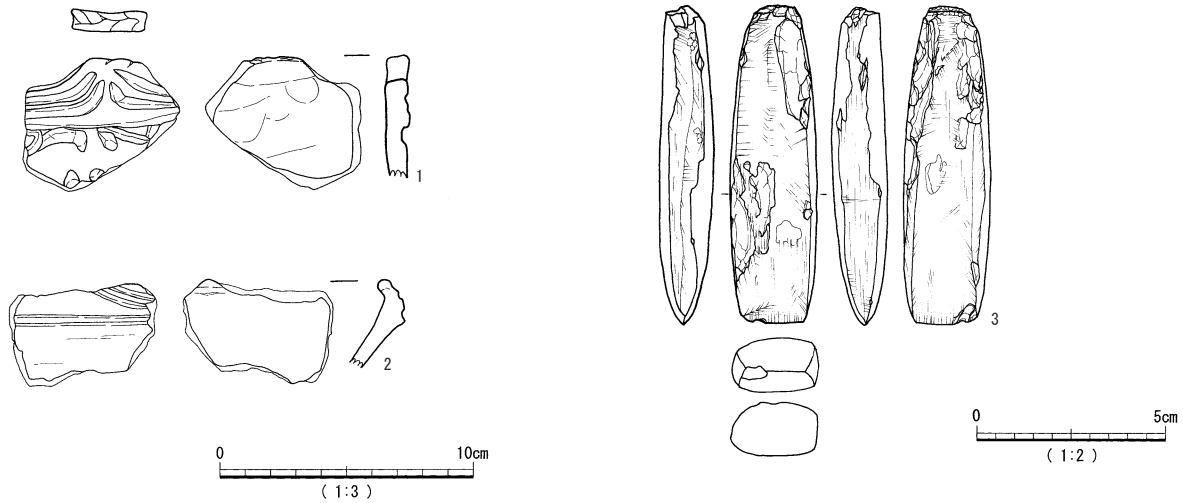
６は弥生時代の壷と考えられる。胴部の破片で重弧文の一部が残存する。外面側の屈曲部跡が明瞭で内面にハケ目が残る。古墳時代になる可能性も考えられるが，詳細は不明である。内面，外面ともに明赤褐色を呈している。

７・８は口縁端に分厚い粘土紐を貼り付け，玉縁状に肥厚させる甕形土器の口縁部で，中期に比定できる。霧島山地周辺に多く出るといわれている。７は全体に摩滅しており，口縁部の厚さに対し頸部の器壁は非常に薄い。外面はにぶい黄橙色，内面は浅黄橙色を呈している。８は全体的に厚手で稜は緩く，やや内に張り出している。灰黄褐色を呈し，胎土は砂質で粗い。

９～39は口縁端が丸みをおびた中期の黒髪式土器に属する甕形土器である。

９は口径27.2㎝で，Ｌ字状口縁だが，内側が下がっている。内外面ともナデ整形である。口唇部上面外側にスス痕がみられる。また，胎土に粒子の大きい角閃石が目立つ。10は口径27㎝の厚い作りで，口唇部が内傾し，ナデ調整によって内面側が細く張り出す。また，胎土に３㎜大の長石を疎らに含む。外面がにぶい橙色，内面が浅黄橙色である。11は丁寧な作りで，内外に粘土を貼り付け，内面への張り出しが広く，口縁側面はＴ字形を呈する。胴部は直に立ち上がっている。口径23㎝で，接合面も明瞭である。外面は縦ハケナデのあとヘラナデを施している。

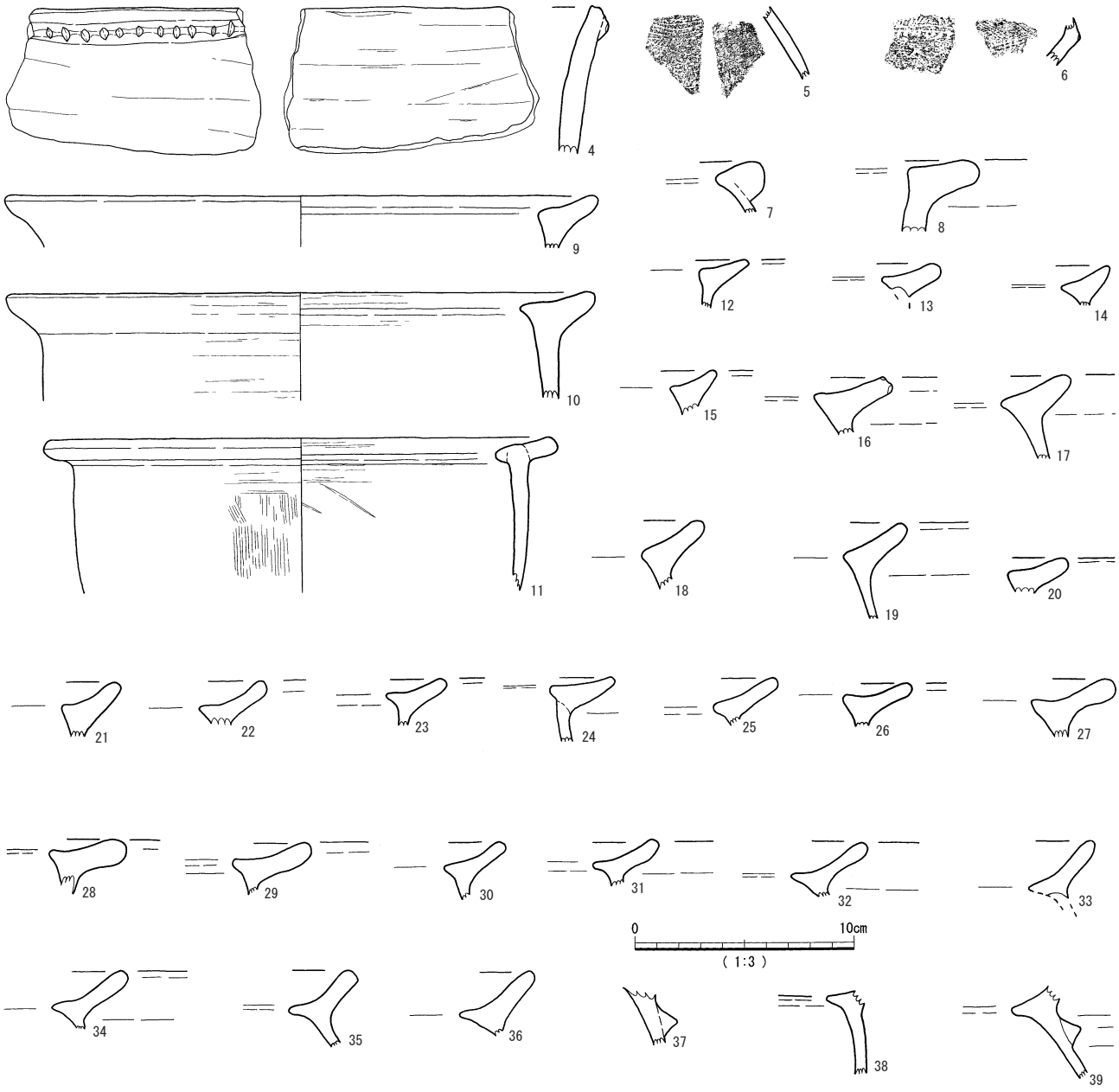
12～21は内面がやや下がる逆Ｌ字形の口縁部で，内面にやや張り出しがみられる。頸部の器壁が特に薄い。13



第14図　縄文時代の土器・石製品

は内外面とも摩滅している。また，接合面で剥落しており，胎土には大粒の角閃石を多量に含む。14は全面ナデ調整で，上面のへこみは弱い。15は内外とも摩滅している。16はナデ調整で断面方形に近く成形した口縁端部の上下に，連続した浅い刻みが施されている。胎土には，３㎜大の石英をまばらに含む。にぶい橙色を呈する。17はやや分厚い作りで，丸みをおびている。18は，口縁部上面にスス痕がみられる。19は頸部の器壁が特に薄く，胎土に大粒の角閃石を多く含む。口縁部は貼り付けている。20は，上面端部に帯状にスス痕がみられる。21は表面が摩滅しており，浅黄橙色を呈している。

22～36は内面に強く張り出した鋤形を呈する口縁部である。22～31がやや水平に近く張り出すのに対し，32～36は内面が下に深く張り出す。22は上面がしゃくれあがっており，内外面とも丁寧な横ナデである。３㎜大の長石をまばらに含む。23は外面が褐灰色，内面が黄橙色である。24は頸部の器壁が特に薄く，口縁を外に貼り付けている。胎土に大粒の角閃石を多く含む。25は口縁も薄い作りで，胎土に粒子の大きい角閃石をまばらに含む。また，口唇部に帯状にスス痕がみられる。26・30は口縁部の厚さが薄いが，27・28は分厚い。31は口唇部が内傾し，ナデ調整によって内面側が張り出す。口縁部内外面に帯状のスス痕がみられる。32・33は強くしゃくれあがった口縁である。33の接合面は横方向にナデている。ヘラ横ナデ調整で，浅黄橙色を呈している。角閃石・白色石などを含む。34は口唇部が長く内面側への張



第15図　弥生時代の土器（１）

り出しも大きい。内外とも摩滅している。35・36はスマートな作りである。

37～39は口縁部の外側など一部を欠いた破片で，37も内面側の上端部が屈曲するため，内面側に口唇部が張り出すものと想定される。37・39は口縁部下の肩部に三角形状の突帯を貼り付けている。

40～43は口縁部幅が短く薄手のもので，口縁部が内側に下がり，屈曲部は鋭いものとゆるやかなものがある。40は口縁直径が22.4㎝で，内面側が下がっているが，稜は鋭く屈曲している。41は横方向ヘラナデで，浅黄橙色を呈する。黒色石・角閃石・石英などを含む。42は全体的に摩滅し，胎土に角閃石を多量に含む。

44は，口縁直径が26.4㎝の外へ強く外反する甕形土器で，端部は丸みを帯びている。45は，「く」字状に屈曲する甕形土器で，端部は丸く収まる。

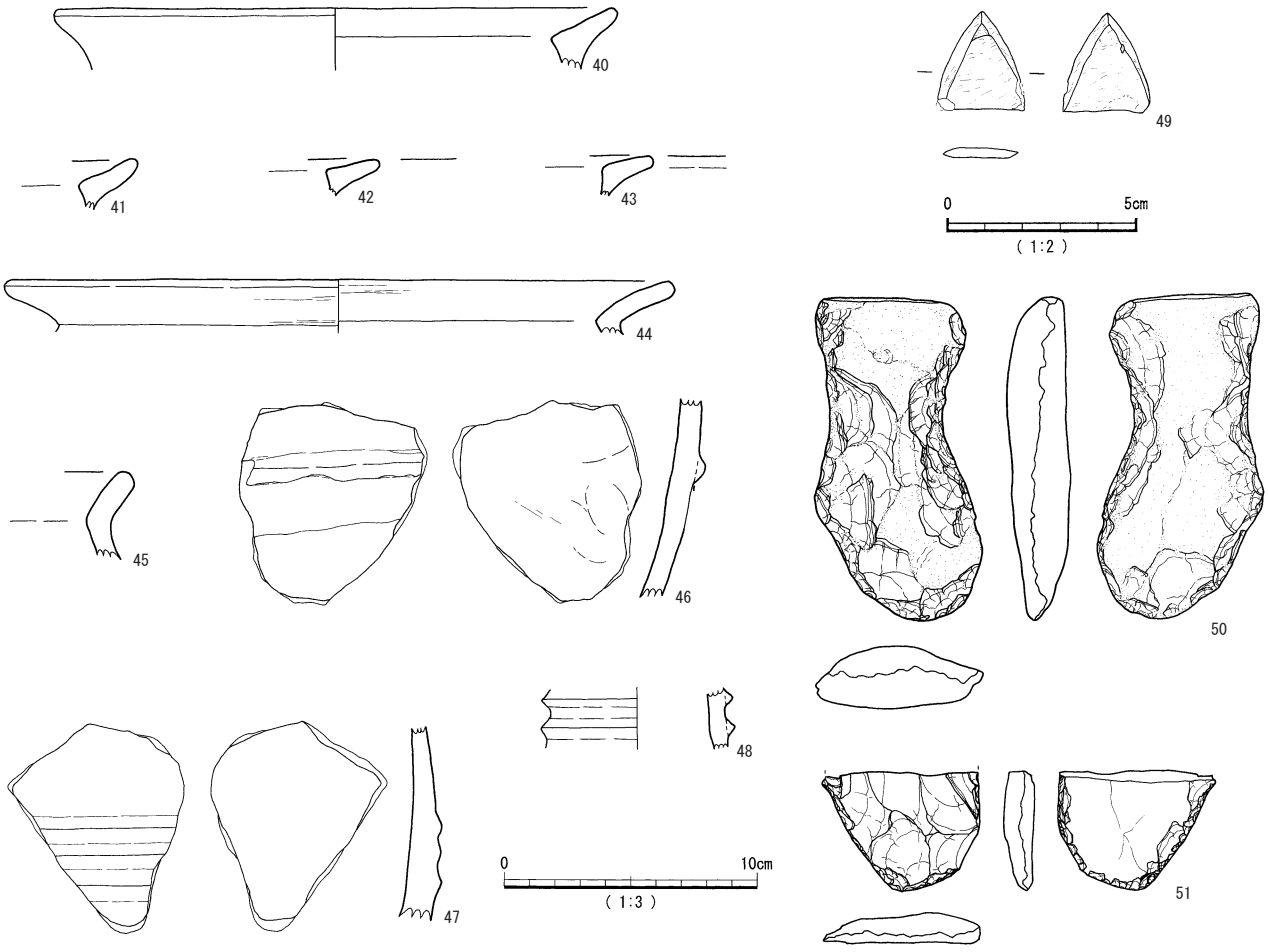
46・47は，三角突帯の付された胴部である。46は本来２条突帯であったと考えられるが，下側の１条が剥落している。断面は角が丸い三角形状で刻みはみられない。47は，幅広い突帯にユビナデにより凹線を巡らし，断面三角形状の３条突帯状を呈している。突帯の上が細くなっている。胎土は砂粒が細かく，軟質である。弥生前期頃の甕形土器と考えられる。

48は，袋状口縁となる壷形土器の頸部で，２条の三角突帯がある。直径7.6㎝と細い。

49は長さ2.6㎝，基部幅2.3㎝の正三角形を呈する頁岩製無茎の磨製石鏃である。厚さは３㎜，重さ1.9ｇで，全体を丁寧に磨いて扁平にしたあと，両側辺を表裏から研磨し鋭く作っている。Ｄ－26区のⅡｃ層で出土している。

50と51は打製石斧である。50は長さ12.8㎝，幅6.2㎝，厚さ2.5㎝で基部は直線的となる。中央よりやや上が両方からくびれており，全体的にくつ形を呈している。表裏から端部を細かく打ち欠いて形を整えているが，中央付近には自然面を残している部分もある。刃部には縦方向の擦痕がみられる。安山岩製で，Ｅ－35区の溝状遺構４号の西側から出土している。51は基部が欠損した刃部のみの破片で，長さが4.7㎝，幅6.3㎝，厚さ1.2㎝である。側縁部を両面から細かく打ち欠いて，形を整えている。安山岩製で片面には一部自然面を残している。Ｃ－29区のⅢ層で出土している。

磨製石鏃は中期，打製石斧は早期のものと思われる。



第16図　弥生時代の土器（２）・石製品

第４節　古墳時代の調査成果

１　概要

古墳時代の遺構は，Ⅱｃ層（Ｃ調査区），Ⅳ層（Ｄ調査区）で検出された。

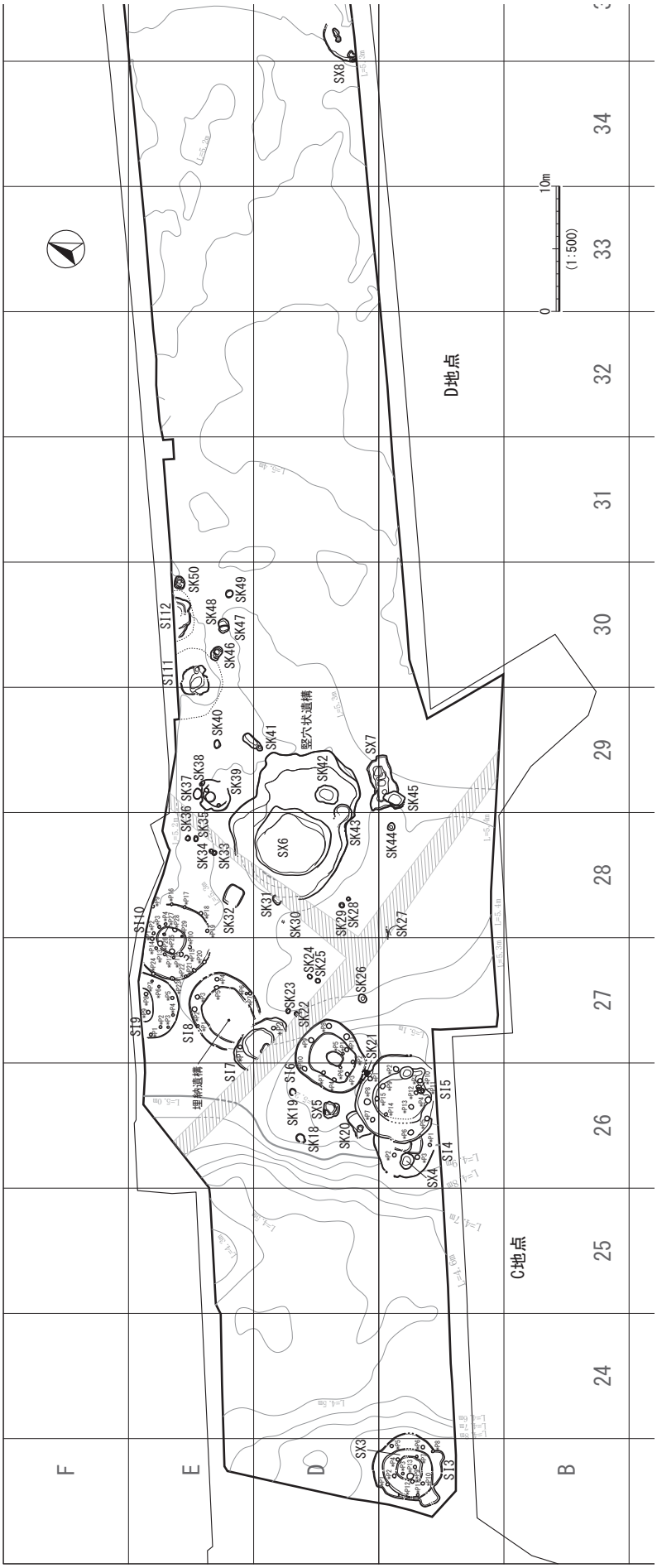
遺構は，竪穴建物跡が10軒，土坑が33基，土器溜が６か所，多くのピット（杭痕状の小土坑）が検出された。竪穴建物跡は４～10ｍの略円形を呈する。土器溜３と土器溜６は竪穴建物跡３号と竪穴状遺構の上面で検出された。３号以外の竪穴建物跡や土坑，土器溜６以外の土器溜は，Ｄ調査区の西側Ｃ～Ｅの26区～30区の間に集中して位置しており，東側では遺構は確認されなかった。

Ａ・Ｂ調査区の調査結果を踏まえれば，遺構の検出される範囲は自然堤防状のやや標高が高い範囲と対応しており，地形としても安定した場所であったと考えられる。また，調査範囲より北側の現集落が最も標高が高いことから，調査区外の範囲にも遺構が広がっていると想定される。また，竪穴建物跡３号と土器溜３については，竪穴建物跡との関連性を考慮し，遺物は竪穴建物跡と共に記載した。なお，土器溜内での出土位置や接合状況は第４節第20図に記載した。

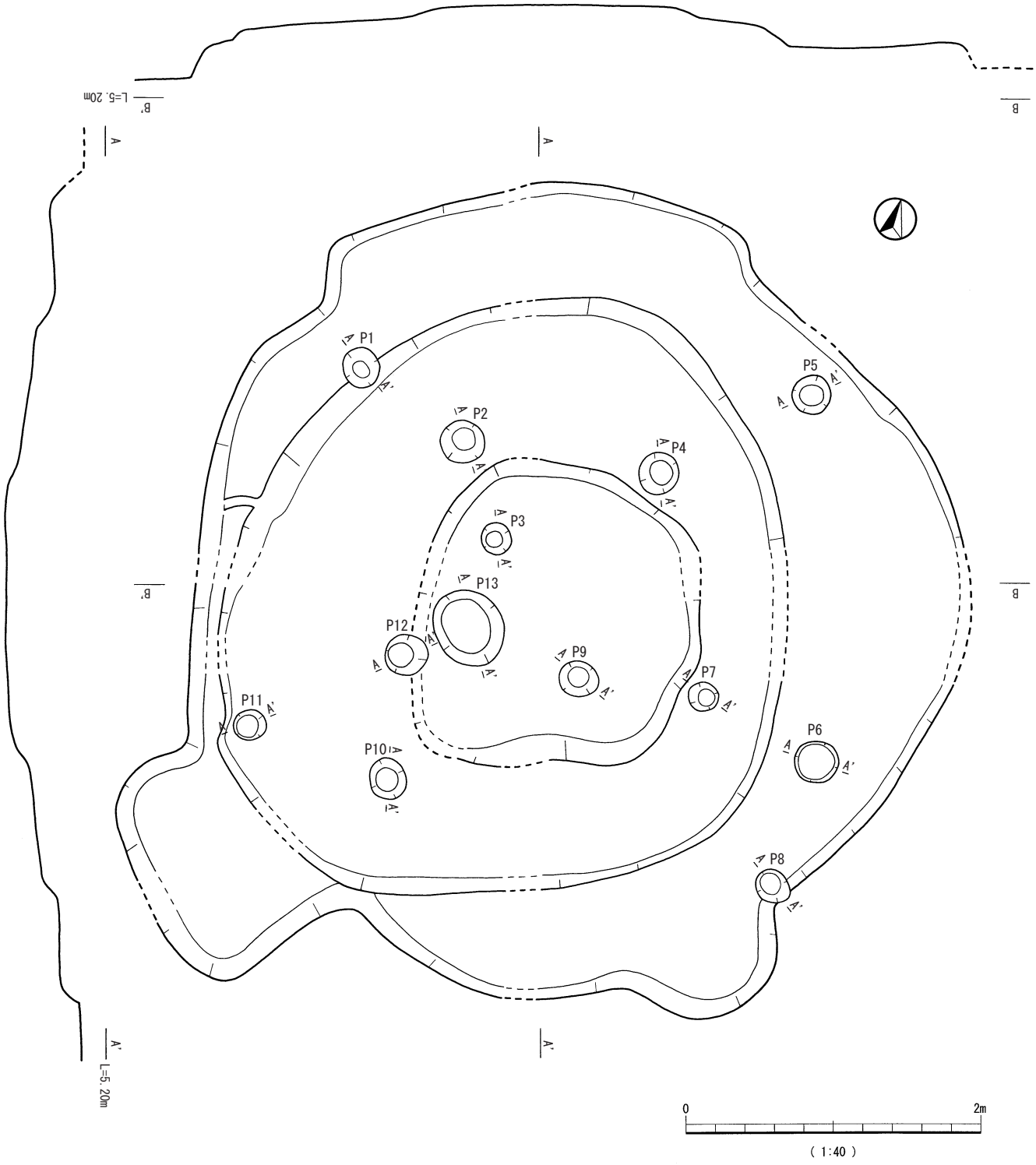
さらに，竪穴状遺構と土器溜６についても，竪穴状遺構との関連性を考慮し，遺物は竪穴状遺構と共に記載した。なお，出土状況については図版19を参照されたい。また，接合状況は４節第59図に記載した。

例言にも記載したが，遺構内出土遺物の中には，遺構の時期とは異なる時代の資料も出土しており，その遺物については，包含層出土の遺物として扱った。詳細は観察表を参照されたい。

土器は甕形土器を主体に，壷形土器，高坏形土器といった古墳時代で一般的な器種組成に，小型器種や精製器種も出土している。主体的な時期は古墳時代前期で，成川式土器（中津野・東原段階主体）をはじめ古式土師器や島原・天草系土器など，在地系土器と外来系土器の双方が出土している。土器は，器種ごとに形態的特徴からさらに細分できる。詳細な分類は，第Ⅵ章総括に記載した。



第17図　古墳時代の遺構配置図



第18図　竪穴建物跡３号の平面図・断面図

２　遺構

１）竪穴建物跡

①竪穴建物跡３号（第18図～第26図）

Ｃ・Ｄ－23・24区のＣ地点で最も西側で検出された。長軸約６ｍ，短軸約５ｍの略円形を呈する。３段の構造を持ち，検出面から約10㎝下がった２段目は4.0ｍ×3.8ｍの略円形を呈し，さらに10㎝下がった３段目は一辺２ｍの略方形を呈している。検出面からの深さ約50㎝である。南側に２か所，北側に１か所張り出し部がある。南西側は幅約150㎝，奥行110㎝の方形を呈する。南東側は幅約100㎝，奥行約50㎝の丸みを帯びた形を呈する。北側は幅約2.8ｍ，奥行約70㎝の横に長い方形を呈する。方位から考えると南側張り出し部が出入口の可能性がある。内部にピットが13基検出された。ピットの直径は約20㎝～50㎝の円形を呈し，深さは約10㎝～30㎝であった。３段目のピット13のみが径55㎝と大きく，深さも10㎝ほどであった。主柱穴は判断できなかった。埋土はシルト質土でほぼ水平に堆積している。上から暗灰黄色，黄灰色，褐色，灰褐色の順である。上面に焼土も検出されたが，建物埋没後のものと考えられる。

出土遺物の大半は検出面で出土し，床面で確認できたのは３点のみである。北側隅付近に52と87の甕と壷などの土器が集中して出土したが，１段目，２段目が埋まる前に廃棄された可能性がある。

竪穴建物跡３号のプラン検出面とほぼ同じで遺物が平面的にまとまって出土した。そのため，建物跡が埋没してから遺物が廃棄または周辺から流れ込んで堆積したと想定され，土器溜３として扱った。

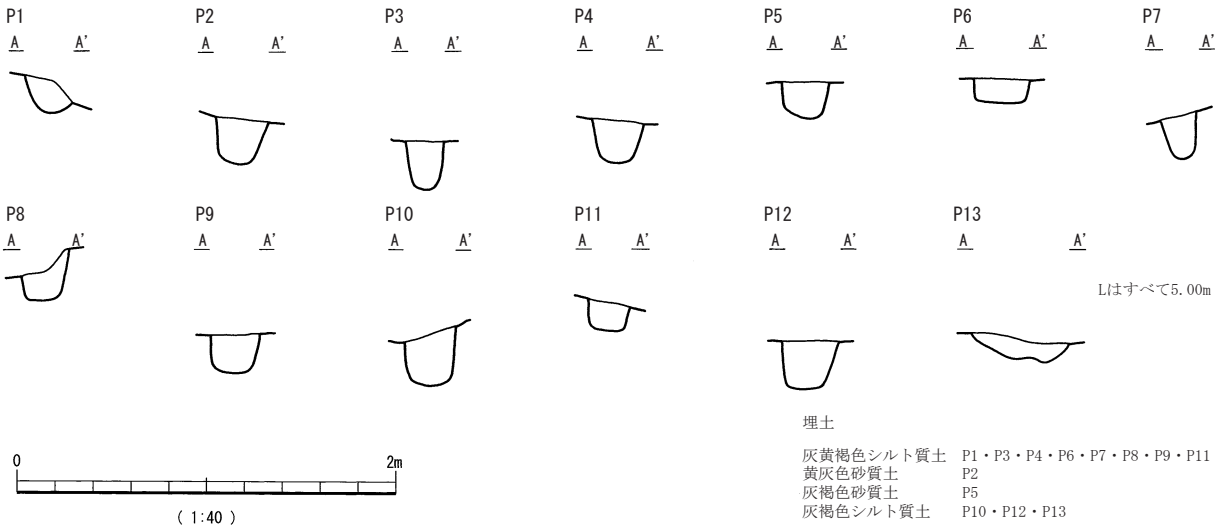
遺物は，タタキ調整の甕形土器が主体をなす。また，二重口縁壷のバリエーションが豊富である点も特筆される。特に82や87は他の資料と色調や胎土が異なっており搬入品の可能性がある。

甕形土器（52～81）

52～57は器形が在地の成川式土器に近い。

52は胴部外面に左上がりのタタキ痕を残す。胴部下位はケズリ調整で，タタキ痕が明瞭なのは胴部中位までである。屈曲部を起点に幅広のハケ調整を縦位に施し，カキアゲ口縁状を呈している。また，口唇部外面には横位の条痕状のタタキが巡る。口縁部内面はユビナデ調整で凹凸があり，口唇部は緩やかに波打つ。口縁端部は，平坦に仕上げられている。内面は全体的に丁寧なナデ調整で，タタキ調整の当て具により緩やかな凹凸をなす。

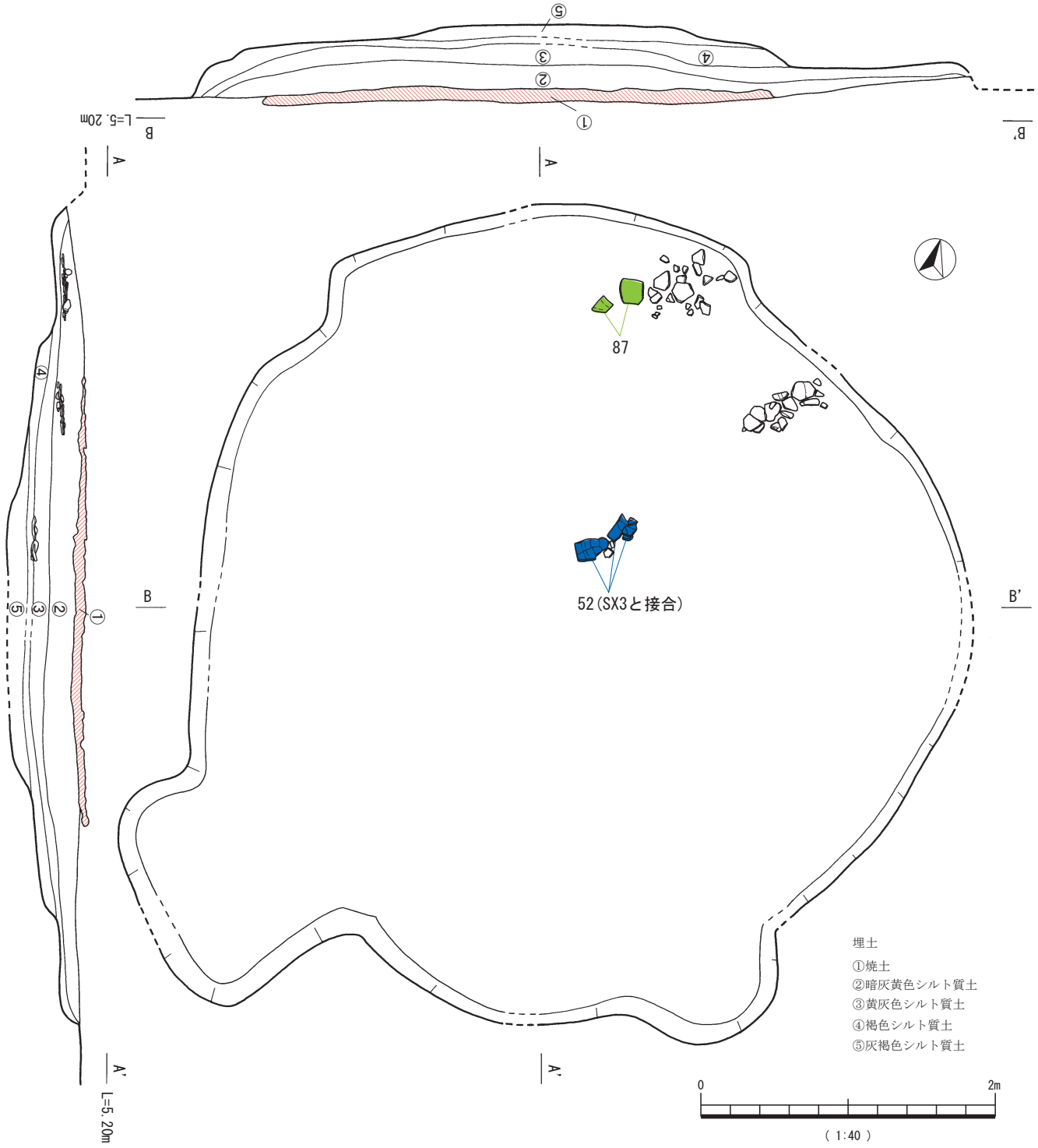
53は，胴部に水平方向のタタキ痕を有し，口縁部にもわずかに残る。口唇部はナデ調整により平坦面をなし，外面側に張り出す。胴部は，タタキ調整の上からナデ調整が加えられ，部分的にタタキ痕が不明瞭である。内面は丁寧なナデ調整であり，屈曲部下はユビナデ調整で肩部の張りが作出されている。口縁部から胴部最大径あた



第19図　竪穴建物跡３号のピット断面図

第６表　古墳時代竪穴建物跡・竪穴状遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数
３号	SI4	5909	６号	SI2	1616	９号	SI10	34	12号	SI18	553
４号	SI9	600	７号	SI19	54	10号	SI11	2001	竪穴状	SI12	6457
５号	SI6	7357	８号	SI8	1176	11号	SI17	1331	－	－	－

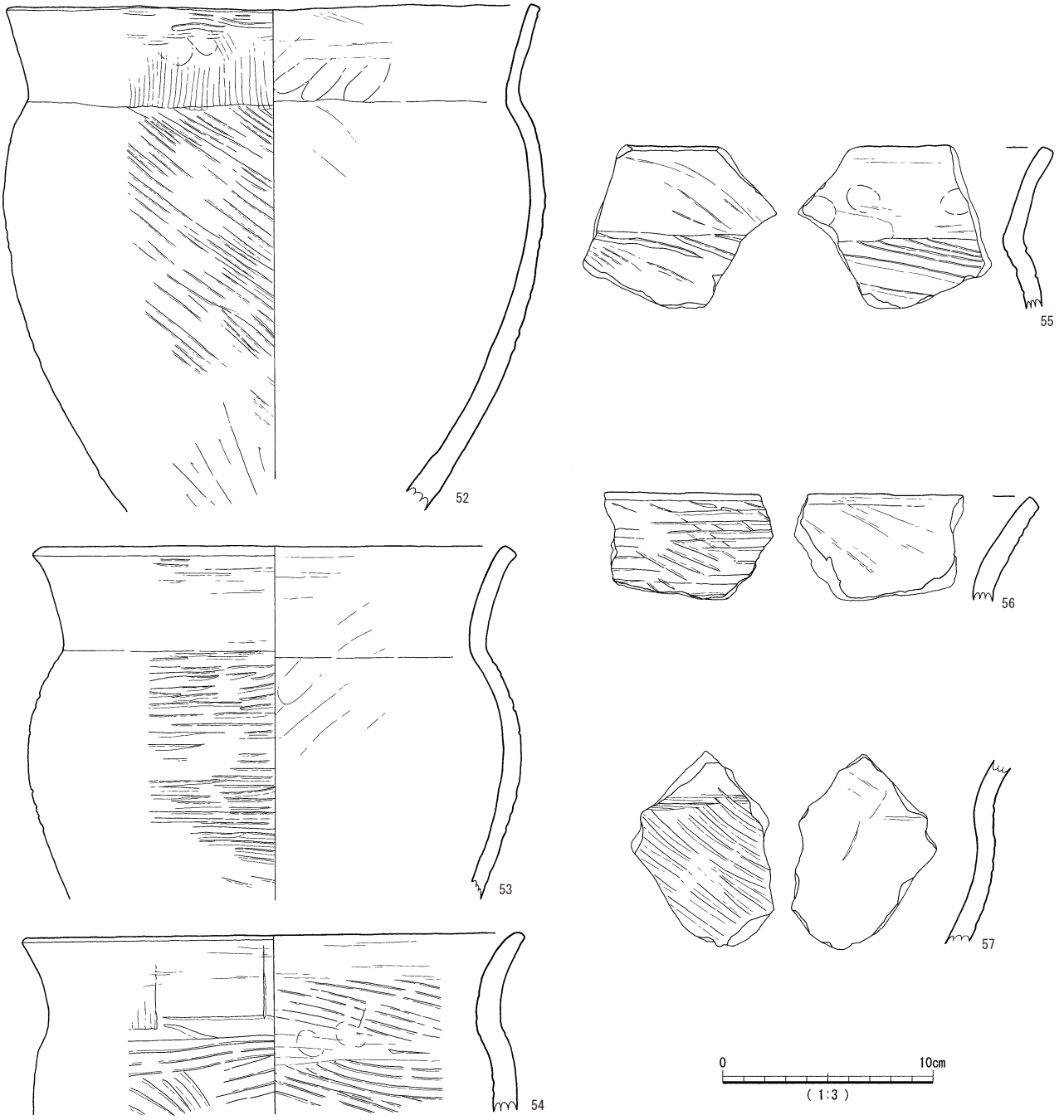


第20図　竪穴建物跡３号の土器出土状況・断面図

りまでは比較的厚手であるが，下半は薄手である。52に対し，53は屈曲の張り出しが強く，色調が暗い。

54は幅広のタタキが外面に施され，部分的に条痕状を呈する。また，内面も幅広のハケナデ調整が明瞭で，器面に条痕状の凹凸が生じている。口縁部周辺は横位のナデ調整で，端部にわずかに平坦面が作出されている。全体的に厚手で，他のタタキ調整の資料とはタタキの幅や器面調整が異なる。55は，頸部から外傾し，胴部には太い筋状の調整痕が明瞭に残る。ナデ消されているが，部分的に左上がりのタタキ痕もみられる。内面も条痕状の工具ナデが明瞭で，器面に凹凸がある。口縁部付近はナデ調整であり，外面は斜位のカキアゲ状を呈している。56は，外面に左上がり後，水平方向のタタキ調整が施される。口縁部は内外面ともナデ調整で，口唇部には平坦面が作出されている。内面は摩滅しているが，砂粒の動きからケズリ調整と考えられる。57は，外面に左上がりの幅広のタタキが明瞭に残る。頸部の屈曲部のみ水平方向のタタキが加えられ，頸部より上は横位のナデ調整である。

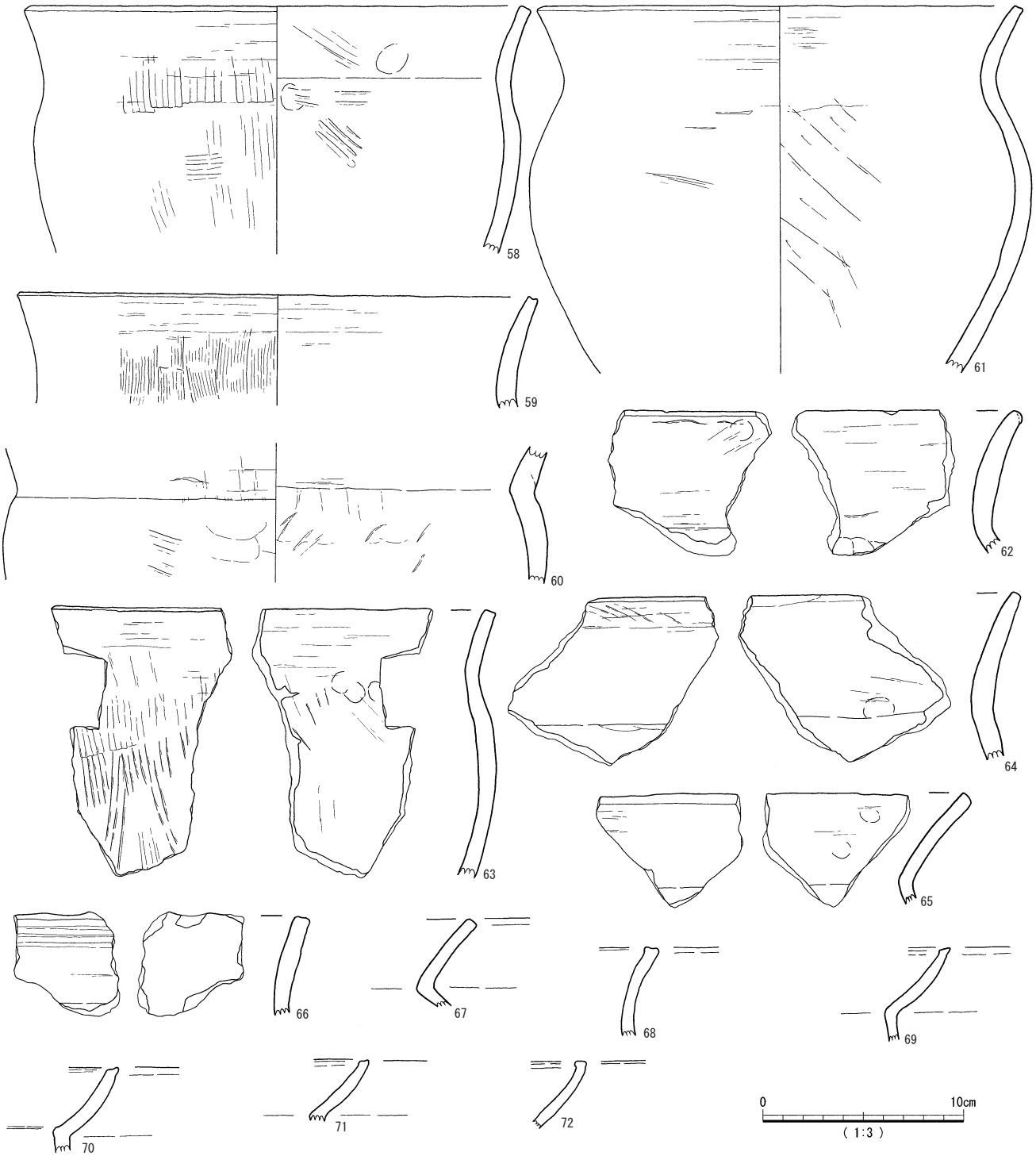
58～60は，いわゆるカキアゲ口縁の一群である。いず



第21図　竪穴建物跡３号・土器溜３出土の土器（１）

れも口唇部付近は，横位のナデ調整である。58は頸部から緩やかに外傾し，頸部外面には幅広のハケによる連続した縦位のナデ調整が施されている。また，口唇部には平坦面が作出されている。胴部外面も縦位のナデ調整を基本とするが，部分的に水平方向のタタキ痕が残存する。また，内面も外面と同様の幅広のハケナデ調整である。59は口縁部がわずかに外反し，口唇部は強めのナデ調整により筋状に凹む。外面は縦位のハケナデ調整で，口縁部付近は内外面とも横位のナデ調整である。胎土には，金雲母粒が目立つ。60は，頸部～胴部片である。全体的に器壁は厚いが，内外面とも調整は丁寧である。頸部外面にはカキアゲ状のハケナデ痕がみられ，胴部にはタタキ痕が部分的に残存する。また，胴部内面には筋状の工具痕がみられる。

61～65はナデ調整を主体とするもので，器形はタタキやカキアゲ調整を有するものと同様である。61は，頸部



第22図　土器溜３出土の土器（１）

で緩く屈曲し直線的に開く器形で，口唇部は平坦に仕上げており，カキアゲに近い調整後，横位のナデ調整が加えられたと考えられる。62は内外面とも横位のナデ調整で，緩く屈曲して外反する。また，頸部には稜状の小段がある。色調が明るく，２～３㎜大の赤褐色粒をまばらに含む。63は，口縁部が短くやや外傾し，胴部の張りも弱い。胴部は，幅広の粗い縦位のハケナデ調整である。64は内外面とも丁寧なナデ調整であり，頸部外面は工具を押し当てて緩い稜を作出している。口縁部外面にはわずかに左上がりの数条の筋が残っており，タタキ痕と考えられる。65は器壁の薄い口縁部で，胎土に３㎜大の白色の角礫をまばらに含む。

66はわずかに外傾し，口唇部はいびつだがわずかに平坦面を作出している。外面には水平方向の浅い凹線状の条痕が施されている。

67・68は器壁の薄い口縁部である。67は，屈曲部から直線的に外傾する口縁部で，端部は方形に仕上げられている。屈曲部からの立ち上がりの形態から，器形はなで肩または球状に胴部が膨らむものと想定される。68は，頸部が直線的に立ち上がり，端部でわずかに内弯するタイプである。口唇部はナデ調整により中央が凹む。

69～72は口縁部が内弯する。口唇部がナデ調整により内面側あるいは外面側に張り出す。

70は厚手で，屈曲部は内面側に張り出し，わずかに段状をなしている。

73は胴部片で，脚部との接合部で剥落している。外面下半はケズリのちナデ調整で成形され，上半にはハケ目と部分的にタタキ調整と思われる細かい凹凸がみられる。

74～80は脚台である。74は内外面とも横位のナデ調整で，胴部との接合部分で複数面で剥落している。75・78は器高が高く，直線的に広がるもの，76・77・79は外反して開く。80は器高が低く直線的である。75・77・78・80は胴部との接合面で剥落しており，73のような胴部との接合関係であると想定される。75は端部が明瞭な面をなしており，全体的に丁寧な作りである。また，外面は縦位のユビナデ調整で成形されており，成形時の粘土のシワが明瞭である。76は薄手で，端部が細く舌状をなし，外反するタイプである。端部付近が被熱しており，外面は特に摩滅が激しい。内面には，わずかにミガキ調整が確認できる。胴部との接合面で剥落している。77は，器高が低く反りが弱い。端部は強い横位のナデ調整により，筋状に凹む。内面調整は丁寧なナデ調整を主体とし，上部には部分的にミガキ調整が施されている。78は，端部付近に横位のナデ調整が施されており，ナデ調整の境界部分に小さな段が生じている。79は器高が低く，外面は指頭押圧による凹凸がある。端部は横位のナデ調整によって隅丸方形を呈している。80の胎土は，白色礫を主とした細かい砂粒を多量に含む。

81は小型の甕形土器である。内外面ともユビナデ及び指頭押圧により，器面にゆるやかな凹凸が生じている。

壺形土器（82～102）

図化できた残りの良い資料は，二重口縁壺がほとんどであった。

82は口縁が外傾する大型の二重口縁壺である。色調が暗く，胎土に３～５㎜大の長石を多量に含む。口縁部の屈曲部には浅い刻みが巡り，頸部には突帯を１条巡らし交差する×印状の刻みが施されている。刻みは，器面調整のハケと同一工具で付されたと考えられる。焼成は良好で比較的硬質であり，外面のハケ目調整も丁寧である。

83は口縁がわずかに内傾し，全体的に器壁が厚く，口唇部は明瞭な平坦面をなす。口縁部の屈曲部に浅い押圧状の刻みが施されている。口縁屈曲部及び頸部には，接合痕が明瞭にみられる。84は83に近い内傾する口縁で，全体的に厚手で屈曲部に接合痕がみられる。口唇部はナデ調整により隅丸方形に仕上げられており，外面側がわずかに凹む。85は緩やかに屈曲して内弯するもので，口唇部外端がわずかに欠損している。頸部内面はケズリ調整であるが，全体的に器壁は厚い。頸部と肩部の境界付近に，弧状のヘラ書きの沈線が巡る。内外面とも，部分的にハケ目調整がみられる。

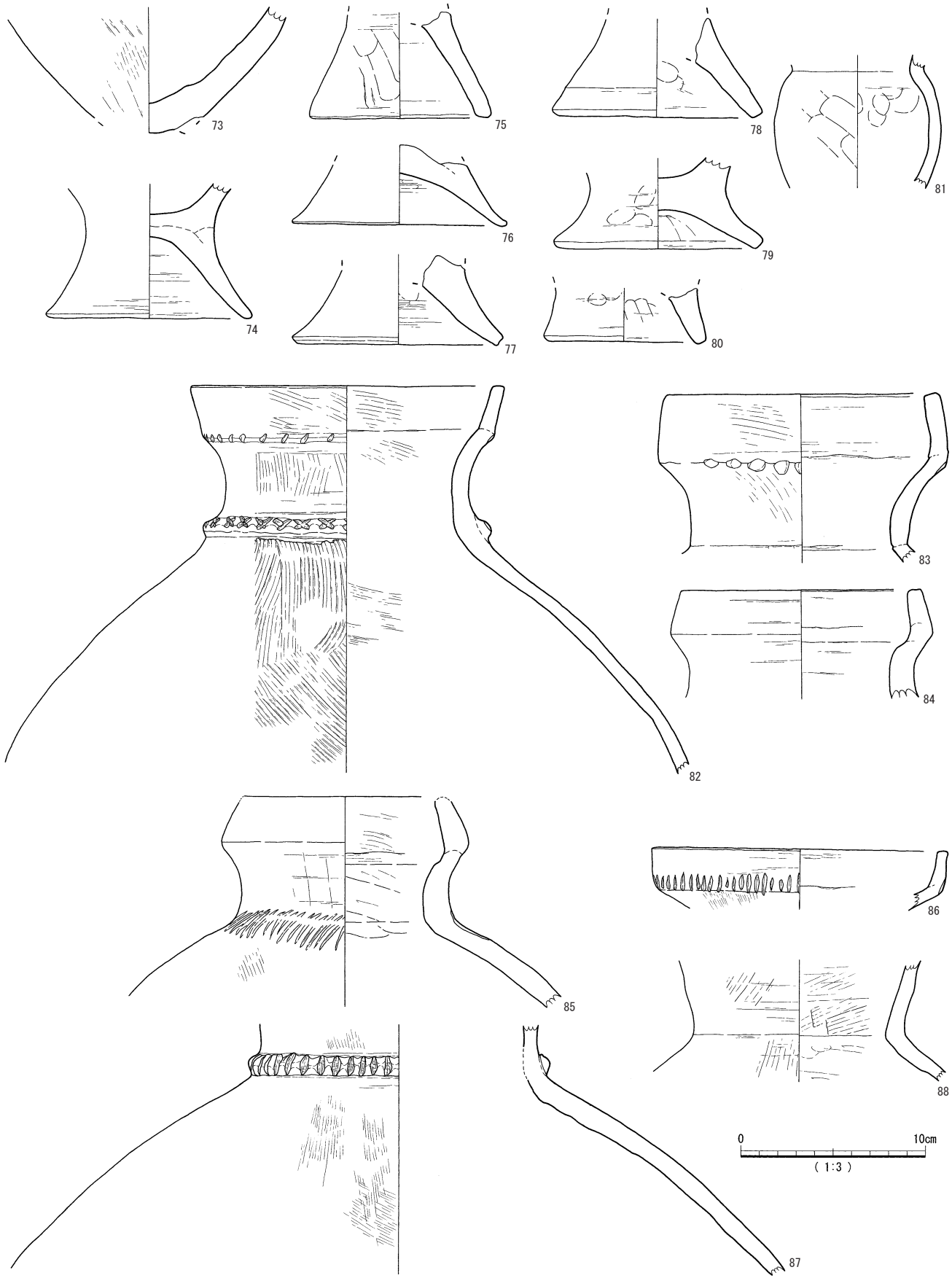
86は，屈曲部からほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は平坦面を有し，屈曲部外面にはヘラ状工具で連続した刻みが施されている。内外面ともナデ調整を主とするが，外面の屈曲部以下は細かいハケナデ調整である。

87も大型壺と考えられ，頸部に１条の突帯が巡り，布目刻みが施されている。色調は浅黄橙色と明るく，胎土は軟質で３㎜大の白色及び赤褐色の礫をまばらに含む。焼成が悪く器面も摩滅しており，内面の器表面は欠損している。外面には，部分的にハケ目が残存する。他の資料と比較しても胎土が異なるため，搬入品と考えられ，色調や胎土は宮崎方面に近い。

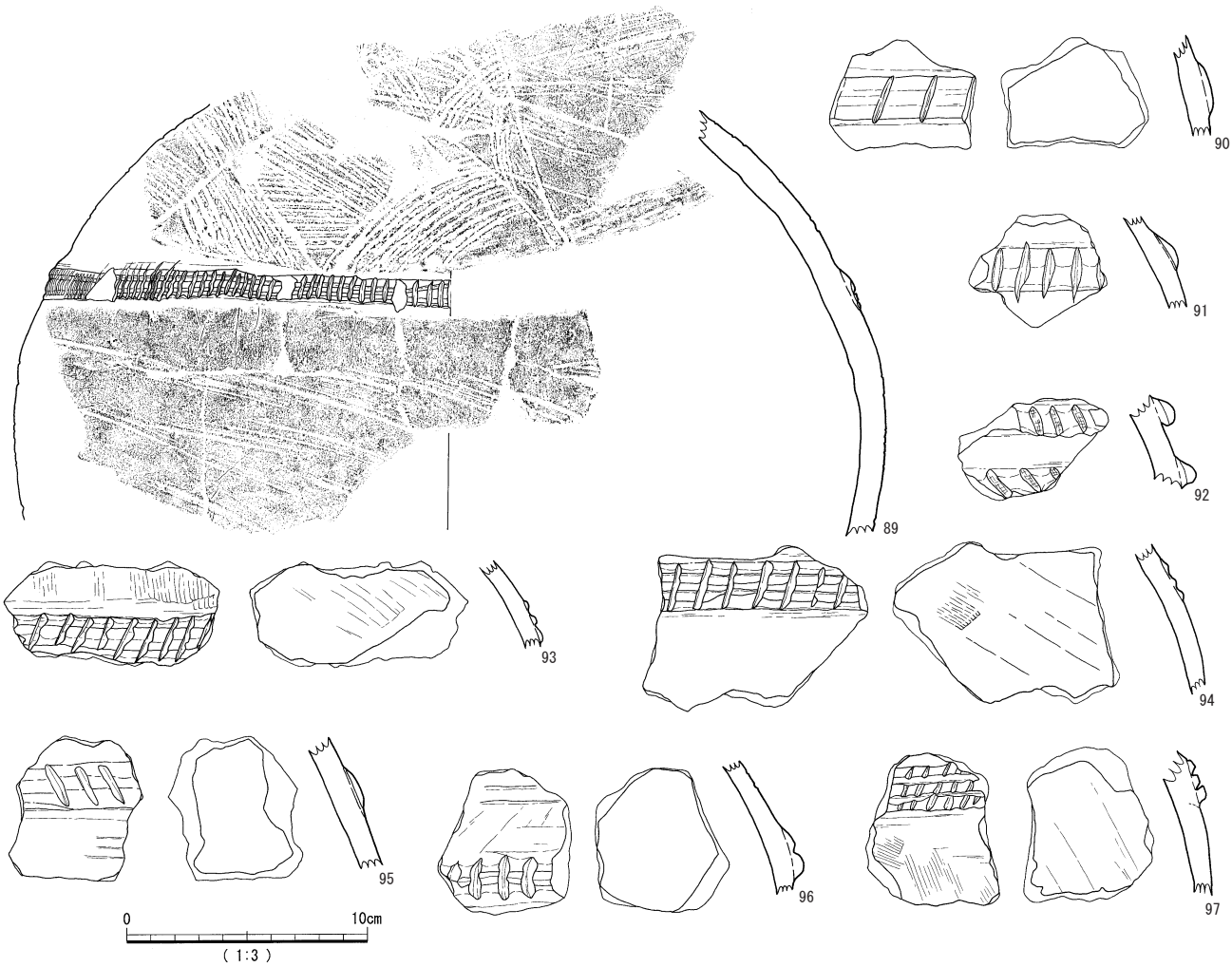
88は頸部である。内外面ともハケ調整の後，ナデ調整が施されており，胴部内面はケズリ調整である。胎土には，５㎜大の赤褐色及び灰色の円礫をまばらに含む。

89は大型壺の胴部で，上半に弧文を組み合わせた文様が沈線で描かれている。文様は，左半分ははっきりとした深い沈線であるが，右半分は沈線が浅く，文様もはっきりとしない。突帯部は，横位の２条の沈線を巡らし，その上から連続した細かい刻みを加えている。突帯以下は，浅い条痕状の斜位の沈線が施されている。文様の特徴から，免田式土器を模倣したと考えられる。胎土には，３㎜大の白色の円礫を多く含む。

90～97は突帯である。90は薄く幅広に貼り付けた突帯にヘラ状工具で刻みを施している。突帯をナデ調整で平坦に仕上げている。91は断面かまぼこ状に貼り付けた突帯の上に，ヘラ状工具で深い刻みを施している。92は



第23図　竪穴建物跡３号・土器溜３出土の土器（２）



第24図　土器溜３出土の土器（２）

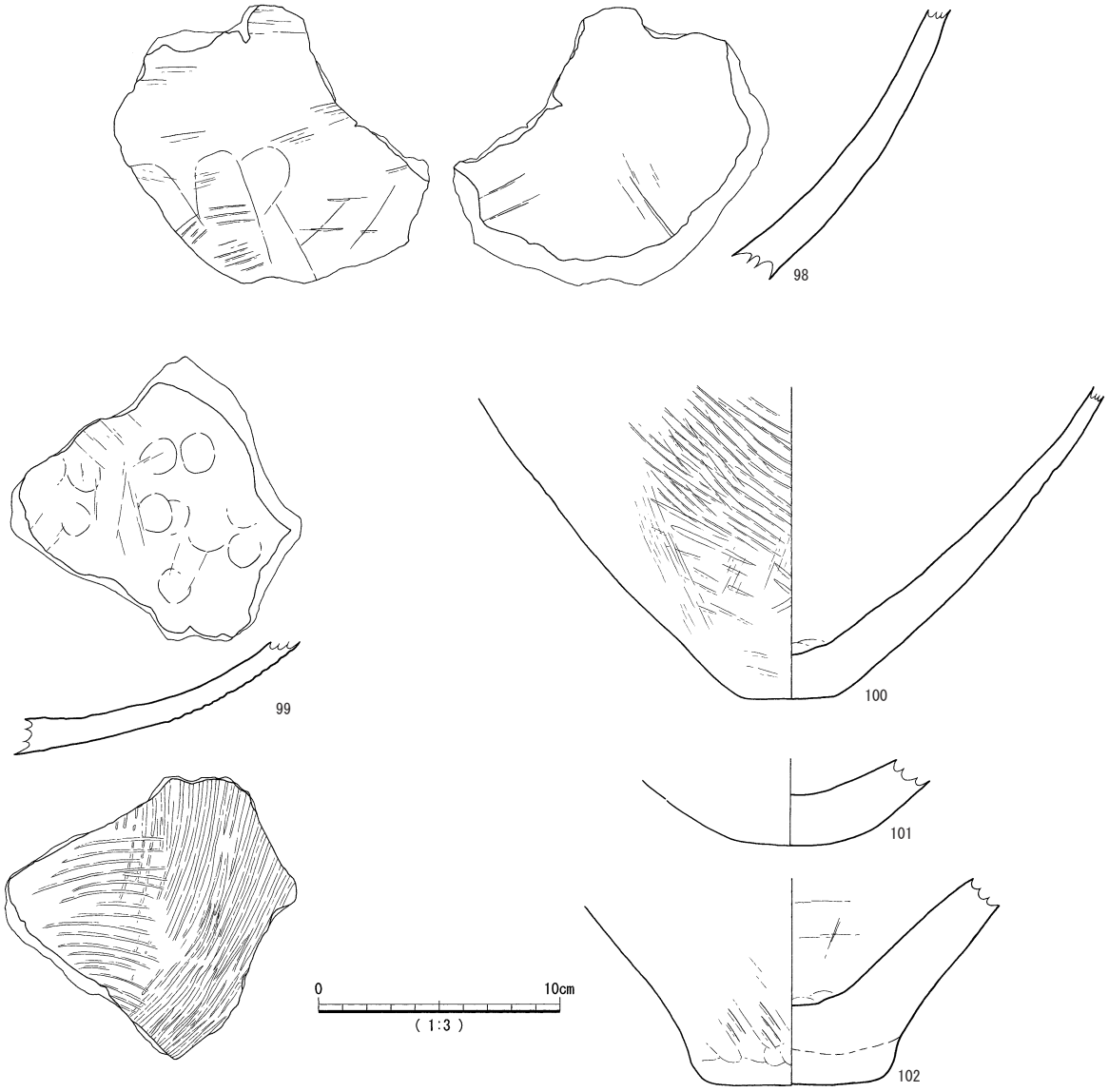
粘土紐を２条貼り付け，その上から布目刻みを施している。胎土には金雲母が目立つ。93は薄く幅広い突帯に凹線を２条巡らせ，斜位の刻みを施している。内外面ともハケ目が残り，内面はやや幅広である。94は，幅広く薄く貼り付けた突帯に横位の２条の沈線を巡らせ，ヘラ状工具で刻みを施している。突帯は沈線により，見かけ上は３条突帯状をなす。内外面ともナデ調整を主とするが，内面には部分的にハケ目が残存する。95は薄く幅広に貼り付けた突帯にヘラ状工具で刻みを施している。外面には，わずかにタタキ痕がみられる。96は幅広く貼り付けた突帯に横位の沈線を１条巡らし，２条突帯状をなしている。その上から，押圧に近い深い刻みを施している。外面はタタキの後，複数方向からナデ調整が加えられている。97は幅広い突帯に深い横位の沈線を２条巡らし，その上から刻みを施している。沈線が深いため，見かけ上は３条突帯状をなす。

98・99は底部付近の胴部片である。98はケズリにより平坦面を作出した後，細かいタタキを加え，さらにナデ調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整により平滑である。99は丸底甕の可能性もあるが，本遺跡で出土しているものに比べて器壁が厚いため，壷形土器に含めた。外面には細かいタタキが複数切り合っており，底面付近は縦位になる。内面は連続した浅い指頭押圧で成形されている。

100～102は底部で，100・102は平底，101は丸底である。100は外面にはタタキ痕が明瞭に残っている。外面のタタキ調整は左上がりを主体として複数回の切り合いがあり，タタキの単位は幅広である。また，底部付近はタタキの後にハケナデ調整が加えられている。内面は摩滅しているが，内底面は指頭押圧が残る。101は底部がレンズ状になる。胎土は砂粒が多く，器壁も厚い。102は厚手で重く，底面は面状をなすが細かい凹凸があるため安定しない。底面付近は強めの縦位のユビナデで成形され，その上からタタキ調整が加えられている。

高坏形土器（103～105）

103は坏部片である。屈曲部から緩やかに外反し，口唇部は細く舌状を呈する。内外面とも摩滅しており，胎土に含まれる２～３㎜大の長石及び白色礫が露出してい



第25図　土器溜３出土の土器（３）

る。口縁部が屈曲部から直線的に立ち上がる。

104は小型の脚部で，器壁は薄い。坏部との接合部分で，剥落している。接合面には，放射状の細かい刻みが施されており，坏部との接合のしやすさを意識したものと考えられる。全体的に摩滅しており調整は不明であるが，色調は赤みが強く，赤褐色の微細な砂粒を多く含む。105は脚部が長く中実のタイプで，重量がある。坏部の接合部及び屈曲部境界で上下とも剥落している。外面は縦位のナデ調整により面状をなしており，上端付近は横位のナデ調整である。

蓋形土器（106・107）

106は端部にスス痕が残る蓋である。製作技法は高坏と同様であるが，端部の反りが弱い点や，胴部のケズリが粗い点などから，蓋として機能したと考えられる。接合痕が明瞭で，段状をなしている。107は口縁部片である。外面には横位の粗いケズリ調整が連続して加えられている。内面は丁寧なナデ調整で，上部の屈曲部から器壁が薄くなる。口縁端部にはスス痕がわずかに残っている。

小型土器（108～110）

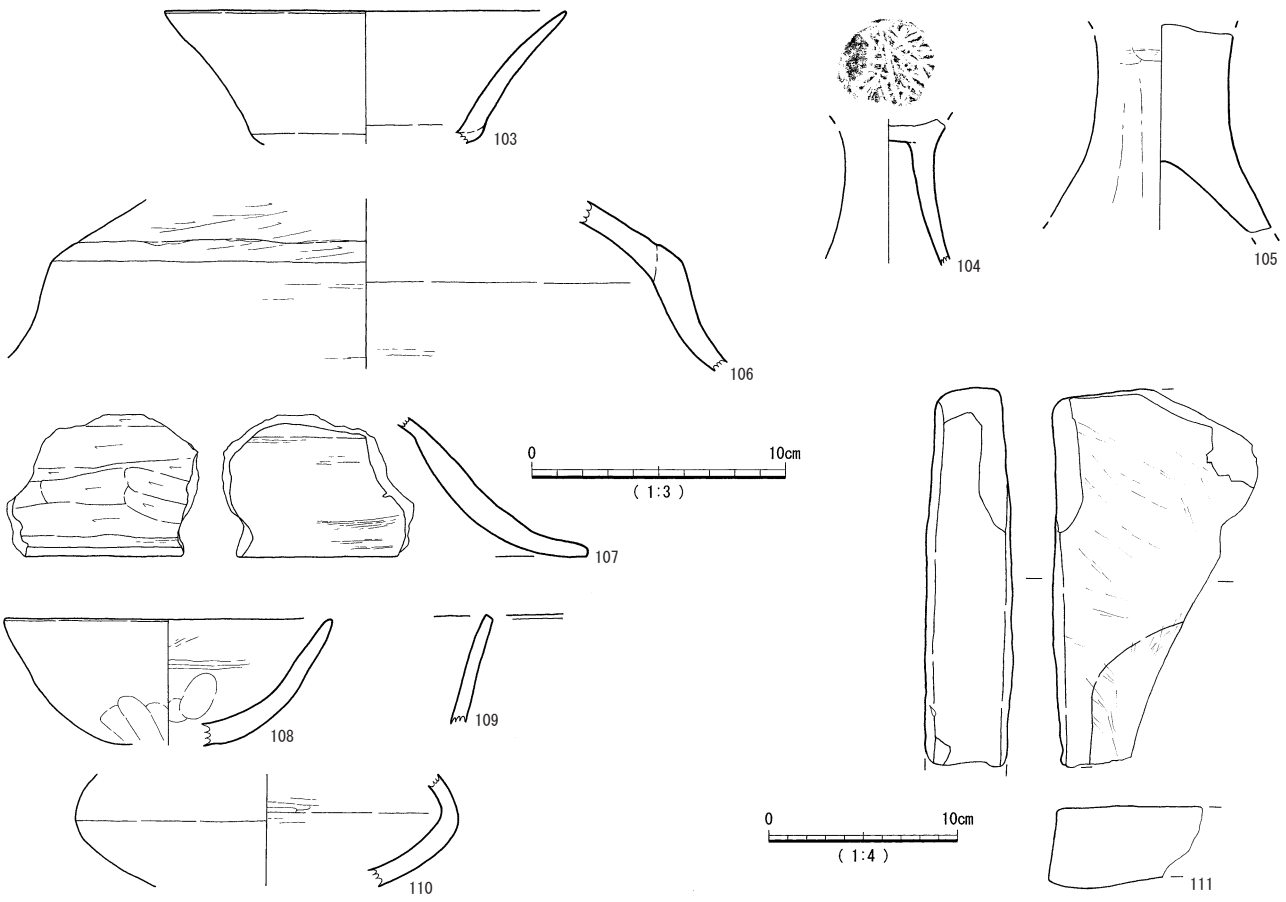
108は小型の鉢の口縁部～底部付近である。内面には部分的に条痕状のハケ目が残存し，底部付近は内外面ともユビナデ調整である。

109・110は小型丸底壷である。109は薄手の口縁部で，口唇端部はナデ調整により方形に仕上げられている。110は胴部片である。扁平な形状で，内面にわずかにミガキ調整が残存する。器壁は厚手である。

石製品（111）

111は砂岩製砥石である。最大長20.0㎝，最大幅10.7㎝，厚さ4.3㎝，重さ1288ｇで，表・裏と側面の３面をそれぞれ一部を使用している。頂部の一部は磨石としても利用している。

図化していないが，この他に石皿１点，砥石１点，自



第26図　土器溜３出土の土器（４）・石製品

然石と思われるが摩石風のもの８点が出土している。石皿は１/３位の欠損したもので，一面を平らに使用している。安山岩製である。砥石は砂岩製の欠損したもので，一面を相当に研ぎ込んでいる。仕上げ砥である。

②竪穴建物跡４号（第27図・第28図）

Ｃ・Ｄ－26区で検出された。東側の大部分が，竪穴建物跡５号によって削平されていることから，竪穴建物跡５号より古い時期の遺構と考えられる。残存範囲で長径約５ｍ，短径約4.8ｍの円形を呈する。深さは，最大でも20㎝程度と浅く，西側は床面10㎝程度しかない。３段構造で中央部は方形を呈していると思われるが，攪乱等により消失していることから詳細は不明である。西側に短い張り出し部がある。中央部全体に炭化物が広がっており，一部焼土が残る。内部でピットが３基検出された。直径約30㎝の円形を呈し，深さ約20～30㎝である。主柱穴としては判断できなかった。

出土遺物は少なく，径が復元できたものもあるが，破片資料がほとんどであった。

甕形土器（112～119）

112～116・119は，口縁部～肩部片である。

112・113はタタキ痕が明瞭である。いずれも口唇部はナデ調整で，平坦面が作出されている。

また，両者は器形や調整が類似するが，112は口縁部が若干短く肩部が張り，113は口縁端部でわずかに外反し肩部の張りは弱い。口縁部外面から頸部まで，水平方向の幅広のタタキ調整で，条痕状をなしている。また，胴部内面はいずれも細かいハケナデ調整，頸部付近はユビナデ調整である。

114は頸部から直線的に外傾するもので，器壁は薄い。口唇部がわずかに欠損するが，細い舌状を呈している。外面は縦位及び斜位，内面は横位及び斜位を主体とする細かいハケナデ調整である。頸部内面は，丁寧な横位のナデ調整である。

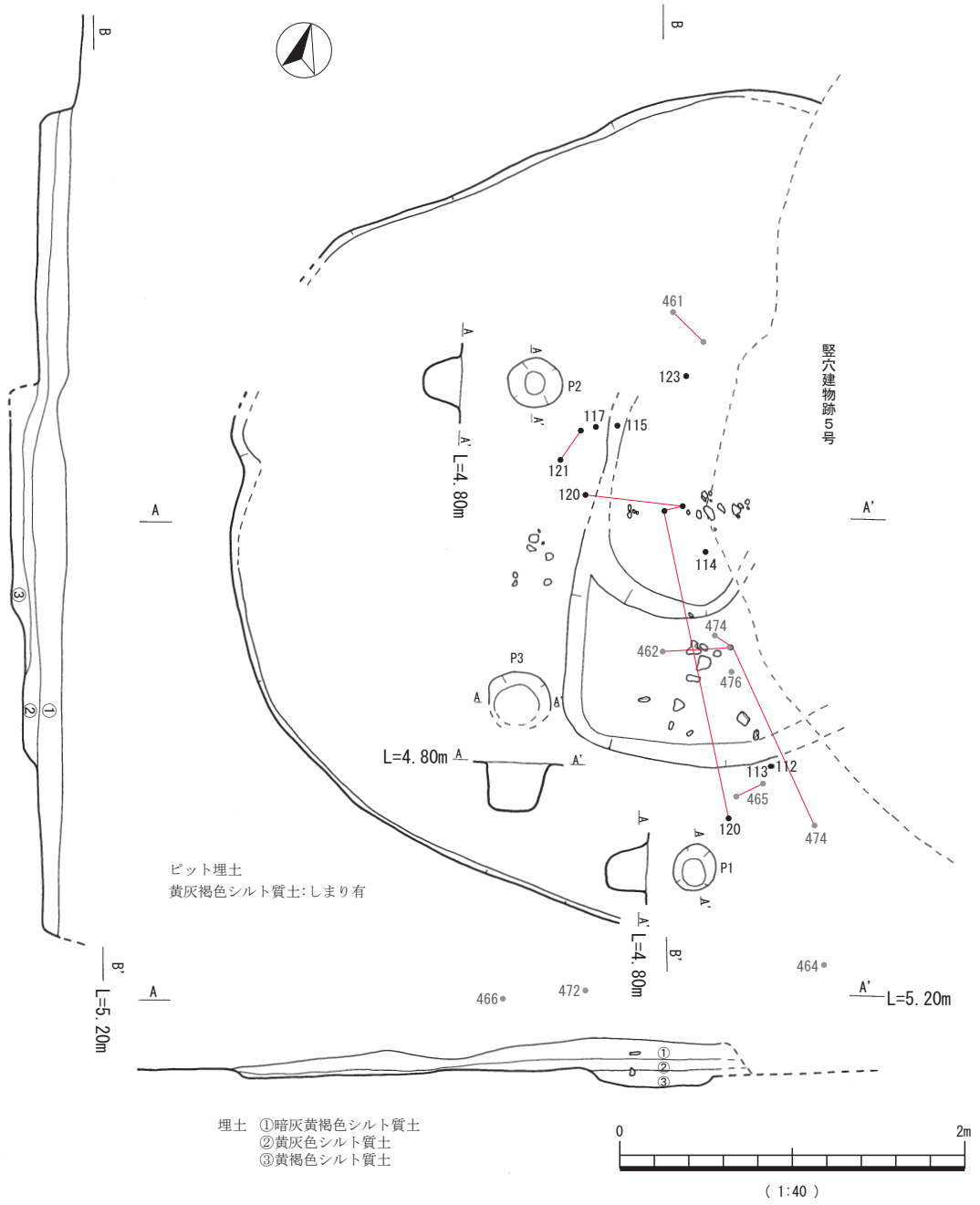
115・116・119は，口縁部がやや内弯する薄手のものである。内外面とも摩滅しているが，他の遺構の資料との比較から，長胴形になると想定される。

117・118は脚台である。117は脚台との接合部で剥落している。118は，指頭押圧による成形で，胎土に３～５㎜大の灰色・灰白色礫を多く含む。

壷形土器（120～123）

120・121は，土器溜４出土の破片と接合している。

120は胴部片で，球状の器形を呈する大型壷と考えられる。外面に水平方向のタタキ痕が残り，さらにその上か



第27図　竪穴建物跡４号の平面図・断面図

らハケナデ調整が加えられている。内面は摩滅により，薄膜状に剥落している。

121は幅広で薄い突帯が付き，その上面に浅く斜位の刻みが施されている。胴部外面は左上がりのタタキ調整で，その後ナデ調整が加えられている。内面は摩滅しているが，突帯周辺にはユビナデ調整の痕跡と思われる凹凸がある。

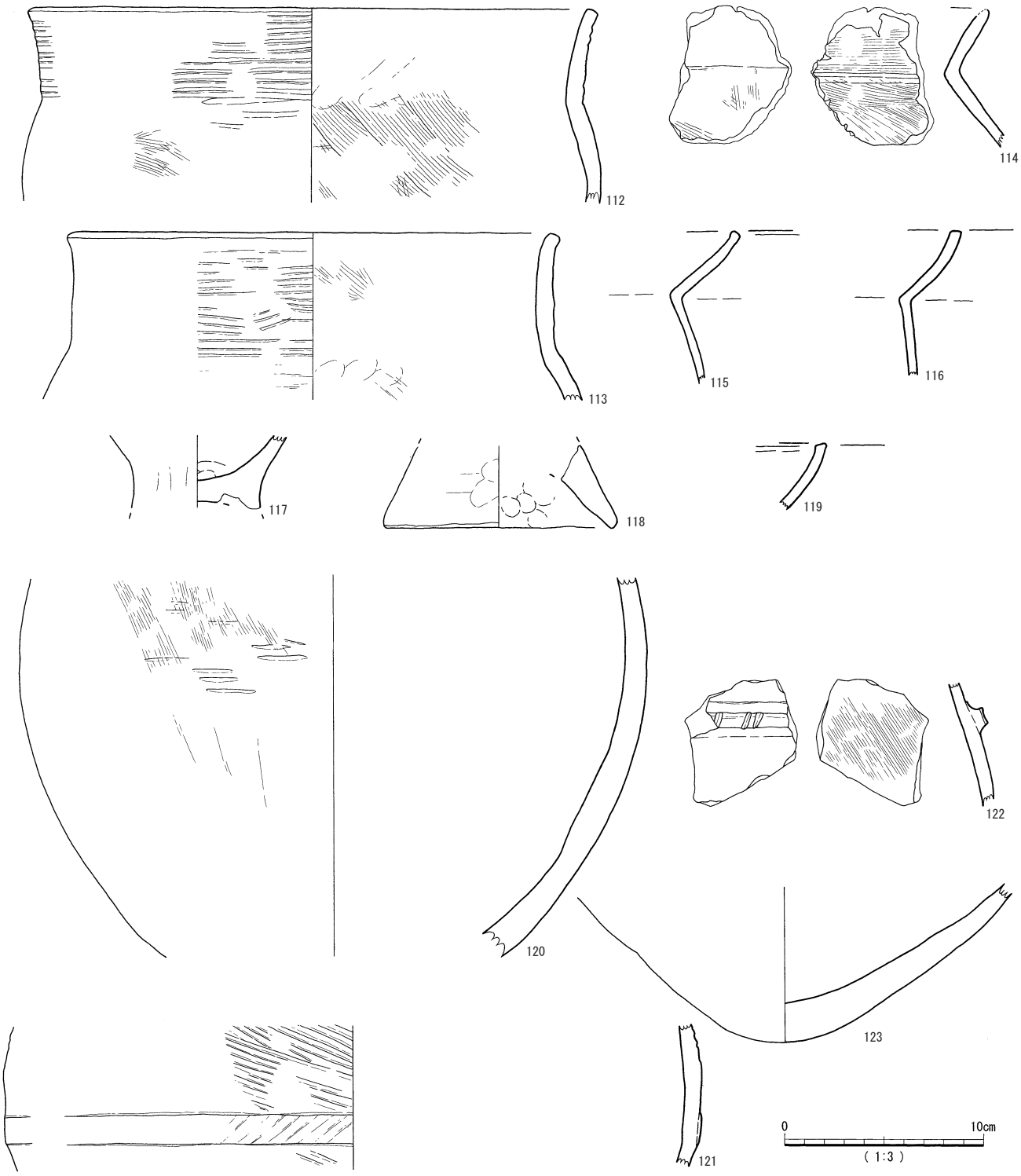
122は断面台形状を呈し，２点一組の浅い刻みを施している突帯である。

123は底部で，尖底に近い丸底である。内外面とも摩滅している。胎土には，３～５㎜大の白色礫を多く含む。

120～123は，いずれも赤みが強い色調である。

③竪穴建物跡５号（第29図～第32図）

Ｃ・Ｄ－26・27区で検出された。北側に竪穴建物跡６号が近接し，西側で竪穴建物跡４号を切っていることから竪穴建物跡４号より新しい遺構と考えられる。南東側は調査区域外へ延びているため全体形は不明であるが，残存範囲で長径約７ｍほどの円形を呈する。中央部が4.3ｍ×５ｍほど下がって２段のテラス状の構造を持つ。深さは，上段床面までが約40㎝，下段床面までが約60㎝程度である。上段には土器片がまとまって出土し，小礫を



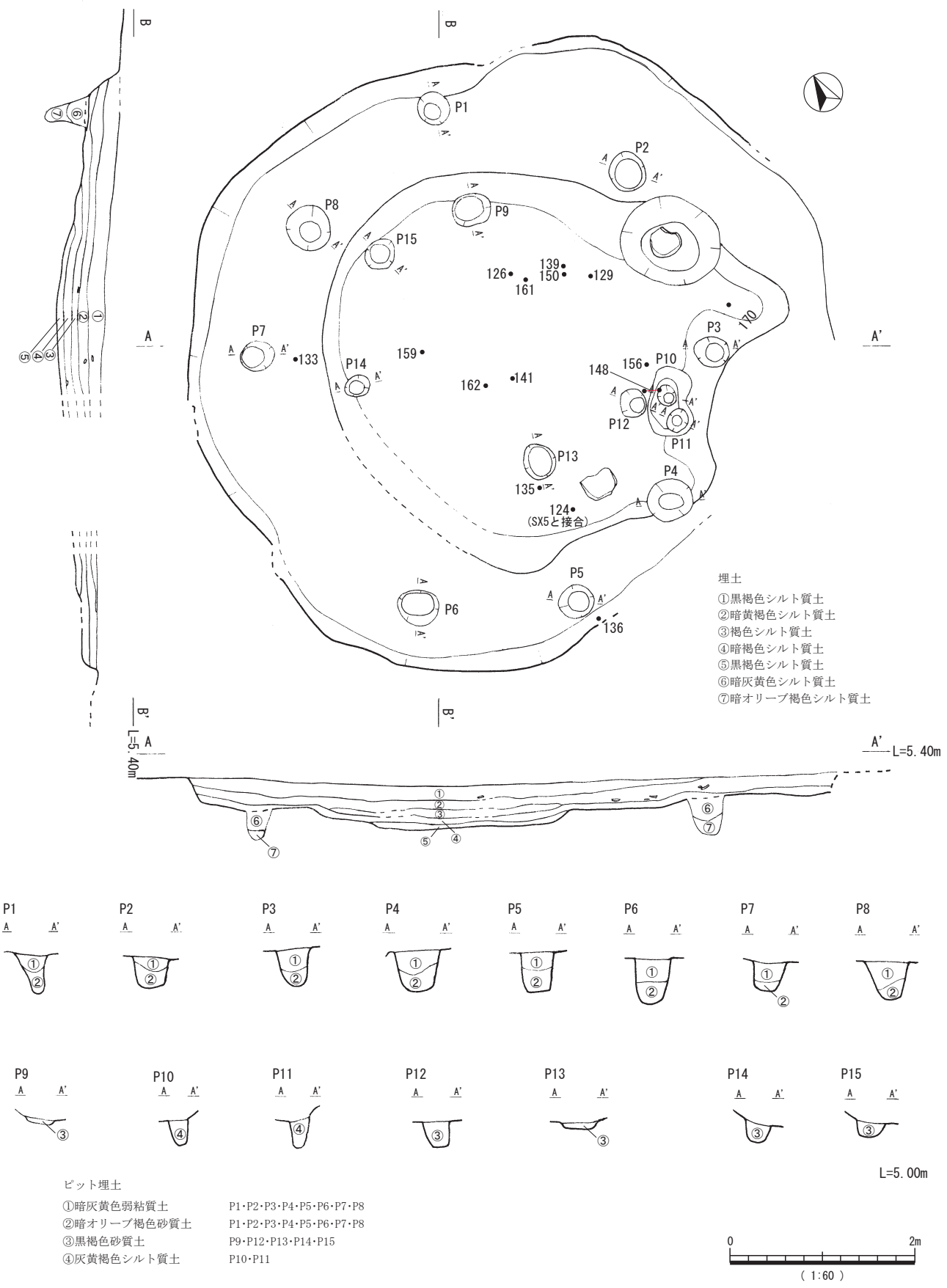
第28図　竪穴建物跡４号出土の土器

含む土砂が建物跡全体を覆っていた。ピットは，上段と下段に15基確認された。直径約40㎝～50㎝の円形を呈し，深さ約10㎝～50㎝であった。上段テラスの８個のピットはほぼ等間隔に配置され，直径約50㎝前後と大きめである。主柱穴の可能性がある。張り出し部は，検出できなかった。下段の中央部付近には，土器片・炭・焼却灰の集中域が見られた。位置的に炉の可能性も考えられるが，炉の掘り込みラインは不明瞭であった。

遺物は，いずれも破片資料であった。

甕形土器（124～140）

124は土器溜５出土の破片と接合した。肩部があまり張らず，長胴になると考えられる。胴部に左上がりの幅広のタタキ調整が連続し，条痕状をなしている。頸部から緩く外反し，口唇部付近はナデ調整によって内面側がや



第29図　竪穴建物跡５号の平面図・断面図

や凹む。器面は摩滅しているが，頸部内面はユビナデ，胴部はケズリのちナデ調整が施されている。胎土には１～３㎜大の長石及び白色礫を多く含み，やや赤みを帯びた明るい色調である。

125～131は口縁部片である。

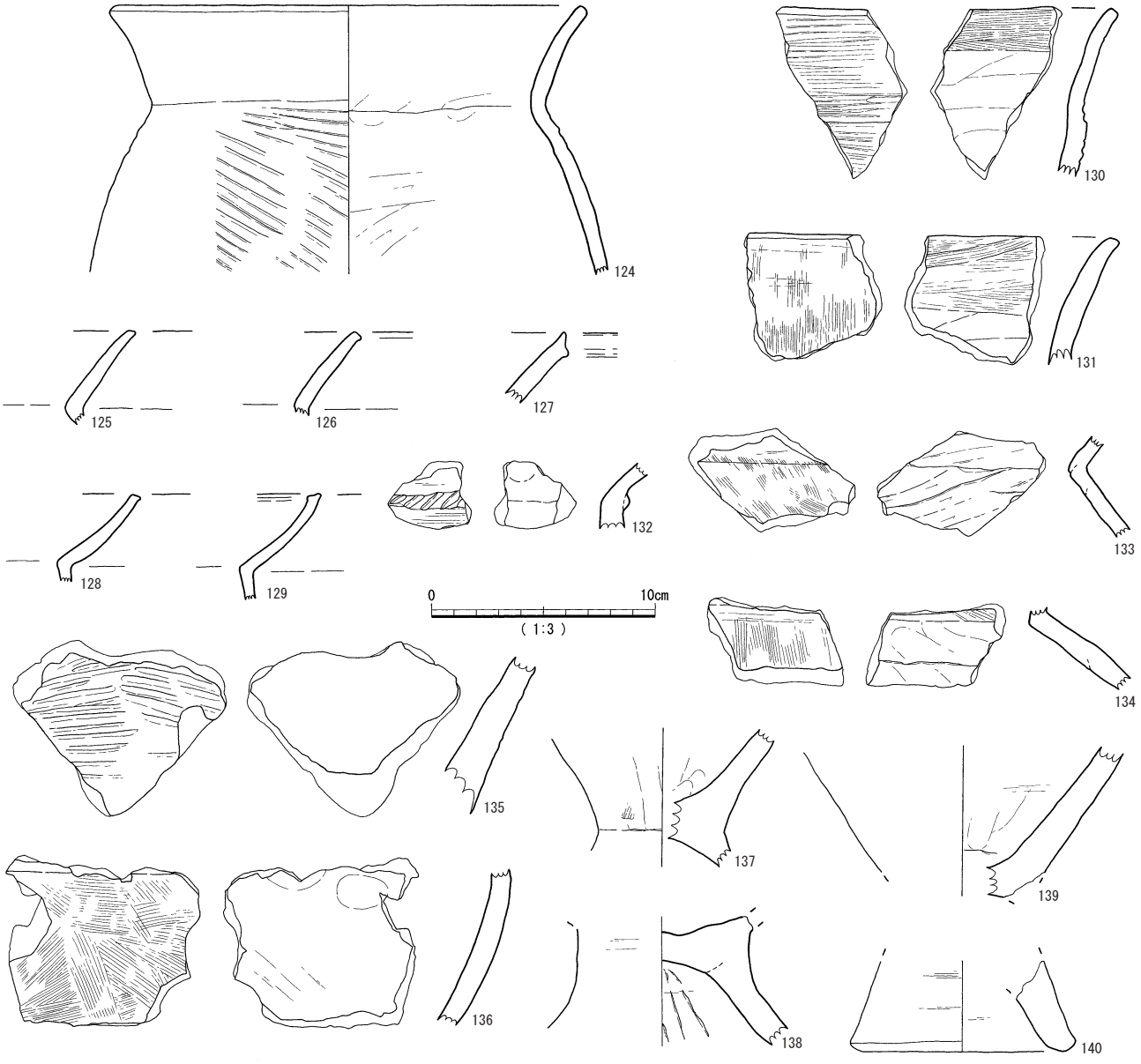
125・126は，屈曲部から直線的に外傾し，口唇部はわずかに平坦面を有する。126は，内外面とも斜位のハケナデのち横位のナデ調整が加えられている。両者とも，２～３㎜大の胎土中の長石粒が多く露出する。127は直線的に外傾し，口唇部は強い横位のナデ調整によって断面が二叉状を呈する。内外面とも摩滅しているが，内面にわずかにハケ目が確認できる。

128・129は，口縁が内弯するものである。129は，口唇部がナデ調整により内外面とも張り出す。内外面とも摩滅し，薄膜状に器面がはがれている。

130は水平方向の細かいタタキが明瞭である。頸部に段を有し，口唇部付近までタタキ調整が連続して施されている。口唇部はナデ調整により，平坦面を有する。また，口縁部付近の内面側は，細かい横位のハケで，下位はユビナデ調整である。131は比較的厚手で，口縁部が緩やかに外反する。外面はいわゆるカキアゲ口縁で，口唇部付近に横位のナデ調整が加えられる。内面上半は，細かいハケナデ調整が斜位に加えられている。胎土に，３～５㎜大の暗褐色の円礫をまばらに含む。

132～134は頸部から肩部である。

132は在地土器の中ではやや新しい様相の突帯付き甕形土器と考えられる。屈曲部分に断面三角形状の突帯を１条巡らせる。



第30図　竪穴建物跡５号出土の土器（１）

133・134は胴部が張り出す器形である。

133は外面の細かいハケ目が明瞭で，屈曲部上位まで及んでいる。内面側は接合痕が残り，粗いケズリ調整ののち，ナデ調整が加えられている。胎土に５㎜大の長石の角礫をまばらに含み，断面に露出する。134の外面は縦位のハケナデ調整で，屈曲部付近のみ横位のナデ調整である。内面の屈曲部上位はハケ目がみられ，屈曲部下位は接合痕付近を中心にユビナデ調整が施されている。

135は胴部片である。器壁は厚く，外面には幅広のタタキ調整が施される。タタキは水平方向を基本に，若干左右に傾く。土器溜７等で出土している，平底で厚手の甕形土器の可能性がある。

136は，頸部の屈曲がわずかに残る。外面に斜位を主体とした複数のハケナデ調整を施す。内面も丁寧なナデ調整で，頸部付近は幅広の指頭押圧で成形されている。厚手である。

137～140は胴部～脚台である。

137は径がやや小さい脚台で，外面の屈曲部には成形時の縦位のナデ調整により小段が生じている。138は胴部への立ち上がり付近で剥落している。内面には，成形時の工具痕が縦筋状に複数残存する。胎土には砂粒を多く含む。139は脚台との接合部で剥落している。外面は摩滅し，膜状に剥落しているが，内面には縦位のユビナデ調整がみられる。胎土に砂粒を多く含む。140は，器壁が厚く低いタイプである。胴部との接合部で剥落しており，139のような胴部と接合すると考えられる。内外面とも横位のナデ調整で，端部は丸く，やや外側に反る。胎土には，金雲母及び暗灰色の円礫をまばらに含む。

壷形土器（141～156）

141は口縁部が大きく内弯し，袋状口縁の二重口縁壷である。口唇部は平坦でやや内傾し，頸部外面の屈曲部付近には縦位のハケ目がみられる。

142・143は，口縁部が断面三角形状に肥厚している。142は胎土に砂粒をほとんど含まず軟質であるが，143は砂粒を多く含む。143は突帯状に粘土を貼り付けて成形されており，二叉状口縁に近い。

144・145は頸部である。いずれも胴部との境界の屈曲部に突帯が１条巡り，斜位の刻みが施されている。144の形状から，二重口縁壷の頸部と考えられる。また，突帯が付される前に縦位のハケナデ調整が施されている。

146～154は突帯である。形状から，壷形土器に伴うものと判断した。146・148・150は幅広の薄い粘土帯を１条巡らせるもので，146は格子状の，150は斜位の浅い刻みが施されている。いずれも，突帯裏の内面には指頭押圧やユビナデ調整が施されている。また，146は突帯の上下は調整がほとんど加えられず，波打っている。147は断面カマボコ状の１条の突帯に押圧による刻みが施される。151～153は幅広の突帯に横位の沈線を数状巡らせ，多条突帯状を呈するものである。149・151は複数に分割した突帯に同時に押圧状の刻み，153・154は沈線状の刻みが施されている。また，152は胴部にハケ目が鋸歯状に施される。

141・144・145・148・150・156は，いずれも胎土に２～３㎜大の白色礫を多量に含み，赤みの強い色調を呈している。また，148・156は特に砂粒が大きく，胎土が粗い。

155・156は底部で，155は平底，156は尖底に近い丸底である。155は小型の壷と考えられるが器壁は厚く，ユビナデ調整である。

高坏形土器（157～164）

157・158は屈曲部から緩く椀状に立ち上がるタイプである。157は屈曲部の稜が緩く，全体的に厚手である。また，胎土はマーブル状を呈し，３～５㎜大の灰褐色円礫をまばらに含む。158は器壁が薄く，屈曲部の稜線が明瞭で，口縁部は外反する。

159～164は脚部である。

159は坏部との接合部で剥落しており，下半は緩やかに開く器形である。外面の器面調整は，上部は横位のミガキ調整，その下部は縦位のハケナデ調整，屈曲部以下は横位または斜位のミガキ調整と，部位により異なる。内面側は数段の接合痕が明瞭で，筒状に成形した際の縦シワが数条みられるなど，外面に対して調整が粗い。160・162は屈曲部から広がる器形で，内面の稜は明瞭である。160の外面は縦位のミガキ調整を主とし，その後横位のナデ調整が加えられている。内面はケズリ様の強いナデ調整で，屈曲部の稜も明瞭である。161・163はやや小型のものである。161は中空かつ長脚で，内面上部に粘土を充填した際の張り出しがみられる。胎土は軟質で，マーブル状を呈する。163は器壁が厚く，162の形態に近いと考えられる。胎土は157に類似する。162は内外面とも摩滅により調整は不明瞭であるが，坏部との接合部分に刻みが施されている。胎土には，３～５㎜大の灰色の円礫をまばらに含む。164は内面が強いユビナデ調整によって成形されており，器面に凹凸が生じている。端部には，穿孔が部分的に残存する。

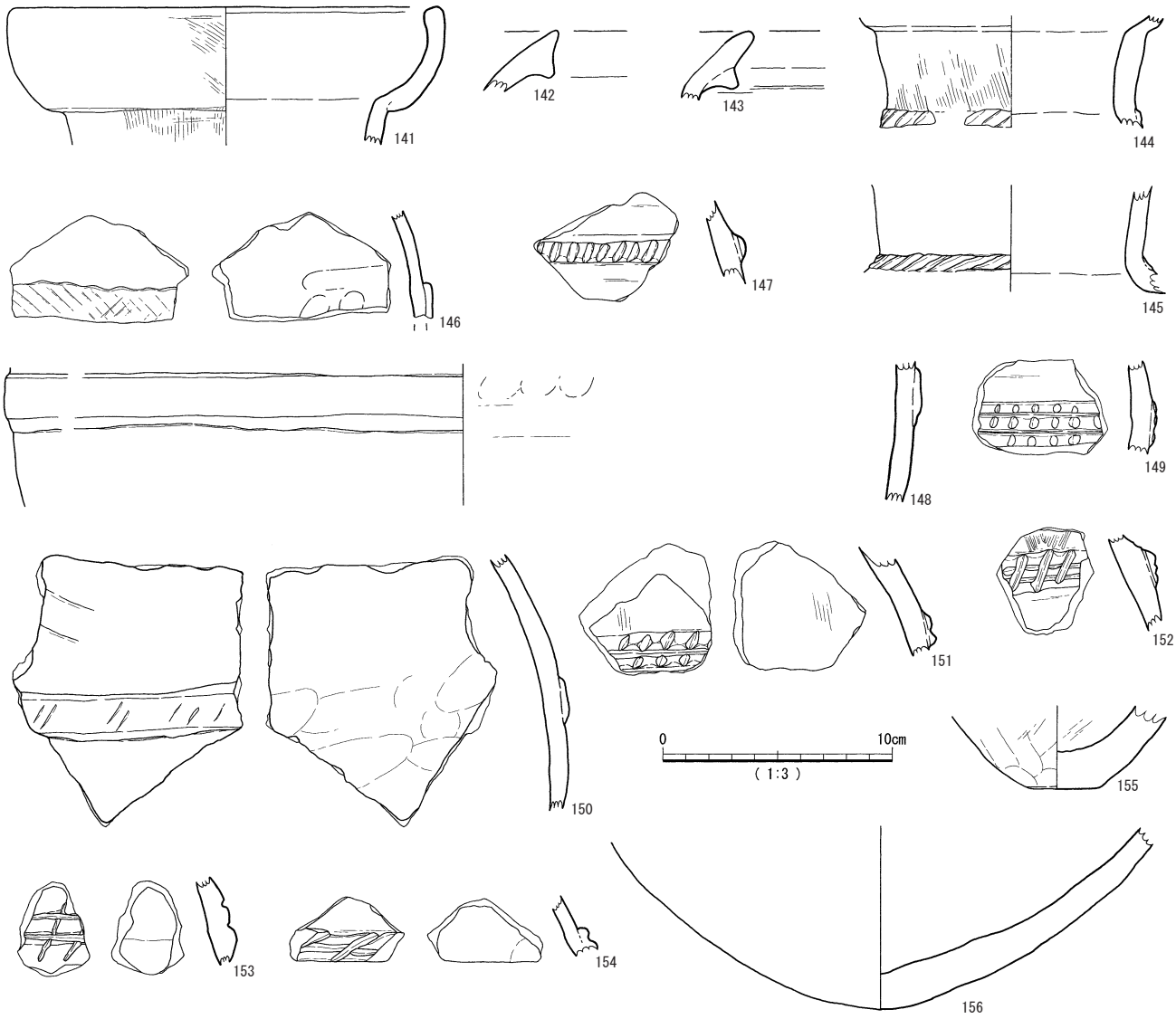
小型丸底壷（165～168）

165は口縁部片である。器壁は薄く，屈曲部から直線状に口縁部は延び，口唇部は細い舌状を呈する。胎土は軟質で，砂粒をほとんど含まない。

166～168は胴部・底部と考えられる。いずれも外面は摩滅しているが，内面にユビナデ調整が残っている。167は肩が張り，肩部がほぼ最大径となる。外面は摩滅しているが，内面はユビナデ調整である。168の器壁は厚手で，完全な丸底である。内面にわずかに屈曲部分が残存する。

蓋形土器（169）

169は蓋のつまみ部分と考えられる。上部は平坦で厚み



第31図　竪穴建物跡５号出土の土器（２）

があるが，胴部の器壁は薄手で，外面にわずかに縦位の幅広のハケ目が残存している。被熱により，外面は赤変している。また，胎土には３㎜大の石英，灰白色・褐色の円礫を含む。

免田式土器（170）

170は免田式土器の長頸壺と考えられる胴部片である。屈曲部に横位の沈線数条と，屈曲部上位に重弧文が描かれている。胎土は軟質で，砂粒をほとんど含まない。

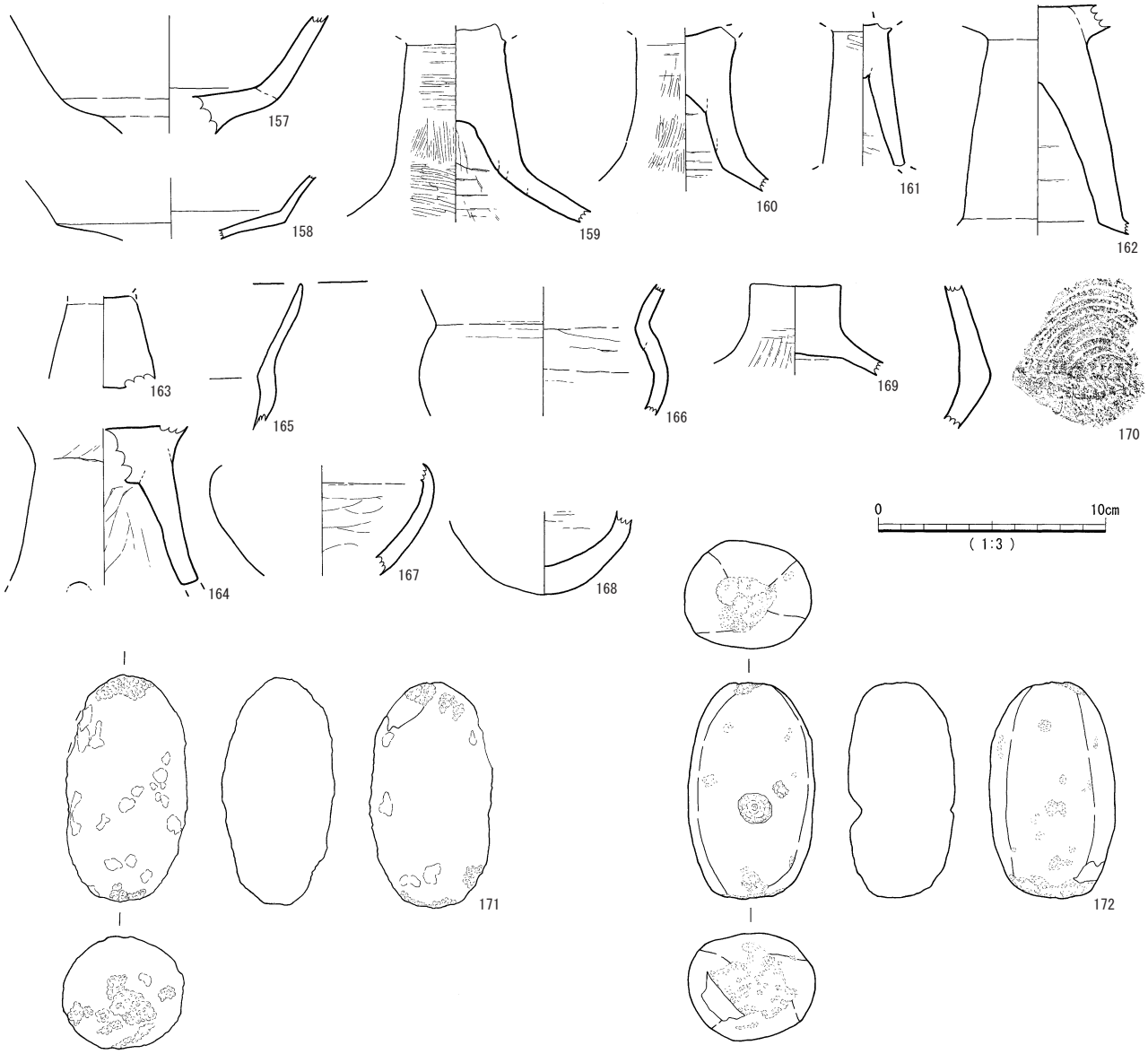
石製品（171・172）

171と172は敲石である。171は花崗岩製で，楕円形を呈し，最大長10.0㎝，最大幅5.3㎝，最大厚5.0㎝，重さ352ｇである。石材のため表面の剥落が目立ち，長軸の両端に打痕が残っている。172は砂岩製で，楕円形を呈し，最大長9.5㎝，最大幅5.6㎝，最大厚4.7㎝，重さ296ｇである。側面は磨石として用い，平坦面の両面にはくぼみがみられることから，くぼみ石としても使用している。長軸の両端に打痕が残っている。

図化していないが，他に石皿１点と台石１点が出土している。石皿は隅丸長方形の周辺を整えたもので長辺が半分ほど欠けている。残存長23㎝，幅34㎝，厚さ８㎝ほどの安山岩製である。台石は径32㎝ほどの円形をしたもので，一部が欠けている。紡錘形をしており，厚さ９㎝ほどである。安山岩製である。

④竪穴建物跡６号（第33図～第42図）

Ｄ－26・27区で検出された。長径約5.8m，短径約５ｍの楕円形を呈す。張り出し部はない。南側に竪穴建物跡５号，北側に竪穴建物跡７号が隣接する。３段のテラス構造であり，１段目・２段目とも深さは約10㎝で，明瞭な貼床は見られなかった。２段目は3.9m×3.2mの，３段目は1.4m×1.1mの不整楕円形を呈している。中央部付近の窪地状の範囲に土器片と礫が混ざり合ってまとまり，



第32図　竪穴建物跡５号出土の土器（３）・石製品

北側と南側に面的に広がっている。中央付近の埋土は，周辺のⅡc－２層の腐植土であり，河川作用により流れ出た土砂とともに運ばれてきた遺物が堆積した可能性がある。１段目と２段目で，ピットが11基検出された。ピットは直径20～40㎝の円形を呈し，深さは20～50㎝である。主柱穴ははっきりしない。

中央部部分の土器集中部分の下から炭化材が出土したため，そのうち３点の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。年代値は，弥生時代後期頃に相当する結果となった。樹種同定結果は，クリ近似種と広葉樹であった。

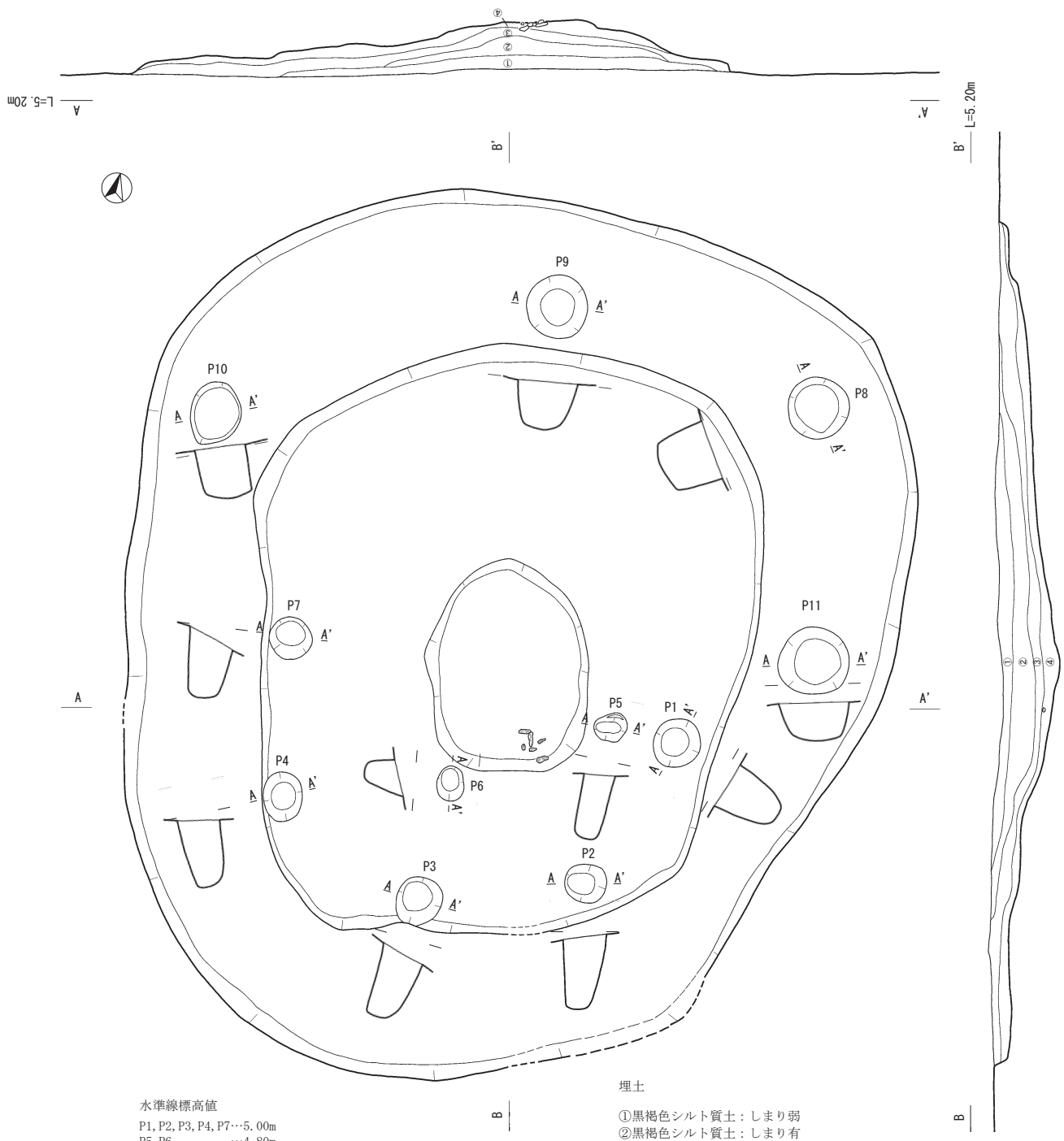
遺物は壷形土器の良好な資料が得られた。特に，216は欠損部位がない完形資料である。また，いずれも胴部最大径が17㎝前後，器高が30㎝前後と壷形土器の中でも中・小型であり，他の遺構ではあまり類例がない資料である。

貝殻が狭い範囲にまとまって出土した。すべて白く変色し，完形のものもあるが，欠損したものも多い。正確な点数は不明だが100点足らずである。貝種はアサリが３点あるほかは多くが巻貝である。特に多いのはオオコシダカガンガラやマガキなどで，それぞれ30点ほどづつあり，他にニシキサザエ・リシケナサバイ・タマガイ・マキギヌなど岩礁性海岸で採取できる貝がある。

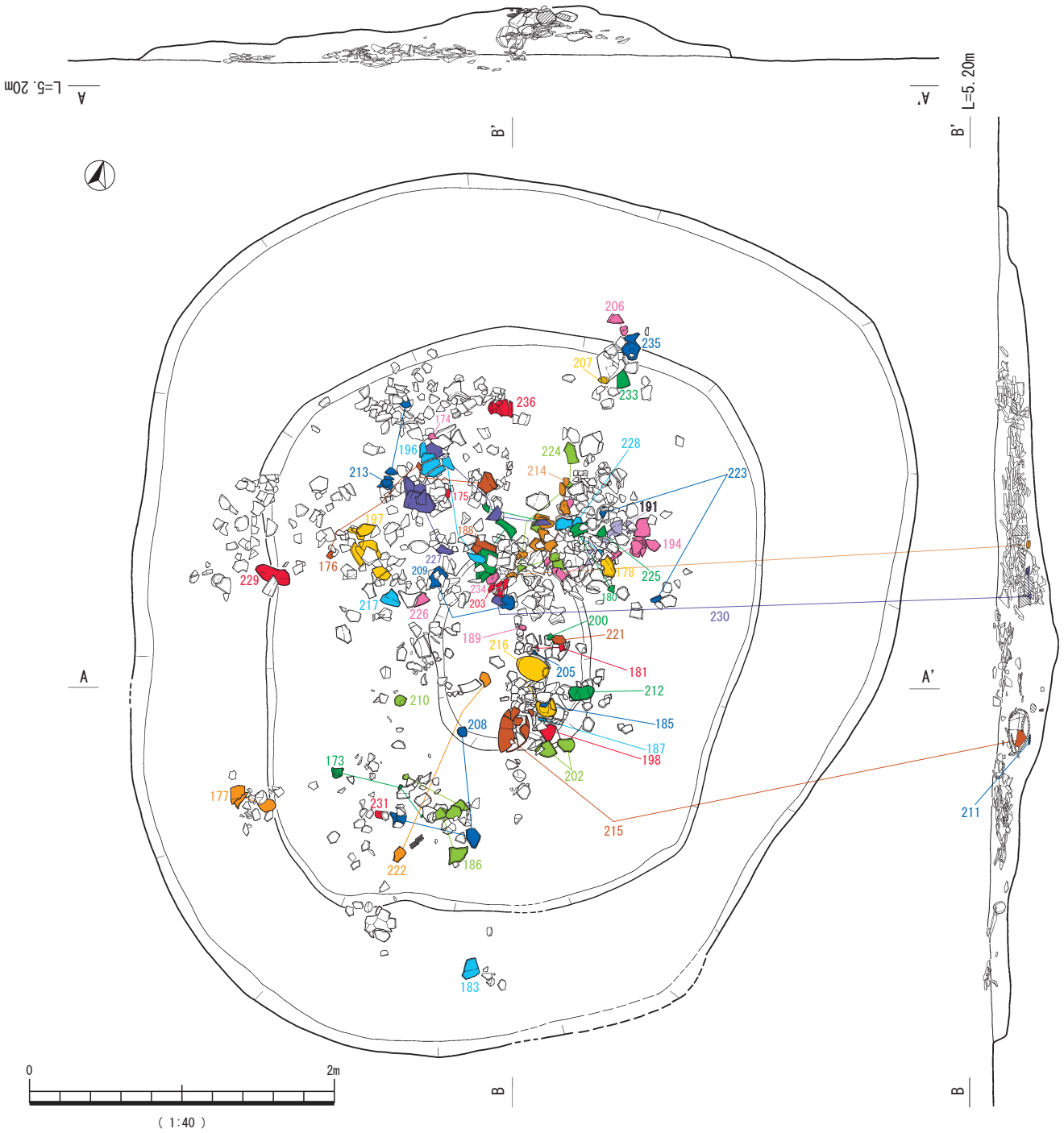
甕形土器（173～214）

丸底甕と脚台付甕とがあるが，丸底甕が多い。丸底甕は器形が長胴のものと，丸みをもつものとに分かれる。雑な作りの小型のものもある。

173～185は比較的薄い作りで，長胴形の器形をし，丸底となるものと思われる。比較的口縁部が短く，外反する度合いが強い。173～181は口縁部がまっすぐ外へ開くか，やや内弯し，胴部が緩やかに膨らむ長胴形を呈す



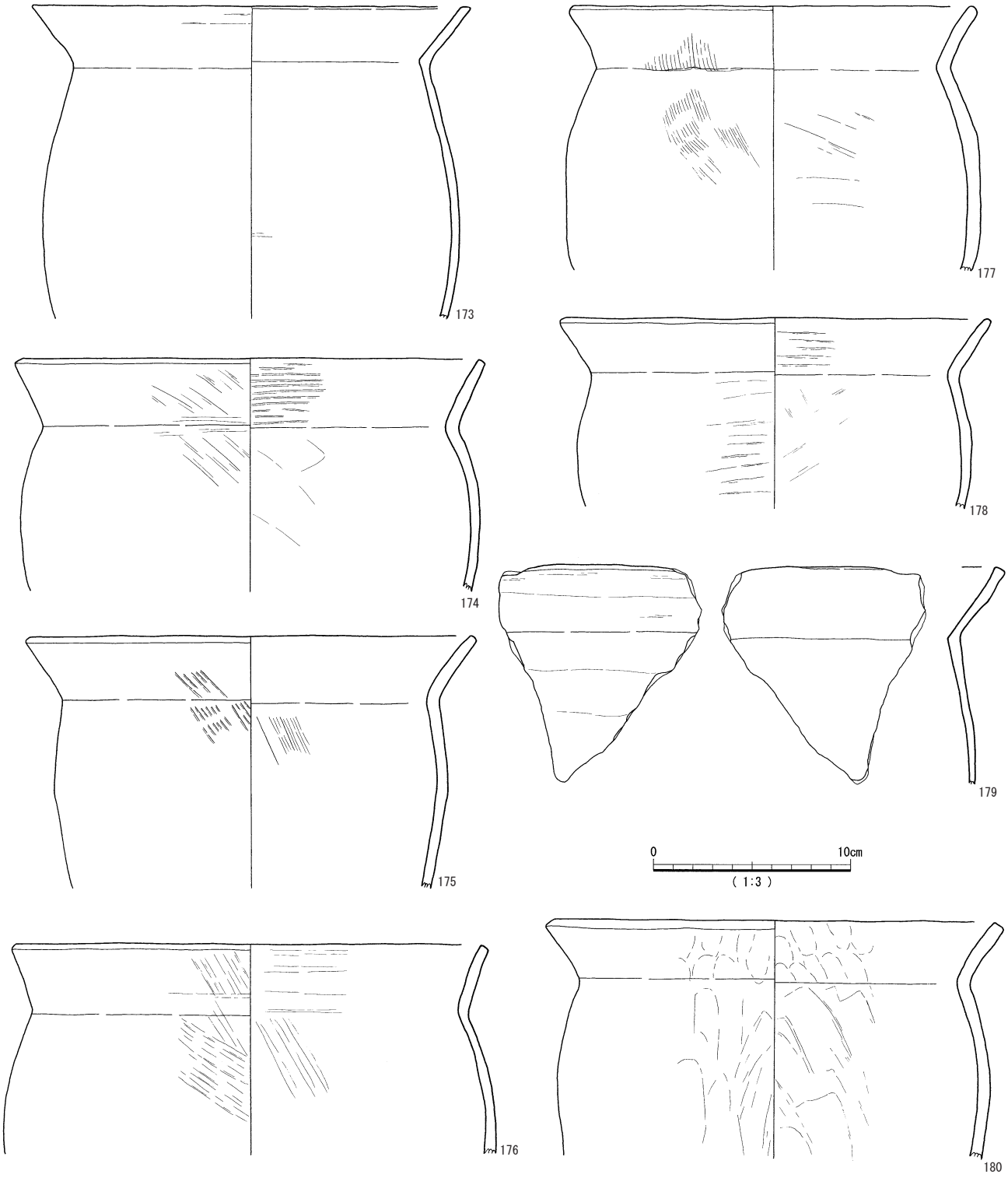
第33図　竪穴建物跡６号の平面図・断面図



第34図　竪穴建物跡６号の土器出土状況・断面図

る。器壁は薄く，薄膜が剥がれるように摩滅する点が共通する。いずれも，口縁端部は平坦面が作出されており，外面側にわずかに張り出す。頸部の稜は，内外面とも比較的明瞭である。また，頸部直上と口唇部下が横位のナデ調整によってわずかに凹んでいる。口縁直径は20.8cm～24.2cmである。

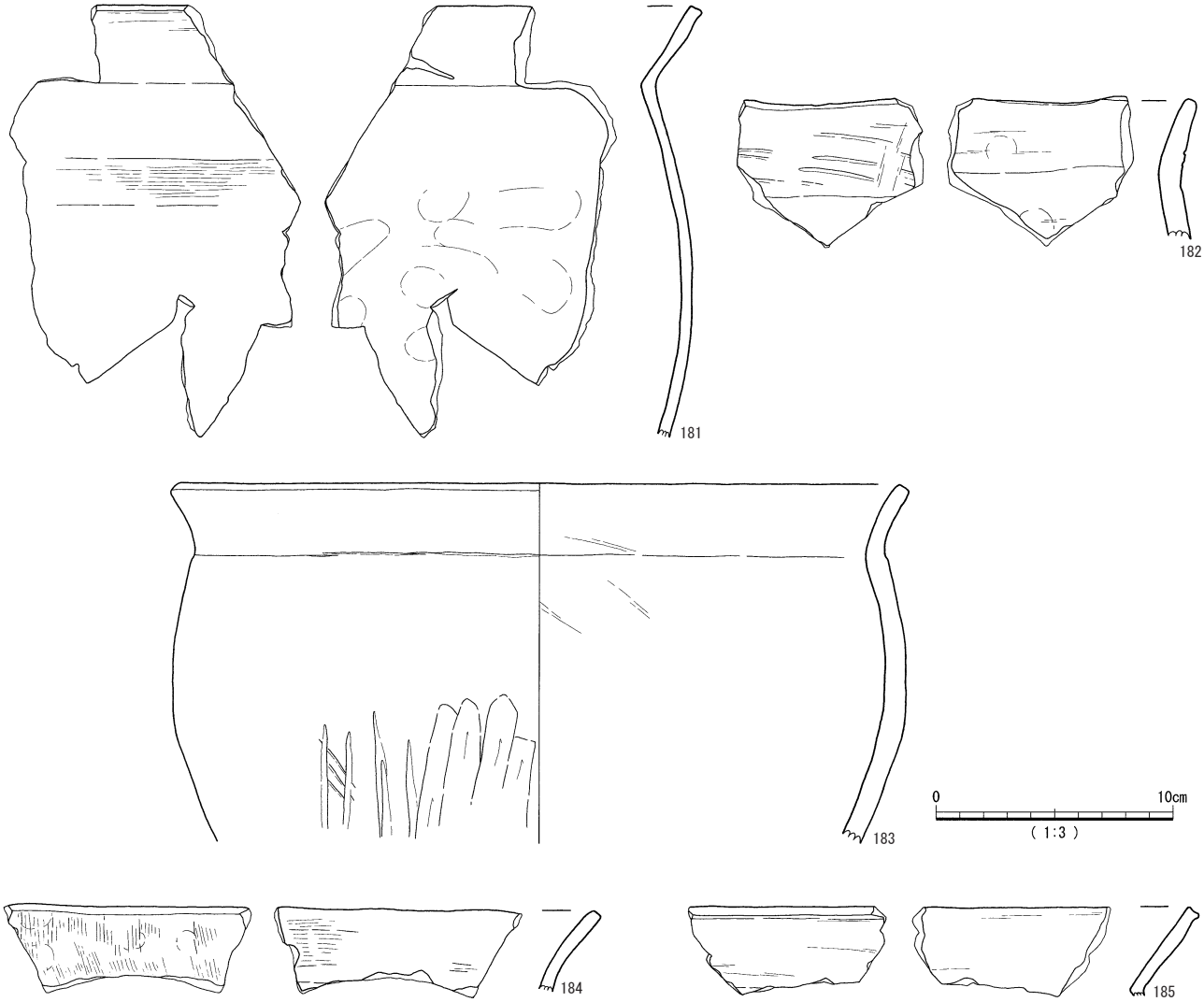
173～178は口縁部がほぼまっすぐ外へ延びているが，176が傾きが弱いのに対し，他はやや強く傾いている。173は薄い作りだが，177は厚く，いくらか丸みをおびている。179は薄い作りで，口縁部がやや内弯ぎみである。頸部の屈曲は鋭い。横位のナデ調整が部分的に残っている。180も口縁部から胴部までやや分厚い作りである。181は摩滅が目立つが，調整痕が部分的に残っており，胴部外面に帯状の横位のナデ調整がみられる。また，内面は指頭押圧状のユビナデ調整により細かい凹凸が生じている。182は口縁部が直口する。タタキ調整がみられる。



第35図　竪穴建物跡６号出土の土器（１）

183は口縁部が短く，頸部にはハケ状工具の押圧により細かい段が生じている。胴部下半は下から上へのケズリ調整が施され，部分的に幅広の面状をなしている。また，部分的にタタキ痕が残存しており，成形はタタキ調整と考えられる。184は，外面は縦位，内面は横位のハケナデ調整である。指頭押圧による成形のため，厚みが一定ではなくやや凹凸がある。185は口縁端部が外傾するもので，181に類似する。

186～189は丸みをおびた器形をしている。186は口径27.8㎝で，頸部内面は稜をなして口縁へ外反し，丸みをおびた胴部である。外面は斜方向タタキ整形のあと，ケズリやナデで仕上げ，薄い作りとなる。かきあげ口縁



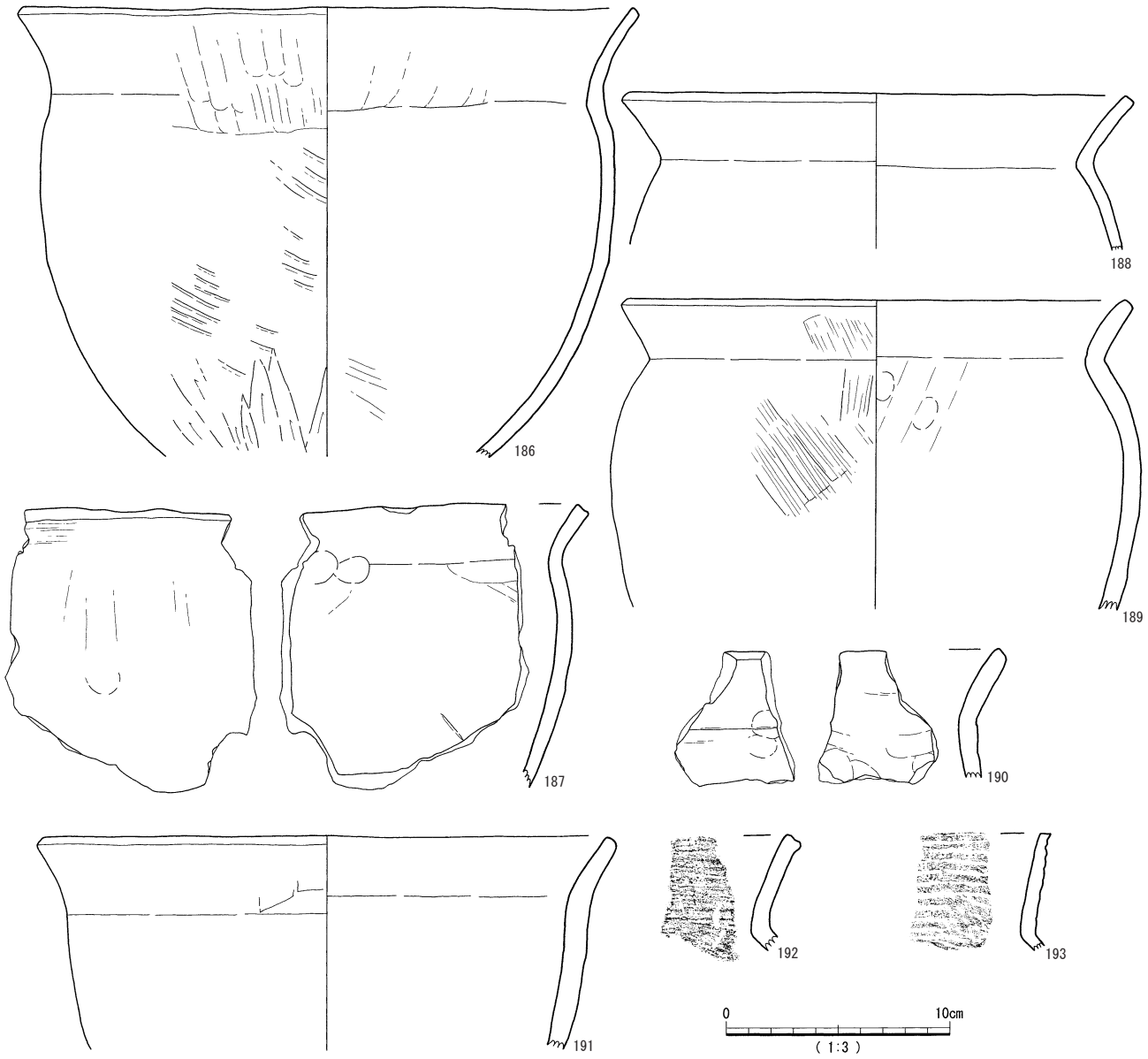
第36図　竪穴建物跡６号出土の土器（２）

で，内面は丁寧なナデ仕上げである。187は短い口縁で端部のゆがみが大きい。頸部内面の屈曲は弱い。188の口径は23㎝で，頸部内面の屈曲は強い。189は口径23.0㎝で，頸部内面の屈曲は弱く，口縁部は短い。端部も丸みをおびている。胴内面には部分的に当て具痕がみられる。

190・191はゆるやかに外反する器形で，肩部は張らず，分厚い。191の口径は26.0㎝で，かきあげ口縁である。192・193は口縁部がコの字状となるもので，192は浅い凹線もある。192の調整は外面が丁寧な縦ナデ，内面が横ナデである。193の外面には横方向のタタキ痕が残っている。

194～196は分厚い作りで，底には脚台の付くものである。194は口径30㎝で，分厚い器形のまま胴部から口縁部へ移っている。頸部から口縁部へゆるやかに移り，口縁部は短い。口唇部はコの字状となり，口縁外面は下から上へかきあげハケナデである。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げ，外面にはススが付着し，内面底近くはオコゲの痕跡とみられる黒色化がみられる。195の口縁直径は25.5㎝で，底部近くは分厚く作っているが，胴部は薄く作ろうとする意図が伺え，頸部内面が鋭く曲がるほど口縁は外反している。口唇部はコの字状となり，口縁外面はかきあげのハケ縦ナデである。胴外面は縦方向のヘラケズリで，内面は粗いハケナデ痕が部分的に残っているが，あと縦方向のヘラナデで仕上げている。196の胴部も195と似た作りで，内外とも粗いハケナデのあと，ヘラナデで仕上げている。

197～201は胴部が丸みをおびていると思われるものである。197は口径14.4㎝，高さ17.3㎝の小さな丸底甕である。上半部に最大径があるが，丸みのある胴部で，頸部でゆるやかに外反し，口縁部は外傾してまっすぐ延びている。198は口径21.5㎝，残存高11.7㎝の低い器形をし，最大径は肩部にある。頸部からゆるやかに外反して口縁端へ至る。199は頸部で強く屈曲し，口縁端は丸くまとまる。内外面とも摩滅しているが，外面にはススが付着し



第37図　竪穴建物跡６号出土の土器（３）

ている。200は口径16.6㎝と小型で，頸部で強く外反している。口縁端は上へ少し立ち上がっている。201の口縁部はやや丸みをおびてゆるやかに内反し，頸部は強く屈曲している。薄い作りで，内外面ともヘラの縦ナデである。

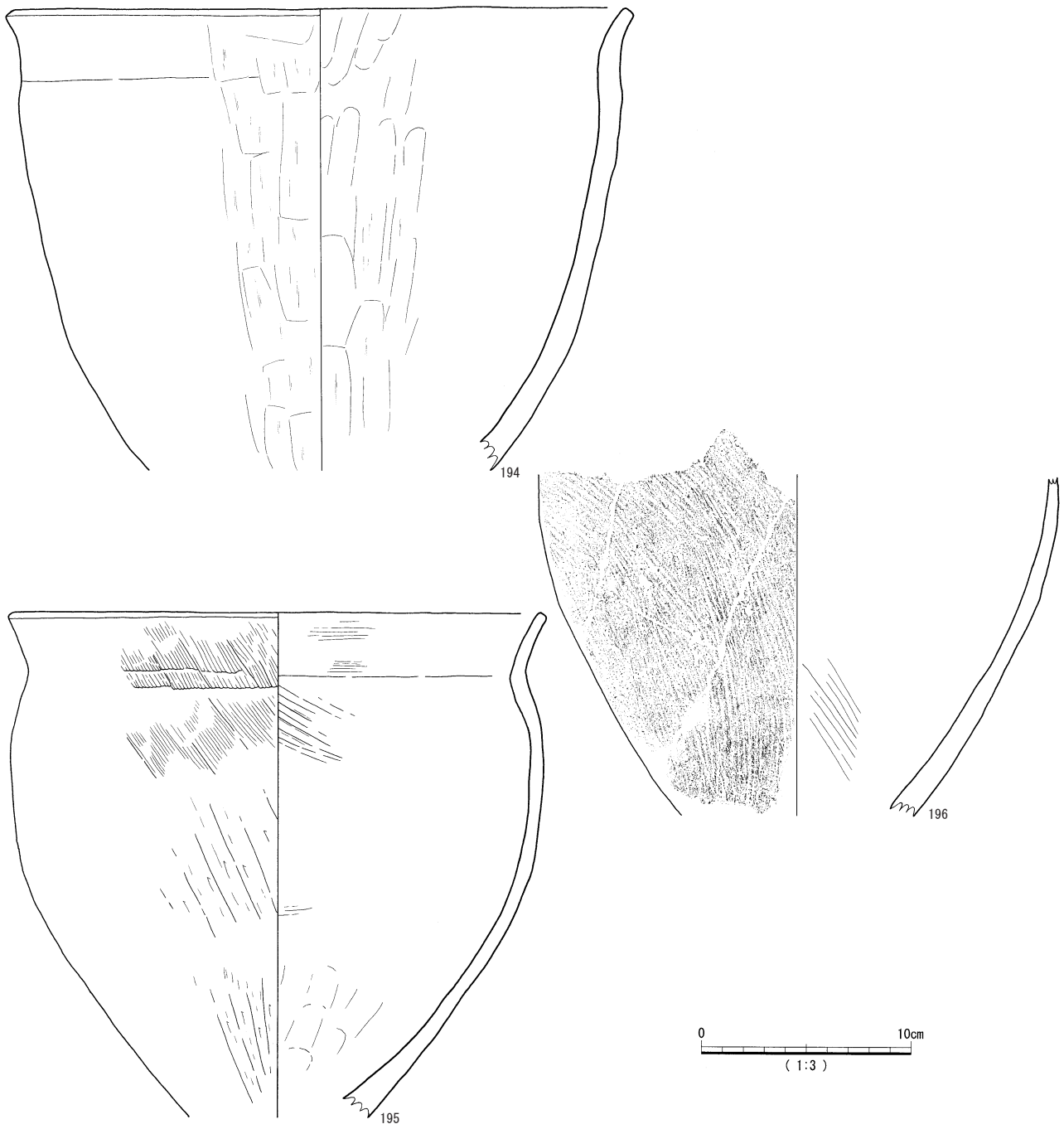
202は小型の甕形土器の胴部片で，頸部で屈曲して胴部が膨らむ。胴部外面の下半はケズリ調整である。内面の頸部付近には，ナデ調整の工具痕が筋状にみられる。

203は口径17㎝とやや小型だが，肩部の張りがほとんどなく長胴形を呈する。外面はタタキのあと縦方向のヘラナデで仕上げている。内面はナデ整形だが，口縁付近はハケナデである。

204～207は分厚い作りで，成形が雑である。口縁部は短い。204は小型土器で，粗いヘラナデ調整をし，胴部が分厚いのに比べ口縁部は薄くしている。205は肩部の張りがほとんどなくまっすぐ立ち上がる筒形を呈している。口径は15.4㎝しかない。206は口縁部がわずかに外反しており，直径が18㎝で，そこから細くなって底へ至る。207は脚台端を欠いているが，口径15.3㎝，残存高12.5㎝の口縁端も不整形の手づくね風となる分厚い小型土器である。内外ともヘラナデで仕上げる。

208～214は，胴部～脚台部片である。

208は端部に向かって緩く外反する器形であり，端部付近は横位のナデ調整によって舌状に仕上げられている。脚台外面は，縦位のナデ調整が連続して加えられている。また，胴部と脚台の境界部分には，部分的に水平方向のタタキ痕が残っており，タタキ成形であったことが



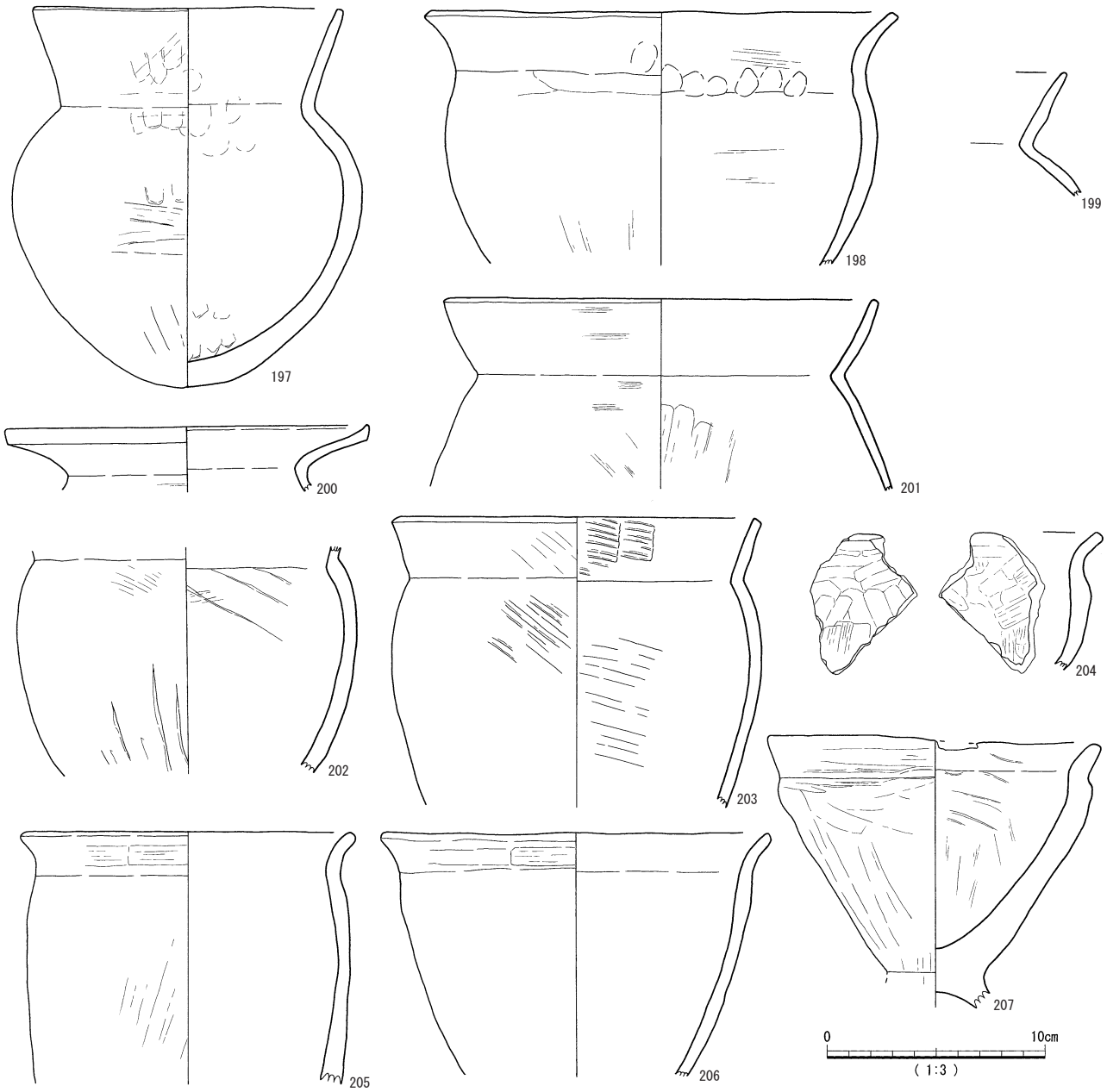
第38図　竪穴建物跡６号出土の土器（４）

分かる。胴部上半は細かい斜位または縦位のハケナデ調整を主とし，部分的にケズリ調整が加えられている。胴部内面は，当て具による平坦面が連続してみられ，器壁も薄い。209の脚台端径は9.8㎝で，高い脚台である。内外とも縦方向のヘラナデだが，内面はケズリに近い。210も高い脚台である。ほぼ直線的に端部に向かって開き，端部は丸く収められている。内外面とも摩滅しているが，内面に部分的にハケ目が残っている。胴部の内底面が一部残っており，器壁が薄いことが分かる。211・212は脚台との接合部分で剥落しており，208の接合痕の位置とも一致する。211は，脚台との境界部分は縦位のユビナデ調整が明瞭である。213は脚台が外に強く開いている。214は脚台端が摩滅等によって欠損しているが，径９㎝ほどである。胴部と脚台は別々に作り，接合したあと，内面と外面に粘土を補填している。内面調整はヘラナデだが，外面調整はヘラケズリである。

壷形土器（215～224）

口縁部が外反するものと，二重口縁のものがあり，底部は丸底と平底とがある。

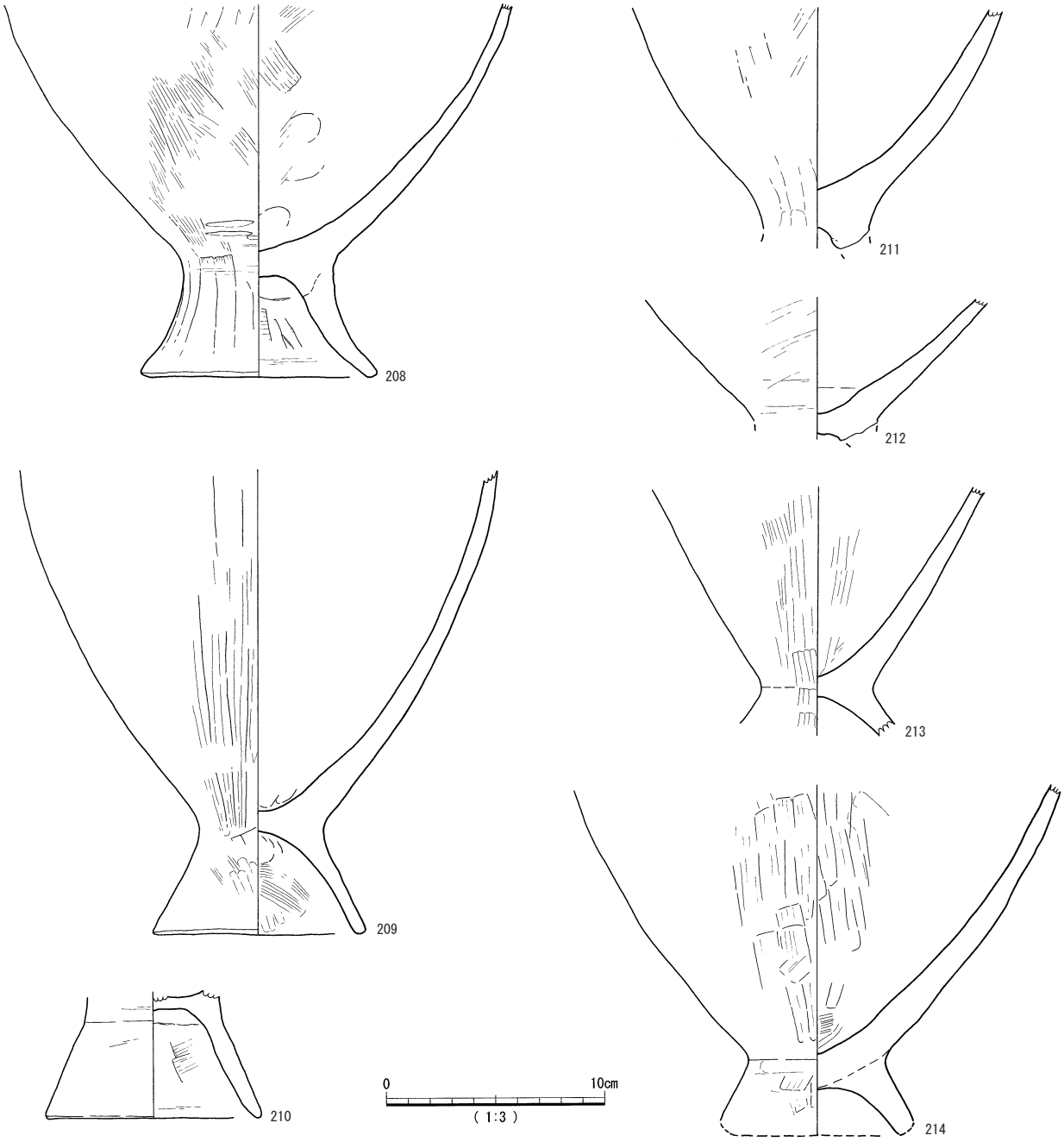
215は口縁部がわずかに外反し，頸部から胴部最大径



第39図　竪穴建物跡６号出土の土器（５）

まで緩やかに膨らみ，底部へすぼまる器形の中型の壷形土器である。ややゆがみがあり，胴部～底部と口縁部の中心軸はずれている。底部は丸底である。外面は摩滅しているが，縦位のタタキ調整が部分的に残存する。内面は，頸部以下に複数の接合痕がみられ，接合部周辺は指頭押圧やユビナデ調整が連続して加えられている。また，胴部内面のユビナデ成形に伴って，爪痕と思われる小さな半月形の凹みがみられる。また，底面周辺は指頭押圧で成形され，器面に凹凸が生じている。全体的に器壁に厚みがあるため，大きさに対し重量感がある。

216は，頸部から口縁部がラッパ状に広く開く小型の壷である。頸部で上下に割れて出土したが，それぞれは割れておらず，口唇部の欠損を除いてほぼ完全な状態である。胴部と口縁部は頸部を境に歪みがあり，口唇部も傾いている。外面は，頸部からカキアゲ状にハケ目が加えられ，口縁部中ほどから口唇部までは横位のナデ調整が施されている。また，口縁部は中ほどまで厚く，口唇端部は舌状を呈している。口縁部は，横位のナデ調整が明瞭で，壷形土器の口縁部というよりは甕形土器の脚部の作り方に近い印象である。胴部外面は丁寧なナデ調整で，帯状に平坦面が巡っており，タタキ成形であったと考えられる。また，胴部下位はケズリ調整である。底部は接合痕が残りやや調整も粗く，いびつな形状である。内面は，接合痕は不明瞭であるが数箇所で指頭押圧とユ



第40図　竪穴建物跡６号出土の土器（６）

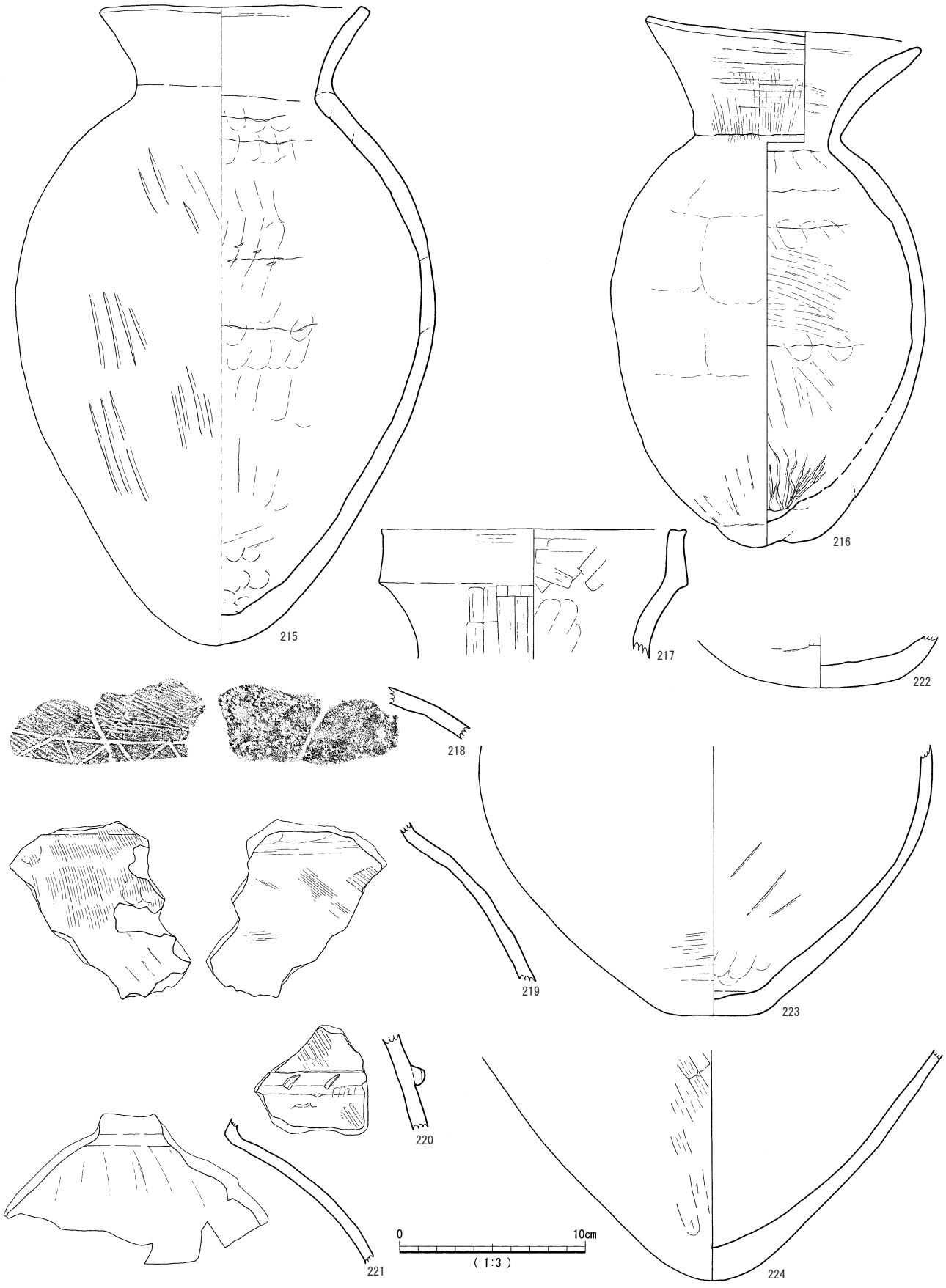
ビナデ調整が横位に施される部分があり，接合部分の調整と考えられる。また，最大径付近は幅広のミガキに近い工具ナデであり，表面が平滑である。内面も胴部下半はケズリ調整のちナデ調整で，内底面には条痕状の波打った工具痕がみられる。焼成も良好で硬質であり，器壁が厚いため小型だが重量がある。

217は外反して端部が直立する二重口縁である。口縁直径16.4㎝で，口唇部はコの字状を呈する。内外ともヘラの縦ナデである。

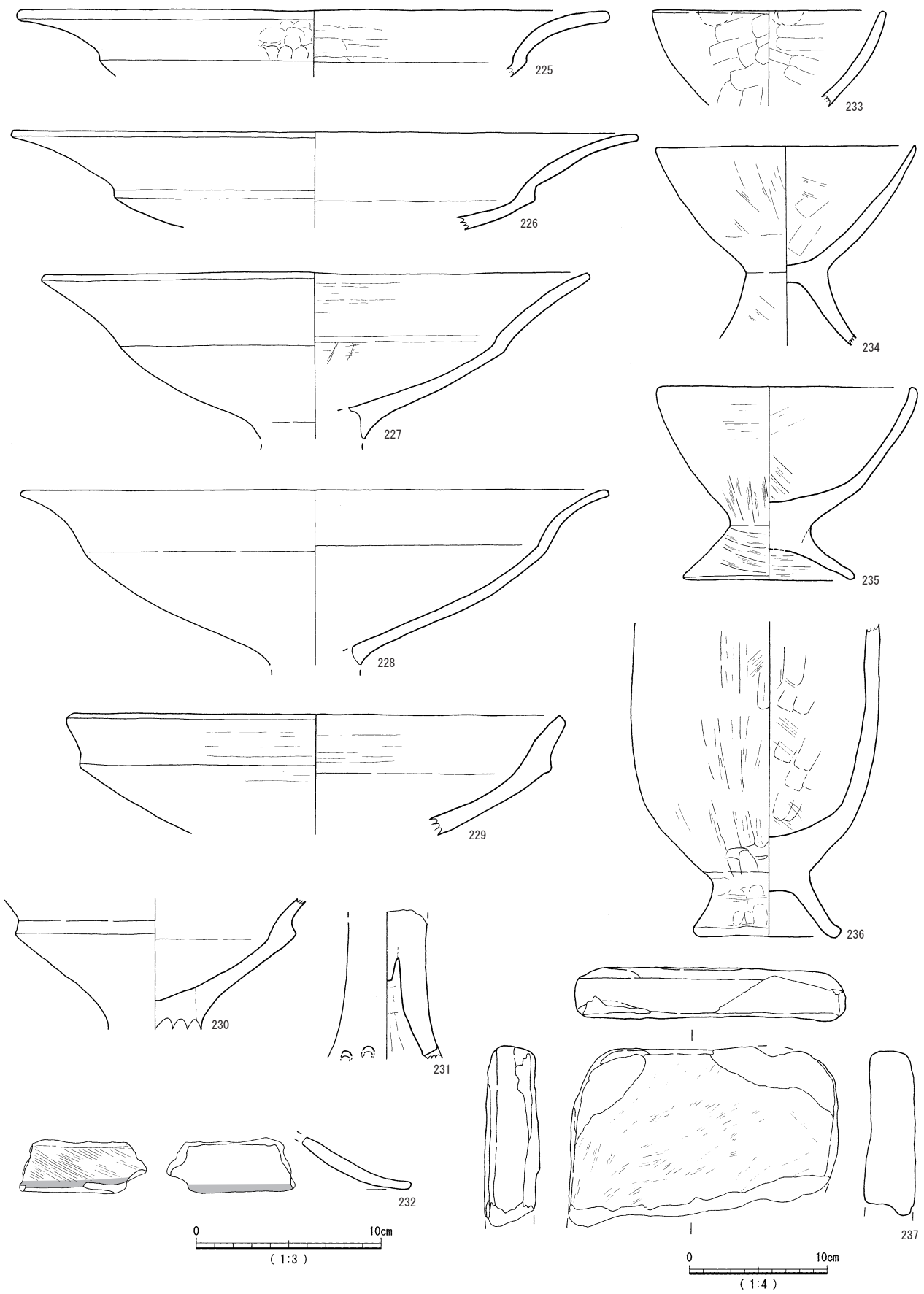
218～221は肩部付近の破片で，ともに胴部が丸みをおびている。218の外面はハケの横ナデのあと細いヘラ沈線が巡り，その間に鋸歯文が描かれている。219・221も肩部で，219は内外面の胴部上半は細かいハケナデ調整後に，ナデ調整が施されており，下半はケズリ調整後，ナデ調整である。また，頸部内面付近は横位のナデ調整である。外面は219がハケナデのあとヘラナデ，221はヘラナデである。220は紐状の突帯を張り付け，浅く刻みを施している。外面には幅広の斜位のハケ目が残っている。221は，内面に頸部の屈曲部から下位へのユビナデ調整が残っている。外面は摩滅している。

222～224は胴下半から底部である。

222は底部である。緩やかな丸底で，左右の立ち上がり



第41図　竪穴建物跡６号出土の土器（７）



第42図　竪穴建物跡６号出土の土器（８）と石製品

の角度が異なり，歪みがある。外面には部分的にハケの端部と思われる工具痕がみられる。223は平底で，胴部が広く膨らみ，下半が最大径となる器形である。器壁が薄く，胎土も軟質で摩滅している。底部付近にナデ調整，内底面に指頭押圧が部分的に残存している。外面は表面がただれたような部分もあり，被熱による可能性もある。また，外面には黒斑が明瞭にみられる。胎土は軟質で，粒子の細かい角閃石や白色礫を多く含む。

224は尖底に近い丸底である。内外とも縦方向のヘラナデ調整だが，摩滅が目立つ。

高坏形土器（225～231）

高坏形土器の坏部は口縁部と底部境の屈曲部から外へ広く開き，口縁端部付近はほぼ水平になるものもある。坏部は概して浅く，口縁部直径は広い。口縁直径は225が32.2㎝，226が34㎝，227が30㎝，228が32㎝である。225の口唇部はナデ調整により，断面形が隅丸方形に仕上げられている。外面は連続した指頭押圧とユビナデ調整であり，細かい凹凸がある。226の坏部は口縁部と底部の境がはっきりした段を呈しているが，227・228はゆるやかに移っている。227と228の底部端は接合部を残しており，脚部との接合がはめ込み式であることがわかる。229は口縁直径が27㎝と小さく，分厚い作りとなっている。口縁部の外反度は弱く，ゆるく立ち上がっている。230も229と同様，小さく分厚いもので，やや深い作りだが，脚部との接合はさし込み式である。

231は，脚部である。坏部との接合部で剥落している。筒部に下半が欠損する穿孔が２か所並んでおり，対で計４か所穿たれていた可能性がある。内面上部は，棒状に粘土が張り出している。

蓋形土器（232）

232は口縁部片であり，上端は積み上げの接合面で剥落している。

鉢形土器（233～235）

いずれも脚台の付くものである。233は口径が12.6㎝と小さく，内反ぎみに立ち上がっている。内外とも横方向ヘラナデで仕上げている。234は口径14㎝，深さ7.5㎝と深い鉢部で，脚台も端部を欠いているが高い。鉢内面の調整は丁寧である。235はややゆがんだ作りで，口径14㎝，脚台端径9.4㎝，高さ10.5㎝である。口縁端はやや内弯し，脚台は低い。調整はヘラナデである。

小型土器（236）

脚台の付く甕形土器の小型品かと思われる。ほとんど直に立ち上がっており，全形は不明である。口縁部を欠いているため口縁の形状が不明だが，残存部上端の直径は12㎝である。脚台径は８㎝で，脚台高は3.5㎝ほどである。内外とも縦方向のヘラナデである。

石製品（237）

砂岩製の砥石である。隅丸方形を呈しているが，長辺部が欠けている。残存長12㎝，幅19㎝，厚さ3.7㎝ほどで，残存重量は1494.5ｇである。表裏面２面を使用している。

図化していないが，砥石の他に石皿１点と磨石・敲石・台石様の自然石４点が出土している。石皿は長方形風を呈し，長軸が欠損している。残存長22㎝，幅26㎝，厚さ８㎝ほどの安山岩製で，中央がややへこんでいる。

⑤竪穴建物跡７号（第43図）

Ｄ・Ｅ－26・27区で検出された。竪穴建物跡８号と北側で近接するが，切り合い関係は確認できなかった。道路や上下水道埋設などのため，南側の約半分と北側の一部が消失しているが，東西方向を主軸とする約５ｍ×３ｍの楕円形を呈すると考えられる。３段構造をもち，約14㎝下がった中段は2.6ｍ×２ｍのややいびつな円形を呈し，中央部には長径約１ｍ，深さ15㎝の楕円形状の焼土エリアがある。

遺物は中段エリアの埋土①と②内がほとんどを占め，上段エリアでは数点しか出土しなかった。ピットは，上段内部の東西方向に対をなすように２基検出された。ともに，径が約30㎝の円形を呈し，深さも約20㎝と似る。

出土した遺物数は少ない。図化できたのは甕形土器２点と壷形土器２点である。

甕形土器（238・239）

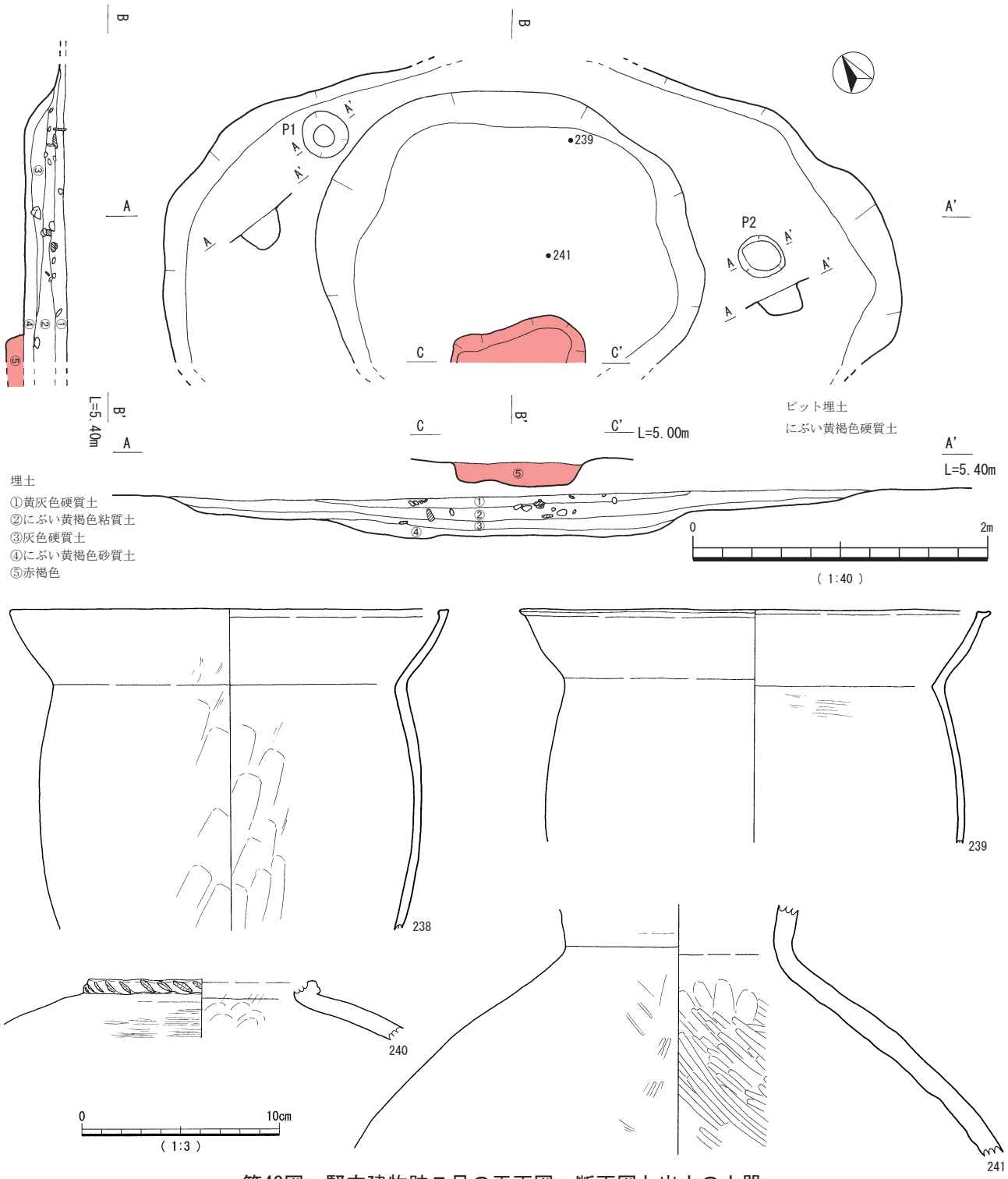
238・239は頸部内面が稜となるほど，「く」字状に屈曲する口縁部と，肩の張りがほとんどない胴部から成る薄い作りである。238は口縁部直径が22.3㎝で，頸部からやや内弯ぎみに立ち上がる。口唇部は直に伸び，やや内側に突き出している。内外ともヘラの縦ナデ調整で仕上げる。内面が橙色，外面が明褐灰色を呈するが，外面の一部は橙色を呈する。239も238と同じような器形をしているが，口唇部が238と逆に外へＬ字形に伸びている。口縁部直径は24.0㎝である。

壷形土器（240・241）

240・241は頸部から肩部の破片である。240は肩が外へ大きく広がる器形をし，頸部に突帯が貼り付けられ，突帯上には右下がりの板目の押圧刻みがみられる。241は頸部が直径11.4㎝と細くくびれ，口縁部は直に近く外反する。胴部は肩が張らず，まっすぐ伸びる丸みのある器形をしている。内外ともヘラナデ仕上げだが，外面には斜方向のタタキ痕が浅く残っている。

⑥竪穴建物跡８号（第44図・第45図）

Ｄ・Ｅ－27区で検出された。南側は７号と接しているが前後関係は不明であった。２段の構造になっており，１段下は検出面より20㎝下がり，２段目はさらに15㎝下がっている。中央よりやや北側にあたる１段目の境の２段面の部分に焼土塊が径50㎝の範囲に広がっている。２段目をやや掘り込んでいる。そのまわりには焼土や炭な



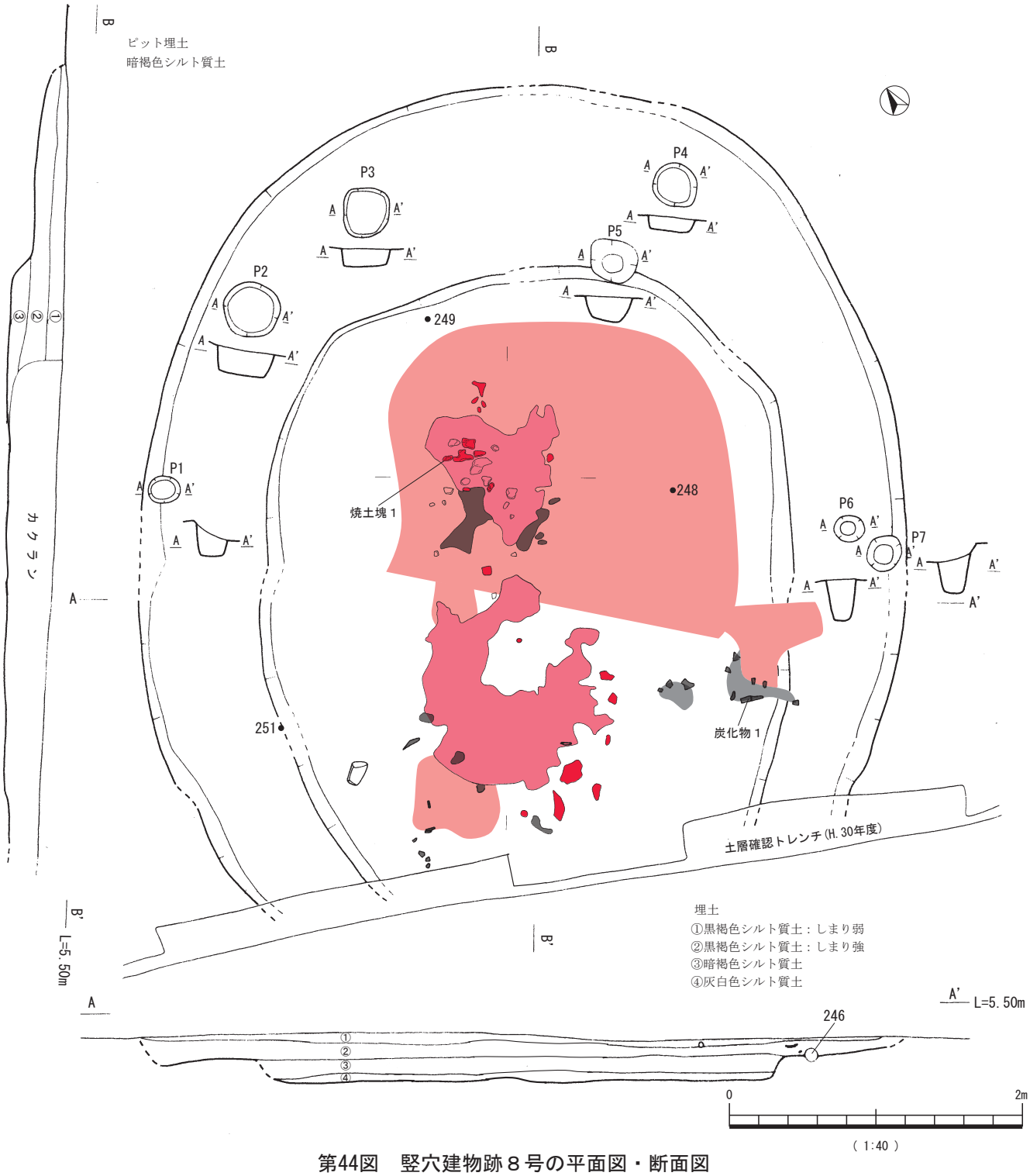
第43図　竪穴建物跡７号の平面図・断面図と出土の土器

どもあり，さらに南側へ床面の近くに炭化物や焼土が幅１ｍほどの範囲に広がっている。④層は貼床と思われ硬くしまっており，この中央付近に炭化物が集中している。この上の③層にも焼土や炭化物が多く混ざっている。中央付近の③層中で小型仿製鏡が出土した。（埋納遺構として95ページで詳述）

炭化材のうち３点の放射性年代測定と樹種同定を実施した。年代値は弥生時代後期から古代初頭まで幅広い結果が出ている。樹種同定結果は，ツバキ属だった。

内部で検出されたピットは，直径約15㎝～約40㎝の円形を呈し，深さ約10㎝～約30㎝である。主柱穴ははっきりしなかった。

出土遺物は少なく，破片資料がほとんどである。磨石様自然礫１点が出土している。



第44図　竪穴建物跡８号の平面図・断面図

甕形土器（242～246）

242は口縁部片である。口唇部は丸く収められており，成形時の横位のナデ調整によって内面側が浅く凹む。内外面とも摩滅しており詳細な調整痕は確認できないが，内面の頸部の屈曲下は砂粒が動いており，ケズリ調整と考えられる。器壁は薄い。243は肩部片である。頸部は内面側に張り出し，直下に接合痕がみられる。内外面とも，斜位の細かいハケナデ調整である。

244～249は，脚台である。244はほぼ直線的に開き，端部はナデ調整により断面方形を呈している。外面は，縦位の幅広い条痕状のハケナデ調整が切りあっている。胎土に２～３㎜大の灰白色の円礫を多量に含む。245・246は端部がわずかに外反するものである。245は横位のナデ調整により，端部が方形に仕上がっている。外面は縦位

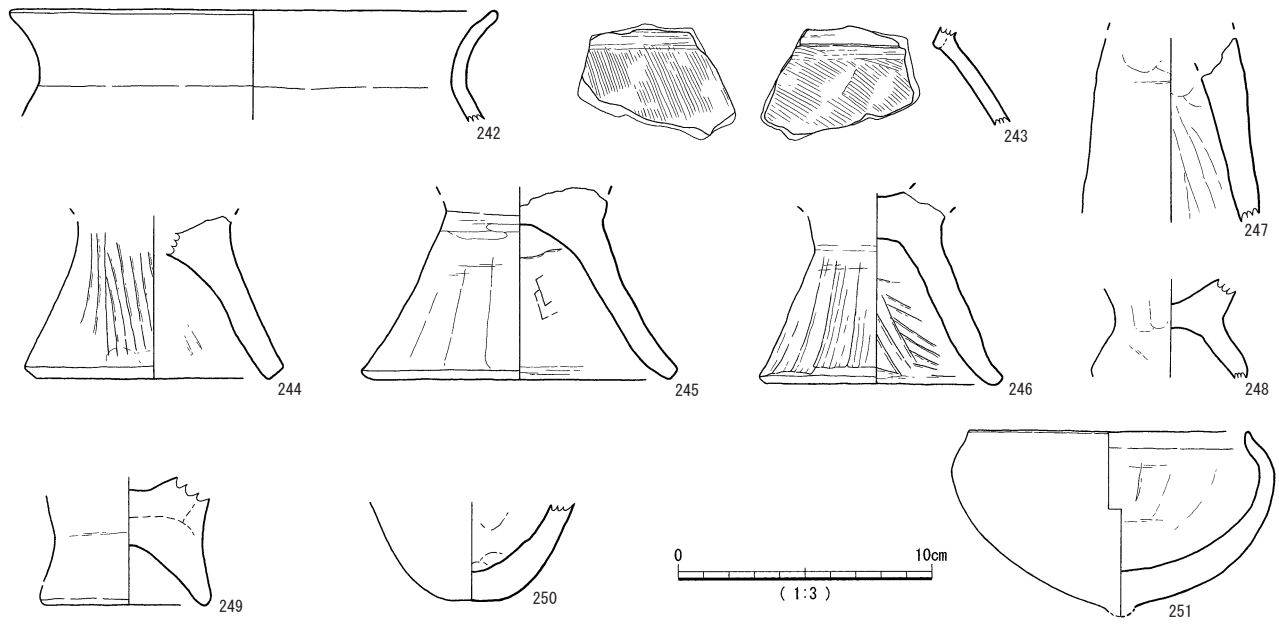
のユビナデ調整で，胴部との境界の屈曲部付近は横位のミガキ調整である。摩滅しているが，焼成は良好で作りも丁寧である。246の外面はカキアゲ状を呈する明瞭な縦位のハケナデ調整で，内面側は幅広の条痕状のハケ目が連続して加えられている。端部は器面の凹凸があり，部分的に外反の度合いが強い。

高坏形土器（247）

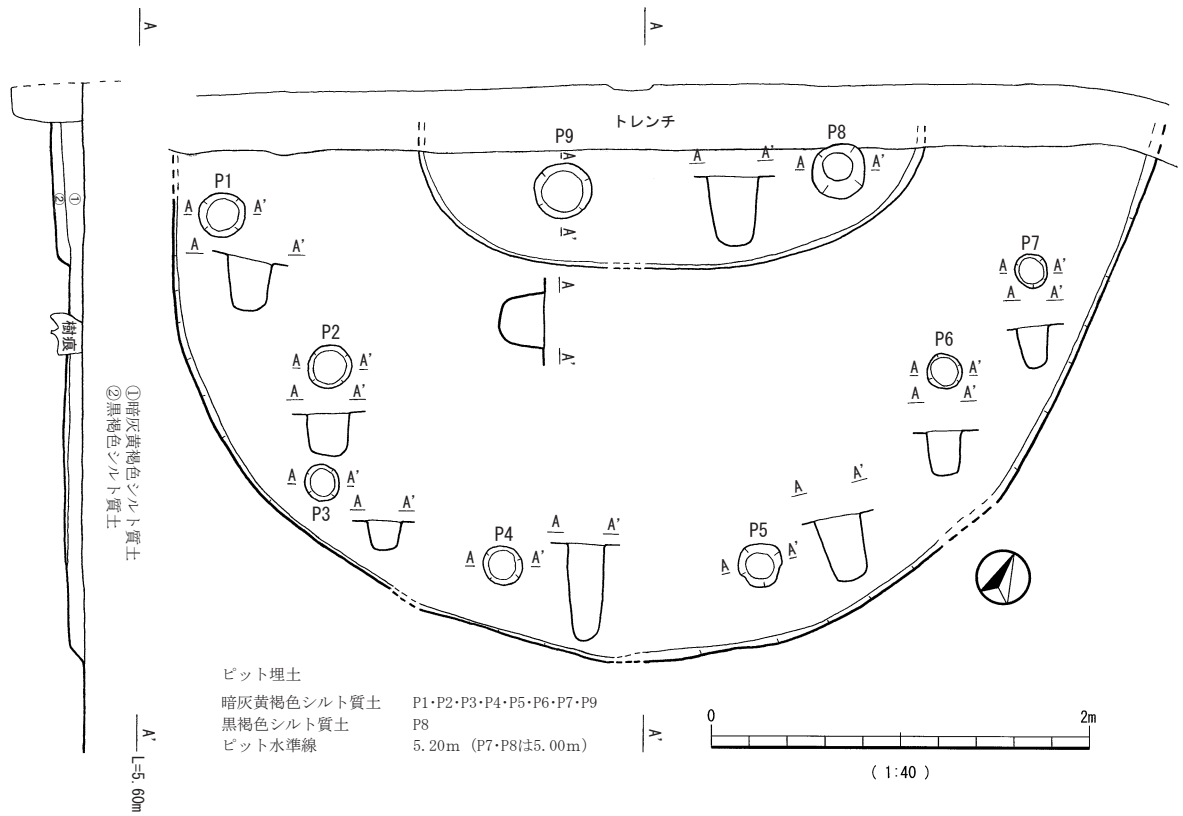
247は脚部片である。上部は剥落しており，残存状態はあまり良くない。外面上部は幅広の指頭押圧により表面に凹凸がある。内面には，筒状に成形した際の縦シワが数条みられる。

小型土器（248～250）

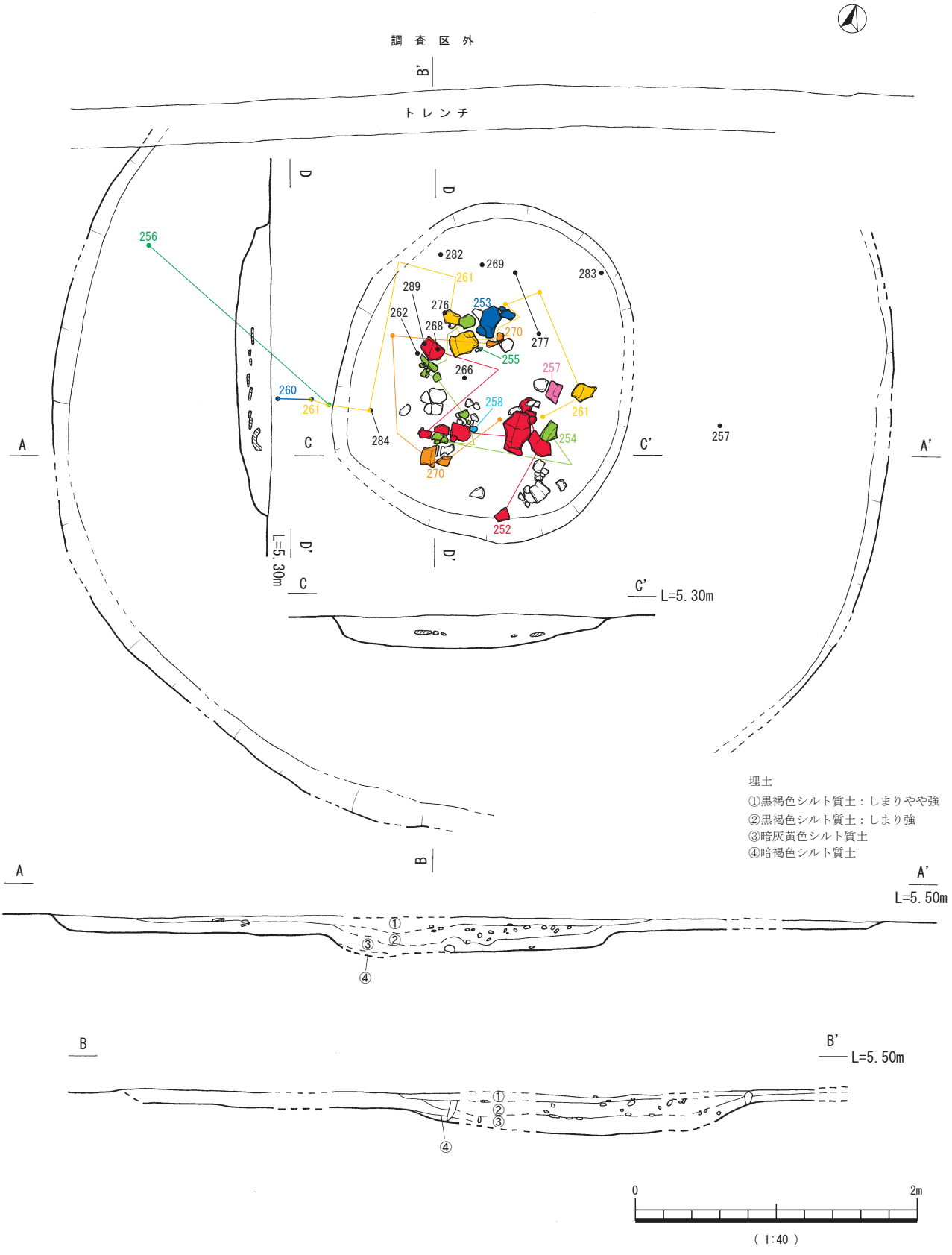
248・249は甕形土器の脚台である。248は，全体的にユビナデ調整で手捏ね状を呈する。摩滅が激しく，胎土も



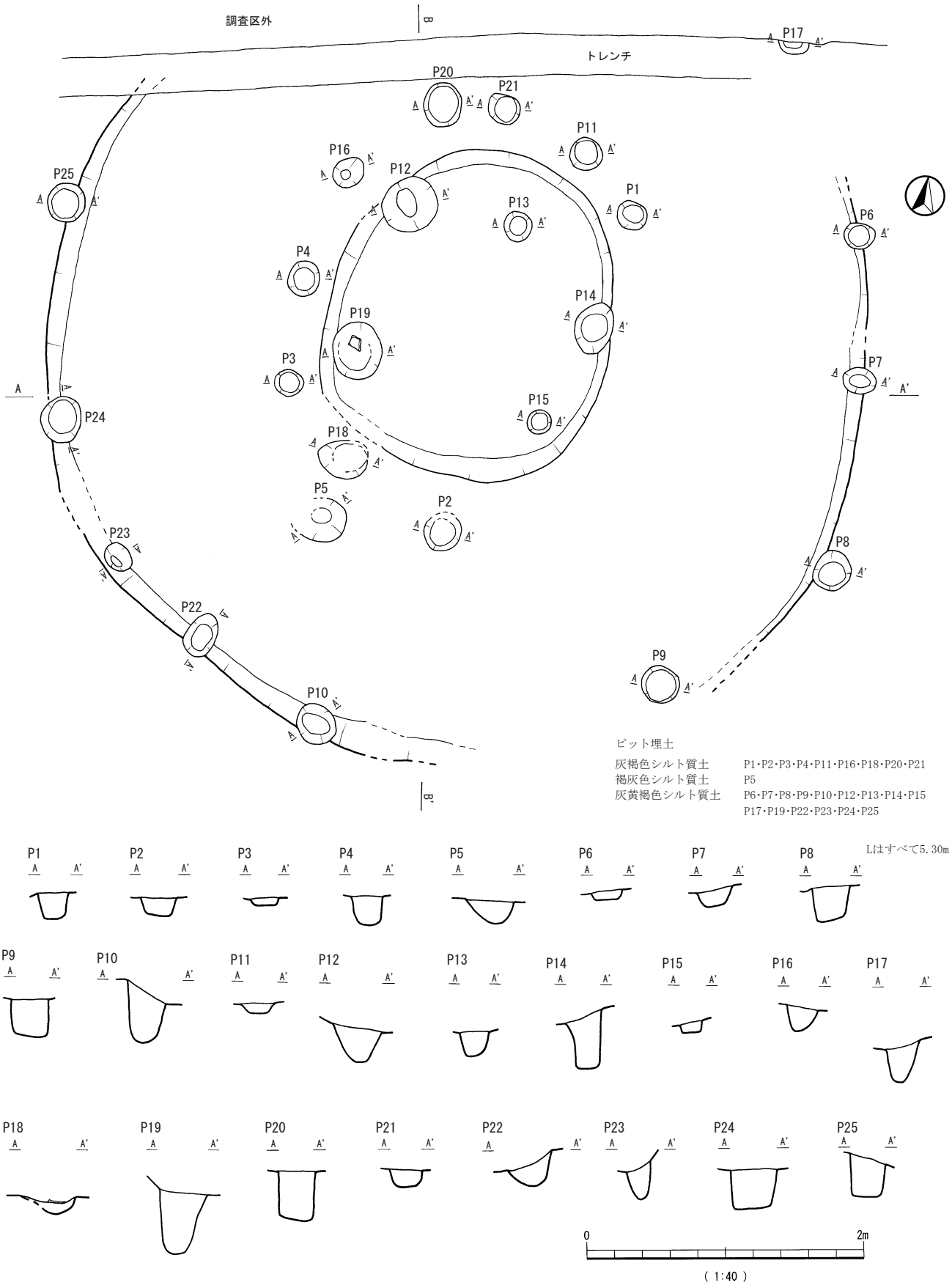
第45図　竪穴建物跡８号出土の土器



第46図　竪穴建物跡９号の平面図・断面図



第47図　竪穴建物跡10号の平面図・断面図



第48図　竪穴建物跡10号のピット配置図・断面図

粗い。249はわずかに括れるがさほど開かず，端部は丸い。

250は鉢形土器あるいは壷形土器で，平底となる。レンズ状の平底で，径は小さい。内外面は摩滅しており，内底面を中心に部分的に指頭押圧がみられる。

鉢形土器（251）

小型の鉢形土器である。肩部に最大径をもち，口縁部が内弯して短く立ち上がる。口径11.1cm，高さ6.8cmである。口唇部は丸く収められており，細い舌状を呈する。底面には，円形の突起が部分的に残存する。外面は摩滅しているが，内面は横位のミガキに近い丁寧なナデ調整である。

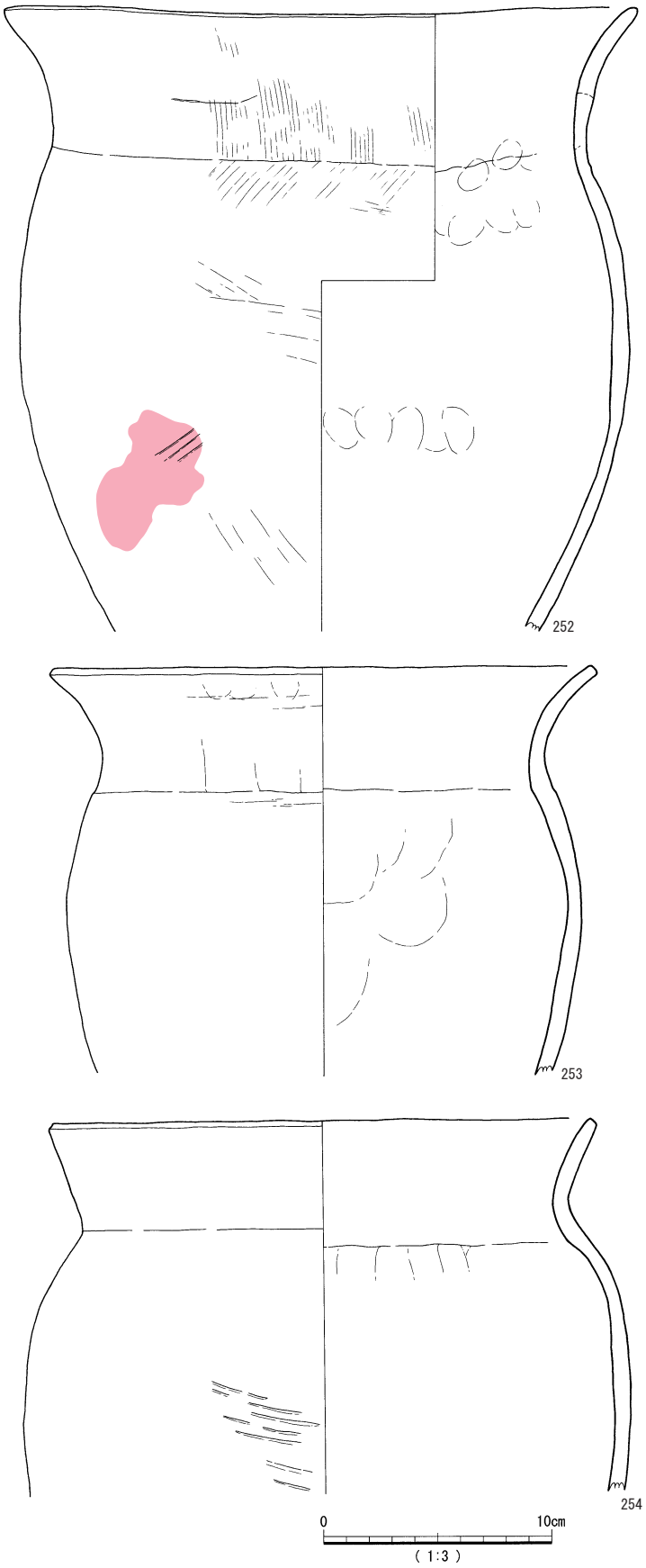
⑦竪穴建物跡９号（第46図）

Ｅ－27区で検出された。竪穴建物跡10号が東側に隣接している。北側は用地外となり，検出されたのが全体の約半分程度である。上位が削平された平坦面で床面付近のみの検出である。残存範囲で長軸約5.2ｍ，短軸約３ｍである。直径は約５ｍの円形を呈する。２段構造で１段目の深さは，約10cmで，長さ2.7ｍで，２段目の深さは約５cm程度である。ピットは，上段をめぐるように７基，下段に２基検出された。直径約15cm～30cmの円形を呈し，深さは約15cm～50cmである。主柱穴ははっきりしないが，下段の２本と，上段の回りをまわる構造も考えられる。Ｐ８とＰ９の間は1.5ｍである。張り出し部は，検出できなかった。

建物内から遺物はほとんど出土していない。

⑧竪穴建物跡10号（第47図～第53図）

Ｅ－27・28区で検出された。北側は用地外へ延び，西側に竪穴建物跡９号が隣接している。残存範囲で長軸約6.0ｍ，短軸約5.2ｍである。中央付近に直径２ｍ程度の段を伴った２段構造である。深さは，１段目が約10cm，２段目が約20cmである。ピットは，内外周をめぐるように上段，下段に分かれて検出され，検出面で10基，１段目と２段目境付近で10基，２段目で５基検出された。径は10～30cmの円形を呈し，深さは10～50cmである。主柱穴ははっきりしないが，９号と同じように下段にある14・19の２本とまわりを円形にまわる構造も考えられる。14・19は径が28cmと38cm，深さが40cmと44cmあり，その間隔は1.8ｍである。



第49図　竪穴建物跡10号出土の土器（１）

下段付近には，252～254，257，261，270などの甕形土器や壷形土器が集中して出土した。甕形土器を中心に比較的器形が復元できたものがあったが，いずれも脚部まで接合できたものはなく，全形はとらえられなかった。本遺構では，頸部で屈曲して胴部が膨らみ，底部に向かってすぼまる器形にバリエーションがみられる点と，広口壷が出土している点が特筆される。

甕形土器（252～269）

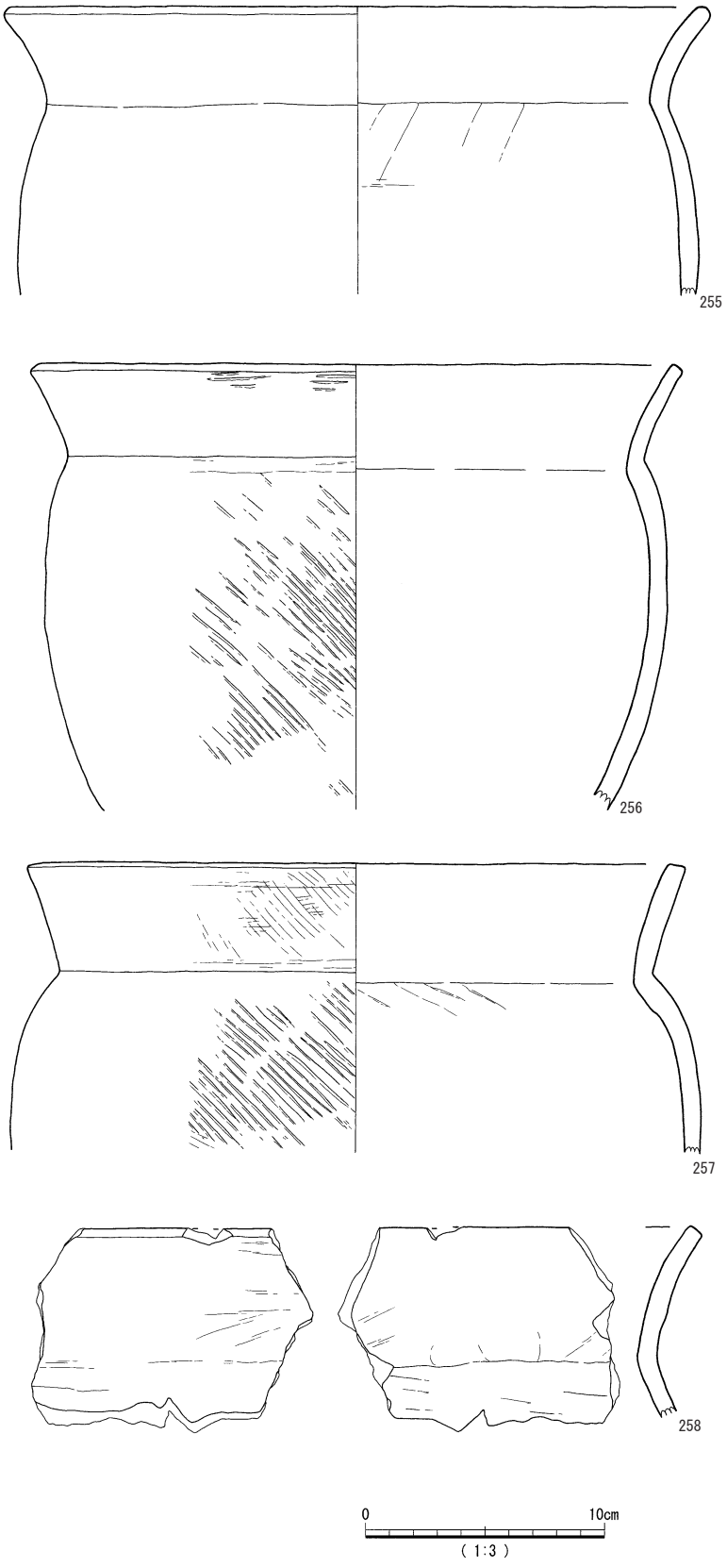
252～255は，頸部で緩やかに屈曲して口縁部が外反し，口唇端部が丸く収まるものである。肩部はあまり張らず，胴部上半が最大径となっている。また，252・253は頸部から口縁部が長いのが特徴である。

252は全体的に器壁が薄く，口縁部が長く伸びる。頸部から口縁部にかけての屈曲度合い及び長さが一定ではないため，口唇部もゆがんでいる。頸部には粗いハケ目でカキアゲ状のナデ調整が施され，頸部にわずかな段が生じている。胴部は摩滅しているが，器面に掌大の平坦面が連続するため，タタキ成形と考えられ，部分的にタタキ痕と思われる筋状の凹みが４か所確認できる。また，頸部付近にはやや幅広の斜位のハケ目がみられる。内面は，頸部および胴部中位に指頭押圧が連続しており，器壁が薄くなっている。胴部下半を中心に被熱痕がみられ，表面がただれたように剥離している。胎土には茶褐色の円礫が多量に露出し，金雲母が疎らに含まれる。

253は口唇部付近に指頭押圧が加えられ，つまみ上げるように口唇部が作り出されている。そのため，口唇部では屈曲の度合いが強くなる。内外面とも摩滅しており調整痕は不明瞭であるが，外面頸部はカキアゲ口縁状をなし，工具による細かい段が生じている。また，内面には楕円形の凹凸が複数切りあってみられ，タタキ成形の当て具痕と考えられる。また，胴部下半は被熱で赤変し，表面が剥落している。

254は頸部の屈曲内面にユビナデ調整が施されており，他の資料より肩部の張り出しが強い。口唇部はナデ調整により平坦面をもって外傾する。また，部分的に筋状に凹みが生じており，やや歪みがある。胴部外面には左上がりのタタキ痕が残存する。

255は，頸部内面に斜位のケズリ状の強めのナデ調整が施されている。内外面とも摩滅



第50図　竪穴建物跡10号出土の土器（２）

しているが，頸部内面の稜は明瞭である。

256～260は，頸部の屈曲が明瞭で，口縁部が直線的に外傾するものである。口唇端部はナデ調整により，平坦面を有する。

256は外面が細かい左上がりのタタキ調整で，口縁部は水平方向のタタキ調整である。頸部は横位のナデ調整が巡り，わずかに凹んでいる。内面は摩滅しているが，硬質で焼成は良好である。257は256と口径や調整，色調等は類似するが，257は肩が張る。口縁部のタタキ痕は，斜位のハケナデ調整によって部分的にしか残存しない。また，頸部内面にはナデ調整の工具痕が筋状にみられる。

258の口唇部はコの字形を呈し，頸部の屈曲は緩やかである。259は胴部外面に左上がり，口縁部に水平方向及び右上がりのやや幅広のタタキ痕が部分的に残存する。口縁部外面はナデ調整により，タタキ痕が不明瞭である。また，胴部内面には，水平方向に近いナデ調整の工具痕が筋状にみられる。260は，摩滅のため調整痕がほとんど残っておらず，口縁部外面に部分的に横位のタタキ痕がみられる。胎土や色調は，257や259に近い資料と考えられる。

261は口縁部が短く，わずかに外傾する。胴部の張りも弱く，胴部中位までほぼ最大径であり，底部付近ですぼまる器形である。口唇部付近は内外面ともナデ調整であるが，ゆがみがあり，厚みも一定しない。頸部は幅広のハケを押し当てるような強い縦位のハケナデ調整でカキアゲ口縁状をなしている。胴部外面はタタキ様の筋が縦方向に細長く入り，その上からケズリに近い強いナデ調整が加えられている。

262は緩やかに屈曲し，外反するものである。口唇部がナデ調整により外面側に張り出す。263は緩やかに外反するもので，258・262と同様の器形と考えられるが，頸部から口縁部までが比較的長い。口唇部はナデ調整により明瞭な平坦面が作出されている。

264は内弯する薄手の口縁部である。内外面とも摩滅により，調整は不明である。265は，外面にタタキ痕を有する胴部片である。屈曲は緩く，口縁部は直線状に外傾するものと考えられる。

266～269は脚台である。266は底部に向かって緩やかに開くタイプで，胴部との接合部分で剥落している。全体的に器面が赤く発色しており，被熱による可能性がある。胴部との接合面に沈線状の刻みが施されている。胴部との圧着を良くするためと考えられる。267・268は直線的に端部に開くもので，267は端部が明瞭な平坦面をなす。また，長石及び白色礫を多量に含む粗い胎土である。269は脚部が外膨らみになるもので，ユビナデ調整によるゆがみが大きい。胎土は軟質で，色調は明るい。

壷形土器（270～287）

270・271は口縁部がラッパ状となる広口壷である。270は色調が暗く厚手で，271は色調が赤みを帯び薄手である。270は，胴部が球状に張る大型の資料である。頸部に幅広の突帯が１条巡り，斜位の押圧状の刻みが施される。頸部からの立ち上がりは直線的で，口縁部で大きく外反する。口唇部はナデ調整により断面方形に仕上げられ，わずかに中央が凹む。器面が部分的に平坦面をなすためタタキ成形の可能性があるが，器面の摩滅によりタタキ痕は確認できない。頸部の突帯下には接合痕があり，内面側にユビナデ調整が集中している。焼成は良好で，丁寧な作りである。271は頸部から口縁部が広く，口唇部はナデ調整により平坦面をなし，筋状の凹みがある。外面には縦位のハケナデ調整が密に施され，頸部に小段が生じている。内面は，ほぼ摩滅している。271は事実誤認しており，レイアウト確認後，遺構外で検出されたことが判明した。

272・273は断面が三角形状に肥厚する口縁部で，272は頂点に浅い刻みを有する。胎土は，273は軟質だが，272は砂粒が目立ちやや粗い。

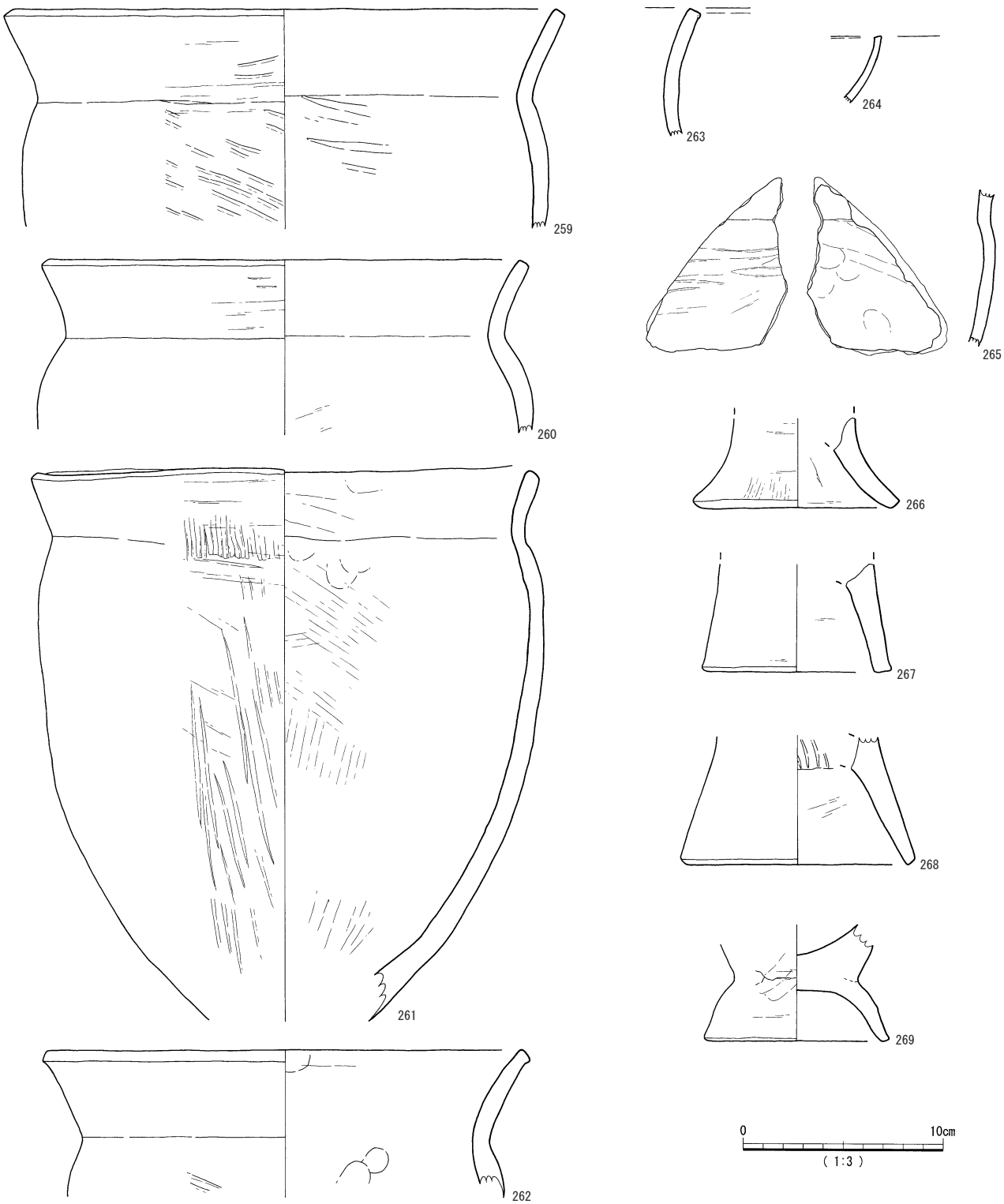
274・287は二重口縁壷で，口唇部はナデ調整で平坦面が作出されている。274は袋状口縁に近く，頸部は内外面ともユビナデ調整で成形され，屈曲はゆるく稜も弱い。287は屈曲部から直線的に内傾し，外面に浅い刻みが施されている。

275は頸部と考えられ，断面三角形状突帯が１条巡る。

276～282は突帯である。器形や厚みなどから，壷形土器に伴うものと考えられる。276～279は，断面カマボコ状の突帯にヘラ状の工具で刻みを施すものである。276は突帯上部に縦位のナデ調整，内面は部分的に指頭押圧が残る。胎土には，１～３㎜大の赤褐色粒を多く含む。277は幅広の粘土紐を貼り付け，斜位の沈線状の刻みを連続して施している。278は，厚みのある幅広の突帯を貼り付け，横位の沈線を２条施すことで３条突帯状をなし，位の沈線を２条施すことで３条突帯状をなし，さらに斜位の刻みを加えている。突帯上部に縦位のナデ調整，内面は部分的に指頭押圧が残る。胎土には，１～３㎜大の赤褐色粒を多く含む。279は丸みをもった突帯に右下がり刻みが施される。280は，刻みの深さと長さが一定ではなく，やや粗い。281は縦方向の刻みがある。282は断面が緩い三角形状の突帯を貼り付け，押圧状の刻みを施している。縦位のハケナデ調整後，突帯周辺は横位のナデ調整が施されている。胎土は白色・赤褐色の砂粒を多く含み，やや粗い。

283は胴部片であり，下端は接合面で剥落している。内外面とも摩滅しており調整は不明であるが，球状の胴部の成形方法が分かる資料である。また，胎土には角閃石を多量に含む。

284～286は底部片である。284は丸底，285は尖底，286は平底である。284の外面には，わずかに右上がりのタタ

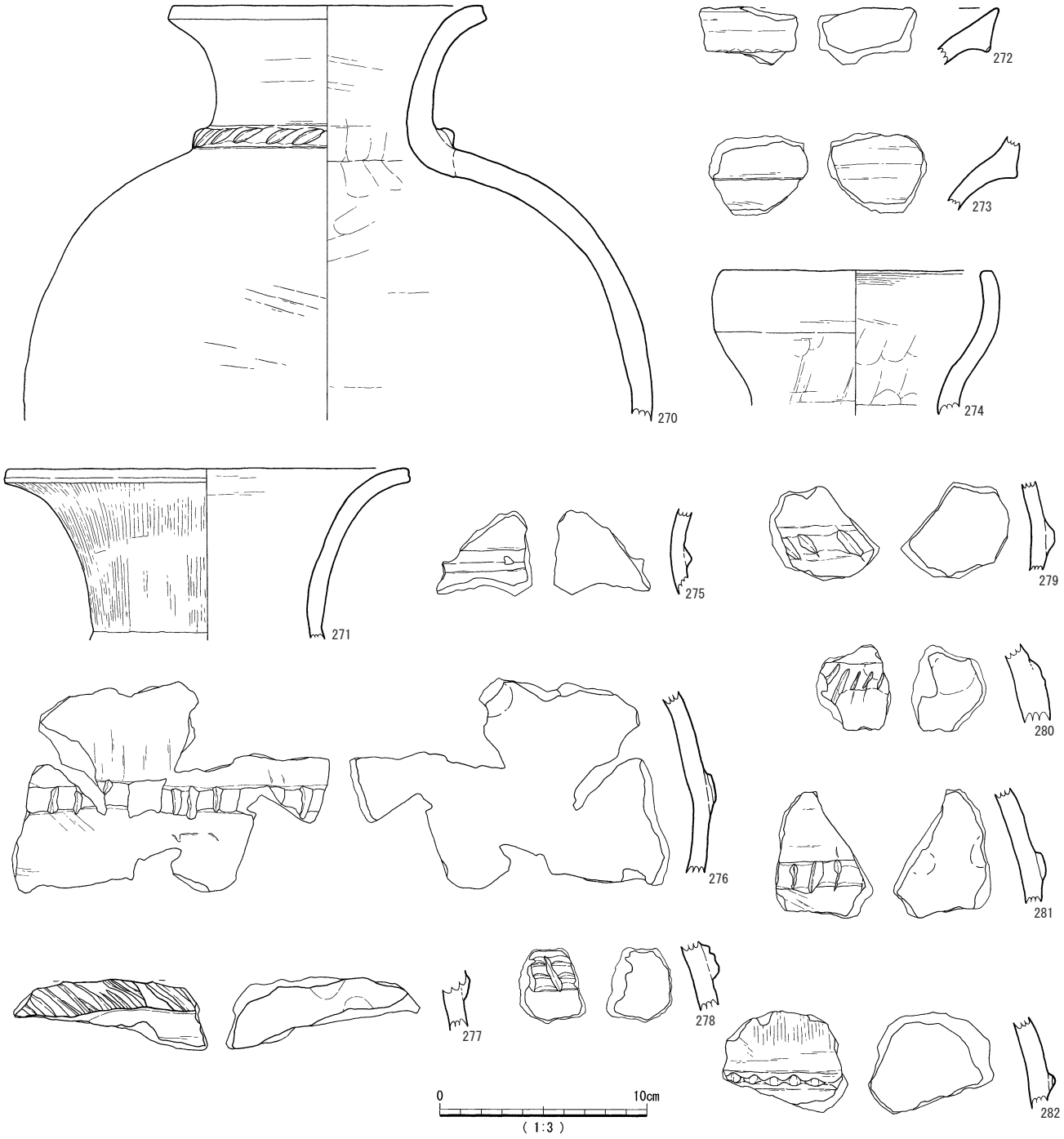


第51図　竪穴建物跡10号出土の土器（３）

キ痕が残存する。285は先端がにぶい尖底で，左右非対称である。胎土に白色の砂粒を多量に含む。286は底径は小さいが，厚みのため重量がある。

高坏形土器（288・289）

288は坏部と脚部の接合部分の破片で，器壁は厚手だが胎土は軟質である。脚部の内底面は，成形が粗く凹凸がある。289は上半が柱状に中実で，緩く底部に向かって開く。坏部との接合部で剥落しており，中実の部分はわずかにエンタシス状を呈する。内面の屈曲部下は，ハケ目が残存する。



第52図　竪穴建物跡10号出土の土器（４）

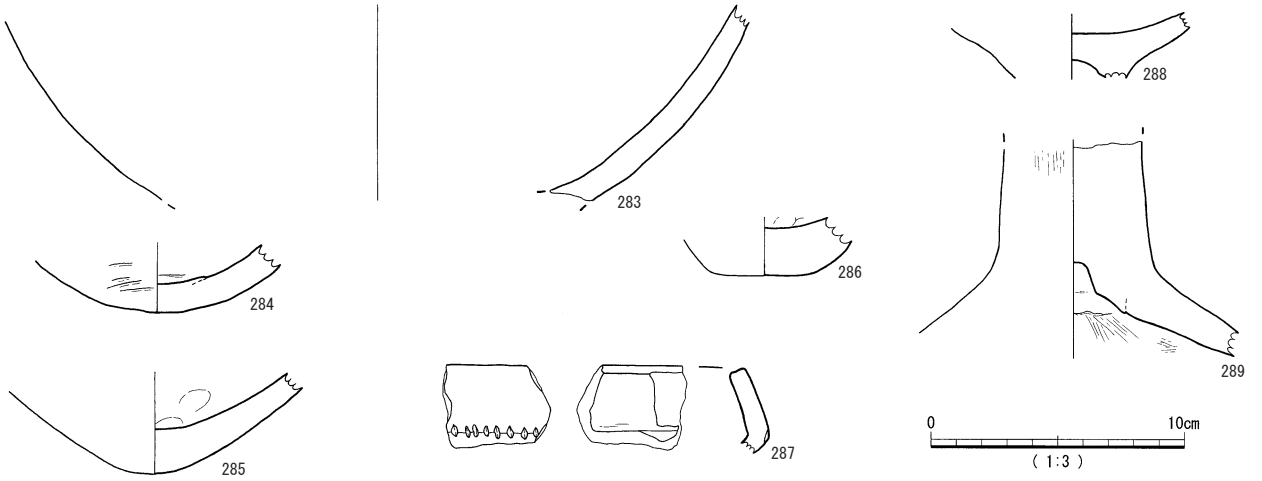
石製品（753）

砂岩製台石が出土している。厚さ７㎝余りの表面が摩滅した大きい転石を使用しているが，三方が欠損している。上面に敲打痕が見られる。残存長21㎝，幅17㎝で，約５kgある。編集の都合で第110図にある。

台石の他に図化していないが，磨石様の自然礫２点と砂岩製砥石２点が出土している。砥石はともに不定形で１面を使用している。

⑨竪穴建物跡11号（第54図・第55図）

Ｅ－29・30区で検出された。北側は用地外へ延び，東側に竪穴建物跡12号が隣接している。長径約5.5m，短径約3.5mの円形を呈する。上面を削平されており，範囲の絞り込みをしようと数㎝下げたところ，上段の埋土が消失してしまった。破線で示したラインは，当初検出した際に略測していたものである。床面と柱穴と思われるようなピット・張り出し部は検出されなかった。中央は



第53図　竪穴建物跡10号出土の土器（５）

浅い土坑状に一段下がっており，土器や礫が集中していた。また，中央よりやや南東に略円形で焼土がブロック状にたまった範囲が見られた。埋土②（５㎜大の焼土粒が多く混ざる。混ざり方は多少濃淡がある）に由来すると考えられる。

出土した土器はいずれも小片であった。

甕形土器（290～295）

290・291は，口縁部である。290は頸部に明瞭な稜をもち，口縁部が外傾する。口唇部はナデ調整で端部に平坦面を有し，内面側にわずかに肥厚する。口縁部は内外面ともハケナデ調整を主体とし，胴部外面は水平方向の幅広のタタキ痕が残る。厚みは異なるが，土器溜５出土の482に近い印象である。291は口縁部が長く，頸部の屈曲も緩い。外面は斜位のち横位のハケナデ調整で仕上げられているが，器面に緩やかな凹凸が生じているためタタキ成形の可能性もある。口唇部は平坦で，器壁も薄く丁寧な作りである。

292～295は脚台である。292は器壁が厚く，器形もゆがんでいる。外面は粗いユビナデ調整で，脚台内面は幅広のハケ目が複数切り合っている。293も器形にゆがみがあり，接合面も粗く残っている。294は底部が外反して開くタイプで，内底面の断面は台形状を呈する。底径に対し器高が低く，器壁は薄い。295は器壁が薄く，緩やかに底部に広がるタイプである。内外面とも摩滅しており内底面にわずかに横位のナデ調整が残存する。

壺形土器（296～299）

296～298は胴部突帯である。296は胴部最大径と思われる部分に横位の４条の沈線を施し，その後斜位の沈線を加えて突帯様の文様を描いている。土坑42号出土の440に類する。297はハケナデ調整を施した胴部最大径部分に，幅広で薄い突帯を巡らせている。内面は大ぶりの指頭押圧で器面に凹凸がみられる。298は胴部最大径よりやや上位に幅広の粘土紐を貼り付け，その上位に横位及び縦位の沈線を施して多重突帯状にしている。外面には，斜位の細かいハケナデ調整が部分的に残っている。

299は底部である。丸底で，内面は摩滅している。

高坏形土器（300・301）

300は坏部で，坏の深さが低く口径が大きいものと考えられる。器壁は薄く，胎土は軟質で精製されており，砂粒をほとんど含まない。内外面とも摩滅し，器面が剥落している。301は薄手で小型の脚部で，穿孔が１か所残存する。外面は縦位及び斜位のハケナデ調整である。

小型丸底壷（302）

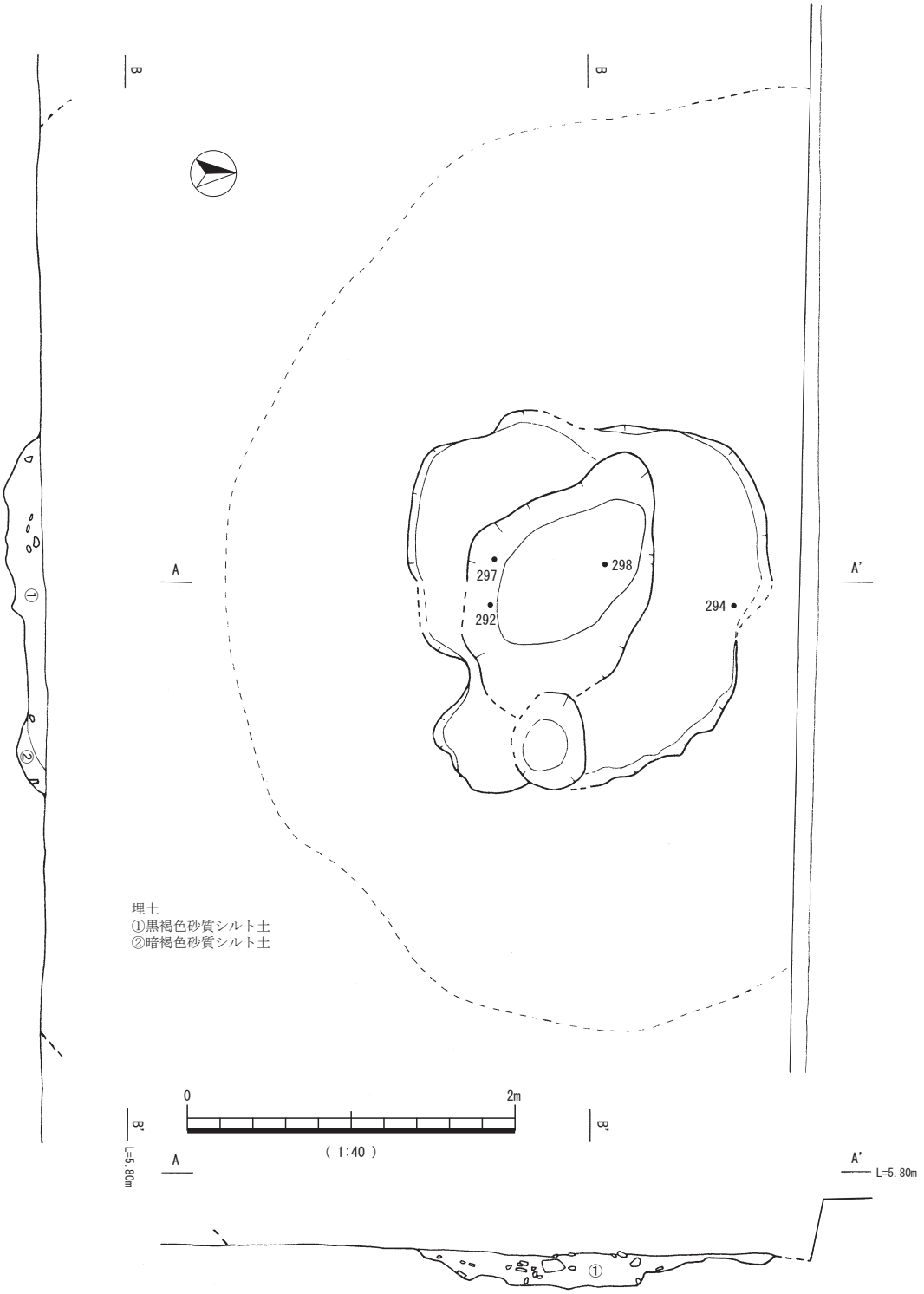
口縁部～胴部である。口唇部は細く舌状を呈し，頸部で屈曲し緩く膨らむ。胎土は軟質で精製されている。

免田式土器（303）

免田式土器の長頸壷の頸部付近と考えられる。上半は縦位及び斜位のミガキ調整で，屈曲部以下は横位の沈線に縦位の細かい刻み状の沈線が描かれている。沈線は，重弧文の端部の可能性もある。

⑩竪穴建物跡12号（第56図～第58図）

Ｅ－30区で検出された。北側は用地外へ延びている。残存部分で長軸3.2m，短軸約1.4mある円形の平面を呈する。南東側に幅約60㎝，奥行約30㎝の丸みを帯びた張り出し部がある。２段になっており１段目の深さは24㎝，２段目は，16㎝である。２段目の径は約210㎝である。当初，北壁の壁面に半分かかる不整形プランを検出した。中央の落ち込みには楕円形に炭層やシルト層が広がる範囲があったが，通常の床のような硬化した状況が見られなかった。また，落ち込みの南壁には，おおよそ埋土④のシルト層の範囲に樹痕がからんでおり，軟質で明確に立ち上がりをつかむことはできず，柱穴等も検出できなかった。北壁の状況からみて，当初埋土③・④を床とす

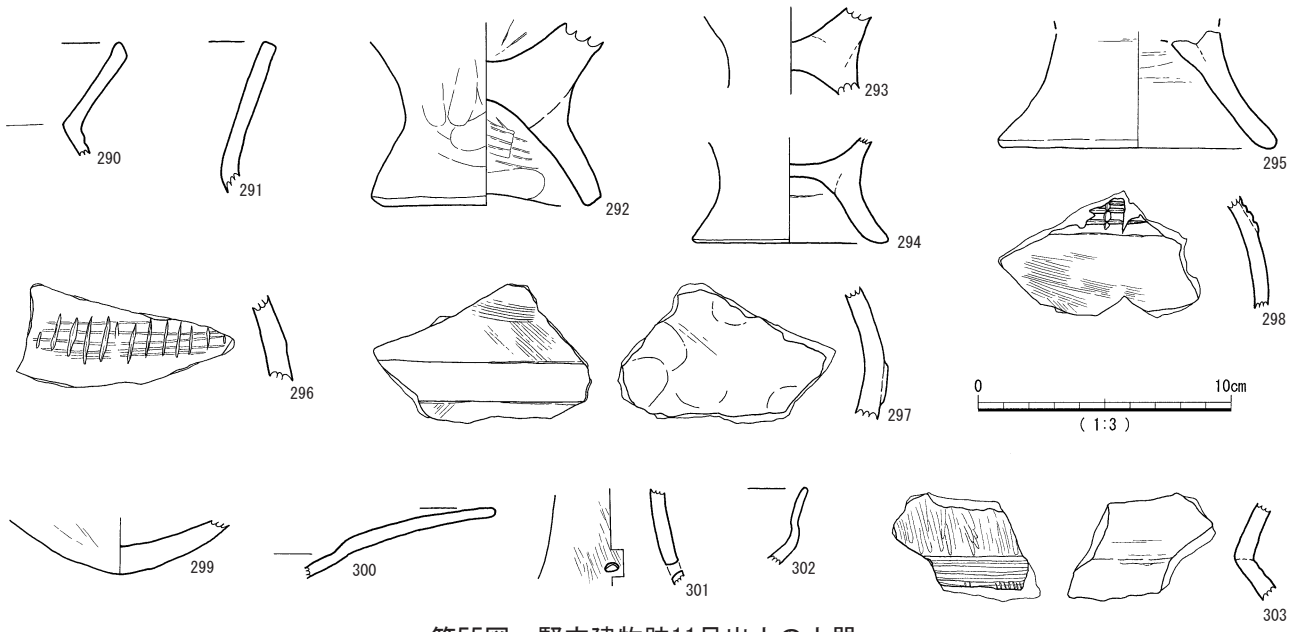


第54図　竪穴建物跡11号の平面図・断面図

る遺構があり，②が間層として埋まり，埋土①が掘り込まれたと想定される。段落ちした部分は床面が安定しておらず，中央に舌状の高まりがある。遺物は，検出時の輪郭ラインから北壁に向かって１段下がっている範囲から，甕形土器を中心としたやや大型の土器片が出土した。舌状の高まりを挟んで，西側に口縁～胴，東側に脚がまとまっている。

甕形土器（304～320）

304～307は口縁部がわずかに内弯する。いずれも，口唇部内面が筋状に凹む。304は頸部内面の稜は比較的緩く，口唇部外面も丸みを帯びている。また，外面は被熱により黒変し，内外面とも器面はただれたように荒れている。305は口唇部が外傾し，内面側がやや張り出す。頸部は横位のナデ調整により，明瞭な稜が作出されてい



第55図　竪穴建物跡11号出土の土器

る。内面調整が良好に観察でき，口縁部～頸部は横位のナデ調整，胴部は斜位のハケナデ調整で，部分的に指頭押圧が横位に連続して施されている。306・307は口唇部がナデ調整により外面側にやや張り出し，口唇部下は横位のナデ調整により帯状に凹む。306は摩滅しているが調整が観察でき，外面は斜位のハケナデ調整後，口縁部から屈曲部下まで横位のナデ調整である。内面も同様に頸部は横位のナデ調整で，胴部は傾きの異なる斜位のハケナデ調整が連続して加えられている。307は頸部内面の稜がやや張り出し，段状になるもので，内外面の調整は他の資料に類似する。

308～313は口縁部片で，308・311・312は外傾，309は内弯，310・313は外反する。309は器形や器壁が薄い。稜線が緩く全体的に粗雑である。310は口唇部が平坦で外傾し，外面はカキアゲ状のハケナデ調整の後，頸部付近に横位のナデ調整が加えられている。311は口唇端部が丸く稜も緩いが，308・312は口唇部にわずかに平坦面があり，頸部の稜が明瞭である。313は内外面とも摩滅しており詳細な比較はできない。外面を中心に指頭押圧状の凹凸があり，口唇部にはゆがみがある。309・312は，胎土に赤褐色および灰色の砂粒を多く含む。

314は頸部に付された突帯である。断面かまぼこ状の粘土紐を貼り付け，押圧状の刻みを施す。

315・316は体部と脚部の接合部である。315は胴部から底部へまっすぐ伸びて小さい平底の脇に脚台を貼り付ける形状で，底部近くは貼り付け易くくぼまっている。316は315と逆に厚い体部に薄い脚台を貼り付け，底部はやや大きい。

317～320は底部から脚台である。317の接合部は内側を補強して厚くしているが裾部は薄い。318の脚台端はコの字状となっている。319は高い脚台だが，薄い作りである。320は低くて薄く，外へ広がっている。体部が外へ開きながら立ち上がっていることから，鉢形土器の可能性もある。

壷形土器（321～324）

321は頸部に断面三角形状の突帯が１条巡るもので，器壁は薄く，外面には水平及び右上がりのタタキ痕が残る。胴部が球胴状に膨らむ器形である。ただし，色調が黄褐色を呈する点や，頸部突帯が付く点が他の資料と異なり，搬入品の可能性がある。322は大型で長胴の壷形土器で，下部に緩い三角形状の突帯が１条巡る。内外面とも摩滅しているが，外面に水平方向のタタキ痕が部分的に残存しており，器壁も薄い。胎土にやや大粒の砂粒が目立ち，３㎜大の赤褐色粒が多く含まれる。また，２㎜大の黒曜石様の黒色をしたガラス質礫を疎らに含む。323・324は小さな丸底である。内外ともヘラナデ仕上げである。

高坏形土器（325）

325は坏部と脚部の境界を充填するソケット状の部分で，上面は坏部内面にあたる。

小型壷形土器（326）

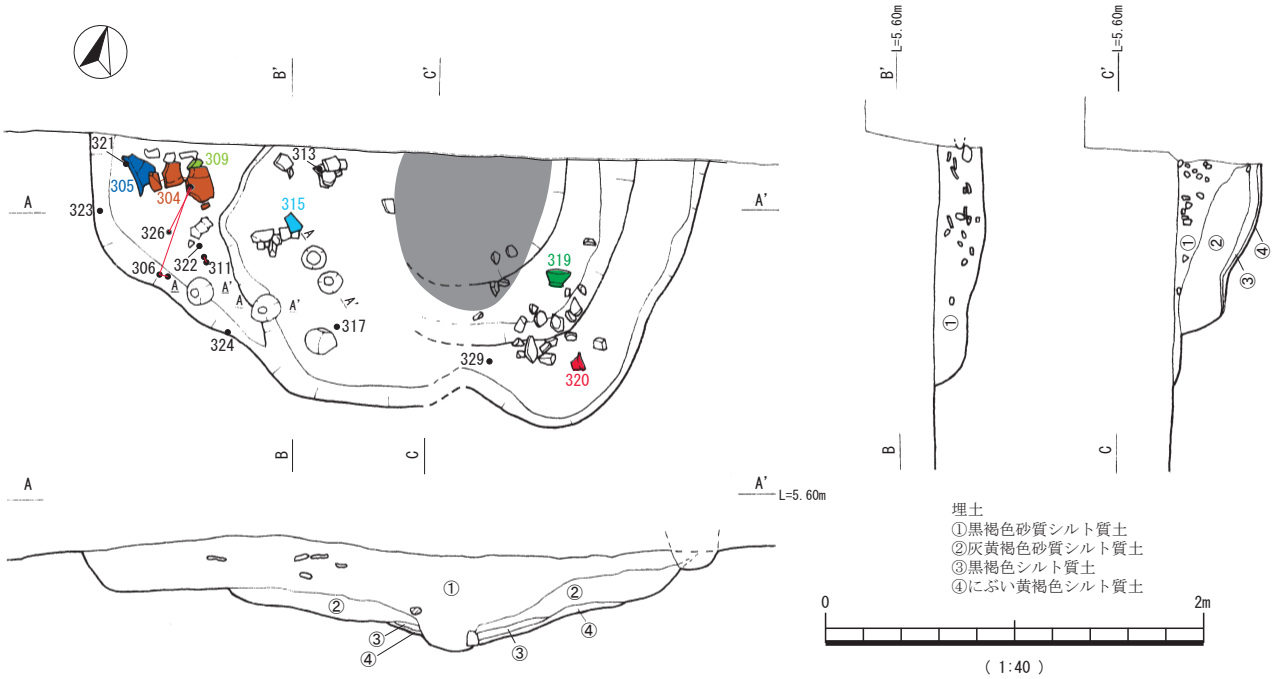
肩部から底部までが残存しており，底部は不安定な平底である。最大径は胴中央にある。外面・内面ともヘラ縦ナデを主とするが，外面にはハケナデがみえる。

鉄製品（327・328）

327は扁平な無茎鉄鏃で，六角形を呈している。長さ3.2㎝，幅2.7㎝，厚さ0.6㎝である。328は扁平な棒状鉄製品で上下を欠いている。幅1.1㎝，厚さ0.9㎝である。

ガラス玉（329）

青色を呈するガラス玉で，径0.4㎝の球形を呈し，孔径は0.2㎝である。



第56図　竪穴建物跡12号の平面図・断面図

２）竪穴状遺構（第59図～第65図）

Ｄ－28区で検出された。西側は生活道脇の上下水道管付設により消失している。土坑43・44号に接し，長径11ｍ×短径約９ｍの楕円形を呈し，深さが約80㎝ある。２段構造となり，１段目・２段目とも20㎝下がっている。２段目は１辺約5.6ｍの隅丸方形を呈す。上面や，中央からゆるやかに立ち上がる部分でややまとまりのある遺物が出土した。この遺構は当初，竪穴建物跡として扱ったが，形状や深さなどから建物としてはなり得ないことから竪穴状遺構とし，土器溜６として扱う。

甕形土器（330～351）

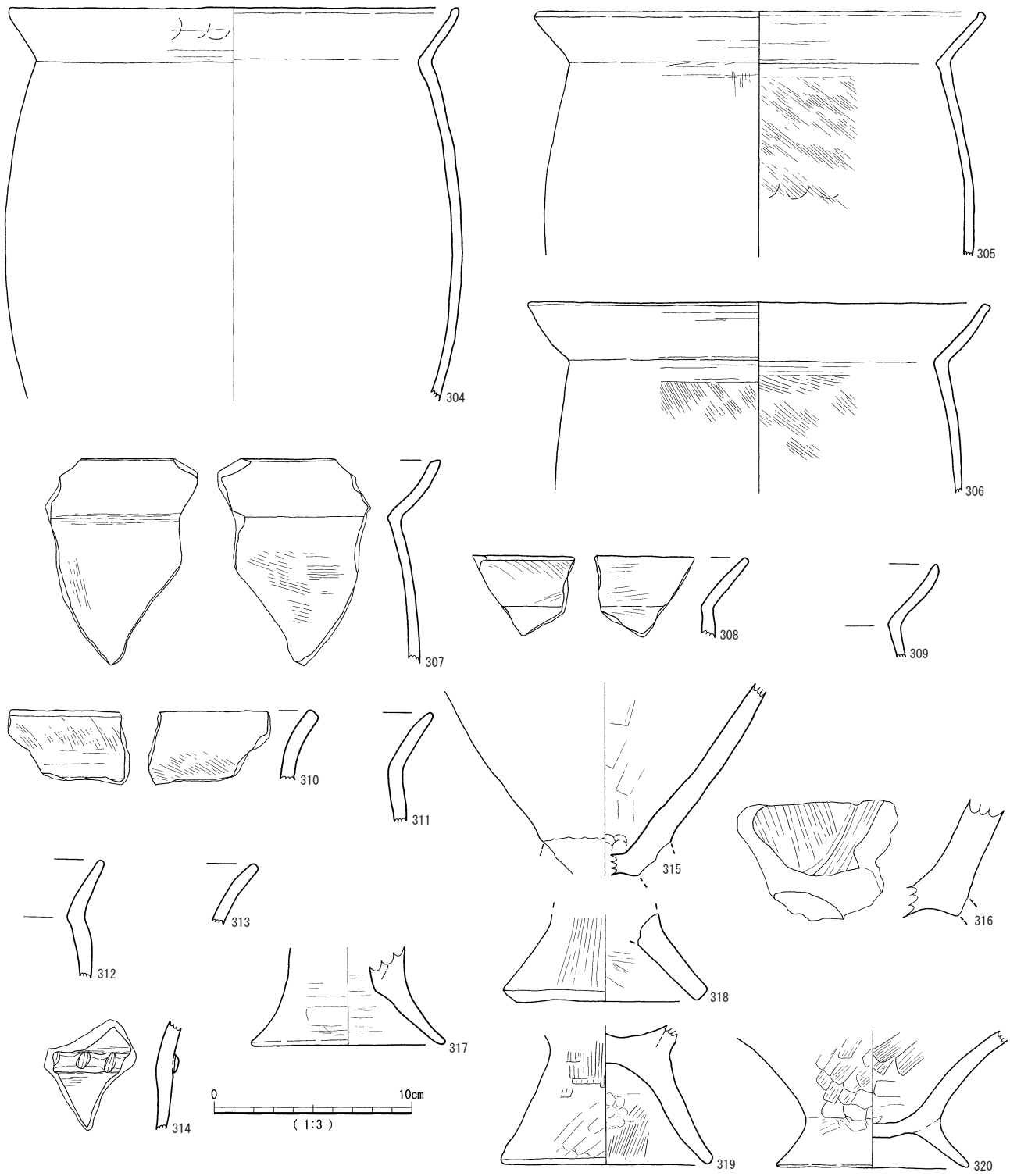
いずれも破片であり，器形が完全に復元できた資料はなかった。

330～336は口縁部である。330・331は外傾するもので，口縁端部は平坦面を有する。330は内外面とも摩滅しているが，外面にはタタキ痕と思われる浅い筋が残存する。332は口縁部が外反するもので，胴部が広く張る器形と考えられる。口唇部内面には指頭押圧が明瞭であり，口唇部を引き延ばして成形したことが分かる。333はタタキ調整で，幅広い水平方向のタタキ痕がみられる。334・336は，屈曲部から直線的に外傾する口縁部である。334は口唇部が外傾し，内面側に張り出す。外面は，丁寧な横位のナデ調整である。335は下端にわずかに頸部の屈曲が残っており，胴部が膨らむと考えられる。口唇部が舌状を呈する点で他の資料と異なる。色調が明るく，３㎜大の長石をまばらに含む。336は頸部に刻みを伴う突帯が付くもので，突帯下で緩く膨らみ，底部にすぼまる形と考えられる。在地系の特徴を有するが，甕形土器に突帯が付くタイプは少なく，本遺跡の中でもやや時期が新しいものと位置付けられる。

337・338は，頸部～胴部である。337の頸部は内外面とも横位のナデ調整で，胴部は縦位または斜位のハケナデ調整である。特に外面は，胴部上半から頸部にかけて斜位，縦位，横位と連続したハケナデ調整が施されている。338は器壁が薄く，外面は水平方向及び若干左上がりの幅広で密なタタキ調整である。内面には，細かい斜位のハケナデ調整が施されている。いずれも，球胴状を呈すると考えられる。

339は厚手の胴部片で，外面には水平方向のタタキ痕とその上位から斜位または縦位のハケナデ調整が加えられている。土器溜７の540・541といった，厚手で平底となる器形と考えられる。

340～351は，底部・脚台である。脚台は，胴部との接合面で剥落したものが多く，胴部に外側から貼り付けて成形していることが分かる。340は薄手でゆがみが少なく，小型のものと考えられる。341は内外面とも摩滅しているが，外面にはユビナデ調整と考えられる縦位の筋が残存する。石英・白色粒が多い，砂質の胎土である。342の底面は，端部を成形した際の指頭押圧が輪郭に巡り，器面に凹凸が生じている。343は小型で器面調整も丁寧であるが，胎土は３㎜大の長石・赤褐色礫が目立つ。344はユビナデ調整により，内底面が盛り上がっている。端部は平坦面をなす部分や丸みを帯びる部分があるなど一定ではなく，歪んでいる。341・345は脚部の断面が台形状を呈するもので，器壁も薄く，器高に対し径が広い。台付鉢の可能性もある。346～349は外反して開くタイプで，346のように器高に対して屈曲が強いものや，348のようにほぼ直線的に近いものなどがある。上げ底の底部

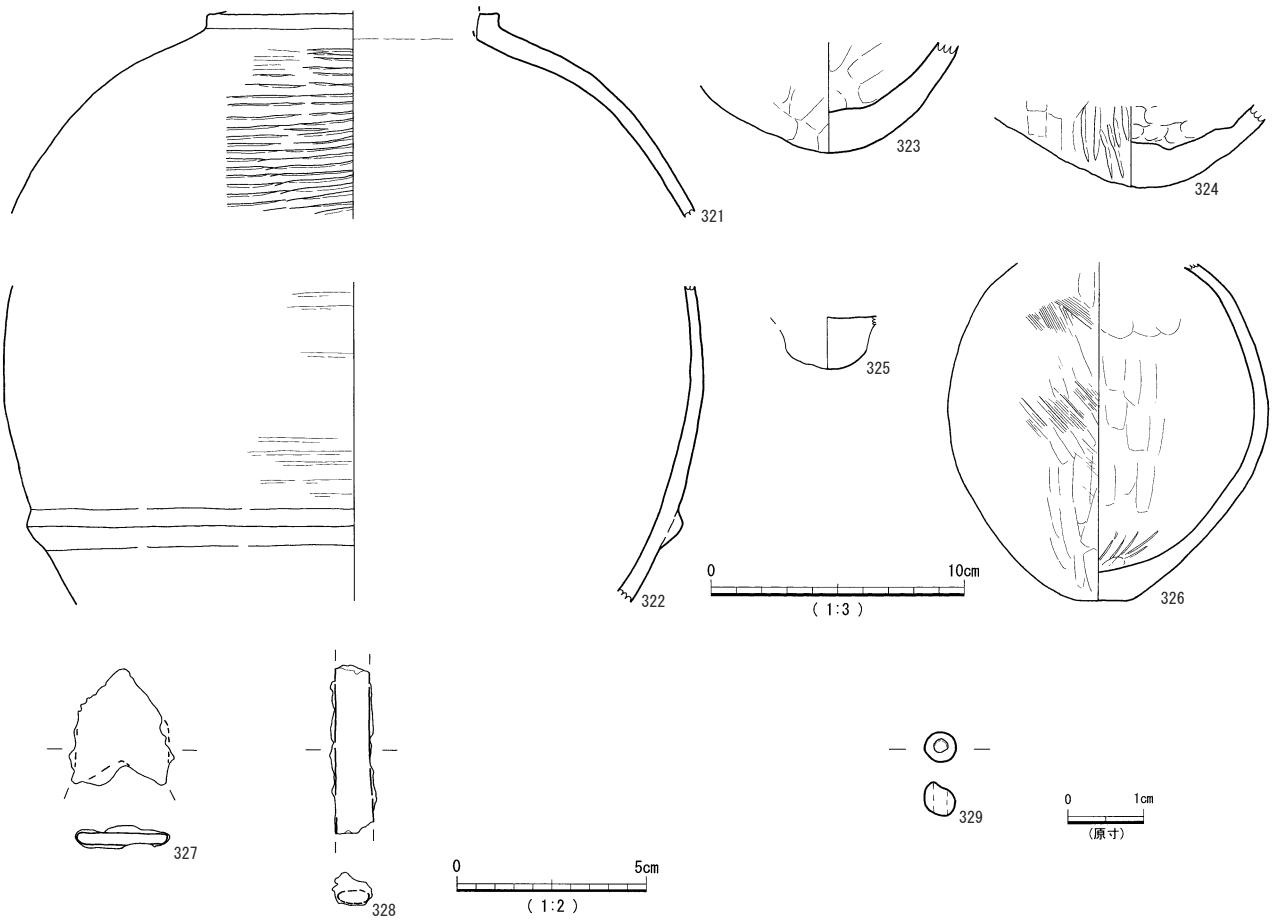


第57図　竪穴建物跡12号出土の土器（１）

で，粗いユビナデ調整で端部を成形している。器壁が厚手である。346は全体的に器壁も薄く，端部が舌状を呈する。また，胴部境界の屈曲部の径に対して底部が広く，台付鉢の台部の可能性もある。347は胴部との接合面で剥落しており，端部の内面は被熱により器面が荒れている。349はやや外膨らみになる器形で，器高は低い。胴部との接合面で剥落しており，端部はわずかに丸みを帯びる。350は直線的に端部に広がり，底径はさほど大きくない。351は外面に屈曲部から掻き上げるようなハケナデ調整がわずかに残る。

壷形土器（352～390）

352・353はやや外反する短頸壷である。



第58図　竪穴建物跡12号出土の土器（２）と鉄製品・玉

352の外面は，頸部付近は縦位，口縁部付近は斜位のハケナデ調整が連続して加えられている。色調は明るく，長石や白色粒を多く含む。353は内外面とも摩滅しているが，赤みの強い色調でスリップ掛けしたような質感である。いずれも，口唇部は丸みを帯び，平坦面は明瞭ではない。

354～356・358は二重口縁壷である。いずれも屈曲部に刻みを有し，全体的に稜が緩く作りも粗雑である。354は屈曲部から口縁部までが短く，外面に水平方向のタタキ痕が残る。355はわずかに屈曲するが稜も緩く，ゆがみも大きい。354・356は浅い押圧状，358はハケ目が明瞭な工具での刻みが施されている。刻みの工具は，頸部のハケナデ調整の工具と同一である。

357は口縁部が断面三角形状に肥厚しており，胎土は軟質である。

359の上端は擬口縁であり，本来は二重口縁ないしは肥厚する口縁であったと考えられる。外面は摩滅しているが下半にハケナデ調整が残っており，内面はケズリ後ナデ調整を主体としながら接合部を中心に縦位のユビナデ調整が明瞭にみられる。

360～366は頸部から肩部付近の破片である。

360・363は頸部に断面三角形状の突帯を１条巡らせるもので，いずれも頸部内面には縦位のユビナデ調整がみられる。器壁は薄く，肩部が張って胴部が膨らむ器形である。360は内外面とも摩滅しているが胎土は精製されている。361は肩部が張る器形で，頸部は口縁部への立ち上がり部分で剥落している。剥離面の向きから，口縁部はほぼまっすぐ立ち上がるものと推定される。内面には緩い横位の凹凸が連続してみられ，ユビナデないしはタタキ調整の当て具痕の可能性がある。表面が361も375と同様に，内面は赤色の粘土膜が剥がれるように摩滅している。362は頸部で，突帯を１条巡らせ斜位の刻みで縄状を呈している。色調は赤みが強く，二重口縁壷の頸部と考えられる。363は，胴部内面に細かいハケナデ調整がみられる。365は肩部に円形浮文が施されている。366の肩部はハケナデのあと２条の横沈線に挟まれた列点文がある。

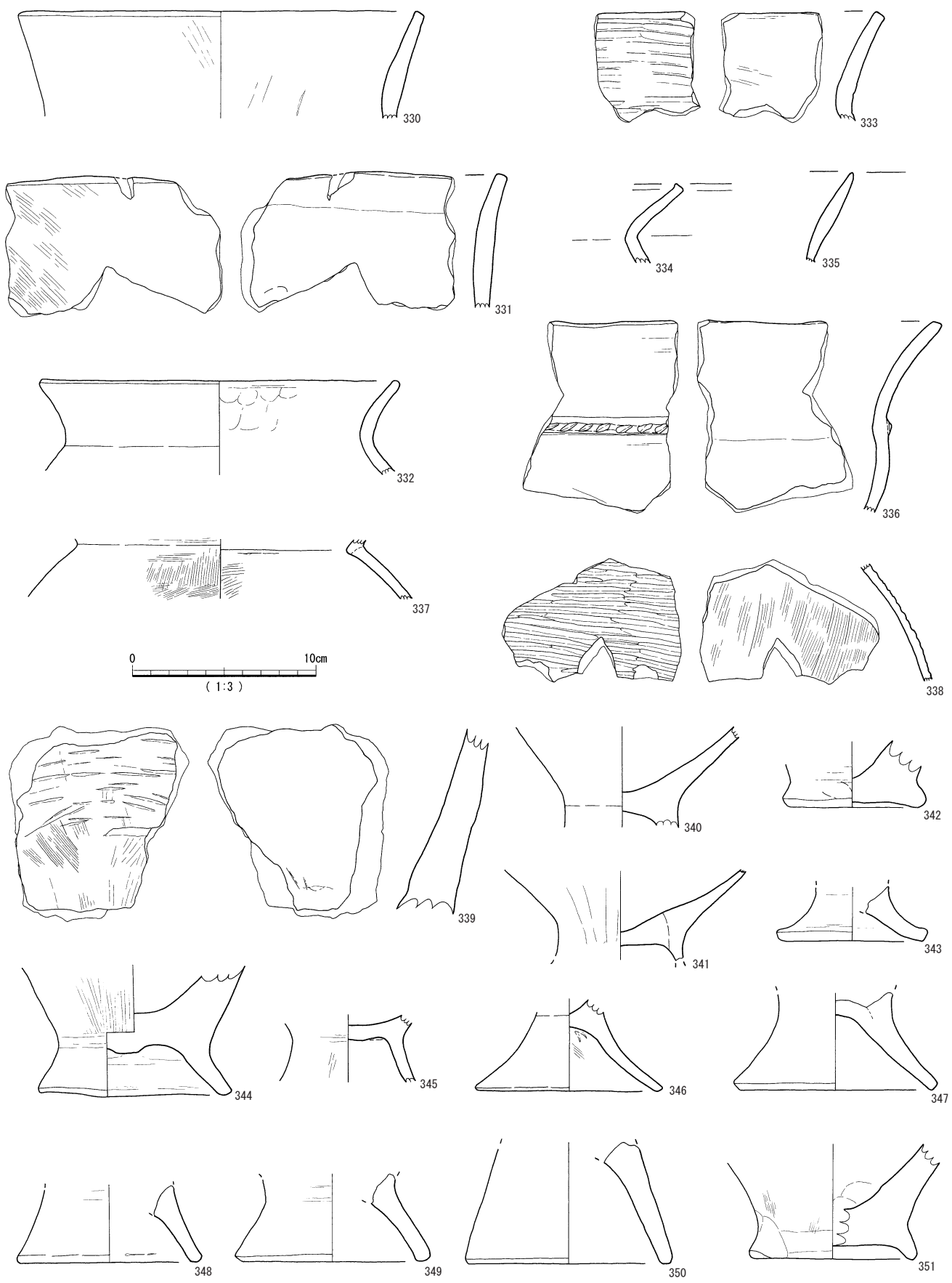
367～373，376～380は，胴部の突帯である。367は，土器溜７出土の566に類似する。368は，688に非常に近い形態である。内面は大ぶりの指頭押圧である。369・377は断面かまぼこ状の粘土紐を巡らせ，377は押圧状の斜位の刻みを施す。370～372は幅広で薄い突帯を貼り付けるも



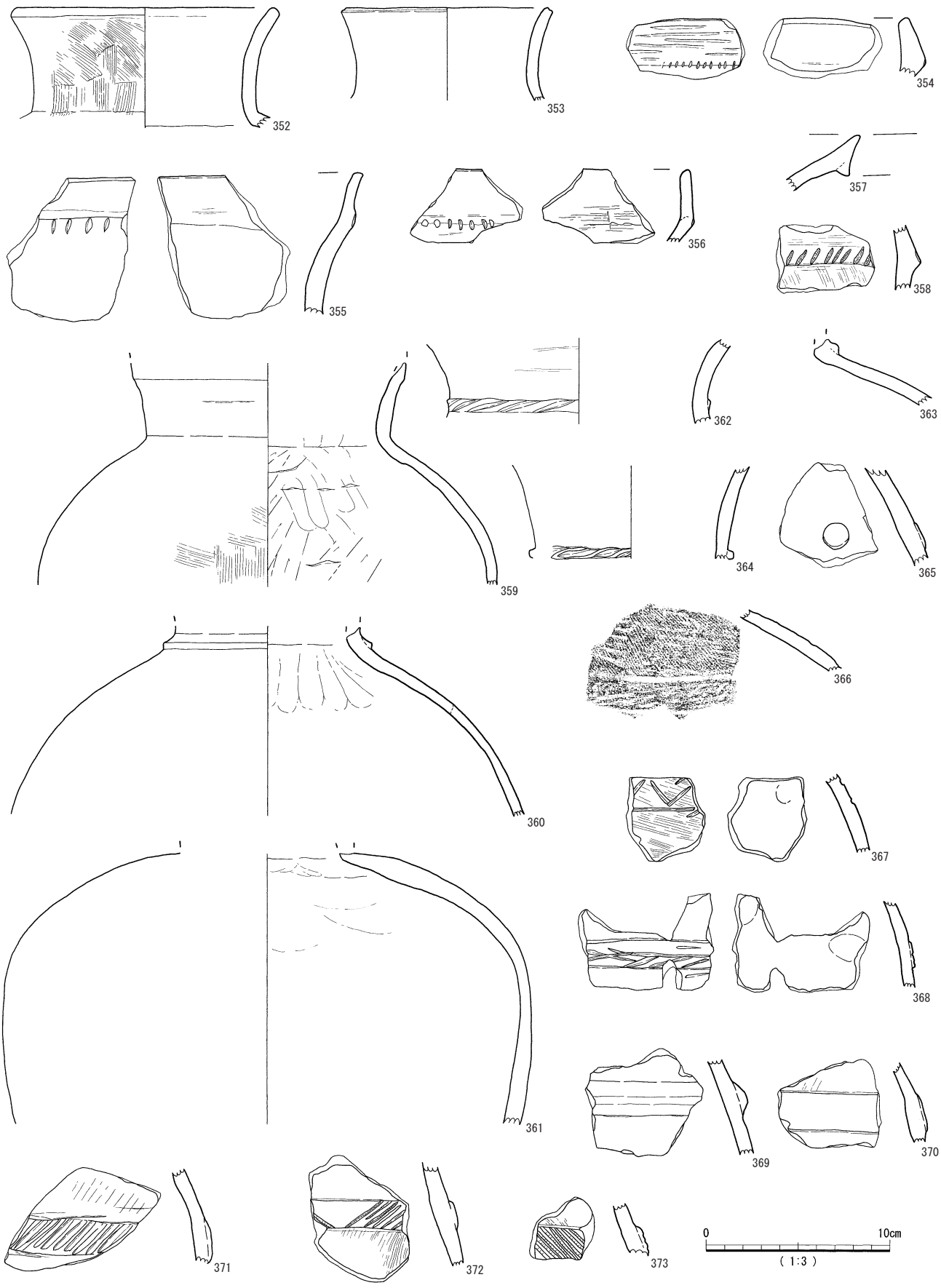
第59図　竪穴状遺構の平面図・断面図

ので，370以外は浅い斜位の刻みを施している。372のように左右に展開するパターンもあり，バリエーションがみられる。374の外面は，ミガキ様の丁寧なナデである。また，内面は縦位のユビナデ及び指頭押圧により，器面に凹凸が生じている。硬質で焼成も良好である。胎土は黒褐色を呈し，表面のみ赤く発色する粘土を重ねたような断面を呈している。375は球胴状を呈する胴部で，底部付近に穿孔がみられる。穿孔は，外面側の剥離が広いため，内面側から空けられたと考えられる。内外面とも摩滅しており，内面は赤色の器面が膜状に剥離するようであり，赤色に発色する粘土を内面に使用していた可能性もある。また，下半は被熱により赤変している。二重口縁壺に特徴的な赤い色調で，胎土には長石及び白色礫を多量に含む。

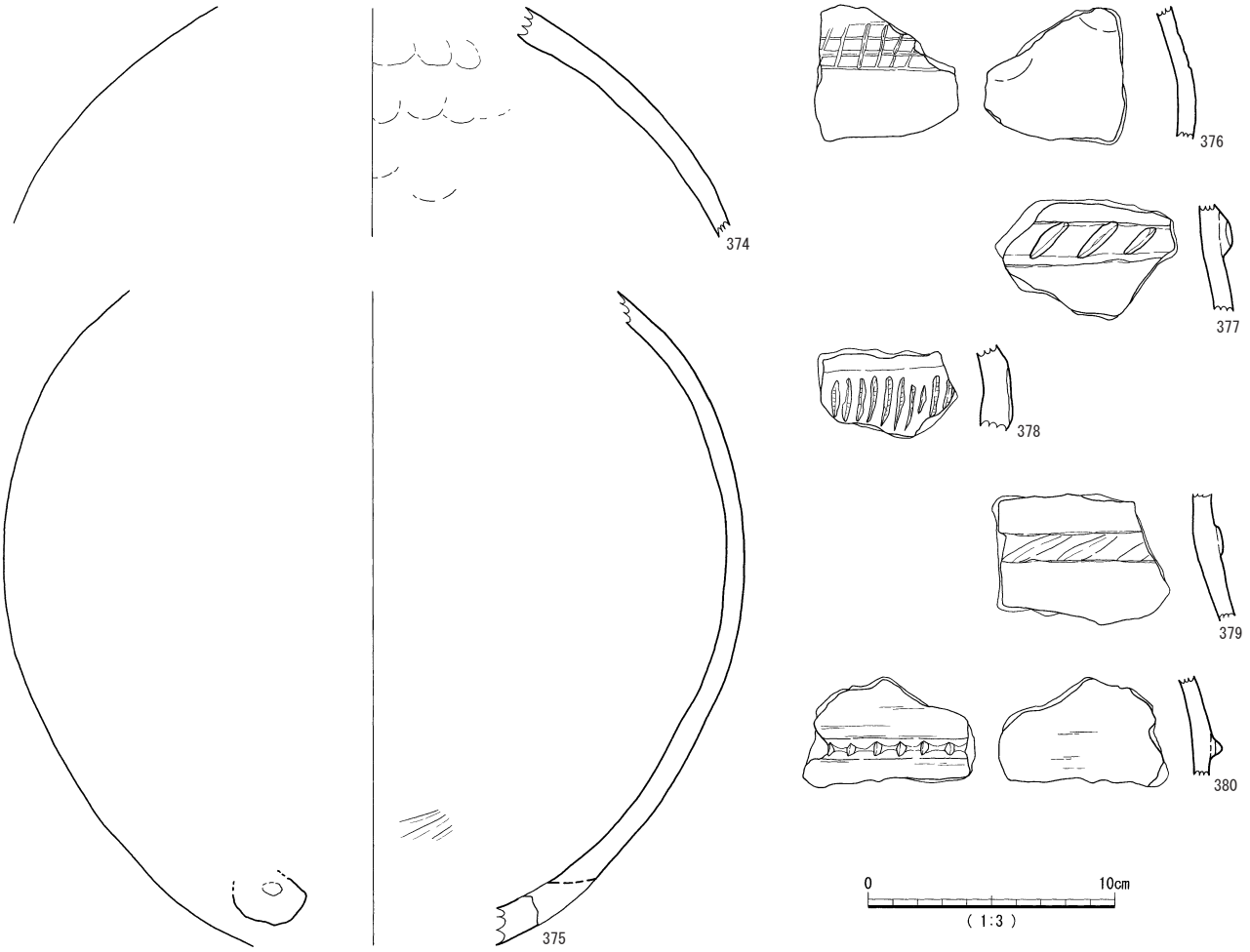
376は沈線で鋸歯状ないしは格子状の文様を描き，突帯状を模している。377・379は突帯に左下がり刻みが施さ



第60図　竪穴状遺構出土の土器（１）



第61図　竪穴状遺構出土の土器（２）



第62図　竪穴状遺構出土の土器（３）

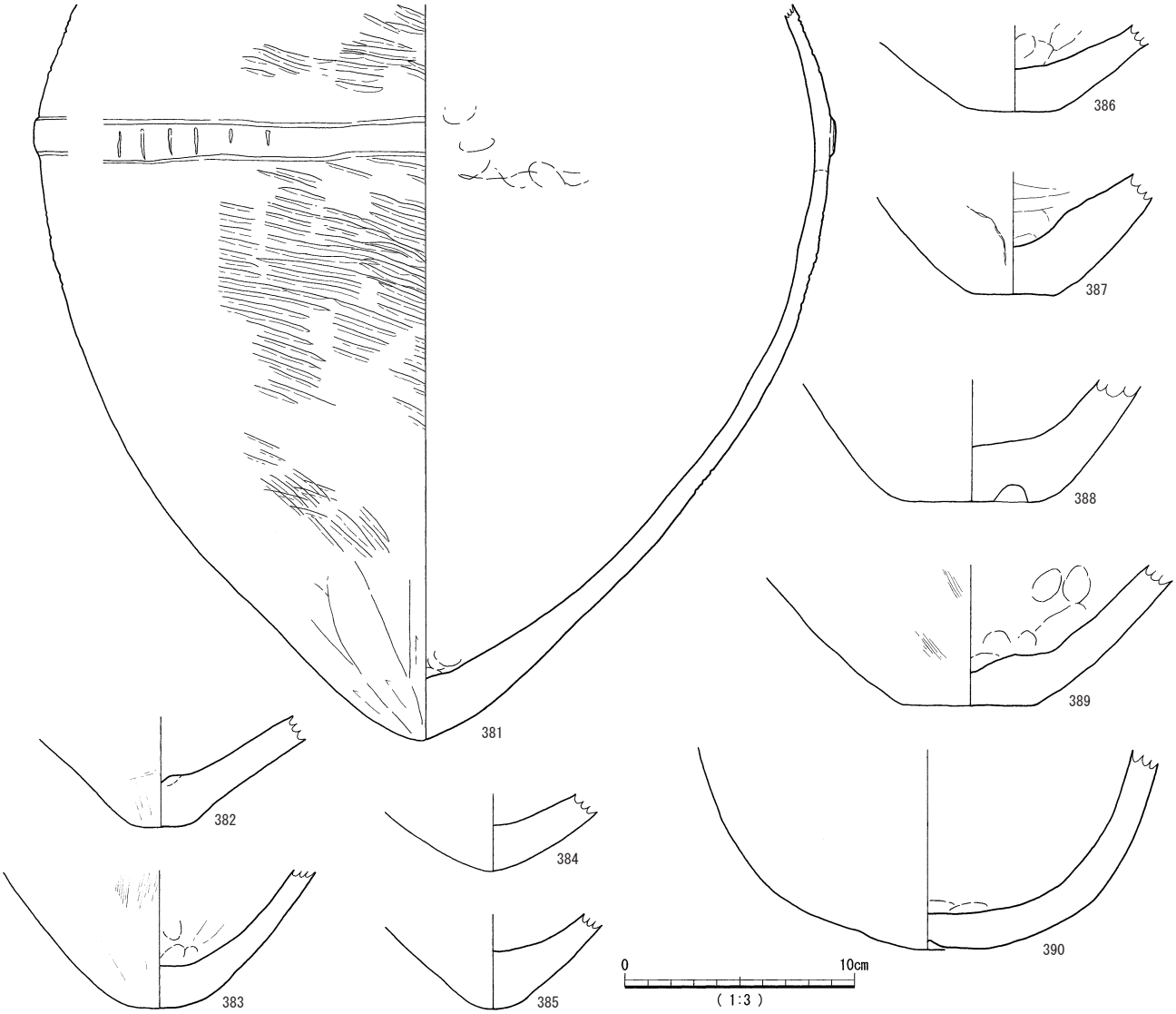
れている。378は，肥厚した部分に縦位の沈線状の粗い刻みを施している。380は，幅が狭く断面三角形状を呈する突帯の頂部にやや深い刻みを施している。

381は，比較的器形が復元できた資料である。胴部最大径に幅広で薄い突帯を巡らせ，刻みを施している。突帯上の刻みは，摩滅のため部分的にしか残存しない。胴部外面には左上がりのタタキ調整が連続して加えられ，器壁は薄い。また，底部付近はケズリ後ナデ調整で尖底をなす。内面は突帯裏面に指頭押圧やユビナデ調整が集中し，内底面に指頭押圧が部分的にみられる。下半はスス痕が黒斑状をなし，内外面とも器壁がただれており，被熱によるものと考えられる。大きさに対し，器壁が非常に薄いのが特徴である。

382～390は底部で，382はレンズ状の丸底，383は尖底に近い丸底，384・385は尖底，386～389は平底，390は丸底である。内底面付近は指頭押圧が目立ち，胴部はナデ調整である。特に，389は内底面付近の指頭押圧が深く，明瞭である。383は外面調整が比較的残存しており，ケズリに近い工具ナデの後，ハケナデ調整が加えられている。384・385は色調が赤みを帯び，385は胎土に長石及び白色の角礫を多量に含む。386は胎土が粗く，２～５㎜大の白色円礫を多く含む。387・388は器壁が厚く，388は底面に1.5㎝ほどの略円形の凹みがあり，種実等の圧痕と考えられる。390は底面に凹みがあり，礫などが当たった可能性がある。

高坏形土器（391～407）

391～398は坏部である。391・394は口縁部が広く外反し，口縁端部がほぼ水平になる。屈曲部は段状になり，下部が緩く膨らむ。いずれも屈曲部下はケズリ後ナデ調整で，内面には帯状のスス痕があり，蓋として転用されていたことが分かる。調整や器形等が類似しており，同一個体の可能性がある。394は外面にわずかにタタキ痕がみられる。392・393は器壁が薄く丁寧なつくりで，392は口唇部がナデ調整により溝状に凹み，屈曲部の接合面で剥落している。内外面とも摩滅しているが，内面にわずかにハケナデ調整が残っている。393は口唇部が舌状を呈し，内面は細かいハケナデ調整が施される。軟質で，赤色粒を多く含む精製された胎土である。398と同一個体と



第63図　竪穴状遺構出土の土器（４）

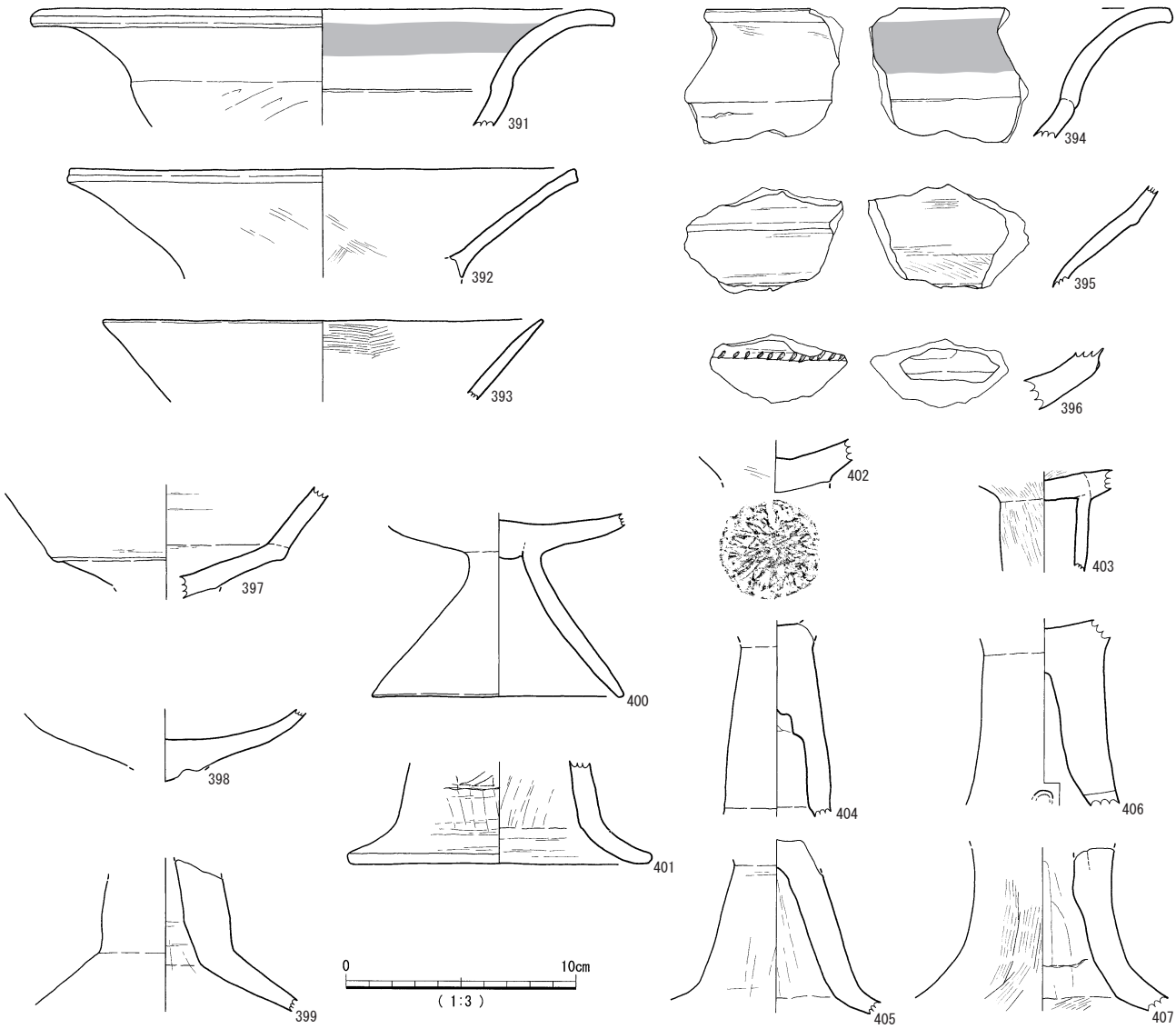
考えられる。395・396は坏部の屈曲部片で，396は屈曲部に刻みが施されている。395は丁寧なつくりで，外面の屈曲は横位のナデ調整によってつまみ出されるように作出されている。また，内面上半はミガキ様の丁寧なナデ調整である。397は径に対して器壁は厚く，屈曲部は段状になって口縁部が外反する。

399～407は，脚部である。399・407は坏部との接合面で剥落しており，脚部を筒状に成形していることが分かる。また，器壁は厚手である。400は薄手でスカート状に開き，端部は丸みを帯びる。接合面から，筒状に成形した脚部に粘土を充填し，塊状の坏部と接合していることが分かる。色調が明るく，胎土は軟質で精製されている。401は裾部付近で強く屈曲して開くもので，胴部外面は縦位の工具ナデ，内面はケズリ調整で成形され，横位のナデ調整により裾部の屈曲部が作出されている。402は坏部と脚部の接合面で剥落しており，脚部側に放射状の刻みが施されている。接着をよくするために施されたものと考えられる。

403は筒形を呈する薄手の脚で，胎土は軟質で精製されている。外面は斜位の細かいナデ調整であり，接合面が特徴的である。また，坏部と脚部との接合面には，刻みが施されている。404はエンタシス形を呈する脚部で，内面上部はヘラ状工具で調整した痕が渦巻状を呈している。下端にわずかに屈曲部が残る。

405～407は裾部が広く開くタイプと考えられる。

406は器壁が厚く，脚部が緩やかに広がるもので，端部に穿孔が部分残存する。407は脚部全体が外反する器形である。407は全体的に調整が粗く，内面は筒状に成形した



第64図　竪穴状遺構出土の土器（５）

際の縦シワと接合痕が明瞭である。外面及び内面端部付近は，ハケナデ調整である。

蓋形土器（408・409）

408は小さいつまみである。409は裾部に向かって直線的に広く開く器形で，端部がわずかに外反する。端部はナデ調整で平坦面を作出し，ややゆがみがある。つまみ状の把手があったと想定されるが，欠損している。外面は調整が部位で異なっており，上部はケズリに近いナデ，中位以下は斜位のハケナデ調整後ナデ調整である。内面は，把手に近い部分は指頭押圧が連続してみられドーム状を呈する。また，下半は横位・斜位のハケナデ調整後，暗文状にミガキ調整が加えられている。また，内面には幅広く帯状にスス痕がみられる。

鉢形土器（410・414・415）

410は薄手で平底の底部で，マリ形に近い胴張りの器形と想定される。内面には，幅の広いハケナデ調整が施されている。また，胎土に角礫状の長石を多量に含む。

414は粗いユビナデ成形の把手状の底部が付くもので，蓋形土器の可能性も考えられるが，口径に対し器高があり，弯曲するため鉢形土器と判断した。外面が部分的に平坦面状をなし，筋状の調整痕がみられるため，タタキ成形の可能性もある。口唇部は舌状を呈し，口縁～胴部にかけては丁寧なつくりである。

415は器壁が厚く，口径，器高に対して脚部径が大きい。接合痕からも，丸底の鉢に短い台状の脚が付くものと想定される。脚部の接合面には，縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。口唇部は横位のナデ調整により外面側が緩く凹み，口唇部は平坦面が作出されている。

免田式土器（411～413）

ソロバン玉状の器形を呈する小型壷形土器の肩部で，それぞれ細沈線の文様が描かれている。

411は櫛状施文具で圏線が引かれ，その間に縦方向ヘラ刻みが施されている。412は下に圏線を引いたあと，縦方向のヘラ沈線が施され，その上に下向きの重弧文が描かれている。413は細沈線の上向き櫛描波状文が描かれた破片で，中九州などで出土する長胴の大型壷の肩部文様に類似する。胎土に１㎜大の細かい赤褐色粒を多く含み，やや軟質である。

円盤形土製品（416・417）

土器を打ち欠いて円盤形とした土製品で，直径はおおよそ416が5.5㎝，417が6.5㎝である。

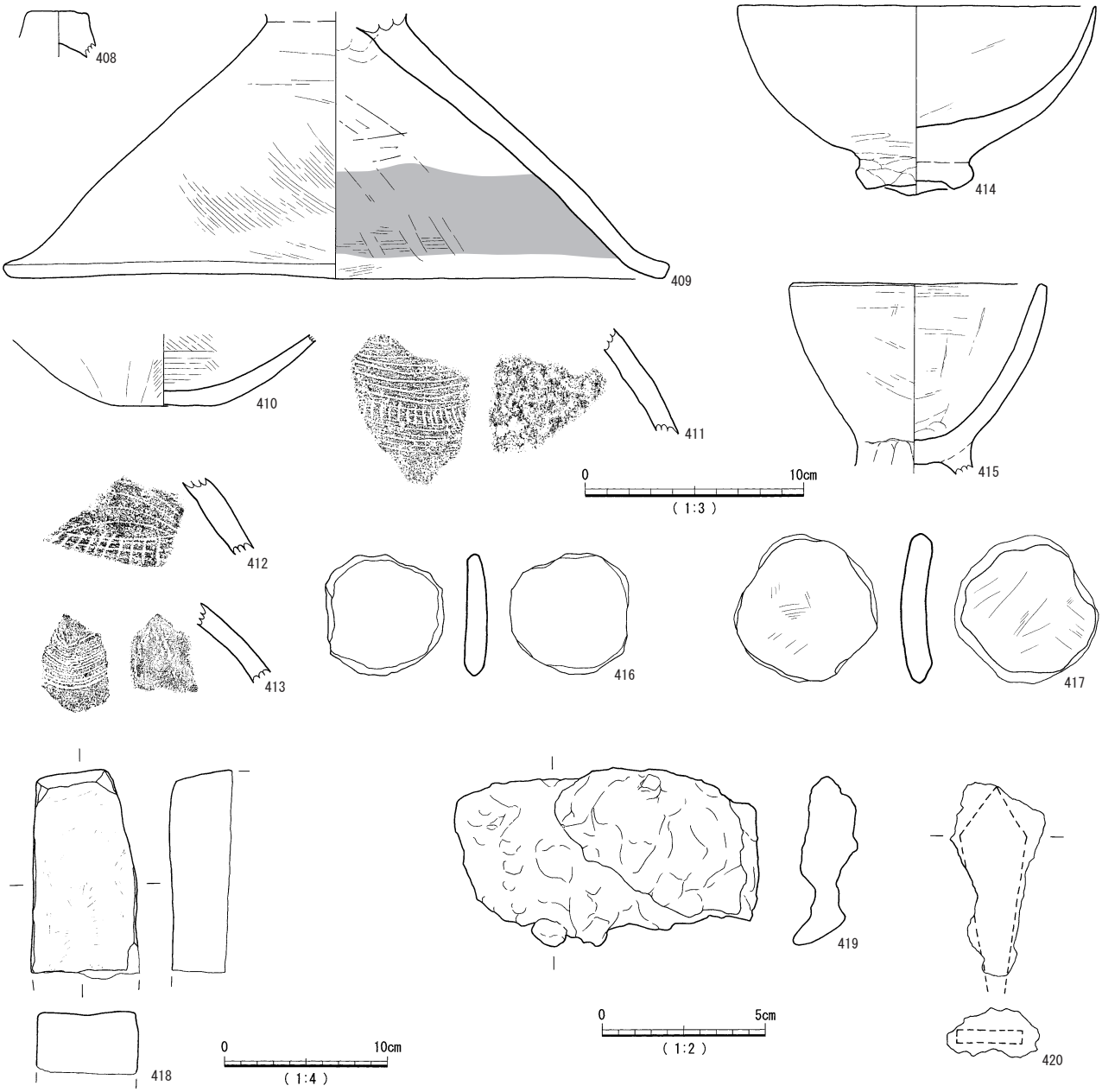
石製品（418・746（第109図））

418は砂岩製砥石である。最大長12.4㎝，最大幅6.3㎝，厚さ3.9㎝の直方体を呈し，表面を使用している。重さが602ｇある。

746は砂岩製の楕円形をした敲石で，短軸の一面を使用し，その衝撃で一部を欠いている。最大長13.2㎝，最大幅7.5㎝，最大厚4.6㎝で，重さは470ｇある。

鉄製品（419・420）

ともに錆化が進んで元の形がわかりにくい。419は両方が欠けており，幅は，4.5㎝程度で，厚さ0.7㎝ほどの薄いものと思われる。420は圭頭鏃と思われるが，先端部がはっきりしない。茎部は欠けているが断面は径0.8㎝ほどの円形をしている。



第65図　竪穴状遺構出土の土器（６）と石製品・鉄製品

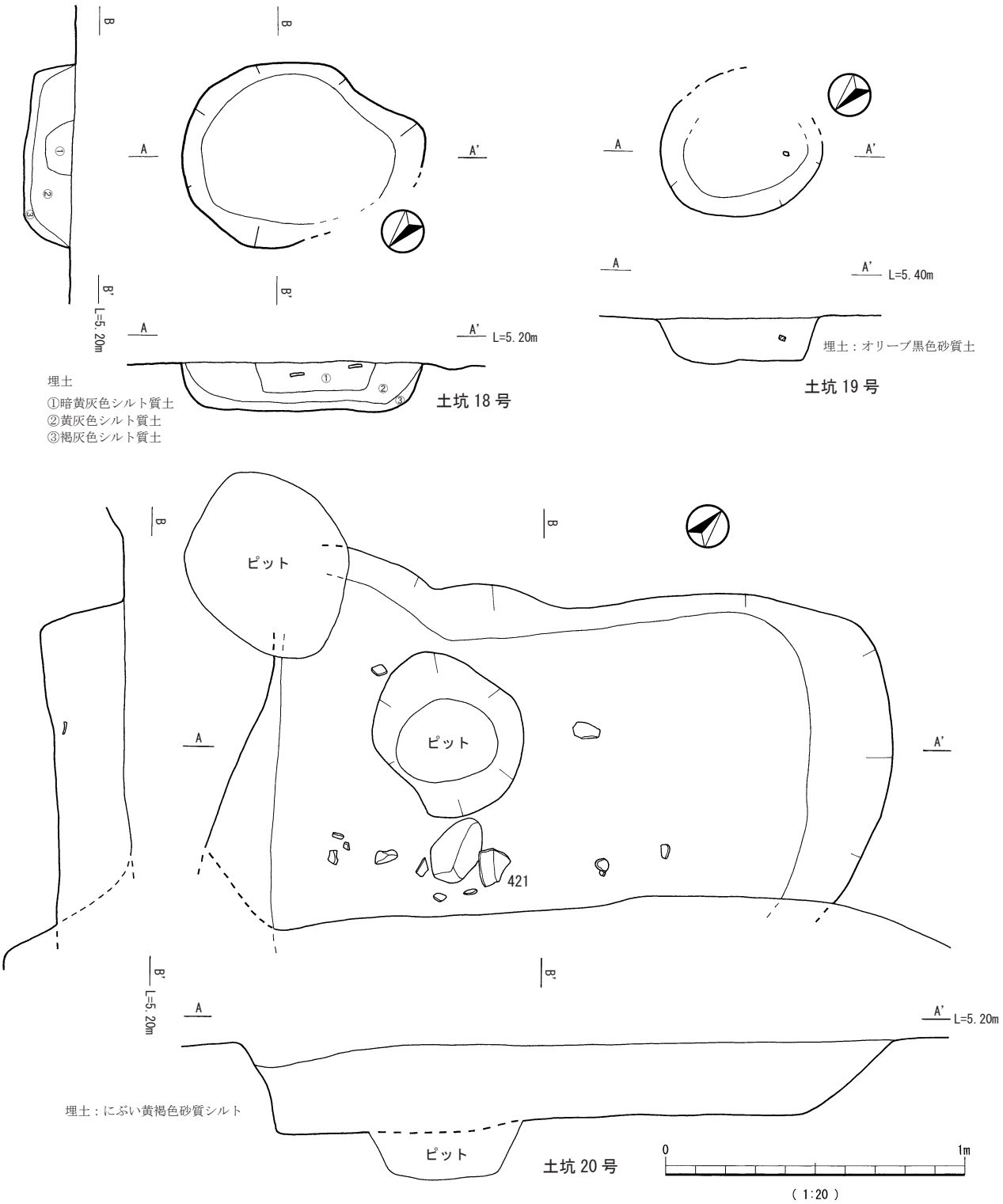
３）土坑

26区から30区にかけてのⅡｃ層で33基の土坑が検出されている。小さな円形のものや直径2.5ｍもある大きなもの，方形のものなど形状・大きさが様々である。多くの土器が入ったもののものあるが，小破片しかないものが多い。

当遺跡では，土坑がＡ地点で５基（古墳時代４基，古代１基），Ｂ地点で12基（古墳時代２基，近世・近代10基）検出されているため，本報告書では番号を連番とし，18号から始める。

①土坑18号（第66図）

Ｄ－26区の西側礫面から河岸段丘状に上がった面で検



第66図　土坑18号～20号

出された。西側の一部は近世のピットにより削除され消失している。平面は，約80㎝×60㎝の東西に長い楕円形を呈する。断面形は，深さ約16㎝の平底ナベ形を呈する。検出面中央付近に赤橙色の焼土がある。

土器片も混在するが，小片のため詳細は不明である。

②土坑19号（第66図）

Ｄ－26区で検出された。南東側に近接して竪穴建物跡６号が位置する。南側は造成土や樹痕により消失しているが，平面は，径50㎝程度の円形に近い形を呈すると思われる。断面は，深さ15㎝程度の深皿形を呈す。

遺物は，土器小破片１点のみである。

③土坑20号（第66図・第67図）

Ｃ・Ｄ－26区で検出された。平面形は，東側に隣接している竪穴建物跡５号に切られているため，全体形が不明だが，約1.1ｍ×2.2ｍの隅丸方形に近い形状を呈する。断面形は，深さ25㎝で，平底のナベ形を呈する。

遺物は，床面よりやや上位で土器や礫が出土しているが，量的には少ない。土器片は検出面から小片が点々に入り，床面から５～10㎝上のレベルでやや大きめの破片が出土している。

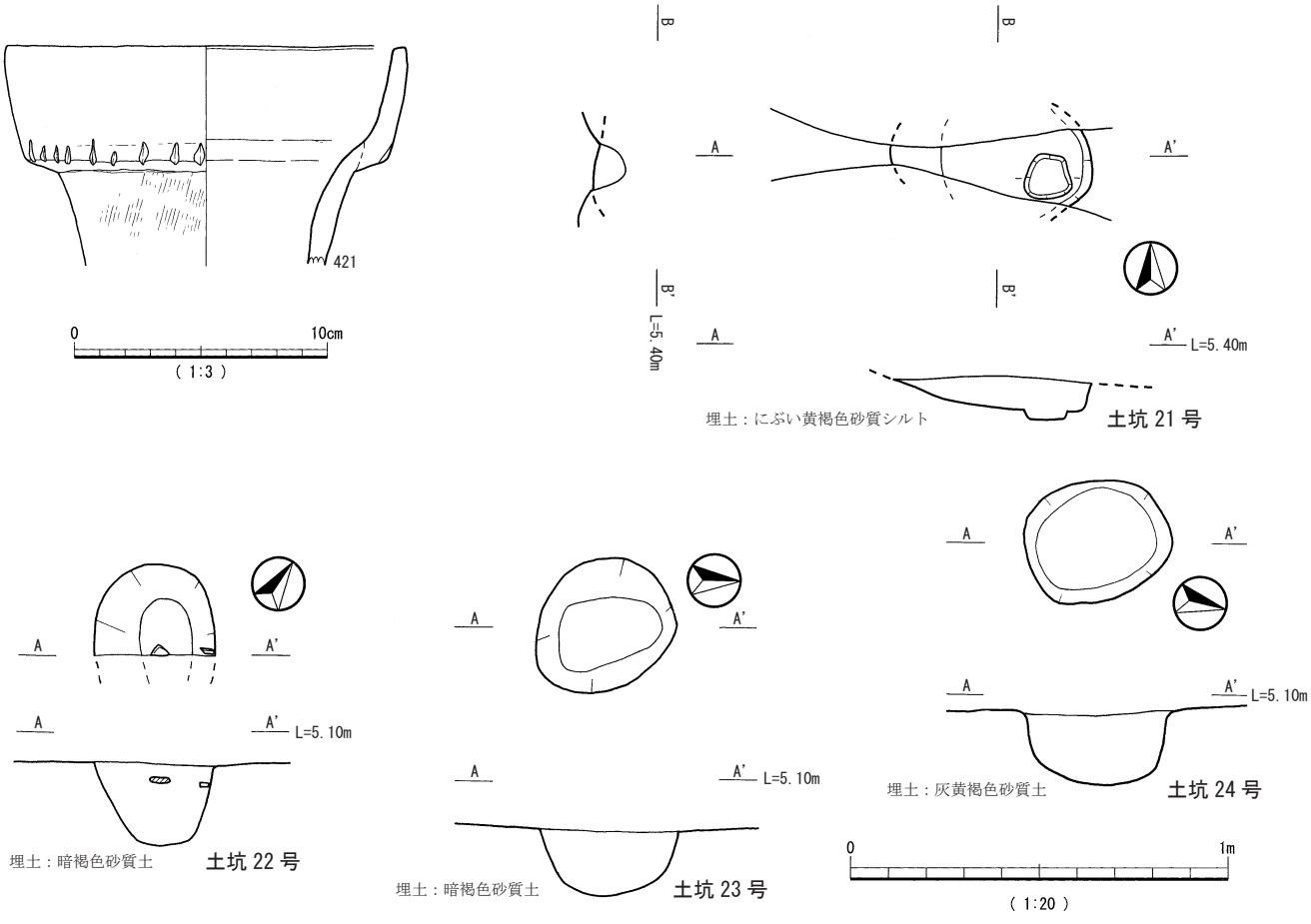
421は口縁直径16㎝の二重口縁壺形土器である。細いくびれ部から外へ広がり，やや内反ぎみに立ち上がっている。口唇部は平坦面をもち，やや内傾する。内外面とも摩滅しているが，頸部外面にわずかに縦位のハケナデ調整が残存する。また，屈曲部外面にはヘラ状工具による鋭い刻みが施される。胎土には，２～３㎜大の白色礫を多量に含む。色調は赤みが強く，他の二重口縁壺と共通する。土器溜７出土の550に類似するが，接合できなかった。

④土坑21号（第67図）

Ｄ－26区で検出された。南側の竪穴建物跡５号と北側の竪穴建物跡６号の間に位置し切られているため，ごく一部しか残っていない。土手状に残存しており，部分的に色調が異なっていた。平面形は，不明であるが，東側に径12㎝の浅いピットがある。断面は，深さ10㎝で，平底のナベ形を呈する。

⑤土坑22号（第67図）

Ｄ－27区で検出された。上下水道管埋設のため，南側



第67図　土坑20号出土の土器と土坑21号～24号

の半分は消失しているが，平面は短径約30㎝×長径50㎝ほどの楕円形を呈すと考えられる。断面形は，深さ20㎝程度の丸底である。

遺物は，土器片２点のほかには土器小破片が混在していた。

⑥土坑23号（第67図）

Ｄ－27区で検出された。東側には，土坑22号が隣接する。平面は，径35㎝程度の円形に近い形を呈する。断面は深さ約15㎝で，ボウル状の丸底を呈する。

遺物は出土していない。

⑦土坑24号（第67図）

Ｄ－27区で検出された。南側に，土坑25号が隣接する。平面は，径約35㎝程度の円形に近い形を呈する。断面形は，深さ20㎝程度の丸底である。

遺物は出土していない。

⑧土坑25号（第68図）

Ｄ－27区で検出された。土坑22号と土坑24号の間に位置する。平面は，径40㎝程度の円形に近い形を呈する。断面は，深さ20㎝程度で，浅いナベ形を呈する。

遺物は，土器小破片が含まれていた。

⑨土坑26号（第68図）

Ｄ－27区で検出された。多くの樹痕が近接する。平面は，約75㎝×60㎝の楕円形を呈する。断面は，深さ30㎝弱の深ナベ形を呈する。

遺物は，土器小破片が出土した。

⑩土坑27号（第68図）

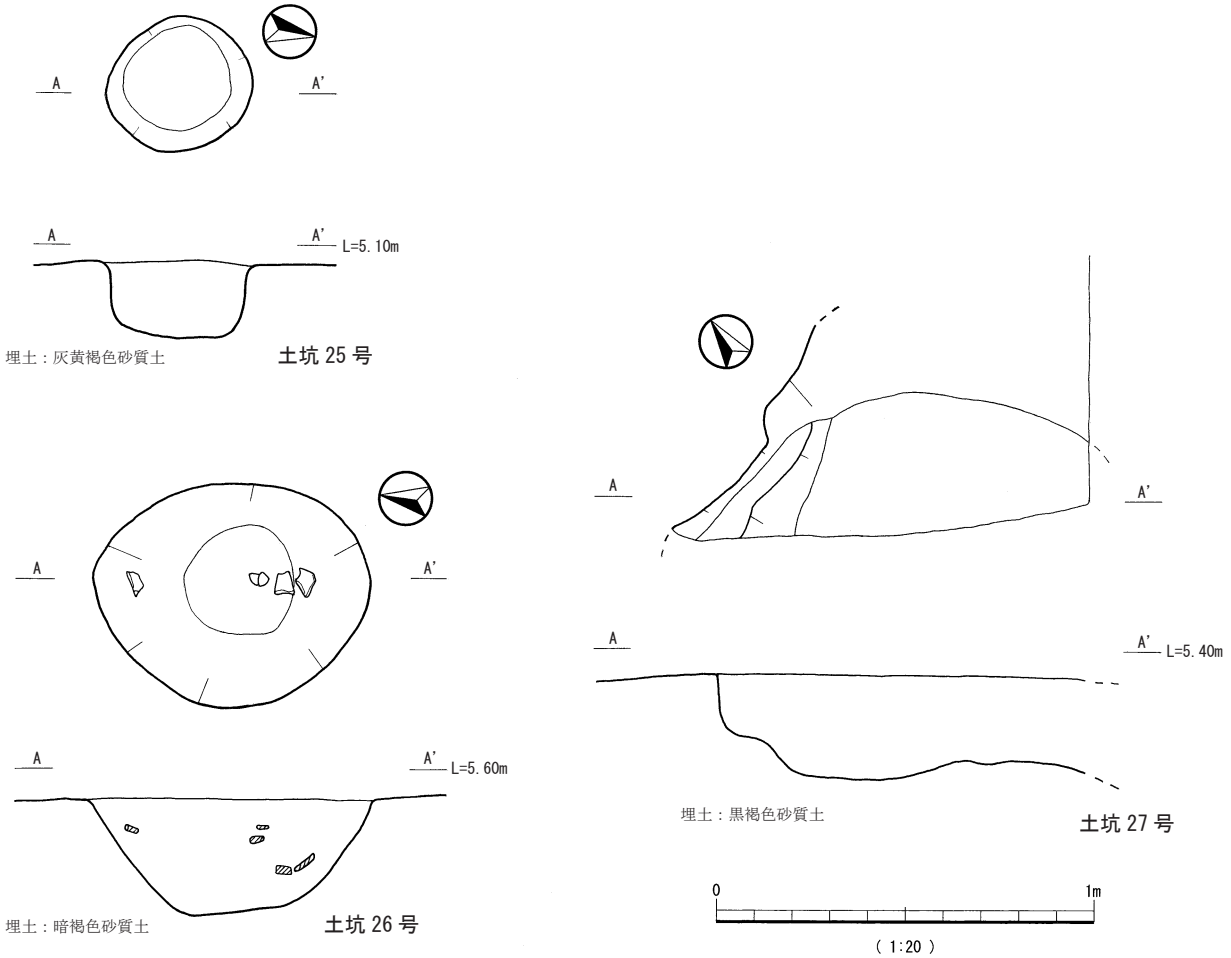
Ｃ－28区で検出された。上下水道管埋設により南側・西側など消失している部分が広く，北東側のみの検出のため全体形は不明である。断面は，17㎝と27㎝の２段階の落ち込みが確認できたが形状は不明である。

遺物は，土器小破片のみである。

⑪土坑28号（第69図）

Ｄ－28区で検出された。北側に近接して竪穴状遺構，西側に土坑29号が位置する。平面は，径30㎝程度の円形を呈し，断面は，深さ15㎝程度の丸底である。

遺物は，高坏形土器の破片が中心部やや上部にまとまって２点出土しており，埋設された可能性がある。また，埋土中には，拳大の大きさの自然礫も混在してい



第68図　土坑25号～27号

た。高坏形土器はともに脚部の筒部から裾部への破片である。422は下へやや開く筒部で，屈曲して裾部へ広がる。４か所に円形の穿孔があるが，１孔は未貫通で，内側はふくらんでいる。423も422と似た器形だが，筒部はやや直立ぎみである。脚端の直径は13.8㎝ある。穿孔は３か所で，外から内へ穿っている。422，423ともヘラナデ調整である。

⑫土坑29号（第69図）

Ｄ－28区で検出された。南東側には，土坑28号が隣接する。平面は，径40㎝程度の円形を呈する。断面は，深さ約35㎝の深ナベ形を呈する。

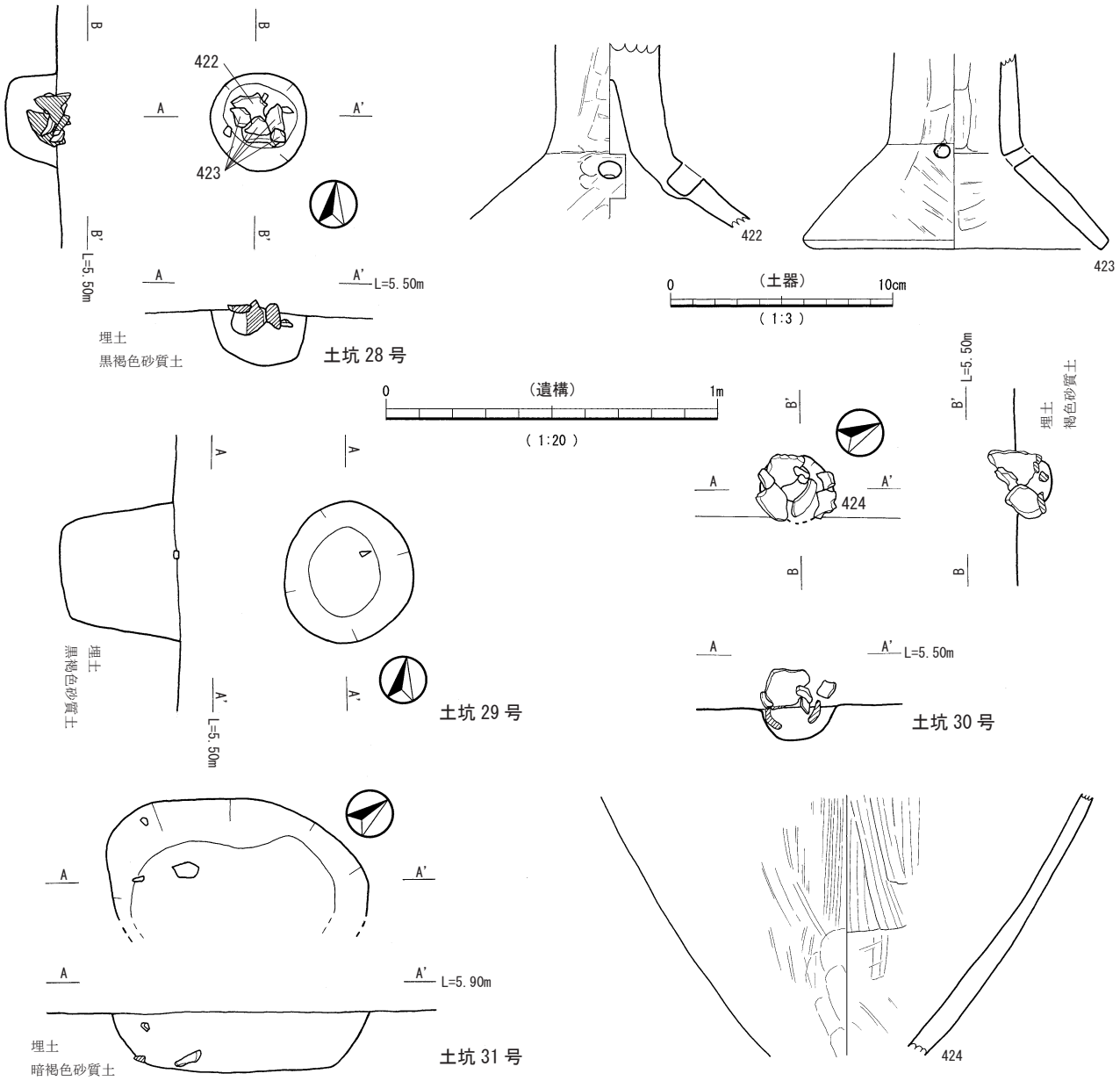
埋土中には，摩滅した土器小破片が混在していた。

⑬土坑30号（第69図）

Ｄ－28区で検出された。上下水道管埋設のため，東側の一部がわずかに消失しているが，平面は，径20㎝程度の円形を呈する。断面形は，深さ約10㎝の浅い丸底を呈する。

遺物は，比較的大きい古墳時代の土器が土坑の壁面を覆うように出土した。これらを接合したのが424である。甕形土器の胴部下半部で，硬質に焼けている。脚台が付く器形だと思われる。

外面はハケナデのあと丁寧なヘラの縦ナデ，内面は条痕状の粗いハケ縦ナデで仕上げている。にぶい赤褐色を呈している。



第69図　土坑28号～31号と土坑28号（422・423）・30号（424）出土の土器

⑭土坑31号（第69図）

Ｄ－28区で検出された。上下水道管埋設のため，南東側の半分は消滅しているが，平面は，約80㎝×60㎝の楕円形を呈すと考えられる。断面は，深さ20㎝程度の深皿形を呈す。

埋土中に，小礫等は混在していない。

⑮土坑32号（第70図）

Ｅ－28区で検出された。南西側の一部は撹乱により消失しているが，平面は約1.4ｍ×1.8ｍで東西方向を主軸とする長方形を呈する。断面は，深さ約10㎝で底面がやや凹凸となる平底のナベ形を呈する。

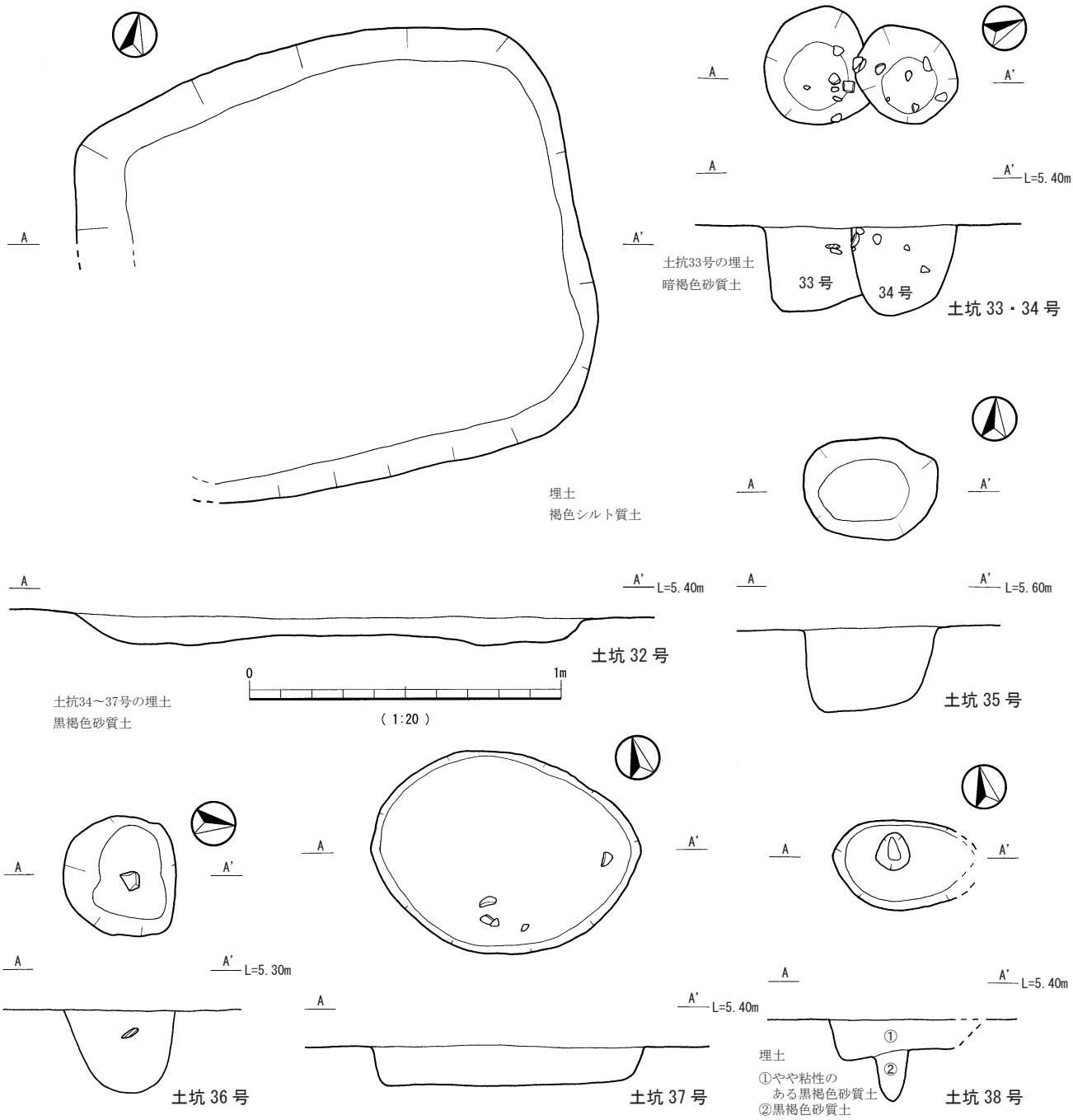
⑯土坑33号・34号（第70図）

Ｅ－28区で検出された。ともに径が30㎝程度の円形を呈し，土坑34号が土坑33号を切っている。断面形もともに丸底で，深さも30㎝程度と似る。埋土は，ほぼ同じで，34号がやや濃い。

埋土中には，図化した以外にも摩滅した土器小破片や小礫が混在していた。

⑰土坑35号（第70図）

Ｅ－28区で検出された。平面は，約40㎝×30㎝のややいびつな楕円形を呈す。断面は，深さ30㎝弱で，深ナベ形を呈す。



第70図　土坑32号～38号

埋土中には，摩滅した土器小破片や小礫が混在していた。

⑱土坑36号（第70図）

Ｅ－28区で検出された。土坑35号が南側に隣接している。平面は，径約36cmの略円形を呈する。断面は，深さ約26cmの丸底形を呈する。

埋土中には，図化した以外にも小礫・土器小破片が少量含まれている。

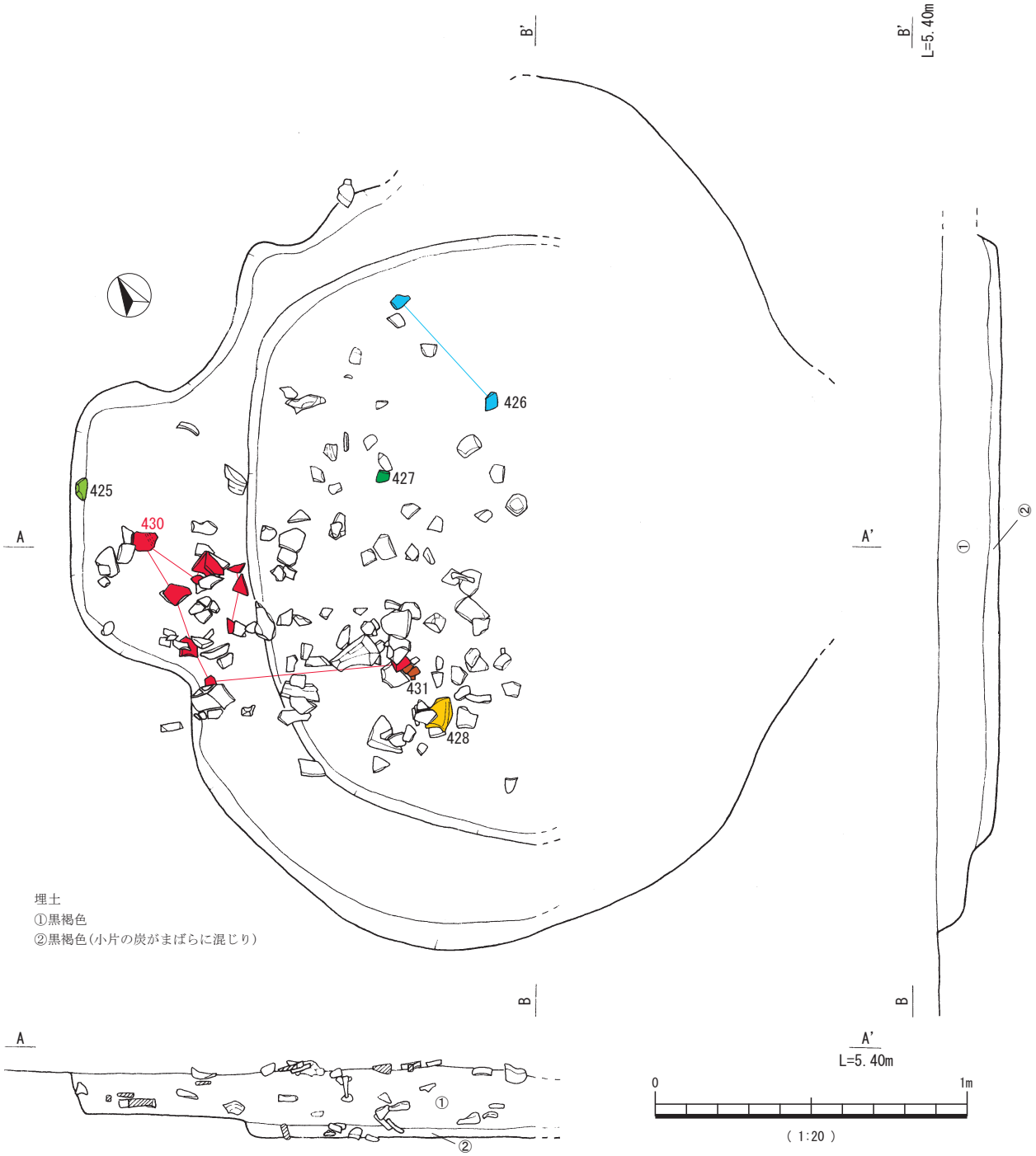
⑲土坑37号（第70図）

Ｅ－29区で検出された。土坑38号と東側で，土坑39号と南側で隣接する。平面は，約90cm×60cmの楕円形を呈する。深さ15cm程度で，底面は平らである。

埋土中には土器小破片があるのみである。

⑳土坑38号（第70図）

Ｅ－29区で検出された。土坑39号と南側で隣接する。東側は撹乱により消失しているが，平面は，約50cm×30



第71図　土坑39号

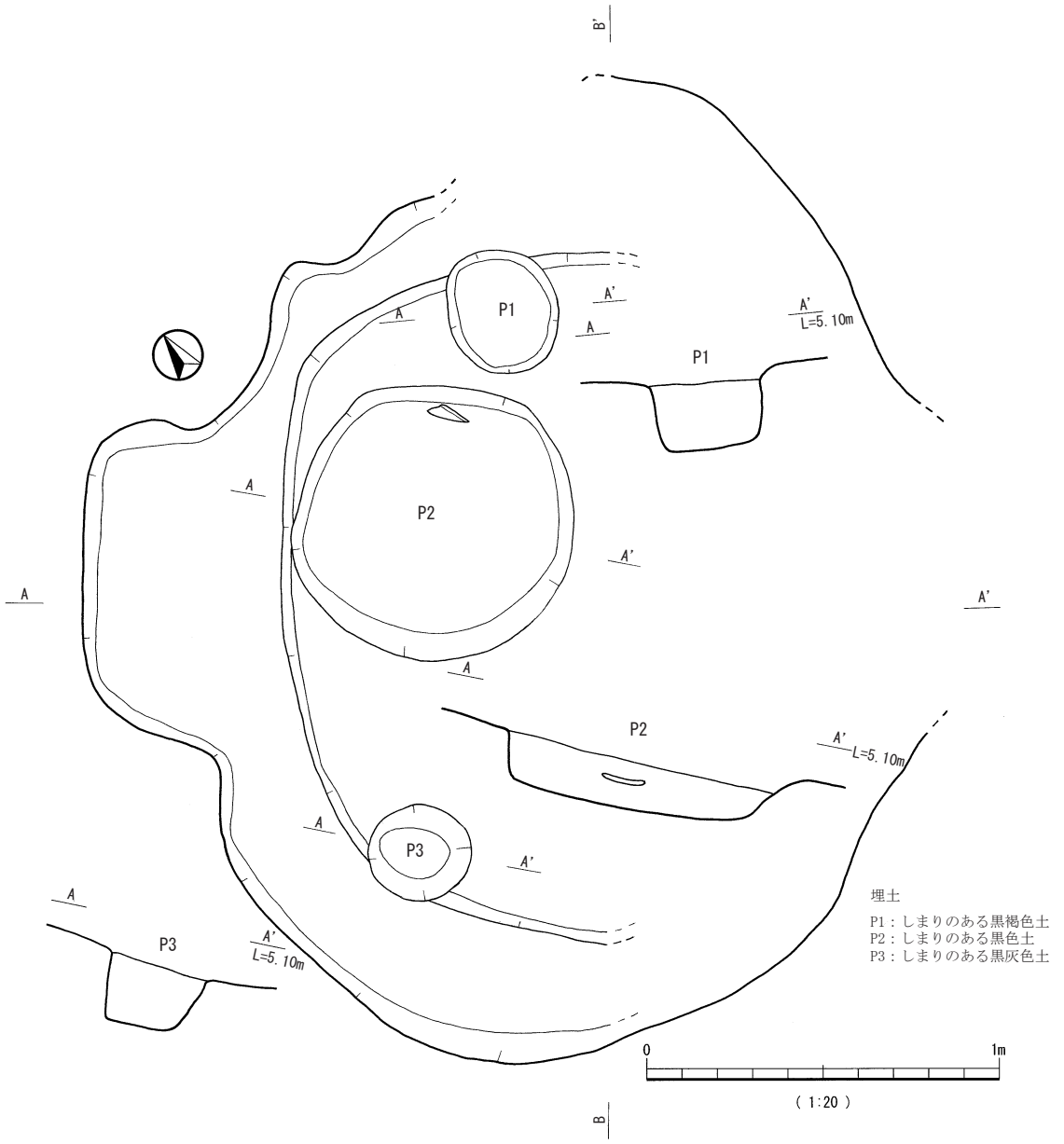
cmの楕円形を呈する。中央付近に径12cm，床面からの深さ約20cmの小ピットがある。

㉑土坑39号（第71図～第73図）

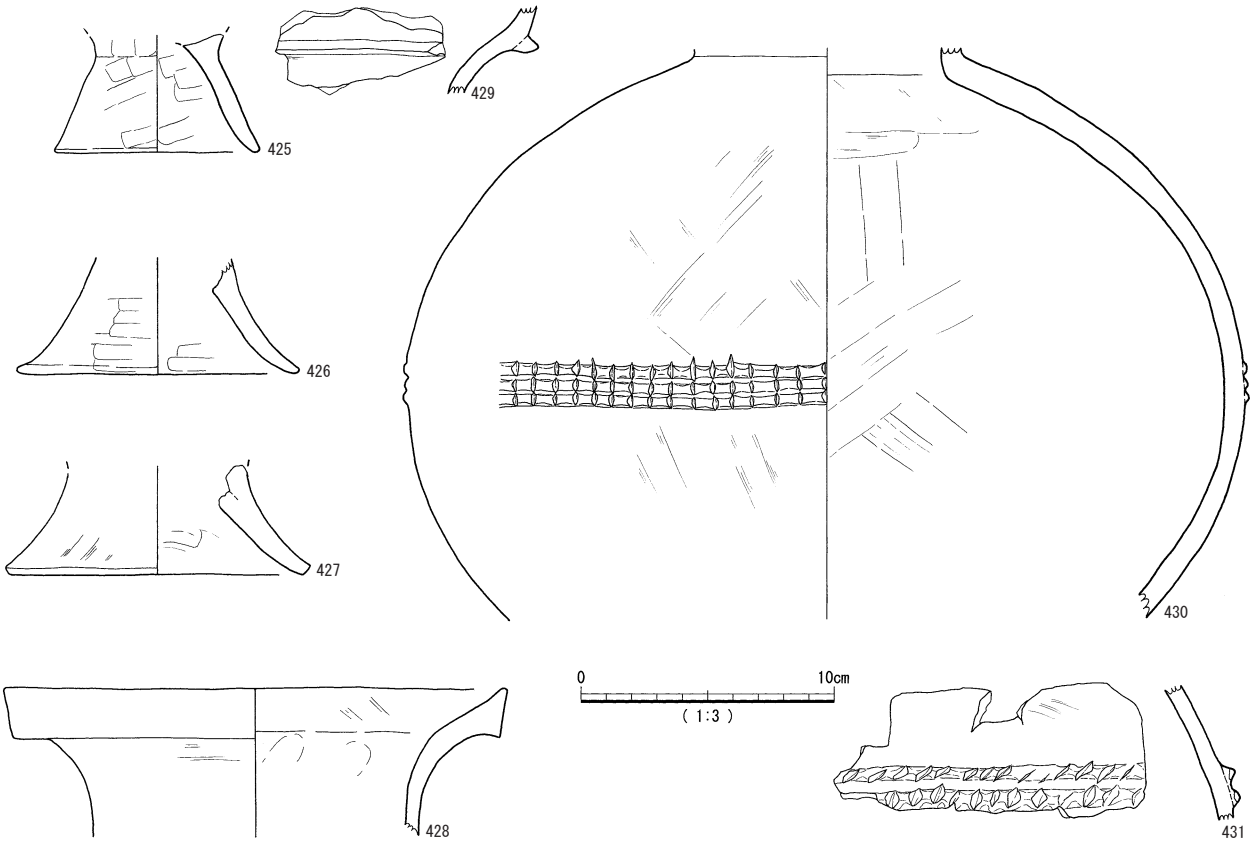
Ｅ－29区で検出された。土坑37・38号と北側で隣接する。東側は道路の縁石等により消失しているが，平面形は，径が約2.8mの円形を呈すと思われる。西側には幅0.9m，奥行0.4mの方形の張り出し部がある。２段構造となり，一辺が0.9mある隅丸方形の下段といびつな円形の上段に分かれ，上段の深さが10cm，下段の深さは上段から４cm程度である。また上段は一部消失しているため，河川堆積等の何らかの作用を受けた可能性が高い。埋土は単層で，上段と下段の境目が検出しづらかったが，下段のみ径が１mm程度の極小の炭化材片がまばらに混ざる状況がみられた。東側の下段は，河川堆積等の影響のため消失した部分が多く，上段の上場のみしか検出できなかった。完掘時，下段内にピット３基を検出した。いずれも下段の東側にあり，張り出し部近くにある大きなピットは径0.8mほどの円形を呈し，深さが14cmある。その両側にあるピットは直径が30cmほどの円形を呈し，深さは約18cmである。ピットの形状や位置などから，本土坑との関係は不明であるが，埋土から時期差はあまりないと考えられる。張り出し部とピット・大型ピットの配置から竪穴建物の入口構造とも考えられる。

西側には多くの土器破片が散布している。

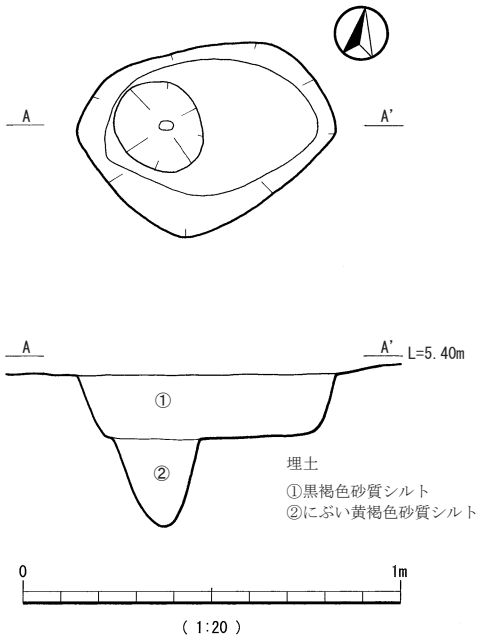
425～427は甕形土器の脚台である。脚台端の直径は８～12cmで，高さは約４cmである。425・427は胴部との貼り付け部が残っている。



第72図　土坑39号のピット配置図



第73図　土坑39号出土の土器

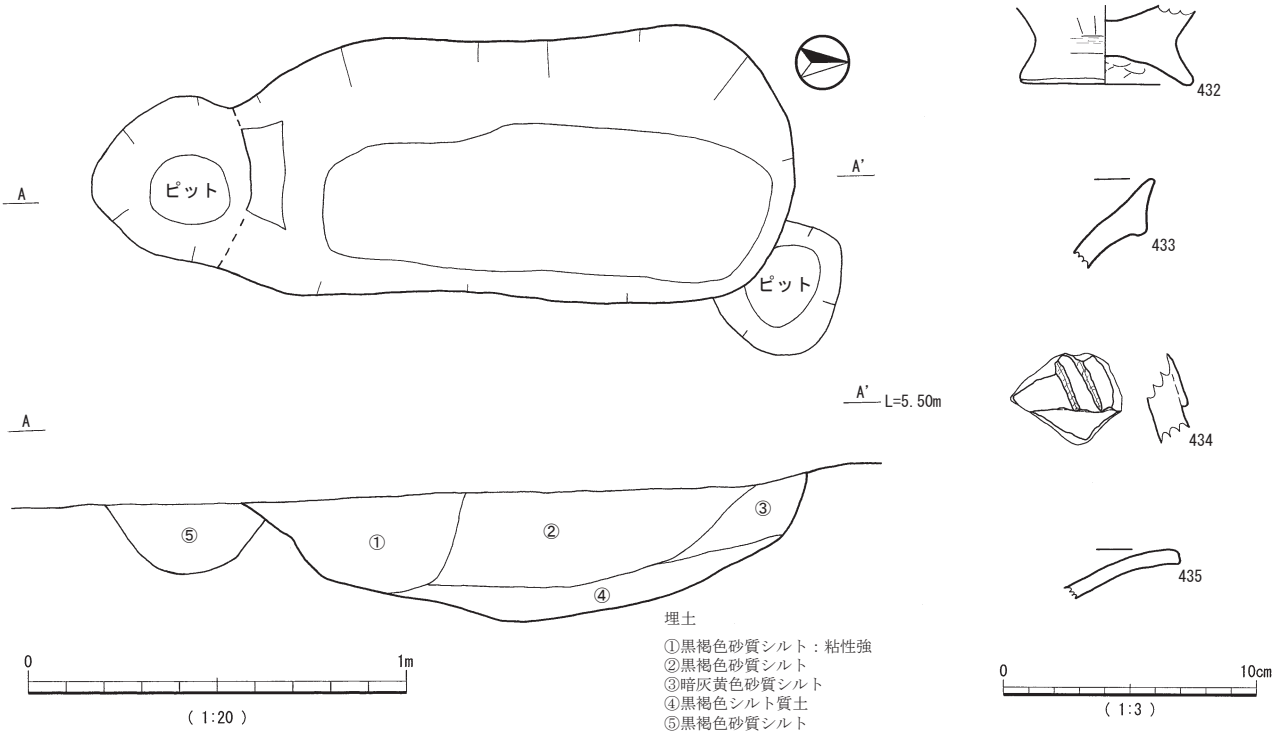


第74図　土坑40号

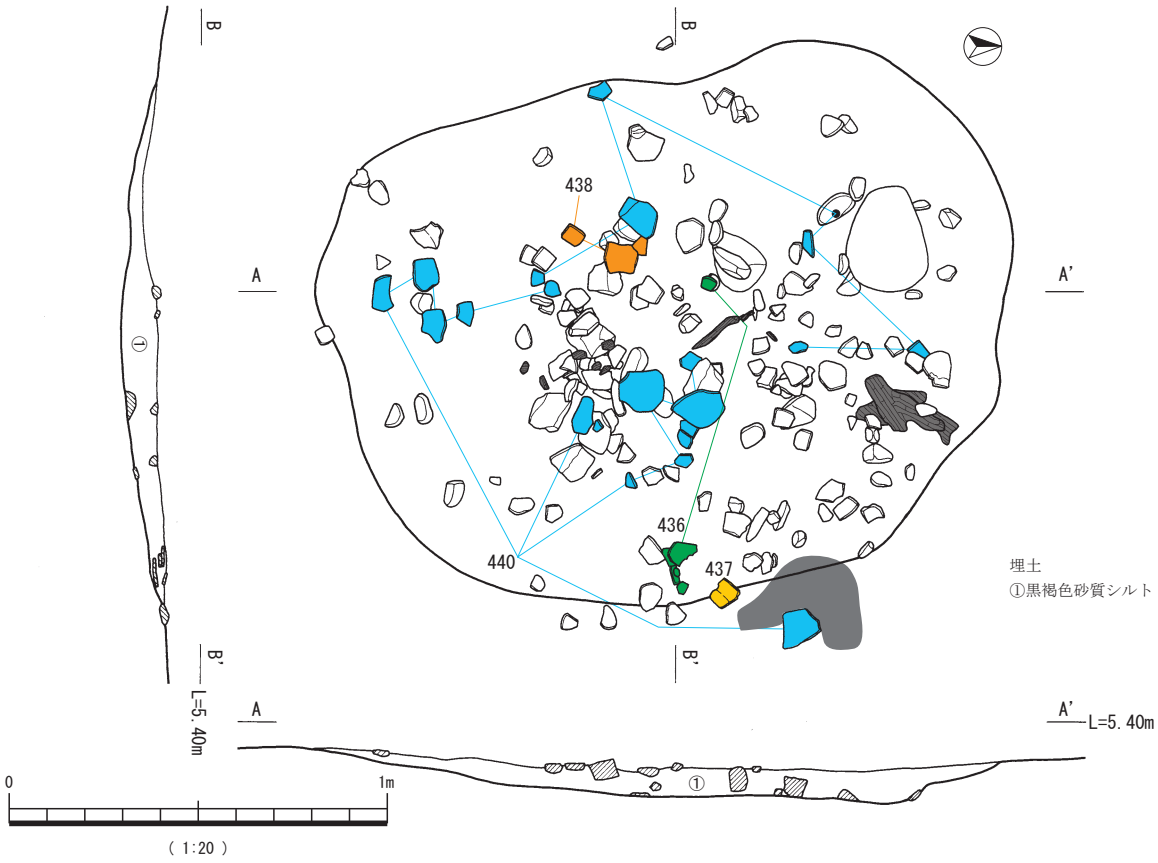
428～431は壷形土器である。428は強く外反し，端部が上下に広がり，幅広くなっている。口縁直径19.8cmである。429は口縁端を欠いているが，口縁下部に舌状の貼り付け突帯のある二叉状口縁部である。ともに摩滅が目立つ。430は最大径33.5cmの，頸部から胴部の破片である。丸みをおびた器形をしており，頸部から口縁部へは強く屈曲している。最大径部分に３条の三角突帯があり，その上に縦方向のヘラ刻みがある。幅広突帯を付けたあと，２条の圏線を引き，そのあと刻みを施している。431も左下がり斜め方向のヘラ刻みのある三角突帯がある胴部である。428・430・431は浅黄橙色を呈している。744は，厚さ1.7cmの扁平な川原石を使用した磨石である。最大長8.5cm，最大幅7.5cmのおむすび形をしており，三方のやや突出した部分を中心に使用しており，三方以外の部分にも一部使用痕が見られる。砂岩で，重さは182.5ｇある。751は，最大長16cm，最大幅9.5cm，最大厚9.25cmの花崗岩（天草石）製砥石である。表裏と側面の三方を深く使い込んでおり，薄くなった部分もある。編集の都合で図は第109・110図にある。

㉒土坑40号（第74図）

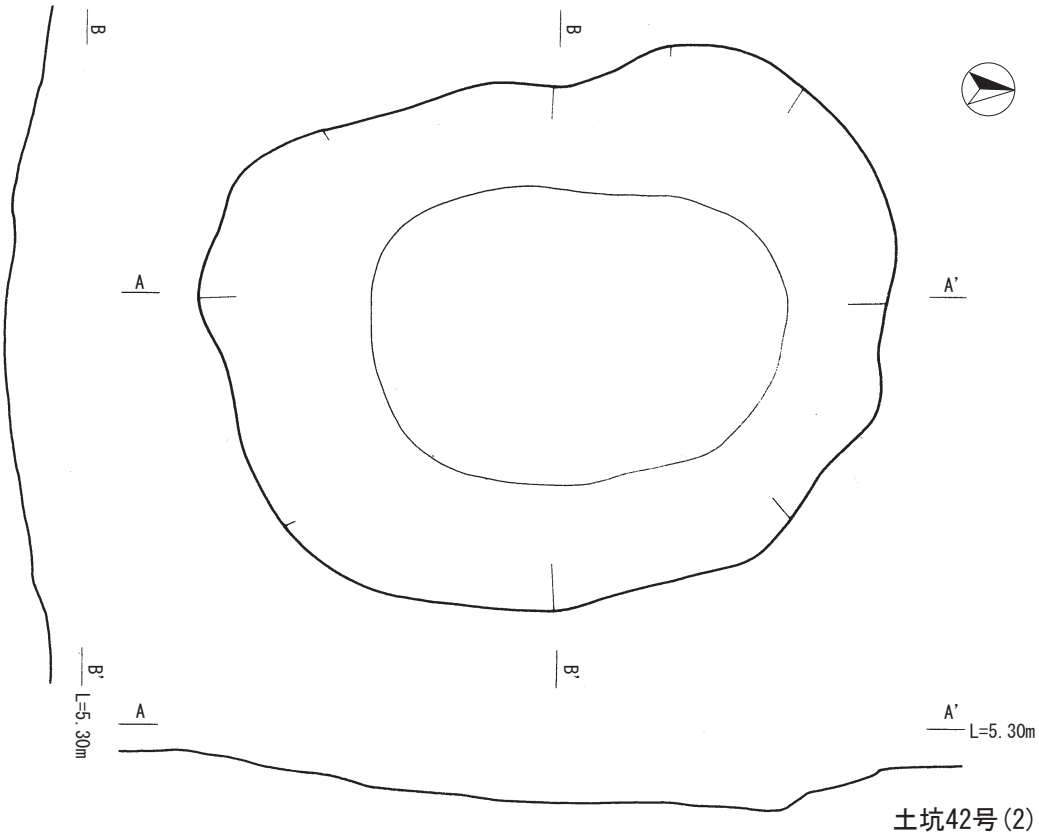
Ｅ－29区で検出された。平面は，約70cm×50cmのややいびつな楕円形を呈する。断面は，深さ約16cmの浅い皿状を呈する。床面で径25cm，深さ23cmの円形のピットが



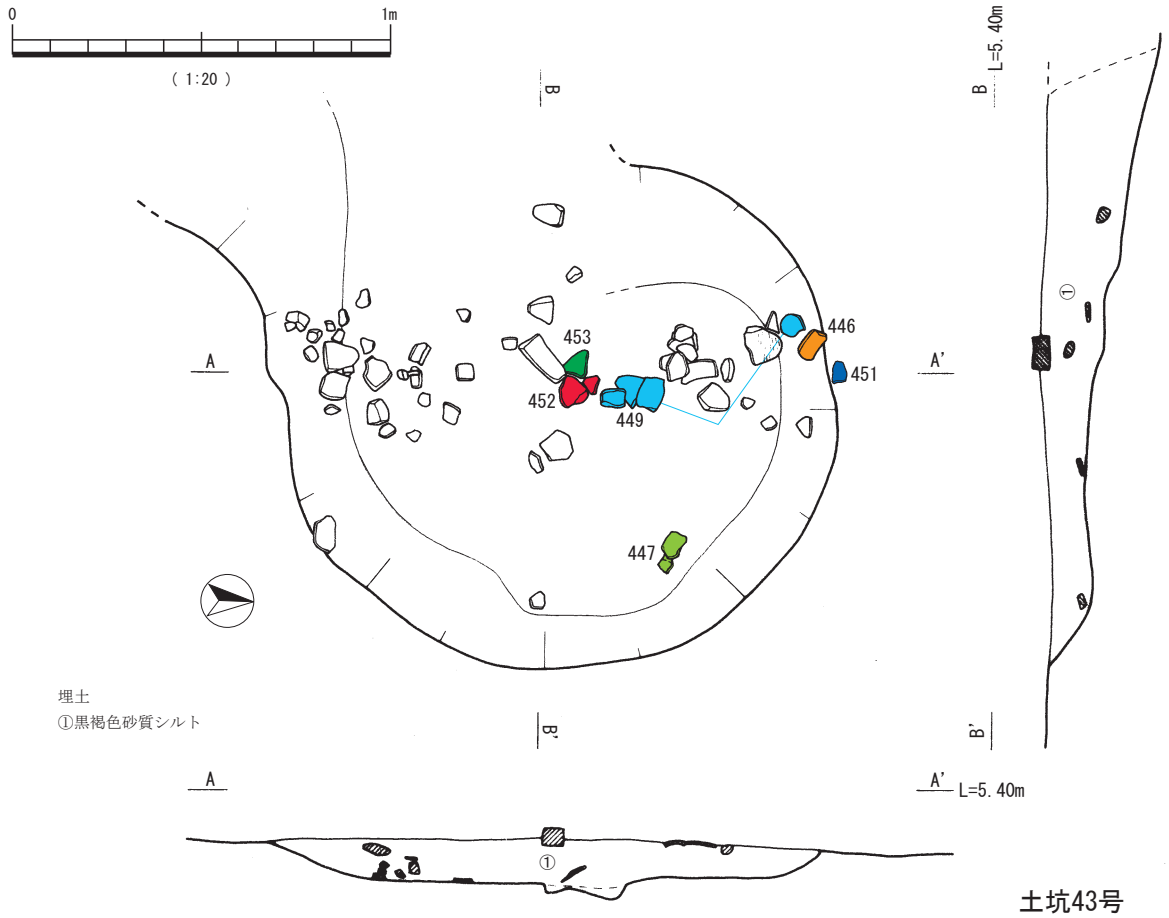
第75図　土坑41号と出土の土器



第76図　土坑42号（１）

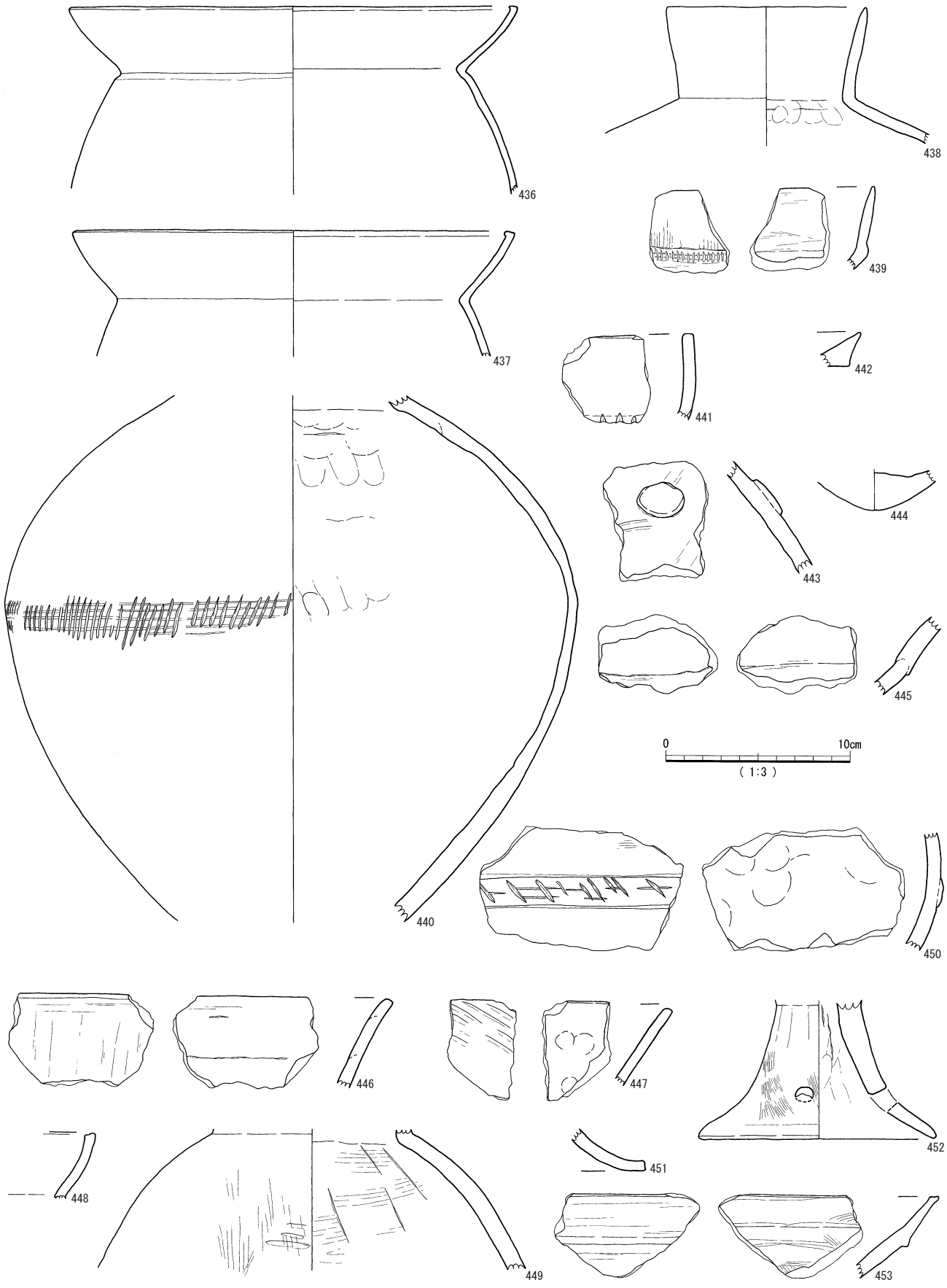


土坑42号(2)



土坑43号

第77図　土坑42号（２）・43号



第78図　土坑42号・43号出土の土器

検出され，下位ほど色調が明るい。

㉓土坑41号（第75図）

Ｄ・Ｅ－29区で検出された。平面は，南側のピットと切りあっているため，全体形は不明であるが，約0.7ｍ×1.4ｍの不定形な長楕円形を呈する。断面形は，検出面からの深さ約35㎝で，深皿形を呈する。中から土器の小破片が出土している。

432は径が７㎝の甕形土器脚台で，脚台高が2.5㎝余りと低い。外面は比較的丁寧な作りであるが，脚台内面は連続したユビナデ調整で器面に凹凸がある。胎土に５㎜大の灰白色の角礫を疎らに含む。433は二重口縁壺の口縁部で，軟質で砂礫が少ない精製された胎土である。434は，幅広で薄い突帯に，ヘラ状工具で２条の鋸歯状の刻みを施している。435は，口が広く開くタイプの高坏形土器の口縁部と考えられる。口縁端部はナデ調整により，平坦面を有する。

㉔土坑42号（第76図～第78図）

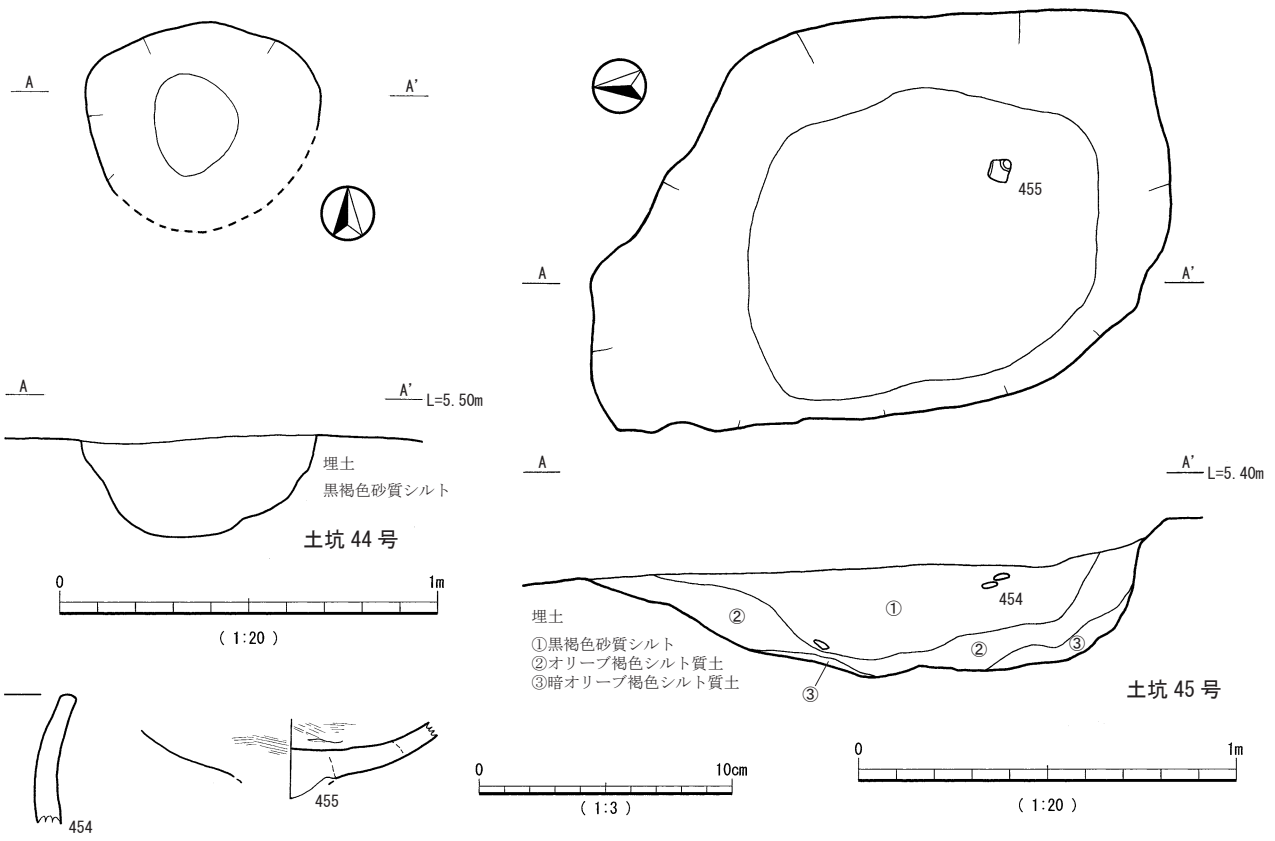
Ｄ－29区で検出された。平面形は，約1.8ｍ×1.4ｍで，ややいびつな楕円形を呈する。断面形は，深さ約８㎝の浅い皿状である。

遺物は，古墳時代の土器が比較的大きい破片でまとまって出土した。比較的残りの良い炭化材も中心部にまとまり，土器片も周囲より大きい破片を伴っていた。ただし，埋土中には礫が混ざっており，土器片も一個体にはまとまらないため，窪地状の部分に溜まったか，廃棄したものと考えられる。炭化材２点について，放射性炭素年代測定を実施した。年代は，弥生時代後期から古墳時代前期頃とやや時間幅のある結果となった。また，炭２点について，樹種同定を実施した。その結果，タイミンタチバナという広葉樹材であることが分かった。

436・437は，いずれも，口唇部が内面側に張り出す。436は頸部外面に横位のヘラケズリ状の調整が加わり，面をなす。内外面とも摩滅しているが，焼成は良好で，硬質である。

438・440は壺形土器である。438は口縁部が直線的に外傾する短頸壺で，口唇部は舌状を呈する。外面は縦位のナデ調整を主体とし，内面頸部下は接合面を中心に指頭押圧・ユビナデ調整が加えられている。440は，大型壺の頸部～底部付近である。胴部最大径に横位の４～５条の沈線を描き，その上から斜位の沈線を連続して巡らせている。突帯を意識したものと考えられる。内外面とも摩滅しており，頸部内面及び胴部最大径の内面は指頭押圧及びユビナデで器面に凹凸がみられる。器壁は薄く，器面に平坦面を有するため，タタキ調整と考えられる。また，色調は明るく，被熱により器面が荒れている。

439は，小型丸底壺の口縁部～胴部である。口唇部は舌



第79図　土坑44号・45号と45号出土の土器

状を呈し，胴部からカキアゲ状のハケナデ調整が施されている。胴部はやや肥厚した部分に横位の細沈線を２条巡らせ，連続した刻みを加えている。

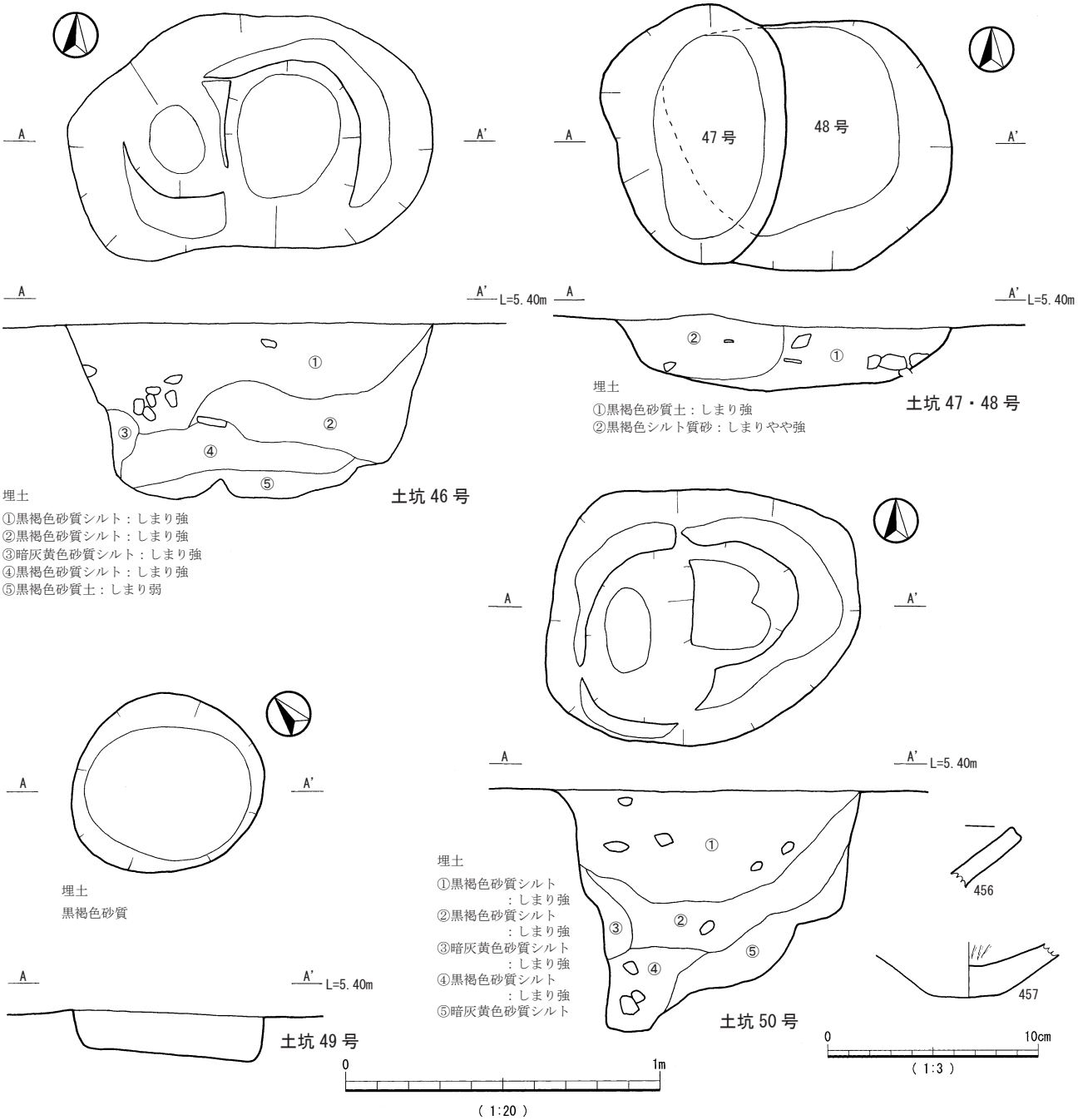
㉕土坑43号（第77図・第78図）

Ｄ－28・29区で検出された。竪穴状遺構に隣接している。平面形は，竪穴状遺構と接している南西側の境界が不明瞭であるが，ほぼ円形を呈し，規模は約1.5m×1.3mである。断面は，深さ12～15㎝程度で，平底のナベ形を呈する。

遺物は，南北軸に帯状に出土している。

441と442は二重口縁壷の口縁部と考えられる。441は下端に刻みが施されてる。器壁は薄く，色調は赤みが強い。442は胎土に，赤褐色砂粒を多く含む。443は壷形土器の肩部と考えられ，ボタン状の扁平な貼り付けである。大型壷の円形浮文と考えられる。444は底部である。尖底で，内面は指頭押圧による凹凸がある。445は，高坏形土器の坏部である。屈曲部外面は接合面で段が生じており，粗いナデ調整で整形されている。内面には帯状にスス痕がみられ，蓋として転用されていたと考えられる。

446～449は，甕形土器である。446～448は口縁部で，446はカキアゲ状の縦位のナデ調整で，447はタタキ調整



第80図　土坑46号～50号と50号出土の土器

である。また，448は内弯する甕形土器に比定でき，細かいハケナデ調整が施されている。449はの頸部～胴部と考えられ，外面は水平方向のタタキ後縦位のナデ，内面はハケナデ調整である。器壁は厚手だが，丁寧な作りである。

450は壷形土器の突帯である。幅広の薄い粘土紐を貼り付け，横位の沈線と斜位の浅い刻みが施されている。器形から，最大径に付されていると考えられる。

451～453は，高坏形土器である。451は高坏形土器の口縁部と考えられ，口唇部は平坦である。内外面とも被熱しており，内面は胴部付近に帯状にススが付着している。452はスカート状に開く脚部で，端部は丸く収められている。穿孔は２か所残存しており，本来は４か所程度と推定される。色調が明るく，胎土も精製されている。

453は屈曲が断面三角形の突帯状をなし，ハケナデ及びミガキ様の丁寧なナデ調整である。口唇部は外面側に張り出し，わずかに中央が凹む。スス痕がみられる。土坑42号・43号は近接しており，両土坑で接合するものがあった（441～445）。

㉖土坑44号（第79図）

Ｃ－28区で検出された。南から南東部は一部撹乱により消失しているが，平面は約60㎝×50㎝のほぼ円形を呈する。断面の深さは25㎝で，皿状を呈する。

遺物は少なく，いずれも古墳時代の小破片である。

㉗土坑45号（第79図）

Ｃ－29区で検出された。土器溜７に隣接している。平面は，約1.5ｍ×１ｍの不整長方形である。断面は，深さ約30㎝で，底が凹凸した深ナベ形を呈する。

遺物は，検出面で高坏形土器の坏部分が出土した。埋土中からも土器片が出土している。

454は甕形土器の口縁部である。外面はわずかに右上がりのタタキ調整後，ナデ調整である。455は高坏形土器の坏部である。脚部との接合部で剥落しており，底面が円形に張り出す。内外面とも摩滅しているが，内外面とも部分的にハケナデ調整が残っており，内底部はミガキ状である。

㉘土坑46号（第80図）

Ｅ－30区で検出された。平面は，約0.7×1.2ｍのややいびつな楕円形を呈する。断面は，深さ約55㎝で，床面が中央で盛り上がり，凸凹のある深皿形を呈する。２基の円形土坑のようにもみえる。

遺物は破片であり，まとまっていない。

㉙土坑47号（第80図）

Ｅ－30区で検出された。竪穴建物跡12号の南側に位置する。土坑48号より新しい。約60㎝×80㎝の楕円形に近いいびつな形状を呈する。断面は，深さ約20㎝で，深皿形を呈する。

遺物は，土器片が出土している。礫の混入量も多い。

㉚土坑48号（第80図）

Ｅ－30区で検出された。竪穴建物跡12号の南側に位置する。平面は，土坑47号に切られているため全体形は不明だが，約１ｍ×0.8ｍの楕円形を呈する。断面は，深さ約20㎝で，深皿形を呈する。

土器片が出土している。

㉛土坑49号（第80図）

Ｅ－30区で検出された。平面は，約60㎝×55㎝の円形を呈する。断面は，深さ約13㎝で，南東部にやや下がる浅い皿状を呈する。

摩滅した土器小破片が出土している。

㉜土坑50号（第80図）

Ｅ－30区で検出された。Ｄ地点で最も東側に位置する。平面は，約0.8×1ｍのややいびつな円形を呈する。断面形は，深さ約75㎝で，数段の段状となるいびつな深ナベ形を呈する。

遺物は破片のみであり，まとまっていない。

456は，甕形土器の口縁部片である。口唇部は横位のナデ調整により，筋状に凹む。外面は幅広の斜位のハケナデ調整と思われ，頸部や内面は横位のナデ調整である。457は壷形土器のレンズ状平底の底部である。全体的に摩滅しているが，内面には筋状の工具ナデ調整が残る。また，胎土に３～５㎜大の脆い赤色粒をまばらに含む。

４）埋納遺構

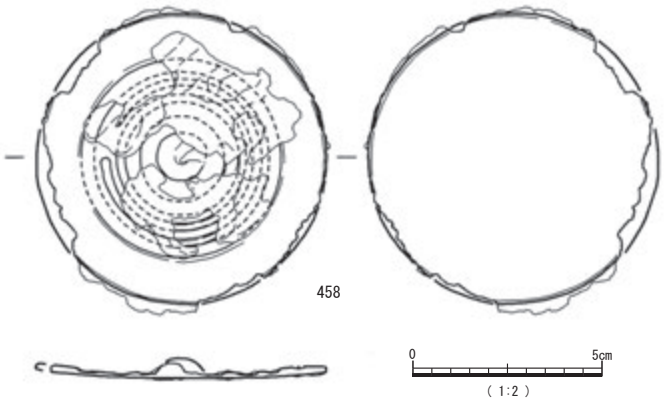
①埋納遺構（第81図）

小型仿製鏡が竪穴建物跡８号で出土した。調査時の所見によると，竪穴建物跡８号を掘り込んで作られた古代の土坑が埋まったあと，この土坑跡を掘り込んだ直径15㎝，深さ12㎝の円形土坑に埋納されたものとしている。さらに，鏡は円形土坑の底面から５㎝上に裏面を上に向けて置かれていたと判断している。

当時撮影された写真を検討した結果，炭などが多く堆積している古代の土坑の底面は建物跡の床面と同じで，さらに土坑の外まで広がっていることから，古代の土坑は存在しないことが分かった。本来は住居埋没時に床面より25㎝上に埋納されたものと思われる。

鏡は全形を残しているが，表面の錆化が進み型式がはっきりしない。直径7.7㎝で，外縁は幅1.2㎝，厚さ0.3㎝の広い平縁である。その中の文様ははっきりしないが，レントゲン写真によると１条の圏線が巡っている。

紐はつぶれており，はっきりしないが，直径1.3㎝ほどで，厚さが0.5㎝ある。鏡面の厚さは0.2㎝である。



第81図　埋納遺構出土の小型仿製鏡

５）土器溜

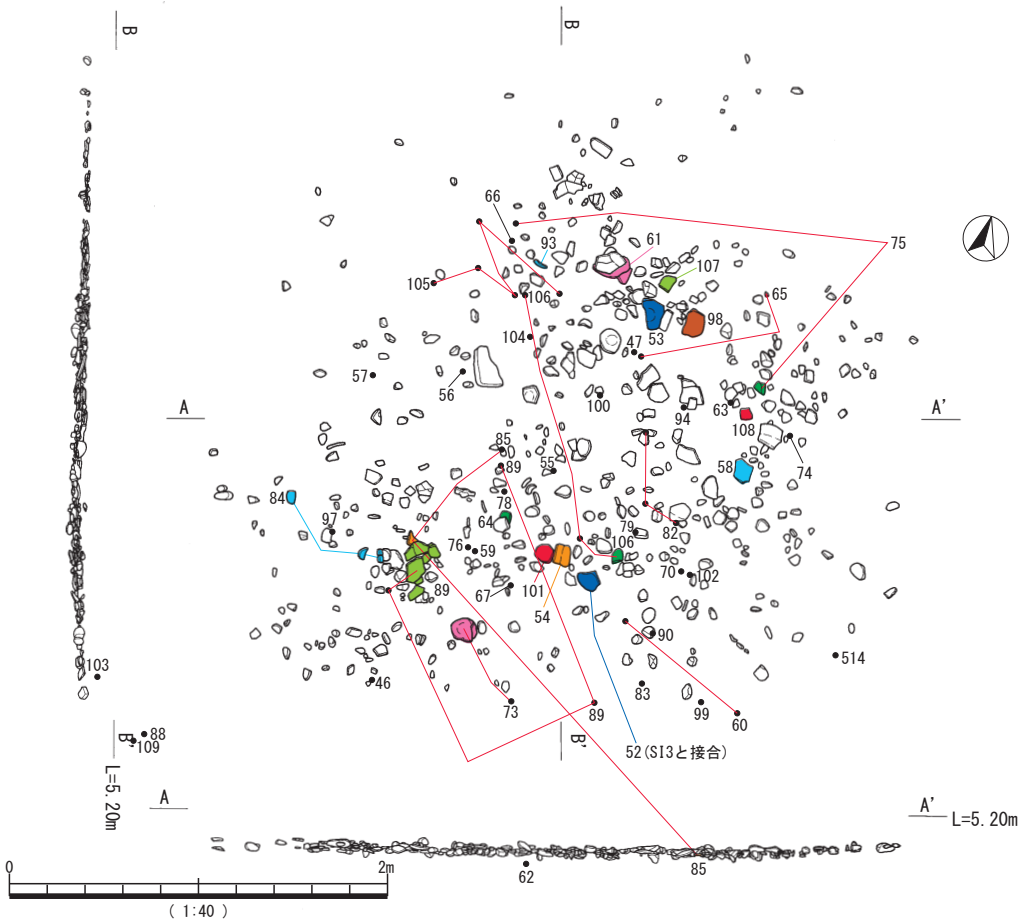
①土器溜３（第82図）

竪穴建物跡３号の検出面の深い穴を中心として4.3m×4.3mの範囲に多くの土器が広がっていた。土層断面を見ると，15㎝ぐらいの厚さに上から下までぎっしりと遺物がつまっている。出土した土器・石器は第21図から第26図に掲載している。そのほとんどは土器溜３出土の遺物である。

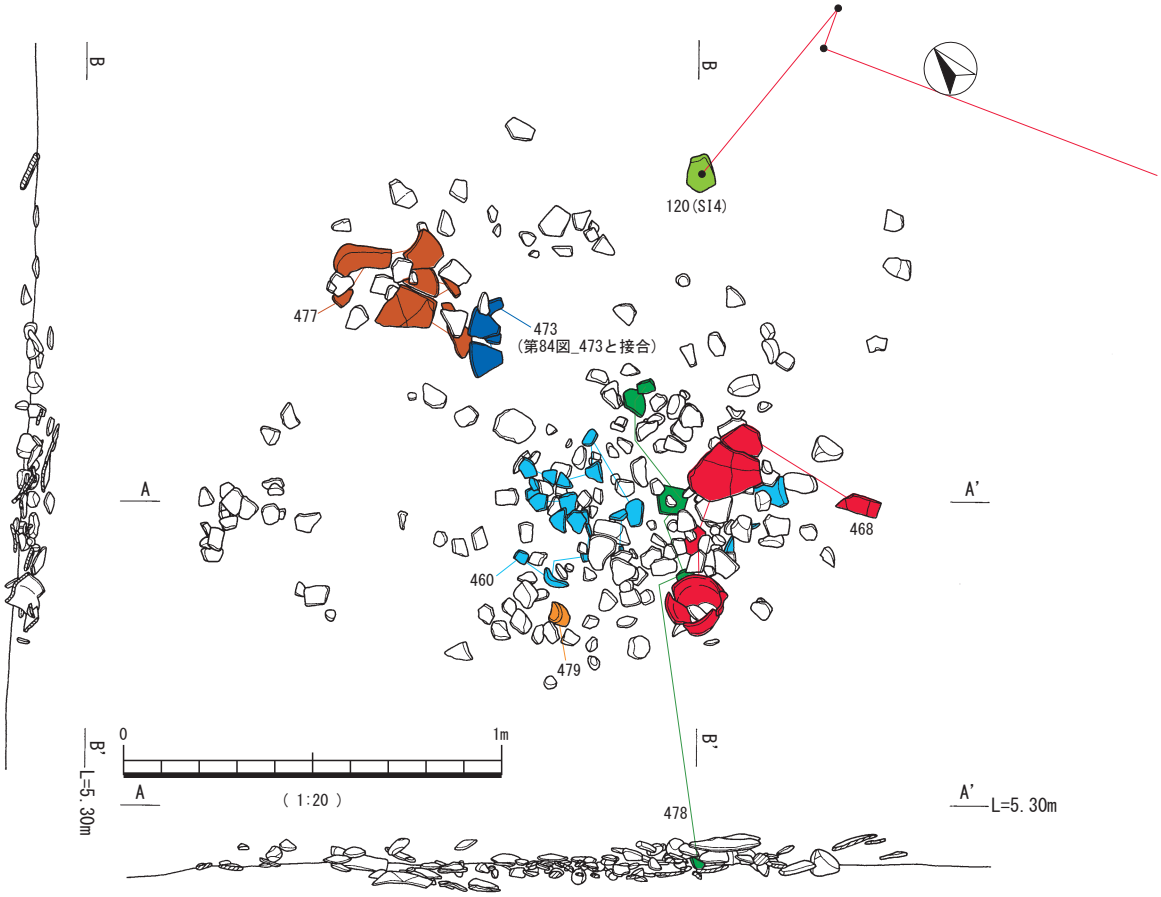
②土器溜４（第83図～第87図）

Ｃ－26区，Ⅱc層で長軸２m，短軸1.5mの範囲に遺物がまとまって検出された。北東方向には，土器溜５が位置している。多くの土器を取りあげたあと直径１m程度の楕円形を呈する掘り込みがあった。断面形は，不定形な深皿形を呈し，土器溜５より浅いが，南東部に重層的な重なりが見られる。

土器溜４と土器溜５は隣接して検出され，平面的に遺物がまとまっている状況であった。土器溜５は甕形土器が主体を占めるのに対し，土器溜４は大型壷が多く出土した点が特徴である。



第82図　土器溜３



第83図　土器溜４（１）

甕形土器（459～467）

459は，竪穴建物跡９号出土の破片とも接合している。器壁が薄く，頸部から直線的に口縁部が広く外傾する。ナデ調整により，口唇部内面は筋状に凹む。頸部の屈曲は緩やかで肩部の張りは弱く，球胴状を呈し，最大径は胴部中位となる。外面は縦位及び斜位の細かいハケナデ調整が部分的にみられるが，被熱により器面が荒れている。内面は縦位のケズリ調整後，ナデ調整が施されている。また，内面の下半はコゲにより黒変している。460は頸部から直線的に口縁部が外傾し，端部は丸く収められている。頸部内面は縦位のユビナデ調整で，厚みが部位によって一定ではない。胴部内面は，ケズリ後ナデ調整が施されている。内面のユビナデとケズリ調整の境界は，段が生じている。外面は摩滅が激しいが，部分的にハケ目が残存する。

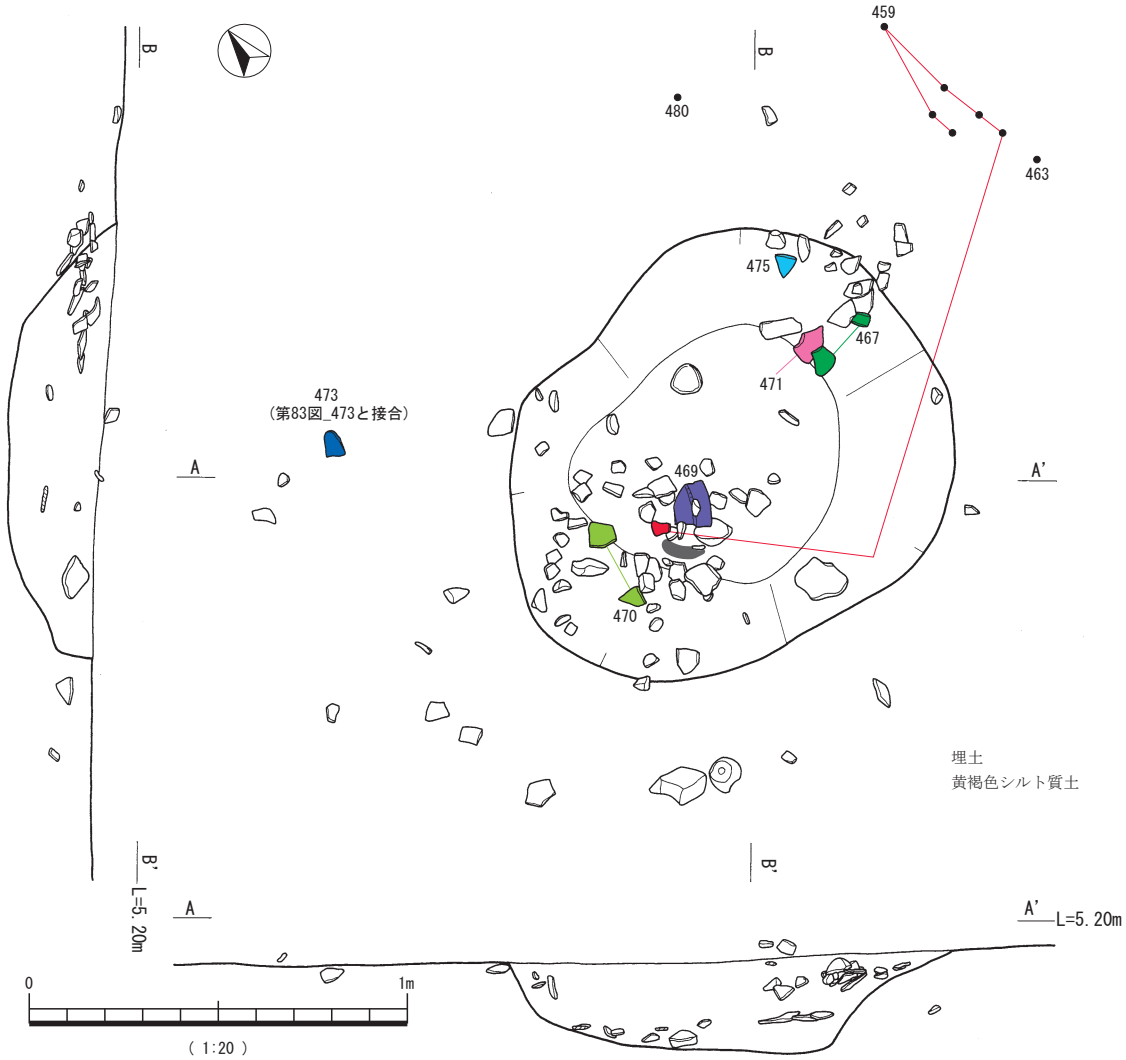
459・460は頸部の屈曲部からなで肩または球状に胴部が膨らむ器形である。稜のシャープさに欠ける。459は，器壁が薄く，胴部下半にススが付着する。

461～463は口縁部が内湾し，器形から長胴形になると想定される。いずれも，口唇部及び外面口唇部下がナデ調整により若干凹み，端部が外面側に張り出す。461は，調整が良好に観察できる資料で，口縁部外面は斜位のハケナデ調整後横位のナデ調整，胴部は斜位のナデ調整である。また，頸部の屈曲下には帯状に横位のナデ調整が加えられ，器形もナデの範囲が平坦になっている。内面は薄膜状に剥離しているが，部分的に斜位のハケ目が残存している。462・463は，内外面ともほぼ摩滅しており，部分的に461と類似するハケ目が残存している。463は，口唇部がやや外傾する。

464・465は緩やかに外傾する口縁部で，外面にタタキ痕が明瞭に残る。464は水平方向，465はわずかに右上がりのタタキ調整で，その上からナデ調整が加えられる。また，464は口唇部がナデ調整により浅く凹む。

466・467は，胴部～脚台である。466はわずかに外反し，胴部と脚台の境界は縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。脚台端部の内外面は横位のナデ調整を主とするが，部分的にタタキ痕が残り平坦状をなしている。また，脚台内面には縦位の工具痕が残る。467は胴部との接合面で剥落しており，被熱により斑状に赤変している。

なお，461・462・464～466については，竪穴建物跡４号の遺物の可能性も考えられる。



第84図　土器溜４（２）

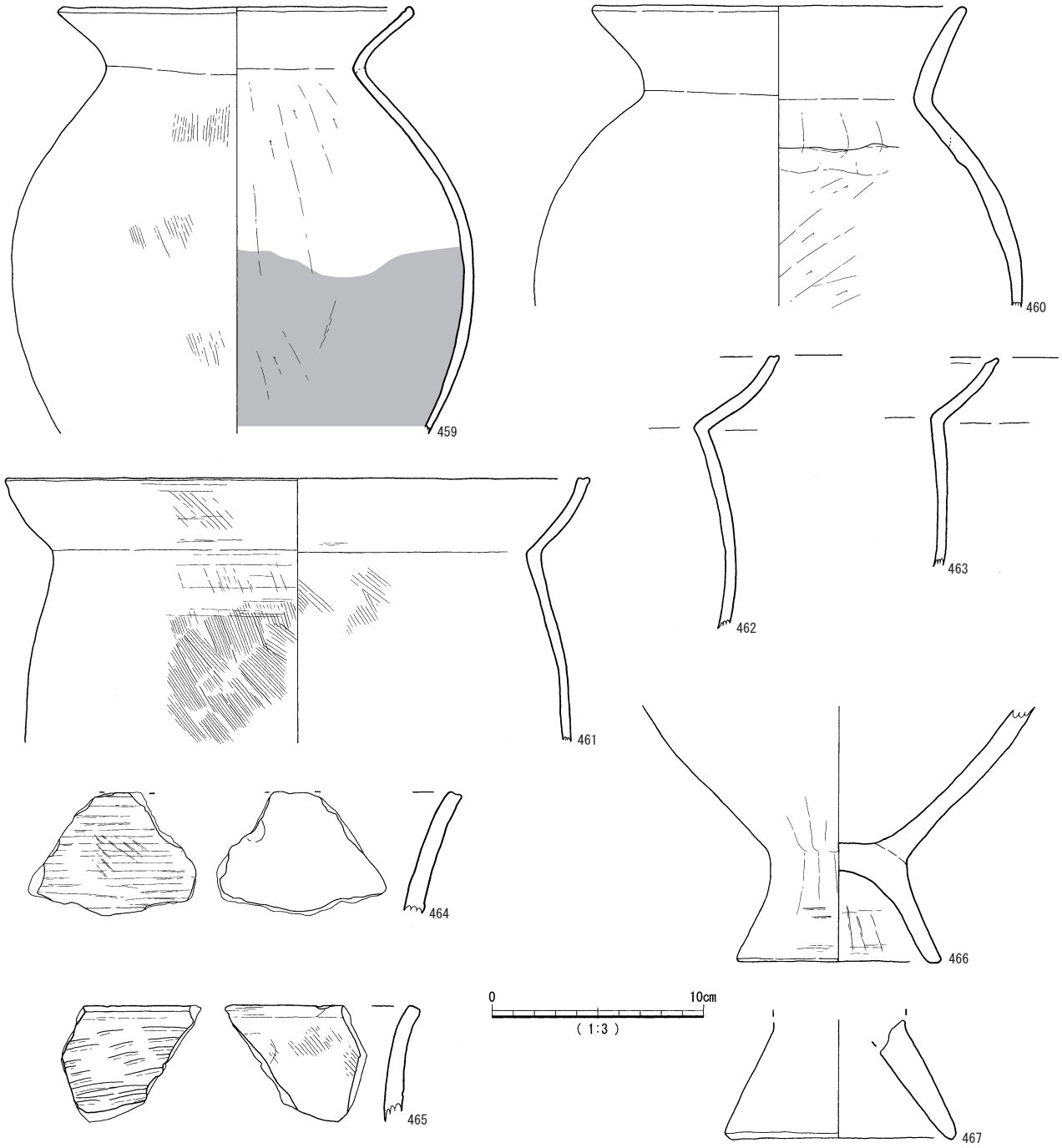
壷形土器（468～478）

壷形土器は赤みの強い色調のものが多く，長石や白色礫を多量に含む砂質の胎土である。

468・469は二重口縁壷である。468は器壁が薄く，胴部が球状に張り出す大型壷である。口縁部の屈曲は外に広く張り出し，直線的に内傾する。頸部の突帯には，ヘラ状工具で斜位の刻みが施されており，突帯下に接合痕がある。胴部には浅い沈線が横位に２条巡り，突帯を意識したものと考えられる。沈線は水平ではなく，幅も一定ではない。全体的に摩滅しており，器面調整は不明瞭である。469は屈曲部からわずかに外傾する口縁部で，屈曲部に押圧状の刻みを施している。頸部は縦位のハケナデ調整で，屈曲部下は横位のナデ調整が加えられている。

470・471は頸部片である。470の上端は接合面で剥落しており，二重口縁になると考えられる。外面は斜位のハケナデ調整を主体とし，上部に帯状に横位のナデ調整が加えられている。色調は明るく，胎土に１㎜大の白色及び赤褐色粒を多量に含む。471は頸部に突帯が１条巡り，斜位の刻みが施されている。内面は指頭押圧により，表面に凹凸が生じている。

472～478は胴部～底部である。472は468と同様に並行する２条の沈線が施され，突帯状をなしている。内外面とも摩滅しているが，外面に部分的にハケ目が残存する。473は薄く幅広の突帯を貼り付け，上下端はナデ調整を加えているが，ゆがみがある。摩滅のため調整痕は不明瞭であるが，突帯の内面側には指頭押圧，外面にはタタキ痕が部分的に残存する。474は，球胴状を呈する。最大径に薄く幅広い粘土紐を不整形に貼り付け，横位の沈線を２～３条巡らせて多条突帯状をなしている。さらに，斜位の沈線を加えている。475・476は，突帯部である。ただし，475は粘土紐を貼り付けるのではなく，４条の横位の沈線と，斜位の沈線を描くことで突帯状の文様を呈している。



第85図　土器溜４出土の土器（１）

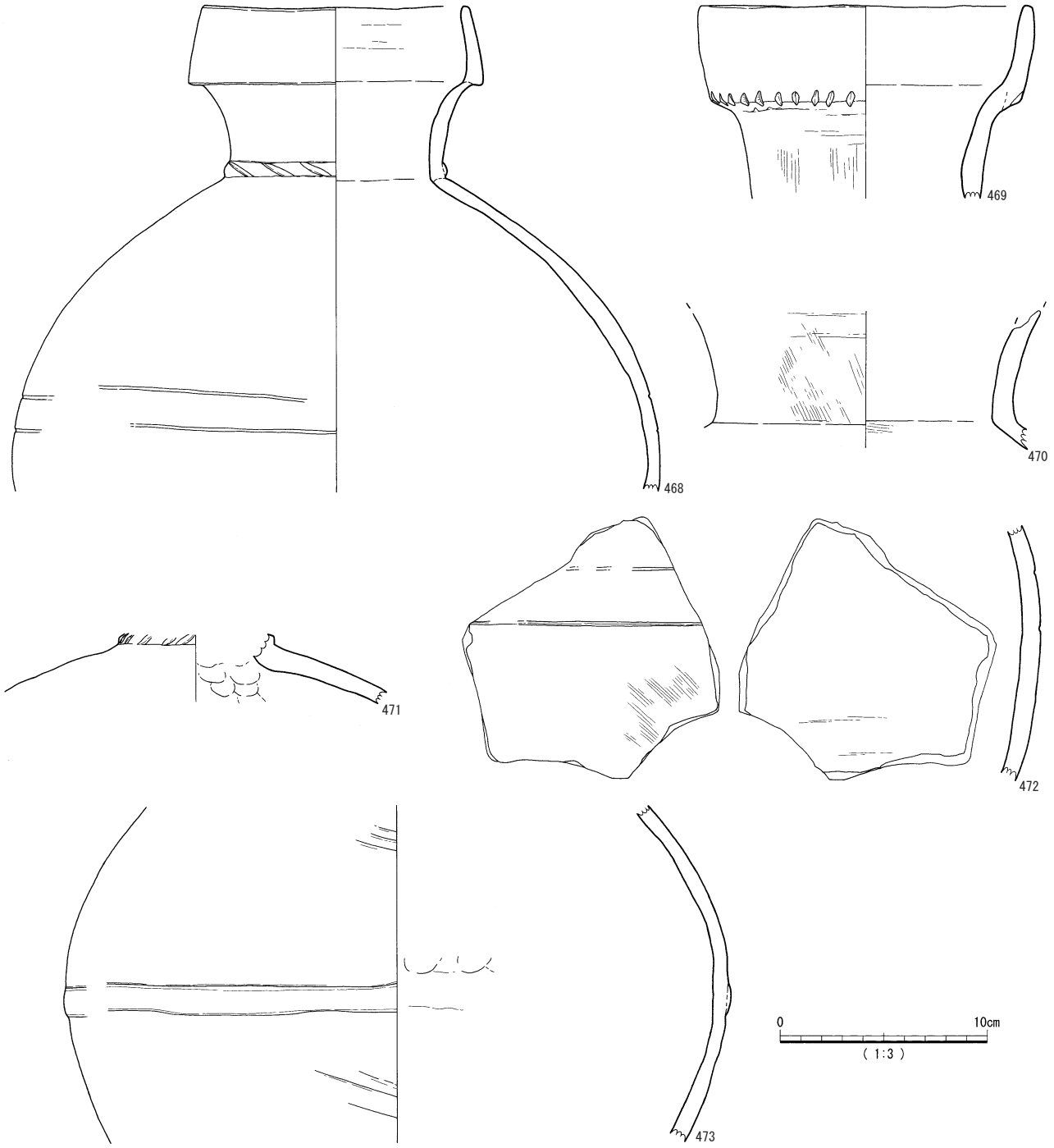
476は幅広い突帯に横位の４条の沈線を施して多条突帯状にし，さらに「ハ」字状の沈線を加えている。477は，頸部付近から底部まで残存する。薄く幅広の粘土紐を突帯として貼り付けている。突帯付近を胴部最大径として底部に向かってすぼまり，尖底となる。底部のみ厚みがあるが，大きさに対して器壁は薄い。内外面とも摩滅が激しく，調整は内面の指頭押圧と突帯裏のナデ状の痕跡のみ確認できる。外面の色調は斑状になっており，被熱によるものと考えられる。478は底部である。丸底で，外面にわずかに縦位及び斜位のハケナデ調整が残存する。

高坏形土器（479・480）

高坏形土器の脚部片である。479は坏部の立ちあがりの接合部で剥落しており，脚部はやや歪みながら下部が膨らむ。480は坏部との接合面で剥落しており，脚部上半が中実になる。いずれも胎土は粗く，白色及び赤褐色の３㎜大の礫を多量に含む。

③土器溜５（第88図～第93図）

Ｄ－26区，Ⅱc層で検出された。3.5m×2.5mの範囲に遺物がまとまりをもちながら広がっていた。直径約1.3～



第86図　土器溜４出土の土器（２）

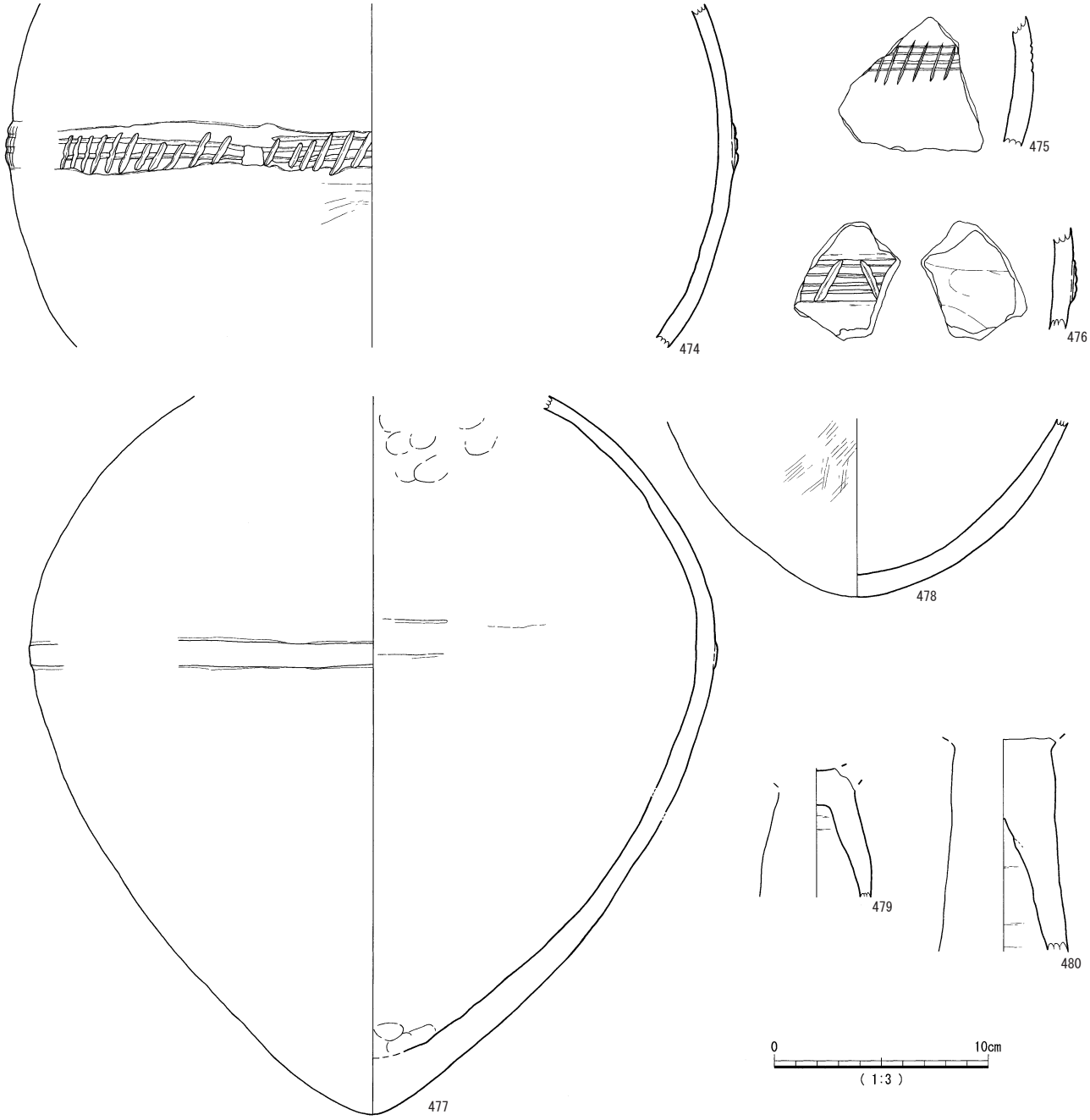
1.5m，深さ23㎝の不定形な円状を呈する掘り込みがあり，断面形は深皿形を呈し，北西側に重層的な重なりが見られる。

481は大きく破損しているが，厚さ約5.8㎝の扁平な石皿あるいは砥石と思われる砂岩製の石製品である。現存の長さ17㎝，幅13㎝，重量1842ｇである。片面を使用している。

甕形土器（482～510）

482・483・485・486は，頸部で屈曲し肩部が張る器形である。

482は頸部で緩く屈曲し，器高が低く径の小さい脚台が付く。器形はゆがみ，口縁部が傾く。全体的に摩滅しており調整痕は不明瞭であるが，胴部外面には左上がりのタタキ調整と，胴下半にケズリ調整がみられる。胴部に貼り付けるように脚部は作出されており，接合面が明瞭である。483は器壁が厚手で，口唇部の平坦面が外傾する。胴部の張りは弱く，長胴になると想定される。口縁部は内外面ともナデ調整で，頸部にカキアゲ状の工具痕



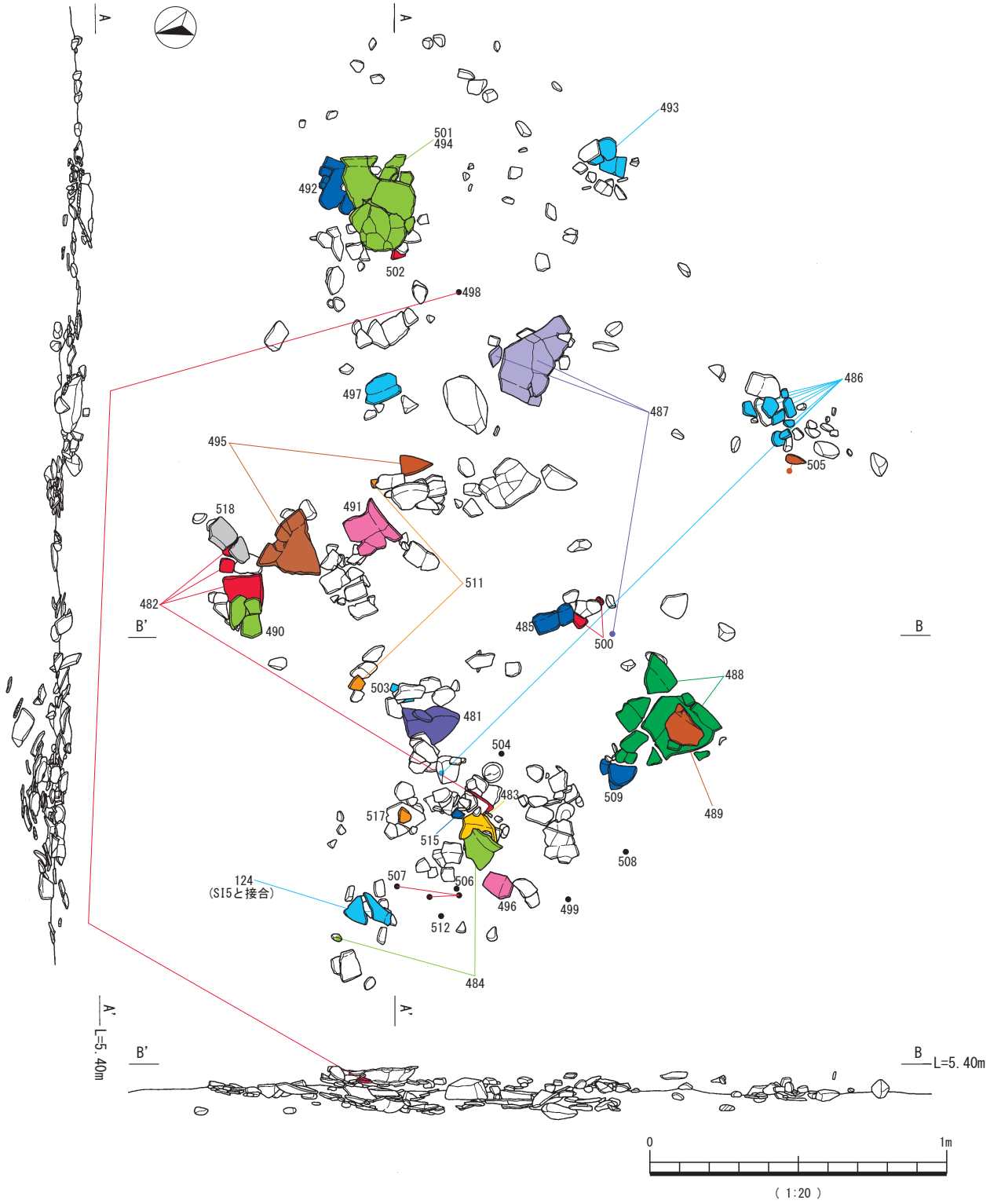
第87図　土器溜４出土の土器（３）

が残る。胴部は水平方向のタタキ調整後，ナデ調整が加えられている。色調が暗く，胎土に２～３㎜大の長石を多量に含む。中九州地方で出土する長胴の甕形土器に，器形は近い。485・486は胴部にタタキ痕を有し，頸部で屈曲して口縁部が外傾するものである。485は486と胎土及び調整は類似するが，屈曲部から胴部への張り方が強く，口径が小さい。口縁部外面はカキアゲ口縁状の斜位のハケナデ調整，口縁部内面は横位のナデ調整である。486は胴部外面に左上がりのタタキ調整後ナデ調整が加えられ，屈曲部より上位はカキアゲ口縁状の斜位のハケナデである。口唇部はナデ調整で平坦面が作出されている。内面は摩滅により不明瞭であるが，横位のハケ目が部分的に残存している。胎土に，白色及び赤褐色の砂粒を多く含む。

484は口縁部が短く直線的に外傾するもので，器壁は薄い。外面は摩滅し，頸部付近に横位のナデ調整がわずかに残存する。内面は頸部付近は横位のハケナデ，胴部は斜位のハケナデ調整で，口縁部側がやや幅広である。

487～503は，長胴形を呈する器形である。いずれも頸部で明瞭に屈曲し，内面側に張り出すものもある。

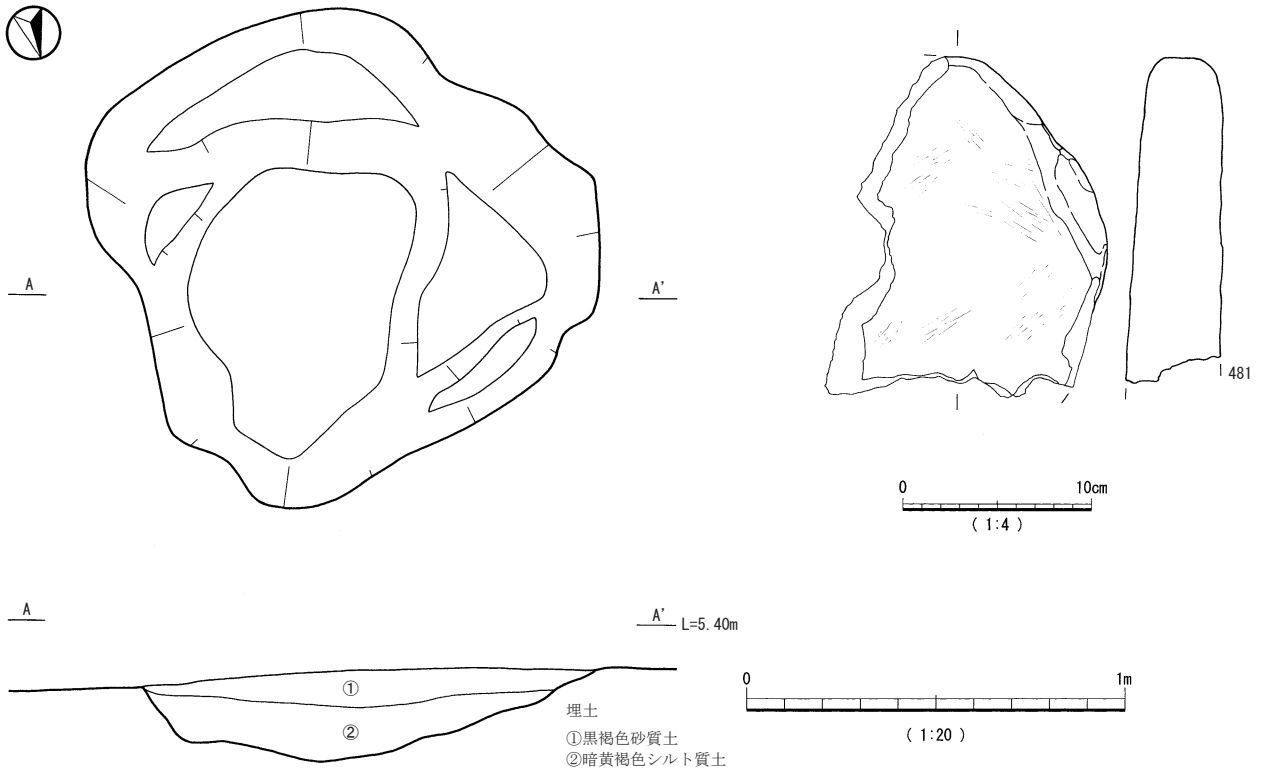
494～496は，特に内面の張り出しが明瞭である。また，口唇部はナデ調整により外面側に張り出し，口唇部が溝状に凹む等の特徴がある。全体的に器壁が薄く，内



第88図　土器溜５（１）

外面が摩滅したものは胎土中に細かい繊維状の空隙がみられ，混和材等で用いられた有機物の痕跡の可能性がある。

487・488は底部付近まで残存する。487は細かいハケナデ調整が残っており，頸部以下の胴部上半は縦位，胴部中位は内外面とも斜位である。口縁部は横位のナデ調整で，頸部の屈曲もナデ調整で作出されている。底部付近は，ケズリに近い横位のナデ調整である。器面に緩やかな凹凸があり，部分的に平坦面をなしているため，タタキ成形の可能性がある。488は外面は縦位・横位のハケナデ及び横位のナデ調整で，丁寧な作りである。内面は



第89図　土器溜５（２）と出土の石製品

摩滅により剥落しているが，略円形の凹みが胴部に複数みられ，タタキ成形の痕跡と考えられる。また，胴部下位は被熱により赤変し，器面がただれている。489は外面に部分的に調整が残っており，胴部の斜位のハケナデ調整の後，頸部下に帯状に横位のナデ調整が加えられている。490も489と同様に口縁部から頸部周辺までは横位のナデ調整で，胴部の内外面は斜位のハケナデ調整である。口唇部は内傾する。口縁部はやや厚手である。491は口唇部が内傾し，頸部の張り出しが明瞭である。492は口縁部が直線ぎみに外傾しており，全体的に薄い作りである。493の稜はやや屈曲が緩く，内外面とも薄膜が剥がれるように摩滅しており，器壁がその分薄くなっている。

494・495は，口縁部外面に強めの横位のナデ調整が加わることにより，凹凸が生じている。494は内面の張り出しが明瞭で，直下に接合痕がみられる。口唇部や屈曲部内面の張り出しは丸みを帯びる。胴部の内外面には細かい斜位のハケナデ調整が施され，口縁部内外面および頸部外面は横位のナデ調整で仕上げられている。胎土には，細かい角閃石粒を多量に含む。495は比較的胴部の器壁が厚手であり，頸部内面の張り出し直下に接合線が明瞭に残る。口唇部及び口縁部外面には強めの横位のナデ調整が加えられ，凹線状を呈している。胎土には，２～３㎜大の長石をまばらに含む。496～499は器面が膜状に剥がれるように摩滅しており，部分的に器面が残っている。499は口唇部及び外面口唇部下がナデ調整により凹線状に凹んでいる。

500～503は比較的内弯が弱い。外面は横位のナデ調整により器面に凹凸があり，501は頸部内面側の接合面も明瞭である。502は口唇部が玉縁状を呈し，内外面の張り出しがほとんどない。

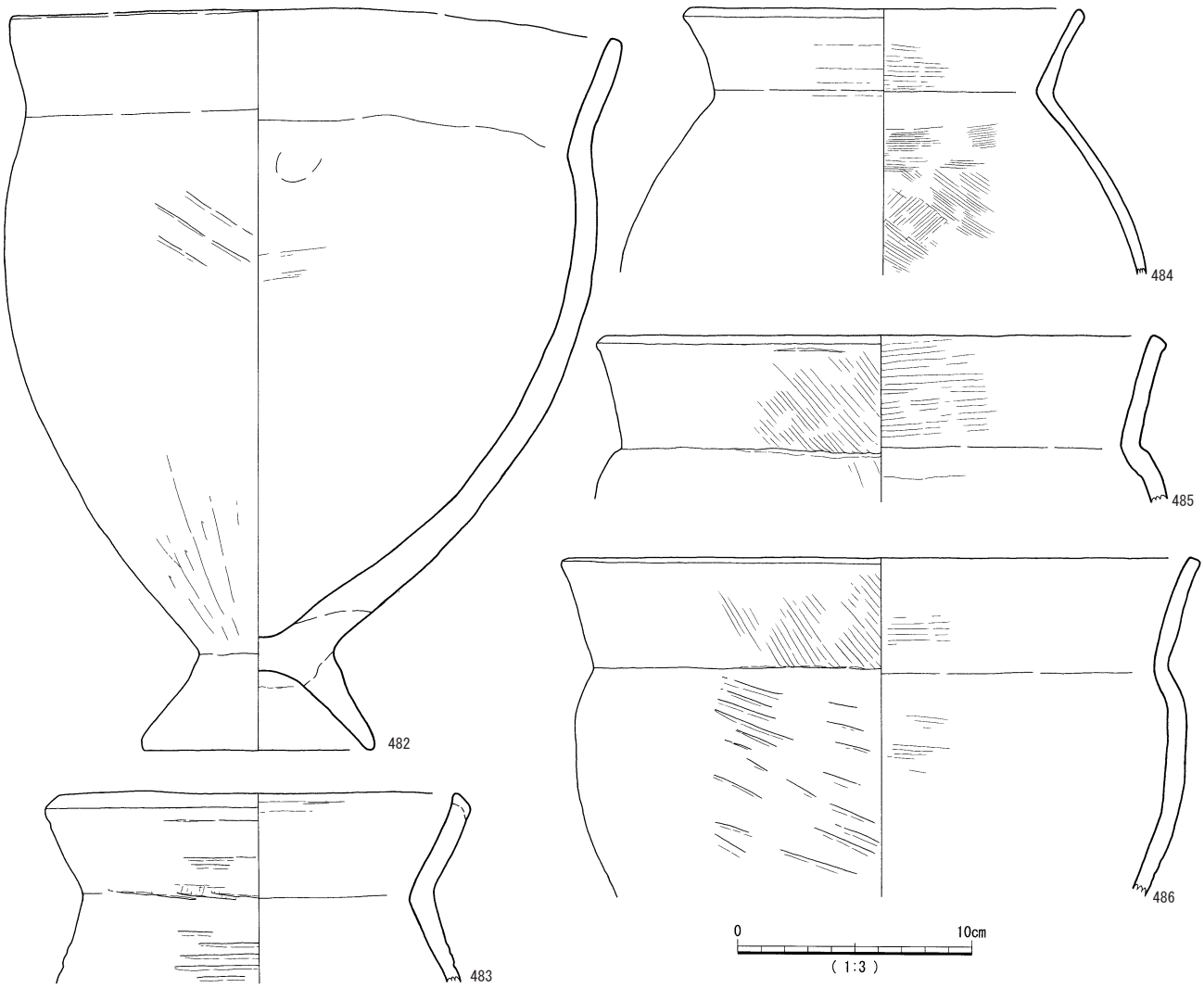
504は屈曲部から口縁部が外傾し，肩部も直線的に膨らむ器形である。内外面ともハケナデ調整で，単位は細かく丁寧である。色調が明るく，赤褐色礫を多く含む点で他と異なる。

505～507は頸部～胴部片である。

505は胴部に水平方向のタタキ調整後，ナデ調整が加えられており，タタキ痕は部分的に残存する。506は断面カマボコ状の突帯を貼り付け，刻みを加えている。器面調整は細かいハケナデで，丁寧なつくりである。507は器壁が薄く頸部で屈曲して球胴状を呈すると考えられる。外面は左上がりのタタキ後，ナデ調整である。内面は胴部の細かいハケ目と頸部付近のケズリ調整が部分的に残存する。胎土には，１～３㎜大の長石粒を多量に含む。

508～510は，底部～脚台である。

508は脚台の接合面で剥落している。内底面は平坦で高台状を呈し，器壁は薄い。509・510は端部に向かって外反しながら開くもので，510はナデ調整により端部が平坦面をなし，筋状にわずかに凹む。いずれも器壁が薄く丁寧に仕上げられており，509の立ち上がりから長胴形の甕



第90図　土器溜５出土の土器（１）

形土器になると想定される。

壷形土器（511～515）

511と512は二重口縁壷である。

511は肩部はなで肩で，口縁の肥厚部はナデ調整で，丁寧に仕上げられている。また，肥厚部下は縦位のユビナデ調整によって成形している。胎土は軟質で，砂粒は目立たないが，赤褐色粒をまばらに含む。512は屈曲部から直線的に立ち上がる。口縁部外面にはハケナデと思われる粗い条痕状の筋が残っているが，内外面とも摩滅している。

513は口縁部片で，口唇部が「く」字状に屈曲する。外面の屈曲部は，強めの横位のナデ調整によって作出されている。514も513と同様の器形と考えられ，外面には縦位のミガキ状の調整の上位から横位のハケナデ調整が加えられている。515は幅広で薄い突帯を貼り付け，沈線上の斜位の刻みを加えている。胴部外面は，条痕状の工具ナデ調整である。514は事実誤認しており，レイアウト確認後，土器溜３で検出されたことが判明した。

小型土器（516・517）

516は，長頸の小型丸底壷である。胴部の屈曲部分が，わずかに残存する。口縁部は直線的に緩やかに外傾し，口唇部は舌状を呈する。小型土器の中では，比較的厚手である。

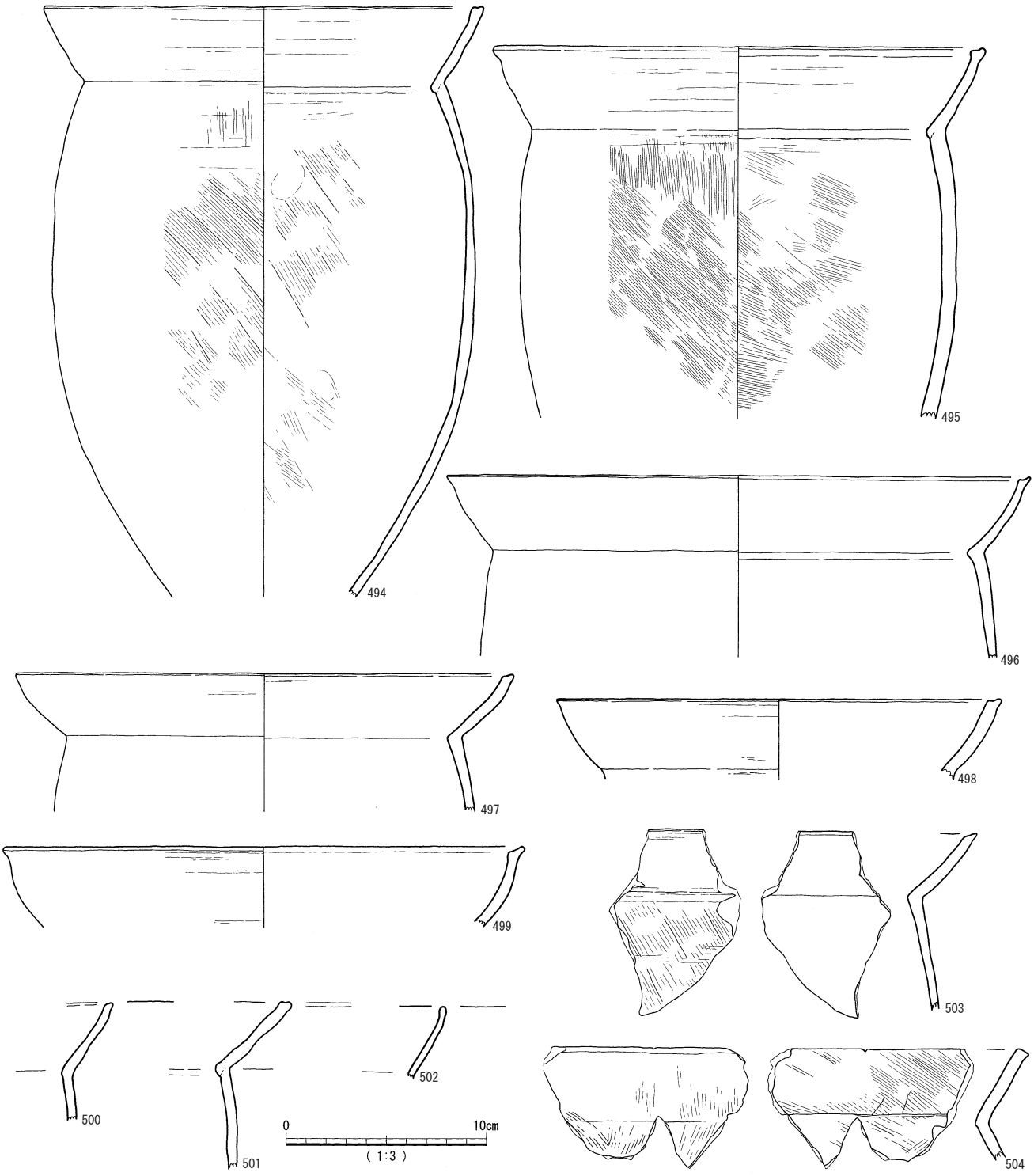
517は，小型の鉢または，小型丸底壷の口縁部と考えられる。口縁部は内弯し，内外面ともナデ調整により口唇部は舌状を呈する。部分的に赤みを帯びる部分があり，顔料が塗布されていた可能性もある。

高坏形土器（518・519）

518・519は口縁部が広く開く器形である。518は口縁部下半の屈曲部が明瞭で，内面側に段を有する。内外面とも摩滅しているが，外面はカキアゲ状のナデ調整の単位ごとに凹凸がみられる。砂粒が多く粗い胎土で，２～３㎜大の長石を多量に含む。519は坏部に明瞭な屈曲部は持たず，わずかに下半が内弯する。外面は縦位の細かいハ



第91図　土器溜５出土の土器（２）



第92図　土器溜５出土の土器（３）

ケナデ調整ののち，横位のナデ調整が加えられ，下部には部分的にミガキ調整がみられる。胎土は軟質で，石英と思われる光沢のある微細な透明砂粒を含む。

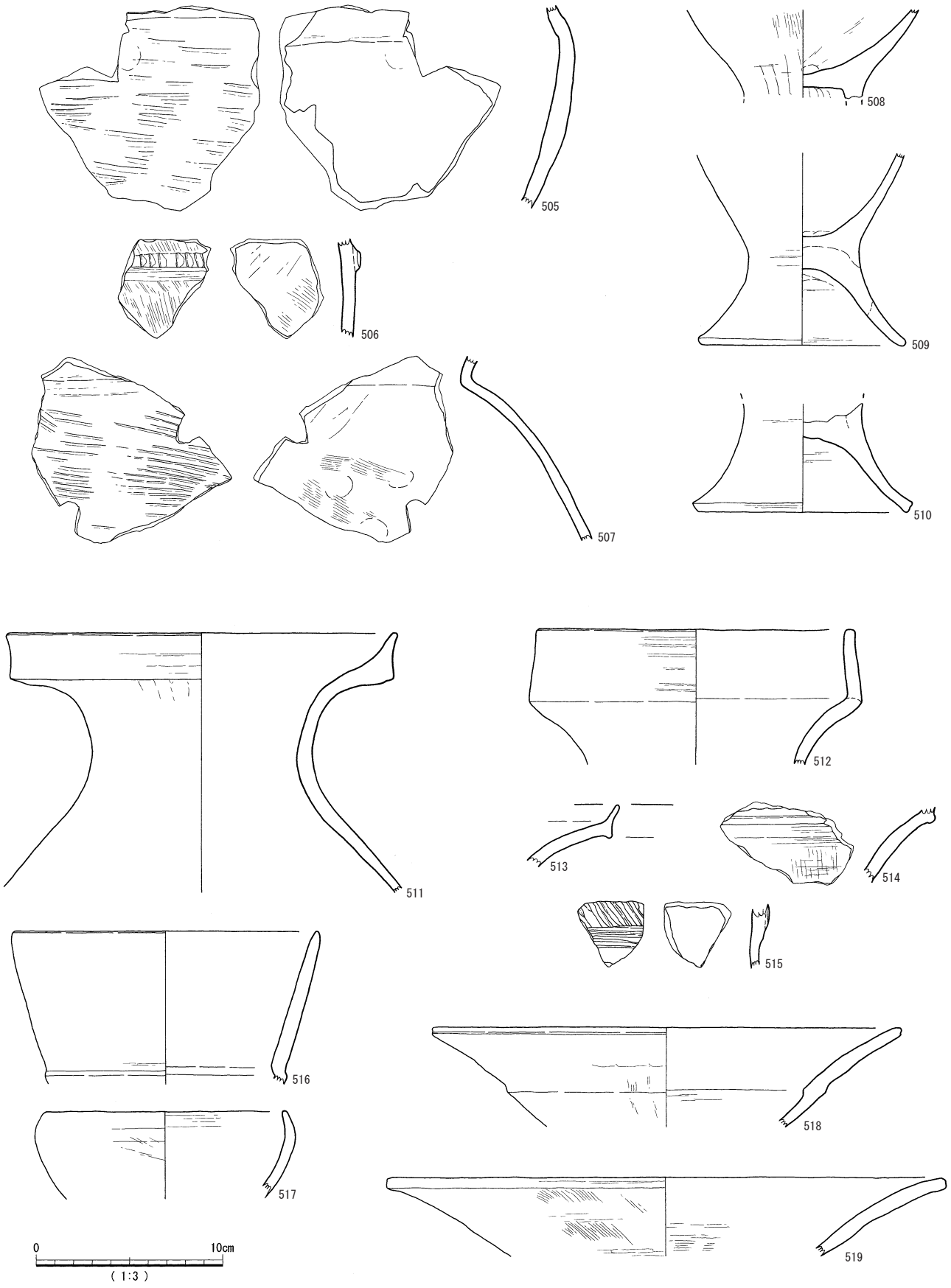
④土器溜６（図版19）

土器溜６は，Ｄ－28区で検出され，同じ面に広く分布している。

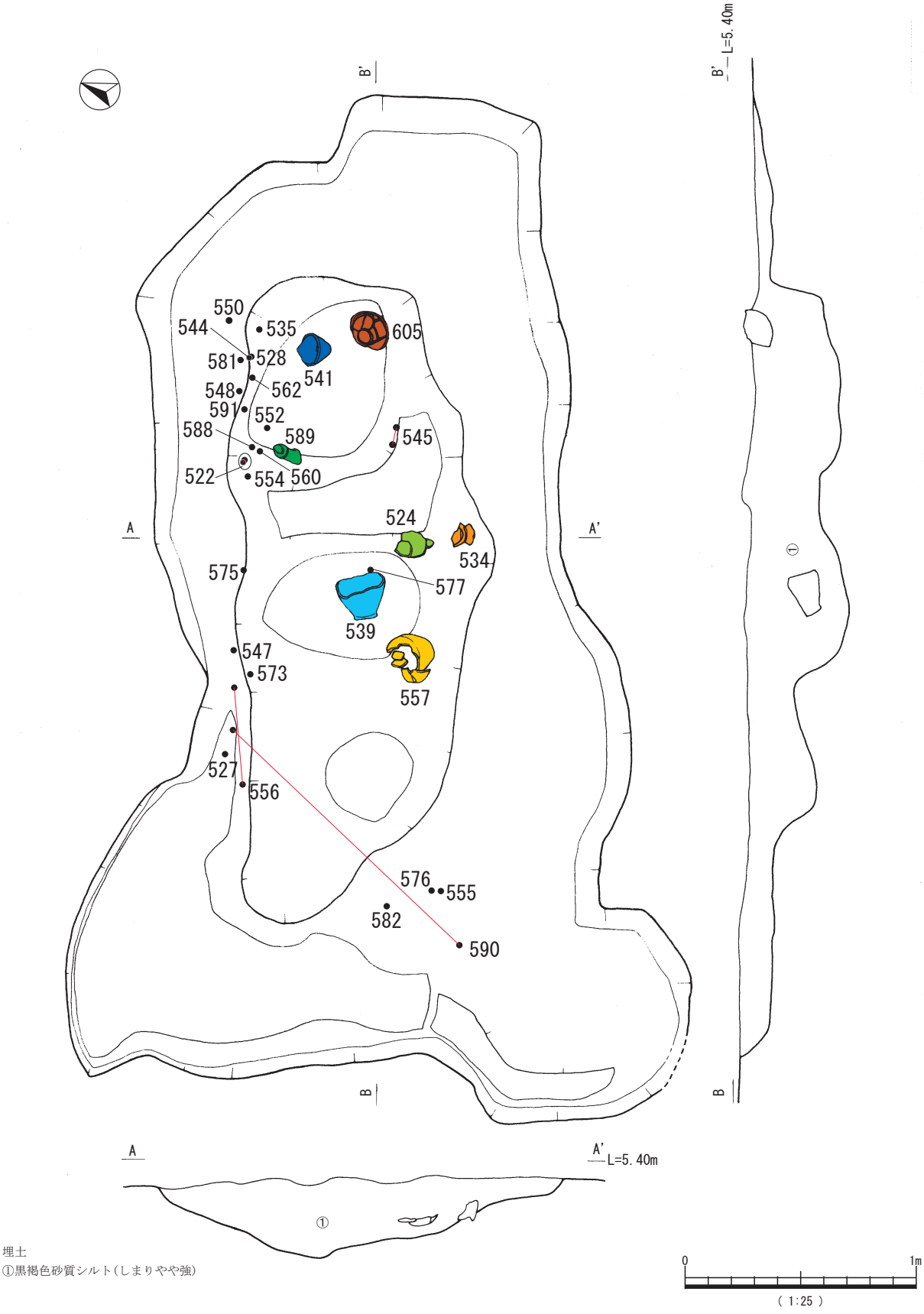
出土状況は図版19のような状態である。その下は竪穴になっており，竪穴状遺構として扱った。遺物は第60～65図にある。

⑤土器溜７（第94図～第100図）

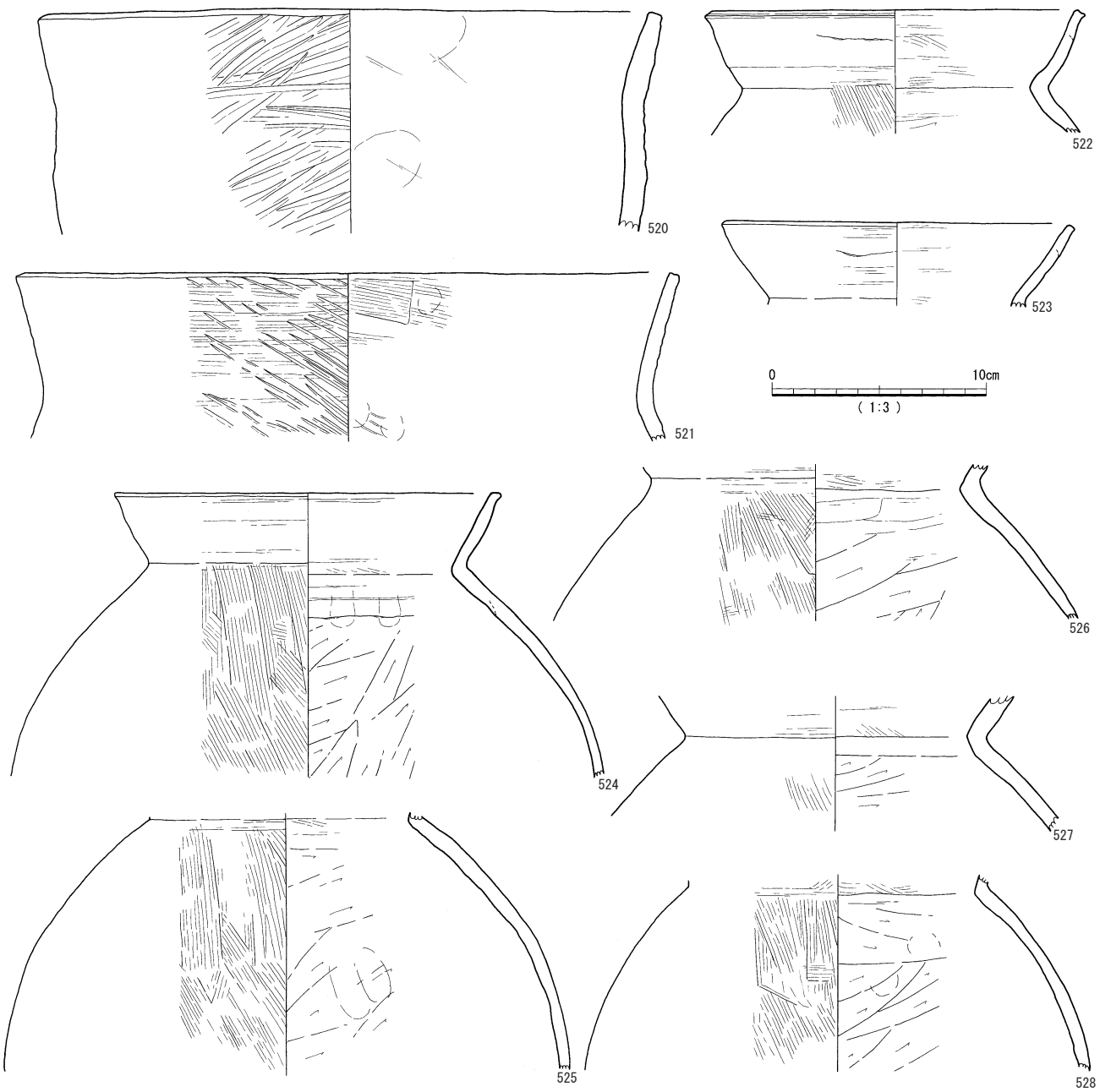
Ｃ・Ｄ－29区，Ｄ－Ⅳ層で検出された。広い範囲に土器片と礫が混ざり合う状況で出土した。数点まとまった



第93図　土器溜５出土の土器（４）


B'
B'
L=5.40m
550
544
535
605
581
528
541
548
562
591
552
588
589
545
522
554
560
524
534
A
A'
575
577
539
547
573
557
527
556
576
555
582
590
①
A
A'
L=5.40m
①
B
B
埋土
①黒褐色砂質シルト(しまりやや強)
0
1m
(1:25)

第94図　土器溜７



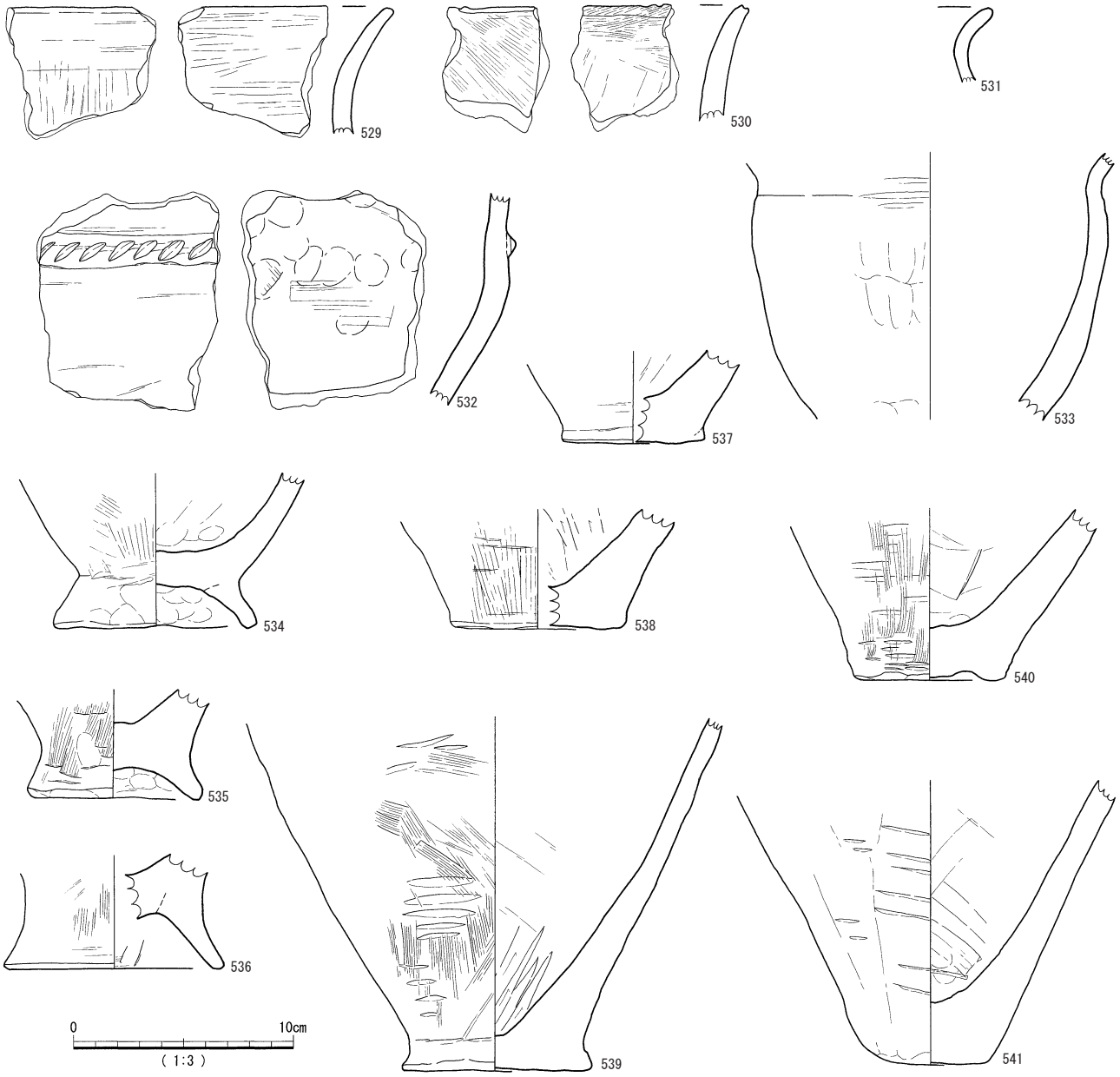
第95図　土器溜７出土の土器（１）

個体が出土している。そのうちの７点の出土状況を図化した。524は甕の口縁部から胴部である。534は甕の脚部である。539は甕か鉢の胴部から底部である。541はやや平底の甕の底部である。557は口縁部が欠損したレンズ状の底をもつ壷である。589は高坏の脚部である。605は，赤色塗彩の小型丸底壷である。

甕形土器（520～541）

520・521は頸部で緩く屈曲する器形で，外面は密なタタキ痕が残る。いずれも，口唇部はナデ調整により平坦面を有する。520は口縁部が短く，521に比べて厚手である。外面は右上がりのタタキ調整が口縁部まで施され，頸部の屈曲周辺のみ水平方向のタタキ調整が加えられている。内面はナデ調整であるが，器面にはタタキ調整の当て具痕と考えられる緩い凹凸がみられる。521は薄手で，水平方向のタタキ調整後，左上がりのタタキ調整が加えられている。内面は口縁部や頸部に指頭押圧がみられ，その後口縁部は斜位のハケナデ調整が施されている。

522～528は，胴部は緩やかな球胴状を呈し，最大径は胴部中位にくるものと想定される。口唇部は524がほぼ水平，523・524はやや外傾し，522・524は横位のナデ調整により口唇端部が外面側にわずかに張り出す。また，522は口縁部および頸部のナデ調整が顕著で，やや内弯気味となる。いずれも口縁部は横位のナデ調整で，頸部から縦位又は斜位の細かいハケナデ調整が施される。また，



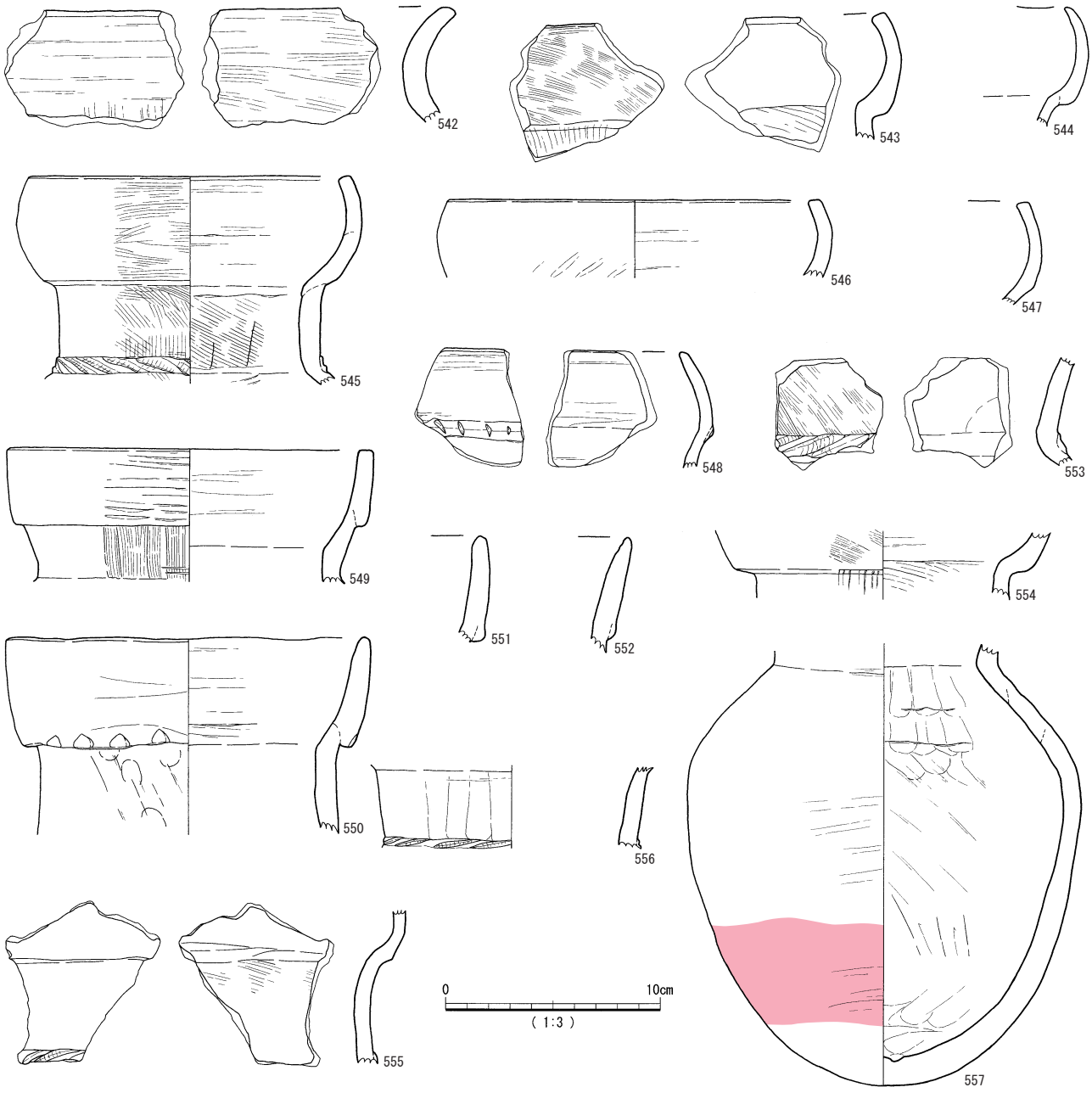
第96図　土器溜７出土の土器（２）

頸部には帯状に横位のナデ調整が加わる。内面は，頸部周辺はナデ調整であるが，胴部は基本的に斜位のケズリ調整が連続して加えられている。

529～531は口縁部が外反するもので，531は屈曲が強い。口唇部は丸く，530のみ端部にナデ調整が加えられて中央が溝状に凹む。529は胴部が縦位のハケナデ調整で，口縁部付近はハケナデ調整後，横位のナデ調整で成形している。530は特にハケ目が細かく，口唇部内面にも斜位のハケナデ調整が施され，厚手である。また，金雲母が目立つ。

532・533は，頸部～胴部片である。532は突帯を１条巡らせ，押圧状の刻みを施している。突帯下で弯曲し，底部に向かってすぼまる器形と想定される。内面は指頭押圧が顕著で，弯曲部付近は幅広のハケナデ調整がみられる。533は頸部で緩く屈曲して外反するもので，底部に向かってすぼまる器形になると想定される。小型であるが，器壁は厚い。頸部外面に水平方向のタタキ痕が残存し，胴部は縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。

534～536は脚台である。534は脚台器高が低く，ハケナデ調整で丁寧に仕上げられている。端部は丸く収められ，比較的器壁は薄い。534・535は脚台というよりも上げ底に近く，指頭押圧による成形で器面にゆがみがある。いずれも胴部外面は，カキアゲ状の粗いハケナデ調整である。535は胎土に白色・灰色・赤褐色礫を多量に含む。536の脚台も小さい。



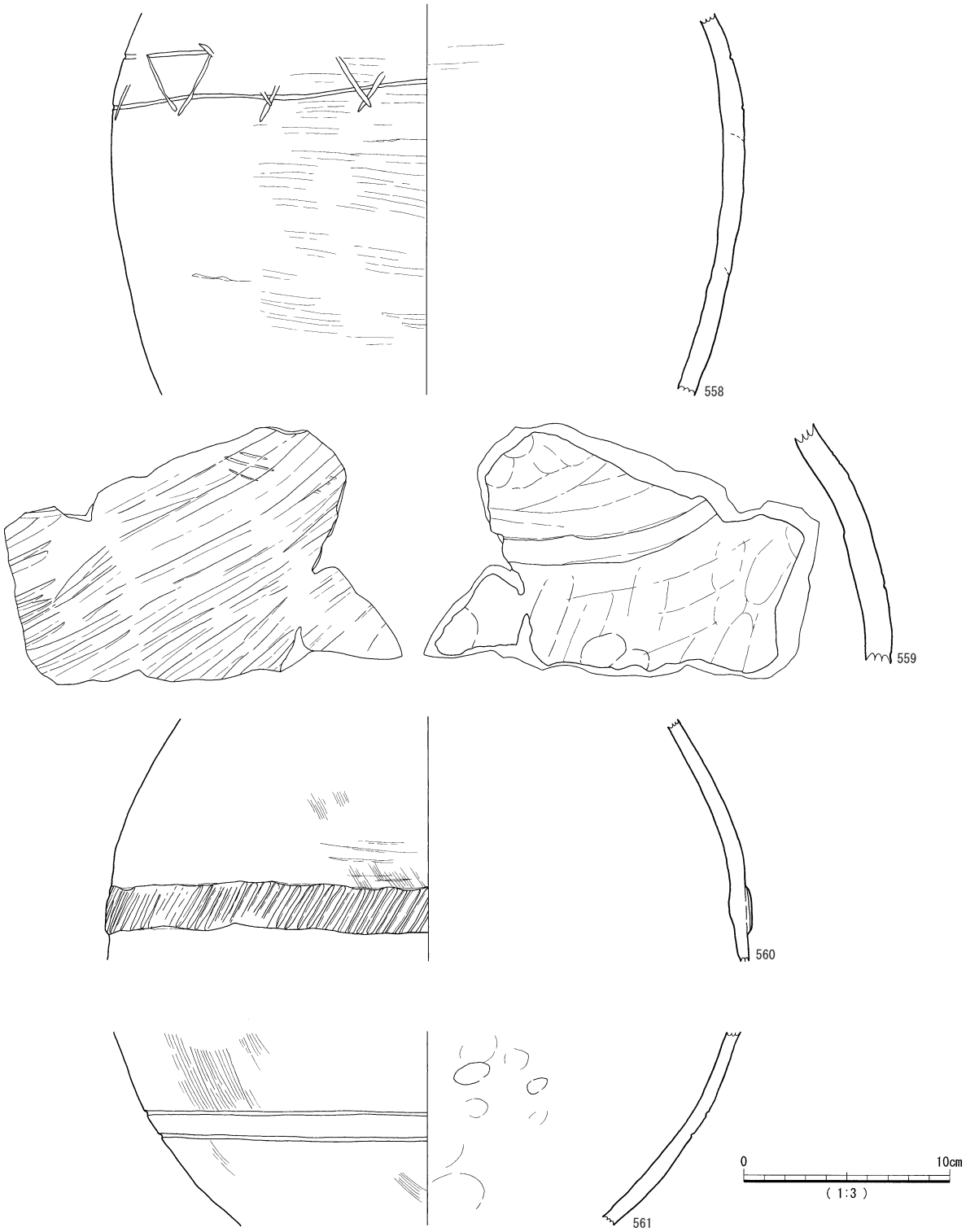
第97図　土器溜７出土の土器（３）

537～541は平底となる一群である。いずれも底部および胴部への立ち上がりは器壁が厚く，重量がある。537～539はやや張り出しをもつ平底で，立ち上がりがわずかにくびれる。539は外面に幅広の水平方向のタタキ調整がみられ，その後縦位・斜位のハケナデ調整が加えられる。内面はナデ調整を基本とするが，内底面付近は縦位のケズリ調整である。538も同様に，外面はタタキ調整後に縦位のハケナデ調整，内面はケズリ調整で，539に比べて丁寧なつくりである。540はナデ調整により底面中央にふくらみが残り，高台状を呈する。外面は幅広のタタキ調整が底面付近まで施され，その後縦位のハケナデ調整である。砂粒を多く含むが焼成も良好で，作りも丁寧である。541は平坦面が小さくゆがみがある。外面は幅広のタタキ調整により，平坦面が連続する。内面は帯状の工具ナデで，内底面付近は器面に工具の端部が当たり，凹凸が生じている。器壁が厚く，重量がある。

壷形土器（542～578）

542は短頸の広口壷の口縁部である。内外面ともハケナデ調整後ナデ調整で，赤褐色・灰白色礫を多量に含む粗い胎土である。

543～552は二重口縁壷の口縁部である。543～548は袋状口縁に近い内弯，549～552は直口ないしはわずかに外傾する。また，544はゆがみの可能性もあるが，口唇部が緩やかな波状を呈する。内弯するタイプは，口唇部



第98図　土器溜７出土の土器（４）

断面形が方形と舌状を呈するものの２種があり，後者は器壁が薄い。調整は類似し，屈曲部は横位のハケナデ調整及びナデ調整を主体とし，頸部は縦位のハケナデ調整である。また，頸部内面は斜位のハケナデである。いずれも，ハケナデ調整のハケ目は細かいが，553・554の頸部は幅広のハケ目である。545・556は１条粘土紐を巡らせ，ハケ調整と同様の工具による斜位の刻みで縄目文様を呈している。548は屈曲部に薄い突帯を貼り付け，浅い刻みを施す。545～548は色調に赤みが強い点や，胎土に長石・白色礫を多く含む点が類似し，器面に赤色の粘土がスリップがけされたような断面を呈する。

549は口縁部が直口し，頸部及び口唇部とも稜線が明瞭

である。口縁部外面はタタキ痕が残り，頸部は丁寧なカキアゲ状のハケナデ調整である。胎土には１～２㎜大の赤褐色礫を多量に含む。550は作りが粗く厚手で，接合面や肥厚部の端部もゆがみがある。肥厚部の端部には押圧状の幅広の刻みが施され，明瞭なものや，浅く不明瞭なものなど，刻みも安定していない。作りが粗雑なだけでなく色調も明るく，545等の質感とは異なる。内面は上半は粗いユビナデ，下半は摩滅している。552の色調は550と近いが，調整が丁寧である。内外面とも丁寧な横位のナデ調整で，内面の口縁部付近は筋状に凹凸が生じている。549～552は色調が黄褐色を呈し，内弯するタイプの二重口縁とは色調が異なる。

554～556は頸部であり，調整や突帯の特徴から，二重口縁壺の頸部と考えられる。556は外面に縦位のユビナデ調整が明瞭で，縦筋状の面が形成されている。

557は肩部下位に最大径をもち，緩やかに丸底の底部に繋がる。器壁は厚く，小型だが重量がある。外面に幅広のタタキ痕が浅く残存し，器面は部分的に平坦面状をなす。内面は，頸部から肩部にかけて接合痕が見られ，その周辺に縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。内底面はユビナデ調整で凹凸があり，胴部はカキアゲ状のケズリ調整である。外面胴下半は被熱によって帯状に赤変しており，火にかけて使用したことが分かる。

558～561は大型壺の胴部で，559を除き，器壁が薄い。558は最大径が胴部上半にあり，胴下半がわずかにすぼまる。最大径に横位の２条の沈線を巡らし，さらに鋸歯状の沈線を描いている。施文はゆがみがあり，全体的に右上がりとなる。器面調整は，幅広のタタキ調整後丁寧なナデ調整である。559は器壁から肩部付近と考えられる。外面は幅広いタタキ痕で，内面は横位のユビナデ調整が連続している。色調や外面の器面調整の雰囲気は558と類似するが，器壁が厚い。560は胴部に幅広の薄い突帯を貼り付け，その上に密に浅い斜位の刻みを施している。突帯の上下は貼り付け後にナデ等は加えられず，ややゆがみがある。内外面とも器面は摩滅しているが，わずかに水平方向のタタキ痕やカキアゲ状のハケ目が残存する。561は胴部下半に２条の沈線を描き，突帯状を模していると考えられる。外面には細かいハケナデ調整が部分的にみられ，内面には細かい指頭押圧が連続して施される。また，内面は幅広い円形の凹凸が連続しており，タタキ調整の当て具痕と考えられる。色調は赤みが強く，スリップ状に赤色に発色する粘土を重ねているような断面である。

562～570は突帯である。562～564は幅広く薄い突帯を貼り付け，563は横位のハケナデ，564は斜位の浅い刻みを施している。565～567は粘土紐を貼り付けず，肥厚または胴部最大径と想定される部分に沈線で突帯状の文様を施している。566は，器面調整は細かいハケナデ調整で，その上から558と類似する横位と鋸歯状の文様を施している。567は，少なくとも４条以上の横位の沈線である。568・569は粘土紐を貼り付け，568は横位と縦位の沈線，569は格子状の斜位の沈線で施文している。570はいわゆる幅広突帯で，ハケナデ調整と同様の工具を押圧して斜位の沈線を施している。

571～577は底部である。571・574・575は平底，573・576はレンズ状でわずかに平底を有するもの，572はほぼ丸底に近い。571・575・576は細かいハケナデ調整，573は左上がりのタタキ調整である。572は金雲母が目立つ。また，575・576は外面に赤色顔料が塗布されている。577は丸底となると考えられ，外面には複数方向に切りあうタタキ痕がみられる。内面は，底面付近が大ぶりで深い指頭押圧，胴部は浅い指頭押圧である。

578は厚手で，肩部に沈線が１条巡る。外面は細かいハケナデ調整で，内面は工具ナデである。胎土は粗く，２～３㎜大の赤褐色礫を多量に含む。

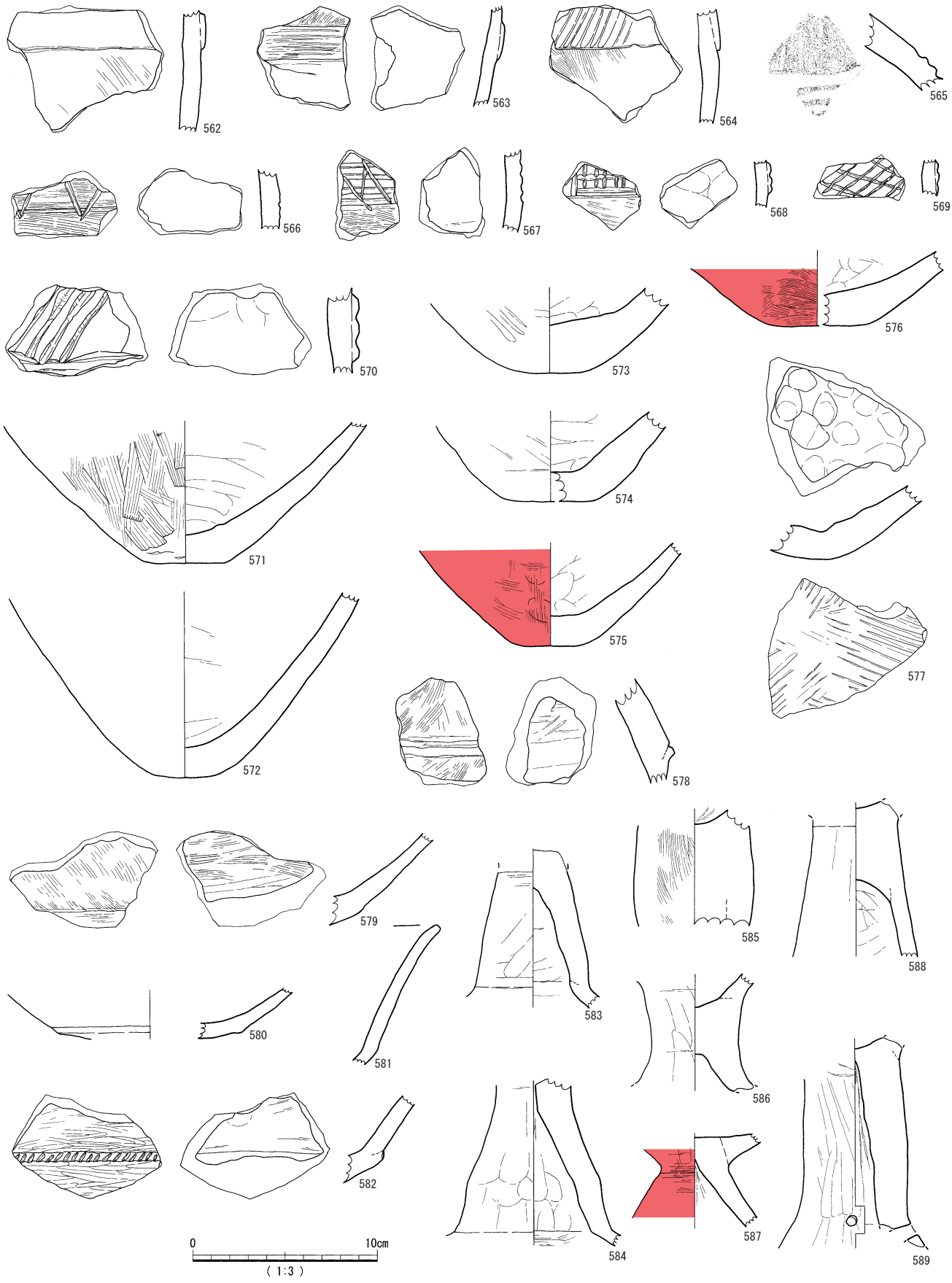
高坏形土器（579～589）

579～582は，坏部片で，屈曲して広く開くタイプである。579は内外面とも細かいハケナデ調整で，外面は屈曲部から斜位のカキアゲ状を呈する。軟質で精製された胎土に，赤色・灰色の砂粒をまばらに含む。580は細かいハケナデ調整，581は屈曲部から口縁部が長く伸びるタイプで，器高が高くなると考えられる。口唇部内面はナデ調整によりわずかに平坦面状をなす。582は外面は横位・斜位のミガキ調整で，屈曲部にヘラ状の工具による細かい刻みが施される。厚手であるが，外面は丁寧なミガキ調整である。

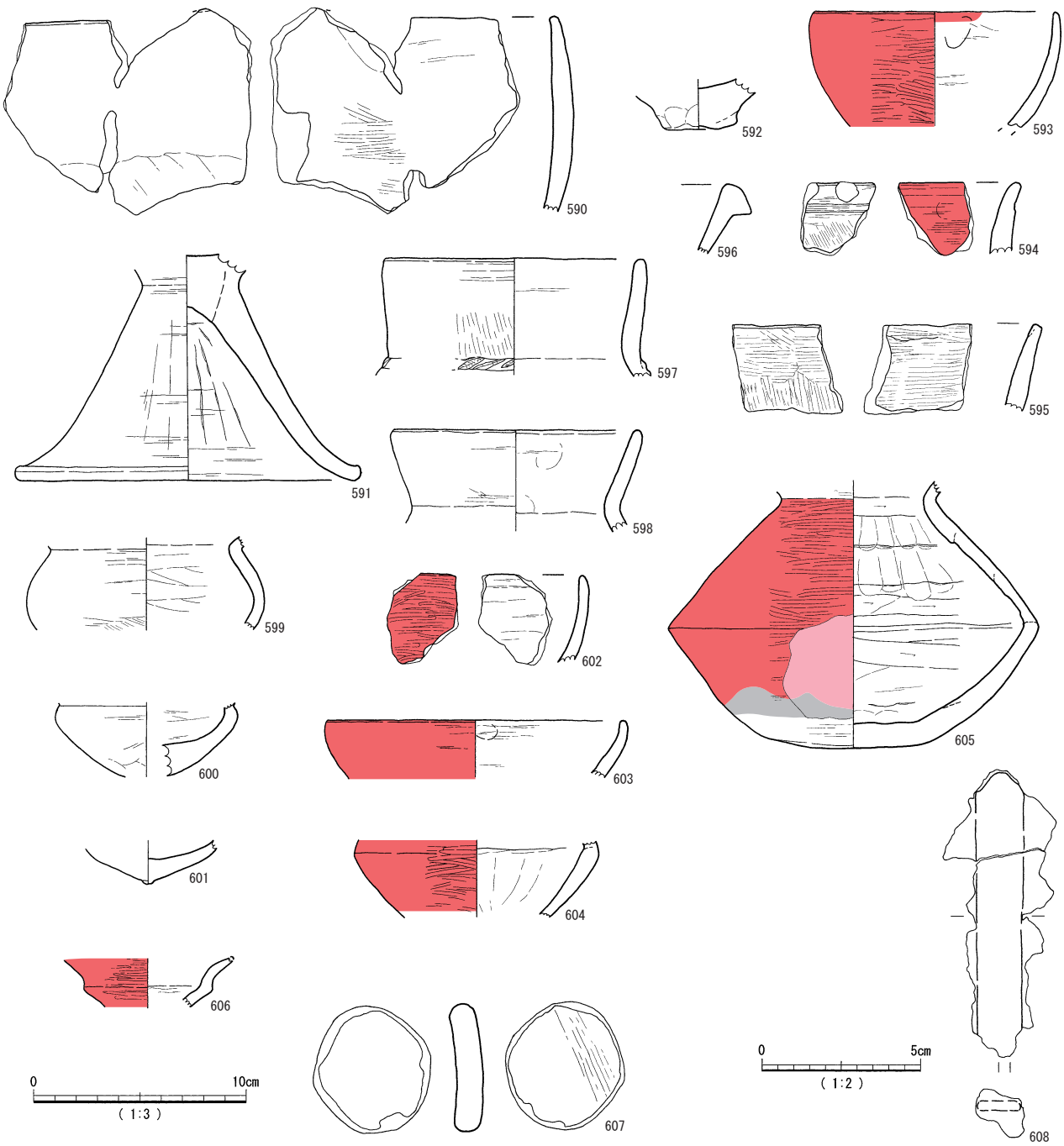
583～589は脚部である。583・584は屈曲部に向かって緩く膨らみ，屈曲部から開くタイプである。外面は連続したユビナデ調整で，584は内外面とも粗い調整により器面に凹凸がある。585はエンタシス状を呈する中実の脚部で，外面は細かい斜位のハケナデ調整である。大型のものと想定される。586・587は坏部・脚部の接合部から上下に広がるタイプで，586は部分的に中実になる。587は外面の屈曲部付近に細かい横位のミガキ調整が残っており，坏部の内底面はほぼ平坦である。そのため，坏部は広く皿状に開くタイプと考えられる。588は直線的に開くタイプで，内底面は粗いユビナデでドーム状をなす。589は長脚で，屈曲部付近に非対称の４か所の穿孔がみられる。横断面は楕円形で，ゆがみがある。外面は縦位の工具ナデ調整が明瞭で，筋状をなす。また，内面には脚部を筒状に成形した際のシワがみられる。579・587は外面に赤色顔料が部分的に残っており，本来は外面全体に塗布されていたと考えられる。

鉢形土器（590～596）

590は大型の鍋形をした器形をしている。591は，甕形土器より器高があり，作りが丁寧であるため，台付鉢と



第99図　土器溜７出土の土器（５）



第100図　土器溜７出土の土器（６）と土製品・鉄製品

判断した。底部に向かって緩やかに開き，端部付近で反る。内外面とも縦位のナデ調整後横位のナデ調整で，屈曲部は特に強めのナデである。接合面から，脚部を筒状に作り出し，上部から粘土を充填して成形していると考えられる。592はつまみ状の底部で，竪穴状遺構の408に近い器形である。粗いユビナデ調整で成形されており，中央は凹む。593は小型の鉢形土器である。口縁部がわずかに内弯し，椀形に近い鉢になると想定される。口縁内部にも部分的に赤色顔料が塗布されている。口唇部はわずかに平坦面を有するが，ゆがみがある。594・595は器形や調整が甕形土器と異なるため，鉢形土器に含めた。594は丁寧なハケナデ調整で，外面は一部沈線状を呈している。また，内面は赤色顔料が塗布されている。595は内外面ともハケナデ調整で，口唇部はゆがみがあるが端部は平坦面を有する。596は口縁部が三角突帯状となる鉢形をした土器だが，中期前半の弥生土器甕形土器の可能性がある。

小型土器（597～606）

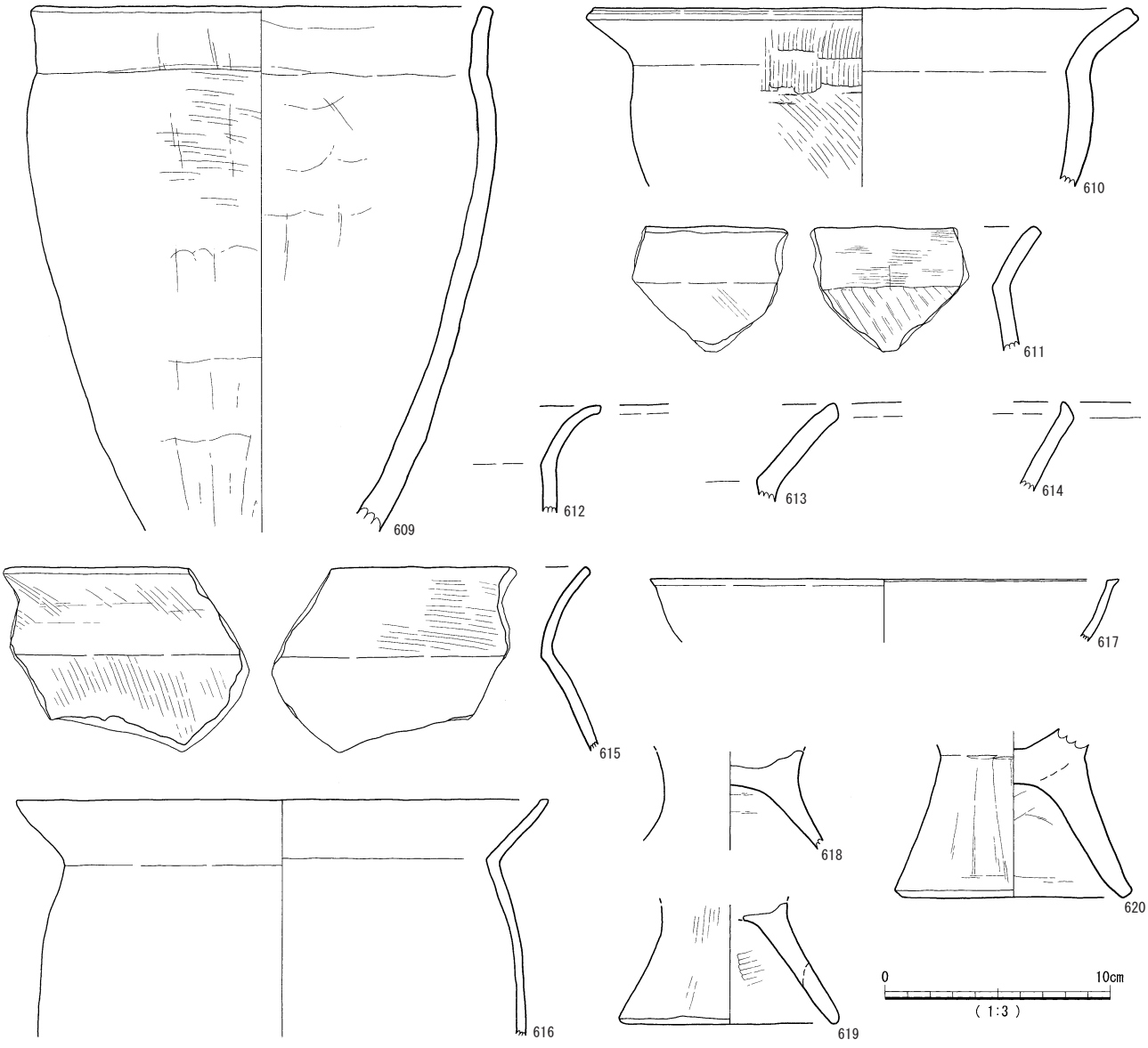
597・598は比較的器壁が厚く，口唇端部は丸みを帯びる。597は頸部に斜位の刻みを伴う突帯を有する。598は

胎土が精製されているが，597は１～２㎜大の砂粒を多く含むやや粗い胎土である。

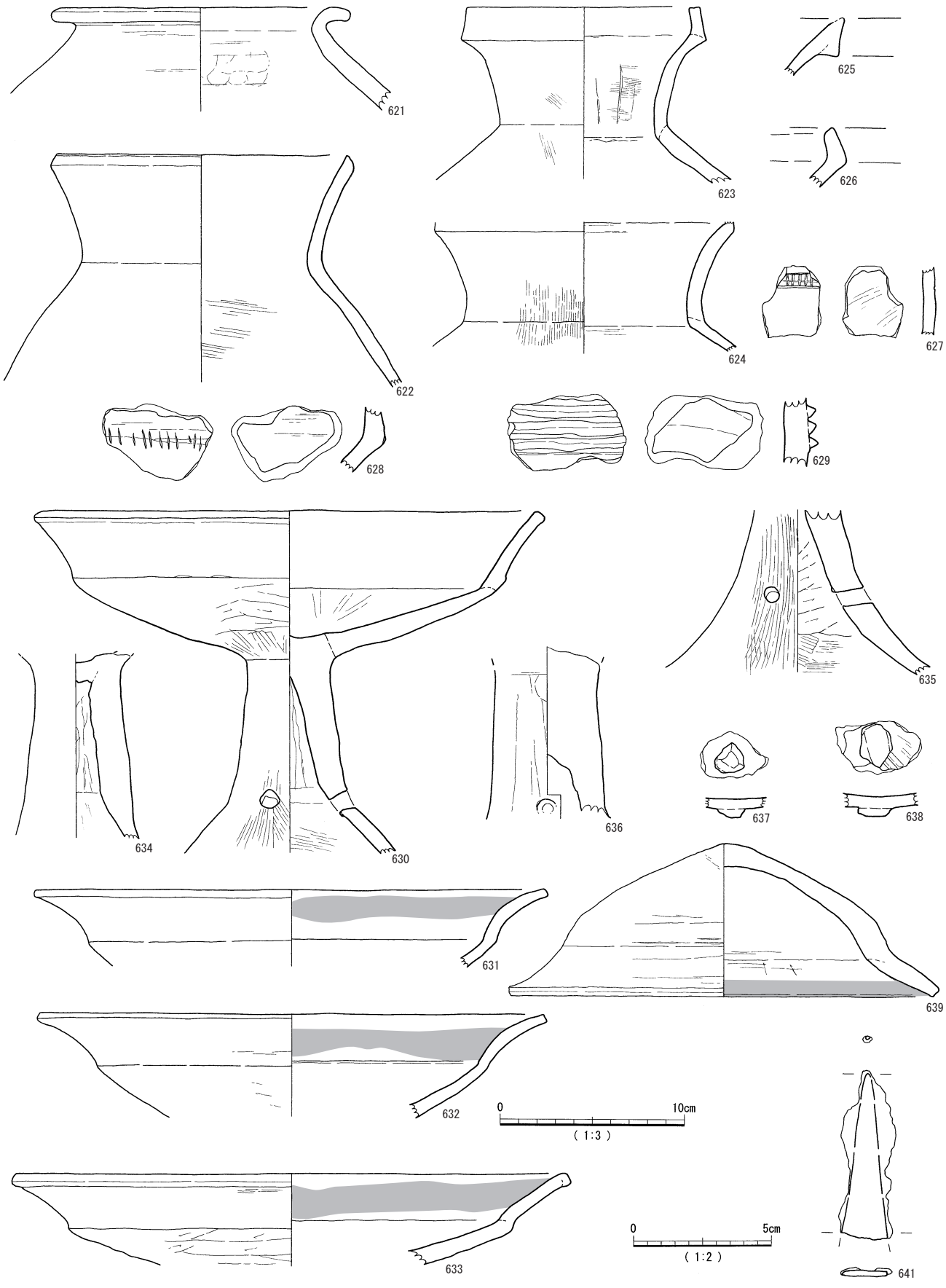
599～601は小型丸底壷で，いずれも内面調整はナデ調整で，599は胴部片で最大径が胴部中位よりもやや下にあり，頸部でくびれて口縁部が開くタイプと考えられる。内外面とも，調整は丁寧である。600は，器形は604に類似するが赤色顔料は塗布されておらず，やや調整が粗い。底部は欠損するが，胴部下半の器壁は厚い。601は，底面に小さな円形の張り出しがみられる。灰白色に近い明るい色調で，精製された胎土である。他の資料と作りが異なり，布留系の小型壷と考えられる。

602～606は外面に赤色顔料が塗布されているもので，器壁も薄く作りも丁寧である。外面調整は斜位のミガキ調整を主とし，口唇部付近はナデ調整により成形されている。603は602よりも口径が広く開くタイプで，内面には横位のハケナデ調整及び指頭押圧が加えられている。604は胴部下半の破片で，内面は縦位のユビナデ調整である。

605はそろばん形を呈し，外面は赤色顔料が塗布されている。頸部がわずかに残っており，屈曲して口縁部が広く開くものと考えられる。胴部外面はやや摩滅しているが，横位を主とするミガキ調整で，胴部は部分的にハケナデ調整がみられる。また，底面付近を中心に被熱しており，胴部下半は一部剥離している。また，下面側から観察すると，底面の中心とややずれて帯状にスス痕が残っている。内面は外面に対して調整が粗く，胴部上半は接合面が段として残り，縦位のユビナデ調整が明瞭にみられる。下半はケズリ後ナデ調整で，内底面は指頭押



第101図　土器溜８出土の土器（１）



第102図　土器溜８出土の土器（２）と鉄製品

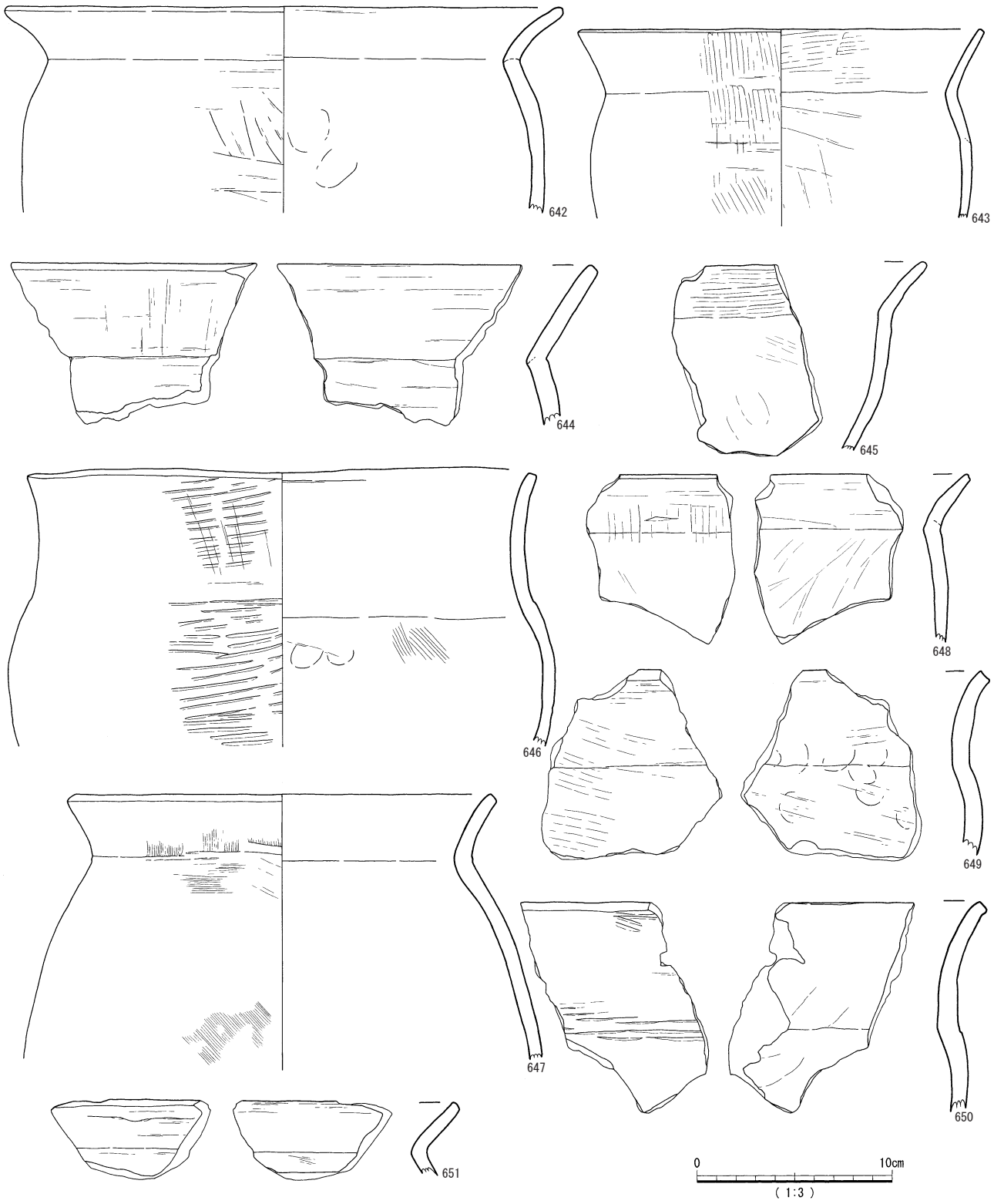
圧で成形されている。胴部下半は器壁もやや厚手であり，重心は安定している。

606は小型の高坏形土器である。胴部の稜が明瞭で，口縁部が広く外反する器形を呈する。口縁端部がわずかに欠損している。外面は横位のミガキ調整で，赤色顔料が塗布されている。

円盤形土製品（607）

古墳時代の土器を転用しており，周囲を擦って円形に成形している。

鉄製品（608）



第103図　包含層出土の古墳時代の土師器（１）

錆化が進んでいるため全形がはっきりしないが，茎の端は欠損している。幅1.5㎝の扁平なヤスリ状の形をしており，茎のついたものである。

⑥土器溜８（第101図・第102図）

Ｄ－35区のⅣ層で検出されたが，南側は用地外へ延びている。長軸390㎝，残存部分の短軸185㎝の範囲に，甕，壷，高坏などの土器が集中して出土した。

完形品はないが，比較的器形が復元できる資料が多かった。

甕形土器（609～620）

609は口縁部が短く立ち上がり，肩部がわずかに膨らむ器形である。口縁端は横位のナデ調整により，平坦面をなす。また，口縁部外面は工具によるカキアゲ状のナデ調整である。胴部は浅い凹凸が器面に連続しており，肩部付近にタタキ痕が残存する。竪穴建物跡10号出土の261に形態は近い。610は口縁部が短く，頸部で屈曲し外反する器形である。口縁端部はナデ調整により，中央が溝状に凹んでいる。外面は頸部の屈曲部より下位から，下部はやや粗いハケナデである。頸部内面の稜は，明瞭である。611は外面は摩滅しているが，口縁部内面は横位のハケナデ，胴部は幅広条痕状の斜位のハケナデ調整である。

612は口縁部を引き延ばすように成形しており，頸部から大きく外反する。胴部内面は，ケズリ調整後ナデ調整で，色調は明るく器壁も比較的薄い。613は直線的に外傾し，口唇部内面はナデ調整により帯状に凹む。内面の稜は明瞭で，器壁が厚い。614は器壁が薄く，口唇端部が内側に張り出す。615は薄手の作りをし，頸部で屈曲して外反するもので，端部は丸みを帯びる。内外面とも斜位または横位のハケナデ調整が部分的に残っている。摩滅により，胎土に含まれる長石がまばらに器面に露出している。

617は口唇部の作りが丁寧で，ナデ調整により外面側に張り出しを有する。616は頸部の屈曲部からあまり膨らみを持たない。いずれも摩滅しており器面調整は観察できない。

618～620は脚台であり，618は器壁が薄く軟質である。619は，胴部との接合面で剥落している。内外面ともハケナデ調整が部分的に残存するが，摩滅している。また，胎土には白色及び赤褐色の砂粒を多量に含む。620は外面に縦位の工具ナデが施され，底部の先端付近は横位のナデ調整が加えられている。底部は歪んでおり，部分的に先端が反っている。

壷形土器（621～629）

621は口縁部を強く折り曲げて外反する短頸壷で，口縁端部は丸く収められている。頸部内面は接合部分を中心に，ユビナデ調整が連続して加えられ，器面に凹凸がある。砂粒が目立つやや粗い胎土で，１～３㎜大の長石を多く含む。本遺跡ではあまり例がなく，Ａ地点出土の140にも類似するが屈曲がより強い。水俣市北園上野古墳群（熊本県教委2020）で，１例類例がある。622は，口縁部が外傾する広口壷である。口唇部は外傾し，断面三角形状を呈する。胎土は軟質で摩滅しており，胴部内面に部分的にハケナデが残る。

623～626は二重口縁壷で，623は屈曲して内傾する。「く」字状に短く屈曲し，口唇端部も明瞭な平坦面が作出されている。また，頸部内面は，ハケナデ調整の工具痕が縦筋状に残る。胎土は２～３㎜大の長石粒を多量に含み，やや粗い。624は器壁が薄く，口縁部の屈曲部付近で欠損している。頸部にはカキアゲ状の縦位のハケナデ調整が施され，頸部内面及び口縁部の屈曲部付近は横位のユビナデ及びナデ調整が加えられ，屈曲が成形されている。625は断面を三角形状に肥厚する壷で，胎土は軟質で赤褐色礫を多く含む。

626は623に近い，屈曲が明瞭で口縁部が短いものである。ただし，623に比べて，胎土は軟質で精製されている。627は沈線で突帯を模したものと考えられる。376に類似する。628は，屈曲部に細く鋭い刻みを連続して施している。629は分厚い作りの胴部で，３条の三角突帯を雑に貼り付けてある。にぶい赤褐色を呈している。

高坏形土器（630～636）

630は，器形が比較的復元できた資料である。浅く皿形の坏部で，脚部は筒状に広がり屈曲して開く。坏部下半は粗いケズリ調整後ナデ調整であり，脚部との接合部付近のみカキアゲ状のハケナデ調整である。内底面付近は，ミガキ様の丁寧なナデ調整である。非対称の穿孔が３か所残存しており，本来は４か所であったと考えられる。631～633は坏部の器高が低く，口唇部が外反ぎみに開くものである。口唇部はいずれも平坦面をなし，633は外面にやや張り出す。また，胴部は粗いケズリ調整後，ナデ調整が加えられている。630～633はいずれも，内面に帯状のスス痕がみられ，蓋として転用されている。

634～636は，脚部である。634は筒状に整形した際の縦シワが明瞭で，坏部側から粘土を充填して成形している。635はスカート状に開く器形である。３か所穿孔が残存するが，本来は４か所であったと考えられる。外面はミガキ様の縦位のナデ調整が連続して施され，内面は上半はケズリ，屈曲部以下はハケナデ調整である。器壁は厚いが，丁寧なつくりである。636は上半が中実となるもので，端部に穿孔が部分残存している。外面は縦位のナデ調整で，面状をなしている。

小型丸底壷（637・638）

637・638は，小型丸底壷の底部と考えられる。平坦な底部に，不整形な粘土が貼り付けられている。638は外面にタタキ痕状の筋があり，その上から粘土が貼り付けら

れている。

蓋形土器（639）

本遺跡では高坏の転用例が多い中で，本例のみは専用の蓋形土器である。断面形は頂部が張り出すドーム状で，屈曲して底部は広く開く。端部は横位のナデ調整により平坦面が作出され，中央が筋状に凹む。内面上部は器面がただれたように荒れており，被熱によるものと考えられる。また，底部付近には幅２㎝程，帯状にスス痕がみられる。

鉄製品（641）

錆化が進み全形がはっきりしないが，扁平な先端がヤス状にとがったものである。

３　包含層出土遺物（第103図～第108図）

表土から砂質シルト層までの間の地層に遺構内以外に含まれる古墳時代の遺物が多数出土している。ここではその中の主要な遺物を紹介する。

甕形土器（642～667）

642～645は口縁部から胴部である。在地系の特徴を有するが，口縁部の長さや屈曲度に差があり，多少時期差があると考えられる。

642は頸部から広く口縁部が外反するもので，器面の厚さが不均一で凹凸がある。内面には楕円形の凹凸が連続するため，タタキ調整の可能性がある。外面は粗いユビナデで，その後口縁～頸部に横位のナデ調整が加えられている。胎土には赤褐色粒を多く含む。

643は口縁部が直線的に外傾し，口唇部は平坦面が作出されている。口縁～胴部外面は縦位のハケナデ調整で，下半は部分的に斜位のハケナデ調整である。内面は横位のハケナデ調整を主体とし，頸部以下はケズリのちナデ調整である。全体的に器壁が薄く，丁寧な作りである。胎土には赤褐色及び灰色の小礫を多く含む。

644～648は口唇部に平坦面を有し，外傾する口縁部片である。

644は頸部の屈曲が明瞭な口縁部で，全体的に丁寧なナデ調整で仕上げられている。口唇部は断面方形で，端部は平坦面が作出されている。胎土には，金雲母を多く含む。645はやや小型のものと考えられ，頸部から緩やかに外傾する。外面の胴下半はケズリ調整後，ナデ調整である。口縁部内面は，幅広の横位のハケナデ調整である。646は屈曲の稜が鈍く，胴部が緩やかに膨らむ器形で，外面のタタキ調整が明瞭である。タタキ調整は水平方向かやや右上がりで，口唇部付近まで施されている。口縁部は縦位のナデ調整が加えられ，頸部のタタキ調整は部分的に途切れる。胴部はタタキ調整のため部分的に平坦面状をなし，口縁端部は平坦面が作出されているがゆがみがある。器壁は薄手で，焼成も良好である。

647は口縁部が短く外傾し，頸部から胴部が緩やかに膨らむ器形である。摩滅しているが頸部には横位，胴部には斜位の細かいハケナデ調整が部分的に残存する。また，頸部には工具の先端が押され，カキアゲ口縁状の縦位のハケナデ調整が施されている。648は口縁部である。口縁部はいわゆるカキアゲ口縁で，胴部はユビナデ調整である。内面の頸部付近には，工具痕が筋状にみられる。外面には粘土の接合面がみられ，内外面とも屈曲の稜は緩い。

649・650は頸部から緩やかに立ち上がり，口唇部付近で折れ曲がって外反する。649の口唇端部は，ナデ調整により明瞭な平坦面が作出されているが，頸部の屈曲や胴部の張り出しは緩い。外面は，左上がりのタタキ調整の後丁寧なナデ調整で，頸部は工具の押圧で段状をなす。650は頸部屈曲部付近に，ヘラ状工具による横位の筋が複数施され，段状をなしている。ナデ調整を基本とするが，部分的にタタキ痕が残存する。口唇部は端部で折れ曲がり，外面側にやや張り出す。胎土に，白色粒を多量に含む。

651は頸部から「く」字状に強く外傾する口縁部で，端部は丸みをおびている。内面は横方向のハケナデで調整している。

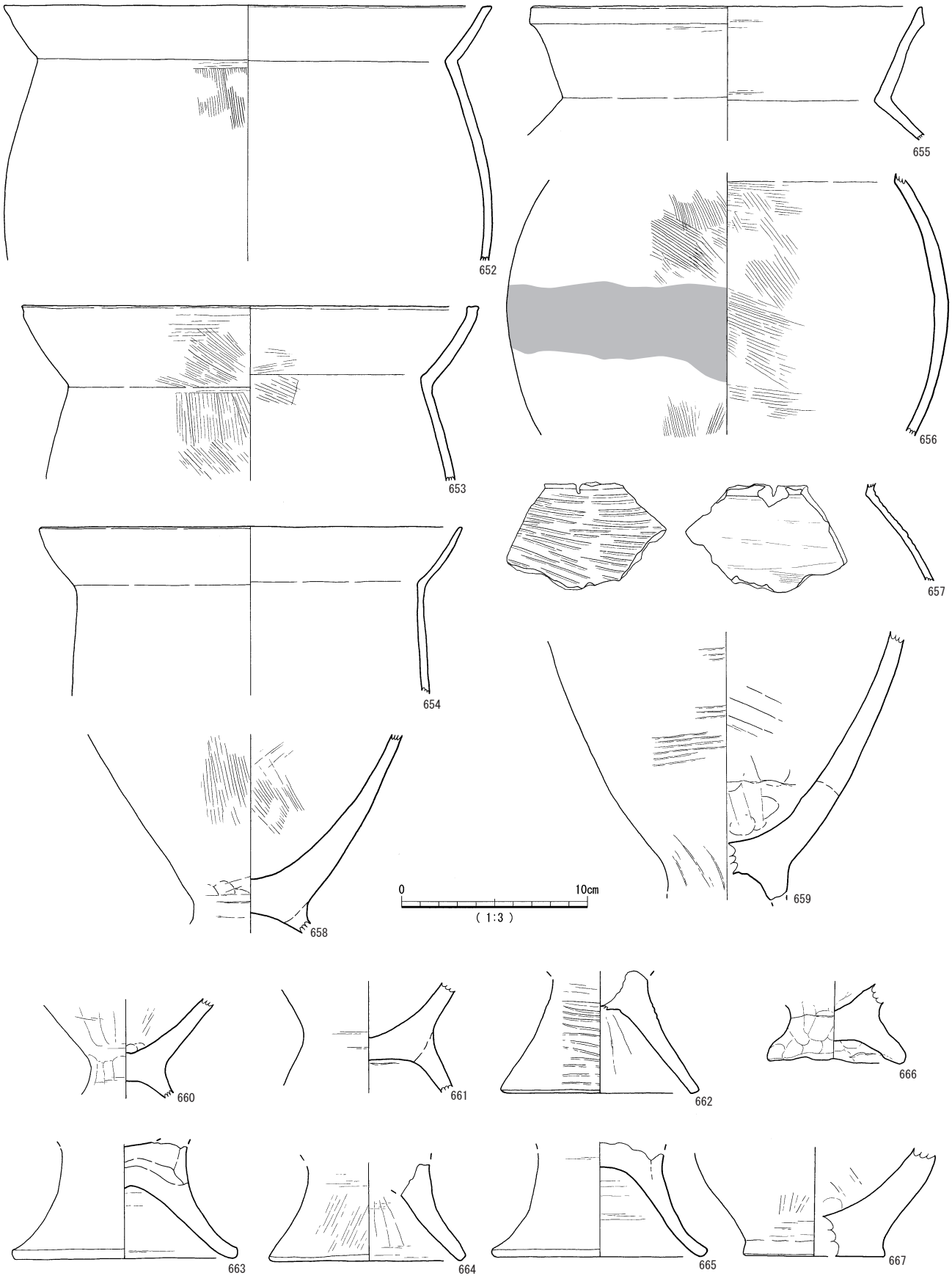
652・653は内弯度が緩いが，口唇部で屈曲して立ち上がる。口唇部は横位のナデ調整で，外面側にやや張り出し，横位・斜位のハケナデ調整で仕上げられている。胴部外面は頸部付近が縦位，胴部は斜位の細かいハケナデ調整が施される。屈曲部は横位のナデ調整で作出され，頸部内面の稜線は明瞭である。654は，口縁部が内弯し，長胴形を呈すると考えられる。

655・656は，薄手である。器形は屈曲部から胴部が球胴状に膨らむと想定される。655は口縁部が頸部から直線的に立ち上がって外傾し，口縁部が断面三角形状に肥厚する。656は胴部で，頸部の屈曲部がわずかに残存する。内外面とも横位または斜位のハケナデ調整が複数切り合い，外面の最大径部分は被熱により帯状に黒変し，器面が荒れている。器面には緩やかな平坦面が連続しており，タタキ成形であったと考えられる。

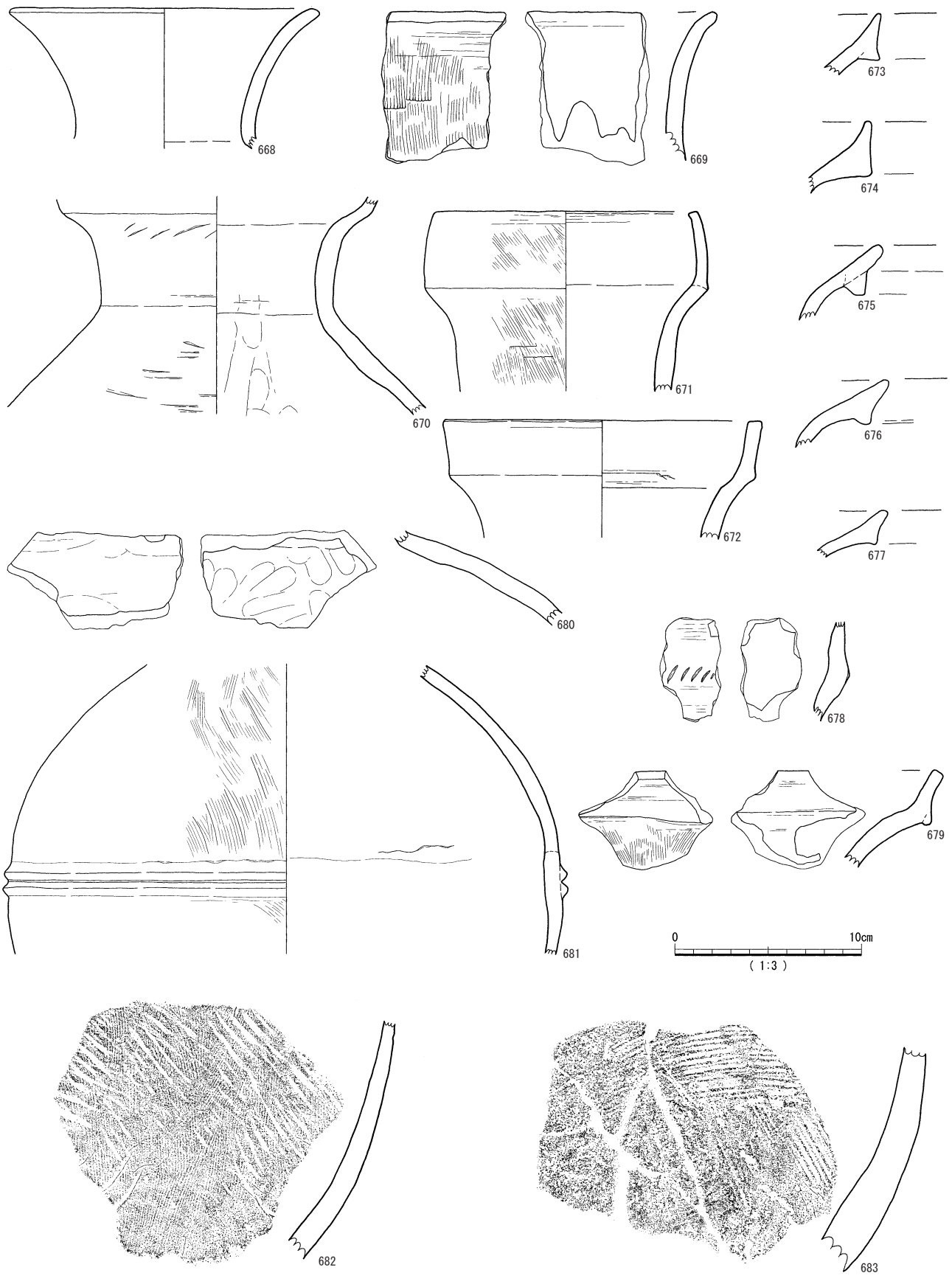
657は，外面に幅広い左上がりのタタキが明瞭で，内面には細かいハケナデ調整が部分的にみられる。

658～659は脚台中位で欠損するもので，659は，外面に水平方向の細かいタタキ痕が残り，器面が平坦面状をなしている。また，胴部と脚部の境界部分は縦位の粗いユビナデ調整が連続して加えられている。内底面の調整は粗く，ユビナデ調整と指頭押圧により器面に凹凸がみられる。胴部と脚部の境界の調整は，658と類似する。

660～665は脚台である。660の屈曲部は連続した縦位のユビナデ調整で成形され，細かな面が生じている。661は内底面が台形状を呈する。661・664は，脚台を外側から胴部に貼り付けるように作られている。

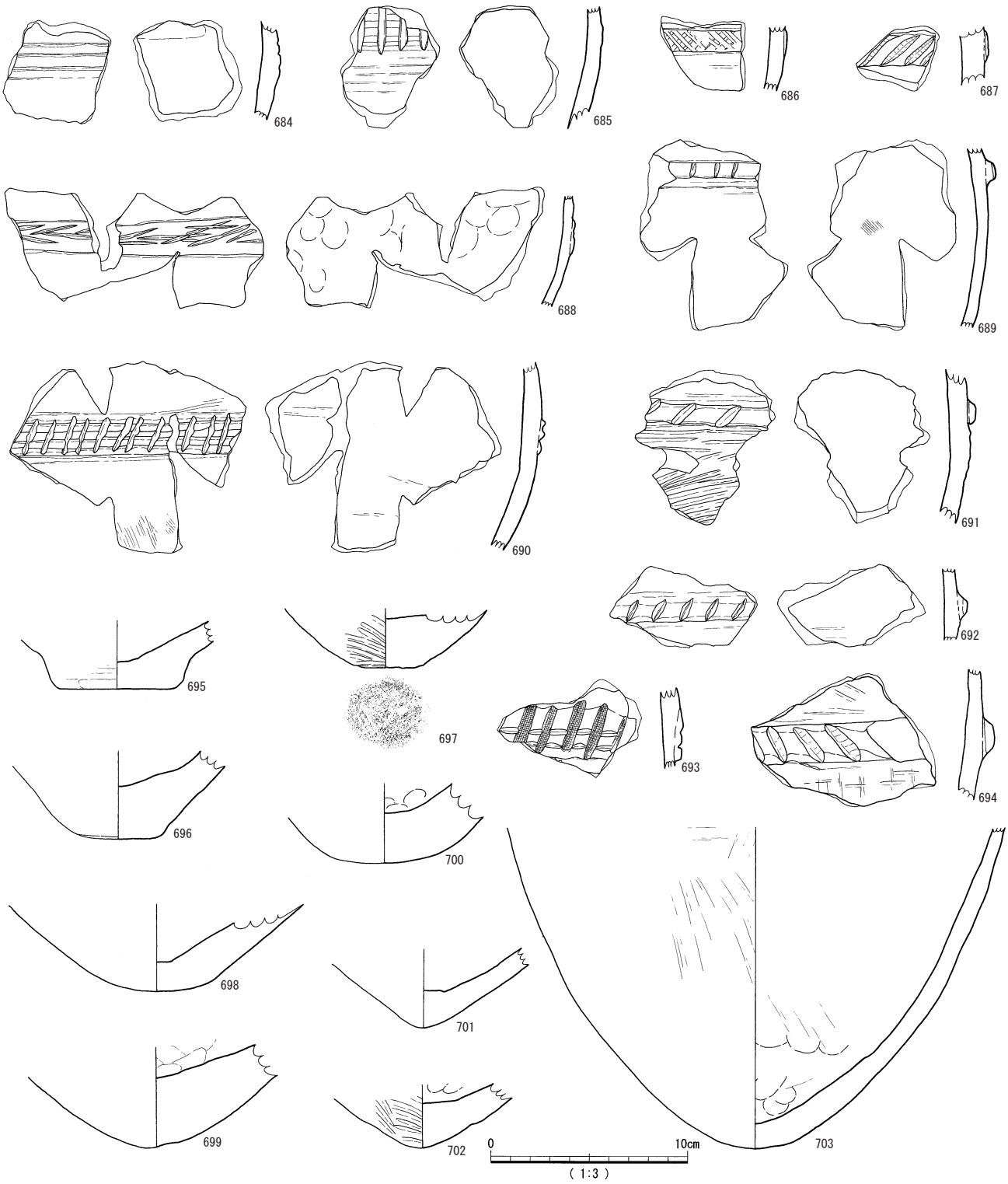


第104図　包含層出土の古墳時代の土師器（２）



第105図　包含層出土の古墳時代の土師器（３）

662は薄手で器高があるタイプで，端部はナデ調整で明瞭な平坦面が作出されている。外面は水平及びやや左上がりのタタキ調整で，内面は工具痕が残る。663は，緩やかに外反するタイプである。内面はミガキ様の丁寧な凹位のナデ調整で，内底面がわずかに突出する。胴部との接合面が特徴的であり，底部側と胴部側の接合面が離れており，５㎜弱の隙間が空いている。元々接合面同士に隙間があったのか，隙間部分の破片が消失したために隙間となっているかは不明である。664はわずかにカーブして開く器形で，端部はナデ調整により平坦面を有する部分と，丸みを帯びる部分がある。内面には工具痕が数条位のハケナデ調整である。665の器壁は薄く，底部に



第106図　包含層出土の古墳時代の土師器（４）

向かって屈曲して広がり，端部はわずかに平坦面を有する。胴部との接合面で剥落しており，接合線も明瞭である。内面は強めの横位のナデ調整で，ドーム状に仕上げられている。

666は小型の底部で，内外面とも指頭押圧が明瞭な手捏ね状の成形である。器形はゆがみ，脚台というよりも上げ底状の作り出しである。内底面に籾圧痕がある。

667は平底で，底部からの立ち上がりに横位のナデ調整が加わるため，ややくびれる。胎土には，灰白色の３～５㎜大の円礫をまばらに含む。

壷形土器（668～703）

668・669は口縁部が外反し開く広口壷である。668は口縁部が外反して広く開き，頸部の屈曲部がわずかに残存する。口唇部はわずかに平坦面を有するが，内外面とも摩滅しており表面が剥落している。669は口縁部に強めの横位のナデ調整が加えられ，外反する。外面は縦位のハケナデ調整である。広口壷の中では頸部が長く，緩やかに開くタイプと想定される。

670～672・678・679は二重口縁壷である。670は口縁部の屈曲がわずかに残存し，口縁部の屈曲下には斜位のヘラ痕が巡る。頸部の屈曲は緩く，胴部外面には細筋状のタタキ痕が部分的に残存する。内面は，胴部を中心に縦位または斜位のユビナデ調整である。色調は褐色で，１～２㎜大の長石粒を多く含む。671・672は屈曲部からわずかに外傾して立ち上がり，口唇部はナデ調整で平坦面をもち，屈曲部も明瞭に作出されている。色調が赤く，胎土には５㎜大の長石を疎らに含む。

673～677は口縁部を断面三角形状に肥厚し，二叉状口縁を呈するものである。673・674は胎土が軟質で，675は口縁を突帯状に貼り付け，二叉状口縁に近い形態である。白色・灰色の礫を多く含むやや砂質の胎土である。

678は半月形の刻みを施す。679は頸部で大きく外反するもので，屈曲部からさらに開く。口縁部は内外面とも強めの横位のナデ調整で，口唇部には平坦面が作出されている。また，屈曲部の調整は粗く，稜線がゆがんでいる。頸部付近は，縦位のハケナデ調整である。胎土に，白色及び褐色礫を多量に含む。

680は壷形土器の肩部の破片で，色調・胎土が大型二重口縁壷の例に近い。外面はタタキ整形によると思われる平坦面があり，内面は連続したユビナデ調整により，器面に凹凸がみられる。

681は丸く膨らむ胴部の最大径に２条突帯を巡らせるもので，突帯下は被熱により赤変し器壁も荒れている。外面は突帯からのカキアゲ状のハケナデ後，縦位・斜位のハケ目が連続して加えられている。内面の接合部付近は，ユビナデ調整により器面がやや凹む。

682・683は胴下部である。厚手で，外面には左上がりのタタキ調整，及び縦位のハケナデ調整である。682は幅広の粗いタタキであるが，683は面をなす粗い縦位のケズリの上に密なタタキ調整が残っている。また，内面は粗いユビナデと条痕状の工具ナデ調整である。これらは，竪穴建物跡３号出土の98・99などに類似すると考えられる。

684～694は，突帯である。684・685は器面を肥厚させ，その上に横位の沈線を３条巡らせ，685はさらに縦位の沈線で刻みを施す。686～688は幅広く薄い突帯を貼り付け，686はヘラ状の工具で格子文，687は斜位の刻み，688は崩れた「く」字状の沈線を施している。また，688は突帯の内面付近に連続した指頭押圧がみられる。689は断面台形状の突帯を貼り付け，浅い刻みを施す。器面は薄く摩滅しており，内面にわずかに斜位のハケ目が残っている。690は幅広の粘土帯を貼り付け，横位に２条の凹線を巡らせて３条突帯状をなしている。その後，ヘラ状の工具で斜位の刻みを施している。内外面ともナデ調整を主体とするが，胴部外面には部分的にハケ目がみられる。691は外面に条痕状の水平及び右上がりのタタキが連続して加えられ，その上に粘土紐を貼り付け，斜位の深い刻みを施している。689～691は，甕形土器の突帯の可能性もある。692は台形状の突帯で，左下がりの鋭い刻みを付けている。内外ともナデ仕上げである。693は低くて幅広の突帯に３条の凹線を引き，その上に左下がりの布目のある刻みが付されている。

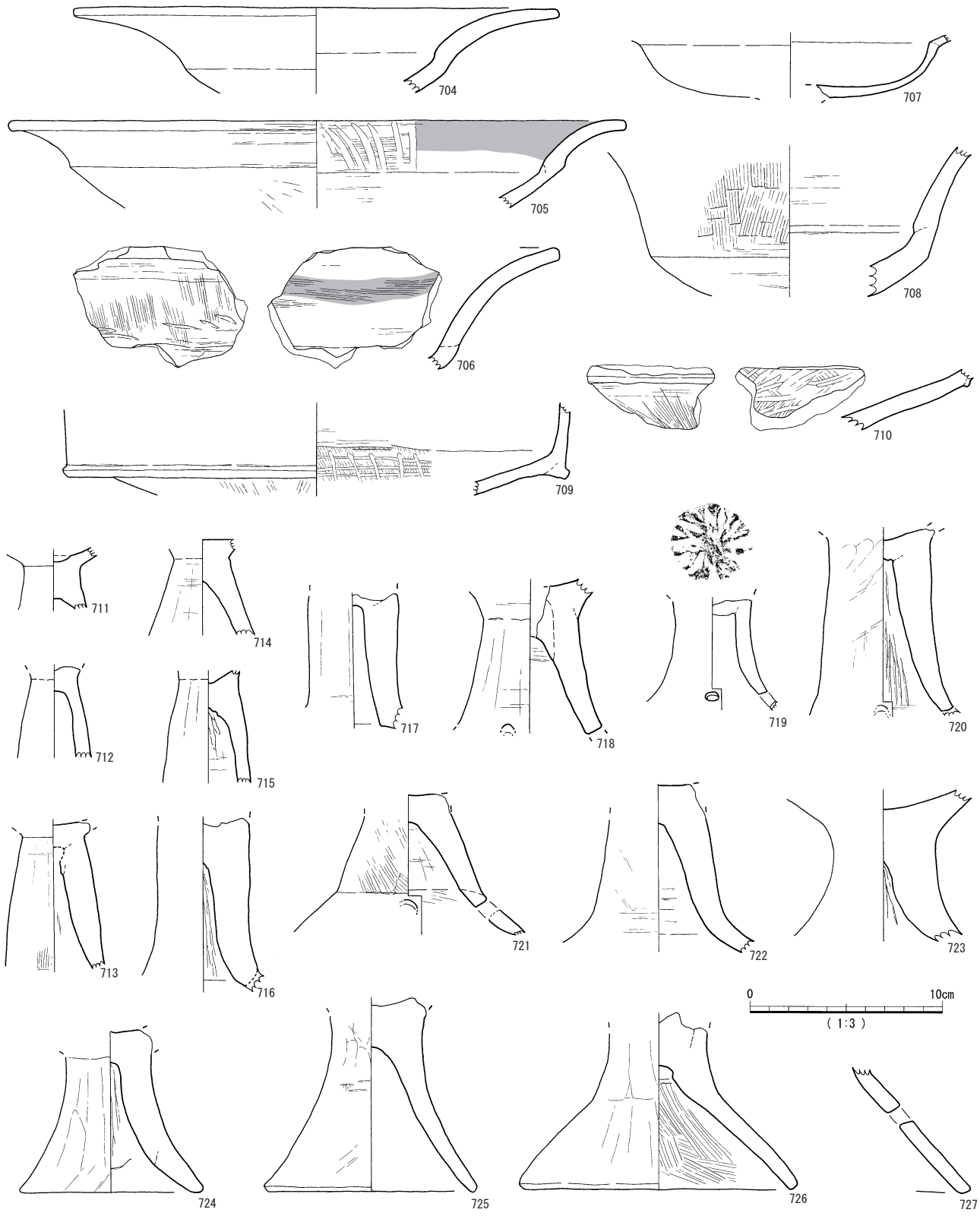
694は，断面かまぼこ形の粘土紐を貼り付け，ヘラ状工具で大ぶりの刻みを施す。外面は左上がりないしは水平のタタキ痕が残り，その上からケズリ状のナデ調整が加えられている。

695～703は，底部である。695～697は平底，698・700はレンズ状の丸底，701～703は丸底または尖底である。695は立ち上がりがくびれて広く開く器形で，外面はナデ調整により端部は丸く仕上げられている。696はゆがみがあり，左右の立ち上がりが異なる。697は外面に左上がりのタタキ調整が施され，底面にもわずかに筋状の痕跡が残っている。699はゆがみが大きく，厚さが不均一かつ厚手で，底部の厚みは3.6㎝を測る。内底面にはユビナデ調整が施されている。700は色調が明るく，器壁もかなり厚手である。703は中型の壷と考えられ，胴部が緩やかに膨らむ器形で，外面は連続した斜位のナデ調整である。また，内底面を中心に指頭押圧が施され，器面に凹凸がみられる。702は外面に複数方向のタタキ痕がみられる。701及び702は赤みが強い色調で，断面でみると器面側と断面内部は色調が異なり，赤色に発色する粘土を表面にかぶせている可能性がある。

高坏形土器（704～727）

704～710は坏部である。

704～706は，口縁部が広く開くタイプの高坏である。705は外面の屈曲部下はケズリ調整後，ナデ調整が加えら



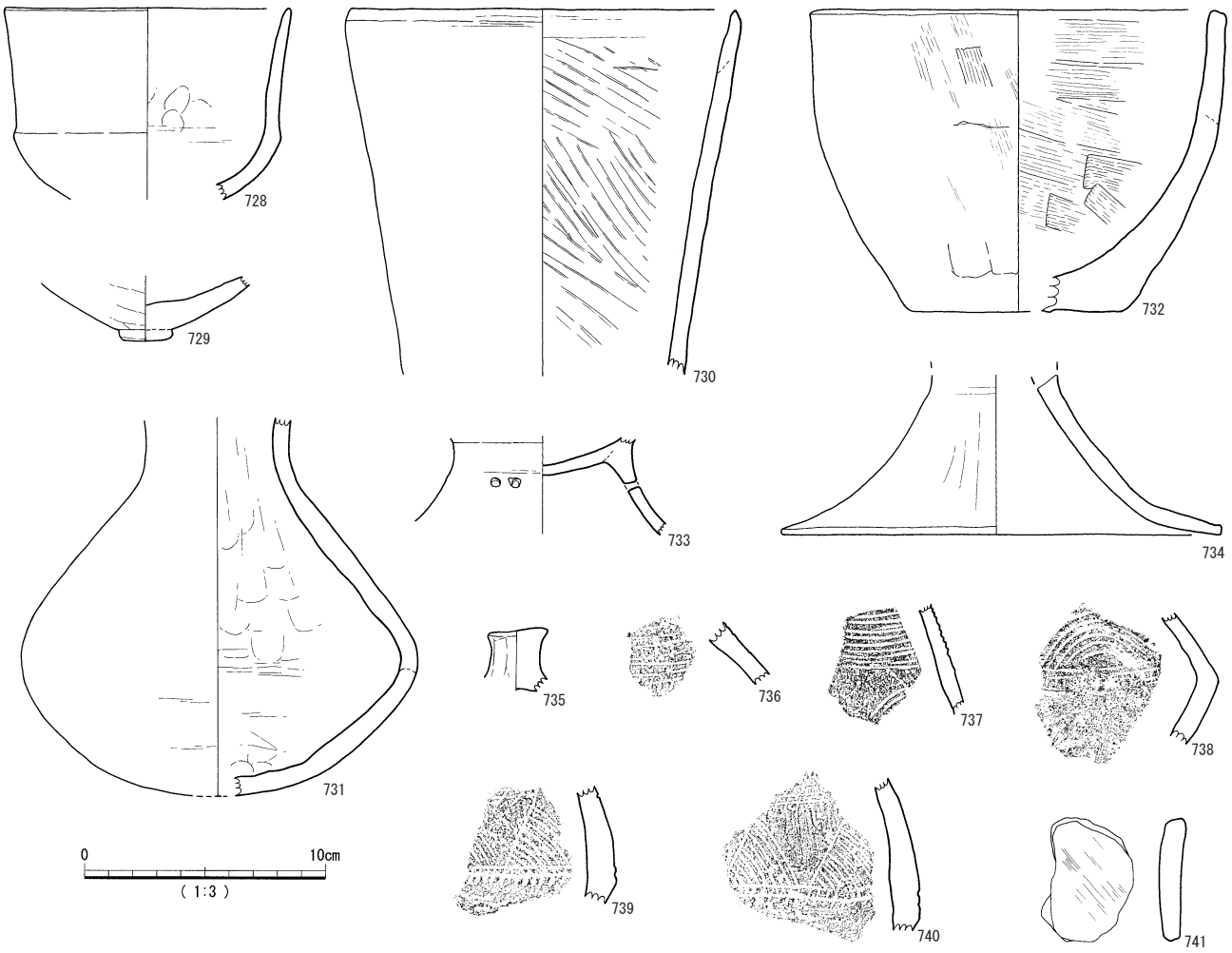
第107図　包含層出土の古墳時代の土師器（５）

れている。また，口唇部は端部付近で広く屈曲し，口唇端部は平坦面を有する。屈曲部内面は横位のハケナデ調整後，斜位のミガキ調整が暗文状に施されている。内面には口縁部付近に帯状にスス痕が巡っており，蓋として転用されたと考えられる。706は屈曲部上に左上がりのタタキ痕が残り，その上位から縦位のハケナデ調整が加えられている。口唇部付近は内外面ともナデ調整で，端部は平坦面が作出されている。内面は斜位のハケナデ調整が部分的に残存し，下半はナデ調整である。また，内面には帯状にスス痕がみられ，蓋として転用していたことが分かる。

704・707は内外面とも摩滅している。704は器高に対し口径が大きく広がり，器壁は厚い。口唇端部はナデ調整により，平坦面が作出されている。

707は埦形を呈し，器壁が薄い。弯曲度合いが強く，あまり類のない形態である。708は厚手で，緩く屈曲して口縁部が外反する器形である。比較的稜が明瞭で，内面側は接合面で段をなしている。外面は屈曲部下は横位のナデ調整で，上位は連続した縦位及び斜位のハケナデ調整が加えられている。709は屈曲部が突帯状に張り出し，屈曲して口縁部が直口する。外面の屈曲部上半は摩滅しており詳細は不明であるが，下半は粗いハケナデ調整後，屈曲部下に横位の強めのミガキ調整が加えられている。内面は，屈曲部を起点とした斜位のハケナデ調整後，横位のミガキ調整，縦のミガキ調整を加え，ミガキ調整が暗文状をなしている。横位のミガキ調整は間隔が空き，幅も不均一であることから，上面観では渦巻き状をなしていた可能性もある。710も709と同様に屈曲部が張り出すタイプで，坏部の器高が低く，口縁部が広く開くタイプと考えられる。外面はカキアゲ状の斜位のハケナデ調整で，屈曲部付近は横位のナデ調整である。内面は，斜位のハケナデ後にミガキ調整が加えられおり，ミガキの方向は斜位を基本とするがランダムで709のような暗文状の規則性はみられない。

711～727は，脚部である。711～713は小型で711・714は脚部が開くもの，712・713はエンタシス状に近く中膨らみになるものである。711は軟質で精製された胎土である。712は外面は摩滅しているが焼成は良好で，内底面はドーム状に丸みを帯びる。713は筒状に成形した脚部に坏を接合して作られており，内底面に空間が生じている。



第108図　包含層出土の古墳時代の土師器（６）と土製品

また，714は外面に部分的に赤色顔料が残存しており，本来は全面に塗布されていた可能性がある。715はやや作りが粗く，特に内底面に放射状に工具痕が残り，器面に凹凸がみられる。720～722は，中・大型の高坏の脚部と考えられる。716・721は脚部に穿孔を有するもので，721は器高に対し，裾部が屈曲から広く開く。716は部分的に穿孔が２か所残存しており，本来は３～４か所と想定される。717は分厚い柱状部から，外へ大きく屈曲する裾部へ移っている。坏部との間がはがれているが，中央にソケット状の粘土塊をつめ込んでいる。718・719は裾部へゆるやかに広がるが，屈曲部ははっきりせず，その部分に穿孔がある。718は２か所残っている。719の坏部との境には放射状のキザミがある。719の外面は摩滅でまだらになっているが，赤色顔料が塗布されている。両者とも中央につめ込み痕がみられる。

722は内面端部に屈曲部がわずかに残存し，胴部は直線的である。723は大型で器壁が厚く，緩やかに屈曲しながら坏部及び裾部に開く器形である。胎土には２～３㎜大の白色礫・長石を多く含む。内面は，脚部を筒形に成形する際の縦シワが明瞭にみられる。727は穿孔を有する脚部と考えられる。内外面とも摩滅しており，穿孔も１か所しか残存しないため詳細は不明であるが，器台の可能性もある。

坩形土器（728・729）

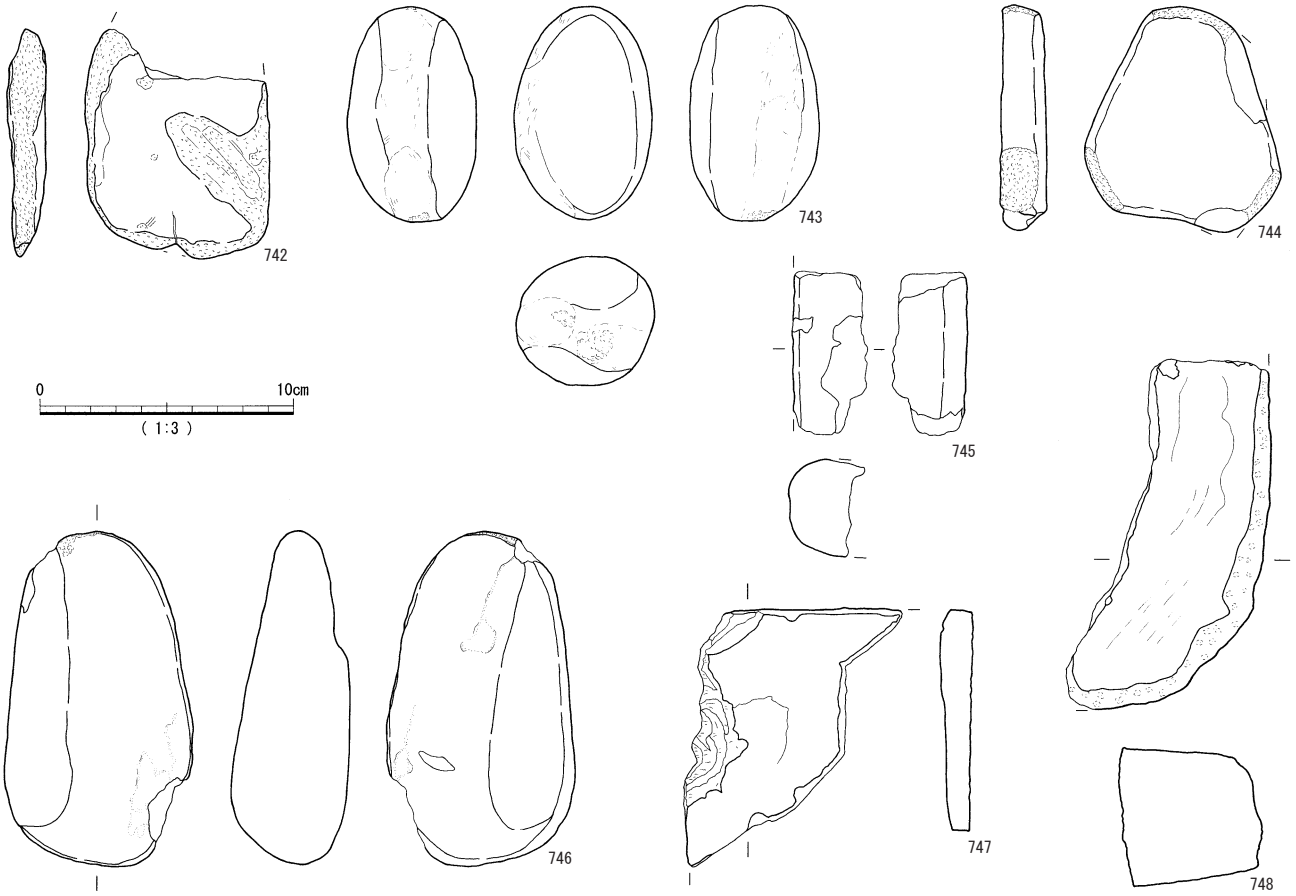
728は器高の低い丸底壷で，外面に緩やかな稜を有する。内面は稜が不明瞭で，弱い指頭押圧が加えられ，弯曲する器形が作出されている。器壁は薄手であるが，胎土に２㎜大の白色礫を多く含む。729は，小型丸底壷の底部で，ボタン状の突起を有する。器壁は厚手である。

小型壷形土器（730・731）

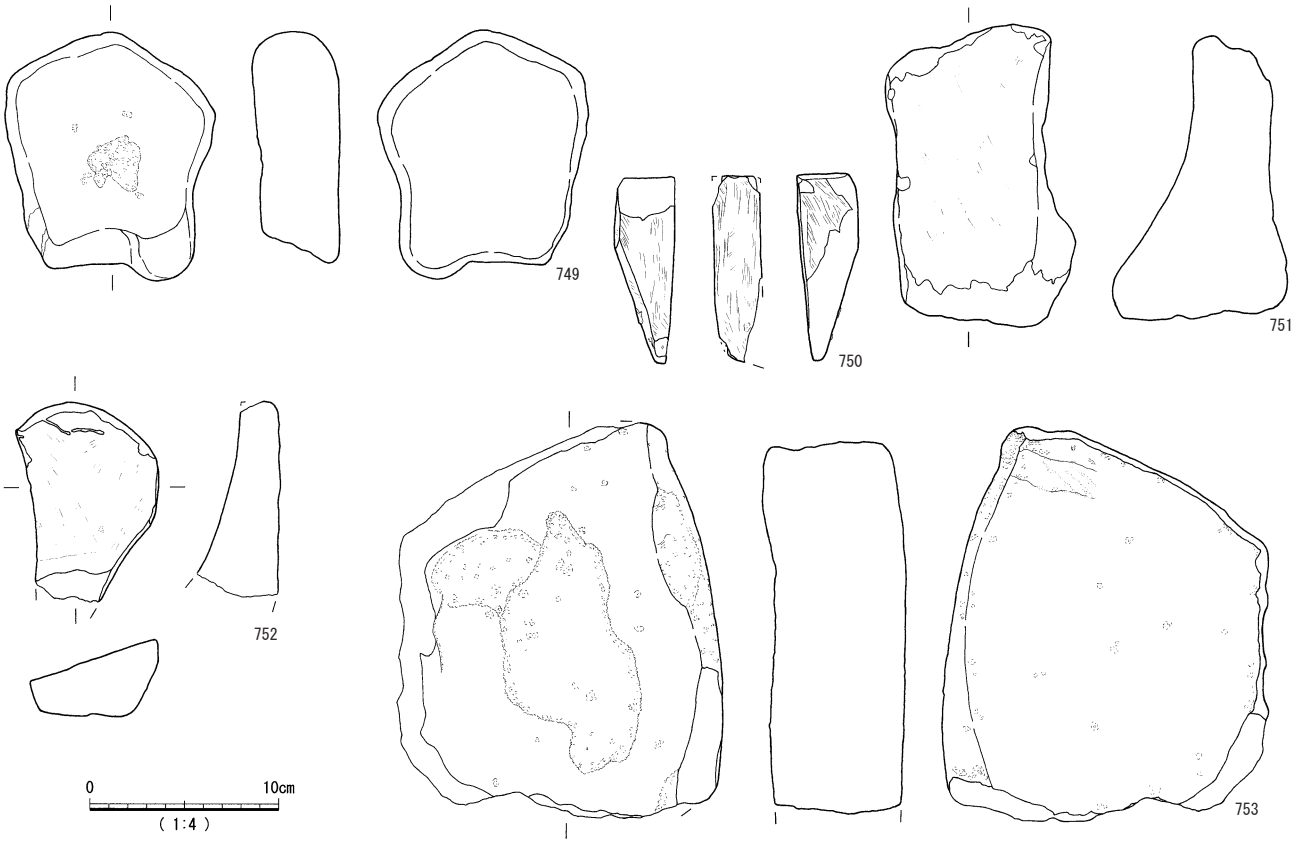
730は長頸の丸底壷と考えられ，直線的に外傾する。口唇部はナデ調整により舌状を呈し，内面には幅広の条痕状の工具ナデがみられる。731は，長頸の丸底壷である。頸部以上は欠損しているが，細長く立ち上がり，胴部下半が緩いそろばん玉状に膨らむ。底部はレンズ状の丸底である。外面の調整は摩滅により不明であるが，内面は連続したユビナデや指頭押圧によって，器面に細かい凹凸をもつ。また，内底面は指頭押圧で成形されている。胎土は精製されて軟質で，色調は明るい。

鉢形土器（732～734）

732の口唇部はナデ調整により平坦面をなし，わずかに外傾する。器面にはハケナデ調整が残るが，外面は器面に凹凸があるため，粗いユビナデ調整で成形されていると考えられる。内面は，丁寧なハケナデ調整である。胎土に３～５㎜大の長石を多量に含み器面，断面，外面下半にも露出する。外面の上半と下半で色調が異なり，上



第109図　包含層出土の石製品（１）



第110図　包含層出土の石製品（２）

半はスス，下半は被熱による赤変と考えられる。

733・734は台付鉢形土器の脚台部である。733は薄手の鉢部にスマートな脚台が付されている。接着部近くに２孔１対の小さな穿孔があり，３か所に配置されているようである。紐ずれらしき痕跡もみられる。外面は横方向のナデ整形，内面もナデ整形で仕上げている。734は台端の直径が18.3㎝と大形の脚台で，端部は矩形を呈している。内外ともナデ整形だが，外面の裾部はミガキ様の丁寧な縦ナデで仕上げている。

蓋形土器（735）

735はつまみである。器壁の薄さや大きさから，小型の蓋と推定される。上面観は楕円形を呈し，手捏ね状でゆがみがある。胎土に２㎜大の長石を多く含む。

免田式土器（736～740）

いずれも胴部片である。736と737は薄い作りで，737は浅い横位沈線が，その下に上向きの重弧文が残っている。長頸壺の頸部付近と考えられる。738は逆「く」字状の屈曲部上部に横位の沈線と重弧刻みが施される。739・740は横位沈線文の上に三角形状歯文の枠内を弧文で充填している。

円盤形土製品（741）

半欠であるが，土器を打ち欠いて円盤形にこしらえている。

石製品（第109図・第110図）

包含層出土の石製品（742～753）

石製品のうち，744・746・748・751・753は竪穴建物跡10号・竪穴状遺構，土坑39号・土坑43号で出土しているため，それぞれの項で説明してある。

742は周辺が摩滅している粘板岩製磨製石斧の下半部で，上半が欠損している。両刃で，刃部に刃こぼれがある。最大幅7.3㎝，厚さ1.5㎝，残存質量131ｇである。Ｅ－28区の表土で出土している。

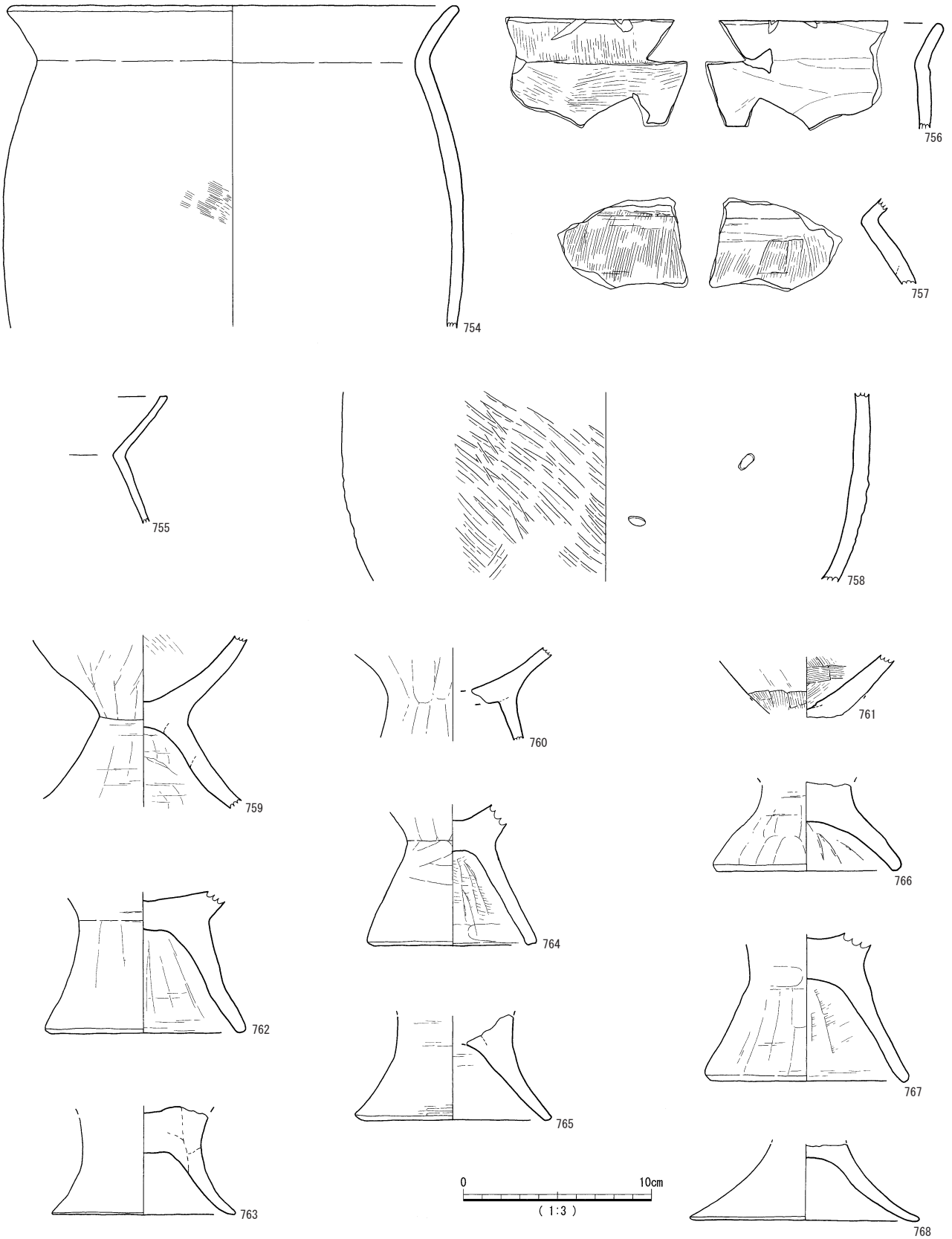
743は楕円形の砂岩河原石を利用した磨石である。筋状に使用した痕跡あり，短軸部分には敲き痕もみられる。最大長8.5㎝，最大幅5.5㎝，重さ238ｇである。Ｄ・Ｅ－31区で出土した。

744は土坑39号で出土している。

745は上下と片方の三方が欠損している厚さ3.7㎝の砂岩製台石で，上平坦面に打痕がある。残存長は6.5㎝，幅は3.0㎝で，重さ107ｇである。Ｄ－28区Ⅱｂ層で出土している。

746は竪穴状遺構で出土している。

747は裏面が剥脱した砂岩製砥石で，表面は細かく研がれた仕上げ砥石である。方形を呈しているが，大きく破損し，コーナー部分も打ち欠かれている。Ｅ－29区で出土している。



第111図　礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（１）

748は安山岩製の石皿破片で，厚さが７㎝ある。土坑43号で出土している。

749はＤ－26区のピットで出土した凹み石である。最大長12.3㎝，幅11.1㎝，厚さ4.4㎝の薄い砂岩円礫の中央が打痕によるくぼみがみられる。図化した上側面は磨石として使用している。重さ1001ｇである。

750は最大長9.9㎝，幅3.1㎝。厚さ2.5㎝の方柱状をした粘板岩を使用した仕上げ砥石である。表と両側面の三面を使用しており，石材のせいか表面がツルツルした良質の仕上げ痕である。Ｅ－29区で出土している。

751は土坑39号で出土している。

752は最大厚が4.9㎝もある厚い花崗岩（天草石）を使用した砥石である。最大長が10.3㎝，幅が7.0㎝であり，重さは340ｇである。表と両側面の三面を使い込んでおり，その稜は鋭くなり，強くくぼんでいる。Ｄ－34区で出土している。

753は竪穴建物跡10号で出土している。

礫敷遺構出土遺物

甕形土器（754～768）

754は頸部が緩く屈曲して外反し，緩やかに胴部が膨らむ。口唇部はわずかに平坦面を有する。全体的に摩滅しているが，外面に斜位のハケナデ調整が残存する。胎土に，５㎜大の角礫状の長石をまばらに含む。755は口縁部がわずかに内弯し，長胴形を呈すると想定される。全体的に器面が膜状に剥落している。口唇部は明瞭な平坦面で，わずかに外面側に張り出す。756は屈曲が緩く胴部もほぼ直線的になるもので，口唇部はゆがみがある。頸部から口縁部にかけてはカキアゲ口縁状を呈し，わずかに段がある。また，胴部外面は斜位または横位のハケナデ調整である。胎土は軟質で，マーブル状である。757は，甕形土器の頸部と考えられる。器面は厚手であるが，内外面とも細かい斜位または縦位のハケナデ調整で，屈曲部付近のみ横位のナデ調整である。

758は胴部である。外面には左上がりの幅広いタタキ調整で，複数切り合う。下半にはわずかにハケナデ調整がみられ，タタキ後に施されている。内面には，種実状の圧痕が２か所みられる。

759～768は胴部～脚部である。759・760は器壁が薄く，台付鉢にも近い形状である。759は，外面は縦位のユビナデ調整後横位のナデ調整で成形され，屈曲部は特に丁寧なナデ調整である。また，胴部はケズリに近い斜位のナデ調整が加えられている。脚部内面は調整が粗く，横位のナデ調整を主とするが，接合痕が明瞭で，部分的に指頭押圧による凹凸がみられる。760も同様に，外面は縦位のユビナデ調整である。761は小型で，脚部との接合面で剥落している。接合面には細かいハケナデ調整が施され，内面も同様のハケナデ調整である。また，底面の剥離面には木葉片の圧痕がみられる。

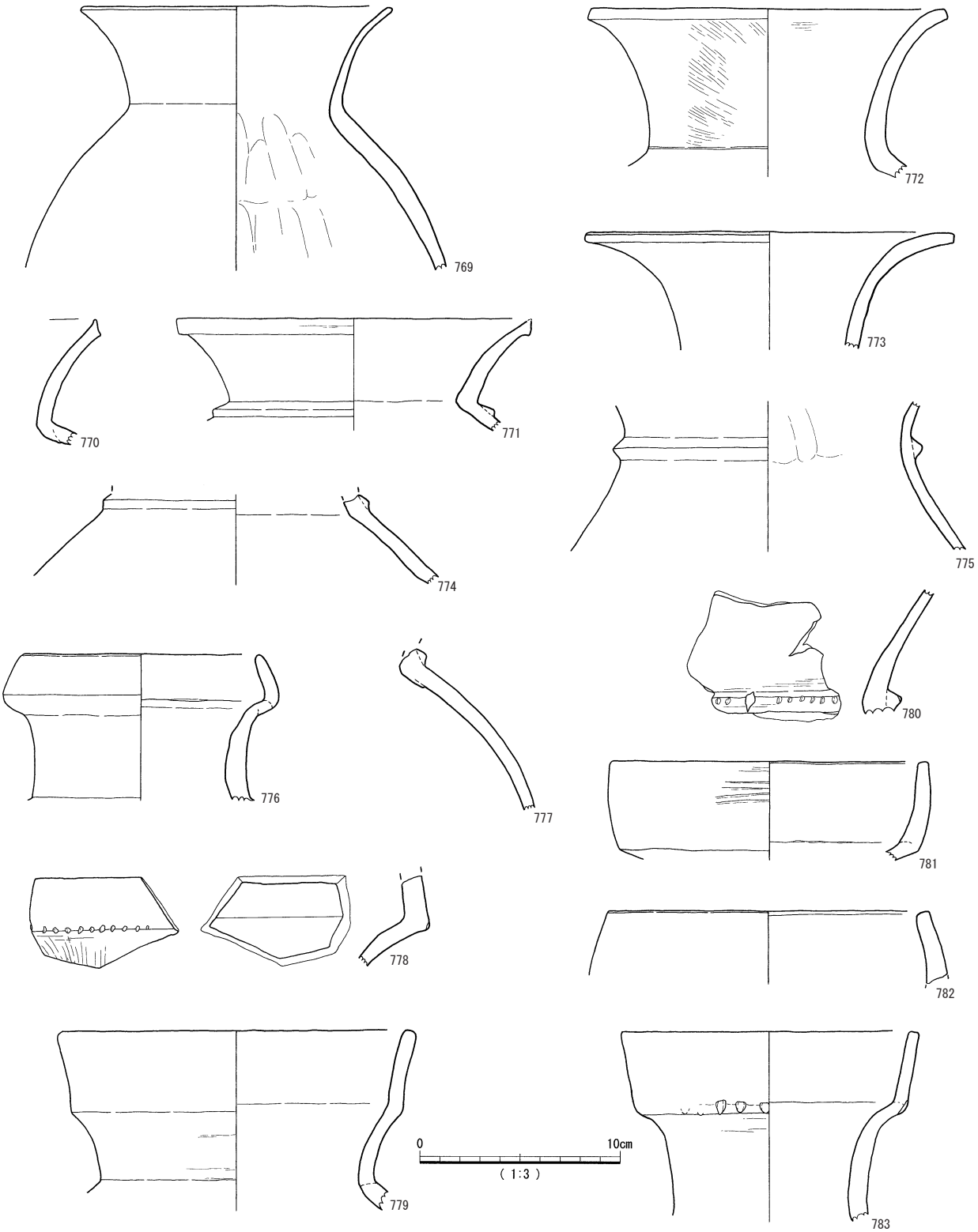
762・764・767は直線的に脚が開くもので，端部には平坦面が作出されている。764・767の内面にはハケナデ調整が明瞭で，工具を止めた際の筋が残る。また，764は丁寧な作りで，径が小さく，器壁も比較的薄い。766は器高が低く外膨らみになるタイプで，外面は連続した縦位のユビナデ調整で成形されている。胴部との接合部分で剥落しており，胴部への立ち上がり部分は横位のナデ調整である。内面には，工具ナデの縦筋が残る。762は，内面に放射状に伸びるハケ状の工具痕がみられる。器形はゆがんでおり，屈曲部から胴部への立ち上がりの角度が部位によって異なる。763・765は，薄手で外反するタイプである。763は接合面が複雑で，複数のパーツをつなぎ合わせるようにして成形している。765は摩滅しているが作りが丁寧で，外面端部には横位のミガキ調整がみられる。768は裾部に向かって広く開くタイプで，胴部との接合部分で剥落している。内底面はドーム状を呈する。端部はやや平坦面状になる部分と，細長く舌状になる部分がある。径から甕形土器に含めたが，台付鉢の台部の形態にも類似する。

壺形土器（769～805）

769・770は口縁部が外反するタイプで，772・773は口唇部がさらに反り，大きく張り出す器形を呈する。769は器壁が薄手で，胴径があまり大きくならず長胴になる中型の壺と考えられる。口唇部は薄く引き伸ばされ，端部にわずかに平坦面を有する。軟質で砂粒をほとんど含まない胎土のため内外面とも摩滅しているが，内面には連続した縦位のユビナデ調整を思われる凹凸がみられる。770は端部がわずかに二叉状を呈し，内面側に張り出す。771に類似するが，頸部に突帯を持たない。772・773はいずれも摩滅しており，772は外面に部分的に斜位のハケ目が残存する。また，773はナデ調整により口唇部に筋状の細い凹みがある。

771・774・775・777・780は頸部に三角形の突帯を付けるもので，780のみ刻みがつく。771は表面が薄膜状に器面が剥離しており，調整痕は残っていない。775は胴部があまり張らず，頸部が細長く伸びるタイプで突帯もシャープである。774と777は胎土が類似しており，いずれも白色の砂粒を多く含む。777は頸部内面の接合痕が明瞭で，胴部内面には太めのハケナデと思われる調整が部分的に残っている。780は胎土は軟質で砂粒をほとんど含まず，マーブル状を呈する。

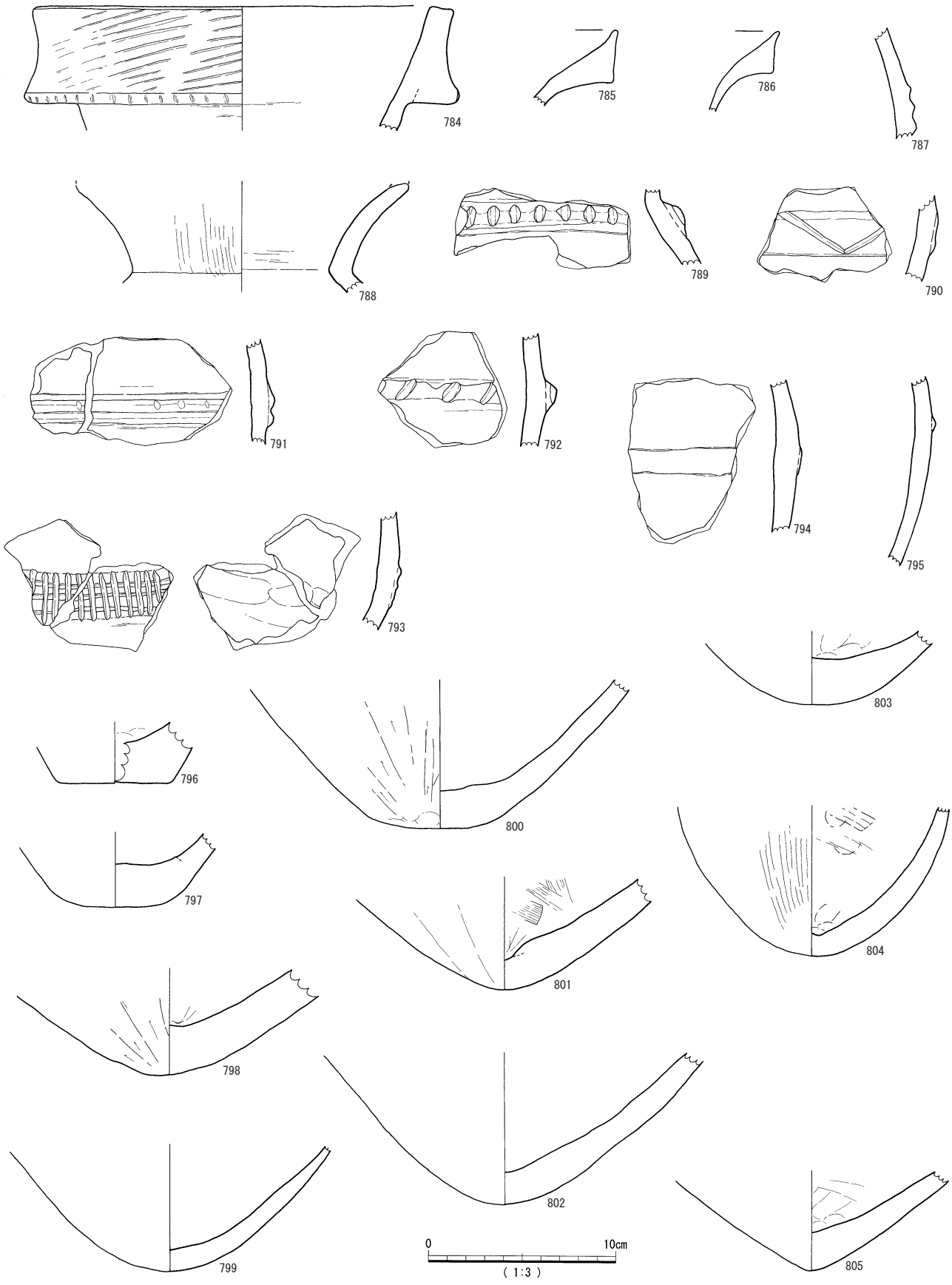
776～784は二重口縁壺である。776・781は内弯，778・782は内傾，779・783は外傾する。776は屈曲が強く「く」字状を呈し，内面には接合痕が明瞭にみられる。胎土は粗く，砂礫を多く含む。781はナデ調整により口唇部に平坦面が作出され，口唇直下の外面がわずかに凹む。また，外面には水平方向のタタキ痕が部分的に残存



第112図　礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（２）

する。胎土に，３㎜大の白色礫を疎らに含む。

778は，口唇部が擬口縁状のため，もう少し長さがあると考えられる。屈曲部の稜は明瞭で，端部に浅く刻みが施されている。外面の屈曲部下はカキアゲ状の縦位のハケナデ調整である。782は，屈曲部の接合部で剥落している。口唇端部はナデ調整により平坦面が作出されている。779は屈曲部の稜が緩く，部分的に屈曲度合いにも差異がある。783は屈曲部に浅い刻みを施しているが，欠損により部分的にしか残存しない。胎土は赤みの強い発色で，胎土に３～５㎜大の灰白色の角礫を多く含む。



第113図　礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（３）

784は大型の二重口縁壷で，断面が三角形状に大きく肥厚する。口唇端部は平坦面が作出され，外面には沈線状の右上がりの条痕がみられる。また，肥厚部の端部はヘラ状工具で浅い刻みを連続して施している。口縁部は厚く重量があるのに対し，頸部の器壁は薄い。山陰系大型壷の影響があると考えられ，色調は暗い。胎土に２～３㎜大の長石を疎らに含む。礫敷遺構とＥ－28区の石列遺構で出土した破片とが接合している。

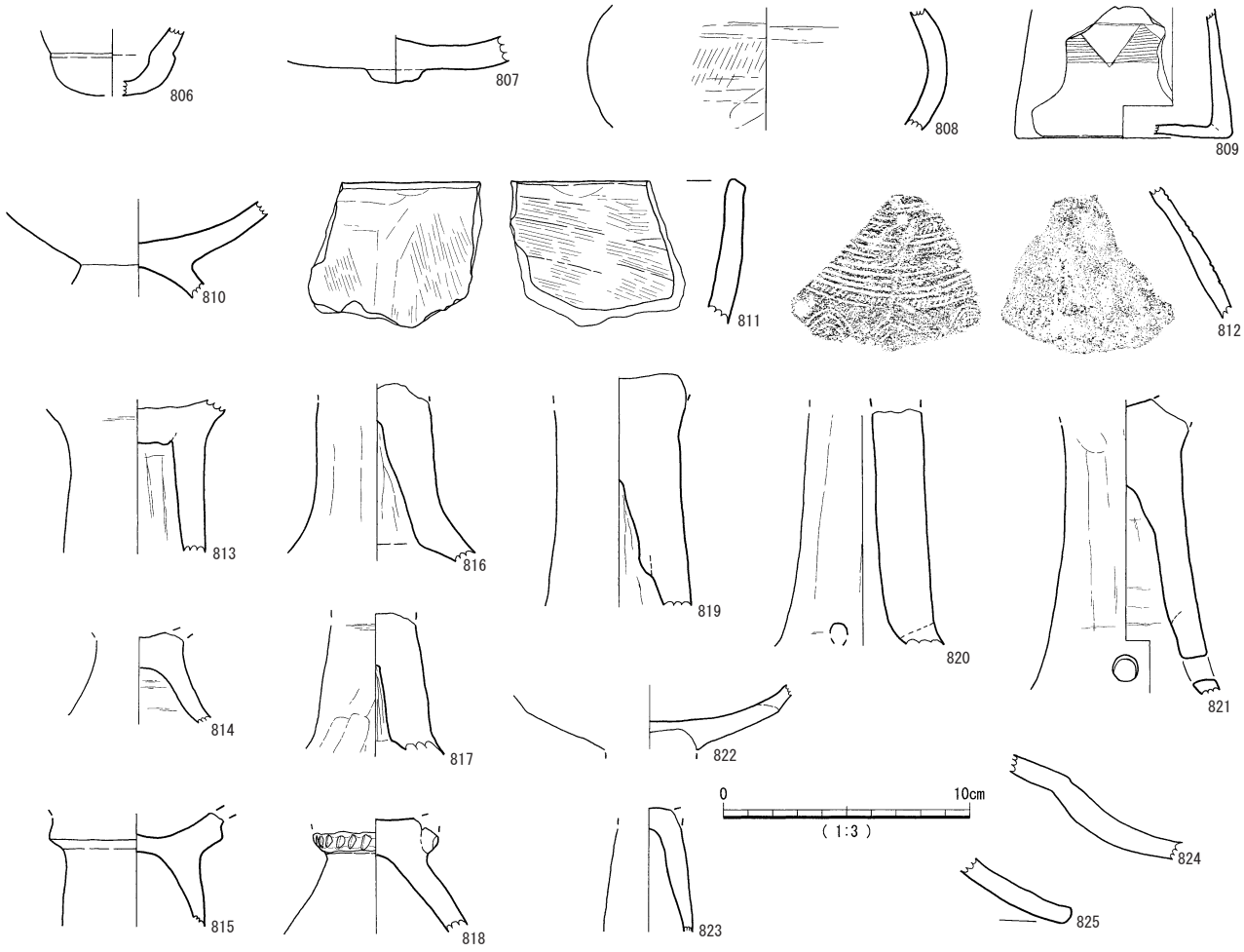
785・786は，断面三角形の肥厚口縁である。いずれも胎土は軟質で，砂礫はほとんど含まない。赤褐色の軟質な粒子を疎らに含む。

787は３条の三角突帯のある肩部である。

788は二重口縁壷の口縁部で，口縁端近くが欠損している。頸部で強く屈曲して外反し，端近くで直立あるいは内傾する。内外面ともナデ調整だが，一部にハケ目がみえる。灰白色を呈し，赤色粒を多く含む胎土である。

789～795は突帯である。789は屈曲があり，頸部と考えられる。790・794は幅広い突帯を貼り付けるもので，790は鋸歯状の沈線を施す。また，794は胎土に３～５㎜大の灰色・赤褐色礫を多く含む。789・792は丸みを帯びた幅広い粘土紐を１条貼り付け，その上に押圧状の刻みを施している。791は不整形な２条の粘土紐を貼り付け，浅い刻みを施している。793は幅広に粘土帯を貼り付け，その上に横位の４条の沈線を巡らせ多条突帯状にし，さらに縦位の連続した沈線を施している。795は肩部で，低い突帯が貼り付けてある。

796～805は底部である。796・797は平底，800はレンズ状，803～805は丸底ないしは尖底である。796は小片であるが，底面が丁寧なナデ調整により，明瞭な平坦面が作出されている。797は，胎土に３～７㎜大の灰色円礫を多く含む。798は厚手で，形状がいびつで外面側と内面側の中心もややずれている。内外面ともやや摩滅しており，胎土に多量に含まれる長石や白色礫が器面に露出する。799は薄手で，胎土に長石・白色礫を多量に含む。800は外面をカキアゲ状の縦位のケズリ調整で成形し，ナデ調整で仕上げている。底面付近は指頭押圧やユビナデがみられる。胎土は赤褐色・灰白色の砂礫を多く含み，やや粗い。801は内底面が凹み，その周辺にナデ調整が集中する。胴部内面はハケナデ調整である。外面は縦位のユビナデ調整により，単位ごとに小さな平坦面状をなして



第114図　礫敷遺構出土の古墳時代の土師器（４）

いる。802は胎土が粗く，砂粒を多く含む。803は厚みのある丸底で，内底面はユビナデ・指頭押圧により凹凸がある。804は小型で，胴部が緩く膨らむ器形である。内外面とも幅広のハケによるナデ調整で，内底面は指頭押圧が連続して加えられている。胎土は比較的精製されているが，灰白色の５㎜大の円礫を疎らに含む。805は尖底で，内面はユビナデ調整で仕上げられている。胎土は３～５㎜の白色の角礫を多く含み，色調の赤みが強い点なども，土器溜４の477等の大型二重口縁壷と類似する。

坩形土器（806～808）

806～808は小型丸底壷である。806の口縁部は外へ広がりながらまっすぐ延びており，底は安定した丸底である。807は，蓋である。器壁は厚く，つまみも粗雑で，全体的に摩滅している。周縁は打ち欠きの可能性もある。808は大型のもので，部分的にハケ目が残っている。

ジョッキ形土器（809）

809はジョッキ形で，外面に細線による鋸歯文を描き，その内部を横位の沈線で充填している。内底面は，ユビナデによりやや器面に凹凸がある。胎土に角閃石粒を非常に多く含み，搬入品の可能性もある。

小型土器（810）

810は，小型の台付坏ないしまたは台付鉢と考えられる。脚部が広く開くため，器高は高くないと想定される。内外面とも摩滅しており，胎土に含まれる３～５㎜大の角礫状の長石がまばらに器面に露出する。

鉢形土器（811）

811は，包含層出土の732に類似するが接合しなかった。口唇端部がわずかに外傾し，内外面に細かいハケナデ調整で仕上げられている。色調は暗く，胎土に３㎜大の角礫状の長石が疎らに露出する。

免田式土器（812）

812は，長頸壷の胴部片と考えられる。連続した横位の沈線文の間に２条のみ斜線を加え，端部には３～４条の沈線による重弧文を描いている。

高坏形土器（813～823）

813は断面台形状を呈し，内底面は坏部との接合部の張り出しに，粗い工具痕が残る。内面には脚部を筒型に成形する際の縦シワが数条みられる。

814～818は脚部である。

814・817・823は小型のもので，814は屈曲部から緩やかに端部に開く。816・817は，器壁が厚く緩やかに膨らんで屈曲から開くタイプのものである。いずれも，坏部との接合面で剥落している。外面調整は，817は屈曲部周辺が斜位のユビナデ，816は縦位のユビナデである。内面には，筒状に成形した際の縦シワがみられる。823は長脚で，胎土は軟質である。内面は丁寧なナデ調整である。815・818は，脚部の付け根に突帯を有するものである。815は断面三角形状に張り出し，そのまま坏部へとつながる。818は粘土紐を貼り付け，その上に押圧による刻みを施している。いずれも色調が明るく，胎土に白色・赤褐色の砂粒を多く含む。

819・820・821は長脚のタイプで，819は中実部が広く，重量がある。821は，坏部との接合面で剥落している。穿孔が２か所残存し，本来は対で４か所であったと想定される。作りは丁寧で，焼成も良好である。外面は縦位のユビナデ調整で，部分的に面状をなす。820は器壁が厚く筒状になるタイプで，坏部との接合面で剥落している。外面は，部分的に縦位のユビナデ調整によって面状をなす。下半を欠損するが，穿孔が部分残存しており，非対称で４か所施されている。

822は坏部で，脚部との接合面で剥落している。わずかに屈曲部が残っており，坏部が椀状の長脚高坏になると考えられる。内外面とも摩滅しており，胎土に多く含まれる２～３㎜大の角礫状の長石が器面に露出している。

蓋形土器（824・825）

824・825は，スス痕が明瞭で器面調整もケズリが主体となるため，蓋形土器の破片と判断した。本遺跡は高坏を転用した蓋も多く，高坏片の可能性もある。

825は内外面，824は内面のみ帯状のスス痕がみられる。

第７表　古墳時代土器溜遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	新番号	旧番号
SX3	S14	SX6	S112
SX4	土器集中２	SX7	SX2
SX5	土器集中１	SX8	SX3

第８表　古墳時代土坑遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK18	SK15	SK25	SK115	SK32	SK32	SK39	SK106	SK46	SK50
SK19	SK119	SK26	SK117	SK33	SK100	SK40	SK58	SK47	SK49
SK20	SK44	SK27	SK111	SK34	SK101	SK41	SK56	SK48	SK47
SK21	SK45	SK28	SK109	SK35	SK103	SK42	SK37	SK49	SK54
SK22	SK112	SK29	SK110	SK36	SK107	SK43	SK38	SK50	SK51
SK23	SK113	SK30	SK116	SK37	SK105	SK44	SK52	－	－
SK24	SK114	SK31	SK102	SK38	SK104	SK45	SK53	－	－

第５節　古代の調査成果

１　概要

遺構は24区から29区の範囲に集中しているが，出土している遺物はそれほど多くなく，盛行している集落とはいえない。

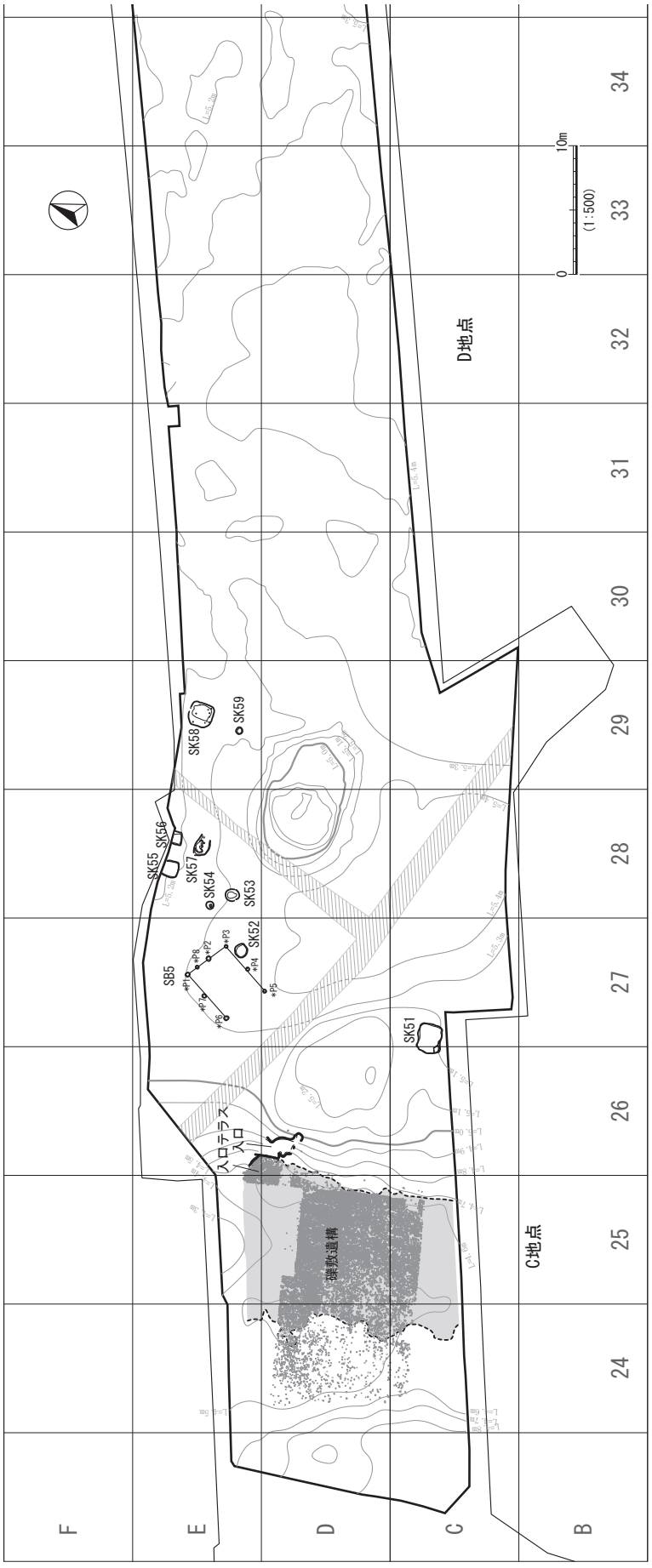
遺構は掘立柱建物跡１棟，土坑９基，礫敷遺構１か所が検出されている。

掘立柱建物跡はＢ地点では時期不明も含めて４棟検出されており，これを含めて考えるとＢ地点主体に存在することが想定できる。Ｂ地点の掘立柱建物跡は主軸方向が一致しているが，これらとＣ地点の建物跡とは一致しない。

土坑は26区から29区に９基あるが，そのなかには土器焼成土坑が２基ある。出土品からして土師器の坏・皿を焼いた土坑と，土師器坏・蓋を焼いた土坑がある。残存度は良くないが，燃焼部と炭・灰の掻き出し部が見つかっている。埋土中には大量の土器片と炭・灰・焼け残った炭化材などがあった。その他の土坑は円形をしたものが多いが，方形のものもある。

性格がはっきりしないが，24区から26区にかけて南北に続く幅10m余りの礫敷遺構が検出された。南側・北側とも用地外へ延びているため全容は不明だが，深さが40cmほどあり，底面はコの字状となっている。敷き込まれた川原石のなかには多くの古墳時代の土師器小片とともに，土師器・須恵器片も入っており，古代の遺構と思われる。礫敷の両側に犬走り溝などはない。Ｄ・Ｅ－25・26区の東側には台地上に上がる階段状の遺構も見つかっている。

遺物には多くの土師器・内黒土師器・須恵器があり，他に越窯青磁・緑釉陶器・瀬戸焼・土錘などが出土している。土師器には坏・皿・埦・甕などの器種があり，８世紀から９世紀のものである。須恵器には坏身・坏蓋・壷・甕などがあり，土師器と同じく８世紀から９世紀のものである。このなかには須恵器の甕や蓋の破片を利用した転用硯も含まれている。他に棒状のものや刀子などの鉄製品も出土している。



第115図　古代の遺構配置図

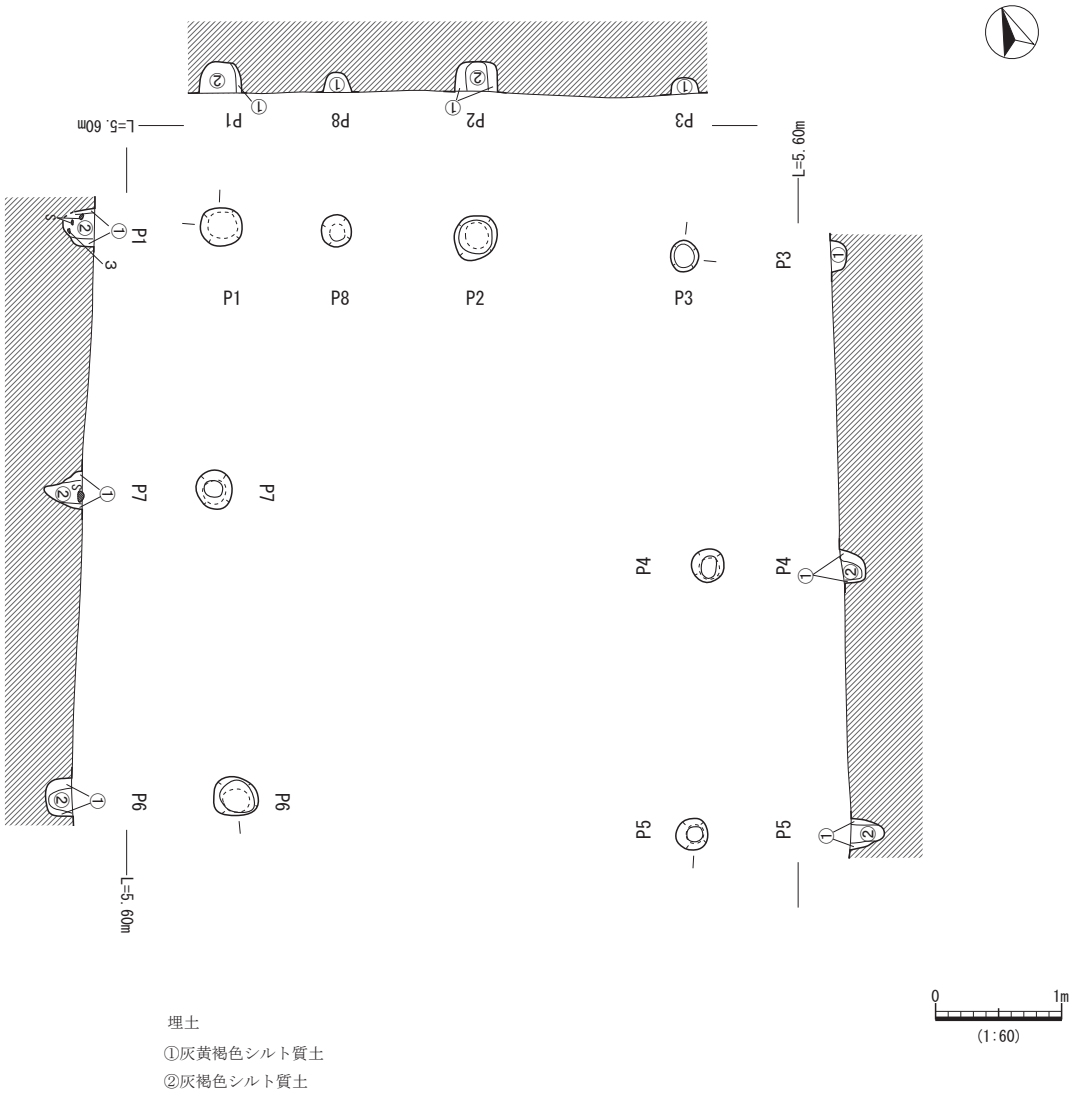
2　遺構

1）掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡５号（第116図）

Ｄ・Ｅ－27区のⅡc層で検出された。南端が不明のためはっきりしないが，２間×３間の建物と思われる。主軸はＮ18度Ｅで南北方向に長い。梁行は2.0＋1.6の3.6m，桁行は西側が2.1＋2.4＝4.5m，東側が2.5＋2.1＝4.6mある。ピットの形状はほぼ円形を呈し，径30㎝前後，深さ20～30㎝である。

出土遺物はないが，柱間からみて古代のものと思われる。



第116図　掘立柱建物５号

第９表　古代遺構番号新旧対応表

掘立柱建物跡

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB５	SB7	－	－	－	－

土坑

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK51	SK12	SK54	SK35	SK57	SK41
SK52	SK16	SK55	SK40	SK58	SK46
SK53	SK31	SK56	SK39	SK59	SK57

２）土坑

９基の土坑がＣ－26・27区とＥ－27～29区で検出されている。

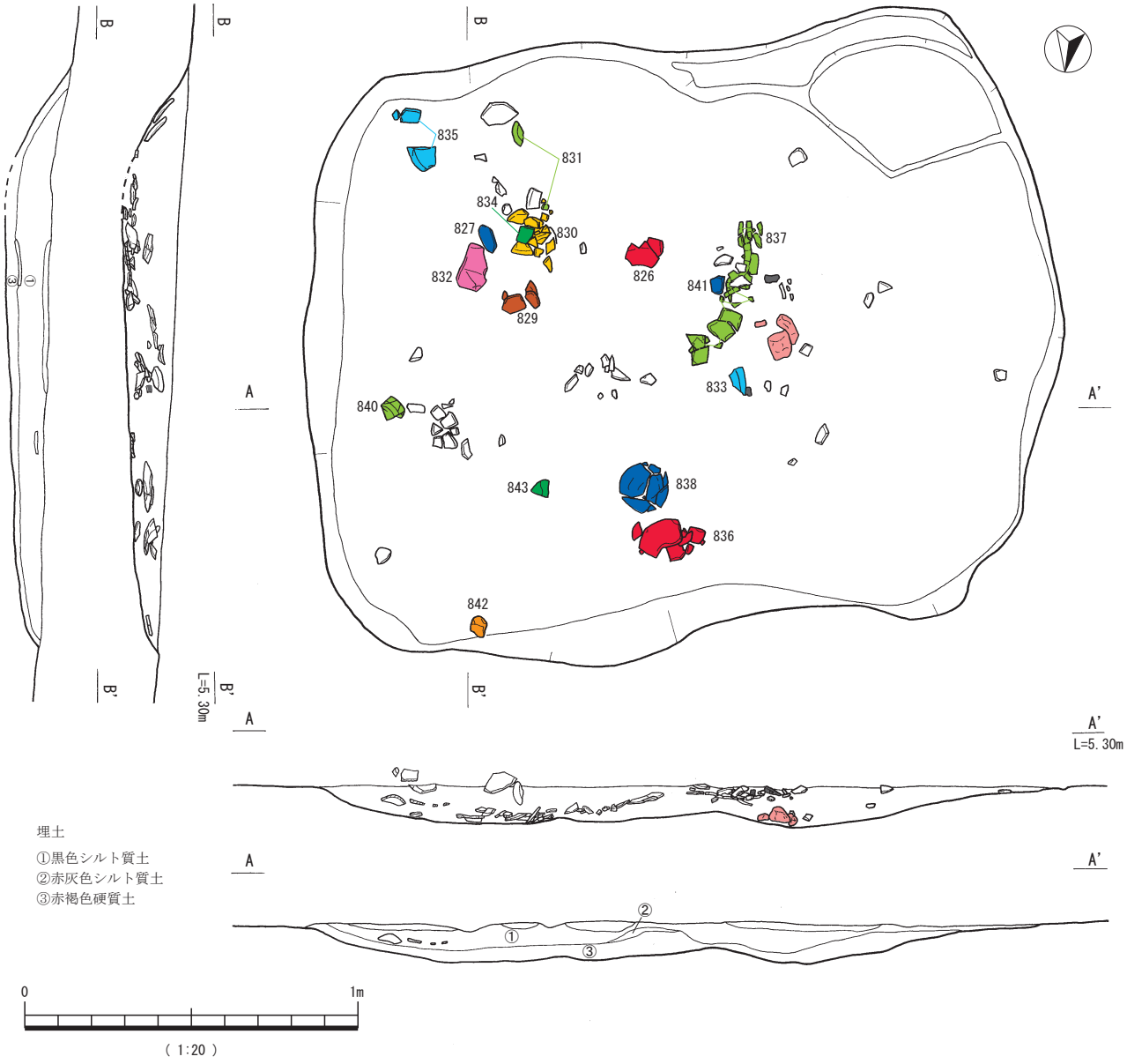
①土坑51号（土器焼成土坑）（第117図～第120図）

Ｃ－26・27区の東へ向かって河岸段丘状に上がる台地の平坦面で検出された。西側に位置する古墳時代の竪穴建物跡５号の東端を切るような位置にある。平面形は，約2.2ｍ×1.8ｍの隅丸方形を呈する。断面形は，深さ約10㎝程で，不定形である。東側が焼成部，西側が燃焼部と思われるが，底付近のみしか残っていないため，上部構造は不明である。焼成部は，約1.5ｍ×１ｍの隅丸方形を呈する。内壁は，底一面に広がるようにして赤橙色に硬化していた。埋土中に，大量の土器片・炭・灰などが含まれており，焼け残った炭化材が多く出土した。炭化材１点について樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した。その結果，コナラ亜属クヌギ節という広葉樹材であることが分かった。また，年代値は，古墳時代終末期から古代初頭頃に相当する結果であった。

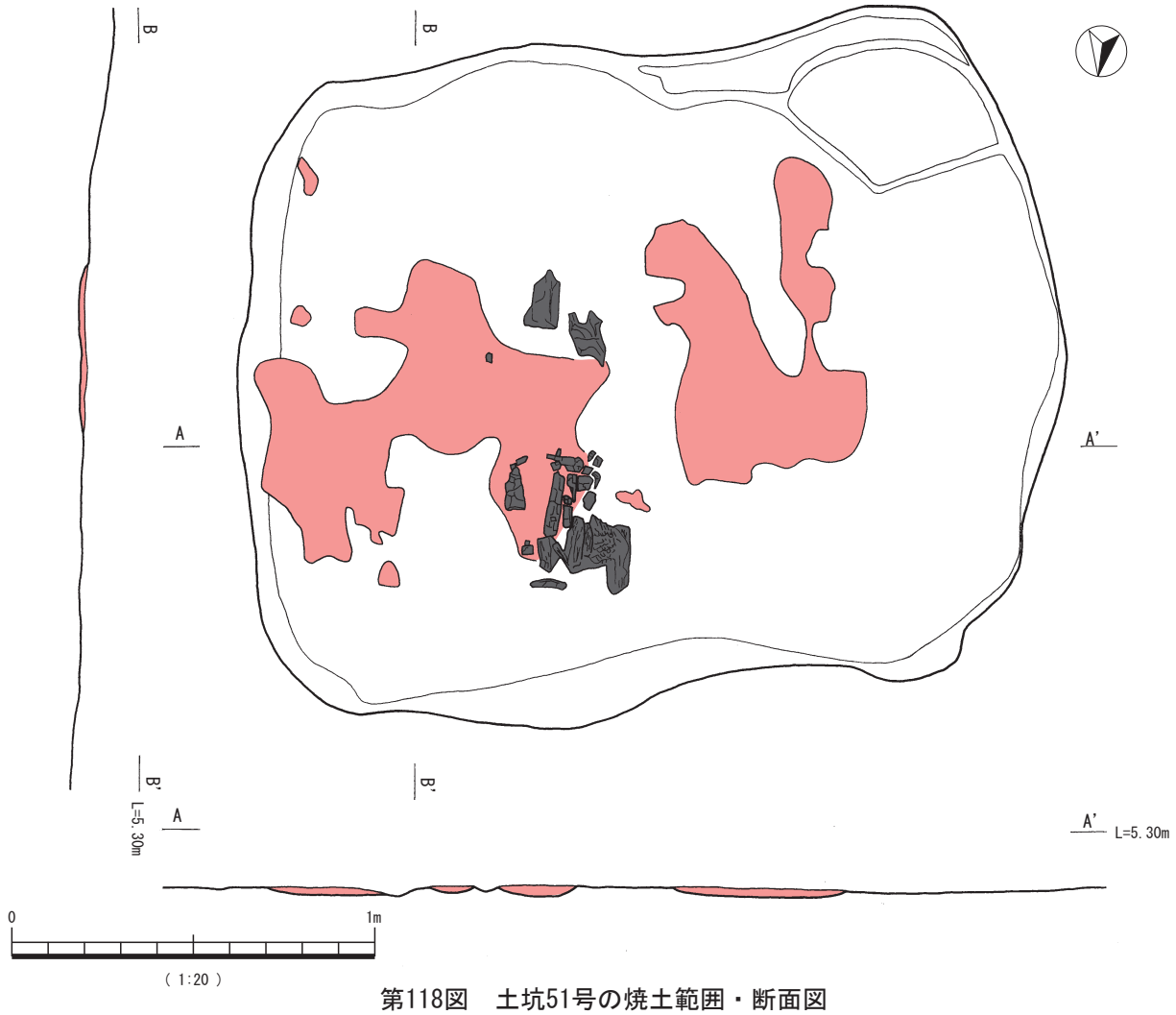
焼土面上で，東側に集中して径が10㎝弱の小ピットが確認された。

土師器片は破損したものが多く，器種としては，坏・皿が大部分を占め，甕・壷類の破片は確認されなかった。坏類を中心に，底部からの立ち上がりにケズリ調整が加わるものが多く，８世紀後半が中心と考えられる。

826～835は，皿である。口径は13～17.2㎝，高さは1.5～２㎝ほどである。いずれも口縁端部は丸く，底部から



第117図　土坑51号の土器出土状況



第118図　土坑51号の焼土範囲・断面図

口縁部が短く立ち上がり舌状を呈する。接合面の観察から，円盤状の底部に口縁部を貼り付けていることが分かる。また，底部が残存するものは，いずれもヘラ切りである。橙色あるいはにぶい橙色，明褐灰色などの色調を呈している。826は厚手で重みがあり，831は胎土がマーブル状である。また，834は内面の破断面に粘土痕がある。

836～843は坏で，底面が残存するものはいずれもヘラ切りである。また，837・838は完形資料である。口唇部は舌状で，838はわずかに外反する。いずれも底部からの立ち上がりにケズリ調整が加えられ，平坦面状をなしている。口径は13～16.0cm，高さは３～４cmほどである。胎土はこまかい土で，橙色あるいは浅黄橙色，にぶい黄橙色などの色調を呈している。

844は高台の破片で，坏部との接合面で剥落している。この土坑内から出土した遺物の大半は高台を伴わない皿・坏類であるため，混ざり込みと考えられる。

845・846は，遺構埋土中から出土した古墳時代の遺物である。遺構の時期と異なるため，周辺からの流れ込みと考えられる。

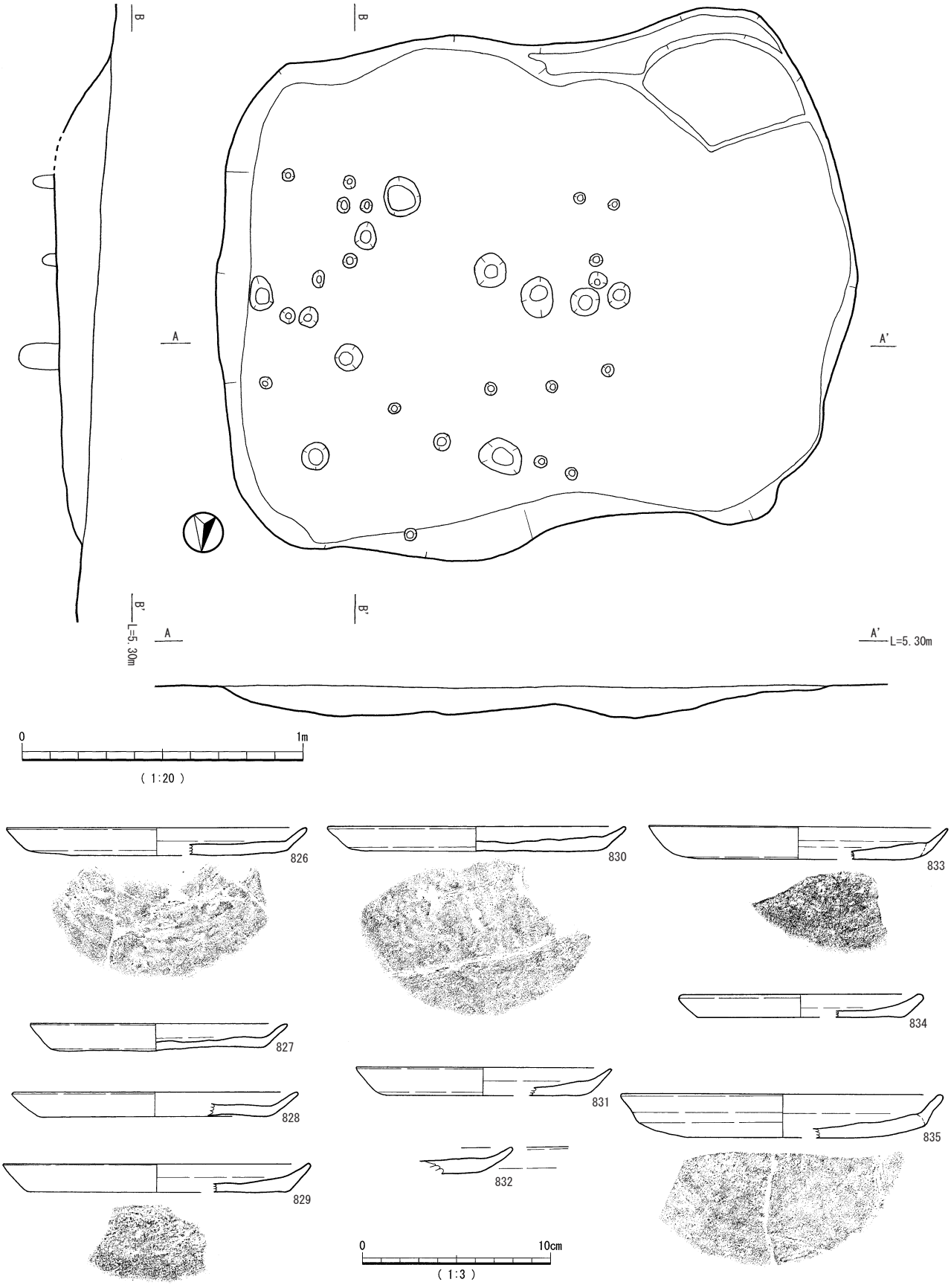
845は甕形土器の底部で，上げ底状を呈する。端部は指でつまみ出すように成形されており，内底面・外面とも粗いユビナデ調整のため，全体的にゆがみがある。胎土は粗く，３～５㎜大の灰白色・灰色の円礫・角礫を多く含む。

846は，小型丸底壷の器形であるが，器壁が厚く，胎土も粗い。胴部にくぼみ状の小段が有り，底部は丸底である。内外面とも摩滅し，器面に砂粒が露出する。

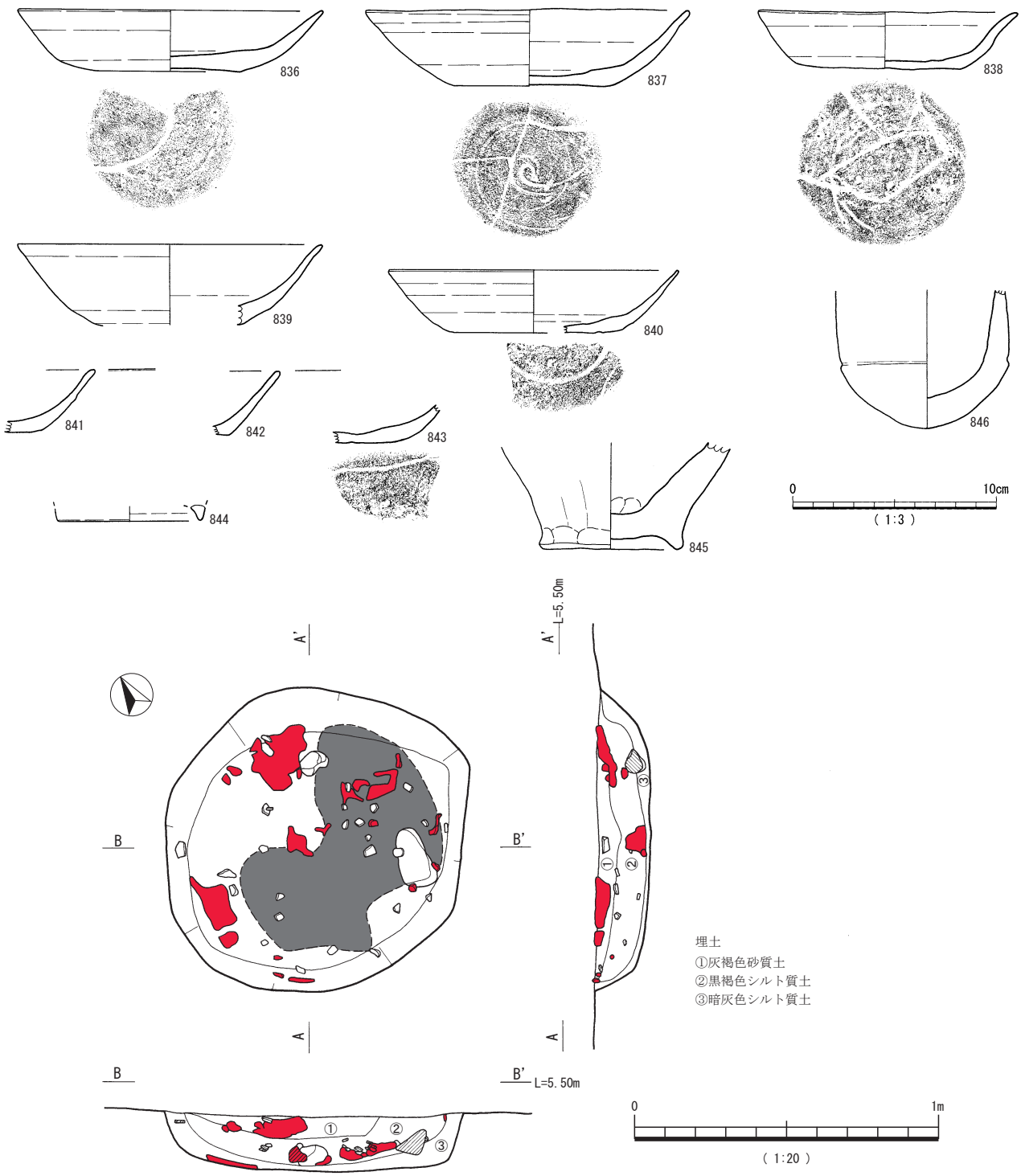
②土坑52号（第120図）

Ｅ－27区のⅡｃ－２層で検出された。掘立柱建物跡５号に隣接している。平面形は，径90cm程度の円形を呈する。断面形は深さ約16cmで浅鉢形を呈する。部分的に赤橙色に変色した焼土が固まりとなって内壁に張り付いていた。

埋土中に大量の土器片，粘土塊，炭化物が含まれており，径20cm大の礫も含まれる。また，底面の一部に使用時のものと考えられる焼土が残存し，床面全体に遺物と



第119図　土坑51号のピット配置図と出土の土器（１）



第120図　土坑51号出土の土器（２）と土坑52号の平面図・断面図

炭化物交じりの灰色土が厚く堆積していた。

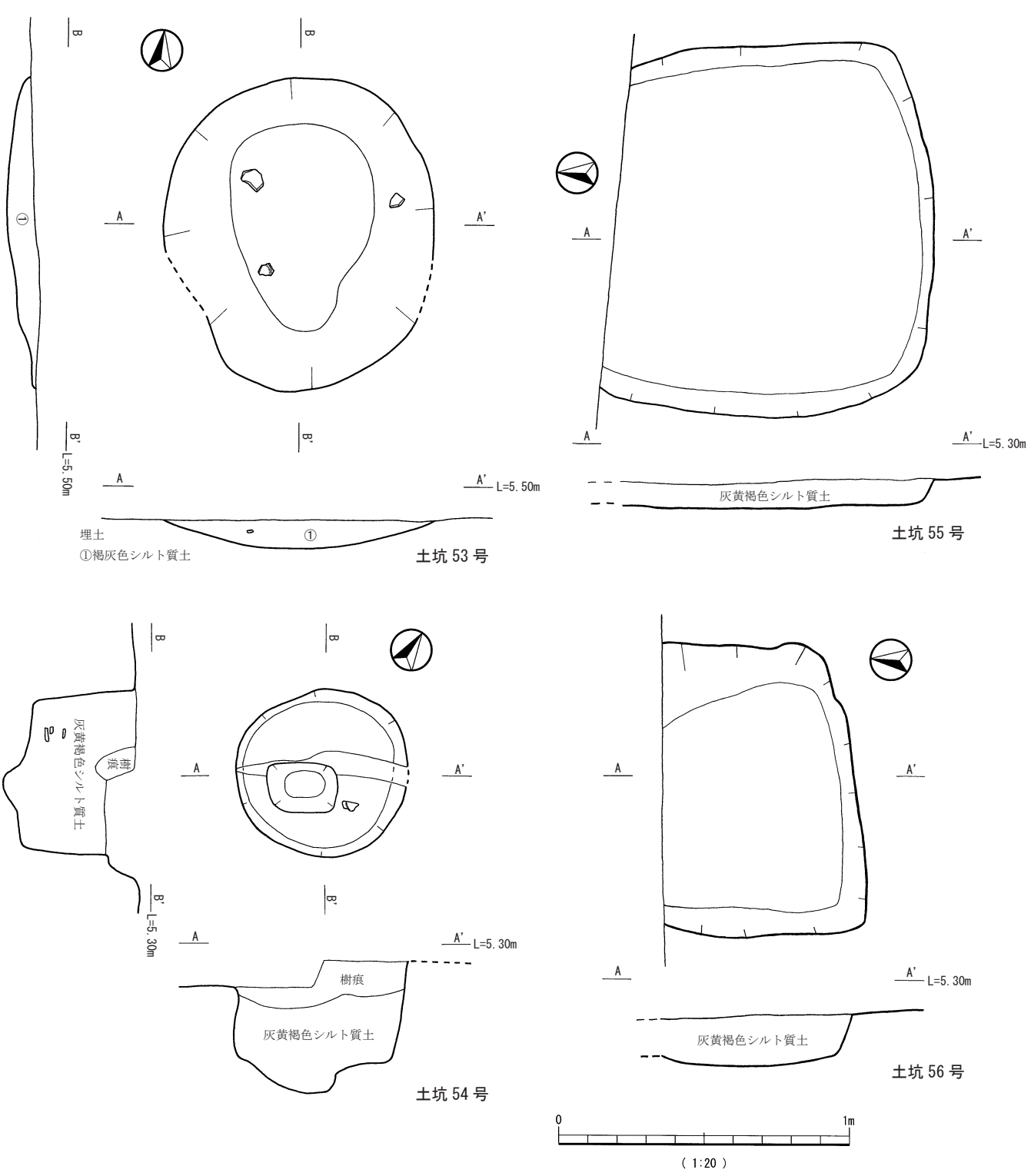
③土坑53号（第121図）

Ｅ－28区のⅡc－２層で検出された。平面形は0.95×1.1ｍの略だ円形を呈する。断面形は，深さ10cmと浅く，浅いレンズ状を呈する。

遺物は，土師器と土器の小片が出土した。

④土坑54号（第121図）

Ｅ－28区のⅡc層で検出された。上部を樹痕でこわされているが，平面形は，径60cm程度の円形を呈する。底に17cm×24cmの方形をしたくぼみがある。断面形は，深さ約35cmで，底面が不定形な深ナベ形を呈する。くぼみの深さは約10cmである。



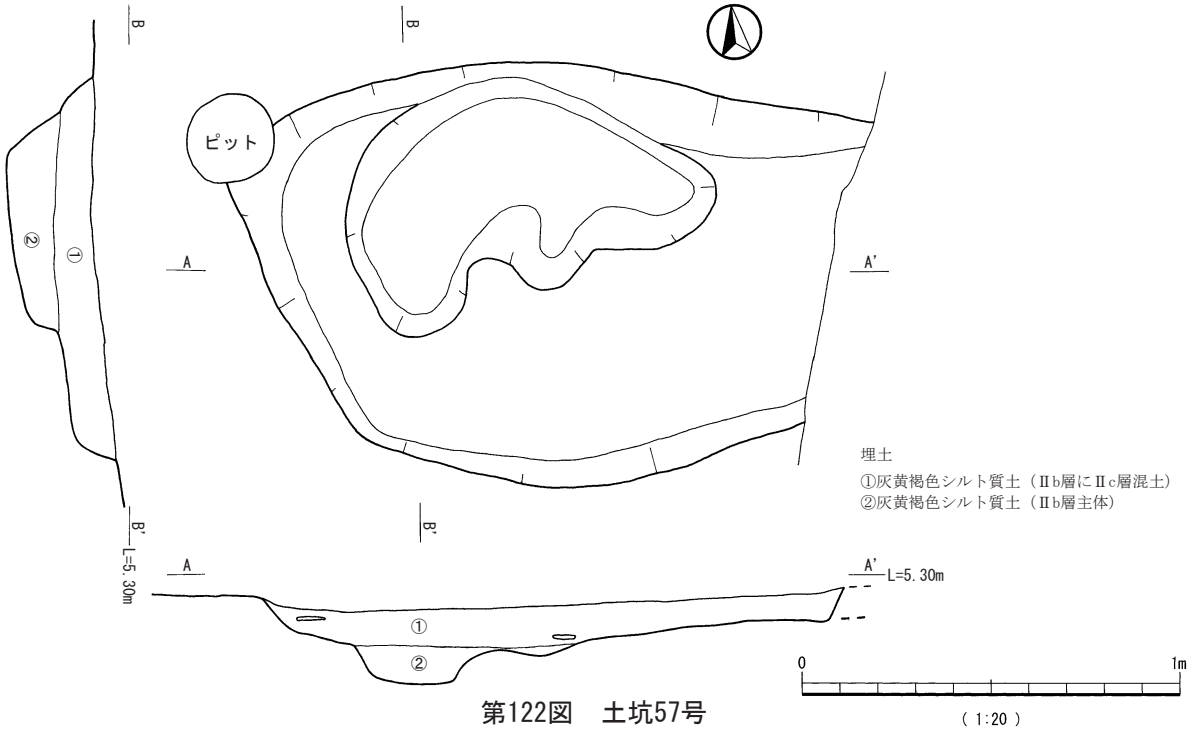
第121図　土坑53号～56号

⑤土坑55号（第121図）

Ｅ－28区のⅡc層で検出された。東側約２ｍに土坑56号が並ぶように位置する。北側が調査区外へ延びているため全体形は不明であるが，約1.3ｍ×1.1ｍ（残存）の方形を呈する。断面形は，深さ約10㎝で，ナベ形を呈する。

⑥土坑56号（第121図）

Ｅ－28区のⅡc層で検出された。西側約２ｍに土坑55号が並ぶように位置する。北側が調査区外へ延びているため全体形は不明であるが，約1.1ｍ×0.7ｍ（残存）の長方形を呈する。断面形は深さ約18㎝で，ナベ形を呈する。



第122図　土坑57号

⑦土坑57号（第122図）

Ｅ－28区のⅡc層で検出された。平面形は，東側が生活道へ延びているため全体形は不明であるが，東西に長い約1.6m（残存部分）×1.1mのやや不定形なだ円形を呈している。断面形は，深さ10cmで，底面はほぼ平坦だが，北西側には長径１m，短径0.4～0.6m，深さ10cmほどの不定形の落ち込みがある。

⑧土坑58号（土器焼成土坑）（第123図・124図）

Ｅ－29区のＤ－Ⅳ層で検出された。当初，東壁の焼土部分のみが検出されたため，西側は薄く下げながらプランを認識した。平面形は，隅丸方形を呈し，長軸がほぼ南北に合っている。規模は，約1.8m×約1.9mである。断面形は深さ30cmで，深皿形を呈する。北側に隣接して，弧を描くように礫が配石され，その下面でピットを検出した。土坑58号を切っているため，時期的に土坑58号より新しい時期の可能性が高い。ただし，ピットには被熱や焼土等の痕跡がなく，土坑58号との関連性は不明である。

床面近くには，３～５cm程の炭層が堆積しており，部分的に炭化材が形状をとどめていたが，ほとんどは１cm大の細片になっている。炭層の下は，一面が焼土であり，焼土面を掘り抜いているピットを計10基検出した。いずれも径が小さく，杭状のものと想定される。南側ピットは平面プランに合うように弧状に配置されており，上屋や内部で焼成するものの土台を支えるものだった可能性がある。焼土面は，Ｄ－Ⅳ層が被熱したもので，粘土等の貼りはなかった。また焼土面は東側が残りが良く，西側は上部がやや崩れている状況だった。何らかの焼成遺構と思われるが，具体的な機能は現状では不明である。

なお，焼土４点について，ルミネッセンス分析を実施した。土坑内部では被熱が不均一であるものの，700℃程度の熱を受けていることが確認できた。4試料のうちの１つ（№３）では約1.2千年前という数値年代が得られた。

また，炭化材２点の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。年代値は古墳時代終末期から古代頃に相当する結果となった。また，樹種はコナラアカガシ亜属という広葉樹材と分かった。

遺構内から土師器の坏と坏蓋が出土した。

847～852は坏である。口径は14.6cmと15.6cm，底径8.0cmあり，底からまっすぐ外へ開きながら立ち上がっている。口縁端は丸みをおび，細くなっている。薄い作りである。底はヘラ切りで，鋭い稜をもって外へ立ち上がっている。

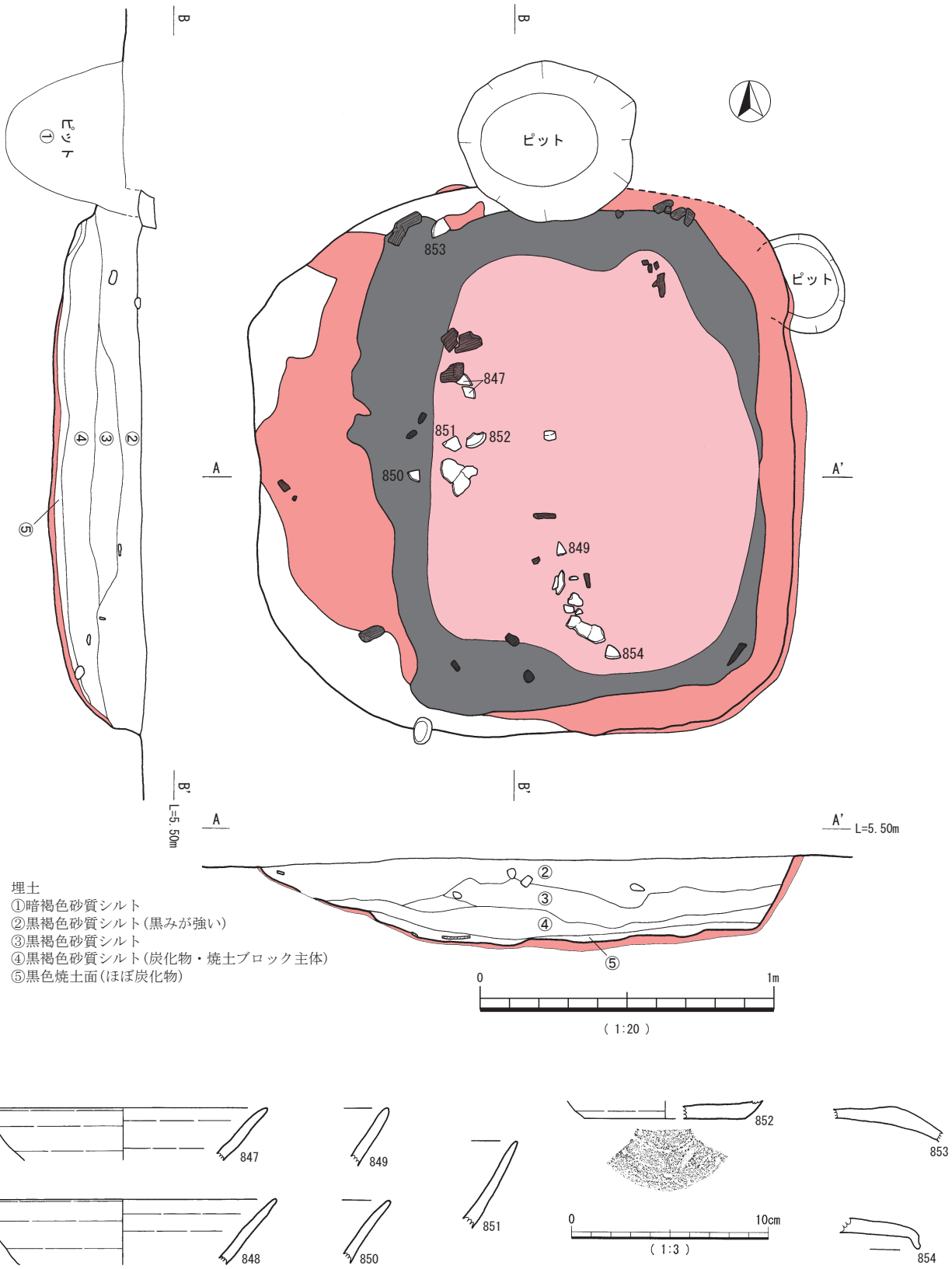
853・854は坏蓋である。天井はヘラ切りで平らになっており，口縁端は薄くなって丸みをおびている。853はやや深いが，854は扁平である。

胎土は密で多くが浅黄橙色を呈しているが，橙色・灰色のもある。焼成度は普通で，軟質である。

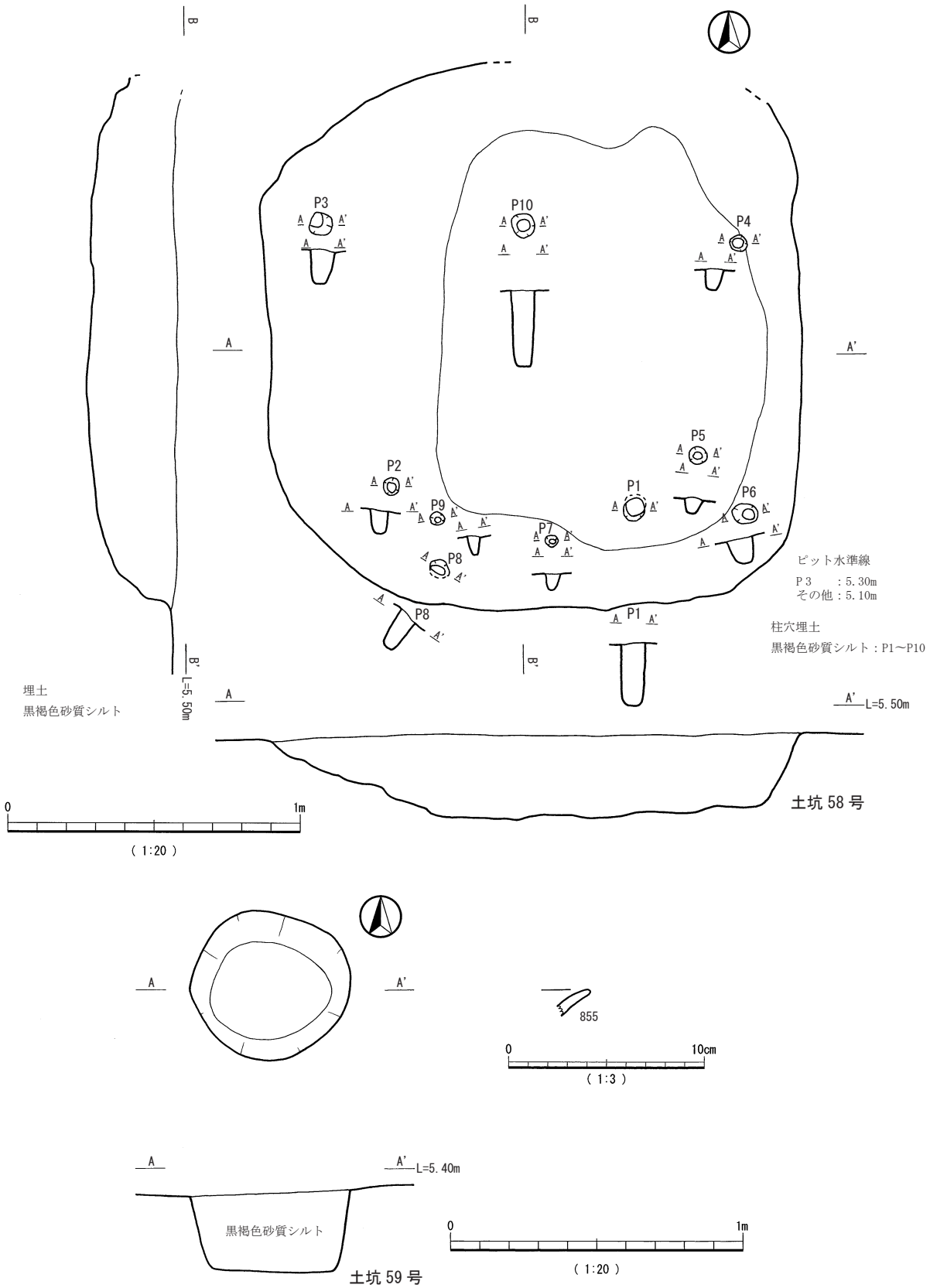
⑨土坑59号（第124図）

Ｅ－29区で検出された。平面は55cm×51cmの円形を呈する。断面は，深さ約27cmで，逆台形を呈する。マンガン粒を多く混入し，土器小破片が出土した。

855は，土師器皿の口縁部片である。小片のため，流れ込みの可能性もある。



第123図　土坑58号と出土の土器



第124図　土坑58号のピット配置図と土坑59号及び出土の土器

３）礫敷遺構（第125図）

①形状

Ｃ～Ｅ－24～26区の東西にある丘陵上の高台に挟まれやや低くなった平坦面で，礫が敷き詰めて造成された面を検出した。

西側の台地には竪穴建物跡３号，東側の台地には竪穴建物跡や土器焼成土坑などの遺構群が位置している。

検出された礫敷の広さは約330㎡で，礫の密度に明確な違いがあり，西側約230㎡は幅10ｍ程度にわたり礫の密度が高く隙間なく敷き詰めたような状態であり，南北方向へ延びるように続いていた。東側約100㎡は，やや北西方向に広がりながら調査区外へ延びており，含まれる礫の量は少ない。

当初は河川のような地形のため，下層の砂礫層が広がっているのだろうと考えて調査を進めたが，礫の大きさがほぼ５～10㎝程度と揃っていたこと，隙間なく平坦に敷き詰められていたこと，礫の間には土器片も多く含まれていたこと，直線を意識した平坦面をつくり出していたことなどから，この礫面は自然の堆積によるものではなく，人工的につくられた平坦面ではないかと想定した。

断面構造を確認するために南北の調査区境に沿って確認トレンチを設定した。その結果，下層の自然堆積した砂礫層を切るようにして平坦面を作り出していた。自然流路のような軟弱地盤の大きな凹地には，粘土質の土に大量の土器片や礫を混ぜた造成土で埋め，かさ上げを行い土壌の安定化を図っていた。

基盤の上には，粘土と小形の円礫と土器片を混ぜたものを，厚さ約10～20㎝程度道路の路盤のように基盤上の凹凸を埋めながら水平になるように造られていた。さらに，その上には厚さ約５㎝程度の路面が敷かれていた。路面は粘土と大量の円礫，土器片を隙間なく敷き詰めており，土造成土より硬く固められていた。

礫敷遺構は，直線にこだわりながらほぼ南北方向に延びており，出土した遺物の特徴から古代に造られたと考えられる。

北東側には東側に張り出した礫敷面があり，丘に向かって上がっていく硬化面を伴った一部階段状の通路につながっていた。

砂層について，樹種同定を行った。照葉樹のツバキ亜属であることが分かった。下位の路盤については，放射性炭素年代測定を実施した。その結果，弥生時代後期頃に相当する結果となった。

②礫敷遺構入口テラス（第126図・127図）

礫敷遺構東端で検出された。ほぼ同レベルの平坦面で礫敷遺構が東側へ膨らんで広がっている。平坦面が東側の丘へ向かって上っていく境目にあたり，テラス面全体も東側へ向かってわずかに上がっている。

削平や盛り土によって作られた平坦面に，厚めの路盤（15㎝）を敷いて，自然礫や土器片を隙間なく敷き詰めている。構造的には礫敷遺構と同じである。

略南北方向に延びる礫敷遺構から膨れるような位置にあり，東側の丘に向かって上がっていく硬化面を伴う階段状の通路につながっていることから，出入りするために造られたテラスと想定される。

大型（20～30㎝大）の自然礫が，通路の縁石のように２列置かれており，幅は約１ｍでやや北よりに向かって合流している。

敷かれた礫は５㎝前後の自然礫が中心で，特に人の往来があったと推測される大きめの礫の石列に挟まれた部分は隙間なく敷き詰められており，礫敷遺構より丁寧な作りである。

通路の南側の脇に黒曜石の原石が２個置かれていた。取り囲むように大型礫も置かれていたことから，何か祭祀的な儀式を行う場所の可能性も想定される。

土器片も多く含まれており，ほとんどが古墳時代のものであるが，土師器や須恵器も多く混在している。

③出土遺物

礫敷遺構の埋土には多量の土器が含まれているが，その多くは周辺から流れ込んだものと思われる古墳時代の土師器である。その中に古代の土師器・須恵器が少量含まれている。盤面の礫の中にも古墳時代の土師器とともに，古代の土師器・須恵器がある。ここで紹介する古代の土師器・須恵器のほとんどは盤面下のものである。

856～864は土師器である。

856～861は坏である。856は口縁直径13㎝，底径７㎝ほどの大型で，底が丸みを帯びたものと，底径５～６㎝とやや小型で，底から角張って立ち上がるものとがある。高さ3.3㎝で，底から丸みを帯びて立ち上がる器形をし，浅黄橙色を呈している。口縁端へ細くなって向かい，端部は丸みを帯びている。857は底径９㎝と大きく，外へ開きながら丸みをもって立ち上がっている。858～861の底径は５～６㎝で，底からやや角張って立ち上がっている。いずれもヘラ切り底で浅黄橙色を呈し，胎土は細かい粘土である。

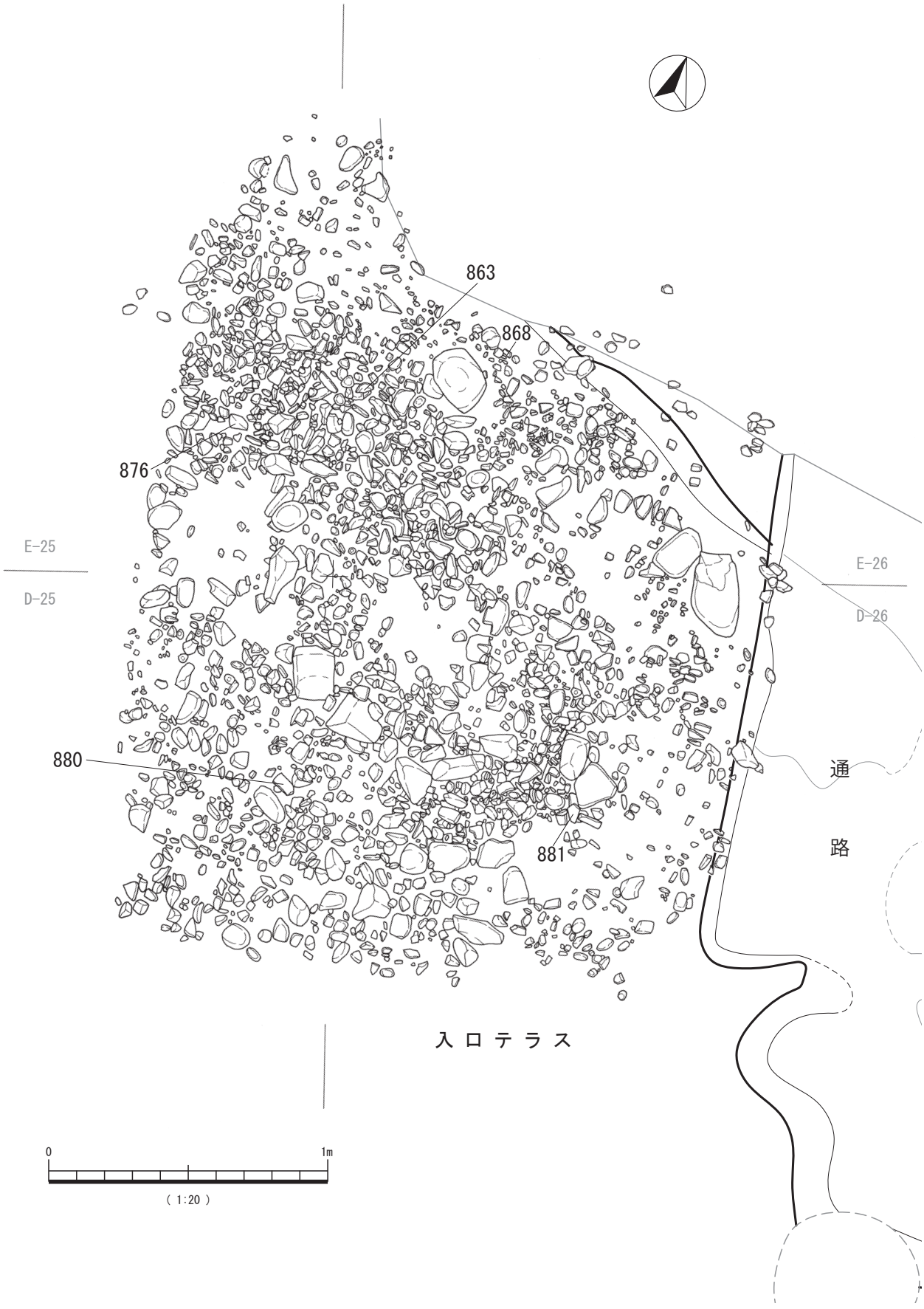
862～864は高台の付く埦である。862は直径６㎝の高台で，三角形に近く低い台である。863は直径８㎝とやや大型で，外へ開く分厚い高台である。864は直径６㎝の直に立ち上がる高台である。863だけが橙色で，あとは浅黄橙色を呈す。

865～873は紡錘形の土錘である。

端部が欠けているものが多く，中には小破片になったものもある。872は片方，873は両方が残っているが，端部はきちんと切断されている。872は残存長4.4㎝，最大径1.8㎝と細長く重さ10ｇである。孔径は４㎜である。

礫敷遺構
入口テラス
入口
L=5.0m
L=5.1m
L=5.2m
L=4.9m
L=4.8m
L=4.7m
L=4.6m
L=4.5m
L=4.4m
L=4.3m
L=4.6m
L=4.5m
L=4.6m
L=4.7m
L=4.8m
L=5.000m
B
B'
C
C'
1a
1b
24
25
26
C
D
0
4m
(1:125)

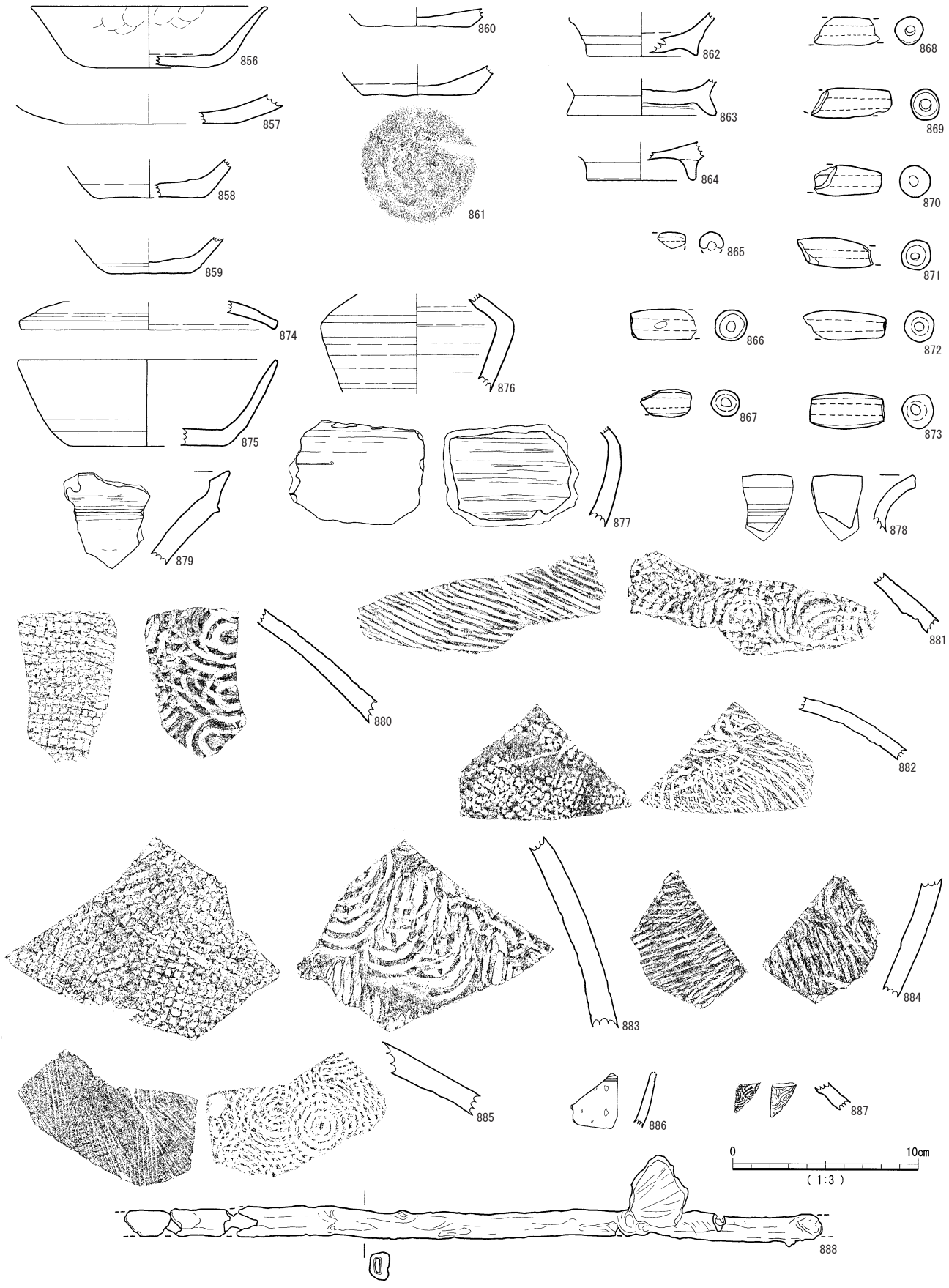
第125図　礫敷遺構



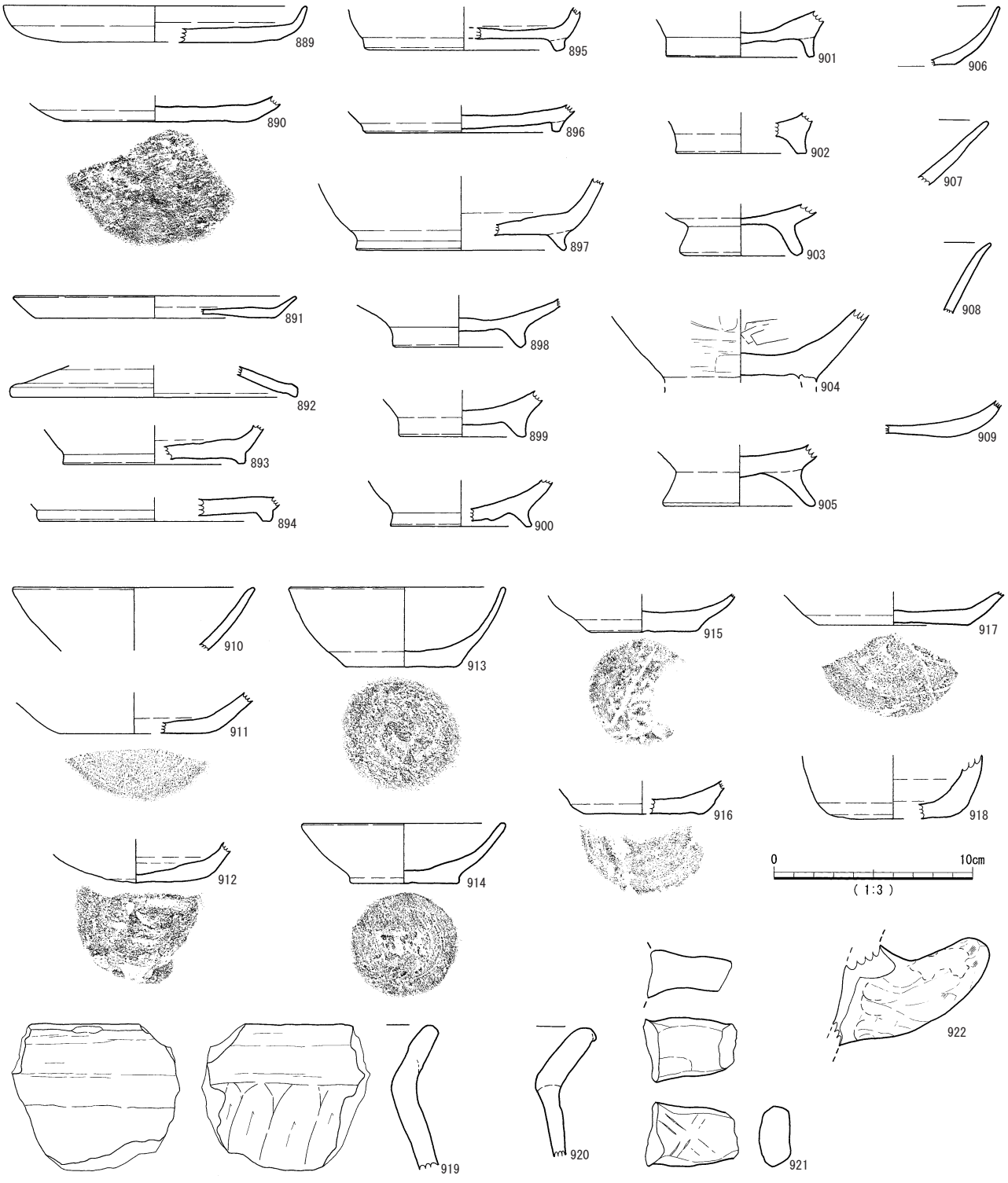
第126図　礫敷遺構　入口（１）



第127図　礫敷遺構　入口（２）



第128図　礫敷遺構出土の遺物



第129図　包含層出土の土師器

873は長さ4.0cm，最大径1.9cm，孔径0.6cm，重さ12ｇである。866は９ｇ，871は11ｇである。須恵器は坏蓋・坏身・壷・甕がある。

874は扁平な坏蓋で，口径13.8cmである。口唇部はコの字形をし，天井部の端部がややへこんでいる。875は口径14cm，底径8.4cm，高さ4.7cmの坏身である。安定した平底で，口唇部は細く丸みを帯びている。灰色を呈している。876・877は壷の肩部である。876は肩部と胴部境が稜をもって折れ，肩部径10.4cmと小型である。877は丸みを帯びた肩部である。

878～885は甕である。878は外反する小型の口縁部で，端部は矩形を呈している。879は大型の口縁部で，頸部から外傾し，端部近くで内傾する。屈曲部外面に三角突帯が貼り付けられ，その上には沈線がある。口唇部は矩形だが，中央がへこんでおり，外側は丸みを帯びている。内面は灰色，外面はにぶい赤褐色を呈している。880～882，885は肩部で，880・881・885は外面に条痕タタキ痕，内面に同心円当て具痕が，882は外面に正格子タタキ痕，内面に同心円当て具痕が残っている。883・884は胴部で，883の外面には正格子タタキ痕が，内面には同心円文と条痕当て具痕が残っている。884の外面には条痕タタキ痕，内面には条痕当て具痕が残っている。

886・887は黒色をした大きな石粒を含む胎土の須恵器破片である。886は口縁端が少し欠けているが，丸みを帯びた端部の坏あるいは埦である。灰白色を呈し，丁寧にナデている。887は壷の肩部で，外面に草花文が描かれている。浅黄橙色を呈している。他の須恵器に比べ良質の胎土を用いているが，同様の胎土を用い緑色の自然釉が付いた壷の破片が他に１点ある。瀬戸焼の可能性がある。

888は棒状を呈した鉄製品である。両側が欠け，もう少し長いものと思われるが，現状では長さ37.8cm，最大幅1.5cm，最大厚1.2cmで，断面はかまぼこ形を呈している。下面が長軸に沿ってやや蛇行している。土器片が付着しているが，この付近は少し幅が狭い。芯は長方形の空間となっているが，錆ぶくれの可能性がある。重さ80ｇである。

３　包含層出土遺物（第129図～133図）

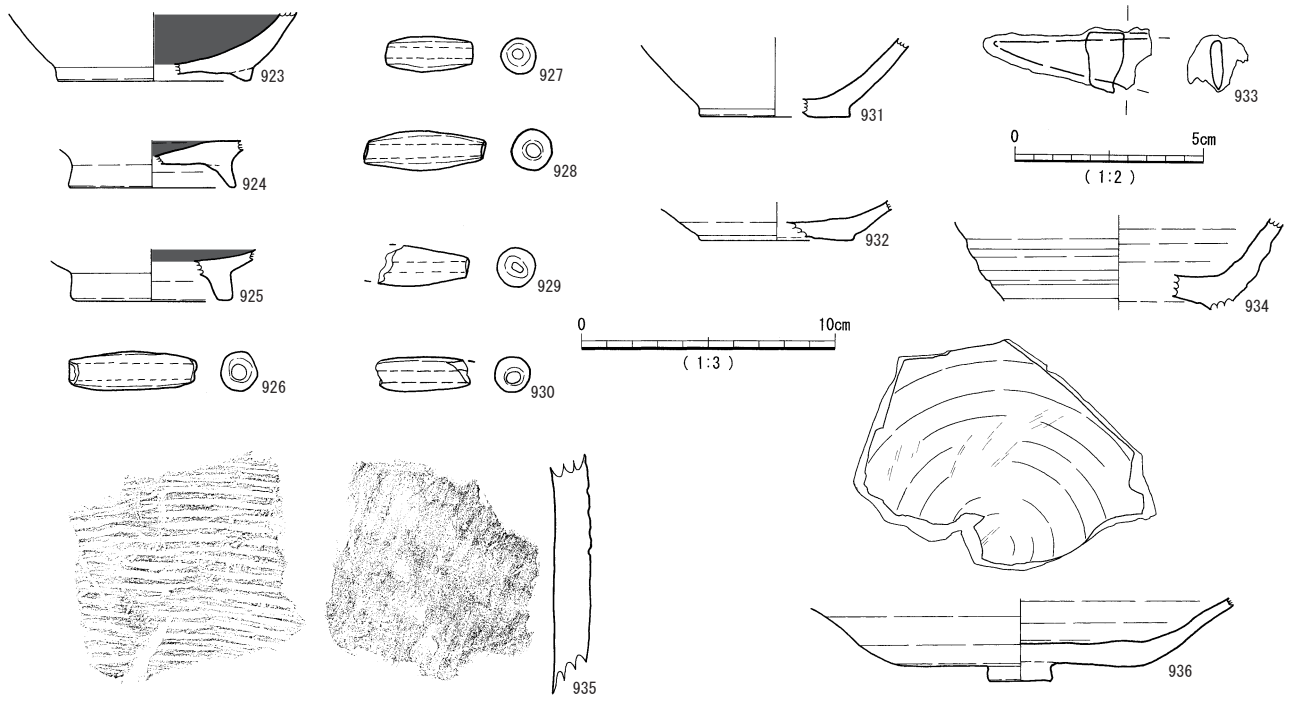
１）土師器（889～922）

889～891は皿である。

889・891は器高が低く，口縁部が短く立ち上がる。口唇部は丸く舌状を呈し，底面はヘラ切りである。土抗51号出土遺物と類似し，８世紀代に比定される。889は丸みをもって立ち上がっているが，891は薄い作りで底から直に立ち上がり，端は細い。890は丸みをもって立ち上がる底部で，底切り離しはヘラ切りである。

892は蓋である。焼成は不良で，端部が緩やかに膨らむ。８世紀代と考えられる。

893～896は須恵器坏身を模倣した高台付きの坏で，901は高台の接合面が明瞭である。また，902は被熱により，高台が赤変している。893～901は稜線が明瞭で，高台断面も方形を呈しており，９世紀代に比定される。898・903は高台断面が丸みを帯びており，10世紀代に比定される。894の高台は丸みを帯びて高さは低い。９世紀代に比定される。895・896は底径10cmで，丁寧なナデ調整をしている。高台は895がやや外向きで，896は内傾ぎみである。



第130図　包含層出土の内黒土師器・土錘・青磁・硯など

897は，底径が10.6㎝とやや大型埦の胴部～底部である。焼成は不良で摩滅しており，色調も明るい。高台端部は丸みを帯び，立ち上がりの胴部はヘラケズリで面が作出されている。８世紀代と考えられる。

898～903はやや高い高台で，外向きになっている。898～900は高台径が6.2㎝～7.0㎝と小さく，端部は丸みをおびている。899は幅広だが，900は小さい高台である。901は体部が分厚い作りで，高台も断面が矩形をした厚い作りである。902も分厚い体部と高台である。903は底部が薄いが，体部は厚い。高台は外開きで，端部は丸みをもっている。904は台付鉢の底部で，脚台が欠損している。内外とも丁寧にナデている。

905は高台が高く底部に開くタイプで，端部は丸い。10世紀代に比定される。

906はやや器高のある皿で，胎土はマーブル状である。

907・910は坏であり，いずれも口縁部がわずかに外反し，断面が舌状を呈する。907は口縁部が広く外傾するもので，柱状高台を伴うものと考えられる。910は比較的胎土も硬質で，胎土に砂粒が多く，古墳時代の土器と胎土も近い。口径は12.2㎝である。

908は底からまっすぐ伸び，端部がやや外反して薄くなる埦である。内外面摩滅しており，胎土に白色石粒が多い。

909は摩滅しており調整等が不明だが，ヘラ切り底の皿と思われる。底からは丸みをもって立ち上がっている。

911～918は坏である。いずれも底面はヘラ切りで，底部からの立ち上がりにヘラケズリによる小さな段が生じている。912は底面がやや膨らみ，安定しない坏で，底部は，粗いヘラ切りである。913・914は底部がやや厚手で，底面はヘラ切りである。いずれも橙色の発色で，作りは丁寧である。口唇端部は，丸みを帯びる。913はやや内弯し，埦状に近い形態である。口径約11㎝，底径5.5㎝，高さ４㎝である。914は底面からの立ち上がりがやや張り出しており，底部の厚さからも充実高台を意識したものと考えられる。口径10.2㎝，底径5.4㎝，高さ3.0㎝である。９世紀後半～10世紀に位置づけられる。915・916は胴部が緩く立ち上がる坏で，底面はヘラ切りである。916は胎土に砂粒が多く，硬質である。917は，素地に１～３㎜大の赤褐色礫を多量に含む。８世紀代に比定される。918は筒型に胴部が立ち上がる。器壁が厚く，細かい赤色粒を多く含む。９世紀後半～10世紀代に比定される。

919・920は甕である。口縁部は短く，「く」字状に外反する。外面にはナデ，内面は斜位の粗いケズリ調整が施されている。胎土は古墳時代の土器に類似し，茶色や白色の砂粒を多く含む。

921・922は把手である。921は幅3.2㎝，厚さ1.7㎝の棒状把手である。横方向に貼り付けている。922はこしきの牛角状把手で，粗い作りと調整で仕上げている。下にはススが付いている。

２）内黒土師器（923～925）

923～925は高台付きの埦である。923は高台内も黒変している。高台が低く丸みを帯びており，11世紀代まで下ると考えられる。924は先端が細くなる外開きの高台で，径は6.5㎝である。925は薄い体部に対して，分厚い矩形の高台で，径は6.2㎝である。

３）土錘（926～930）

いずれも小型の紡錘状をし，胴部中央が膨らみ，端部は平坦に成形されている。926は表面が赤みを帯びまっすぐ伸びており，長さ5.0㎝，径1.5㎝で，重さは10.2ｇである。927は長さ3.5㎝と小型で，重さは5.7ｇしかない。928は灰白色の地に表面は赤橙色を呈し，長さ4.8㎝，重さ9.3ｇである。929は一方が欠けており，残存長3.6㎝，最大幅1.6㎝，重さ9.2ｇである。930は摩滅しており，長さ3.7㎝，幅1.3㎝，重さ5.0ｇである。

４）青磁（931）

オリーブ灰色の越州窯系青磁の碗である。底面は蛇の目高台である。越州窯Ⅰ類に比定される。

５）緑釉陶器（932）

摩滅しており，灰白色の表面に淡く緑色釉が残存する。残存状況は良くないが蛇の目高台であり，９世紀後半に比定される。

６）鉄製品（933）

刀子の破片で，基部を欠いている。先端は鋭く，残存長4.5㎝，最大幅1.7㎝，厚さ1.6㎝である。

７）転用硯（934～936）

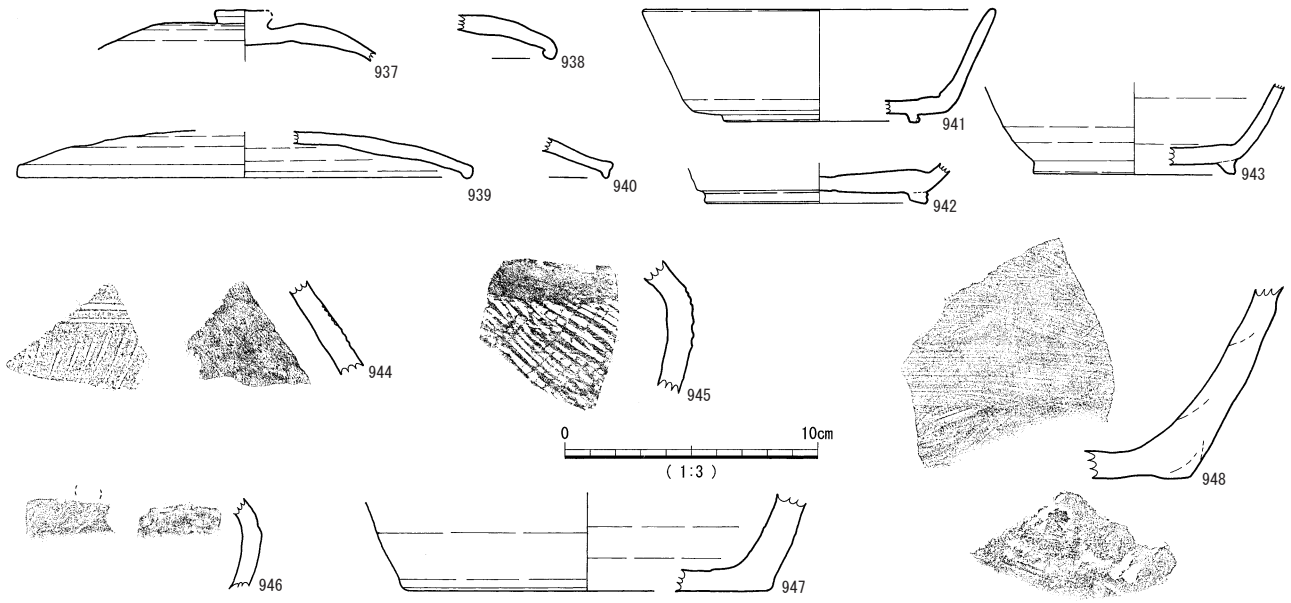
934は高台付壷の高台を打ち欠き，底部近く内面を使用した硯である。

935は内外とも条痕のタタキと当て具痕があり，内面を使用している。側面を丁寧に打ち欠いて，両側面を擦っている。

936は，つまみを有する蓋の内面が利用され，光沢面をなす。また，放射状の擦痕がみられる。表面の摩滅度合いから，使用頻度が高かったと推定される。８世紀代に比定される。

８）須恵器（937～966）

937～940は蓋である。937は天井が平らとなり，ややふくらむ天井部であるつまみは扁平な宝珠形である。938・939は端部が丸く収められ，内面側にかえしの段を有する。939の口径は18㎝である。940は口唇端部にナデ調整



第131図　包含層出土の須恵器（１）

が加えられ，二叉状を呈する。939・940は，端部に帯状の色調が暗い部分がある。いずれも，稜が丸く膨らむ形状であり，８世紀代と考えられる。

941～943は坏である。941・942は，高台付の坏である。941は口径14.0㎝，高台径7.6㎝，高さ4.4㎝の大型のものである。体部は底と立ち上がりが段をもって屈曲しており，体部に比べ高台は小さい。942は，高台が歪んだ台形状を呈し，全体的にひずんでいるため左右の立ち上がりも非対称である。943は底部で，高台は貼り付けて作出され，接合面の調整は粗い。９世紀前半のものと考えられる。

944～948は壷である。944は肩部片で，櫛歯状の工具により連続した斜位の刺突文が施されている。945は小型壷の頸部～胴部と考えられ，肩部はタタキがナデ消されている。外面の色調は赤みが強く，胎土はマーブル状をなす。946はハソウであり，古墳時代の可能性もある。外面には，櫛描波状文が描かれている。947は，外面の色調が明るく，焼成もやや悪い。948は外面にタタキを消した粗いナデ調整の痕跡が残り，器面の凹凸がある。底に同心円当て具痕がみられる。

949～966は甕である。949は頸部から口縁へ外反し，口縁外面はくぼみをもっている。口径19.2㎝で，外面は条痕タタキ，内面は同心円文当て具痕が残っている。口縁付近は内外とも横ナデである。灰色を呈する。950～952は，中小型の二重口縁壷の口縁部と考えられる。950は色調が赤みを呈し，口唇部は内傾する。外面には，１条の波状文が描かれている。952は二重口縁で口唇端部がナデにより凹み，頸部が鋭角に屈曲して肩部が張るものと考えられる。器壁や器面のカーブから中型～大型甕と想定される。953は口縁が強く外反し，端部は矩形を呈する。外面から内面口縁にかけて自然灰釉により暗赤褐色の発色をしており，外面は格子状，内面は同心円のタタキ痕が残るが，口縁は内外とも横方向にナデている。954は摩滅が激しく，焼成が不良である。口縁部を欠いているが，二重口縁である。外面は正格子状のタタキ痕がみられるが，内面はナデで仕上げられている。955～957は頸部から肩部である。955は，頸部である。外面は格子状の当て具で，ガラスが発泡したような自然釉が付着する。内面は同心円の当て具で，上半は暗緑色の自然釉が流れ，水滴状に溜まっている。956は肩部である。内外面ともタタキ痕はみられず，ナデ調整である。957は器壁が厚く，内外面とも丁寧な回転ナデ調整であり，胴部に断面三角形状の突帯が部分的に残存する。また，その上部には幅の異なる２条の櫛描波状文が施されている。

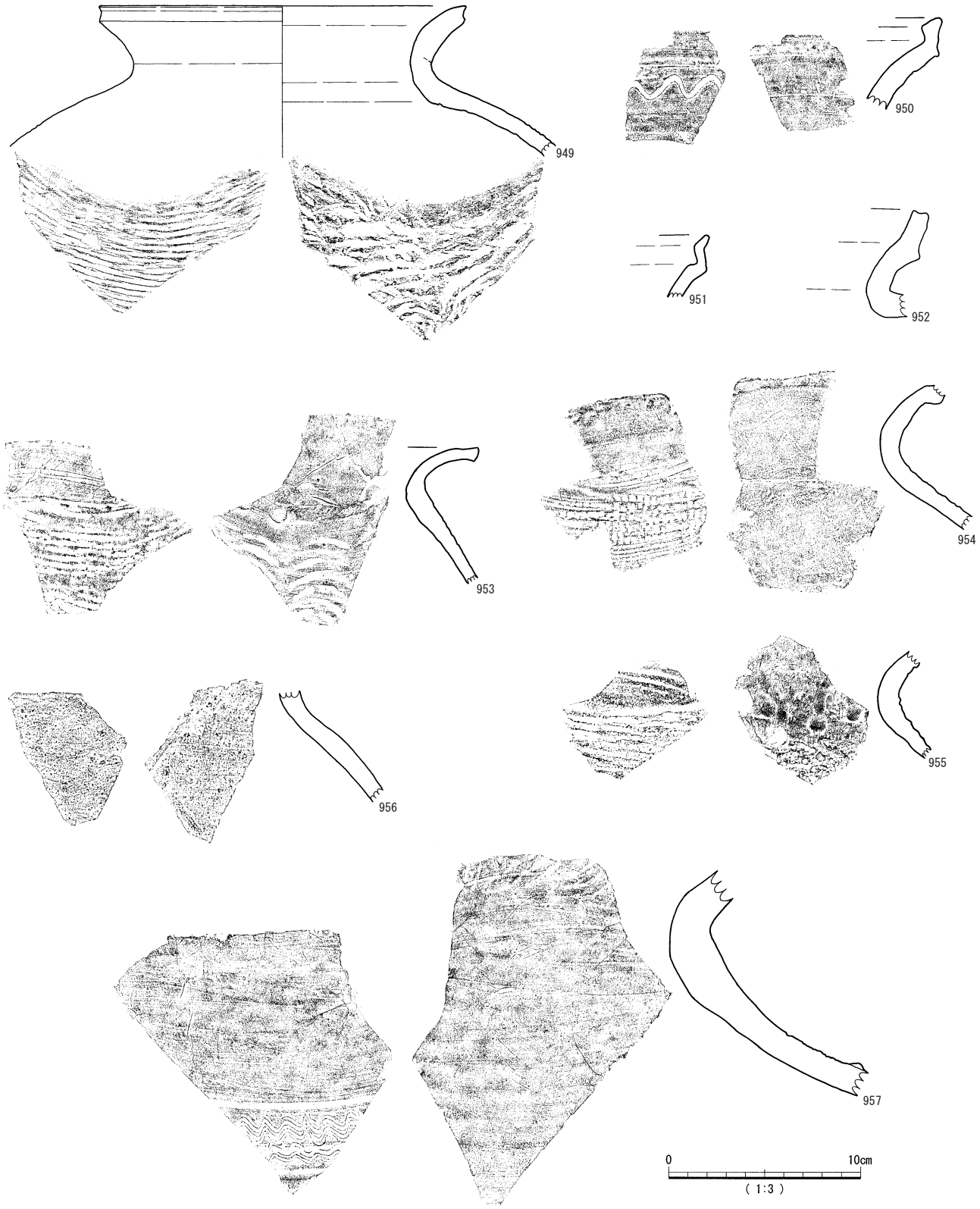
958は外面が浅い条痕タタキ，内面が同心円文当て具である。

959～966は胴部である。959は外面側が赤い色調を呈する。960は外面が正格子タタキ，内面がこまかい同心円当て具で，灰色を呈す。961は胎土に黒色の粒子を多量に含み，器面は斑点状になっている点で，他の須恵器と質感が異なる。962は外面が格子状，内面が平行状の当て具痕が複数切り合う。

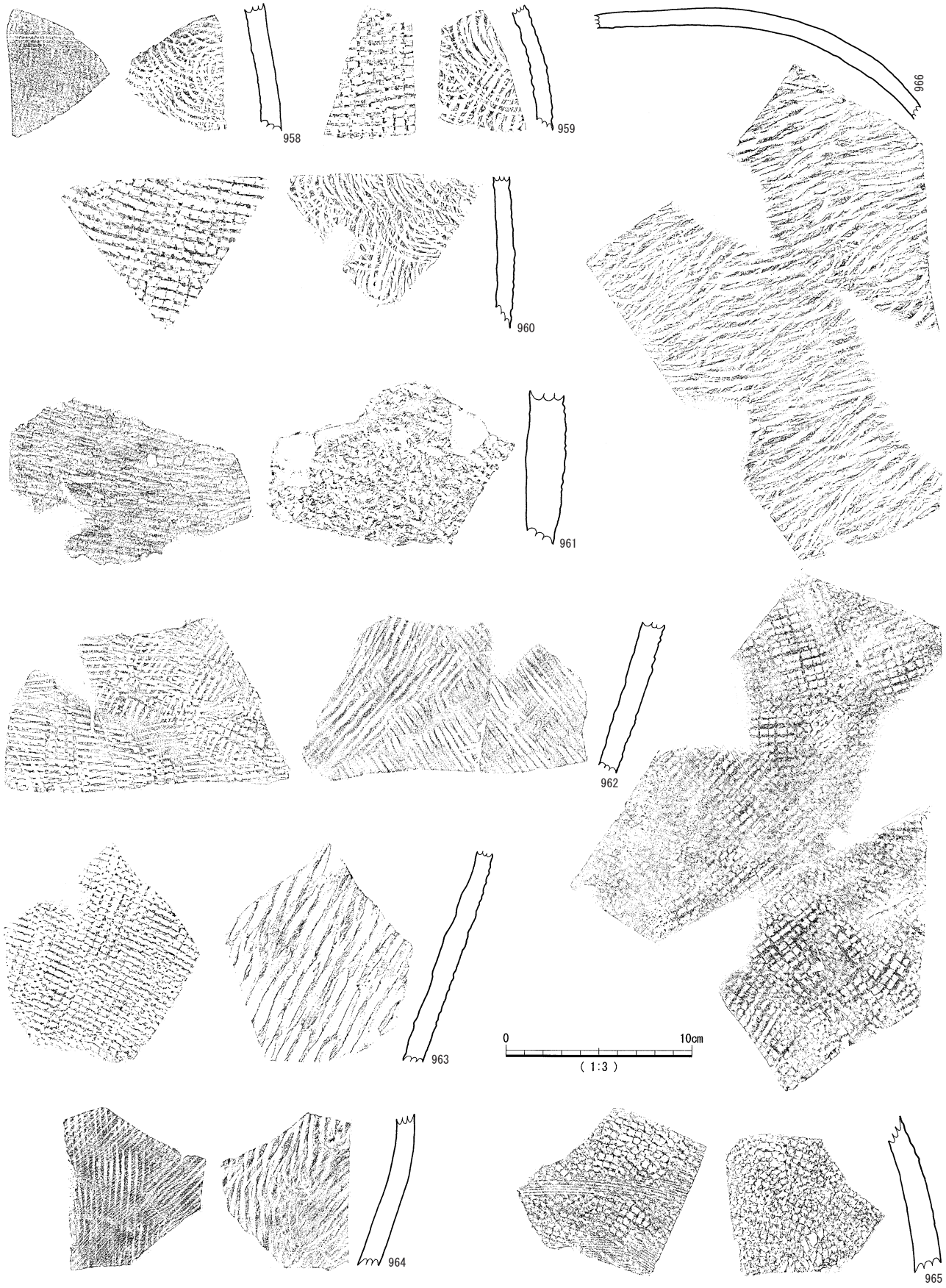
963・964は内面等が条痕だが，964はそのあとをナデている。外面タタキは963が小さい正格子，964は条痕である。

965は内外面とも細かい格子状のタタキ痕を有し，外面は筋状にナデ調整が加えられている。966は底近くでゆがんだへこみがみられる。外面は正格子タタキ，内面は条痕当て具である。内面は灰色を呈しているが，外面は赤みがかかった茶褐色，淡黒褐色を呈し，部分的に窯との接合痕がみられる。

蓋は８世紀代に比定されるが，大型の甕類は９世紀代まで下ると考えられる。



第132図　包含層出土の須恵器（２）



第133図　包含層出土の須恵器（３）

第６節　中世の調査成果

中世と確定できる遺構は検出できていないが，中世の土師器・陶磁器・瓦質土器・土師質土器・石製品・土製品など多種のものが，数は多くないが出土している。

１　土師器（967）

967は底の切り離しが糸切りで行われている完全な坏である。体部外面には回転ナデの稜線痕跡が明瞭に残り器面に凹凸があり，器形がゆがんで底面はやや外に張り出している。口径15.8㎝，底径9.4㎝，高さ4.2㎝と大型で，内底面は中心が凹み，周囲が盛り上がる。

胎土には，白色石・金雲母を多く含む橙色を呈している。12世紀代に比定される。

２　青磁（968～975）

青磁は碗・坏・小型壷・香炉が出土している。

968は口縁断面が玉縁状を呈する大形の碗で，口径は18㎝ある。緑っぽい灰白色を呈している。

969は口縁部が外反している薄い作りの坏である。

970から973は碗である。

970は器形に凹凸があり，外面に蓮弁文の一部が残存する。釉が厚く，高台で釉薬が溜まっている。

971は高台下半が内外とも削り出しで，段を有する。また，見込みには菊花文のスタンプが押されている。畳付部から高台内にかけては露胎である。

972の高台は細く，端部は矩形を呈している。高台径5.0㎝である。内底部と畳付部は釉剥ぎが施されている。

973は外面を直に削り出した安定した高台で，体部下半から高台にかけて露胎である。内底部は蛇の目釉剥ぎが施されている。高台径は4.4㎝である。内外とも明緑灰色の釉がかかっている。露胎部は灰白色を呈しているが，畳付部と高台内，内底の一部は赤橙色を呈している。

974は高台直径が5.8㎝の台付小型壷である。外面にはオリーブ灰色の釉がかかっており，磁胎は灰白色である。内面は露胎，畳付部は釉剥ぎがされている。

975は香炉で，口唇部が凹み，内面側に張り出す。内面下半は無釉である。

これらは15世紀頃のもので，ほとんど龍泉窯系のものと思われる。

３　白磁（976・977）

白磁は小坏・坏が出土している。

976は口径12㎝の小坏である。底部から内反ぎみに口縁部へ立ちあがる。口縁部は丸みをおびている。やや青みがかかった灰白色の釉がかかっているが，体部下部は露胎となってにぶい橙色を呈している。内底は釉剥ぎがされている。

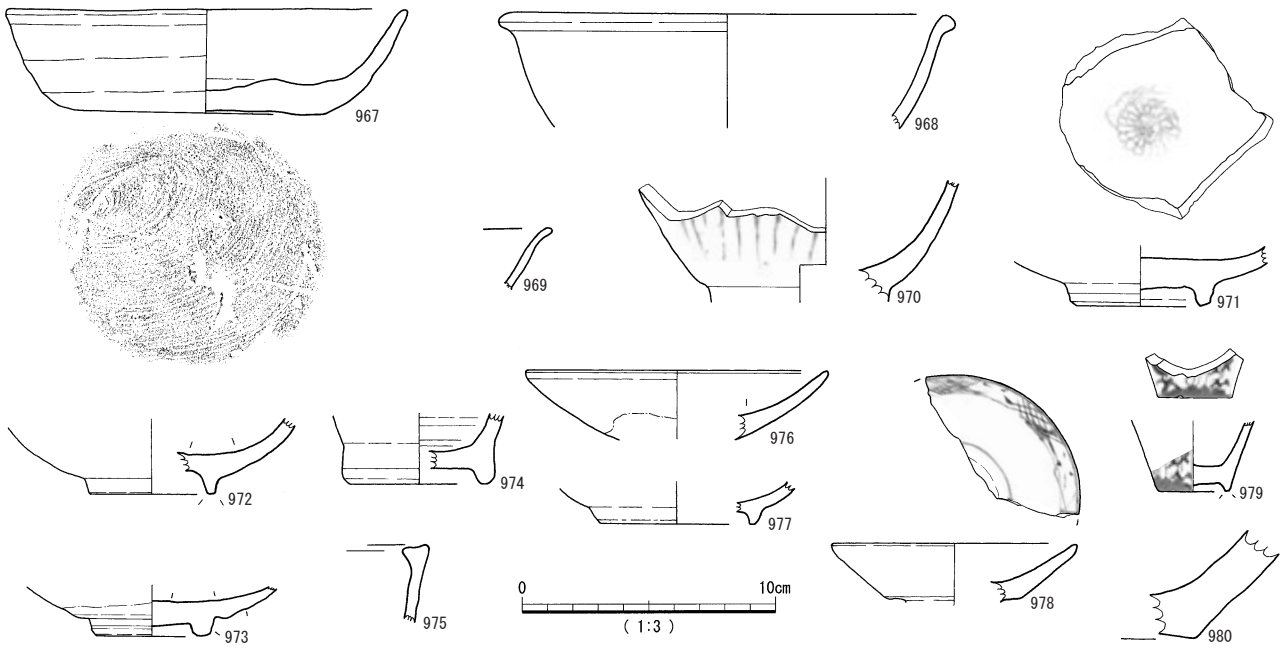
977は高台付き坏である。高台はやや内反ぎみで，直径6.2㎝である。端部は丸みを帯びている。畳付部付近は釉剥ぎされ，内底部に釉切れがみられる。

976は15世紀，977は16世紀頃のものである。

４　染付（978・979）

978は口径9.8㎝の小さい坏で，内面口縁近くに火襷状の斜格子文が，底近くに圏線がある。オリーブ灰の釉がかかっており，外面には釉切れがみられる。

979は高台付きの盃で，外面に草花文が描かれている。高台径は2.8㎝で，高台内に釉切れがある。底は分厚く，高台断面は矩形である。



第134図　中世の出土遺物（１）

外面は黄灰色，内面は灰白色を呈する。

５　須恵質土器（980）

安定した平底の壷である。硬質に焼け，外面は丁寧にナデている。

細かい胎土を用いている。

６　瓦質土器（981～983・985）

捏鉢・鉢・擂鉢などの鉢類がある。

981は口径21.6㎝，底径12.8㎝，高さ6.4㎝の捏鉢で，器高は低く，口唇部は丸みを帯びる。外面には指頭押圧状の揺るやかな凹みが連続する。内面は横方向のナデ調整，底の調整は丁寧である。

灰色を呈し，軟質に焼けている。

982は底部径22㎝の安定した鉢で，底から体部への屈曲は鋭い。胴下部に断面が台形の突帯が貼り付けられ，突帯の先端はくぼんでいる。内外とも丁寧なナデ仕上げで，内面下部には横方向のハケ目がみえる。

外面体部は濃い黒色を呈し，内面と底は黒褐色で，底は擦れている。

983は擂鉢で，６本一単位の摺り目が幅を置いて下から上へ引かれている。985は擂鉢の底部で，下から６本一単位の摺り目が幅広く引かれている。底は丁寧にナデている。

ともに灰白色を呈し，軟質である。

７　土師質土器（984・986）

984は幅広の５条から成る摺り目のある擂鉢の胴下部である。

浅黄橙色を呈し，硬質に焼けている。

986は玉縁状口縁のある鉢である。内弯ぎみの口縁部で，軟質である。内外とも丁寧な横ナデ整形で，軟質に焼けている。

外面口縁から内面は黒褐色，外面下部は白色を呈する。

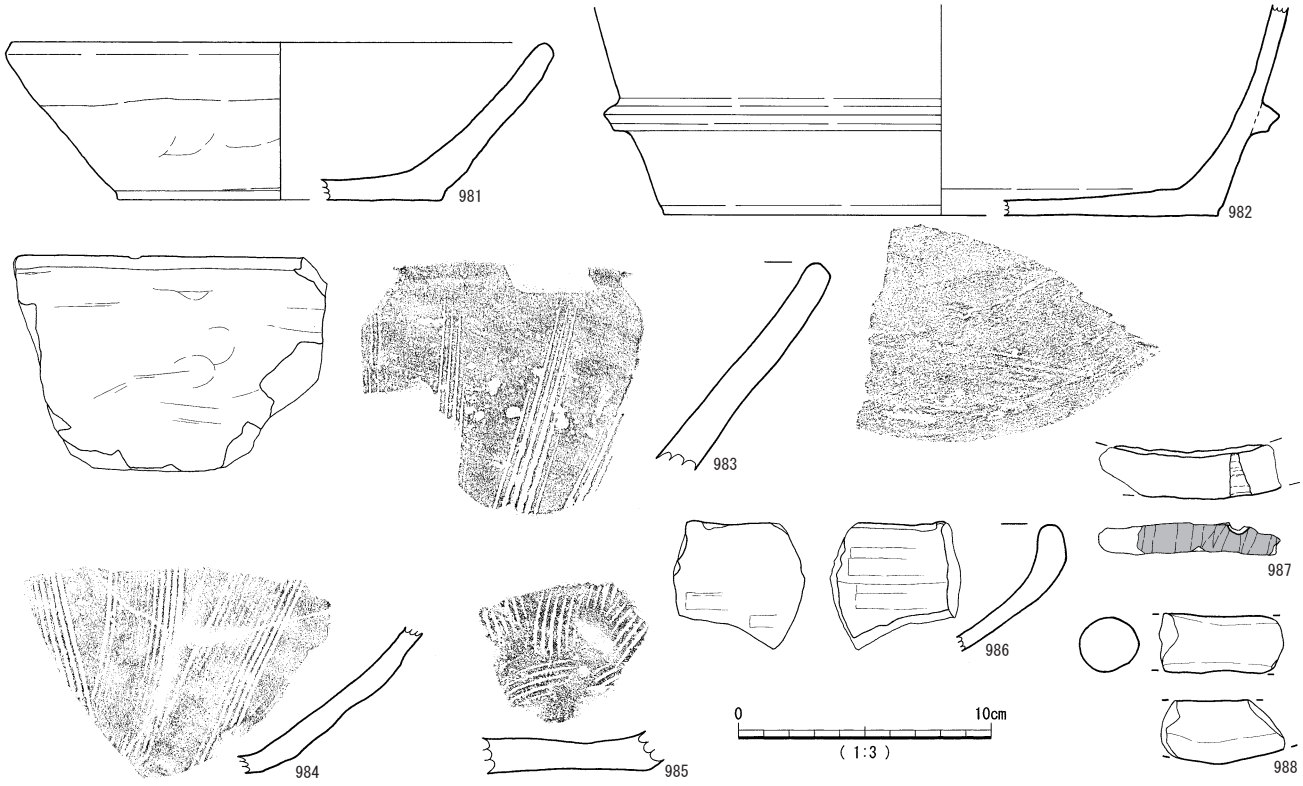
８　石製品（987）

滑石製石鍋を横方向に切った破片で，外面にススが付着している。上部に吊り手孔痕がある。表面は平坦である。

９　土製品（988）

硬質の土師質土製品である。直径2.2㎝の棒状をしており，やや曲がっている。把手あるいは棒状の脚である可能性もある。

白色石・茶色石が多量に含まれ，にぶい橙色を呈する。



第135図　中世の出土遺物（２）

第７節　近世・近代の調査成果

１　概要

近世から近代にかけての遺構はそれぞれの性格から大きく３か所に分かれて検出されている。

Ｃ～Ｅ－26・27区付近に掘立柱建物２棟，土坑３基，溝状遺構１条がある。掘立柱建物は２間×３間の建物である。

Ｅ－26・28区は地元の人に『モイドン』と呼ばれていた区域で，近年まで長期にわたって祭祀場として扱われていた。少しずつ形状や場所を変え石列遺構や土坑などがある。

Ｅ－29・30区には掘立柱建物や石列遺構がある。

Ｄ・Ｅ－35区には石垣と溝状遺構が南北方向に並行している。これは並行していることから同時期に存在した同じ遺構の可能性もある。

２　遺構

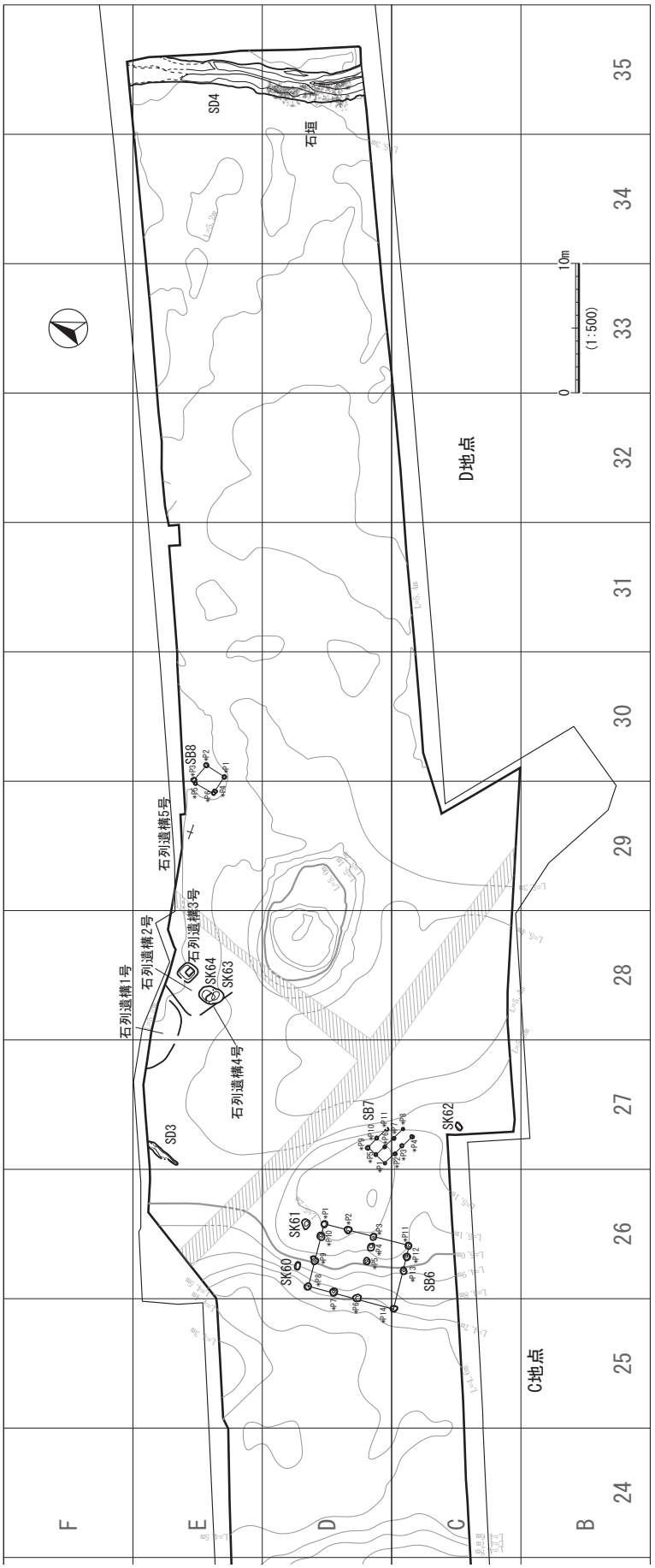
１）掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡６号（第137・138図）

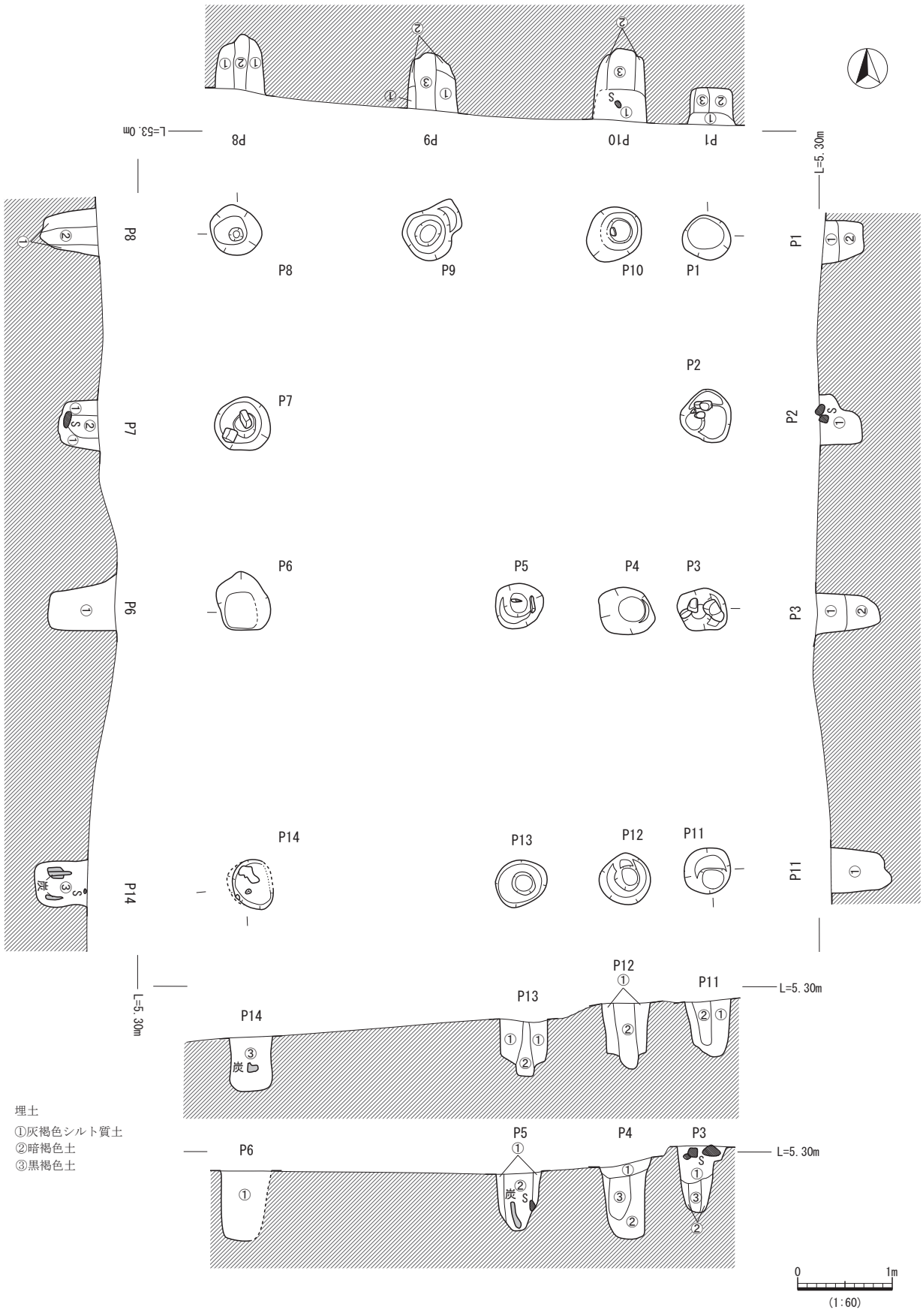
Ｃ・Ｄ－25・26区，Ⅱｃ層で検出された。

不揃いの柱列だが，主軸はＮ１°Ｗのほぼ磁北に近い南北に長い建物である。２間×３間の身舎に東側に１間の庇が付いている。梁行は北が２ｍ＋２ｍで庇が１ｍ，南が2.9ｍ＋1.1ｍで庇が１ｍである。桁行は西が２ｍ＋２ｍ＋３ｍの７ｍ，東が４ｍ＋３ｍの７ｍで北から２本目がない。庇部分は北から２ｍ＋２ｍ＋３ｍの７ｍである。基本的には梁行が２ｍ等間，桁行が２ｍ＋２ｍ＋３ｍの建物で，東に１ｍの庇があるものと思われる。

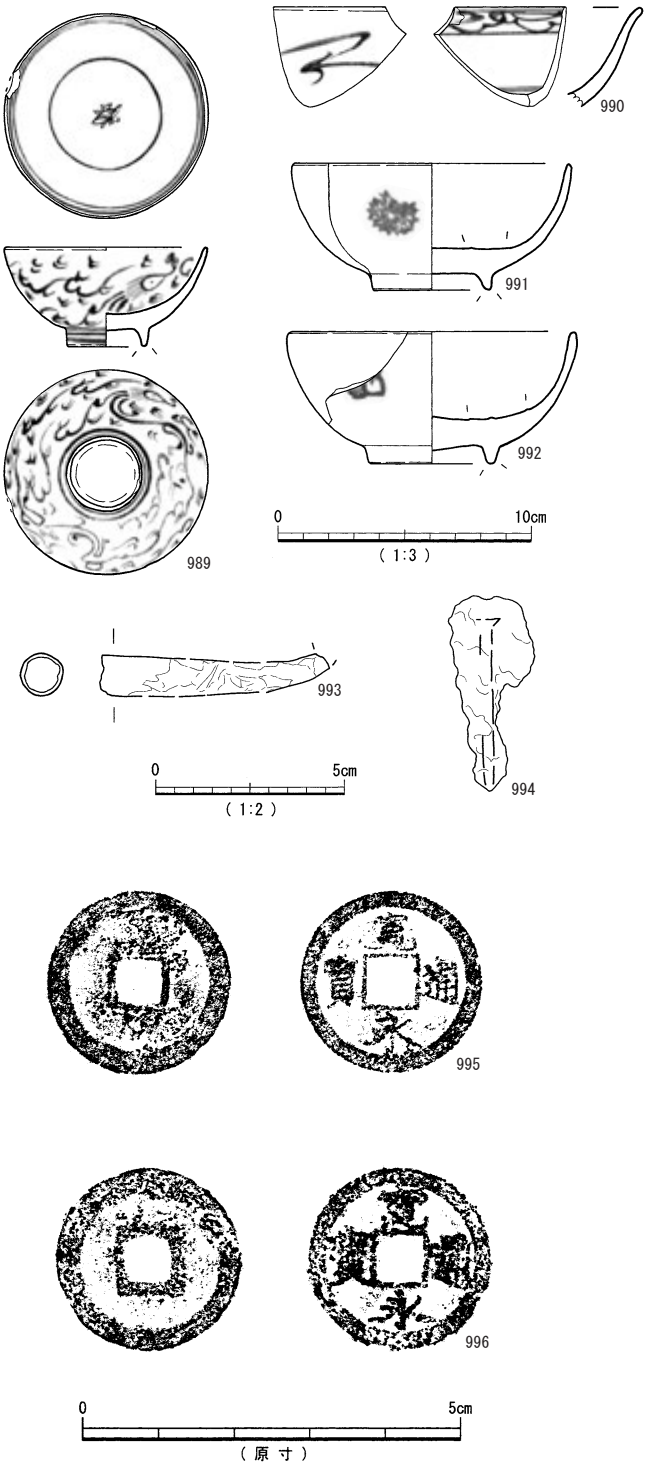
柱列で欠けている柱，柱間の揃わない柱があるが，その理由は不明である。欠けている柱，すなわち梁行の南端，Ｐ12とＰ14の間にあるはずの柱と，桁行のＰ10とＰ４の間にあるはずの柱であるが，他の柱が整然としているのになぜなのか理由がはっきりしない。あとひとつの柱間はＰ６－Ｐ14間とＰ４－Ｐ12間が他の柱間より約１ｍ長い。さらに梁行の南端列とその北の列が，西側と東側の柱間幅が異なる。どのような建造物になるか不明だが，今後検討を要する。



第136図　近世・近代の遺構配置図



第137図　掘立柱建物跡６号



第138図　掘立柱建物跡６号出土の磁器と青銅・鉄製品・古銭

柱穴は50～70㎝の円形をしており，深さも30㎝～50㎝としっかりしている。柱痕跡の残ったものが11本ある。ピット14には，径が約50㎝の柱痕跡があり，炭化材も一部残存している。他の柱穴にも炭や礫の入ったものもある。

図化した資料は，いずれもピット９から出土したものである。

989は，磁器小碗である。口唇部を一部欠くのみで，ほぼ完形である。外面には龍が描かれ，内面は圏線と見込みに虫文が描かれている。二次被熱により，器面がただれて文様がかすれている。990～992は肥前系の碗である。990は端反碗で，内外面とも圏線及び草文が描かれている。

991は見込みの蛇の目釉剥ぎにやや砂質のアルミナが塗布されている。外面には，淡い呉須で菊花文が描かれている。992は見込みの蛇の目釉剥ぎが幅広く，アルミナが厚く塗布されている。また，直径約５㎝の重ね焼きした器の高台の跡がみられる。やや緑色がかったガラス質の透明釉が施釉され，器面は細かく貫入がみられる。外面に，部分的に花文が残存する。

993はキセルの雁首と吸口部分の間である。火皿へ続く部分が細くなって弯曲していることから羅字キセルではないかと思われる。全体的に緑青が付着している。

994は錆に厚くおおわれた鉄製品で，元形が不明だが，釘の可能性がある。995・996は裏は無地の寛永通宝である。

②掘立柱建物跡７号（第139図）

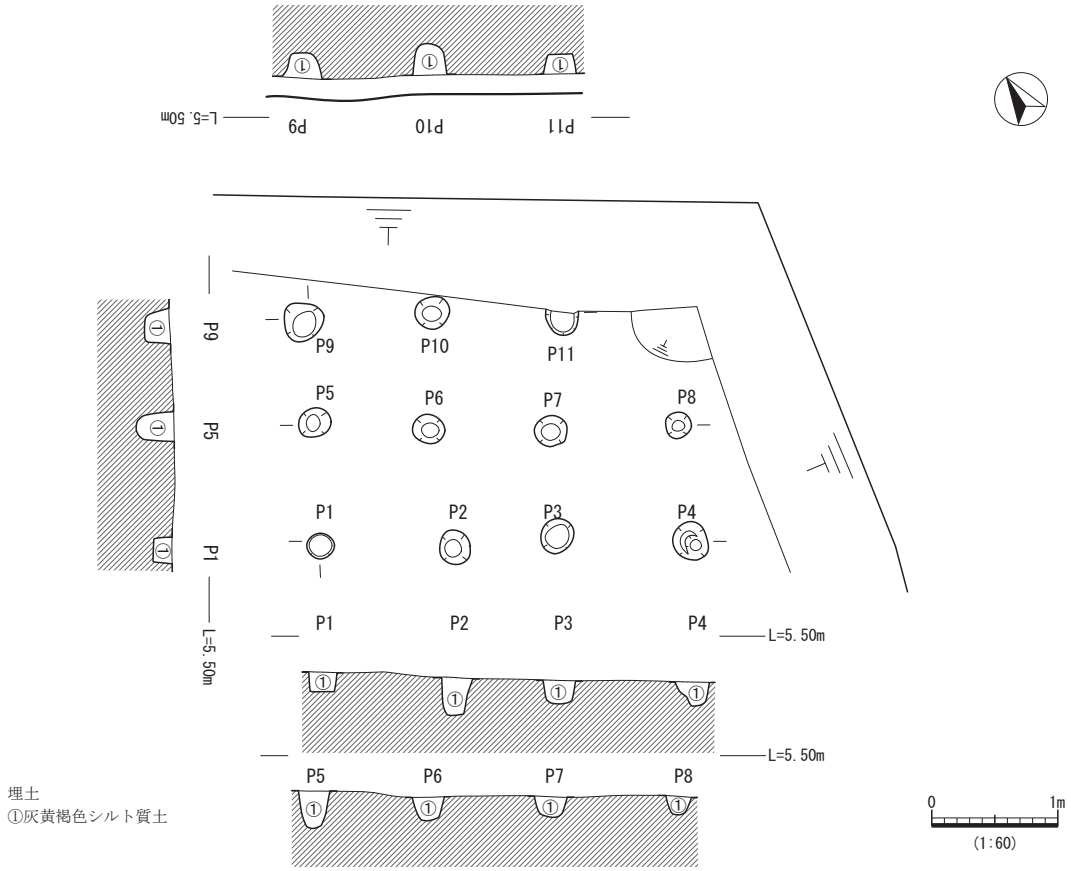
Ｃ・Ｄ－27区，Ⅱc層で検出された。２間×３間の総柱建物で，未調査部分（生活道下）へ延びる可能性もあるが，調査では検出されなかった。

検出された部分は東西に長い長方形を呈し，主軸はＮ30°Ｅである。梁行Ｐ１－Ｐ９＝1.8m，桁行Ｐ１－Ｐ４＝３mである。ピットの形状は円形を呈し，径30㎝前後，深さ20～30㎝である。

③掘立建物跡８号（第140図）

Ｅ－29・30区，Ⅲ層で検出された。古墳時代の竪穴建物跡11号の範囲に収まり，竪穴建物跡11号より新しい。ピットは６基あり，ピット間は平均1.7m程の間隔で，周辺では同様のピットが確認されていないことから，１間×１間の簡易な建物と想定される。主軸はＮ10°Ｅである。埋土の特徴から，ピット１～４とピット５・６の２種に分けられる。ピット５・６は，のちの建て替えによるものと考えられる。

遺物は，ピット２から大型で平面を有する礫が検出され，上面に直径13㎝程，シミ状に変色が見られた。柱根の可能性がある。



第139図　掘立柱建物跡７号

第10表　近世・近代遺構番号新旧対応表

掘立柱建物跡

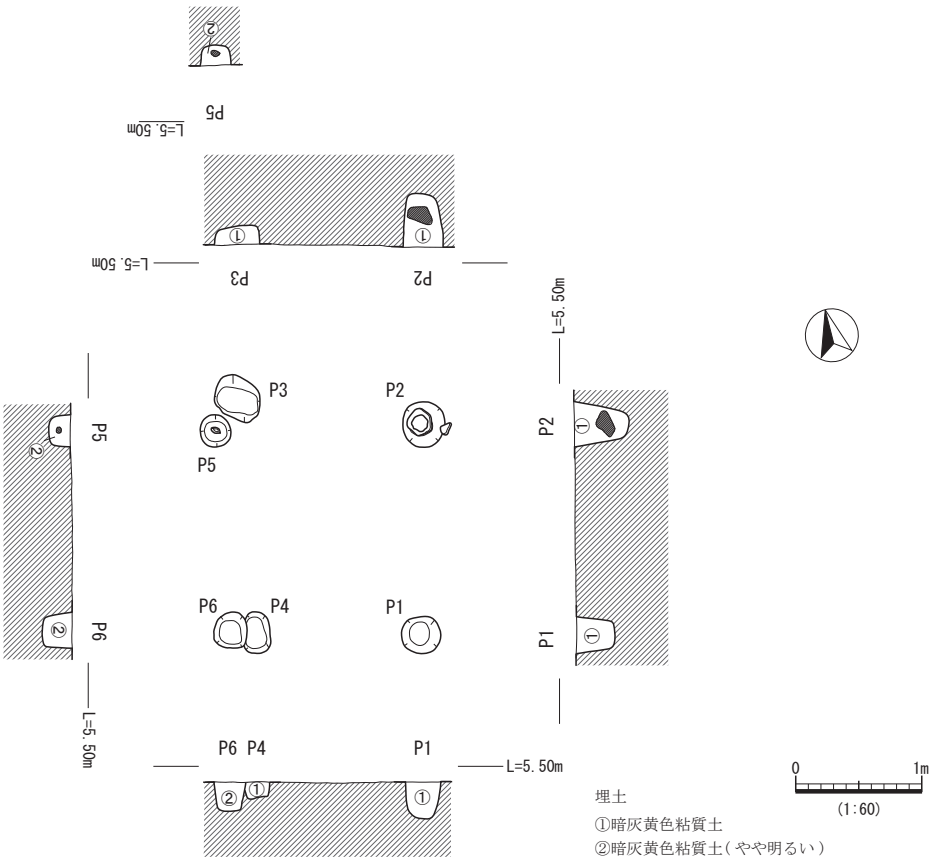
新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB６	SB1	SB７	SB２	SB８	SB９

土坑

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK60	SK６	SK62	SK55	SK64	SK28
SK61	SK７	SK63	SK30	－	－

溝状遺構

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SD３	SD２	SD４	SD６	－	－



第140図　掘立柱建物跡８号

２）土坑

①土坑60号と出土の鈴（第141図）

Ｄ－26区，西方向へゆるやかに下るⅡb層で検出された。南側約１ｍ離れて掘立柱建物跡６号が位置する。平面形は，62㎝×41㎝の東西方向に長い楕円形を呈する。断面形は，深さ約60㎝の胴長の丸底形を呈する。

下位に磁器製の皿，上位に青銅製の鈴が２個並んで出土した。出土状況から，埋め戻し時に礫や磁器は投げ込まれ，鈴は上位近くに埋めた可能性がある。近世と考えられる埋土から染付の碗が出土している。鈴も同時期のものと思われる。碗以外に，径40㎝～50㎝大の自然礫が出土しており，何らかの上部構造が想定される。底面の北側に径40㎝ほどの円形ピットが検出された。

997・998は青銅鈴である。正面形は縦に長いだ円形を呈する。997はほぼ完形だが，998は下半部の一部が欠けている。997は長径3.8㎝，短径2.9㎝で，998は長径3.7㎝，短径3.0㎝とほぼ同じ大きさである。997の鈴口は幅１㎜，長さ2.7㎝で，西端に径0.5㎝の円形の孔がある。998の鈴口はややずれてくっついている。上に円形の帯状環が付いている。997は欠損しており，998は径９㎜で，幅５㎜の帯となる。鈴体の中央付近に両者とも幅0.5㎝の帯状突帯が巡っている。997が16.7ｇ，998が12.0ｇである。997は暗緑灰色，998は緑黒色を呈している。

②土坑61号（第142図）

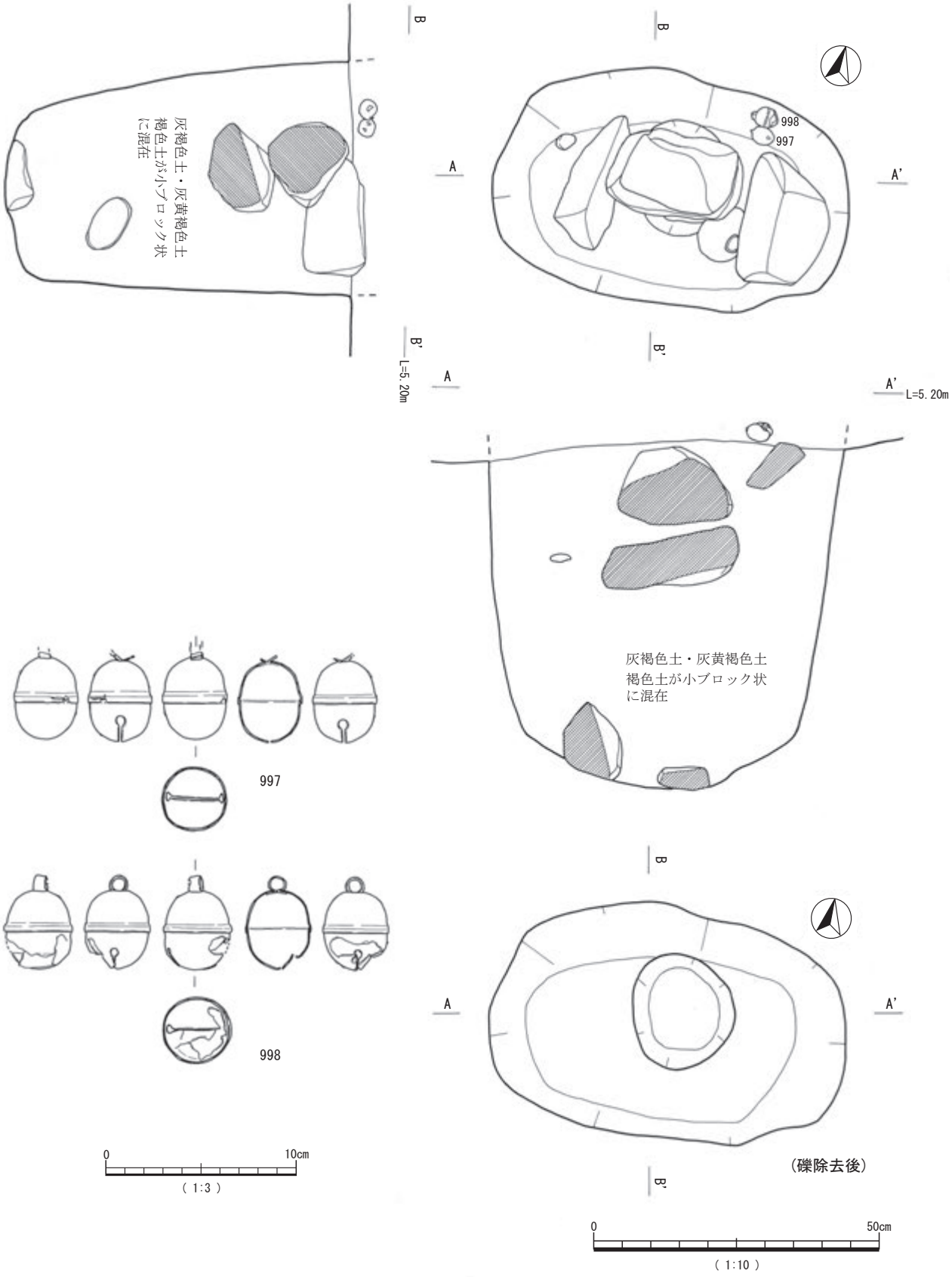
Ｄ－26区，Ⅱc層で検出された。東方向へ向かって上る河岸段丘との傾斜面である。平面形は，径が60～70㎝前後のほぼ円形を呈し，北側の一部は下層確認トレンチにより消失した。断面形は，深さ約70㎝弱の深ナベ形を呈する。深さ約40㎝の明瞭な柱痕跡が残存している。

柱痕跡の下位約10㎝，底面近くに一辺20㎝大の角礫の板石が出土した。

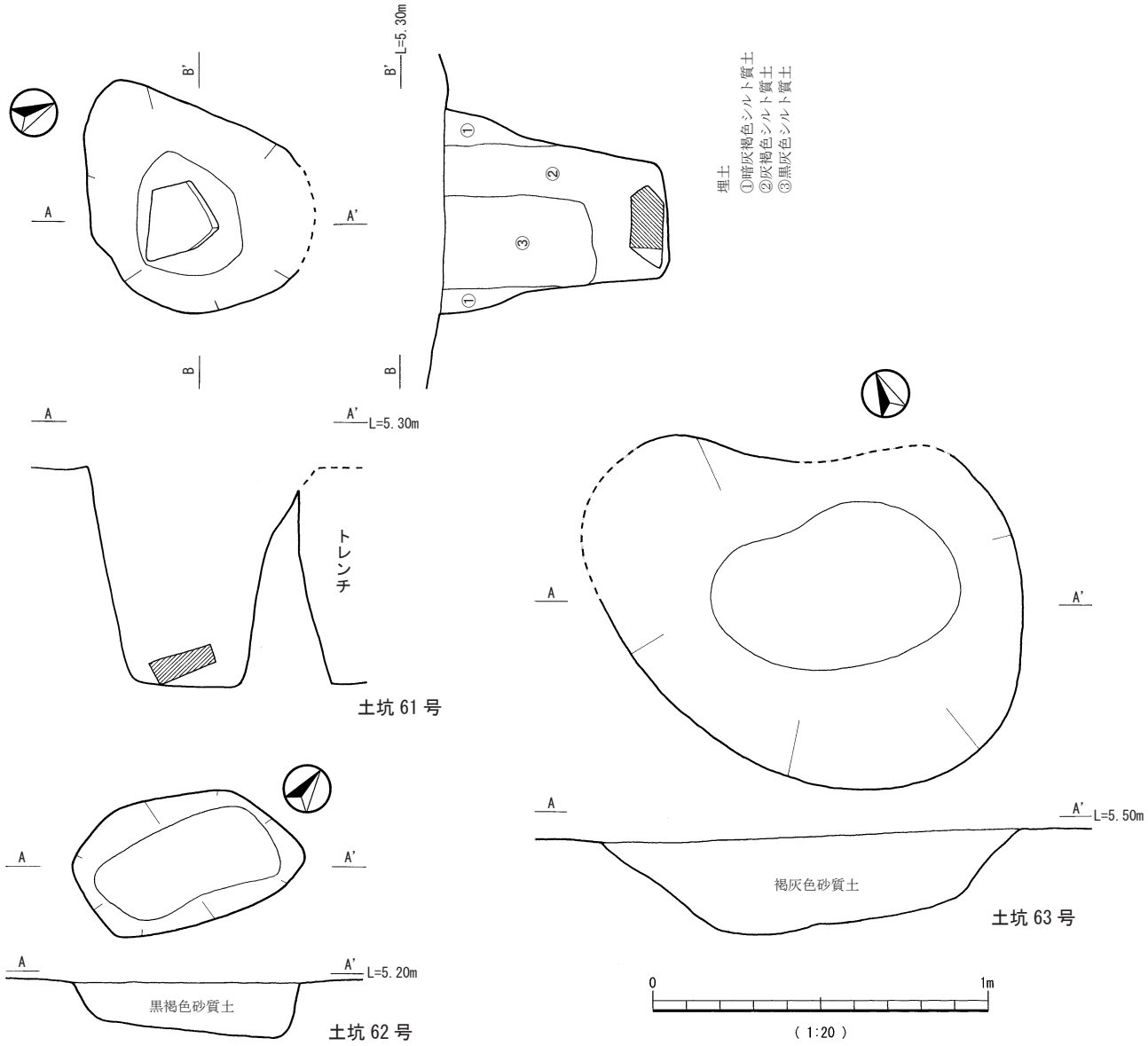
③土坑62号（第142図）

Ｃ－27区，Ⅱc－２層で検出された。平面形は，約40㎝×70㎝の長楕円形を呈する。断面形は，西側から東側へと深くなり平底のナベ形を呈する。

埋土から陶器片が出土している。



第141図　土坑60号と出土の鈴



第142図　土坑61号～63号

④土坑63号（第142図）

Ｅ－28区，石列遺構２号の下位で検出された。土坑64号の南側を掘り込むように検出された。平面形は，部分的に消失部分があるため不明な所もあるが，約１ｍ×1.4ｍの不定形な円形を呈する。断面形は，深さ30㎝弱で，深皿状を呈する。

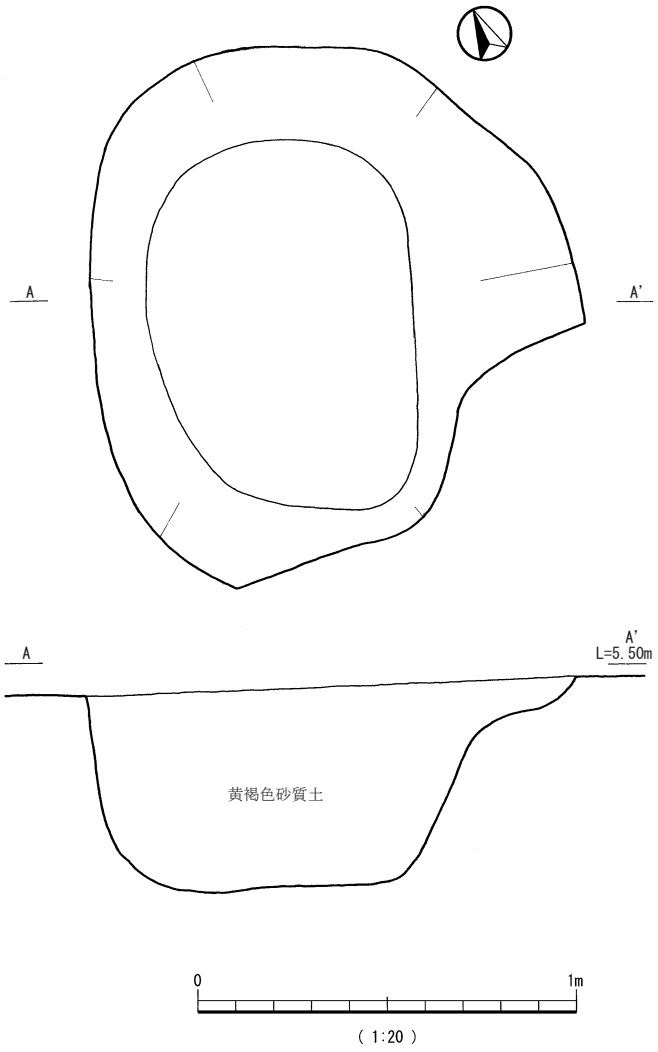
⑤土坑64号（第143図）

Ｅ－28区，石列遺構２号の下位より検出された。南側は土坑63号により消失している。平面形は，約1.4ｍ×1.3ｍのほぼ円形を呈する。断面形は，深さ50㎝で，ボウル状に丸底を呈する。埋土も石列遺構２号と似る。

３）祭祀遺構（第144図）

地元の人達に「ウッガンサー」と呼ばれ，信仰の対象として大切に守られてきた場所から発見された。巨木を中心に塚状の盛り上がりが２か所見られたが，全体が竹林や雑木林に覆われ，厚く積もった表土により，周囲を取り囲むような石列は確認できなかった。

列石は，ゴミ捨てのため部分的に攪乱が見られるが，畑との境界から石列遺構本体を含む全体に，径５㎝前後の小石が敷き詰めたように広がっていた。石は自然礫が大部分を占め，10㎝を超えるものや礫石器の破損品，石臼の破片なども含まれていた。一部南側からの進入路らしき場所に，径３㎝前後の玉石のようなものが敷き詰められた箇所が確認された。



第143図　土坑64号

石列の形状により，４つの遺構に分けて調査を進めた。西側の半円形に並べられた石列を石列遺構１号とした。東側の巨木の根を囲むように方形に並べられた石列を石列遺構２号とし，その下の石列を石列遺構３号とした。石列遺構２号の南側の巨石が並んだ石列を石列遺構４号とした。

検出面から陶磁器片，古銭，石臼，現代の陶磁器類などが，埋土中から染付，煙管などが出土した。

また，Ｅ－29区の石列は，石列遺構５号とした。

①石列遺構１号（第145図）

表土に埋もれて巨木を取り囲むような円形や方形の石列を確認した。東側は攪乱により消失していた。２号よりやや大きい40～50㎝大の自然礫が主流である。

径約3.5ｍの円形を呈し，面積約10㎡である。北側は用地外へ延びており，１/３ほど検出された。

遺物は1009，1072，1073，1074，1075などが出土した。

②石列遺構２号（第146図）

表土に埋もれて巨木を取り囲むような方形の石列を確認した。大きさは20～30㎝大の自然礫が大部分を占め，部分的に残っている。主軸は東西方向，部分的に抜けているが，約３×２ｍの方形を呈し，面積約６㎡である。

遺物は，1006，1008などが出土した。

③石列遺構３号（第147図）

石列遺構２号の下で石列を確認した。上部のものより一回り小さく，南西部分は確認されなかった。下部石列内は土坑状に掘り込まれており，平面形は，石組遺構全体に沿った向きで，一辺が約1.3ｍのほぼ正方形を呈する。西側の一部は，巨木の樹痕により破壊されている。断面形は，深さ約30㎝で，レンズ状を呈している。検出面の中央部付近に炭化物の集中が見られた。中央部付近の埋土中に，小礫（５～10㎝大）を平坦に敷き詰めたような部分が検出された。

遺物は，小礫の上下を含め，999，1011，1012など石製品・磁器片・陶片・煙管等が出土した。

④石列遺構４号（第148図）

巨木の根の南側で石列を確認した。50㎝を超える巨石が直線上に並んでいる。略東西方向に一辺が約４ｍである。さらに，南側に1.6ｍほど石列が続く痕跡がみられる。また，西側にも延びる可能性がある。北側の巨木の根と南側の石列の間には，５㎝前後の小礫が覆うように敷かれており，部分的に１㎝大の小石を敷き詰めた部分もみられた。

⑤石列遺構５号（第149図）

Ｅ－29区の土坑58号（古代）の北側に接して検出された。偏平な円礫を底面を揃えて直線状に配置してあるが，それぞれに隙間があり，組んであるようには考えられない。長さが約１ｍである。

⑥祭祀遺構出土の遺物と石製品・青銅製品・古銭（第150図）（1000～1014）

祭祀遺構は最近まで森となっていたため，現代のごみ捨て場にもなっていた。そのため現代のものも多く含まれていた。ここでは主なものを紹介する。

999は，ほぼ半割れの形状を留めた茶臼である。

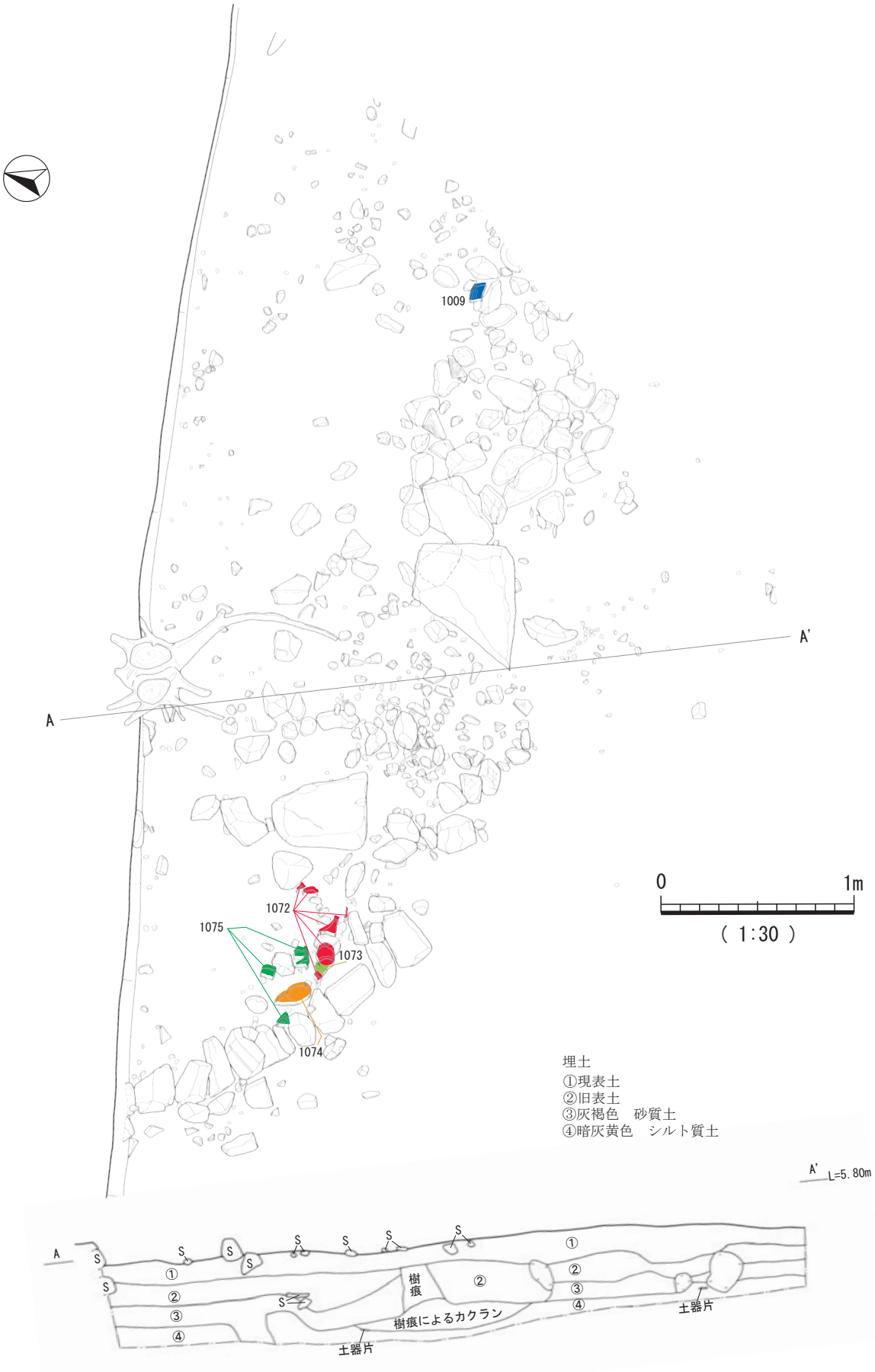
1000は，皿である。内面に圏線及び連点文が描かれ，見込みの蛇の目釉剥ぎにはアルミナが塗布されている。呉須の色調が鮮やかなため，近代以降の物と考えられる。

1001～1006は，碗である。

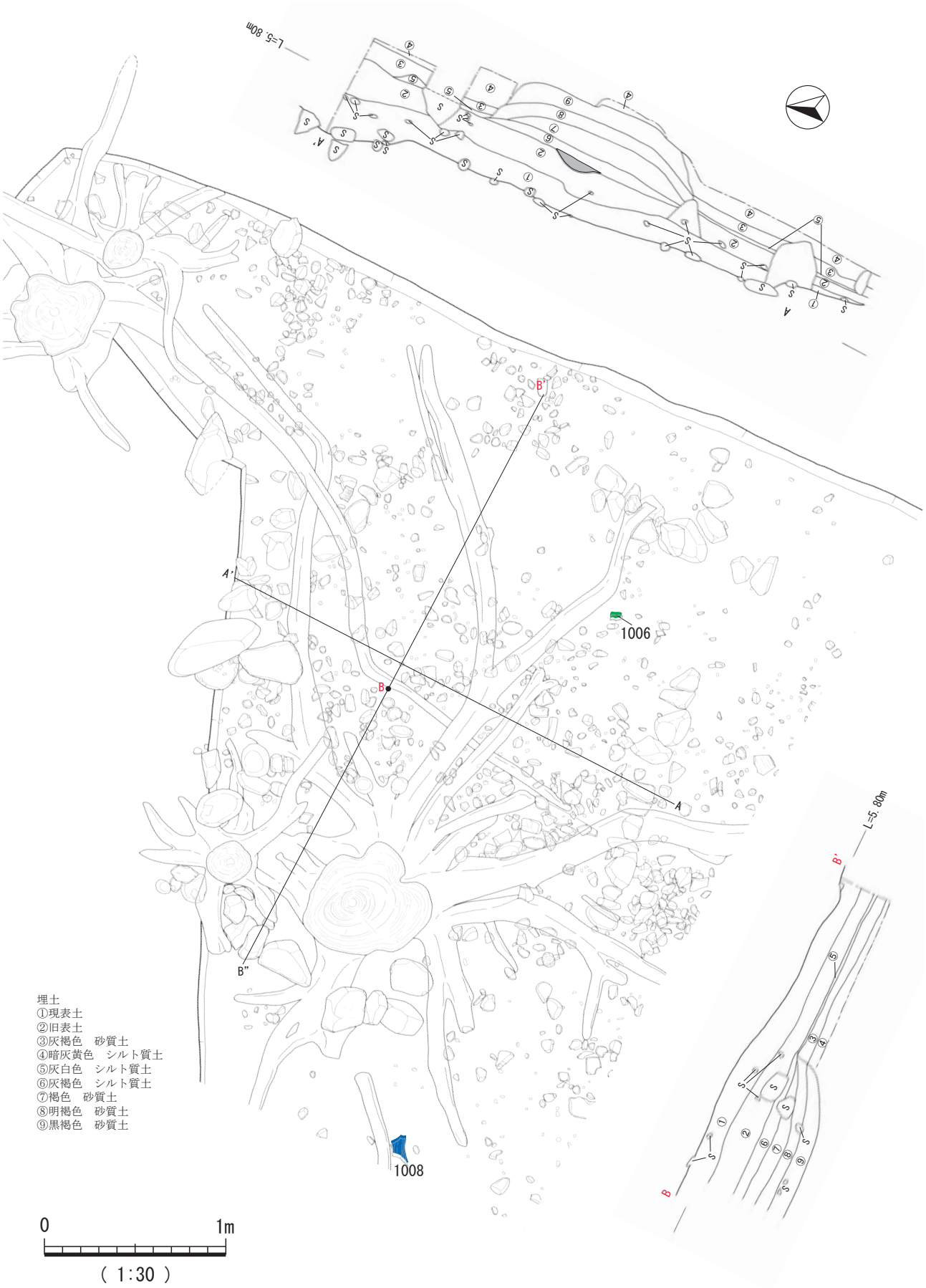
1001は，肥前系陶器である。削り出しによりやや高さのある高台が作出され，高台付近は露胎している。見込みはハケ状の工具で掻き取るように，蛇の目釉剥ぎが施



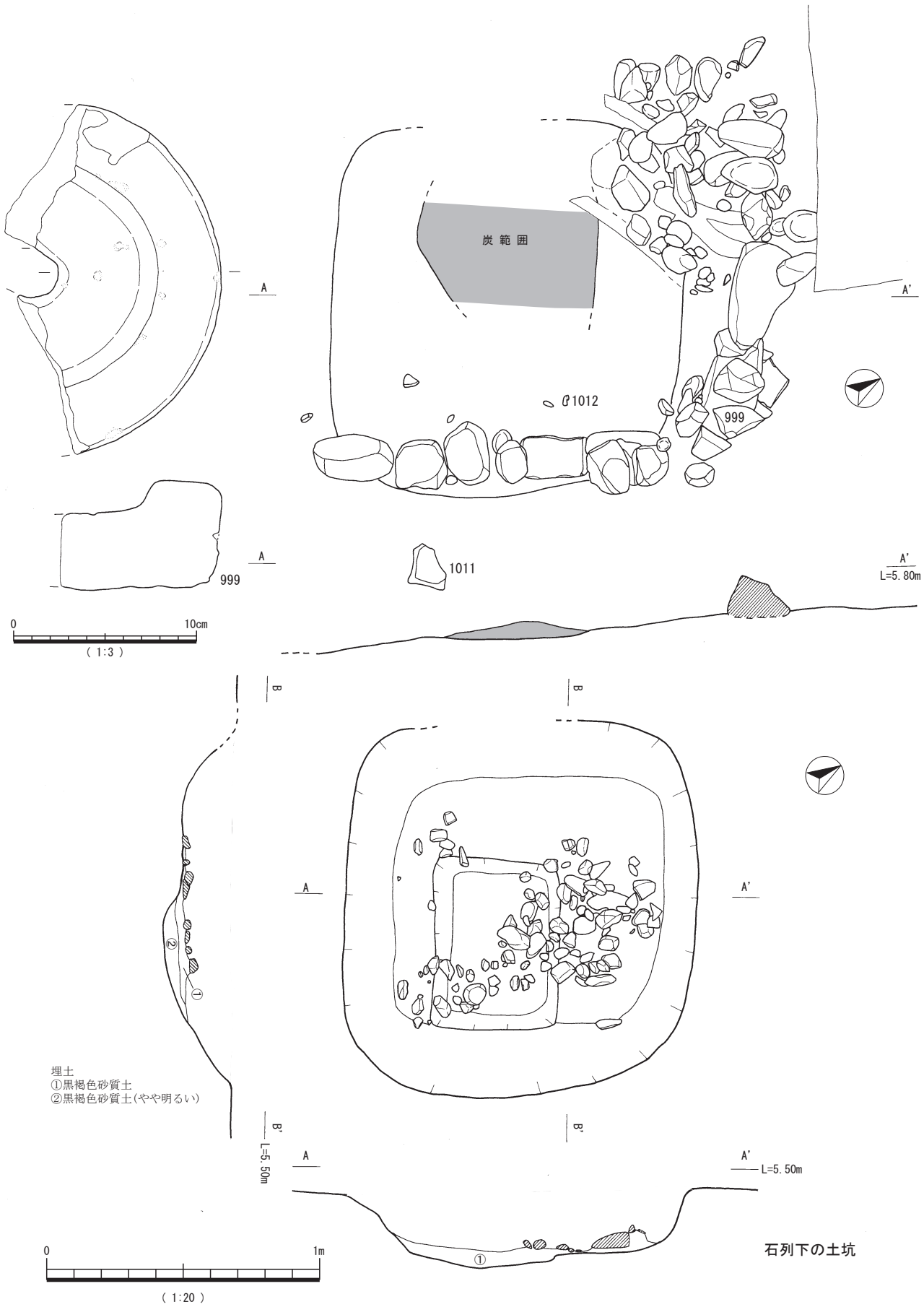
第144図　祭祀遺構



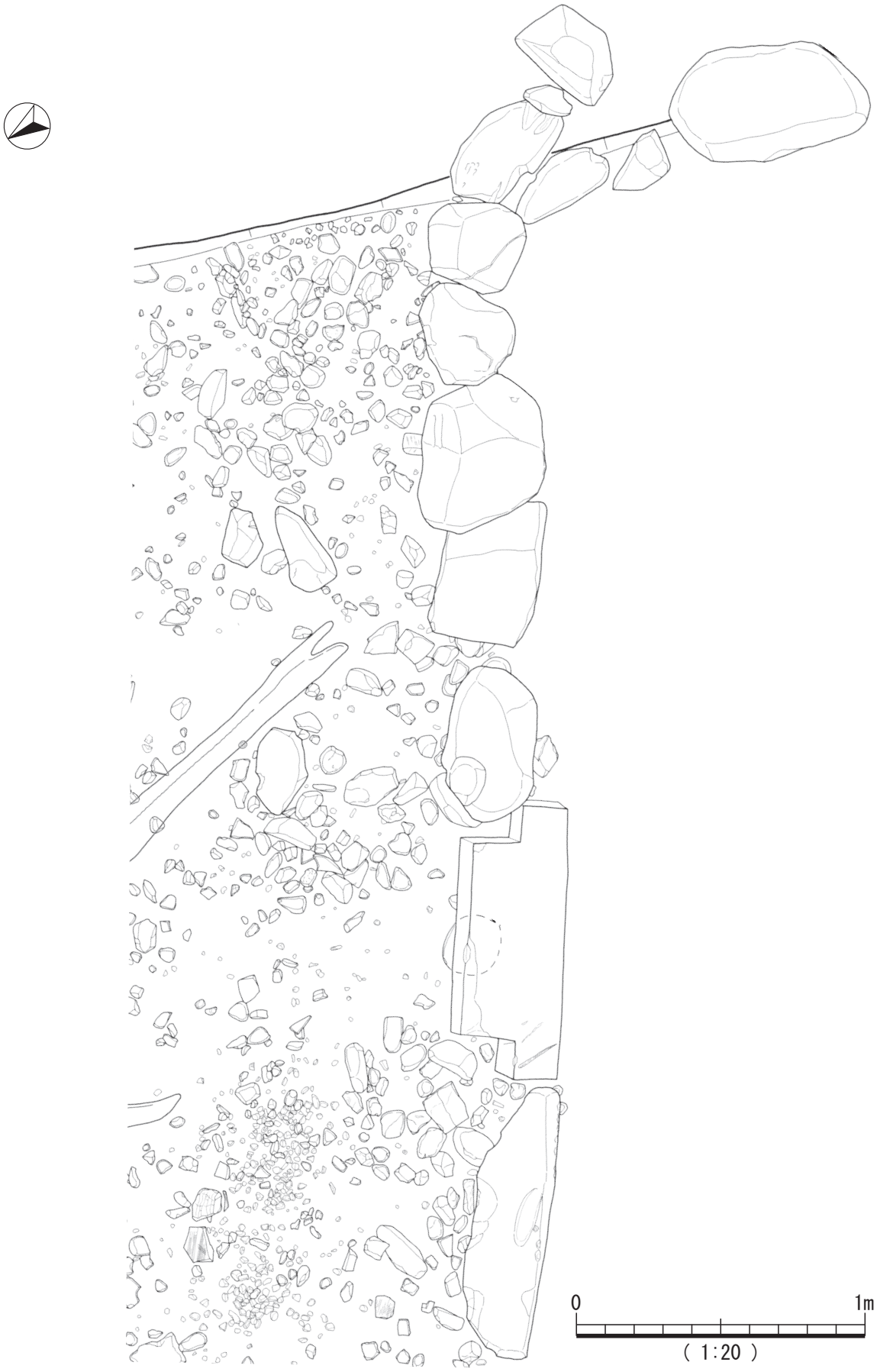
第145図　石列遺構１号



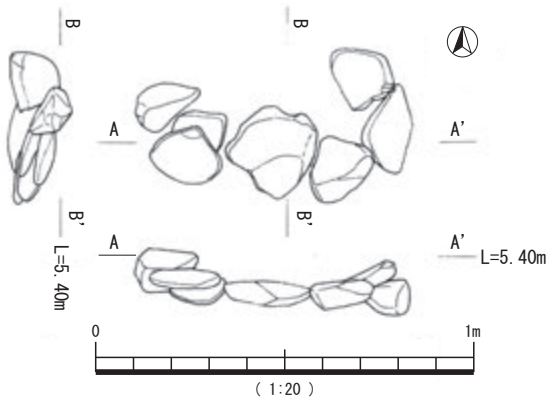
第146図　石列遺構２号



第147図　石列遺構３号と出土の石製品



第148図　石列遺構４号



第149図　石列遺構５号

されている。

1002はいわゆる「くらわんか手」で，器壁が厚く重い。内面は，圏線と形の崩れた五弁花文が施されている。外面には大ぶりの文様が描かれているが，欠損し詳細は不明である。また，高台裏には銘が描かれている。1003は，黒みの強い呉須で外面に梅文を描いている。見込みは蛇の目釉剥ぎで，重ね焼きした器の高台の跡（直径約４㎝）が残る。高台裏は，中央部がわずかに凹む。1004は外面に草花文，口縁部内面に圏線と弧文を淡い呉須で描いている。1005は径に対し器高が低い碗で，外面には格子文と亀甲文が組み合わせて描かれている。1006は龍門司系の陶器で，高台は削り出しにより屈曲部に明瞭な稜が作出されている。内面はほぼ無釉で，被熱している。また，内面の露胎した部分に，しぶき状に自然釉が付いている。形状や施釉の特徴から，線香立てと考えられる。

1007は，苗代川系の山茶家と考えられる。口唇部は内傾し，外面の体部下半及び内面は無釉である。また，外面にはススが付着している。

1008は小型の甕で，薄手である。口縁部は丸みを帯び，肩部に１条の沈線が巡る。17世紀前半に比定され，古手の薩摩焼の可能性がある。

1009・1010は摺鉢である。1009は，18世紀前半に比定される苗代川系である。内面の摺り目は上部しか残存しないが，細くやや間隔が開く。口唇部は露胎である。1010は高台付である。外面は無釉で，焼締状の暗赤褐色を呈する，外形は削り出しにより作出されている。摺り目は非常に密で，隙間なく施されている。

1011は大型の甕で，内外面とも淡黄褐色の釉薬が全面に施釉されている。口縁部は内外面とも張り出しを持ち，両側に折り曲げるようにして作出されている。胎土は，マーブル状を呈している。産地は不明である。

1012はキセルの雁首である。火受皿の直径1.6㎝で軸と直に曲がっている。

1013・1014は寛永通宝で，裏は無文字である。

４）溝状遺構

２か所に溝状遺構がある。

①溝状遺構３号（第151図）

Ｅ－27区，Ⅱc層で検出された。現代の削平により上位は消失していた。北側は調査区外へ延び，南側の一部は消失していた。検出された全長は約280㎝，幅約15㎝～60㎝，検出面からの深さは約20㎝弱である。断面形は，段を持ったナベ形で，埋土は２つに分かれる。

②溝状遺構４号（第151図～第153図）

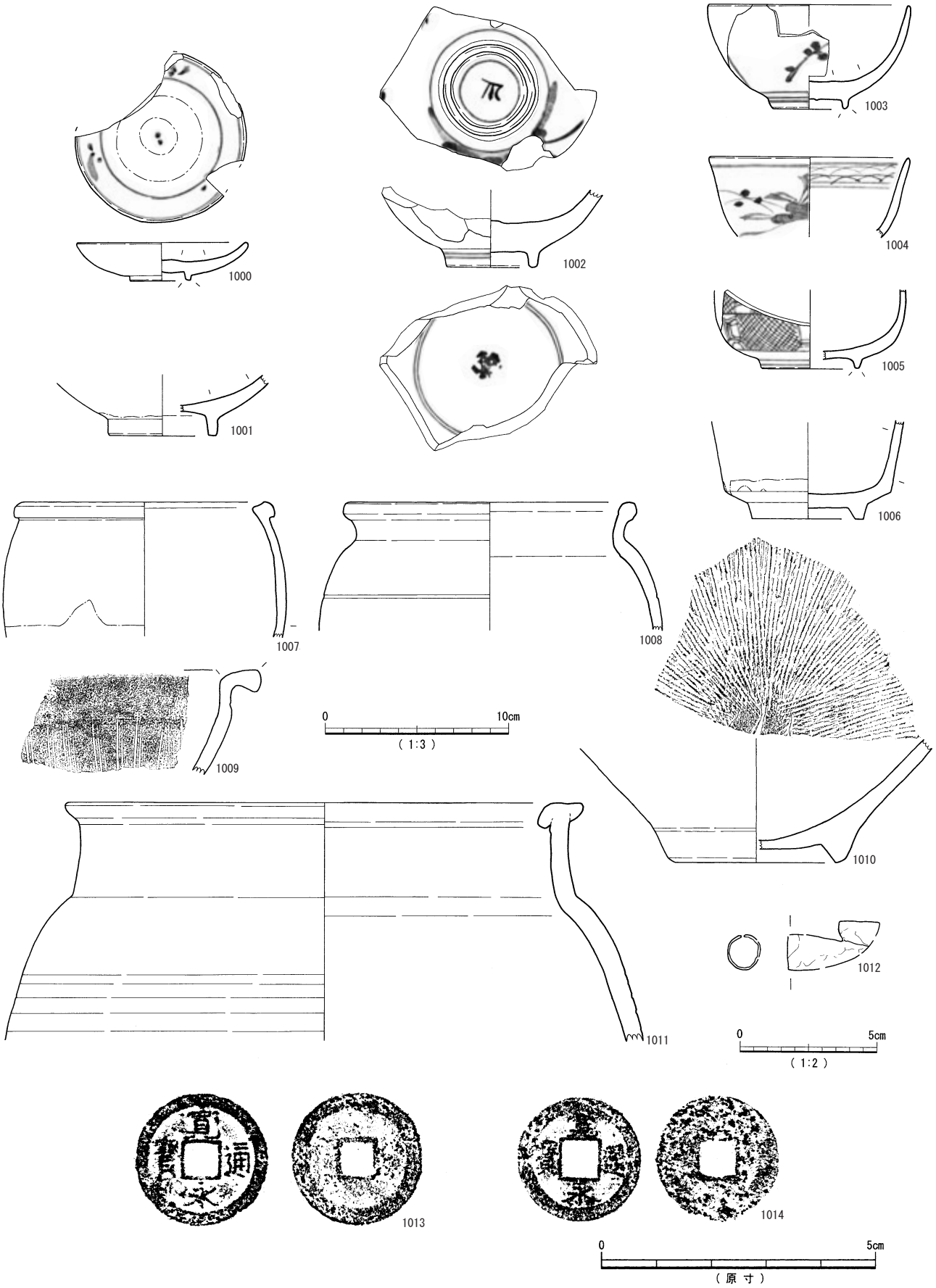
Ｄ～Ｆ－35区，Ｄ－Ⅲ層で検出された。10㎝～20㎝大の扁平な円礫を立てて並べた石垣状の構造をなしている石組が溝の南側に，北側にももう一群見られる。溝は，略南北方向を北から南へ流れていたと考えられる。北方向は調査区外へ，一部消失している。検出された全長は，約18ｍ，幅約1.6ｍ～２ｍ，検出面からの深さは，約40㎝～60㎝程である。断面形は，ナベ形である。

多くの陶磁器や鉄製品などが出土している。

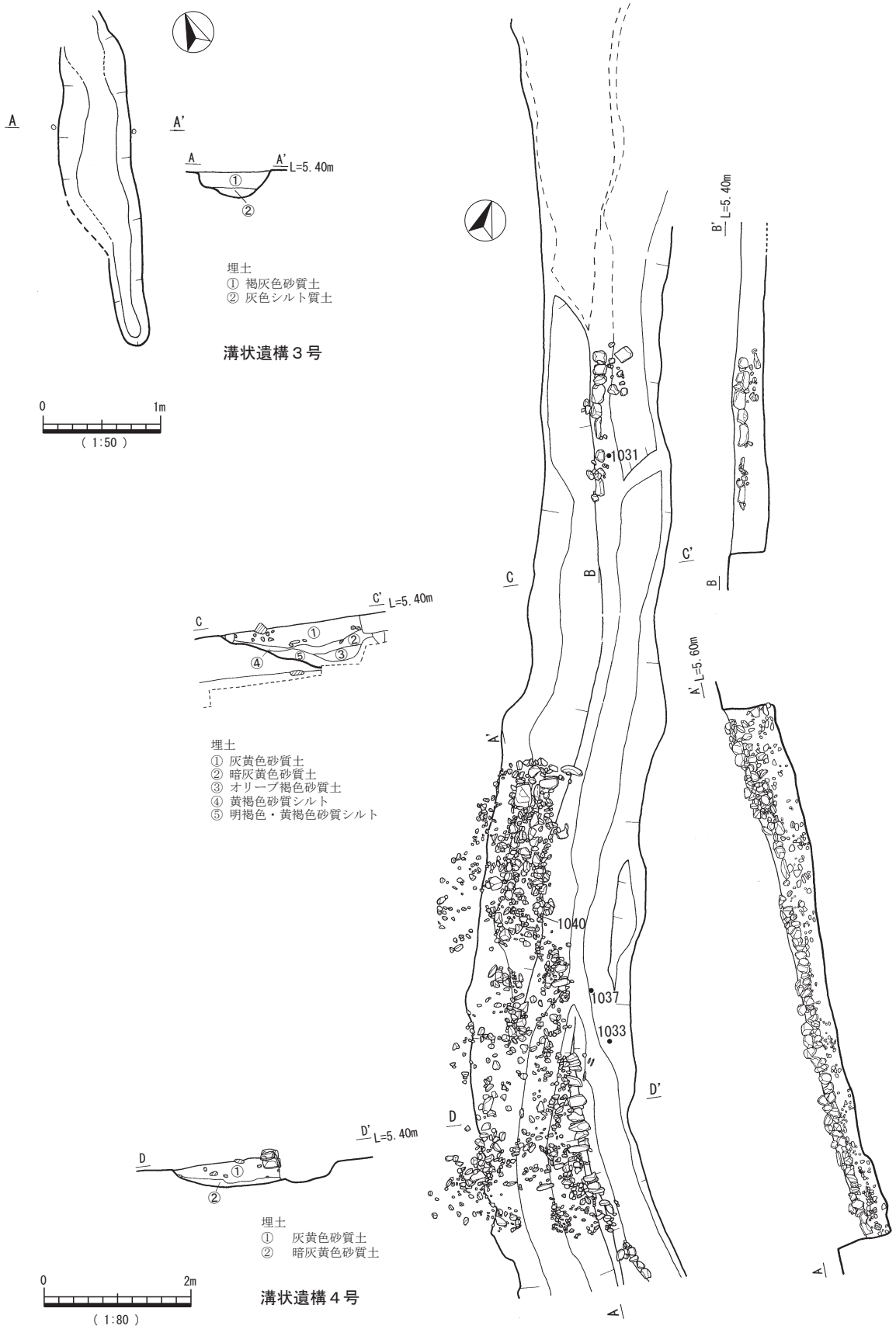
1015～1017は，磁器の皿である。1015は，肥前系の大型の輪花皿である。畳付は露胎である。外面は無紋で，内面には呉須で龍と思われる文様が全面に描かれている。1016は口唇部を折り返して成形し，断面に楕円形の空隙がある。見込みは蛇の目釉剥ぎで，蛇の目高台である。外面は無文で，内面には格子文と圏線が描かれている。1017は，小型の輪花皿である。蛇の目高台で，畳付から露胎である。外面は無文で，内面には扇文や梅文などが描かれている。また，見込みに４か所のハリ痕が残存する。

1018～1020は，磁器碗である。1018は見込みに蛇の目釉剥ぎが施され，外面には圏線及び梅文が描かれている。1019は，外面に圏線及び草花文が描かれている。見込みの蛇の目釉剥ぎには重ね焼きの高台の痕跡が残っており，直径4.4㎝を測る。また，畳付きは無釉で，アルミナが付着している。1020は径4.2㎝の細い高台をもっており，外面に雲文風の絵が描かれている。墨付部と内底部の広い範囲に釉剥ぎが行われる。

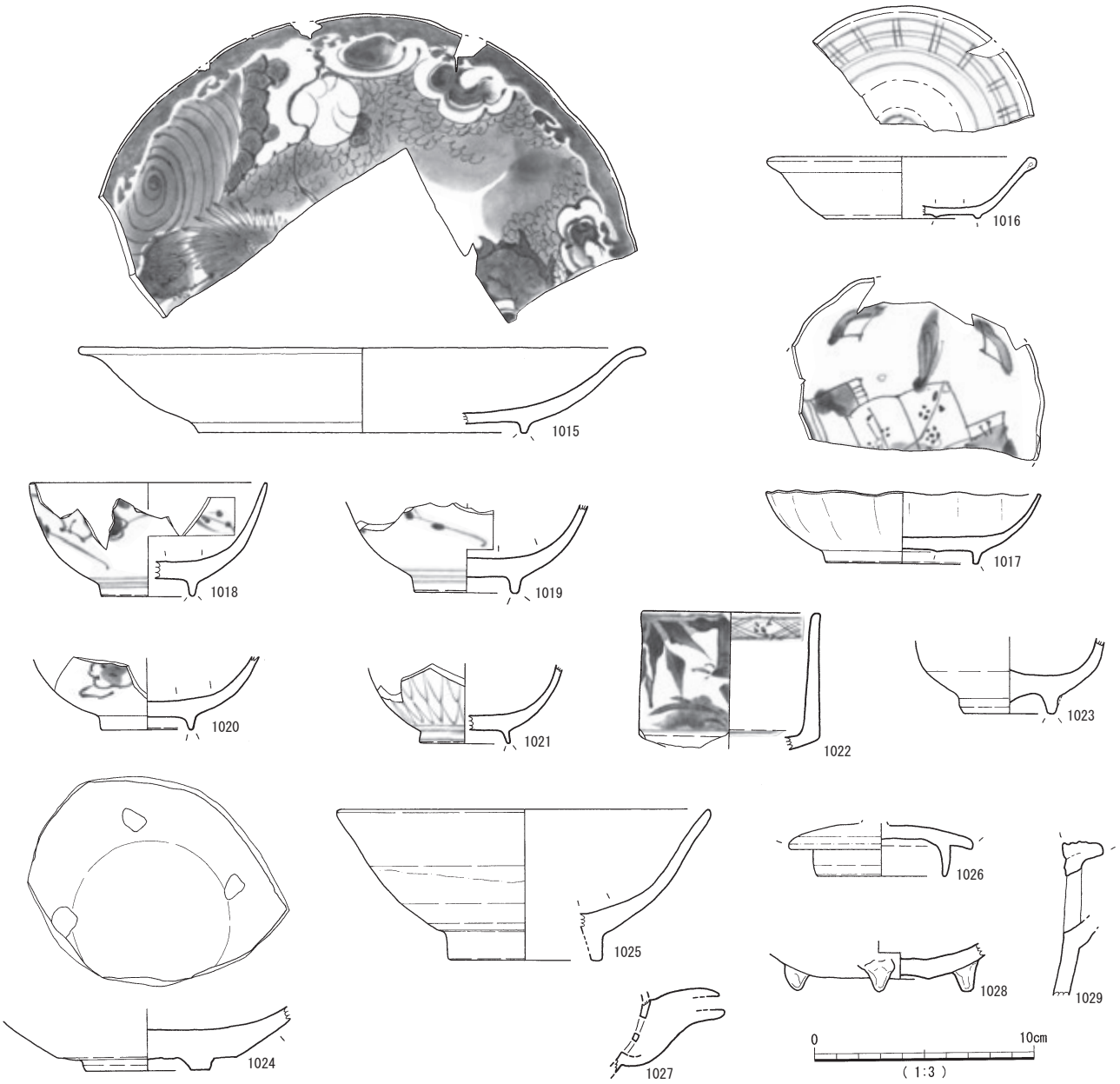
1021・1023～1025は陶器碗である。1021は灰黄色を呈する素地の陶器で，外面に圏線と波状文が描かれている。高台は細い。1023は内外面とも施釉され，畳付のみ露胎するが，部分的に釉薬が残存する。外面下半は釉薬が厚く，高台の付け根部分に溜まっている。内面及び高台裏は中心が張り出す。1024は外面状版及び内面に淡い緑色釉がかかっているが，外面下半は無釉である。高台脇は削り出しでシャープな稜があり，高台裏は渦巻き状である。また，見込みに３か所の粗い砂目跡が残存する。1023・1024は，唐津焼と考えられる。1025は，素地が赤褐色を呈し，硬質である。釉薬は白濁しており，外面下半は無釉で，見込みは蛇の目釉剥ぎである。



第150図　祭祀遺構出土の遺物と青銅製品・古銭



第151図　溝状遺構３号・４号の平面図・断面図



第152図　溝状遺構４号の出土の陶磁器

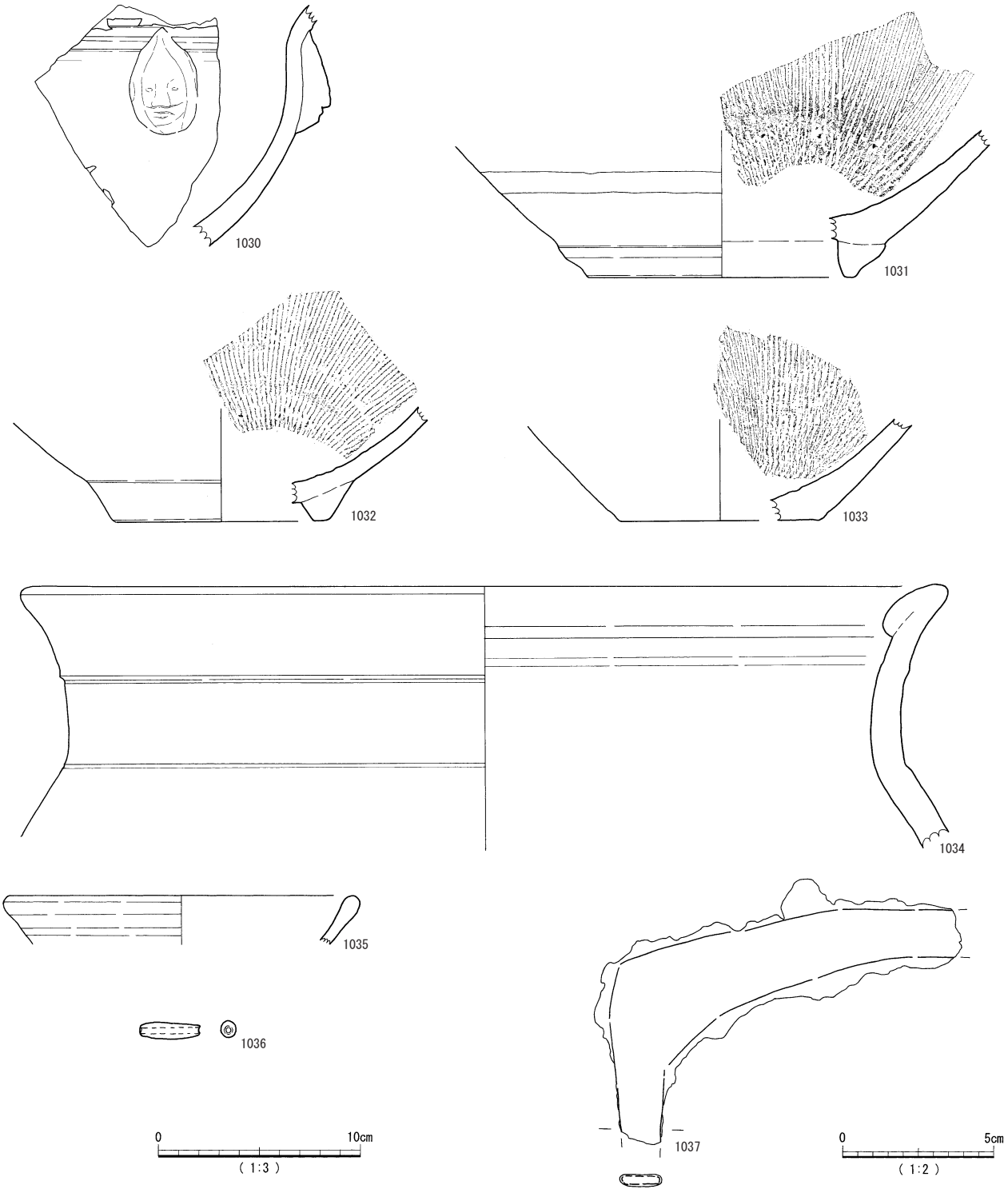
1022は筒碗である。内面には四方襷文と見込みに圏線，外面には草花文が描かれている。肥前系と考えられる。

1026～1028は土瓶である。1026は蓋でつまみは欠損している。鍔の中位まで施釉され，下半及び内面は無釉である。1027は注口である。内面には３か所の穿孔があり，釉薬は暗褐色の釉薬が厚手に施釉されている。1028は底部である。脚が１か所のみ残存しており，本来は３か所付いていたと考えられる。外面は無釉であるが，内面は斑状の暗緑褐色釉が施釉されている。

1029・1030は鉢である。1029は片口である。注口部は欠損し，一部しか残存しない。内外面とも斑状の暗緑色釉が施釉され，口唇部のみ釉が掻き取られている。1030は人面と思われる貼り付けがある。幕末～明治と考えられる。1026～1030は，苗代川系である。

1031～1033は摺鉢である。1031・1032は，高台が付くタイプである。1031は1032より高台が高く，外面側がやや凹む。内面には帯状の粗い砂目がみられ，摺目は1032・1033よりも幅広である。内外面とも薄い淡白色釉がかかっており，自然釉の可能性もある。1032は内面及び高台外面に帯状の砂目痕が付くもので，粘土紐状または輪状に砂目を挟んで重ね焼きする物と想定される。内外面とも無釉である。1033は底面が平坦で，ヘラ切り状である。内面の摺目は細かく，底部付近は複数が切り合っている。内外面とも無釉である。

1034は，薩摩焼の大甕である。口縁部は内側に折り返して作出され，口唇部には幅広で方形の土目跡が残る。



第153図　溝状遺構４号の出土の遺物

素地には５㎜大の赤褐色礫を疎らに含み，マーブル状を呈する。

1035は，土師質土器埦の口縁部片である。焼成は良好で，硬質である。

1036は小型の管状土錘である。完形で，胎土は赤色を呈し，軟質である。

1037は鉄製鎌である。刃部先端と柄部を欠いている。刃部は上部が柄部から強く曲がって曲線状となり，先端に向かって狭くなっている。

５）石垣（第154図）

Ｄ－35区で検出された。南北方向に幅２ｍほどの円礫

群が約７ｍにわたって南北方向に列状に並ぶ構造である。溝状遺構４号が重複し，埋土関係から，本来埋まっていた石垣の基礎部分と考えられる。短軸側を正面として，10～20㎝大の扁平な円礫を縦に並べ，石垣状の構造をなしている。石積の構造は中央部～南側は顕著であるが，北側は崩れてほぼ原形はとどめていない。Ｅ－35区にも長さ２ｍにわたって連続する円礫列がみられ，続き部分と思われる。東側の面が揃っている。

石の間からは，陶磁器類が多く出土し，土器，須恵器大甕片も出土している。

1038・1039は磁器碗である。

1038は薄い暗茶褐色の釉薬が内外面とも施釉され，畳付のみ露胎する。硬質で，焼成も良好である。1039は蛇の目釉剥ぎで，外面には草花文が描かれている。畳付きは露胎し，重ね焼き時の砂が付着している。

1040は陶器製の秉燭である。外面には流しがけ状に暗赤褐色釉が施釉され，底面は糸切りである。

1041・1042は瓶または徳利と考えられ，1041は磁器の口縁部で，1042は陶器の口縁部である。

1041は内外面とも施釉されており，肥前系磁器に近い質感である。1042は内面及び畳付が無釉で，内面にはろくろ目の上に粗いナデ状の調整が加えられている。

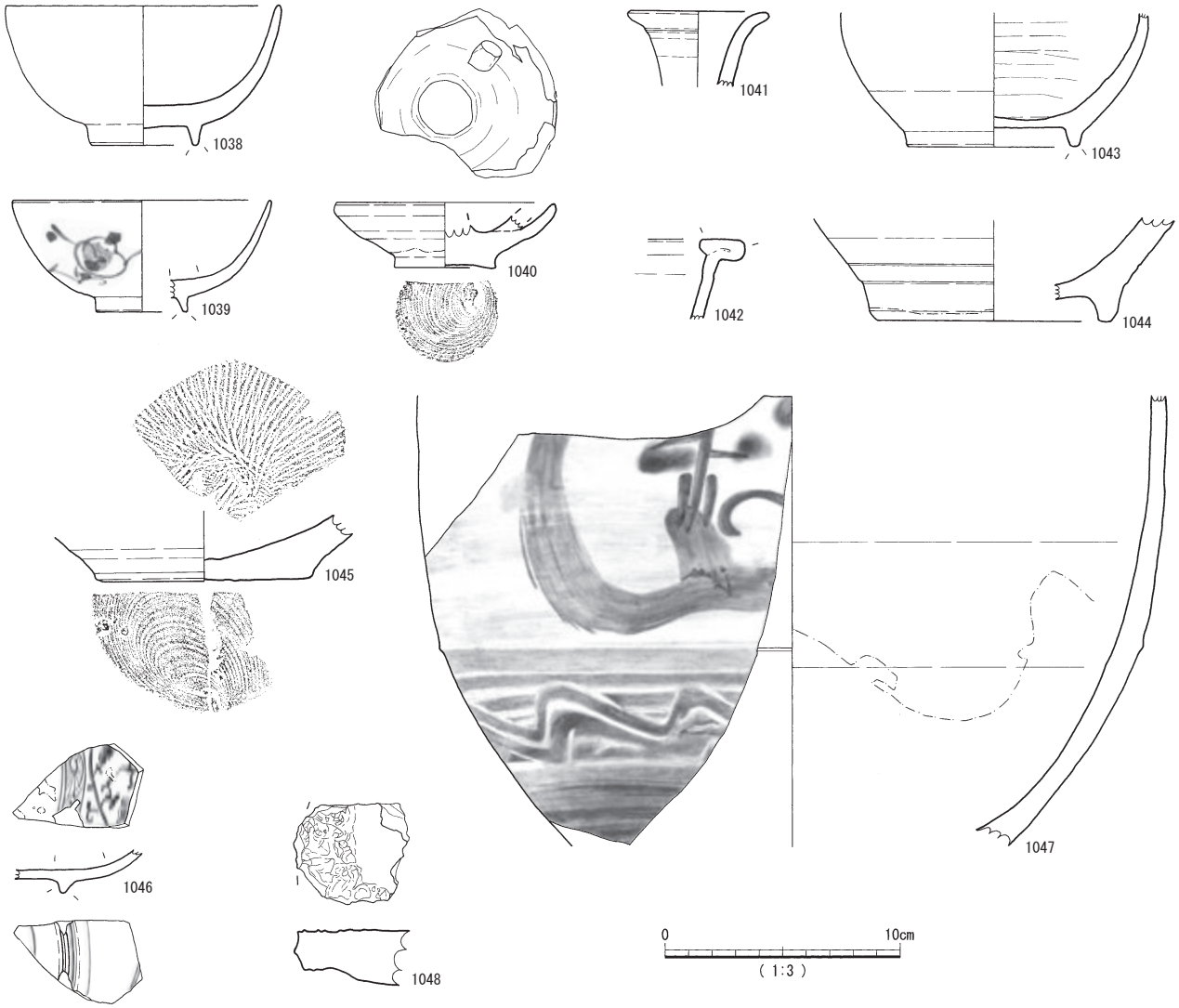
1043・1044は鉢である。

1043は鉢の胴部から底部で，内面側に折り返して平坦な口唇部を作出している。灰色がかった緑色釉が施釉されており，口唇部のみ釉が掻き取られている。1044も砂が多量に付着しており，溝状遺構４号出土の1031や1032と同様に重ね焼きの土目の痕跡と考えられる。

1045は糸切り底の摺鉢である。内外面とも無釉で，内底面から放射状に摺り目が施されている。

1046は青花の皿である。内面は施釉範囲が盛り上がり，無釉の範囲と斑状を呈している。内面には草花文と唐草文，外面には圏線が描かれている。

1047は甕の胴部である。釉薬は灰白色を基調に，黄褐色・緑色釉で文様を描いている。また，胴部下位に張り出しがあり，下半はユビナデによる波状文が描かれてい



第154図　石垣出土の陶磁器等

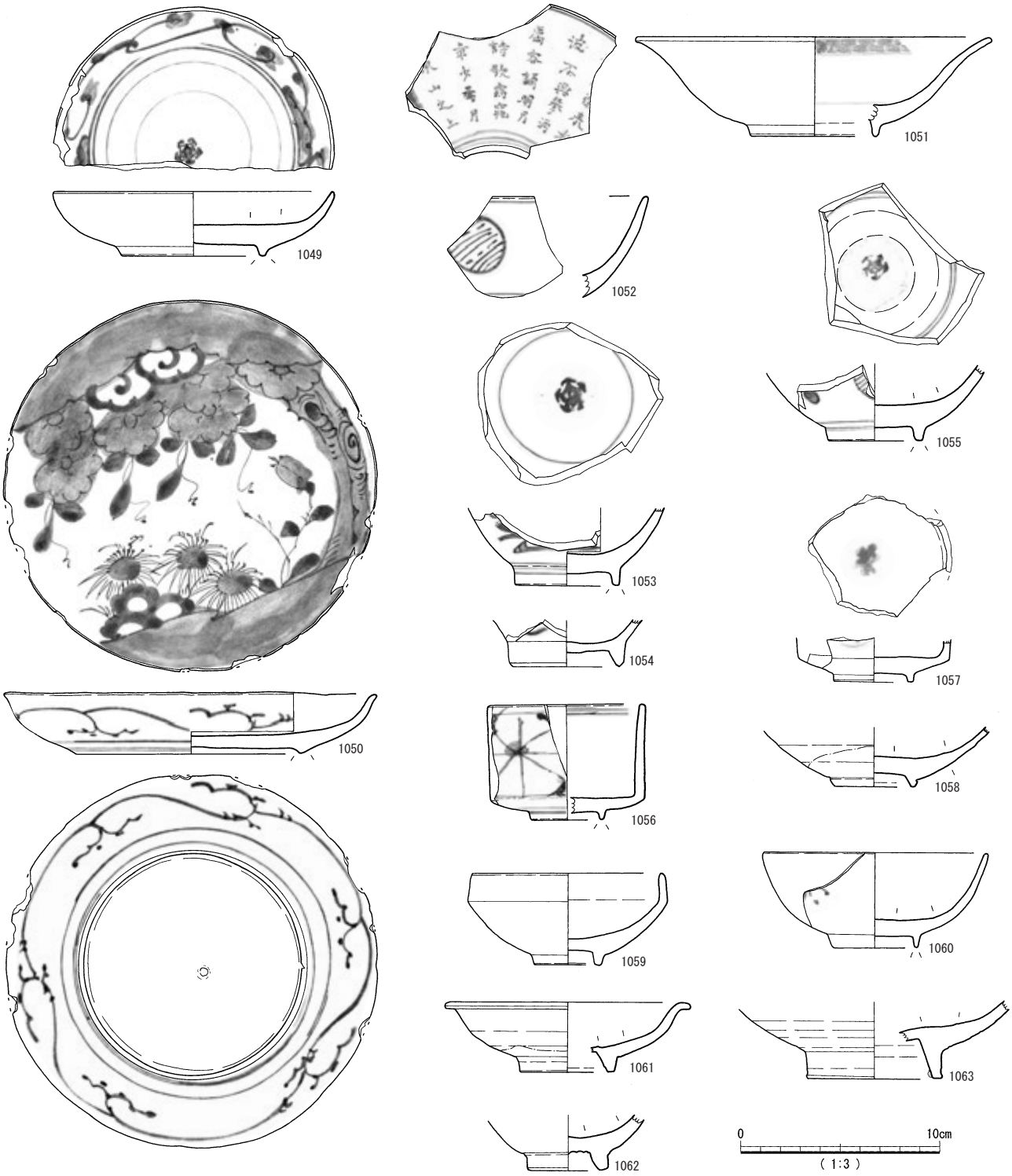
る。釉調や文様から，唐津産の陶器と考えられる。

1048は，鞴の羽口片である。先端はガラス化し，鉄分が熔着している。

3　包含層出土遺物（第155図～第159図）

表土から多くの陶磁器・石製品・鉄製品・古銭などが出土している。その中の主なものを紹介する。

1049・1050は磁器の皿である。



第155図　包含層出土の近世・近代の陶磁器（１）

1049の外面は無文で，内面に草花文，見込みに五弁花文が施される。また，蛇の目釉はぎに重ね焼きした痕跡が残っており，直径約８㎝の高台の製品を重ねたことが分かる。1050は句口唇部がわずかに欠損するのみで完形である。上面観はわずかに輪花皿状をなし，内面には草花文，外面には唐草文と圏線が描かれている。高台のみ露胎し，外底面の中央に１点ハリ支え痕がみられる。18世紀前半の肥前系に比定される。

1051は肥前系磁器の坏である。口径18㎝，底径6.4㎝，高さ５㎝の大きなもので，低い高台が付く。界線が外面上に１条，下に３条，内底に１条ある。外面には漢詩が描かれ，内面口縁近くには菊花文や横向きＵ字文が筋状に描かれている。

1052～1063は碗である。

1052は内外面に圏線と，外面には丸文に斜線を組み合わせた文様が描かれている。1053は高台がやや高く，胴部の膨らみも弱い広東碗状の器形である。外面には，圏線と部分的に文様が残るが詳細は判別できない。内面は，コンニャク印の五弁花文が施されており，18世紀代と考えられる。1054の高台は端が釉はぎされ，太くて高い。内底には砂目が付き，内外とも貫入がはいっている。1055はいわゆる「くらわんか手」で，器壁が比較的厚い。外面は丸文と二重圏線が部分残存し，見込みには二重圏線と五弁花文が描かれ，蛇の目釉剥ぎが施される。全体的に釉薬が発泡しており，蛇の目釉剥ぎ周辺が最も顕著である。

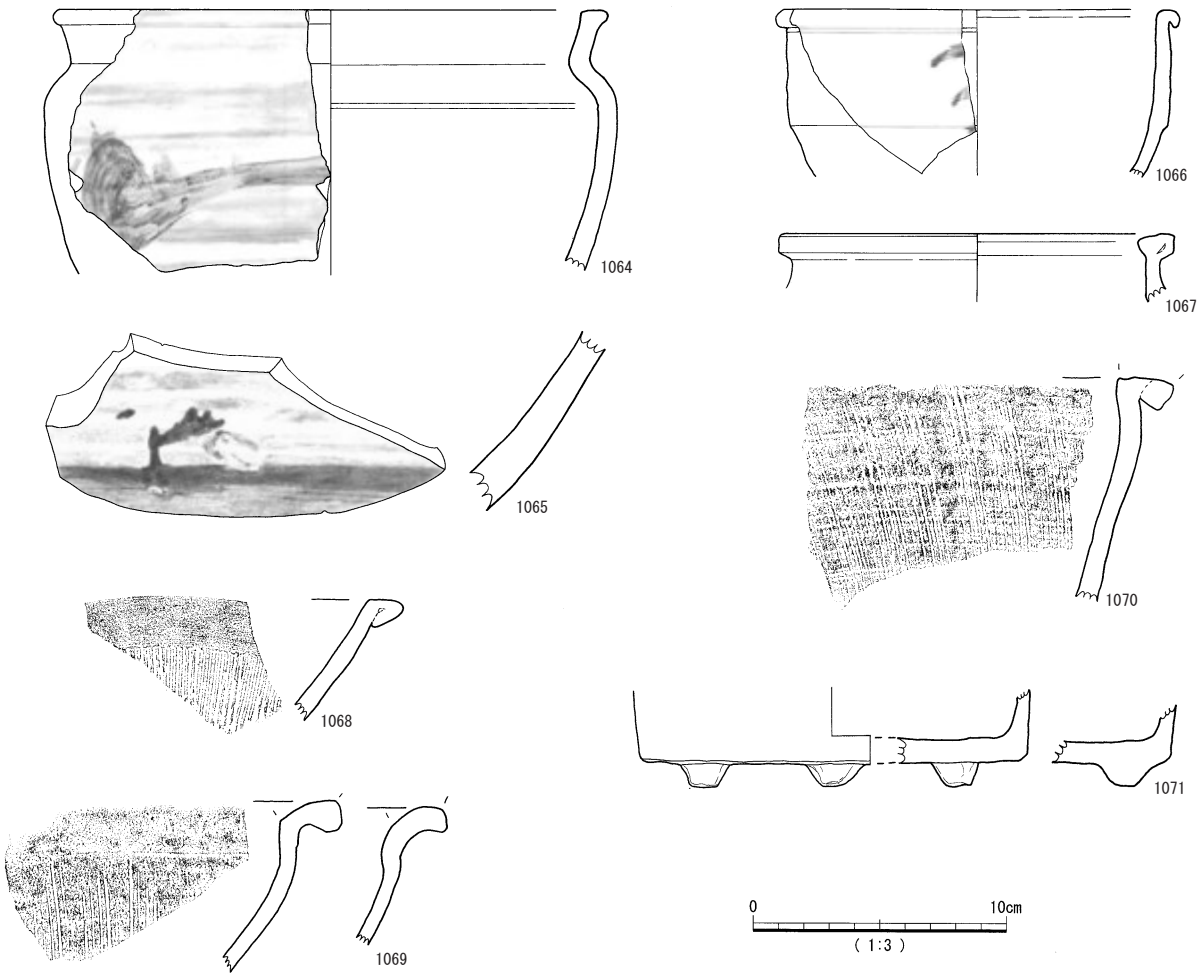
1056・1057は，筒碗である。

1056の外面には花文，内面には圏線および五弁花文が描かれている。1057は釉切れが目立ち，内底中央に花押文がある。1058は無紋で，外面は白色の釉薬が流しがけ状に施釉され，胴下半と高台は無釉である。高台は削り出しで作出され，見込みは蛇の目釉剥ぎにアルミナ状のやや粒子の粗い付着物が塗布されている。

1059は，肥前系陶器の煎じ碗である。灰黄色の胎土に，淡緑色釉が施されている。高台は無釉である。

1060は内底が釉はぎされ，外面にはつる様の文様がある。

1061は端反りの皿で，内面は蛇の目釉剥ぎである。作りは丁寧で，高台も削り出して稜が明瞭に作出されている。



第156図　包含層出土の近世・近代の陶磁器（２）

1062は褐色の胎土に白色釉を施釉した陶器で，龍門司系に比定される。高台は無釉で，高台裏は渦巻き状になる。器面が荒れており，二次被熱によるものと考えられる。

1063は高台の高い，肥前系の大型碗である。素地は硬質で，暗茶褐色釉が施釉されている。体部下半と高台は無釉で，高台内面に砂目と思われる付着物がみられる。

1064は口径22㎝の広口壷である。外面は灰白色釉の上に暗赤褐色の筆絵が描かれている。

1065は大型鉢の胴部片である。外面には茶褐色～灰白色の釉薬が帯状に施釉されている。武雄産と考えられる。

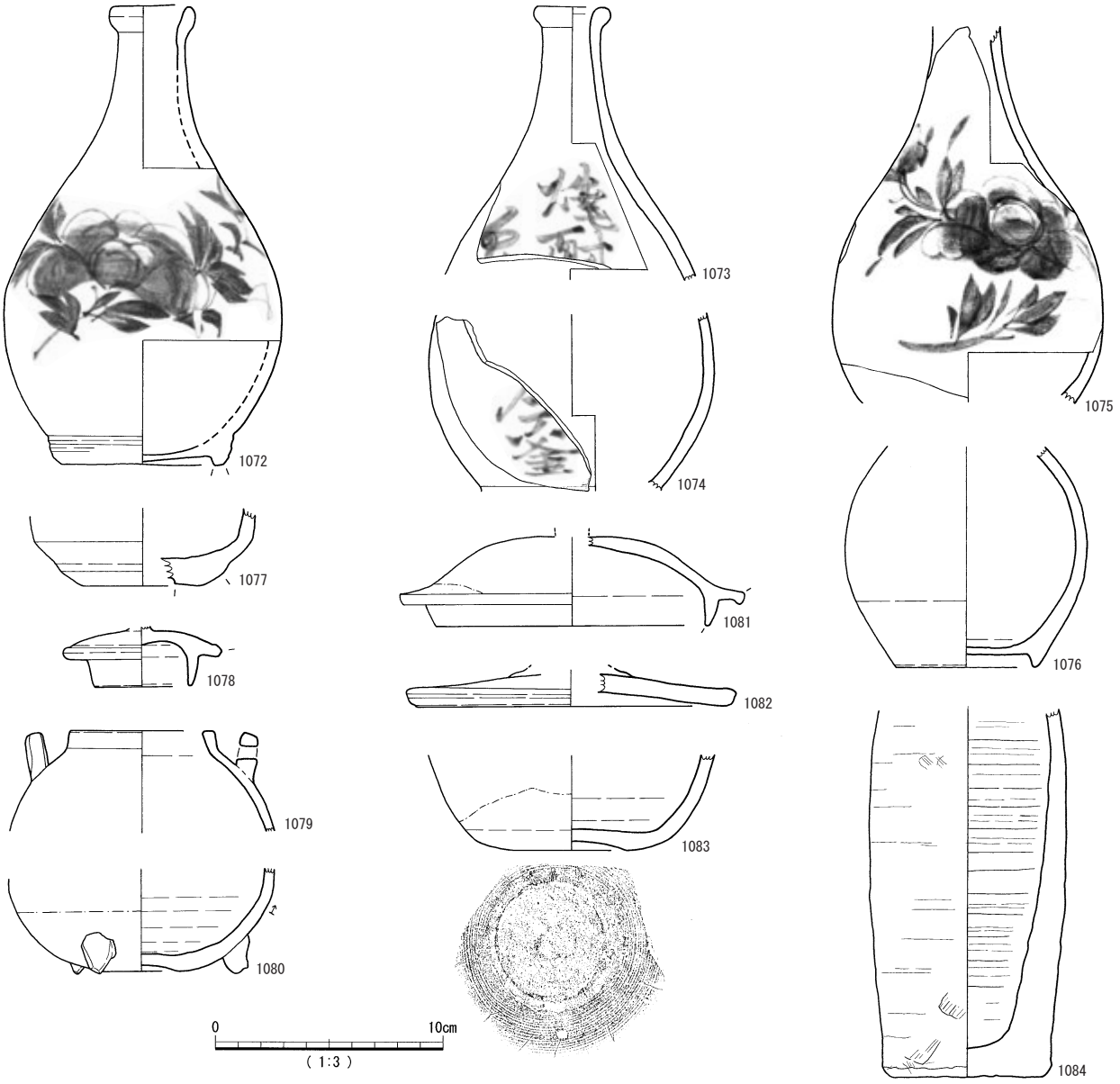
1066は，磁器の鉢である。口縁部を外面に折り返し，丸い口唇部を作出している。外面には鉄釉で３本の沈線が描かれているが，詳細は不明である。胎土に黒色の粒子を多量に含み，他の磁器に比べて粗い。口唇部は重ね焼きと思われる溶着の痕跡が有り，釉薬が部分的に剥がれている。

1067は甕の口縁部であり，口唇部を折り返して作出した際の半月状の空隙がみられる。暗緑色釉が施釉されている。

1068～1070は摺鉢である。

1068の口縁部は外面に折り返して成形され，断面に三角形状の空隙がみられる。口縁部内面は摺り目がかき消され，摺り目が一定の高さでそろっている。本遺跡で出土している他の摺鉢と，素地及び釉調が異なる。

1069は片口をもつ摺鉢である。内外面とも暗緑褐色釉が施釉され，口唇部のみ拭き取られたように露胎する。苗代川系で，摺鉢の中では古手である。



第157図　包含層出土の近世・近代の陶磁器（３）

1070は口唇部がろくろ目で数条に波打ち，露胎している。

1071は土師質土器の底径15.6㎝の鉢で，３個の脚がある。浅黄橙色を呈し，白色石などこまかい土である。

1072～1075は，徳利である。

1072～1075はいわゆる牡丹徳利で，本来対で使用されていたと考えられる。1072は口径3.4㎝，底径7.2㎝，高さ20.2㎝の低い高台付きの完形品である。胴部中央に最大径があり，頸部から外反し，口縁部は細長い玉縁状を呈する。高台近くでややくびれている。1073～1075と同じ器形をし，外面には青釉の花弁とつぼみが描かれている。1073は「焼酎」ほか数文字が記載されており，内容物を示す例である。いずれもコバルト呉須文様が描かれた肥前系磁器で，明治期以降のものと考えられる。1074は「今釜」と記されており，六反ヶ丸遺跡の所在する六月田から北西方向に位置する地名である。1075は頸部から胴部で，外面に濃い青釉の花弁とつぼみが描かれている。内面の頸部より上に青灰色釉がかかっている。

1076は瓶と考えられる。産地等は不明であるが，器壁は薄く，内面は無釉で部分的に釉が垂れた痕跡がある。器形から，あまり器高がないか，細く頸が伸びるタイプの瓶と想定される。

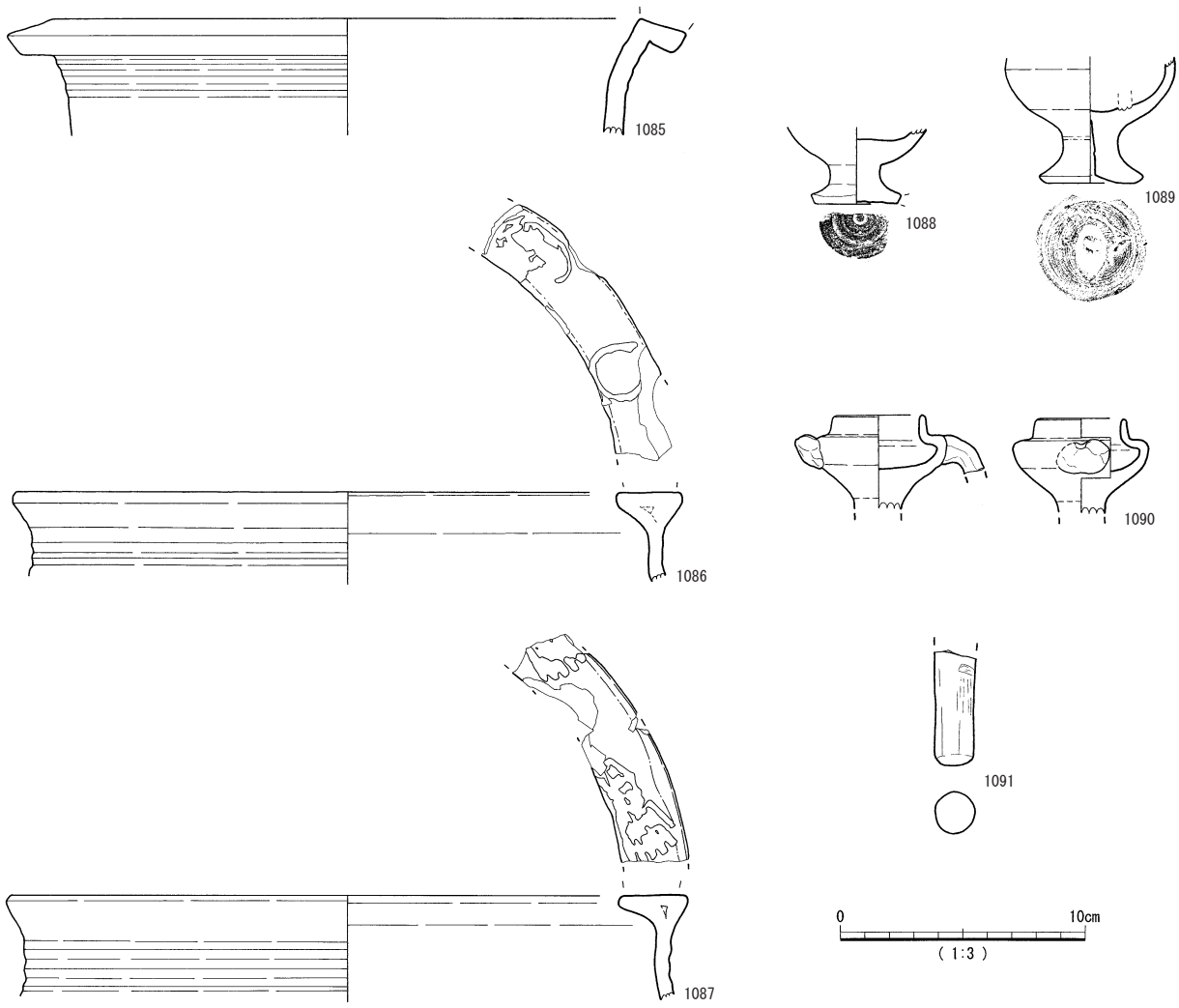
1077は明オリーブ灰色の釉がかかった青磁小壺の底部である。底は釉はぎが施されている。

1078～1080は土瓶である。

1078は土瓶の蓋である。つまみ部は欠損する。赤褐色を呈する素地に，上部のみ暗赤褐色釉が施釉されている。1079は土瓶の胴部片である。肩はあまり張らず，器壁は薄い。口唇端部のみ釉剥ぎされている。1078・1079は苗代川系と考えられる。1080は，体部である。胴下半は無釉で，底面は凹む。３か所に，三角錐状の脚部がつく。

1081・1082は陶器の蓋である。

1081は山茶家などの大型の土瓶類の蓋である。上端はつまみが付くと考えられるが，欠損している。鍔から下，および内面は無釉である。また，外面の胴下部と鍔の裏面に，重ね焼き時の付着物がみられる。1082はつま



第158図　包含層出土の近世・近代の陶磁器（４）

みが部分的に残存しており，細長い棒状のつまみが付くと考えられる。受けはない。全面無釉であり，焼き締め陶器に近い質感である。堂平窯跡に類例があり，17世紀後半の苗代川系と考えられる

1083は器壁は比較的薄手であり，施釉範囲や器形が土瓶とは異なる。底面は上げ底で露胎となり，ろくろ成形の筋目が明瞭にみられる。体部は内外面とも褐色釉で施釉されており，何らかの液体を入れるための用途が推定される。

1084は琉球焼の徳利で，底は分厚い。底径6.6㎝で細長い器形である。内面は積み上げ痕が目立つ。胎土は赤色を呈し，浅黄色の釉がかかっている。

1085は，長頸の壷と考えられる。口唇部は外傾し，釉薬が掻き取られている。

1086・1087は苗代川系の甕の破片である。

1086の口唇部は無釉で二枚貝の貝目痕が残る。口縁部は折り返して作出され，断面に三角形の空隙がみられる。内外面とも褐色の釉薬が施釉されている。1087の断面には口縁部を成形した際の三角形状の接合線がみられる。また，口唇部は無釉で，鋸歯状の側縁の二枚貝を用いた目跡が残る。17世紀後半と考えられ，堂平窯跡に類例がある。

1088～1090は仏飯具である。

1088は磁器製で，底面が無釉である。1089は元立院系の秉燭で，底面は糸切りである。体部上半及び内面は，黒褐色釉で施釉されている。1090は口縁部が直に立ち上がり，低い胴部で充実脚台が付く。注口，把手がある。

1091は棒状の土師質土器で，把手あるいは脚と思われる。

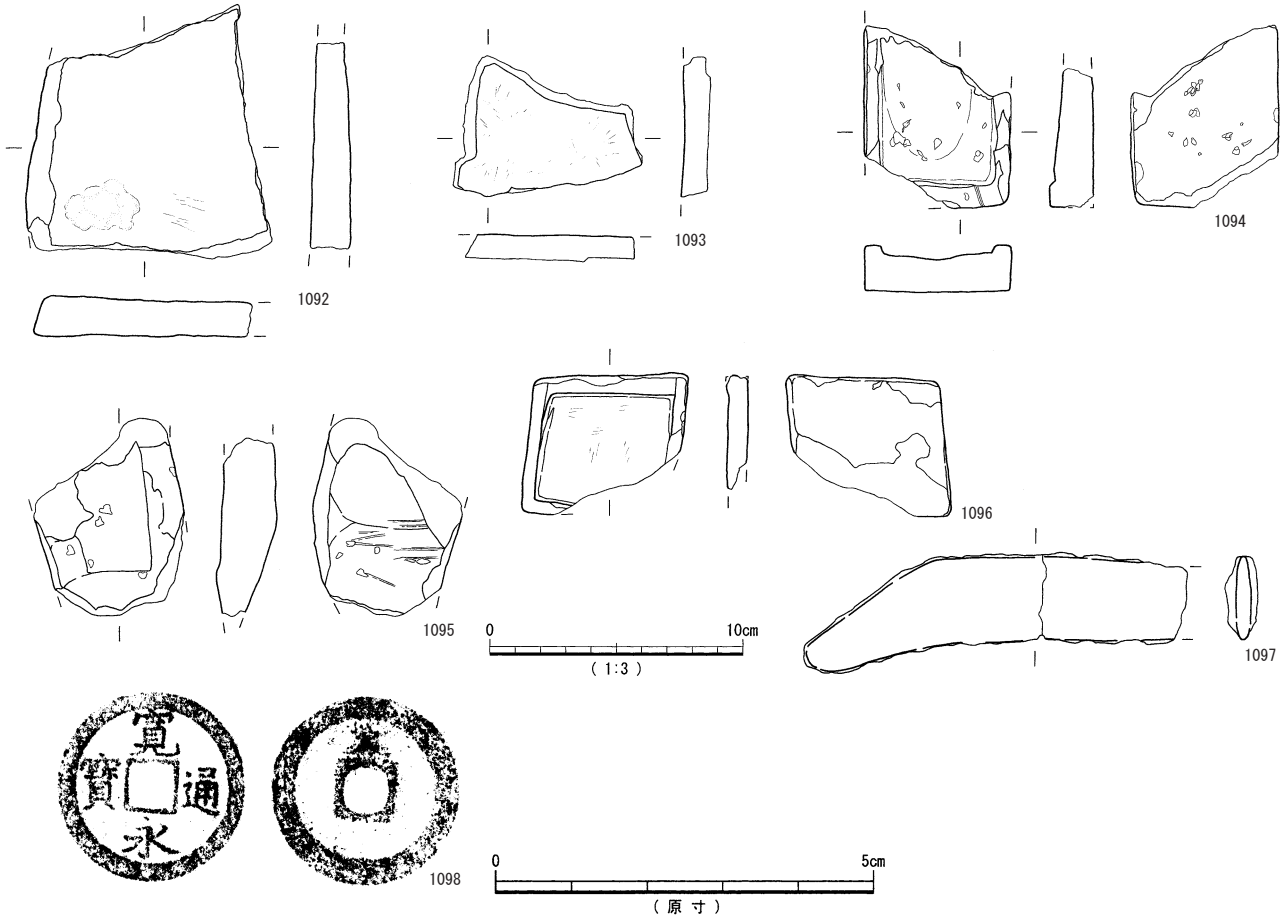
1092・1093は扁平な砥石破片である。

1094～1096は石硯である。

1094は天草石で，陸部の一部が欠けている。残存長6.8㎝，幅6.0㎝，厚さ2.0㎝で，海部は小さい。1095は天草石で欠損している。残存長7.5㎝，幅5.8㎝，厚さ2.2㎝だが，やや不定形である。硯部の幅は2.7㎝と小さく，砥石としても使われた可能性がある。1096は赤間石で正方形を呈しており，6.2㎝×5.4㎝で，厚さは0.8㎝である。

1097は幅2.3㎝の鉄製鎌である。刃先が刃部で屈折している。

1098は裏が無文字の寛永通宝である。



第159図　包含層出土の近世・近代の石製品・鉄製品・古銭

第８節　ピット

ピットは各調査区で確認され，形状は直径が50㎝前後の比較的直径の大きい柱穴状のものや，直径が10㎝程度の小ピットが確認された。小ピットは先端がやや尖っており，杭等を打ち込んだ痕跡と考えられる。

本報告書では，Ｂ地点の報告書と同様，柱穴痕が明確にみられないもので，柱穴状の直径が小さく深さのある小土坑を一括してピットとして扱った。これらは，Ｄ調査区に集中しているものが多い。その埋土は，砂質シルト質の黒褐色土が大部分を占めていた。Ｃ調査区のピットの埋土は，灰色に近い色調が多く，旧水田層の土壌が混在していると想定でき，比較的新しい近世以降に属する可能性が高い。この結果は，Ｂ地点のピット群の特徴と類似している。配列等も検討したが，個々のピットの明確な関連性は把握できなかった。遺物は数点出土しているが，図化するまでにはいたらなかった。

第９節　その他の出土遺物（第160図）

確認調査で出土した土器のうち既報告書で掲載し損なったものと本報告書で抜けたものをここで紹介する。

1099はＤ－15区の１トレンチⅡｂ層で出土した。

ほぼ完全な弥生土器で，口径15.2㎝，底径3.5㎝，高さ10.7㎝の小型壷形土器である。小さい平底で，胴部が稜をもつそろばん玉形をした器形をしている。頸部から口縁へ強く外反し，端部は丸みをおびている。頸部にやや離れた位置にある２個一対の小さな円孔が対面２か所にある。表面の摩滅が目立つが，外面は縦方向のヘラナデである。内側も縦あるいは横方向ヘラナデである。

灰白色石・茶色石・角閃石などの砂質土を多く含んでいる。

1100はＣ・Ｄ－24・25区の６トレンチⅡｂ層で出土した土師器の高台付皿である。

高台が欠け，体部も摩滅が目立つ。ヘラ切り底で，橙色を呈し，底には黒班がみられる。

茶石などを含むこまかい胎土である。

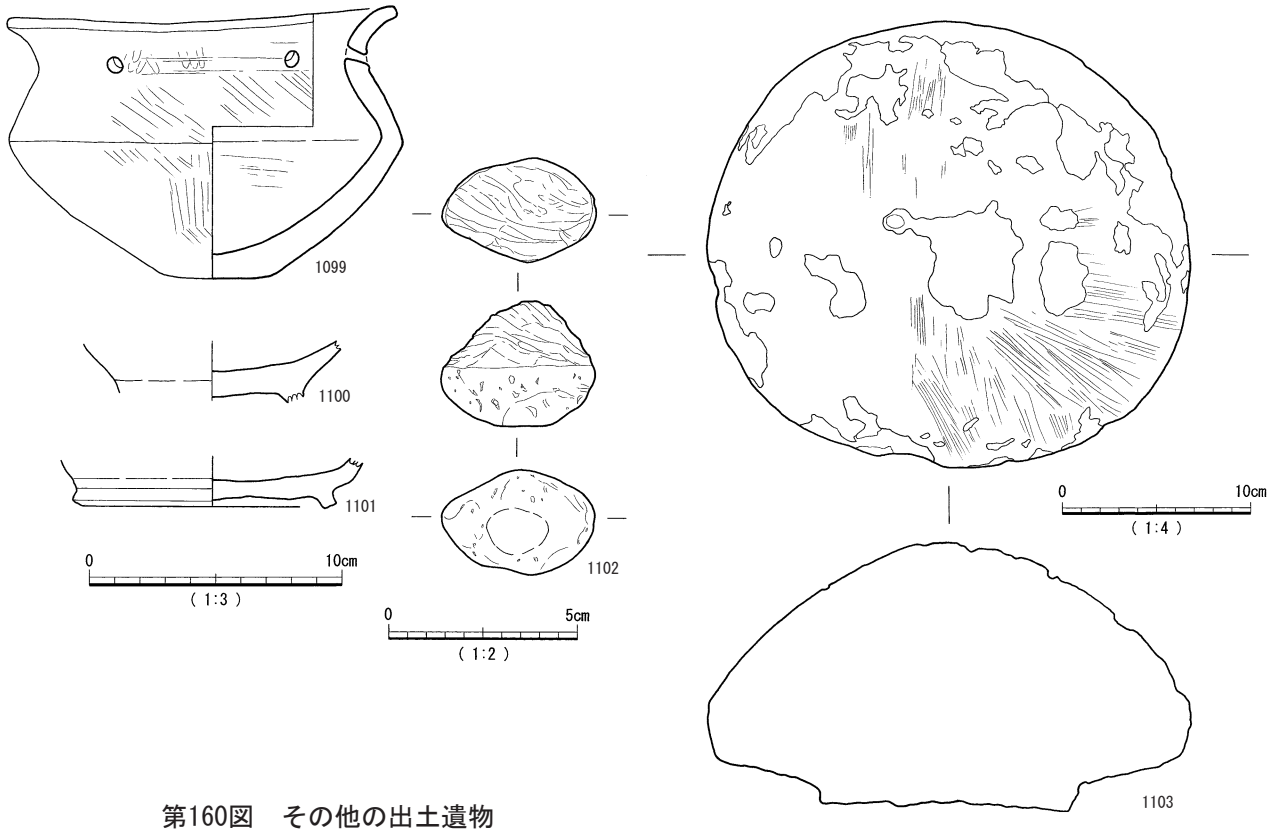
1101は１トレンチで出土した須恵器坏身である。

高台は直径10.5㎝・高さ0.4㎝と大きく低い。高台端部はやや上へ上がる矩形を呈している。体部は立ち上がり部で段となっている。褐灰色を呈し軟質に焼けている。

こまかい土を用いているが，灰色・角閃石・輝石などを多く含んでいる。

1102はＤ－25区の礫敷遺構で出土した船形をしたホルンフェルスである。上半部が灰褐色，下半部が灰白色をしている。全体的に自然のままであるが，部分的に摩耗しており，底部の1.6×1.2㎝の楕円形部分は平らに研磨している。上面からみると長径4.1㎝，短径2.8㎝で，高さは3.3㎝，重さ39ｇである。

1103は近世の祭祀遺構で出土した凝灰岩製の僧侶型田の神石像の笠部である。周辺は打ち欠いて形を整えたあと研磨しており，下部に長さ１㎝ほどのほぞがある。天井部には自然のくぼみもある。25.6×23.7㎝の楕円形を呈し，ほぞを加えて高さ13.8㎝あり，重さは5.4kgである。



第160図　その他の出土遺物

第11表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
14	1	－	D-28	Ⅳ	土器	深鉢	口縁部	－	－	(5.2)	ナデ	5YR6/6(橙)			○		○	○	○	縄文時代(後期)南福寺式土器
	2	－	D-33	Ⅱb直下	土器	深鉢	口縁部	－	－	(3.6)	外)摩滅 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)				○	○	○	○	縄文時代後期(西平系)
15	4	－	E-34	Ⅲ	土器	甕	口縁部	－	－	(6.8)	工具ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)	○		○			○	○	弥生 突帯文土器
	5	－	C-34	－	土器	壷	胴部	－	－	(3.4)	ナデ	外)2.5Y4/1(黄灰) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○				○	弥生 板付式土器(長頸壷)
	6	－	E-30	－	土器	壷	胴部	－	－	(2.3)	ハケナデ	2.5YR5/6(明赤褐)					○		○	弥生 板付式土器(長頸壷)
	7	－	C-24	－	土器	甕	口縁部	－	－	(2.4)	摩滅	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)					○	○	○	弥生
	8	－	D-35	－	土器	甕	口縁部	－	－	(3.2)	ナデ	10YR4/2(灰黄褐)	○		○			○	○	弥生
	9	－	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	(27.2)	－	(2.3)	ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	10	－	D-26	Ⅱb	土器	甕	口縁部	(27.0)	－	(4.9)	ナデ	外)7.5YR7/3(にぶい橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)		○	○			○	○	弥生 黒髪式土器
	11	－	E-30	－	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	－	(7.0)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ,工具ナデ	外)7.5YR6/2(灰褐) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○		○	○	○	弥生 黒髪式土器(松木薗O式)
	12	－	－	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.1)	ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○				○	弥生 黒髪式土器
	13	－	D-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(1.5)	摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	弥生 黒髪式土器
	14	－	E-35	－	土器	甕	口縁部	－	－	(1.8)	ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	15	－	D-35	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.0)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	16	－	D-31	Ⅱb	土器	壷	口縁部	－	－	(2.5)	ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)	○				○		○	弥生 黒髪式土器
	17	－	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(3.8)	ナデ	7.5YR8/3(浅黄橙)	○				○		○	弥生 黒髪式土器
	18	－	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(3.1)	ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	19	－	D-30	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(4.4)	ナデ	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	20	－	E-27	－	土器	甕	口縁部	－	－	(1.6)	ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)		○	○				○	弥生 黒髪式土器
	21	－	E-28	－	土器	甕	口縁部	－	－	(2.3)	ナデ	10YR8/3(浅黄橙)					○	○	○	弥生 黒髪式土器
	22	－	D-35	－	土器	甕	口縁部	－	－	(2.0)	ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)		○				○	○	弥生 黒髪式土器
	23	－	D･E-27	Ⅱc-2	土器	甕	口縁部	－	－	(2.0)	ナデ	外)10YR6/1(褐灰) 内)7.5YR7/8(黄橙)					○	○	○	弥生 黒髪式土器
	24	－	E-27･28	Ⅲ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.9)	ナデ	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	25	－	E-29･30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.1)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○			○	○	弥生 黒髪式土器
	26	－	E-27･28	－	土器	甕	口縁部	－	－	(1.9)	ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)5YR7/6(橙)		○	○			○	○	弥生 黒髪式土器
	27	－	E-28	Ⅱc上	土器	甕	口縁部	－	－	(2.7)	ナデ	外)7.5YR8/3(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)	○					○	○	弥生 黒髪式土器
	28	－	C･D-26･27	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.4)	ナデ	外)2.5Y6/1(黄灰) 内)2.5Y8/4(淡黄)	○	○					○	弥生 黒髪式土器
	29	－	D･E-27	－	土器	甕	口縁部	－	－	(2.4)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/2(灰白)			○		○	○	○	弥生 黒髪式土器
	30	－	D-28	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(2.6)	ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR7/8(橙)	○					○		弥生 黒髪式土器
	31	－	E-27	表土	土器	甕	口縁部	－	－	(1.8)	ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)		○	○			○	○	弥生 黒髪式土器
	32	－	E-30	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(2.4)	摩滅	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)2.5Y8/3(淡黄)		○			○	○		弥生 黒髪式土器
	33	－	－	－	土器	甕	口縁部	－	－	(2.6)	ヘラナデ(摩滅)	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)			○				○	弥生 黒髪式土器
	34	－	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.6)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)		○				○	○	弥生 黒髪式土器
	35	－	E･D-24	－	土器	甕	口縁部	－	－	(3.5)	摩滅	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR7/1(灰白)		○			○		○	弥生 黒髪式土器
	36	－	D-28	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(2.8)	外)摩滅,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○				○	弥生 黒髪式土器
	37	－	D-28	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(2.7)	ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○					○	弥生 黒髪式土器
	38	－	D･E-27	－	土器	甕	口縁部	－	－	(3.9)	ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○	○			○	○	弥生 黒髪式土器
	39	－	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(4.2)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)		○	○		○		○	弥生 黒髪式土器

第12表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
16	40	－	E-30	Ⅱa	土器	甕	口縁部	(22.4)	－	(2.4)	ナデ	外)7.5YR6/1(褐灰) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○			○	○	弥生
	41	－	D-26	Ⅱb	土器	甕	口縁部	－	－	(2.0)	ヘラナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○		○				○	弥生・黒石
	42	－	E-27	Ⅰ	土器	甕	口縁部	－	－	(1.5)	外)ナデ,摩滅 内)摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	弥生
	43	－	D-28・29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(1.6)	摩滅	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)		○	○				○	弥生
	44	－	D-30	Ⅱb	土器	甕	口縁部	(26.4)	－	(2.1)	ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○	○					○	弥生
	45	－	C-25	Ⅱc-2	土器	甕	口縁部	－	－	(3.4)	外)ナデ 内)ナデ,ケズリ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○		弥生
	46	－	C-23	－	土器	甕	胴部	－	－	(7.8)	外)ナデ 内)ユビナデ	2.5YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	弥生
	47	－	C-23	－	土器	甕	胴部	－	－	(7.7)	摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○				○	弥生
	48	－	E-29	Ⅱb	土器	壷	頸部	－	－	(2.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR7/6(橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	弥生
21	52	SI3	C-23	－	土器	甕	胴部	(25.4)	－	(24.1)	外)タタキ,ハケナデ,ケズリ 内)ユビナデ,ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○	○		○	○	成川式土器
	53	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	－	(16.8)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)5YR3/3(暗赤褐) 内)5YR3/4(暗赤褐)	○			○	○	○	○	成川式土器
	54	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	(24.0)	－	(8.5)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)7.5Y4/1(灰)				○	○	○	○	成川式土器
	55	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(7.7)	外)タタキ,ナデ 内)工具ナデ,指頭押圧,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR6/6(橙)	○				○	○	○	成川式土器
	56	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(5.1)	外)タタキ,ナデ 内)ケズリ,ナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)	○					○	○	成川式土器
	57	SX3	C-23	－	土器	甕	頸部	－	－	(8.8)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○	○	成川式土器
22	58	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	(25.4)	－	(12.3)	外)ハケナデ,ナデ,タタキ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	外)10YR4/1(褐灰) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	－
	59	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	(26.0)	－	(5.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)				○		○	○	－
	60	SX3	C-23	－	土器	甕	頸～胴部	－	－	(6.8)	外)ハケナデ,タタキ,ナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)				○	○	○	○	－
	61	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁～胴部	(24.2)	－	(18.3)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ,ケズリ	5YR5/4(にぶい赤褐)	○		○	○		○	○	－
	62	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(7.1)	ナデ,指頭押圧	外)7.5YR6/6(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	－
	63	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(13.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)10YR5/4(にぶい黄褐)			○	○	○	○	○	－
	64	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(8.3)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)7.5YR5/6(明褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)				○	○	○	○	－
	65	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(5.7)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR5/3(にぶい黄褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)					○	○	○	－
	66	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(5.1)	外)条痕,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)				○	○	○	○	－
	67	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(4.3)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)						○	○	－
	68	SX3	C-23	埋土	土器	甕	口縁部	－	－	(4.4)	外)ナデ 内)ハケナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)			○		○	○	○	－
	69	SX3	C-23	埋土	土器	甕	口縁部	－	－	(4.6)	ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○				○	－
	70	SX3	C-23	－	土器	甕	口縁部	－	－	(4.2)	外)ナデ 内)ハケナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	－
	71	SX3	C-23	埋土	土器	甕	口縁部	－	－	(3.1)	ナデ	10YR4/1(灰褐)			○				○	－
	72	SX3	C-23	埋土	土器	甕	口縁部	－	－	(3.3)	ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○				○	－
23	73	SX3	C-23	－	土器	甕	胴部	－	－	(6.8)	外)ケズリ,ナデ,ハケナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/6(橙) 内)7.5YR5/1(褐灰)		○		○		○	○	－
	74	SX3	C-23	－	土器	甕	脚部	－	11.2	(7.3)	ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○			○	○	－
	75	SX3	C-23	－	土器	甕	脚部	－	(9.8)	(5.7)	外)ユビナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)					○	○	○	－
	76	SX3	C-23	－	土器	甕	脚部	－	(11.6)	(4.3)	外)摩滅 内)ミガキ	10YR6/4(にぶい黄橙)			○			○	○	－
	77	SX3	C-23	埋土	土器	甕	脚部	－	11.4	(4.8)	外)摩滅 内)ナデ,ミガキ	7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	－

第13表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
23	78	SX3	C-23	−	土器	甕	脚部	−	(11.4)	(5.4)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	79	SX3	C-23	−	土器	甕	脚部	−	(10.8)	(4.9)	外)指頭押圧,ナデ 内)ユビナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR5/2(灰褐)			○	○	○	○	○	−
	80	SX3	C-23	埋土	土器	甕	脚部	−	8.4	(3.0)	外)指頭押圧,ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)		○		○		○	○	−
	81	SX3	C-23	埋土	土器	甕	頸～胴部	−	−	(7.3)	外)ユビナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR4/1(褐灰)	○					○		−
	82	SX3	C-23	−	土器	壷	口縁～頸部	(16.6)	−	(21.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	外)5YR5/4(にぶい赤褐) 内)5YR4/2(灰褐)		○				○	○	二重口縁
	83	SX3	C-23	−	土器	壷	口縁～頸部	14.6	−	(9.1)	外)ハケ 内)ナデ,摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○				○	二重口縁
	84	SX3	C-23	−	土器	壷	口縁部	(13.0)	−	(5.9)	外)ナデ 内)ケズリ,ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)				○		○	○	二重口縁・隅丸方形
	85	SX3	C-23	−	土器	壷	口縁～胴部	(11.0)	−	(11.4)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ,ケズリ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	二重口縁
	86	SX3	C-23	埋土	土器	壷	口縁部	(16.0)	−	(3.2)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)					○	○	○	二重口縁
	87	SI3	C-23	−	土器	壷	頸～胴部	−	−	(13.6)	外)ハケナデ 内)摩滅	10YR8/4(浅黄橙)	○					○	○	−
	88	SX3	C-23	−	土器	壷	頸部	−	−	(6.6)	外)ハケ,ナデ 内)ハケ,ナデ,ケズリ	5YR6/6(橙)					○	○	○	−
24	89	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(17.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR5/3(にぶい黄褐) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)	○			○		○	○	重弧文
	90	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(4.3)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)	○				○	○	○	−
	91	SX3	C-23	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(4.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR4/1(褐灰)	○		○		○	○	○	−
	92	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(4.1)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)				○		○	○	−
	93	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(4.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/2(灰褐)	○		○			○	○	−
	94	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(6.3)	外)ナデ 内)ナデ,ハケナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	−
	95	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(5.7)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	10YR6/3(にぶい黄橙)			○	○		○	○	−
	96	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(5.9)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)10YR4/1(褐灰) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	97	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(6.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR4/1(褐灰)				○		○	○	−
25	98	SX3	C-23	−	土器	壷	胴部	−	−	(11.2)	外)ケズリ,タタキ,ナデ 内)ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○			○	−
	99	SX3	C-23	−	土器	壷	胴～底部	−	−	(4.9)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/2(灰褐)		○			○		○	−
	100	SX3	C-23	−	土器	壷	胴～底部	−	4.0	(12.9)	外)タタキ,ハケナデ 内)指頭押圧,摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	101	SX3	C-23	−	土器	壷	底部	−	−	(3.6)	ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)	○	○	○			○	○	−
	102	SX3	C-23	−	土器	壷	底部	−	7.2	(8.6)	外)ユビナデ,タタキ,ナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR5/2(灰褐)				○	○	○	○	−
26	103	SX3	C-23	−	土器	高坏	坏部	(15.8)	−	(5.3)	摩滅	7.5YR7/6(橙)		○				○	○	−
	104	SX3	C-23	−	土器	高坏	脚部	−	−	(5.9)	摩滅	5YR6/8(橙)		○		○		○	○	−
	105	SX3	C-23	−	土器	高坏	脚部	−	−	(8.1)	外)ユビナデ,ナデ 内)摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	−
	106	SX3	C-23	−	土器	蓋	胴部	−	−	(6.7)	外)ケズリ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○	○	○			○	○	−
	107	SX3	C-23	−	土器	蓋	口縁部	−	−	(5.5)	外)ケズリ,ナデ 内)ナデ	10YR7/2(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	108	SX3	C-23	−	土器	鉢	口縁～底部	(12.9)	−	(5.0)	外)ユビナデ,ハケ 内)ハケナデ,指頭押圧	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)		○			○	○	○	小型鉢
	109	SX3	C-23	−	土器	壷	口縁部	−	−	(4.3)	ナデ	10YR3/1(黒褐)		○				○	○	小型丸底壷
	110	SX3	C-23	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(4.5)	外)摩滅 内)ミガキ	5YR6/6(橙)			○			○	○	小型丸底壷
28	112	SI4	C-26	−	土器	甕	口縁～肩部	(28.8)	−	(9.8)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ユビナデ,ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	113	SI4	C-26	−	土器	甕	口縁～肩部	(24.7)	−	(8.4)	外)タタキ,ナデ 内)ハケナデ,ユビナデ,ナデ	外)7.5YR7/2(明褐灰) 内)7.5YR7/6(橙)	○				○	○	○	−
	114	SI4	C-26	−	土器	甕	口縁～肩部	−	−	(6.8)	ハケナデ,ナデ	10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○	○	−

第14表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
28	115	SI4	C-26	−	土器	甕	口縁～肩部	−	−	(7.5)	摩滅	5YR6/8(橙)			○			○	○	−
	116	SI4	−	埋土	土器	甕	口縁～肩部	−	−	(7.3)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR7/8(橙) 内)5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	117	SI4	C-26	埋土	土器	甕	脚部	−	−	(3.6)	ユビナデ	外)5YR7/8(橙) 内)5YR2/1(黒褐)			○			○	○	−
	118	SI4	C-26	埋土	土器	甕	脚部	−	(11.6)	(4.1)	外)ユビナデ,ナデ 内)指頭押圧	5YR6/6(橙)	○				○	○	○	−
	119	SI4	C-26	埋土	土器	甕	口縁～肩部	−	−	(3.4)	摩滅	2.5YR6/2(灰黄)			○			○	○	−
	120	SI4	C-26	Ⅱb	土器	壷	胴部	−	−	(19.1)	外)タタキ,ハケナデ 内)摩滅	外)2.5Y6/8(橙) 内)5YR7/8(橙)			○			○	○	−
	121	SI4	C-26	Ⅱc-2	土器	壷	胴部	−	−	(7.2)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	2.5YR6/8(橙)	○		○		○	○	○	−
	122	SI4	−	埋土	土器	甕	胴部	−	−	(6.4)	外)ナデ 内)ハケナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)2.5Y6/1(黄灰)			○			○	○	−
	123	SI4	C-26	−	土器	壷	底部	−	−	(7.8)	摩滅	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
30	124	SI5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(21.4)	−	(12.0)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ,ケズリ,ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR7/6(橙)		○			○	○	○	−
	125	SI5	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(4.2)	外)ハケメ,摩滅 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)		○				○	○	−
	126	SI5	C-26	−	土器	甕	口縁部	−	−	(3.7)	ハケナデ,ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR6/6(橙)		○				○	○	−
	127	SI5	D-26	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(3.1)	外)ナデ 内)ハケナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	二叉状口縁
	128	SI5	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(4.0)	外)ナデ 内)摩滅	5YR6/8(橙)			○			○	○	−
	129	SI5	C-26	−	土器	甕	口縁部	−	−	(4.7)	摩滅	5YR6/8(橙)					○	○	○	−
	130	SI5	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(7.6)	外)タタキ 内)ハケナデ,ユビナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	131	SI5	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(5.7)	ハケナデ,ナデ	外)10YR3/2(黒褐) 内)10YR5/2(灰黄褐)					○		○	−
	132	SI5	−	埋土	土器	甕	頸～肩部	−	−	(2.9)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)2.5Y3/1(黒褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)					○		○	−
	133	SI5	C-26	−	土器	甕	頸～肩部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)5YR5/8(明赤褐)		○				○	○	−
	134	SI5	−	埋土	土器	甕	頸～肩部	−	−	(3.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)5YR7/6(橙)	○	○				○	○	−
	135	SI5	C-26	−	土器	甕	胴部	−	−	(7.2)	外)タタキ 内)摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	136	SI5	C-26	−	土器	甕	胴部	−	−	(7.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)7.5YR5/4(にぶい褐) 内)7.5YR5/6(明褐)		○		○		○	○	−
	137	SI5	−	埋土	土器	甕	胴～脚部	−	−	(6.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
	138	SI5	−	埋土	土器	甕	胴～脚部	−	−	(5.8)	外)摩滅 内)工具ナデ	5YR6/6(橙)					○	○	○	−
	139	SI5	C-26	−	土器	甕	胴～脚部	−	−	(6.9)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)			○		○	○	○	二重口縁
	140	SI5	−	埋土	土器	甕	胴～脚部	−	(10.0)	(4.1)	ナデ	2.5YR5/6(明赤褐)			○	○	○	○	○	−
31	141	SI5	C-26	−	土器	壷	口縁部	(18.8)	−	(6.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	二重口縁
	142	SI5	−	埋土	土器	壷	口縁部	−	−	(2.7)	ナデ	7.5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	143	SI5	−	埋土	土器	壷	口縁部	−	−	(3.0)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○	○	○	二叉状口縁
	144	SI5	−	埋土	土器	壷	頸部	−	−	(4.9)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)5YR7/8(橙)			○		○	○	○	−
	145	SI5	−	埋土	土器	壷	頸部	−	−	(4.5)	摩滅	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	146	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(4.7)	外)摩滅 内)ユビナデ,指頭押圧	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	147	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(3.9)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/3(浅黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)				○	○	○	○	−
	148	SI5	C-26	−	土器	壷	胴部	−	−	(6.2)	外)摩滅 内)指頭押圧,ユビナデ	5YR6/8(橙)		○	○		○	○	○	−

第15表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
31	149	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(4.0)	外)ナデ 内)摩滅	5YR6/8(橙)			○		○		○	−
	150	SI5	C-26	−	土器	壷	胴部	−	−	(11.3)	外)タタキ 内)ユビナデ	5YR6/8(橙)		○	○		○	○	○	−
	151	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(5.3)	外)ハケ 内)ハケ,摩滅	外)2.5Y6/1(黄灰) 内)10YR8/2(灰白)	○					○	○	−
	152	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(4.4)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)2.5YR5/6(明赤褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○				○	○	○	−
	153	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(3.8)	摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○				○	○	○	−
	154	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(2.8)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)	○					○	○	−
	155	SI5	−	埋土	土器	壷	底部	−	(3.0)	(3.7)	外)ユビナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR5/2(灰黄褐)			○	○	○	○	○	−
	156	SI5	C-26	−	土器	壷	底部	−	−	(8.0)	摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
32	157	SI5	−	埋土	土器	高坏	坏部	−	−	(5.2)	摩滅	5YR6/8(橙)					○	○	○	−
	158	SI5	−	埋土	土器	高坏	坏部	−	−	(2.7)	摩滅	5YR6/8(橙)			○			○	○	−
	159	SI5	C-26	−	土器	高坏	脚部	−	−	(8.8)	外)ミガキ,ハケナデ 内)ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR4/1(褐灰)					○	○	○	−
	160	SI5	−	埋土	土器	高坏	脚部	−	−	(7.2)	外)ミガキ,ナデ 内)ナデ	外)5YR5/6(明褐) 内)5YR5/3(にぶい赤褐)	○			○		○	○	−
	161	SI5	C-26	−	土器	高坏	脚部	−	−	(6.3)	外)ミガキ 内)ナデ	5YR6/8(橙)						○	○	−
	162	SI5	C-26	−	土器	高坏	脚部	−	−	(10.2)	外)摩滅 内)ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)				○	○	○	○	−
	163	SI5	−	埋土	土器	高坏	脚部	−	−	(3.9)	摩滅	5YR6/8(橙)					○	○	○	−
	164	SI5	−	埋土	土器	高坏	脚部	−	−	(6.9)	外)− 内)ユビナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○				○		○	穿孔あり
	165	SI5	−	埋土	土器	壷	口縁部	−	−	(6.5)	摩滅	5YR6/6(橙)							○	小型丸底壷
	166	SI5	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(5.7)	ユビナデ	5YR6/6(橙)					○	○	○	小型丸底壷
	167	SI5	−	埋土	土器	壷	頸〜胴部	−	−	(5.0)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR5/3(にぶい黄橙)			○	○	○	○	○	小型丸底壷
	168	SI5	−	埋土	土器	壷	底部	−	−	(3.6)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/6(明黄褐)				○	○	○	○	小型丸底壷
	169	SI5	−	−	土器	蓋	つまみ	4.0	−	(4.0)	外)ハケ 内)摩滅	外)2.5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)	○				○	○	○	−
	170	SI5	C-26	−	土器	壷	胴部	−	−	(6.4)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)						○	○	免田式土器 長頸壷・重弧文
35	173	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁〜胴部	(22.4)	−	15.9	−	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/8(橙)			○		○	○		−
	174	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁〜胴部	(24.0)	−	(11.9)	外)ヘラナデ 内)ハケナデ	10YR8/4(浅黄橙)				○		○	○	−
	175	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁〜胴部	(23.0)	−	(12.8)	ヘラナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)			○	○		○	○	−
	176	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁〜胴部	(24.2)	−	(10.6)	外)ハケナデ 内)ヘラナデ,タタキ	7.5YR8/4(浅黄橙)				○		○	○	−
	177	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁〜胴部	(20.8)	−	(13.5)	外)ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○	○	○	○	○	−
	178	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁〜胴部	(22.0)	−	(9.7)	ヘラナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)	○			○		○	○	−
	179	SI6	−	埋土	土器	甕	口縁〜胴部	−	−	11.1	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)			○			○	○	−
	180	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁〜胴部	23.2	−	(12.0)	ヘラナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)					○	○	○	−
36	181	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁〜胴部	−	−	(18.1)	外)ハケ,ナデ 内)ユビナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○		−
	182	SI6	−	埋土	土器	甕	口縁〜胴部	−	−	(5.9)	外)タタキ,ナデ,摩滅 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)5YR7/6(橙)	○	○				○		−
	183	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁〜胴部	(31.2)	−	(15.1)	外)タタキ,ケズリ 内)ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	184	SI6	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(3.4)	外)指頭押圧,ハケナデ 内)ハケナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	−
	185	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁部	−	−	3.7	ナデ	外)7.5YR4/1(褐灰) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○			○		−

第16表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
37	186	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁～胴部	(27.8)	−	(20.0)	外)ナデ,タタキ,ケズリ 内)ユビナデ,ハケナデ	外)7.5YR6/2(灰褐) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)	○		○			○	○	−
	187	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(12.6)	外)ハケナデ 内)指頭押圧	外)7.5YR7/3(にぶい橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	188	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	−	(7.0)	摩滅	7.5YR7/6(橙)					○	○	○	−
	189	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	−	(13.8)	外)ハケナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)7.5YR5/4(にぶい褐) 内)7.5YR5/4(にぶい褐)			○	○		○	○	−
	190	SI6	−	埋土	土器	甕	口縁部	−	−	(5.8)	外)指頭押圧 内)ユビナデ	外)7.5YR1.7/1(黒) 内)7.5YR6/6(橙)			○			○	○	−
	191	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(26.0)	−	(9.6)	ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙) 内外ともに広く黒色化				○	○		○	黒石
	192	SI6	−	−	土器	甕	口縁部	−	−	(5.2)	ナデ	7.5YR4/6(褐)	○		○				○	−
	193	SI6	−	−	土器	甕	口縁部	−	−	(5.3)	外)タタキ 内)ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○		黒石
38	194	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(30.0)	−	(22.0)	ヘラナデ	2.5YR5/6(明赤褐) 内面底近くは黒色化				○			○	−
	195	SI6	D-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁～胴部	(25.5)	−	(24.0)	外)ハケナデ,ヘラケズリ 内)ハケナデ,ヘラナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	−
	196	SI6	−	−	土器	甕	胴部	−	−	(15.7)	ハケナデ,ヘラナデ	外)5YR7/6(橙) 内)10YR8/2(灰白)			○		○	○	○	−
39	197	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～底部	(14.4)	−	17.3	ヘラナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	丸底甕
	198	SI6	D-26	−	土器	甕	口縁～胴部	(21.5)	−	(11.7)	外)ユビナデ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	外)7.5YR7/3(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	199	SI6	−	−	土器	甕	口縁～頸部	−	−	(5.7)	摩滅	5YR7/8(橙)			○		○	○	○	−
	200	SI6	D-26	−	土器	壷	口縁部	(16.6)	−	3.1	摩滅	外)10R6/8(赤橙) 内)10R6/8(赤橙)			○				○	−
	201	SI6	−	−	土器	甕	口縁～頸部	(19.8)	−	(8.7)	ヘラナデ	5YR6/8(橙)					○	○	○	黒石
	202	SI6	D-26	−	土器	甕	頸～胴部	−	−	(10.4)	外)ハケ,ケズリ 内)ナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)			○	○			○	−
	203	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(17.0)	−	(13.3)	外)タタキ,ヘラナデ 内)ナデ,ハケナデ	2.5YR6/8(橙)							○	−
	204	SI6	−	−	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(6.3)	ヘラナデ	5YR4/4(にぶい赤褐)			○			○	○	−
	205	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(15.4)	−	11.5	外)ヘラナデ	5YR5/8(明赤褐)	○		○				○	黒石
	206	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	(18.0)	−	11.1	外)ヘラナデ 内)摩滅	5YR4/8(赤褐色)	○			○	○	○	○	−
	207	SI6	−	Ⅱb	土器	甕	口縁～脚部	15.3	−	(12.5)	ヘラナデ	5YR5/6(明赤褐)	○		○				○	黒石
40	208	SI6	D-26	−	土器	甕	胴～脚部	−	(11.0)	(17.0)	外)ケズリ,ハケ,タタキ 内)ハケ,指頭押圧	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○				○	−
	209	SI6	D-27	Ⅱb	土器	甕	胴～脚部	−	脚径9.8	(21.2)	ヘラナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)	○					○	○	黒石
	210	SI6	D-26	−	土器	甕	脚部	−	(9.8)	(5.8)	外)ナデ 内)ハケナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)			○	○	○	○	○	−
	211	SI6	D-26	埋土	土器	甕	胴～脚部	−	−	(10.9)	外)ケズリ,ユビナデ 内)摩滅	外)2.5YR7/6(橙) 内)2.5YR5/1(赤灰)			○		○	○	○	−
	212	SI6	D-26	−	土器	甕	胴～脚部	−	−	(6.4)	ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)	○		○			○	○	−
	213	SI6	−	−	土器	甕	胴～脚部	−	−	(11.3)	ヘラナデ	5YR7/6(橙) 内にコゲ		○		○		○	○	−
	214	SI6	−	−	土器	甕	胴～脚部	−	(9.0)	(16.1)	外)ケズリ 内)ナデ	5YR6/8(橙)		○			○	○	○	−
41	215	SI6	D-26	−	土器	壷	口縁～底部	(14.6)	−	34.4	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧,ユビナデ,ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	216	SI6	D-26	−	土器	壷	完形	14.9	−	28.6	外)タタキ,ナデ,ハケナデ,ケズリ 内)ナデ,ユビナデ,工具ナデ,ケズリ	2.5YR5/8(明赤褐)	○		○		○	○	○	−
	217	SI6	D-27	Ⅱb	土器	壷	口縁部	(16.4)	−	(7.0)	ヘラナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○	○		○	○	二重口縁
	218	SI6	D-28	埋土	土器	壷	肩部	−	−	(2.6)	外)ハケナデ 内)ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)				○	○		○	−
	219	SI6	−	埋土	土器	壷	頸～肩部	−	−	(8.7)	外)ハケナデ,指頭押圧,ケズリ 内)ハケナデ,ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○		○		○	−
	220	SI6	−	埋土	土器	壷	胴部	−	−	(5.2)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10R6/6(赤橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)			○			○	○	−

第17表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
41	221	SI6	D-26	−	土器	壷	頸～肩部	−	−	(7.8)	外)ナデ(摩滅) 内)ユビナデ	外)5YR5/8(明赤褐) 内)5YR5/8(明赤褐)			○			○		−
	222	SI6	D-26	−	土器	壷	胴～底部	−	−	(2.8)	外)ハケ 内)摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○	○	−
	223	SI6	D-26	−	土器	壷	胴～底部	−	4.0	(14.6)	外)ナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/8(黄橙)			○			○	○	−
	224	SI6	−	IIb	土器	壷	胴～底部	−	−	(12.4)	ヘラナデ,摩滅	7.5YR8/4(浅黄橙)			○	○	○	○	○	粗い砂質土
42	225	SI6	D-26	−	土器	高坏	坏部	(32.2)	−	(3.6)	外)指頭押圧,ユビナデ 内)ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)				○	○	○	○	−
	226	SI6	D-27	IIb	土器	高坏	坏部	(34.0)	−	(5.2)	ナデ(摩耗)	10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	−
	227	SI6	D-27	IIb	土器	高坏	坏部	30.0	−	(9.0)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	228	SI6	D-27	−	土器	高坏	坏部	(32.0)	−	(9.5)	ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○			○		○	○	−
	229	SI6	D-27	IIb	土器	高坏	坏部	(27.0)	−	(6.5)	ヘラナデ	10YR6/3(にぶい黄褐)	○			○			○	−
	230	SI6	D-27	IIb	土器	高坏	坏部	−	−	(7.1)	摩滅	10YR8/4(浅黄橙)						○	○	黒石
	231	SI6	D-26	−	土器	高坏	脚部	−	−	(8.0)	外)摩滅 内)ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)						○	○	穿孔あり(2ヵ所)
	232	SI6	−	埋土	土器	蓋	口縁部	−	−	(2.9)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○	○		○	○	スス付着
	233	SI6	−	−	土器	鉢	口縁～胴部	(12.6)	−	(5.1)	ヘラナデ	5YR4/6(赤褐)			○	○		○	○	−
	234	SI6	D-27	IIb	土器	鉢	口縁～脚部	(14.0)	−	(10.9)	外)ナデ 内)ナデ,摩滅	7.5YR8/3(浅黄橙)	○	○			○	○		口縁付近の一部黒斑(黒石)
	235	SI6	D-27	IIb	土器	鉢	口縁～脚部	(14.0)	脚台9.4	10.5	ヘラナデ	5YR4/6(赤褐)			○				○	−
	236	SI6	D-27	IIb	土器	甕	口縁～胴部	−	脚台8.0	(17.0)	ナデ,ヘラナデ	外)2.5YR4/8(赤褐) 内)2.5YR4/6(赤褐)		○			○	○	○	小型甕
43	238	SI7	D-27	IIb IIc	土器	甕	口縁～胴部	(22.3)	−	(16.1)	ヘラナデ	外)明褐灰(表面は部分的に橙) 内)2.5YR(橙)					○	○	○	−
	239	SI7	D-27	IIb	土器	甕	口縁～胴部	24.0	−	(11.8)	外)摩滅 内)ナデ	外)7.5YR7/8(橙) 内)7.5YR7/8(橙)	○				○	○	○	−
	240	SI7	D-27	IIb	土器	壷	頸部～肩部	−	−	(2.9)	外)ハケナデ 内)指頭押圧,ナデ	2.5YR5/6明赤褐								−
	241	SI7	D-27	IIb	土器	壷	頸部～肩部	−	−	(12.6)	外)タタキ,ヘラナデ 内)ヘラナデ	2.5YR5/6明赤褐			○		○	○	○	−
45	242	SI8	−	埋土	土器	甕	口縁部	(19.2)	−	(4.4)	ナデ	10YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	−
	243	SI8	E-27	IIc-2	土器	甕	肩部	−	−	(3.9)	ナデ,ハケナデ	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	244	SI8	−	−	土器	甕	脚部	−	(10.2)	(6.4)	外)ハケナデ,指頭押圧 内)ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)				○		○	○	−
	245	SI8	−	埋土	土器	甕	脚部	−	12.4	(7.5)	外)ユビナデ,ナデ,ミガキ 内)工具ナデ,ナデ	5YR6/6(橙)				○	○	○	○	−
	246	SI8	E-27	IIc-2	土器	甕	脚部	−	9.6	(7.5)	ハケナデ,ナデ	10YR6/4(にぶい黄橙)		○	○		○	○	○	−
	247	SI8	E-27	−	土器	高坏	脚部	−	−	(7.3)	外)指頭押圧 内)ユビナデ,ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)				○	○	○	○	−
	248	SI8	E-27	−	土器	甕	脚部	−	−	(3.9)	外)ユビナデ 内)摩滅	外)2.5Y8/2(灰白) 内)2.5Y7/2(灰黄)	○				○		○	−
	249	SI8	E-27	−	土器	甕	脚部	−	(6.8)	(5.1)	ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR2/1(黒褐)			○			○	○	−
	250	SI8	D･E-27	IIc-2	土器	鉢or壷	底部	−	(2.2)	(3.8)	外)摩滅 内)指頭押圧,摩滅	10YR8/4(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	251	SI8	E-27	−	土器	鉢	口縁～底部	(11.1)	−	(6.8)	外)摩滅 内)ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)				○	○	○	○	−
49	252	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	27.8	−	27.5	外)ハケナデ,タタキ,ナデ 内)指頭押圧	10YR8/3(浅黄橙)				○		○	○	被熱
	253	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	(24.0)	−	(18.0)	外)ハケナデ,指頭押圧 内)摩滅	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)			○	○	○	○	○	−
	254	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	24.0	−	(16.4)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)5YR7/8(橙)	○		○		○	○	○	−
50	255	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	(29.6)	−	(12.0)	外)摩滅 内)ナデ,摩滅	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○			○	○	○	○	−
	256	SI10	E-27	IIc	土器	甕	口縁～胴部	(27.3)	−	(18.6)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/2(灰褐)	○		○			○	○	−
	257	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	(27.6)	−	(12.1)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)工具ナデ	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)	○		○			○	○	−
	258	SI10	−	−	土器	甕	口縁部	−	−	(7.9)	外)ナデ 内)ケズリ,ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)			○	○	○	○	○	−

第18表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
51	259	SI10	−	−	土器	甕	口縁～胴部	(28.0)	−	(11.0)	外)タタキ,ナデ 内)工具ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)	○		○			○	○	−
	260	SI10	E-27	Ⅱc	土器	甕	胴部	(24.4)	−	(8.8)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	261	SI10	E-27･28	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	24.5	−	(27.7)	外)タタキ,ケズリ,ナデ 内)工具ナデ,ナデ,指頭押圧	2.5YR6/8(橙)				○	○	○	○	−
	262	SI10	E-27	−	土器	甕	口縁部	(24.4)	−	(7.3)	外)タタキ 内)指頭押圧,ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	263	SI10	−	−	土器	甕	口縁部	−	−	(6.4)	ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)				○	○	○	○	−
	264	SI10	−	−	土器	甕	口縁部	−	−	(3.4)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○				○	○	−
	265	SI10	−	−	土器	甕	胴部	−	−	(7.9)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧,ユビナデ	外)5YR7/3(にぶい橙) 内)5YR7/1(明褐灰)	○				○	○	○	−
	266	SI10	E-27	−	土器	甕	脚部	−	(10.4)	(4.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	2.5YR6/6				○	○	○	○	−
	267	SI10	−	−	土器	甕	脚部	−	(9.4)	(5.4)	ナデ	外)10YR7/6(明黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○	○			○	○	○	−
	268	SI10	E-27	−	土器	甕	脚部	−	(11.6)	(6.5)	外)摩滅 内)ナデ	2.5YR7/8(橙)	○	○			○	○	○	−
	269	SI10	E-27	−	土器	甕	脚部	−	(9.4)	(5.8)	外)ユビナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)	○				○	○	○	−
52	270	SI10	−	−	土器	壷	口縁～胴部	15.4	−	(20.0)	外)ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR5/3(にぶい黄褐)	○			○	○	○	○	−
	271	−	E-28	Ⅱc上	土器	壷	頸部	(19.6)	−	(8.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	2.5YR6/8(橙)	○		○			○	○	−
	272	SI10	−	−	土器	壷	口縁部	−	−	(2.8)	ナデ	10YR8/3(浅黄橙)		○			○	○	○	−
	273	SI10	−	−	土器	壷	口縁部	−	−	(3.5)	ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	274	SI10	−	−	土器	壷	口縁部	(13.2)	−	(7.0)	外)ユビナデ,ナデ 内)ハケナデ,ユビナデ,ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○		○	○	○	二重口縁
	275	SI10	−	−	土器	壷	頸部	−	−	(4.1)	摩滅	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/2(灰白)					○	○	○	−
	276	SI10	E-27	−	土器	壷	胴部	−	−	(8.9)	外)ナデ 内)指頭押圧	7.5YR7/6(橙)	○		○			○	○	−
	277	SI10	E-28	−	土器	壷	胴部	−	−	(2.7)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)2.5YR6/1(黄灰)	○				○	○	○	−
	278	SI10	−	−	土器	壷	胴部	−	−	(3.2)	外)ナデ 内)指頭押圧	10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	279	SI10	−	−	土器	壷	胴部	−	−	(4.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○	○	○			○	○	−
	280	SI10	−	−	土器	壷	胴部	−	−	(4.0)	ナデ,指頭押圧	外)5YR6/8(橙) 内)5YR5/8(明赤褐)				○	○	○	○	−
	281	SI10	−	−	土器	壷	胴部	−	−	(5.8)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)	○		○			○	○	−
	282	SI10	E-27	Ⅱc	土器	壷	胴部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)				○	○	○	○	−
53	283	SI10	E-28	Ⅱc	土器	壷	胴部	−	−	(7.7)	摩滅	外)5YR7/6(橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	284	SI10	E-27	Ⅱc	土器	壷	底部	−	−	(2.8)	外)タタキ 内)ナデ	5YR6/6(橙)			○			○	○	丸底壷
	285	SI10	−	−	土器	壷	底部	−	−	(4.0)	外)摩滅 内)指頭押圧	2.5YR5/8(明赤褐)			○			○	○	尖底壷
	286	SI10	−	−	土器	壷	底部	−	(3.4)	(2.3)	外)摩滅 内)指頭押圧	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR2/2(黒褐)			○			○	○	平底壷
	287	SI10	−	−	土器	壷	口縁部	−	−	(3.3)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○				○	○	○	二重口縁
	288	SI10	−	−	土器	高坏	坏～脚部	−	−	(2.5)	摩滅	外)7.5YR6/2(灰褐) 内)7.5YR5/2(灰褐)			○			○	○	−
	289	SI10	E-27	−	土器	高坏	脚部	−	−	(8.6)	ハケナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR4/2(灰褐)	○		○	○	○	○	○	−
55	290	SI11	E-29･30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ,タタキ,ナデ 内)ハケナデ,ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)		○					○	−
	291	SI11	E-29･30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(5.9)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)10YR6/1(褐灰) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○	○		○	○	−
	292	SI11	E-30	−	土器	甕	脚部	−	(9.0)	(7.2)	外)ユビナデ 内)ハケナデ,ユビナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○	○		○	○	−
	293	SI11	E-30	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	−	(3.5)	摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)		○	○			○	○	−
	294	SI11	E-30	−	土器	甕	脚部	−	(7.8)	(4.2)	摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)2.5Y7/2(灰黄)		○	○		○	○	○	−

第19表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
55	295	SI11	E-29	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(11.0)	(4.6)	外)摩滅 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)	○		○			○	○	−
	296	SI11	E-29・30	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(3.5)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)						○	○	−
	297	SI11	E-30	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(5.2)	外)ハケナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR5/6(明赤褐)			○		○		○	−
	298	SI11	E-30	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ 内)摩滅	2.5YR5/6(明赤褐)	○					○	○	−
	299	SI11	E-29・30	Ⅳ	土器	壷	底部	−	−	(2.3)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)7.5YR4/1(褐灰)	○					○	○	丸底壷
	300	SI11	E-29・30	Ⅳ	土器	高坏	坏部	−	−	(2.8)	摩滅	外)2.5Y5/6(明赤褐) 内)5YR6/6(橙)				○		○	○	−
	301	SI11	E-29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(3.8)	外)ハケナデ 内)ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)					○	○	○	穿孔あり
	302	SI11	E-29・30	Ⅳ	土器	壷	口縁～胴部	−	−	(3.0)	摩滅	7.5YR7/4(にぶい橙)						○		小型丸底壷
	303	SI11	E-30	Ⅳ	土器	壷	頸部	−	−	(3.8)	外)ミガキ 内)ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR6/6(橙)						○	○	免田式土器・長頸壷
57	304	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	(22.8)	−	(19.9)	外)指頭押圧,ナデ 内)摩滅	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)			○			○	○	−
	305	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	−	(12.3)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ,ハケナデ,指頭押圧	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	306	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	(23.4)	−	(9.7)	ハケナデ,ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○	○		○	○	−
	307	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(10.3)	ハケナデ,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	308	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(4.1)	ハケナデ,ナデ	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	309	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(4.8)	摩滅	10YR6/1(褐灰)		○				○	○	−
	310	SI12	E-29・30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(3.5)	ハケナデ,ナデ	7.5YR6/4(にぶい黄橙)				○		○	○	−
	311	SI12	E-30	−	土器	甕	口縁部	−	−	(5.6)	ナデ	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○	○				○	○	−
	312	SI12	E-29・30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	6.0	ナデ	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	313	SI12	E-30	−	土器	甕	口縁部	−	−	(3.1)	外)指頭押圧,摩滅 内)摩滅	外)10YR6/1(褐灰) 内)10YR6/1(褐灰)	○		○			○	○	−
	314	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	頸部	−	−	(5.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR3/1(黒褐)			○			○	○	−
	315	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	胴～底部	−	−	(9.8)	外)摩滅 内)ヘラナデ,指頭押圧	2.5YR7/8(橙)	○		○			○	○	−
	316	SI12	E-30	−	土器	甕	胴部	−	−	(6.1)	外)摩滅 内)タテハケ	5YR6/6(橙)				○		○	○	黄白石
	317	SI12	E-30	−	土器	甕	脚～底部	−	(9.9)	(5.0)	外)ナデ,摩滅 内)ナデ	5YR8/2(灰白) (一部明褐灰)	○		○	○		○		黒石
	318	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	脚～底部	(10.4)	−	(4.4)	外)摩滅 内)工具ナデ	2.5YR7/8(橙)	○		○	○			○	黒石
	319	SI12	E-30	Ⅳ	土器	甕	脚～底部	−	10.7	(7.2)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ユビナデ	7.5YR7/6(橙)	○		○	○				−
	320	SI12	−	Ⅳ	土器	甕	脚～底部	−	9.8	−	外)ヘラナデ 内)ハケナデ	5YR6/6(橙)			○		○	○	○	−
58	321	SI12	E-30	Ⅳ	土器	壷	脚～底部	−	−	(8.2)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/1(灰白)	○		○		○	○	○	−
	322	SI12	E-30	−	土器	壷	胴部	−	−	(12.5)	外)タタキ,摩滅 内)摩滅	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/1(灰白)	○				○	○	○	−
	323	SI12	E-30	−	土器	壷	底部	−	−	(4.4)	外)ヘラナデ,ケズリ 内)ヘラナデ,指頭押圧	7.5YR8/2(灰白)	○			○	○	○	○	黒石
	324	SI12	E-30	Ⅳ	土器	壷	底部	−	−	(3.2)	外)タタキ,ヘラナデ 内)指頭押圧,ヘラナデ	5YR7/8(橙)	○						○	−
	325	SI12	E-30	Ⅳ	土器	高坏	坏部,脚部の境界	−	−	(2.1)	ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR5/1(褐灰)			○		○	○	○	ソケット状
	326	SI12	E-30	Ⅳ	土器	壷	肩～底部	−	1.9	(13.4)	外)摩滅,ヘラナデ,ハケナデ 内)ヘラナデ,指頭押圧	外)7.5YR6/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)						○	○	小型壷
	329	SI12	E-30	Ⅳ	ガラス小玉	−	−	最大長0.45	最大幅0.4	−	−	−								ガラス

第20表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
60	330	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	(22.0)	−	(5.8)	外)タタキ,摩滅 内)ナデ,摩滅	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○		○		○	○	○	−
	331	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(7.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/2(灰白)			○	○	○	○	○	−
	332	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	(19.6)	−	(5.1)	外)摩滅 内)指頭押圧,ユビナデ	外)10YR5/3(にぶい黄褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)						○	○	−
	333	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	(6.0)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/2(灰褐)			○			○	○	−
	334	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	−	−	4.3	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/3(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
	335	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	甕	口縁～頸部	−	−	(4.8)	摩滅	10YR8/3(浅黄橙)		○			○		○	−
	336	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(10.4)	摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	337	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	頸～肩部	−	−	(3.3)	外)ナデ,ハケナデ 内)ハケナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○	○	−
	338	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	甕	頸～胴部	−	−	(6.3)	外)タタキ 内)ハケナデ,ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○		○		○	○	−
	339	竪穴状遺構	D-28	−	土器	甕	胴～脚部	−	−	(10.0)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	340	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	胴～底部	−	−	(5.5)	摩滅	外)10YR6/8(赤橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	341	竪穴状遺構	D-28	−	土器	甕	胴～脚部	−	−	(5.0)	外)ユビナデ,摩滅 内)摩滅	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	−
	342	竪穴状遺構	D-28	−	土器	甕	底部	−	7.7	(3.6)	外)ユビナデ,ナデ 内)指頭押圧	外)7.5YR6/6(橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	343	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(8.2)	(2.9)	ナデ	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR5/4(にぶい赤褐)		○			○	○	○	−
	344	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	甕	胴～脚部	−	10.6	(7.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)			○		○	○	○	−
	345	竪穴状遺構	−	埋土	土器	甕	脚部	−	−	(3.6)	外)ナデ,ハケナデ 内)摩滅	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)		○	○		○	○	○	−
	346	竪穴状遺構	−	埋土	土器	甕	脚部	−	(10.2)	(4.9)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)10YR7/3(にぶい黄褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)		○		○		○	○	−
	347	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(11.0)	(5.3)	ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)	○	○	○			○	○	−
	348	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(10.0)	(4.2)	ナデ	7.5YR7/6(橙)		○	○		○		○	−
	349	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	10.6	(4.8)	外)ナデ 内)摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)		○			○	○	○	−
	350	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(11.2)	(6.6)	摩滅	外)2.5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)			○		○		○	−
	351	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	(9.2)	(6.4)	外)ユビナデ,ハケナデ 内)ユビナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)5YR6/4(にぶい橙)				○	○	○	○	−
61	352	竪穴状遺構	E-30	Ⅳ	土器	壷	口縁部	(14.4)	−	(6.5)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○				○	○	−
	353	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	口縁部	(11.5)	−	(5.0)	摩滅	2.5YR6/8(橙)		○	○			○		−
	354	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(3.2)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	5YR5/6(明赤褐)			○			○	○	二重口縁
	355	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(7.7)	ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/4(にぶい橙)	○		○			○	○	二重口縁
	356	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(4.0)	外)ナデ 内)ハケナデ	2.5YR6/6(橙)	○		○		○		○	二重口縁
	357	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(3.2)	摩滅	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)			○			○	○	−
	358	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(3.5)	外)ナデ,ハケナデ 内)摩滅	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	二重口縁
	359	竪穴状遺構	D-29	−	土器	壷	頸～胴部	−	−	(12.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ,ケズリ,ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙)		○	○			○	○	−
	360	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	壷	肩～胴部	−	−	(10.3)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/1(褐灰)	○		○		○	○	○	−
	361	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	肩～胴部	−	−	(14.7)	摩滅	5YR6/8(橙)		○	○		○		○	−
	362	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	頸部	−	−	(4.6)	摩滅	5YR6/8(橙)		○	○		○	○	○	−
	363	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	頸～胴部	−	−	(3.7)	外)摩滅 内)ユビナデ,ハケナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR4/1(褐灰)			○				○	−
	364	竪穴状遺構	D-28	Ⅱb	土器	壷	頸部	−	−	(5.0)	摩滅	5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	365	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	肩部	−	−	(5.3)	摩滅	5YR5/8(明赤褐)	○		○			○	○	円形浮文
	366	竪穴状遺構	D-28	Ⅱc	土器	壷	肩部	−	−	(3.1)	外)タタキ,ハケナデ	5YR6/8(橙)	○					○	○	−
	367	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(4.6)	外)ハケナデ 内)摩滅	10YR7/3(にぶい黄橙)		○				○	○	−

第21表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
61	368	竪穴状遺構	−	−	土器	壷	胴部	−	−	(5.0)	外)ナデ 内)指頭押圧	5YR6/6(橙)	○				○		○	−
	369	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(5.2)	摩滅	外)2.5Y7/3(浅黄) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	370	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/6(橙)	○		○		○		○	−
	371	竪穴状遺構	D-29	−	土器	壷	胴部	−	−	(5.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)7.5YR5/1(褐灰)			○		○		○	−
	372	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(5.8)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR5/6(明赤褐)		○	○		○	○	○	−
	373	竪穴状遺構	−	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(2.9)	摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)5YR5/4(にぶい赤褐)		○	○			○		−
62	374	竪穴状遺構	D-29	Ⅱb	土器	壷	肩部	−	−	(9.3)	外)ナデ 内)指頭押圧,ユビナデ	外)2.5YR5/6(明赤褐) 内)5YR5/6(明赤褐)	○		○		○		○	−
	375	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(26.7)	摩滅	外)5YR6/3(橙) 内)5YR6/6(橙)	○	○	○			○	○	穿孔あり
	376	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(5.4)	外)摩滅 内)指頭押圧	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR6/6(橙)	○		○			○	○	−
	377	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(4.5)	摩滅	10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○		○	○	○	−
	378	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(3.6)	外)ハケナデ 内)指頭押圧	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR5/4(にぶい赤褐)			○		○	○	○	−
	379	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(5.1)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○	○	○		○	○	○	−
	380	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(4.1)	ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○			○	○	−
63	381	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	壷	胴～底部	−	−	(32.0)	外)タタキ,ケズリ,ナデ 内)ユビナデ,指頭押圧	2.5YR5/6(明赤褐)		○	○		○	○	○	−
	382	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	底部	−	2.4	(4.9)	外)ナデ 内)摩滅	5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	−
	383	竪穴状遺構	E-29	−	土器	壷	底部	−	2.0	(6.0)	外)ハケナデ,工具ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	−
	384	竪穴状遺構	−	埋土	土器	壷	底部	−	−	(3.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/6(橙)			○		○	○	○	−
	385	竪穴状遺構	D-28･29	−	土器	壷	底部	−	−	(4.1)	摩滅	5YR5/4(にぶい赤褐)		○	○		○		○	−
	386	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	底部	−	(3.6)	(3.8)	外)摩滅 内)指頭押圧	5YR6/6(橙)	○	○	○			○	○	−
	387	竪穴状遺構	D-28	−	土器	壷	底部	−	3.6	(5.3)	ユビナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)	○		○		○	○	○	−
	388	竪穴状遺構	D-28	−	土器	壷	底部	−	(5.8)	(5.4)	摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	389	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	底部	−	(5.6)	(6.1)	外)ハケナデ 内)指頭押圧	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)	○		○		○	○	○	−
	390	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	底部	−	−	(8.8)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)	○		○		○	○	○	−
64	391	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	(25.4)	−	(5.1)	外)ケズリ 内)摩滅	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	スス付着
	392	竪穴状遺構	−	Ⅳ	土器	高坏	坏部	(22.2)	−	(4.7)	外)摩滅 内)ハケナデ	7.5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	393	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	(19.2)	−	(3.5)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)5YR7/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○		○	○	○	−
	394	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	口縁部	−	−	(5.6)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR5/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	スス付着
	395	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	−	−	(4.4)	外)ナデ 内)ナデ,ハケナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)2.5Y4/1(黄灰)	○		○				○	−
	396	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	−	−	(2.7)	外)ナデ 内)ユビナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	397	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	−	−	(4.9)	外)摩滅 内)ナデ	5YR8/4(淡橙)					○	○	○	−
	398	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	坏部	−	−	(3.2)	摩滅	7.5YR7/8(黄橙)			○			○	○	−
	399	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(6.6)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	400	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	(10.8)	(8.0)	摩滅	5YR5/8(明赤褐)		○			○		○	−
	401	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	(13.2)	(4.5)	外)工具ナデ,ナデ 内)ナデ,ケズリ	10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○	○	○	○	○	−
	402	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅴ	土器	高坏	坏～脚部	−	−	(2.3)	ナデ	外)10YR5/2(灰黄褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)	○			○	○	○		−
	403	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(4.4)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)						○	○	−
	404	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(8.5)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR6/1(褐灰)				○	○		○	−

第22表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
64	405	竪穴状遺構	D-28	−	土器	高坏	脚部	−	−	(7.4)	ナデ	5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	406	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(8.0)	摩滅	7.5YR6/4(にぶい橙)				○	○	○	○	穿孔あり
	407	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	脚部	−	−	(7.1)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○		○		○	−
65	408	竪穴状遺構	D-28	Ⅱb	土器	蓋	つまみ	(2.8)	−	(2.1)	−	10YR7/3(にぶい黄橙)			○	○			○	−
	409	竪穴状遺構	D-29	Ⅳ	土器	蓋	天井部～口縁	−	(30.4)	(12.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)指頭押圧,ケズリ,ナデ ハケナデ,ミガキ	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○		○		○	スス付着
	410	竪穴状遺構	D-28	−	土器	鉢	胴～底部	−	(4.8)	(3.4)	外)ケズリ,ナデ 内)ハケナデ	外)5YR5/4(にぶい赤褐) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)		○					○	−
	411	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	壷	肩部	−	−	(5.0)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○		○	○	○	免田式土器
	412	竪穴状遺構	D-28	Ⅱc	土器	壷	肩部	−	−	(3.5)	ナデ	7.5YR7/3(にぶい橙)			○		○		○	免田式土器･重弧文
	413	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	肩部	−	−	(3.6)	外)ナデ 内)ユビナデ	5YR6/6(橙)					○	○	○	免田式土器
	414	竪穴状遺構	D-28	Ⅳ	土器	鉢	完形	(16.2)	5.6	8.8	外)タタキ,ユビナデ 内)ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○			○	○	○	○	−
	415	竪穴状遺構	D-28	−	土器	鉢	口縁～脚部	(11.8)	−	(8.7)	外)ナデ,ユビナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	−
	416	竪穴状遺構	D-28･29	Ⅳ	土器	メンコ	−	5.5	−	−	摩滅	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR6/6(橙)	○		○			○	○	円盤形土製品
	417	竪穴状遺構	D･E-28	Ⅱc	土器	メンコ	完形	6.5	−	−	−	2.5YR6/8(橙)					○	○	○	円盤形土製品
67	421	SK20	D-26	Ⅱc-2	土器	壷	口縁～頸部	(16.0)	−	(8.7)	外)ハケナデ,摩滅 内)摩滅	2.5YR6/8(橙)	○		○		○		○	二重口縁
69	422	SK28	D-28	Ⅱb	土器	高坏	脚部	−	−	(8.4)	ヘラナデ	2.5YR6/8(橙)			○					穿孔あり(4ヵ所)
	423	SK28	D-28	Ⅱb	土器	高坏	脚部	−	脚部13.8	(8.8)	ヘラナデ	5YR6/6(橙)			○		○	○	○	穿孔あり(3ヵ所)
	424	SK30	D-28	−	土器	甕	胴下部	−	−	(11.8)	外)ハケナデ,ヘラナデ 内)ハケナデ	5YR4/4(にぶい赤褐)			○		○	○	○	−
73	425	SK39	E-29	Ⅱb	土器	甕	脚部	−	脚径8.0	(4.6)	摩滅	2.5YR7/6(橙)			○		○	○		黒石
	426	SK39	E-29	Ⅱb	土器	甕	脚部	−	脚径11.2	(4.6)	摩滅	7.5YR7/6(橙)		○	○			○		−
	427	SK39	E-29	Ⅱb	土器	甕	脚部	−	脚径12.0	(4.3)	摩滅	5YR7/8(橙)		○	○		○			−
	428	SK39	E-29	Ⅱb	土器	壷	口縁部	19.8	−	(5.9)	摩滅	7.5YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	−
	429	SK39	E-29	Ⅱb	土器	壷	胴部	−	−	(3.4)	外)− 内)摩滅	2.5YR7/8(橙)					○		○	二叉状口縁
	430	SK39	E-29	Ⅱb	土器	壷	頸～胴部	−	−	(22.5)	外)ナデ,キザミ 内)ケズリ	7.5YR8/4(浅黄橙)				○		○		黒石
	431	SK39	E-29	Ⅱb	土器	壷	胴部	−	−	(5.4)	摩滅	10YR8/3(浅黄橙)			○		○			黒石
75	432	SK41	E-29	Ⅳ	土器	甕	脚部	−	7.0	(3.1)	外)ナデ 内)指頭押圧	7.5YR6/6(橙)	○		○		○	○	○	−
	433	SK41	D･E-29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(3.5)	摩滅	10YR8/3(浅黄橙)						○	○	二重口縁
	434	SK41	D･E-29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(3.4)	ナデ	外)10YR5/1(褐灰) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	−
	435	SK41	D･E-29	Ⅳ	土器	高坏	口縁部	−	−	(1.9)	ナデ	10YR5/3(にぶい黄褐)	○		○	○			○	−
78	436	SK42	D-29	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	(24.4)	−	(10.3)	摩滅	外)5YR4/1(褐灰) 内)5YR6/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	437	SK42	D-28	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	(24.0)	−	(6.8)	摩滅	外)7.5YR7/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○		○	○	○	−
	438	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	口縁～胴部	(10.9)	−	(7.4)	外)ナデ 内)ユビナデ,指頭押圧,ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	439	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	口縁～胴部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ,ケズリ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/2(灰褐) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)		○				○	○	小型丸底壷
	440	SK42	−	−	土器	壷	頸～底部付近	−	−	(28.6)	外)摩滅 内)ユビナデ,指頭押圧,摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○		○	○	○	大型壷
	441	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(4.7)	ナデ	5YR6/6(橙)			○			○	○	二重口縁
	442	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	口縁部	−	−	(1.9)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○			○	○	二重口縁･肥厚口縁
	443	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	肩部	−	−	(6.2)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)		○			○	○	○	−

第23表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
78	444	SK42	D-29	Ⅳ	土器	壷	底部	－	－	(2.2)	外)摩滅 内)指頭押圧	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	－
	445	SK42	D-29	Ⅳ	土器	高坏	胴部	－	－	(4.2)	ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)5YR6/6(橙)			○				○	－
	446	SK43	D-29	－	土器	甕	口縁部	－	－	(4.9)	ナデ	外)10YR4/1(褐灰) 内)10YR6/2(灰黄褐)		○		○		○	○	－
	447	SK43	D-29	－	土器	甕	口縁部	－	－	(4.8)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧	5YR7/6(橙)			○		○	○	○	－
	448	SK43	D-28･29	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(3.4)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)5YR4/1(褐灰) 内)5YR7/8(橙)					○	○	○	－
	449	SK43	D-29	－	土器	甕	頸～胴部	－	－	(7.5)	外)タタキ,ナデ 内)ハケナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/6(橙)		○	○	○	○	○	○	－
	450	SK43	D-28･29	Ⅳ	土器	壷	胴部	－	－	(6.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)		○	○		○	○	○	－
	451	SK43	D-29	－	土器	高坏	口縁部	－	－	(2.4)	摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)5YR5/6(明赤褐)		○	○			○	○	蓋に転用
	452	SK43	D-29	－	土器	高坏	脚部	－	(13.0)	(7.6)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	穿孔あり(2ヵ所)
	453	SK43	D-28･29	Ⅳ	土器	高坏	口縁部	－	－	(4.5)	外)ナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○	○	○	－
79	454	SK45	C-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	－	－	(5.1)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)						○	○	－
	455	SK45	C-29	Ⅲ	土器	高坏	坏部	－	－	(3.1)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ミガキ	5YR6/6(橙)					○	○	○	－
80	456	SK50	E-30	Ⅳ	土器	甕	口縁部	－	－	(2.9)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)7.5Y6/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○				○	－
	457	SK50	E-30	Ⅳ	土器	壷	底部	－	3.0	(2.6)	外)摩滅 内)工具ナデ	10YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	－
85	459	SX4	C-26	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	16.9	－	(20.1)	外)ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	5YR7/8(橙)			○		○	○	○	スス付着
	460	SX4	C-26	Ⅱb	土器	甕	口縁～胴部	17.8	－	(14.2)	外)ハケナデ 内)ユビナデ,ケズリ,ナデ	10YR8/4(浅黄橙)	○				○	○	○	－
	461	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁～胴部	(27.6)	－	(12.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/8(橙)		○	○			○	○	－
	462	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁～胴部	－	－	(12.8)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○		○			○	○	－
	463	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁～胴部	－	－	(10.0)	摩滅	外)10YR6/1(褐灰) 内)10YR7/1(灰白)	○		○			○	○	－
	464	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁部	－	－	(5.7)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	－
	465	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	口縁部	－	－	(5.5)	外)タタキ,ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/6(橙)	○				○	○	○	－
	466	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	甕	脚部	－	9.6	(12.1)	外)ユビナデ,タタキ,ナデ 内)工具ナデ	外)2.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/2(灰褐)			○		○	○	○	－
	467	SX4	C-26	Ⅱb	土器	甕	胴～脚部	－	10.9	(5.6)	摩滅	外)2.5YR7/4(淡赤橙) 内)5YR7/6(橙)	○		○		○		○	－
86	468	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	口縁～胴部	12.9	－	(23.4)	外)摩滅 内)ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/2(灰白)			○		○		○	二重口縁
	469	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	口縁～頸部	(16.0)	－	(9.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR5/8(明赤褐)			○		○		○	二重口縁
	470	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	頸部	－	－	(6.7)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	5YR7/6(橙)		○				○	○	－
	471	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	頸部	－	－	(3.3)	外)摩滅 内)指頭押圧	外)5YR7/8(橙) 内)5YR6/8(橙)	○	○	○		○	○	○	－
	472	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	壷	胴部	－	－	(12.4)	ハケナデ,ナデ	5YR5/8(明赤褐)			○				○	－
	473	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	胴部	－	－	(16.2)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧	5YR6/6(橙)	○	○	○		○	○	○	－
87	474	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	壷	胴部	－	－	(16.0)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)	○	○		○		○	○	－
	475	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	胴部	－	－	(6.1)	摩滅	5YR5/8(明赤褐)	○		○		○		○	－
	476	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	壷	胴部	－	－	(4.8)	外)ナデ 内)ユビナデ	5YR5/8(明赤褐)			○				○	－
	477	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	胴～底部	－	－	(33.6)	外)摩滅 内)指頭押圧	2.5YR6/8(橙)	○		○		○	○	○	－
	478	SX4	C-26	Ⅱb	土器	壷	底部	－	－	(8.4)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR4/1(褐灰)		○			○	○	○	－
	479	SX4	C-26	Ⅱb	土器	高坏	脚部	－	－	(6.0)	外)摩滅 内)ナデ	7.5YR7/6(橙)					○	○	○	－
	480	SX4	C-26	Ⅱc-2	土器	高坏	脚部	－	－	(9.9)	外)摩滅 内)ナデ	10YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	－

第24表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
90	482	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～脚部	(26.2)	10.0	31.6	外)タタキ,ナデ,ケズリ 内)ナデ	外)2.5Y7/4(淡赤橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○			○	○	–
	483	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(18.2)	–	(8.1)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ナデ	7.5YR5/3(にぶい褐)		○				○		–
	484	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(17.2)	–	(11.3)	外)ナデ 内)ハケナデ	外)5YR8/3(淡橙) 内)5YR7/6(橙)			○			○	○	–
	485	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(24.2)	–	(7.1)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ	10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	–
	486	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(27.2)	–	(14.4)	外)タタキ,ナデ,ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	–
91	487	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(26.0)	–	(29.9)	外)ナデ,ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ,ケズリ	外)5YR6/8(橙) 内)2.5YR7/8(橙)			○		○	○	○	–
	488	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(23.1)	–	(30.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)指頭押圧	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)		○	○			○	○	–
	489	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	胴部	(24.6)	–	(12.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	5YR7/8(橙)			○			○	○	–
	490	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(24.4)	–	(9.2)	ハケナデ,ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR5/3(にぶい黄褐)			○				○	–
	491	SX5	D-26	Ⅱ	土器	甕	口縁～胴部	(24.8)	–	(9.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)			○			○	○	–
	492	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(23.0)	–	(14.9)	外)摩滅 内)ハケナデ	7.5YR7/6(橙)			○			○	○	–
	493	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(23.6)	–	(11.5)	摩滅	5YR6/8(橙)			○			○	○	–
92	494	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(22.0)	–	(29.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	7.5YR7/6(橙)			○			○	○	–
	495	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(24.4)	–	(18.6)	ハケナデ,ナデ	10YR6/3(にぶい黄橙)		○	○		○	○	○	–
	496	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(29.2)	–	(9.0)	摩滅	5YR7/8(橙)		○			○	○	○	–
	497	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	(24.8)	–	(6.9)	ナデ	5YR5/6(明赤褐)			○		○		○	–
	498	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁部	(22.2)	–	(4.0)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)		○	○				○	–
	499	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁部	(26.0)	–	(3.9)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)		○	○			○	○	–
	500	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁部	–	–	(5.7)	–	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○		黄白色の粘土粒
	501	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～胴部	–	–	(8.4)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	7.5YR6/6(橙)			○			○	○	–
	502	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁部	–	–	(3.5)	摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○	○	–
	503	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁部	–	–	(8.8)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)		○	○			○	○	–
	504	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	口縁～肩部	–	–	(5.6)	ハケナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	–
93	505	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	頸～胴部	–	–	(10.9)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)	○		○			○	○	–
	506	SX5	D-26	Ⅱc-1	土器	甕	頸～胴部	–	–	(5.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ケズリ,ナデ	外)2.5YR4/6(赤褐) 内)2.5YR4/6(赤褐)		○				○	○	–
	507	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	頸～胴部	–	–	(10.0)	外)タタキ,ナデ 内)ケズリ,ハケナデ, 指頭押圧	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)		○			○	○	○	–
	508	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	底部～脚台	–	–	(4.7)	外)ハケナデ,ユビナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)5YR7/8(橙) 内)2.5YR2/1(黒褐)			○			○	○	–
	509	SX5	D-26	Ⅱc	土器	甕	底部～脚台	–	11.0	(10.2)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)2.5Y7.2(灰黄)			○			○	○	–
	510	SX5	D-26	Ⅱc-2	土器	甕	底部～脚台	–	(11.8)	(5.8)	ナデ	5YR7/8(橙)			○			○	○	–
	511	SX5	D-26	Ⅱc	土器	壷	口縁～頸部	(21.0)	–	(13.8)	外)ナデ,ユビナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)			○			○	○	二重口縁
	512	SX5	D-26	Ⅱc	土器	壷	口縁～頸部	(17.0)	–	(7.2)	外)ハケナデ 内)摩滅	10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	二重口縁
	513	SX5	D-26	Ⅱc-2	土器	壷	口縁部	–	–	(3.3)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)2.5Y7/3(浅黄)			○			○	○	–
	514	SX3	C-23	Ⅱb	土器	壷	口縁部	–	–	(4.0)	外)ミガキ,ハケナデ 内)ハケナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)5YR6/8(橙)			○			○	○	–
	515	SX5	D-26	Ⅱc	土器	壷	胴部	–	–	(3.5)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)					○	○	○	–
	516	SX5	D-26	Ⅱc-2	土器	壷	口縁～胴部	(16.4)	–	(8.2)	外)ナデ 内)摩滅	10YR8/3(浅黄橙)	○	○	○		○		○	小型丸底壷
	517	SX5	D-26	Ⅱc	土器	壷or鉢	口縁部	(12.6)	–	(4.8)	ナデ	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○				○	○	小型丸底壷or鉢
	518	SX5	D-26	Ⅱc	土器	高坏	口縁部	(25.2)	–	(5.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR5/4(にぶい赤褐)		○	○				○	–
	519	SX5	D-26	Ⅱc-2	土器	高坏	口縁部	(30.0)	–	(4.2)	外)ハケナデ,ナデ,ミガキ 内)ハケナデ	外)7.5YR7/8(黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○					○	○	–

第25表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
95	520	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	(29.2)	–	(10.5)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	–
	521	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁～頸部	(31.2)	–	(7.8)	外)タタキ,ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○				○	○	○	–
	522	SX7	D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁～胴部	(17.9)	–	(5.8)	外)ナデ,ハケナデ 内)ハケ,ナデ,ケズリ	外)10YR6/4(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)			○					–
	523	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	(16.4)	–	(3.9)	ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○			○				–
	524	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁～胴部	(18.0)	–	(13.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ,ハケナデ,ケズリ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○	○			○	○	–
	525	SX7	–	–	土器	甕	頸～胴部	–	–	(12.0)	外)ナデ,ハケ 内)ハケナデ,ケズリ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○					–
	526	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	頸～胴部	–	–	(7.3)	外)ナデ,ハケ 内)ハケ,ユビナデ,ケズリ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○			○	○	–
	527	SX7	C-29	Ⅲ	土器	甕	頸～胴部	–	–	(6.4)	外)ナデ,ハケ 内)ナデ,ハケ,ケズリ	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)7.5YR6/2(灰褐)		○				○	○	–
	528	SX7	D-29	Ⅲ	土器	甕	胴部	–	–	(9.2)	外)ナデ,ハケ 内)ハケ,ナデ,ケズリナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○			○				–
96	529	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁～胴部	–	–	(5.8)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	外)10YR4/2(灰黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	–
	530	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	–	–	(5.3)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ユビナデ	外)7.5YR4/2(灰褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○	○		○	○	–
	531	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	–	–	(3.5)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	–
	532	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	頸～胴部	–	–	(9.6)	外)ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧	5YR5/4(にぶい赤褐)			○	○	○	○	○	–
	533	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	頸～胴部	–	–	(12.2)	外)タタキ,ユビナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/6(橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○			○	○	○	–
	534	SX7	C･D-29	–	土器	甕	胴～脚台	–	(9.3)	(7.1)	外)ハケナデ,ナデ,ユビナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○		○	○	○	–
	535	SX7	D-29	Ⅲ	土器	甕	脚台	–	8.0	(5.1)	外)ハケナデ,ユビナデ 内)指頭押圧	外)5YR6/6(橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)				○	○	○	○	–
	536	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	脚台	–	(10.0)	(5.2)	外)ハケナデ 内)ナデ	2.5YR6/8(橙)	○		○		○		○	–
	537	SX7	C･D-29	–	土器	甕	胴～底部	–	(6.6)	(4.2)	ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR4/1(褐灰)				○		○	○	–
	538	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	胴～底部	–	(8.0)	(5.4)	外)タタキ,ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	外)5YR7/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○			○	○	–
	539	SX7	–	–	土器	甕or鉢	胴～底部	–	8.6	(16.1)	外)タタキ,ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○		○	○	○	–
	540	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	甕	胴～底部	–	7.0	(7.8)	外)タタキ,ハケナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)5YR6/6(橙) 内)5YR4/1(褐灰)				○	○	○	○	–
	541	SX7	C･D-29	–	土器	甕	胴～底部	–	4.8	(13.1)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ,工具ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	–
97	542	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.4)	ハケナデ,ナデ	10YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	–
	543	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.9)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ	2.5YR5/6(明赤褐)	○		○			○	○	二重口縁
	544	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.6)	摩滅	外)2.5YR5/4(にぶい赤褐) 内)5YR5/6(明赤褐)	○	○	○		○		○	二重口縁
	545	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	口縁～頸部	(15.0)	–	(9.7)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,ナデ	2.5YR6/8(橙)	○		○		○	○	○	二重口縁
	546	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	(17.4)	–	(3.6)	外)タタキ 内)ナデ	外)10YR5/6(赤) 内)2.5YR6/4(にぶい橙)	○		○			○	○	二重口縁
	547	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(4.8)	摩滅	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)5YR5/4(にぶい赤褐)	○		○			○	○	二重口縁
	548	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.4)	ナデ	5YR5/4(にぶい赤褐)		○	○		○	○	○	二重口縁
	549	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁～頸部	(17.2)	–	(6.2)	外)タタキ,ナデ,ハケナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)				○	○	○	○	二重口縁
	550	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	(16.8)	–	(9.2)	外)ナデ,指頭押圧 内)ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	二重口縁
	551	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.0)	ナデ	10YR6/4(にぶい黄橙)			○			○	○	二重口縁
	552	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	–	–	(5.4)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	10YR6/4(にぶい黄橙)			○			○	○	二重口縁･肥厚口縁
	553	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	頸部	–	–	(5.1)	外)ハケナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR5/2(灰褐) 内)7.5YR4/2(灰褐)	○	○	○			○	○	–
	554	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	頸部	–	–	(3.2)	ハケナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)2.5YR5/6(明赤褐)	○		○			○	○	二重口縁
	555	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	頸部	–	–	(7.2)	外)摩滅 内)ナデ,ハケナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	二重口縁
	556	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	頸部	–	–	(3.9)	外)ユビナデ 内)摩滅	2.5YR5/6(明赤褐)		○	○			○	○	二重口縁
	557	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	肩部～底部	–	–	(20.6)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ,ケズリ,ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)		○	○	○		○	○	被熱

第26表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
98	558	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(18.6)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	外)10YR8/6(黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	559	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(11.8)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ	7.5YR6/6(橙)	○			○	○	○	○	−
	560	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(11.8)	外)タタキ,ハケナデ 内)摩滅	外)2.5YR5/6(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○		○	○	○	−
	561	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(9.4)	外)ハケナデ 内)指頭押圧	2.5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	−
99	562	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(6.5)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR4/2(灰褐) 内)5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	563	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(5.3)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)	○				○		○	−
	564	SX7	C･D-29	−	土器	壷	胴部	−	−	(6.2)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	−
	565	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(4.1)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)5YR5/4(にぶい赤褐) 内)5YR6/6(橙)		○			○	○	○	−
	566	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(3.3)	外)ハケナデ 内)摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	567	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(4.4)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)					○	○	○	−
	568	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(2.6)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	569	SX7	C-29	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(2.2)	摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)10YR5/1(褐灰)			○		○		○	−
	570	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(4.7)	外)ナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR5/4(にぶい褐) 内)7.5YR6/6(橙)		○	○			○	○	−
	571	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	3.9	(7.7)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○	○		○	○	−
	572	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴～底部	−	2.0	(10.1)	外)摩滅 内)ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)				○	○	○	○	−
	573	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	(2.7)	(4.7)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ	10YR5/2(灰黄褐)			○		○	○	○	−
	574	SX7	−	Ⅲ	土器	壷	底部	−	(5.0)	(4.9)	外)ナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)2.5Y6/1(黄灰)			○		○	○	○	−
	575	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	3.4	(5.7)	外)指頭押圧,ハケナデ 内)ユビナデ	外)5YR3/6(暗赤褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○			○	○	○	○	赤色顔料
	576	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	(5.0)	(4.2)	外)ハケナデ 内)ユビナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)				○	○	○	○	赤色顔料
	577	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	−	(4.0)	外)タタキ 内)指頭押圧	2.5YR6/8(橙)			○		○	○	○	−
	578	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(5.8)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ,工具ナデ	5YR6/6(橙)			○		○	○	○	−
	579	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	坏部	−	−	(5.0)	外)ハケナデ,ミガキ 内)ハケナデ,ユビナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○	○		○	○	−
	580	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	−	坏部	−	−	(2.7)	摩滅	5YR7/6(橙)		○			○	○		−
	581	SX7	D-29	Ⅲ	土器	高坏	坏部	−	−	(7.5)	摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○				○	−
	582	SX7	C-29	Ⅲ	土器	高坏	坏部	−	−	(4.8)	外)ミガキ,ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	−
	583	SX7	D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(8.5)	外)ミガキ,ユビナデ 内)ユビナデ	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	584	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(9.1)	外)ユビナデ 内)ユビナデ,ハケナデ	外)2.5YR6/4(にぶい橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○	○	○		○	○	○	−
	585	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(6.3)	ハケナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR5/4(にぶい褐)		○	○			○	○	−
	586	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(6.4)	外)ユビナデ 内)摩滅	外)7.5YR6/6(橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)			○	○		○	○	−
	587	SX7	D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(5.1)	外)ミガキ,ナデ 内)ナデ	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR6/3(にぶい橙)			○	○		○	○	赤色顔料
	588	SX7	D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(8.4)	外)ナデ 内)ユビナデ	7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	−
	589	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	脚部	−	−	(11.4)	外)工具ナデ 内)ナデ	7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	穿孔あり(4ヵ所)
100	590	SX7	C-29	Ⅲ	土器	鉢	口縁部	−	−	(9.2)	外)ユビナデ 内)ハケナデ,ナデ	7.5YR8/6(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	591	SX7	D-29	Ⅲ	土器	鉢	脚～底部	−	(16.2)	(10.7)	外)ナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR6/4(にぶい橙)	○		○			○	○	−
	592	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	鉢	底部	−	(3.5)	(2.4)	外)ユビナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○		○	つまみ状
	593	SX7	C-29	Ⅲ	土器	鉢	口縁～胴部	(11.4)	−	(5.4)	外)ミガキ,ナデ 内)ナデ	外)10R5/6(赤) 内)7.5YR5/3(にぶい褐)	○		○			○	○	赤色顔料

第27表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
100	594	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	鉢	口縁部	−	−	(3.4)	ハケナデ,ナデ	外)7.5YR5/2(灰褐) 内)7.5YR4/6(褐)	○			○	○	○	○	赤色顔料
	595	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	鉢	口縁部	−	−	(4.1)	ハケナデ	10YR6/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	596	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	鉢	口縁部	−	−	(3.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	10YR8/4(浅黄橙)		○	○			○	○	−
	597	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	(12.0)	−	(5.5)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	7.5YR7/6(橙)			○	○		○	○	小型丸底壷
	598	SX7	D-29	Ⅲ	土器	甕	口縁部	(11.8)	−	(4.7)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)						○		−
	599	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	頸～胴部	−	−	(4.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR5/1(褐灰)			○			○	○	小型丸底壷
	600	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(3.5)	外)ユビナデ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR5/1(褐灰)				○	○	○	○	小型丸底壷
	601	SX7	D-29	Ⅲ	土器	壷	底部	−	−	(2.2)	摩滅	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	小型丸底壷(布留系)
	602	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	−	−	(4.2)	外)ミガキ 内)ナデ	外)10YR5/6(赤) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)				○		○	○	小型丸底壷 赤色顔料
	603	SX7	C-29	Ⅲ	土器	壷	口縁部	(14.0)	−	(2.7)	外)ナデ 内)ハケナデ,指頭押圧	外)10YR5/4(赤褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)					○		○	小型丸底壷 赤色顔料
	604	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	胴部	−	−	(3.6)	外)ミガキ 内)ナデ	外)10YR5/6(赤) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○	○		○	○	小型丸底壷 赤色顔料
	605	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	壷	頸～底部	−	7.8	(12.6)	外)ミガキ,ナデ 内)ユビナデ,ケズリ,ナデ 指頭押圧	外)2.5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)	○		○	○	○	○	○	小型丸底壷 赤色顔料 スス付着･被熱
	606	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	高坏	胴部	−	−	(2.3)	外)ミガキ 内)ナデ	外)10YR5/6(赤) 内)10YR6/6(赤橙)			○		○		○	赤色顔料
	607	SX7	C･D-29	Ⅲ	土器	メンコ	完形	5.9	−	−	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR6/8(橙)					○	○	○	円盤形土製品
101	609	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	甕	口縁部	(20.6)	−	(23.3)	外)タタキ,ケズリ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)	○		○		○	○	○	−
	610	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	甕	口縁～頸部	(24.6)	−	(7.9)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
	611	SX8	D-35	Ⅳ	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(5.7)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	612	SX8	D-34･35	−	土器	甕	口縁～胴部	−	−	(4.7)	外)ナデ 内)ケズリ,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	613	SX8	D-35	−	土器	甕	口縁部	−	−	(4.3)	ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○			○	○	−
	614	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	甕	口縁部	−	−	(3.8)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○		○	○	○	−
	615	SX8	D-35	−	土器	甕	口縁～頸部	−	−	(8.2)	ハケナデ,ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○			○	−
	616	SX8	D-35	−	土器	甕	口縁部	(23.6)	−	(10.5)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)10YR8/6(黄橙)		○	○			○	○	−
	617	SX8	D-35	−	土器	甕	口縁部	(20.8)	−	(2.6)	摩滅	5YR6/4(にぶい橙)			○		○		○	−
	618	SX8	D-35	−	土器	甕	脚台	−	−	(4.3)	外)摩滅 内)ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	619	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	甕	脚台	−	9.8	(5.4)	ハケナデ	5YR6/6(橙)			○			○	○	−
	620	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	甕	脚台	−	(10.4)	(7.5)	外)工具ナデ,ナデ 内)ナデ	外)2.5Y7/3(浅黄) 内)2.5Y7.4(浅黄)	○	○				○	○	−
102	621	SX8	D-35	−	土器	壷	口縁～頸部	(16.2)	−	(5.5)	外)ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR5/2(灰褐)		○		○		○	○	北園上野古墳群に類例あり(朝鮮系)
	622	SX8	D-35	−	土器	壷	口縁～胴部	16.4	−	(12.3)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
	623	SX8	D-35	−	土器	壷	口縁部	(12.6)	−	(9.6)	外)摩滅 内)ハケナデ	5YR6/8(橙)		○			○		○	二重口縁
	624	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	壷	口縁部	−	−	(7.1)	外)ハケナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○			○	○	○	二重口縁
	625	SX8	D-35	−	土器	壷	胴部	−	−	(3.1)	摩滅	7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○		二重口縁
	626	SX8	D-34	−	土器	壷	口縁部	−	−	(3.2)	摩滅	10YR7/4(にぶい黄橙)		○	○			○	○	二重口縁
	627	SX8	D-35	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(3.7)	ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)2.5Y4/1(黄灰)					○	○	○	−
	628	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	壷	口縁下	−	−	(3.6)	ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○	○	○	○	○	二重口縁
	629	SX8	D-35	Ⅳ	土器	壷	胴部	−	−	(3.8)	ナデ	5YR5/4(にぶい赤褐)			○		○	○	○	−
	630	SX8	D-35	−	土器	高坏	口縁～脚部	(27.8)	−	(18.7)	外)ケズリ,ナデ,ハケナデ 内)ナデ,ハケナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	スス付着･穿孔あり 蓋に転用

第28表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
102	631	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	高坏	坏部	(27.8)	–	(4.3)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○		○		○	○	○	スス付着・蓋に転用
	632	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	高坏	坏部	(27.8)	–	(5.6)	外)ケズリ,ナデ 内)摩滅	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	○	○		○		○	スス付着・蓋に転用
	633	SX8	D-35	–	土器	高坏	坏部	(30.4)	–	(4.9)	外)ナデ,ケズリ 内)ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○	○		○	○	スス付着・蓋に転用
	634	SX8	D-35	Ⅱa下	土器	高坏	脚部	–	–	(10.0)	外)摩滅 内)ケズリ,ナデ	7.5YR8/6(浅黄橙)	○		○			○	○	–
	635	SX8	D-35	–	土器	高坏	脚部	–	–	(8.9)	外)ナデ 内)ケズリ,ハケナデ	10YR6/3(にぶい黄橙)		○	○		○	○	○	穿孔あり(3ヵ所)
	636	SX8	D-35	Ⅳ	土器	高坏	脚部	–	–	(9.2)	ナデ	外)5YR5/8(明赤褐) 内)10YR5/2(灰黄褐)	○	○			○	○	○	穿孔あり
	637	SX8	D-35	–	土器	壷	底部	–	–	(1.1)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)			○		○	○	○	小型丸底壷
	638	SX8	D-35	–	土器	壷	底部	–	–	(1.3)	外)タタキ 内)摩滅	外)2.5YR3/1(黒褐) 内)2.5Y7/2(灰黄)			○			○	○	小型丸底壷
	639	SX8	D-35	–	土器	蓋	完形	23.4	–	8.2	ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	スス付着
103	642	–	C･D-26･27	–	土師器	甕	口縁～胴部	(28.6)	–	(10.5)	外)ユビナデ,ナデ 内)摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	–
	643	–	D-25	Ⅱc-2	土師器	甕	口縁～胴部	(20.8)	–	(10.1)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ケズリ,ナデ	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○	○			○	○	○	–
	644	–	D-28	Ⅱb	土師器	甕	口縁～胴部	–	–	(8.2)	ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)				○		○	○	–
	645	–	E-30	Ⅱb	土師器	甕	口縁～胴部	–	–	(9.6)	外)指頭押圧,ケズリ,ナデ 内)ハケナデ,ユビナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○	○	–
	646	–	C-26	Ⅱb	土師器	甕	口縁～胴部	(26.1)	–	(14.0)	外)タタキ,ナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)10YR6/2(灰黄褐)			○		○	○	○	–
	647	–	E-25	–	土師器	甕	口縁～胴部	(22.0)	–	(14.1)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR4/1(褐灰) 内)10YR5/2(灰黄褐)		○					○	–
	648	–	D-35	Ⅱa直下	土師器	甕	口縁部	–	–	(8.7)	外)ハケ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR5/4(にぶい褐) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)			○		○	○	○	–
	649	–	C-23	Ⅱb	土師器	甕	口縁～胴部	–	–	(9.5)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧,ユビナデ,ナデ	外)7.5YR6/4(にぶい橙) 内)7.5YR6/4(にぶい橙)	○		○		○	○	○	–
	650	–	C-23	Ⅱb	土師器	甕	口縁～頸部	–	–	(10.8)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ	5YR6/6(橙)				○		○	○	–
	651	–	E-28	Ⅱc	土師器	甕	口縁～頸部	–	–	(3.8)	ナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)			○			○	○	–
104	652	–	C-26	Ⅱc-2	土師器	甕	口縁～胴部	(26.2)	–	(13.7)	外)ハケナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR7/8(橙)			○		○	○	○	内外面とも膜状に剥離
	653	–	C-26	Ⅱb	土師器	甕	口縁～胴部	(24.6)	–	(9.4)	ハケナデ,ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/8(橙)		○	○			○	○	–
	654	–	D-25	Ⅱc-1上	土師器	甕	口縁～胴部	(22.8)	–	(9.1)	摩滅	外)5YR7/8(橙) 内)5YR7/6(橙)							○	–
	655	–	D-25	Ⅱc-1上	土師器	甕	口縁～頸部	(21.1)	–	(7.2)	摩滅	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)					○	○	○	–
	656	–	D-25	Ⅱc-2	土師器	甕	胴部	–	–	(14.1)	ハケナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○			○		○	○	スス付着
	657	–	E-27	Ⅱc上	土師器	甕	頸～胴部	–	–	(5.1)	外)タタキ 内)ナデ,ハケナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)				○	○	○	○	–
	658	–	D-23	Ⅱb	土師器	甕	胴～脚部	–	–	(10.7)	外)ハケナデ,ナデ,指頭押圧 内)ハケナデ,ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	–
	659	–	D-28	Ⅱb	土師器	甕	胴～脚部	–	–	(14.4)	外)タタキ,ナデ,ユビナデ 内)工具ナデ,指頭押圧,ユビナデ	外)5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)	○			○		○	○	–
	660	–	E-25	Ⅱc-2	土師器	甕	脚台	–	–	(5.4)	外)ユビナデ,ナデ 内)ナデ,指頭押圧	外)2.5YR5/8(にぶい赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)	○		○	○	○	○	○	–
	661	–	E-28	Ⅱb	土師器	甕	脚台	–	–	(6.0)	ナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)		○	○		○		○	–
	662	–	C-26	Ⅱc-2	土師器	甕	脚台	–	(10.6)	(6.6)	外)タタキ,ナデ 内)ナデ,工具ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○	○	–
	663	–	E-25	Ⅱc-2	土師器	甕	脚台	–	(12.1)	(6.2)	外)摩滅 内)ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○	○	–
	664	–	E-25	–	土師器	甕	脚台	–	(10.4)	(5.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	–
	665	–	E-29	Ⅱb	土師器	甕	脚台	–	11.4	(6.1)	ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)			○			○	○	–
	666	–	–	表採	土師器	甕	底部	–	7.4	(4.3)	指頭押圧,ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR5/6(明赤褐)	○		○			○	○	モミ痕
	667	–	D-28	Ⅱb	土師器	甕	胴～底部	–	(7.6)	(5.8)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)5YR6/6(橙)			○			○	○	–

第29表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
105	668	−	E-24	Ⅱc	土師器	壷	口縁～頸部	16.6	−	(7.5)	摩滅	7.5YR8/6(浅黄橙)					○	○	○	−
	669	−	C-26	Ⅰb	土師器	壷	口縁～頸部	−	−	(8.0)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)5YR8/4(淡橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)	○		○		○	○	○	−
	670	−	C-23	Ⅱb	土師器	壷	頸部	−	−	(11.8)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)7.5YR5/3(にぶい褐) 内)5YR5/8(明赤褐)	○	○	○				○	二重口縁
	671	−	D-26	−	土師器	壷	口縁～頸部	14.0	−	(9.6)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	5YR6/8(橙)	○		○				○	二重口縁
	672	−	E-24	Ⅱc	土師器	壷	口縁部	(17.0)	−	(6.2)	ナデ	10YR5/6(赤)	○	○	○			○	○	二重口縁
	673	−	E-27	Ⅱc上	土師器	壷	口縁部	−	−	(3.2)	摩滅	7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	二叉状口縁
	674	−	E-25	Ⅱc-2	土師器	壷	口縁部	−	−	(3.9)	摩滅	5YR7/6(橙)						○	○	二叉状口縁
	675	−	C-26	Ⅱa	土師器	壷	口縁部	−	−	(4.0)	ナデ	外)2.5YR7/2(灰黄) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○		○		○	二叉状口縁
	676	−	−	−	土師器	壷	口縁部	−	−	(3.5)	摩滅	7.5YR8/4(浅黄橙)			○		○		○	二叉状口縁
	677	−	−	−	土師器	壷	口縁部	−	−	(2.5)	摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	二叉状口縁
	678	−	D-35	−	土師器	壷	口縁～頸部	−	−	(5.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)	○				○	○	○	二重口縁
	679	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	口縁～頸部	−	−	(5.3)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	7.5YR7/6(橙)		○			○	○	○	二重口縁
	680	−	D-29	Ⅱb	土師器	壷	肩部	−	−	(5.2)	外)タタキ,ナデ 内)ユビナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	681	−	D-26	Ⅱc-2	土師器	壷	胴部	−	−	(15.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ユビナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○		○		○	○	○	−
	682	−	D-29	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(12.8)	外)タタキ,ハケナデ 内)ケズリ,ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○	○	○	○	○	−
	683	−	E･D-23	Ⅱc-2	土師器	壷	胴部	−	−	(12.1)	外)ケズリ,タタキ,ナデ 内)ユビナデ,工具ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)				○	○	○	○	−
106	684	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(5.1)	外)摩滅 内)ナデ	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)	○		○			○	○	−
	685	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(6.2)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/3(にぶい赤褐)		○	○		○		○	−
	686	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(3.4)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○	○	−
	687	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(3.1)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)				○	○	○	○	−
	688	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(5.6)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○			○	○	−
	689	−	C-26	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(9.1)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	690	−	C-23	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(9.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○		○	○	○	−
	691	−	E-25	Ⅱc-2	土師器	壷	胴部	−	−	(7.8)	外)タタキ 内)摩滅	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR5/1(褐灰)	○		○		○	○	○	−
	692	−	E-27	表土	土師器	壷	胴部	−	−	(3.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/2(灰白)	○		○		○	○	○	−
	693	−	D-35	−	土師器	壷	胴部	−	−	(4.1)	外)− 内)摩滅	外)5YR4/6(赤褐) 内)5YR4/6(赤褐)	○				○	○	○	布目刻み
	694	−	D-35	Ⅳ	土師器	壷	胴部	−	−	(6.7)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	2.5Y8/2(灰白)	○		○			○	○	−
	695	−	C-25	Ⅱc-2	土師器	壷	底部	−	(5.8)	(3.5)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR7/3(にぶい橙) 内)5YR7/3(にぶい橙)	○		○		○	○	○	−
	696	−	D-24	Ⅱc-2	土師器	壷	底部	−	4.2	(4.5)	ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)				○		○	○	−
	697	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	底部	−	(3.4)	(3.0)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	698	−	D-26	Ⅱc上	土師器	壷	底部	−	2.2	(4.4)	摩滅	外)2.5YR6/6(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○	○	○			○	○	−
	699	−	C-25	Ⅱc-2	土師器	壷	底部	−	−	(5.2)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○		○	○	○	−
	700	−	D-25	Ⅱc	土師器	壷	底部	−	(3.6)	(4.0)	外)摩滅 内)指頭押圧	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR7/1(灰白)	○		○			○	○	−
	701	−	C-29	Ⅱb	土師器	壷	底部	−	−	(4.0)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)	○		○				○	−
	702	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	底部	−	−	(3.3)	外)タタキ,ナデ 内)指頭押圧	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)			○		○		○	−
	703	−	E-24	Ⅱc	土師器	壷	胴～底部	−	−	(16.3)	外)ナデ 内)指頭押圧,ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	−

第30表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
107	704	−	E-25	Ⅱc-2	土師器	高坏	坏部	(25.4)	−	(4.4)	摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	705	−	E-29	−	土師器	高坏	坏部	(32.0)	−	(4.5)	外)ケズリ,ナデ 内)ナデ,ハケナデ,ミガキ	外)5YR5/4(にぶい赤褐) 内)5YR5/3(にぶい赤褐)		○		○		○	○	蓋に転用・スス付着
	706	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	坏部	−	−	(6.3)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ナデ	10YR6/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	蓋に転用・スス付着
	707	−	C-26	Ⅱb	土師器	高坏	坏部	−	−	(3.3)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)5YR7/8(橙)		○			○	○	○	−
	708	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	坏部	−	−	(7.8)	外)ハケナデ,ナデ 内)ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/6(橙)				○	○	○	○	−
	709	−	E-31	Ⅱb	土師器	暗文高坏	坏部	−	−	(4.8)	外)ミガキ,ハケナデ 内)ナデ,ハケナデ,ミガキ	外)2.5Y7/2(灰黄) 内)2.5Y5/2(暗灰黄)			○			○	○	−
	710	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	坏部	−	−	(3.2)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ,ミガキ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
	711	−	C-23	Ⅱa	土師器	高坏	脚部	−	−	(3.2)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)						○	○	−
	712	−	E-27	表土	土師器	高坏	脚部	−	−	(4.8)	外)摩滅 内)ナデ	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)						○	○	−
	713	−	−	表採	土師器	高坏	脚部	−	−	(7.8)	外)ナデ,ハケナデ 内)ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○	○			○	○	−
	714	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(5.1)	ナデ	外)5YR5/8(明赤褐) 内)5YR5/8(明赤褐)	○		○		○		○	−
	715	−	E-28	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(5.8)	外)ナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)5YR7/3(にぶい橙) 内)5YR7/3(にぶい橙)		○			○	○	○	−
	716	−	E-25	Ⅱc-1	土師器	高坏	脚部	−	−	(9.1)	摩滅	外)7.5YR8/3(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	穿孔あり(2ヵ所)
	717	−	C-27	Ⅱc-2	土師器	高坏	脚部	−	−	(7.0)	ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)	○				○	○	○	−
	718	−	D-26	Ⅱc上	土師器	高坏	脚部	−	−	(8.0)	外)ナデ 内)ナデ,ハケナデ	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)	○		○		○	○	○	穿孔あり(2ヵ所)
	719	−	E-29	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(5.7)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙)		○	○				○	穿孔あり
	720	−	E-25	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(9.5)	外)ユビナデ,ナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○			○	○	穿孔あり
	721	−	C-26	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(7.1)	ハケナデ,ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)		○	○			○	○	穿孔あり
	722	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(8.8)	外)ナデ 内)ケズリ,ナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)2.5YR5/6(明赤褐)	○		○		○	○	○	−
	723	−	E-24	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	−	(7.8)	摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)5YR6/8(橙)	○	○	○			○	○	−
	724	−	E-35	−	土師器	高坏	脚部	−	9.5	(8.4)	外)ユビナデ 内)ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR6/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	−
	725	−	E-30	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	(11.1)	(10.1)	外)工具ナデ,ユビナデ,ナデ 内)摩滅	7.5YR7/4(にぶい橙)			○	○		○	○	−
	726	−	D-29	Ⅱb	土師器	高坏	脚部	−	(14.6)	(9.3)	外)ユビナデ,ナデ 内)ハケナデ	5YR5/6(明赤褐)			○	○		○	○	−
	727	−	E-25	Ⅱc-2	土師器	高坏	脚部	−	−	(8.0)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)		○		○		○	○	穿孔あり(1ヵ所)
108	728	−	C-26	Ⅱc-2	土師器	坩	口縁～底部	(11.8)	−	(7.9)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)			○		○		○	丸底壷
	729	−	E-27	表土	土師器	坩	底部	−	2.2	(2.7)	ナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)		○	○			○	○	小型丸底壷
	730	−	E-25	−	土師器	壷	口縁～胴部	(16.2)	−	(15.1)	外)ナデ 内)ナデ,工具ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	小型壷
	731	−	E-25	−	土師器	壷	頸～胴部	−	−	(15.7)	外)ナデ 内)ユビナデ,指頭押圧,ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR6/1(褐灰)			○		○	○	○	小型丸底壷
	732	−	D-25	−	土師器	鉢	口縁～底部	(17.4)	(9.0)	(12.5)	ハケナデ,ナデ	外)2.5YR4/8(赤褐) 内)5YR6/6(明赤褐)		○				○	○	−
	733	−	−	−	土師器	鉢	脚台	−	−	(4.1)	ナデ	2.5Y8/2(灰白)		○			○	○	○	穿孔あり(1対)
	734	−	E-30	Ⅳ	土師器	鉢	脚台	−	18.4	(6.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)			○		○	○	○	台付鉢
	735	−	E-30	Ⅱb	土師器	蓋	つまみ	2.5	−	(2.6)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR7/8(橙) 内)7.5YR7/8(黄橙)		○	○			○	○	天井部
	736	−	E-30	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(2.7)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	免田式土器
	737	−	E-25	−	土師器	壷	胴部	−	−	(4.6)	内)ナデ	外)5YR5/6(明赤褐) 内)5YR1.7/1(黒)		○				○	○	免田式土器
	738	−	D-28	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(5.4)	ナデ	外)5YR5/8(明赤褐) 内)10R3/3(暗赤褐)			○		○	○	○	免田式土器・重弧文
	739	−	D-30	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(5.0)	外)ナデ 内)ハケナデ	外)2.5Y5/1(黄灰) 内)5YR7/6(橙)			○			○	○	免田式土器
	740	−	E-30	Ⅱb	土師器	壷	胴部	−	−	(6.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR7/6(橙)			○			○	○	免田式土器
	741	−	C-26	埋土	土師器	メンコ	−	5.1	−	−	−	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)			○		○	○	○	円盤形土製品

第31表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
	754	礫敷	−	−	土師器	甕	口縁～胴部	(24.0)	−	(17.0)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○				○	○	−
	755	礫敷	−	−	土師器	甕	口縁～胴部	−	−	(6.7)	摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)5YR7/8(橙)			○				○	−
	756	礫敷	−	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	−	−	(5.7)	外)ハケナデ 内)ナデ	外)5YR6/8(橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	757	礫敷	−	−	土師器	甕	頸～胴部	−	−	(4.5)	ナデ,ハケナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○	○		○	○	○	種実状圧痕(2か所)
	758	礫敷	D-25	Ⅱc-1	土師器	甕	胴部	−	−	(10.0)	外)タタキ,ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR7/2(明褐灰)		○			○	○	○	−
	759	礫敷	D-25	−	土師器	甕	胴～脚部	−	−	(9.2)	外)ユビナデ,ナデ 内)指頭押圧,ハケナデ,ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)			○	○		○	○	−
	760	礫敷	−	−	土師器	甕	胴～脚部	−	−	(5.0)	外)ユビナデ 内)摩滅	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○		○	○	○	−
111	761	礫敷	−	−	土師器	甕	胴～脚部	−	−	(3.4)	外)ハケナデ,ナデ 内)ハケナデ	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)7.5YR5/4(にぶい褐)	○					○	○	木葉痕
	762	礫敷	D-24	−	土師器	甕	胴～脚部	−	10.8	(7.5)	外)ユビナデ 内)工具ナデ,ナデ	外)7.5YR8/3(浅黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○		○		○	○	○	−
	763	礫敷	−	−	土師器	甕	胴～脚部	−	(9.8)	(5.7)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	764	礫敷	D-24	−	土師器	甕	胴～脚部	−	9.0	(7.5)	外)ユビナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)7.5YR8/2(灰白) 内)7.5YR7/2(明褐灰)	○		○		○	○	○	−
	765	礫敷	D-24	−	土師器	甕	胴～脚部	−	10.6	(5.6)	外)ミガキ,ナデ 内)ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	−
	766	礫敷	D-25	−	土師器	甕	胴～脚部	−	10.0	(4.7)	外)ユビナデ,ナデ 内)工具ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)	○			○	○	○	○	−
	767	礫敷	D-24	−	土師器	甕	胴～脚部	−	10.8	(7.9)	外)ユビナデ 内)ハケナデ,ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)	○			○	○	○	○	−
	768	礫敷	−	−	土師器	甕	胴～脚部	−	12.2	(4.1)	摩滅	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)	○				○	○	○	−
	769	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁～胴部	(15.6)	−	(13.2)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)5YR8/3(淡橙) 内)5YR8/3(淡橙)						○		−
	770	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁～頸部	−	−	6.2	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR6/8(橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)	○		○				○	−
	771	礫敷	D-25	−	土師器	壷	口縁～頸部	(17.7)	−	(5.6)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)		○	○			○	○	−
	772	礫敷	D-25	Ⅱc-1	土師器	壷	口縁～頸部	(18.0)	−	(8.4)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)		○			○	○	○	−
	773	礫敷	C-25	−	土師器	壷	口縁～頸部	(18.4)	−	(6.0)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)			○	○		○	○	−
	774	礫敷	−	−	土師器	壷	頸部	−	−	(4.6)	摩滅	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR6/1(褐灰)		○			○	○	○	−
	775	礫敷	−	−	土師器	壷	頸～胴部	−	−	(7.5)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)		○			○	○	○	−
112	776	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁～頸部	(11.7)	−	(7.3)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)	○		○		○	○	○	二重口縁
	777	礫敷	D-24	−	土師器	壷	頸～胴部	−	−	(8.0)	外)摩滅 内)ハケナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)		○			○	○	○	二重口縁
	778	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁部	−	−	(4.5)	外)ハケナデ,ナデ 内)摩滅	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)			○		○	○	○	二重口縁
	779	礫敷	D-25	−	土師器	壷	口縁～頸部	(18.0)	−	(8.9)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○		○		○	○	○	二重口縁
	780	礫敷	D-24	−	土師器	壷	頸部	−	−	(6.1)	外)ナデ 内)摩滅	外)5YR8/4(淡橙) 内)5YR7/2(明褐灰)						○	○	二重口縁
	781	礫敷	D-24	−	土師器	壷	口縁部	(15.8)	−	(4.9)	外)タタキ,ナデ 内)摩滅	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)	○		○		○	○	○	二重口縁
	782	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁部	(16.0)	−	(3.7)	摩滅	外)5YR8/3(淡橙) 内)5YR8/3(淡橙)	○				○	○	○	二重口縁
	783	礫敷	−	青灰色土	土師器	壷	口縁部	(14.8)	−	(9.4)	外)ナデ 内)摩滅	外)2.5YR4/8(赤褐) 内)2.5YR4/8(赤褐)	○		○		○	○	○	二重口縁
	784	礫敷	D-25	−	土師器	壷	口縁～頸部	(22.4)	−	(6.8)	外)条痕,ナデ,キザミ 内)摩滅	外)10YR4/3(にぶい黄褐) 内)10YR4/2(灰黄褐)	○	○	○			○	○	二重口縁
	785	礫敷	D-25	−	土師器	壷	口縁部	−	−	(4.1)	摩滅	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)					○	○	○	二重口縁・肥厚口縁
	786	礫敷	−	−	土師器	壷	口縁部	−	−	(4.4)	摩滅	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)					○	○		二重口縁・肥厚口縁
113	787	礫敷	−	−	土師器	壷	肩部	−	−	(5.9)	摩滅	外)10YR7/1(灰白) 内)10YR8/1(灰白)			○			○	○	−
	788	礫敷	D-25	−	土師器	壷	口縁～頸部	−	−	(5.8)	外)ハケナデ 内)ナデ	外)5YR8/2(灰白) 内)5YR8/2(灰白)	○			○		○	○	二重口縁
	789	礫敷	−	−	土師器	壷	頸部	−	−	(4.0)	外)ナデ 内)摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR5/8(明赤褐)			○	○	○	○	○	−

第32表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
113	790	礫敷	−	−	土師器	壷	胴部	−	−	(4.6)	摩滅	外)5YR5/8(明赤褐) 内)5YR5/6(明赤褐)			○		○	○	○	−
	791	礫敷	−	−	土師器	壷	胴部	−	−	(5.6)	摩滅	外)5YR8/4(淡橙) 内)7.5YR8/1(灰白)	○				○	○	○	−
	792	礫敷	−	−	土師器	壷	胴部	−	−	(6.0)	外)ナデ 内)摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○			○	○	○	○	−
	793	礫敷	−	−	土師器	壷	胴部	−	−	(6.3)	外)ナデ 内)ユビナデ	外)7.5YR7/3(にぶい橙) 内)7.5YR7/3(にぶい橙)				○	○	○	○	−
	794	礫敷	D-25	Ⅱc-1	土師器	壷	胴部	−	−	(8.2)	摩滅	外)2.5YR4/8(赤褐) 内)2.5YR4/8(赤褐)		○			○	○	○	−
	795	礫敷	−	−	土師器	壷	肩部	−	−	(10.1)	外)ハケナデ 内)摩滅	外)10YR8/2(灰白) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)						○	○	−
	796	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	(6.0)	(3.3)	外)ナデ 内)指頭押圧	外)10YR6/2(灰黄褐) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)	○			○		○	○	−
	797	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	3.8	(4.0)	摩滅	外)5YR5/6(明赤褐) 内)7.5YR3/1(黒褐)				○	○		○	−
	798	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	−	(5.7)	外)ケズリ,ナデ 内)ナデ	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)2.5Y4/2(暗灰黄)	○	○				○	○	−
	799	礫敷	D-24	−	土師器	壷	底部	−	−	(6.8)	摩滅	外)10YR6/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	−
	800	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	(5.2)	(8.0)	外)ケズリ,ナデ,指頭押圧 ユビナデ 内)摩滅	外)5YR6/6(橙) 内)5YR6/6(橙)	○		○			○	○	−
	801	礫敷	D-25	−	土師器	壷	底部	−	−	(6.0)	外)ユビナデ 内)ユビナデ,ナデ	外)10YR7/2(にぶい黄橙) 内)10YR7/2(にぶい黄橙)	○		○			○	○	−
	802	礫敷	D-25	−	土師器	壷	底部	−	−	(8.1)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)		○			○	○	○	−
	803	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	−	(4.0)	外)摩滅 内)指頭押圧	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)2.5Y4/1(黄灰)				○	○	○	○	−
	804	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	−	(8.0)	外)ハケナデ 内)ハケナデ,指頭押圧,ナデ	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○			○	○	−
	805	礫敷	−	−	土師器	壷	底部	−	−	(5.4)	外)摩滅 内)ユビナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR6/8(橙)				○	○	○	○	−
114	806	礫敷	−	−	土師器	坩	口縁～頸部	−	−	(2.8)	摩滅	外)10YR6/6(明黄褐) 内)10YR6/6(明黄褐)					○	○	○	小型丸底壷
	807	礫敷	C-25	−	土師器	坩	つまみ	2.1	−	(1.9)	摩滅	10YR8/6(黄橙)					○	○	○	蓋
	808	礫敷	−	青灰色土	土師器	坩	胴部	−	−	(5.0)	外)ユビナデ,ハケナデ 内)ナデ	外)10YR5/3(にぶい黄褐) 内)10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○		○	○		小型丸底壷
	809	礫敷	−	−	土師器	ジョッキ	底部	−	(8.8)	(5.3)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	免田式土器
	810	礫敷	−	−	土師器	台付坏 or 台付鉢	脚部	−	−	(4.0)	摩滅	5YR6/8(橙)		○				○	○	小型土器
	811	礫敷	−	−	土師器	鉢	口縁部	−	−	(5.9)	外)ハケナデ,ユビナデ 内)ハケナデ	外)10YR1.7/1(黒) 内)10YR3/3(暗褐)		○				○	○	−
	812	礫敷	D-25	−	土師器	壷	胴部	−	−	(5.4)	摩滅	外)10YR7/3(にぶい黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	免田式土器・重弧文
	813	礫敷	−	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(6.2)	摩滅	10YR8/4(浅黄橙)		○	○			○	○	−
	814	礫敷	−	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(3.6)	外)摩滅 内)ナデ	10YR8/2(灰白)	○		○				○	−
	815	礫敷	C-25	Ⅱc-1	土師器	高坏	脚部	−	−	(4.7)	摩滅	10YR8/2(灰白)		○		○		○	○	−
	816	礫敷	E-25	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(7.3)	外)ユビナデ 内)摩滅	外)7.5YR7/6(浅黄橙) 内)7.5YR8/8(黄橙)	○				○	○	○	−
	817	礫敷	−	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(5.8)	外)ユビナデ 内)摩滅	10YR8/3(浅黄橙)	○	○				○	○	−
	818	礫敷	D-25	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(4.8)	摩滅	2.5YR8/2(灰白)	○		○			○	○	−
	819	礫敷	C-25	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(9.5)	摩滅	10YR7/4(にぶい黄褐)				○	○	○	○	−
	820	礫敷	D-25	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(9.4)	外)ユビナデ 内)摩滅	10YR8/3(浅黄橙)				○	○	○	○	穿孔あり
	821	礫敷	−	青灰色土	土師器	高坏	脚部	−	−	(12.0)	外)ユビナデ 内)ナデ	7.5YR8/6(浅黄橙)	○				○	○	○	穿孔あり
	822	礫敷	−	−	土師器	高坏	坏部	−	−	(2.6)	摩滅	外)2.5YR5/8(明赤褐) 内)2.5YR6/8(橙)		○			○	○	○	−
	823	礫敷	−	−	土師器	高坏	脚部	−	−	(5.0)	摩滅	外)7.5YR5/6(明褐) 内)7.5YR6/6(橙)			○		○	○		−
	824	礫敷	−	−	土師器	蓋	天井部	−	−	(4.5)	外)ケズリ,ナデ 内)ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)5YR5/6(明赤褐)		○					○	スス付着
	825	礫敷	−	−	土師器	蓋	天井部～口縁	−	−	(2.5)	摩滅	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)	○					○	○	スス付着

第33表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
119	826	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(16.0)	(14.0)	1.5	回転ナデ	外)5YR7/6(橙) 内)5YR7/6(橙)				○	○		○	ヘラ切り
	827	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(13.8)	11.4	1.5	回転ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)					○	○	○	ヘラ切り
	828	SK51	−	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(15.2)	(12.0)	1.3	回転ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)				○			○	ヘラ切り
	829	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(16.4)	(14.0)	1.5	回転ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)						○	○	ヘラ切り
	830	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(15.8)	(13.6)	1.3	回転ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/2(明褐灰)						○	○	ヘラ切り
	831	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(13.6)	(10.1)	1.5	回転ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)					○		○	ヘラ切り
	832	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	−	−	(1.4)	回転ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)					○	○	○	ヘラ切り
	833	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(16.0)	(12.2)	(1.8)	回転ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)							○	ヘラ切り
	834	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(13.0)	(10.8)	1.2	回転ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)					○	○	○	ヘラ切り・モミ痕
	835	SK51	C-27	−	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(17.2)	(10.8)	2.3	回転ナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)				○		○	○	ヘラ切り
120	836	SK51	C-27	−	土師器	坏	口縁～底部	(15.0)	7.2	3.0	回転ナデ,ヘラケズリ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)			○			○	○	−
	837	SK51	C-27	−	土師器	坏	完形	16.0	8.0	3.7	回転ナデ,ヘラケズリ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	−
	838	SK51	C-27	−	土師器	坏	完形	12.7	6.9	2.8	回転ナデ,ヘラケズリ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)					○	○	○	ヘラ切り
	839	SK51	−	−	土師器	坏	口縁～底部	(15.0)	−	(4.0)	回転ナデ,ヘラケズリ	外)5YR7/8(橙) 内)5YR7/8(橙)						○	○	−
	840	SK51	C-27	−	土師器	坏	口縁～底部	(14.4)	(7.6)	(3.1)	回転ナデ	外)7.5YR6/6(橙) 内)7.5YR6/6(橙)							○	−
	841	SK51	C-27	−	土師器	坏	口縁～底部	−	−	3.0	回転ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)							○	−
	842	SK51	C-27	−	土師器	坏	口縁～底部	−	−	3.1	回転ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)					○		○	−
	843	SK51	C-27	−	土師器	坏	胴～底部	−	−	(1.8)	回転ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)				○			○	ヘラ切り
	844	SK51	−	−	土師器	Ⅲor坏	高台	−	(7.0)	(0.8)	回転ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)							○	−
	845	SK51	−	−	土器	甕	底部	−	(7.0)	(5.3)	外)ユビナデ,ナデ 内)指頭押圧	外)2.5YR7/8(赤褐) 内)2.5YR5/6(明赤褐)				○	○	○	○	−
	846	SK51	−	−	土器	壷	胴～底部	−	−	(6.8)	摩滅	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR7/4(にぶい黄橙)	○				○	○	○	粗製・小型丸底壷
123	847	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	(14.6)	−	(2.6)	回転ナデ	10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	−
	848	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	(15.6)	−	(3.3)	回転ナデ	10YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	−
	849	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	−	−	(2.7)	回転ナデ	10YR8/3(浅黄橙)			○	○		○	○	−
	850	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	−	−	(3.2)	回転ナデ	7.5YR8/3(浅黄橙)			○	○		○		−
	851	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	−	−	(4.4)	回転ナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	−
	852	SK58	E-29	Ⅳ	土師器	坏	底部	−	(8.0)	(0.9)	回転ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	−
	853	SK58	E-29	−	土師器	坏蓋	天井部	−	−	(1.9)	回転ナデ	外)2.5YR6/6(橙) 内)10YR6/3(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	854	SK58	E-29	−	土師器	坏蓋	天井部～口縁	−	−	(1.6)	回転ナデ	外)5Y6/1(灰) 内)2.5Y6/2(灰黄)			○			○	○	−
124	855	SK59	−	−	土師器	Ⅲ	口縁部	−	−	(1.4)	回転ナデ	外)5YR6/6(橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)	○						○	−
128	856	礫敷	E-25	−	土師器	坏	口縁～底部	(12.8)	7.0	−	内)指頭押圧	10YR8/3(浅黄橙)								わ−30
	857	礫敷	E-25	−	土師器	坏	胴～底部	−	(9.0)	(1.6)	−	10YR8/3(浅黄橙)								く−3・ヘラ切り
	858	礫敷	−	−	土師器	坏	胴～底部	−	6.0	(2.1)	−	10YR8/4(浅黄橙)								か−2・ヘラ切り
	859	礫敷	E-25	−	土師器	坏	胴～底部	−	(4.4)	(2.0)	−	10YR8/4(浅黄橙)								わ−29・ヘラ切り
	860	礫敷	E-25	−	土師器	坏	底部	−	6.0	(1.0)	−	10YR8/3(浅黄橙)								わ−30・ヘラ切り
	861	礫敷	D･E-26	−	土師器	坏	底部	−	6.2	(1.6)	摩滅	外)7.5YR8/8(黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	ヘラ切り

第34表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
	862	礫敷	E-25	−	土師器	埦	底部	−	(6.0)	(2.3)	−	YR8/4(浅黄橙)								き−8
	863	礫敷	E-26	−	土師器	埦	脚部	−	脚径8.0	(2.0)	−	5YR7/8(橙)								−
	864	礫敷	−	−	土師器	埦	底部	−	(6.0)	(2.1)	摩滅	2.5YR8/3(淡黄)			○			○		−
	865	礫敷	−	礫敷下層	土器	土錘	紡錘形	最大長(1.5)	最大径(1.4)	孔径0.4	−	7.5YR7/4(にぶい橙)						○	○	い−11
	866	礫敷	−	礫敷下層	土器	土錘	紡錘形	最大長(3.5)	最大径1.7	孔径0.5	−	5YR2/1(黒褐)	○		○					き−1 モミ痕
	867	礫敷	D-25	Ⅱc-2	土器	土錘	紡錘形	最大長(2.8)	最大径1.5	孔径0.6	−	10YR7/3(にぶい黄橙)					○	○	○	−
	868	礫敷	E-26	−	土器	土錘	紡錘形	最大長(3.5)	最大径1.5	孔径0.5	−	5YR7/8(橙)					○	○	○	−
	869	礫敷	E-26	−	土器	土錘	紡錘形	最大長(4.4)	最大径1.6	孔径0.6	−	5YR7/6(橙)			○		○		○	わ−30
	870	礫敷	E-26	−	土器	土錘	紡錘形	最大長(3.6)	最大径1.6	孔径0.6	−	2.5Y8/2(灰白)			○			○		お−6
	871	礫敷	−	礫敷下層	土器	土錘	紡錘形	最大長(4.1)	最大径1.6	孔径0.4	−	7.5YR7/3(にぶい橙)					○	○	○	い−11
	872	礫敷	−	礫敷下層	土器	土錘	紡錘形	最大長(4.4)	最大径1.8	孔径0.4	−	7.5YR7/3(にぶい橙)			○		○	○	○	う−10
	873	礫敷	D-25	Ⅱc-2	土器	土錘	紡錘形	最大長(4.0)	最大径1.9	孔径0.6	−	10YR8/2(灰白)					○	○	○	−
128	874	礫敷	E-25	−	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	13.8	−	−	ナデ	外)5PB7/1(明青灰)								わ−30
	875	礫敷	−	−	須恵器	坏身	口縁～底部	(14.0)	(8.4)	4.7	ナデ	外)7.5Y6/1(灰) 内)7.5Y7/1(灰白)								い−4
	876	礫敷	E-25	−	須恵器	壷	肩部	肩部(10.4)	−	(5.4)	ナデ	外)5Y6/1(灰) 内)5Y7/1(灰白)								−
	877	礫敷	−	−	須恵器	壷	肩部	−	−	(5.4)	ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)10YR8/3(浅黄橙)						○	○	う−5
	878	礫敷	E-25	−	須恵器	甕	口縁部	−	−	(3.1)	−	外)7.5YR4/1(褐灰) 内)7.5YR3/1(黒褐)								き−8
	879	礫敷	E-25	−	須恵器	甕	口縁部	−	−	(5.1)	−	外)5YR4/2(灰褐) 内)10Y5/1(灰)								き−1
	880	礫敷	D-25	−	須恵器	甕	肩部	−	−	(6.0)	外)条痕タタキ 内)同心円当具痕	外)10YR(褐灰) 内)5Y7/1(灰白)								−
	881	礫敷	D-26	−	須恵器	甕	肩部	−	−	(3.3)	外)条痕タタキ 内)同心円当具痕	外)5YR6/4(にぶい橙) 内)5YR8/4(浅黄橙)								−
	882	礫敷	E-25	−	須恵器	甕	肩部	−	−	(3.5)	外)正格子目タタキ 内)同心円当具痕	外)5Y7/1(灰白) 内)5Y6/1(灰)								を−30
	883	礫敷	−	−	須恵器	甕	胴部	−	−	(10.4)	外)正格子目タタキ 内)同心円当具痕,条痕当具痕	外)5Y7/1(灰白) 内)5YR5/3(にぶい赤褐)								き−4
	884	礫敷	E-25	−	須恵器	甕	胴部	−	−	(6.4)	外)条痕タタキ 内)条痕当具痕	外)5Y6/1(灰) 内)2.5Y7/1(灰白)								ろ−29
	885	礫敷	E-25	−	須恵器	甕	肩部	−	−	(3.9)	外)条痕タタキ,ナデ 内)同心円当具痕	外)5B7/1(明青灰) 内)5B7/1(明青灰)								か−1
	886	礫敷	−	礫敷下造成土	須恵器	坏or埦	口縁部	−	−	(2.9)	ナデ	2.5Y7/1(灰白)								黒色石の大きい破片あり 瀬戸焼・く−9
	887	礫敷	−	礫敷	須恵器	壷	肩部	−	−	(1.4)	外)− 内)ナデ	7.5YR(浅黄橙)								瀬戸焼・草花文 細かい土に琥珀・き−1
	889	−	E-25	Ⅱb	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(15.2)	(9.6)	1.8	ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)5YR7/6(橙)						○	○	ヘラ切り
	890	−	−	埋土	土師器	Ⅲ	底部	−	(9.6)	(1.3)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)2.5Y8/3(淡黄)						○	○	ヘラ切り
	891	−	D-26	Ⅱc	土師器	Ⅲ	口縁～底部	(14.2)	(12.0)	1.1	ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)						○		ヘラ切り
129	892	−	C-29	Ⅲ	土師器	蓋	天井部～口縁	(14.6)	−	(1.6)	ナデ	2.5Y8/2(灰白)					○	○	○	−
	893	−	C-26	カクラン	土師器	坏	底部	−	(9.2)	(2.0)	ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)				○	○		○	−
	894	−	E-30	Ⅱb	土師器	坏	底部	−	(11.6)	(1.2)	ナデ	10YR8/6(黄橙)				○	○	○	○	−
	895	−	−	−	土師器	坏	底部	−	10.0	(2.2)	ナデ	7.5YR7/6(橙)			○		○	○	○	−

第35表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
	896	−	D-27	Ⅱb	土師器	坏	底部	−	10.0	(1.4)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○			○	○	−
	897	−	D-28	Ⅱb	土師器	埦	胴～底部	−	(10.6)	(3.6)	回転ナデ	2.5Y8/2(灰白)					○		○	−
	898	−	E-27	表土	土師器	坏	底部	−	(6.4)	(2.6)	回転ナデ	外)10YR8/2(灰白) 内)10YR8/2(灰白)	○				○	○		−
	899	−	E-35	−	土師器	坏	底部	−	(6.4)	(2.3)	外)− 内)−	外)5YR7/8(橙) 内)5YR6/8(橙)					○	○	○	−
	900	−	D-25	Ⅱa	土師器	坏	底部	−	(7.0)	(2.4)	回転ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR8/6(浅黄橙)	○					○	○	−
	901	−	D-25	Ⅱa	土師器	坏	底部	−	(7.4)	(2.3)	回転ナデ	外)7.5YR7/6(橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	−
	902	−	C-24	Ⅱb	土師器	坏	底部	−	(6.6)	(2.1)	回転ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)5YR5/6(明赤褐)					○	○	○	−
	903	−	C-25	Ⅱa	土師器	坏	底部	−	(6.2)	(2.6)	回転ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)					○	○		−
	904	−	②の先行調査	−	土師器	鉢	底部	−	−	(3.7)	外)ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/3(にぶい褐) 内)7.5YR6/3(にぶい褐)			○			○	○	古墳・ス ス付着(底)
	905	−	D-34	Ⅴ	土師器	埦	底部	−	7.6	(3.0)	回転ナデ	10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	−
	906	−	C-26	Ⅱc-2	土師器	Ⅲ	口縁～底部	−	−	2.9	回転ナデ	外)10YR8/4(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)					○		○	−
	907	−	C-26	Ⅱc-2	土師器	坏	口縁～胴部	−	−	(3.4)	回転ナデ	外)7.5YR8/3(浅黄褐) 内)7.5YR8/3(浅黄褐)					○	○	○	−
	908	−	E-29	Ⅳ	土師器	埦	口縁部	−	−	(4.0)	摩滅	10YR8/4(浅黄橙)	○		○			○	○	−
129	909	−	E-30	−	土師器	Ⅲ	底部	−	−	(1.8)	回転ナデ	10YR8/4(浅黄橙)						○	○	ヘラ切り
	910	−	D-26	Ⅱa	土師器	坏	口縁部	(12.2)	−	(3.2)	回転ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○					○	○	−
	911	−	D-29	Ⅱa	土師器	坏	底部	−	(7.6)	(2.0)	回転ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○	○	○	ヘラ切り
	912	−	D-26	Ⅱc	土師器	坏	底部	−	6.0	(2.2)	回転ナデ	外)5YR7/4(にぶい橙) 内)5YR7/4(にぶい橙)					○	○	○	ヘラ切り
	913	−	D-34	Ⅴ	土師器	坏	口縁～底部	(10.9)	5.5	4.0	回転ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)7.5YR7/6(橙)			○			○	○	ヘラ切り
	914	−	D-34	Ⅴ	土師器	坏	口縁～底部	(10.2)	5.4	3.0	回転ナデ	5YR6/6(橙)			○			○	○	ヘラ切り
	915	−	D-25	Ⅱb	土師器	坏	底部	−	(5.4)	(1.9)	回転ナデ	外)7.5YR8/3(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)			○			○	○	ヘラ切り
	916	−	C-25	Ⅱa	土師器	坏	底部	−	(6.0)	(1.7)	回転ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)					○	○	○	ヘラ切り
	917	−	E-29	−	土師器	坏	底部	−	(7.8)	(1.7)	回転ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	ヘラ切り
	918	−	C-26	カクラン	土師器	坏	胴～底部	−	(6.0)	(3.3)	回転ナデ	外)5YR7/8(橙) 内)5YR7/8(橙)						○	○	ヘラ切り
	919	−	C-25	Ⅱc	土師器	甕	口縁部	−	−	(7.2)	外)ナデ 内)ケズリ,ユビナデ,ナデ	外)7.5YR8/4(浅黄橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)	○				○	○	○	−
	920	−	D-25	Ⅱb	土師器	甕	口縁部	−	−	(6.6)	外)ナデ,ケズリ 内)ケズリ,ナデ	外)5YR5/8(明赤褐) 内)5YR5/8(明赤褐)			○		○	○	○	−
	921	−	C-25	Ⅱc-2	土師器	鍋	把手	−	−	(4.7)	−	2.5Y8/3(淡黄)					○	○	○	−
	922	−	D-27	Ⅱb	土師器	甑瓦(こしき)	把手	−	−	−	指頭押圧	7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	−
	923	−	C-25	Ⅱa	土師器	埦	胴～底部	−	(7.4)	(2.7)	回転ナデ	外)7.5YR8/6(浅黄橙) 内)10YR1.7/1(黒)						○		内黒土師器
	924	−	C-24	Ⅱb	土師器	埦	底部	−	(6.5)	(1.9)	回転ナデ	外)10YR8/4(浅黄褐) 内)10YR1.7/1(黒)		○			○			内黒土師器
130	925	−	D-35	Ⅱb下	土師器	埦	底部	−	(6.2)	(2.1)	摩滅	外)2.5Y8/3(淡黄) 内)2.5Y3/1(黒褐)			○		○	○		内黒土師器
	926	−	D-26	Ⅱc	土器	土錘	完形	最大径1.5	孔径0.6	5.0	−	5YR7/6(橙)		○	○			○	○	−
	927	−	E-28	表土	土器	土錘	完形	最大径1.4	孔径0.4	3.5	−	5YR6/6(橙)					○	○		−

第36表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
130	928	－	E-29	Ⅱb	土器	土錘	完形	最大径1.6	孔径0.5	4.8	－	5YR7/6(橙)	○				○			－
	929	－	E-25	Ⅱc上	土器	土錘	－	最大径1.6	孔径0.3	(3.6)	－	7.5YR8/1(灰白)				○	○	○	○	－
	930	－	C-24	Ⅱb	土器	土錘	完形	最大径1.3	孔径0.5	3.7	－	7.5YR8/4(浅黄橙)						○	○	－
	934	－	D-25	Ⅱc	須恵器	転用硯	胴～底部	－	－	(3.7)	回転ナデ	外)5Y7/1(灰白) 内)5Y7/1(灰白)						○		壺
	935	－	E-35	－	須恵器	転用硯	胴部	－	－	(9.5)	条痕タタキ,条痕当具痕	外)5Y5/1(灰) 内)2.5YR5/6(明赤褐)	○					○	○	甕
	936	－	D-26	Ⅱc	須恵器	転用硯	つまみ	2.5	－	(3.3)	回転ナデ	7.5YR7/1(灰白)								蓋
131	937	－	E-35	－	須恵器	蓋	天井部＋つまみ	－	(2.3)	(2.1)	－	7.5YR8/4(浅黄橙)								－
	938	－	C-26	Ⅱc-2	須恵器	蓋	天井部～口縁	－	－	(1.8)	回転ナデ	外)5Y7/1(灰白) 内)5Y7/1(灰白)							○	－
	939	－	D-28	Ⅱb	須恵器	蓋	天井部～口縁	(18.0)	－	(1.9)	回転ナデ	外)N7/0(灰白) 内)N7/0(灰白)							○	－
	940	－	C-25	Ⅱb	須恵器	蓋	天井部～口縁	－	－	(1.6)	回転ナデ	外)5Y7/1(灰白) 内)5Y7/1(灰白)								－
	941	－	E-28	Ⅱc	須恵器	坏	口縁～脚部	(14.0)	(7.6)	4.4	回転ナデ,ヘラケズリ	外)5Y6/2(灰オリーブ) 内)5Y6/1(灰)		○			○			－
	942	－	D-26	Ⅱb	須恵器	坏	底部	－	8.6	(1.6)	回転ナデ	外)5Y6/1(灰) 内)5Y6/1(灰)							○	－
	943	－	D-28	Ⅱb	須恵器	坏	底部	－	(8.0)	(3.6)	回転ナデ	5Y7/1(灰白)					○		○	－
	944	－	D-25	Ⅱc-2	須恵器	壺	胴部	－	－	(3.8)	回転ナデ	外)5Y5/1(灰) 内)5Y5/1(灰)					○		○	刺突文
	945	－	E-25	Ⅱc-2	須恵器	壺	頸～胴部	－	－	(4.6)	回転ナデ,タタキ	外)2.5YR6/6(橙) 内)7.5YR8/4(浅黄褐)							○	－
	946	－	－	Ⅱb	須恵器	壺	胴部	－	－	(3.5)	回転ナデ	外)2.5Y9/1(灰白) 内)10YR7/1(灰白)					○		○	ハソウ・櫛描波状文
	947	－	－	Ⅱb	須恵器	壺	胴～底部	－	(14.2)	(3.9)	外)タタキ 内)回転ナデ	外)10YR7/4(にぶい黄橙) 内)2.5Y6/2(灰黄)					○		○	－
	948	－	－	Ⅱb	須恵器	壺	底部	－	－	(7.6)	外)タタキ 内)回転ナデ	外)2.5Y7/2(灰黄) 内)2.5Y7/1(灰白)					○		○	－
132	949	－	D-35	Ⅱa直下	須恵器	大甕	口縁～胴部	(19.2)	－	(7.8)	外)条痕タタキ,ユビナデ 内)ユビナデ,同心円当具痕	外)5Y7/1(灰白) 内)5Y7/1(灰白)								－
	950	－	D-25	Ⅱa	須恵器	甕	口縁部	－	－	(4.8)	回転ナデ	外)2.5YR6/8(橙) 内)2.5YR4/4(にぶい赤褐)					○	○	○	二重口縁・波状文
	951	－	D-28	Ⅱb	須恵器	甕	口縁部	－	－	(3.1)	回転ナデ	外)5Y5/1(灰) 内)5Y5/1(灰)					○		○	二重口縁
	952	－	E-25	Ⅱb	須恵器	大甕	口縁～頸部	－	－	(5.8)	回転ナデ	外)N7/0(灰白) 内)N7/0(灰白)					○	○	○	二重口縁
	953	－	E-25	Ⅱc	須恵器	甕	口縁～頸部	－	－	(7.1)	外)格子目タタキ,ナデ 内)同心円当具痕,ナデ	外)5R3/1(暗赤灰) 内)N5/0(灰)					○	○	○	－
	954	－	E-25	Ⅱb	須恵器	甕	頸～胴部	－	－	(7.6)	外)正格子目タタキ 内)ナデ	外)7.5Y7/1(灰白) 内)7.5Y7/1(灰白)					○	○	○	二重口縁
	955	－	D-25	Ⅱb	須恵器	甕	頸部	－	－	(5.7)	外)格子目タタキ 内)同心円当具痕	外)N7/0(灰白) 内)2.5GY4/1(暗オリーブ灰)釉有り					○		○	－
	956	－	E-32	Ⅱb直下	須恵器	甕	肩部	－	－	(5.8)	ナデ	外)2.5Y6/1(黄灰) 内)2.5Y5/1(黄灰)					○		○	－
	957	－	E-25	Ⅱb	須恵器	甕	頸～胴部	－	－	(11.6)	回転ナデ	外)N6/0(灰) 内)N6/0(灰)					○	○	○	櫛書波状文
133	958	－	②の先行調査	－	須恵器	甕	胴部	－	－	(6.9)	外)条痕タタキ 内)同心円当具痕	5Y6/1(灰)							○	－
	959	－	D-28	Ⅱb	須恵器	甕	胴部	－	－	(6.7)	外)タタキ 内)同心円当具痕	外)2.5YR5/2(灰赤) 内)2.5Y6/1(黄灰)					○		○	－
	960	－	E-29	Ⅳ	須恵器	甕	胴部	－	－	(8.2)	外)正格子目タタキ 内)同心円当具痕	2.5Y7/1(灰白)					○		○	－
	961	－	D-25	Ⅱa	須恵器	甕	胴部	－	－	(8.3)	タタキ	外)5Y6/1(灰) 内)5Y7/1(灰白)					○		○	－

第37表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土							備考
													石英	長石	角閃石	雲母	灰色礫	赤褐色礫	白色礫	
133	962	−	E-25	Ⅱb	須恵器	甕	胴部	−	−	(8.2)	外)格子目タタキ 内)平行状当具痕	外)7.5Y7/1(灰白) 内)7.5Y7/1(灰白)							○	−
	963	−	−	表土	須恵器	甕	胴部	−	−	(11.8)	外)正格子目タタキ 内)条痕当具痕	外)7.5YR6/2(灰褐) 内)5Y6/1(灰)							○	黒石
	964	−	②の先行調査	−	須恵器	甕	胴部	−	−	(8.4)	外)条痕タタキ 内)条痕当具痕,ナデ	2.5Y7/1(灰白)						○	○	−
	965	−	−	Ⅰ	須恵器	甕	胴部	−	−	(8.4)	外)格子目タタキ,ナデ 内)格子目タタキ	2.5Y6/1(黄灰)					○		○	−
	966	−	D-28	Ⅱb	須恵器	大甕	胴部	−	−	(17.5)	外)正格子目タタキ 内)条痕当具痕	外)5YR5/3(にぶい赤褐) 内)2.5Y7/1(灰白)					○		○	−
134	967	−	E-32	Ⅱb下	土師器	坏	完形	15.8	9.4	4.2	回転ナデ	7.5YR7/6(橙)			○	○		○	○	糸切り底
	980	−	−	Ⅱb下	須恵質土器	壷	底部	−	−	(4.3)	ナデ	外)2.5Y6/1(黄灰) 内)2.5Y7/1(灰白)							○	−
135	981	−	E-32	Ⅱb直下	須恵器	捏鉢	口縁～底部	(21.6)	(12.8)	6.4	内)ナデ 外)指頭押圧	5YR6/1(灰)					○		○	−
	982	P119	D-26	Ⅱb	瓦質土器	鉢	胴部～底部	−	(22.0)	(8.3)	ナデ	表)7.5Y2/1(黒) 裏)2.5Y4/2(黄灰)								−
	983	−	−	−	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	−	−	(8.2)	ナデ,指頭押圧	2.5Y8/2(灰白)			○			○	○	−
	984	−	−	Ⅱb下	土師質土器	擂鉢	胴～底部付近	−	−	(6.1)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR8/4(浅黄橙)					○	○	○	−
	985	−	−	Ⅱb下	瓦質土器	擂鉢	底部	−	−	(1.6)	−	10YR8/1(灰白)	○				○		○	−
	986	−	E-27	−	土師質土器	鉢	口縁部	−	−	(5.0)	ナデ	外)10YR8/3(浅黄橙) 内)10YR3/1(黒褐)			○				○	玉縁状口縁
	988	−	C-25･26	Ⅱa	土師質土器	−	把手	最大長(4.9)	最大径2.2	−	ナデ	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR7/4(にぶい橙)			○			○	○	−
153	1035	SD4	E-35	−	土師質土器	埦	口縁部	17.6	−	2.4	−	外)7.5YR7/4(にぶい橙) 内)7.5YR8/4(浅黄橙)								−
	1036	SD4	E-35	−	土器	土錘	完形	最大径0.8	孔径0.4	3.0	−	外)2.5YR5/8(明赤褐)								−
156	1071	−	E-28	−	土師質土器	鉢	底部	−	15.6	(3.9)	外)ナデ 内)回転痕	10YR7/4(にぶい黄橙)							○	−
158	1091	石列2	−	−	土師質土器	把手	−	最大長(4.7)	最大径1.7	−	タテナデ	10YR8/4(浅黄橙)								−
160	1099	−	1T	Ⅱb	土器	壷	口縁～底部	15.2	3.5	10.7	ヘラナデ	7.5YR8/1(灰白)								試掘調査遺物･小円孔あり
	1100	−	6T	Ⅱb	土師器	Ⅲ	底部	−	−	(2.4)	−	7.5YR8/4(浅黄橙)								試掘調査遺物･高台付
	1101	−	1T	−	須恵器	坏身	底部	−	9.0	(1.9)	−	5YR7/1(明褐灰)								試掘調査遺物･坏身(高台付)
63	1104	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−								か−1 図版のみ

第38表　陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層	種別	器種	部位	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考
130	931	－	E－26	表土	磁器	青磁碗	胴部～底部	越州窯Ⅰ類	－	(5.9)	(3.1)	オリーブ灰色	淡暗緑色	－
	932	－	D－30	Ⅱb	磁器	皿	底部	－	－	6.0	(1.6)	灰白色	緑色	－
134	968	－	D·E－29·30	Ⅱa	磁器	青磁碗	口縁部	－	18.0	－	(4.5)	灰白色	灰オリーブ色	－
	969	－	E－32	Ⅱb	磁器	青磁坏	口縁部	－	－	－	(2.4)	灰白色	灰オリーブ色	－
	970	－	D－31	南北トレンチ	磁器	青磁碗	胴部	－	－	－	(4.9)	灰白色	オリーブ灰色	蓮弁文
	971	－	E－35	Ⅱa直下	磁器	青磁碗	底部	－	－	5.0	(2.4)	灰白色	灰オリーブ色	菊花文
	972	SD4	D·E－35	－	磁器	青磁碗	胴部～底部	－	－	(5.0)	(3.0)	灰白色	オリーブ灰色	－
	973	SD4	D·E－35	－	磁器	青磁碗	胴部～底部	－	－	4.4	(1.9)	灰白色	明緑灰色	－
	974	－	－	－	磁器	青磁壷	底部	－	－	(5.8)	(2.8)	灰白色	オリーブ灰色	小型壷
	975	－	D·E－31	中央南北ベルト	磁器	青磁香炉	口縁部	－	－	－	(3.0)	灰白色	－	－
	976	－	－	－	磁器	白磁小坏	口縁～底部	－	(12.0)	－	2.7	灰白色	灰白色	－
	977	－	D－35	Ⅱa直下	磁器	白磁坏	胴部～底部	白磁E群	－	(6.2)	(1.7)	白色	白色	輸入陶磁器
	978	SD4	D·E－35	－	磁器	染付小坏	口縁～底部	－	(9.8)	－	(2.4)	灰白色	オリーブ灰色	火襷状斜格子文
	979	SD4	D·E－35	－	磁器	染付盃	胴部～底部	－	－	2.8	(2.8)	白色	白色	草花文
138	989	SB6 P9	C·D－26	Ⅱb	磁器	小碗	完形	－	8.0	3.2	3.9	白色	透明	龍の文様・虫文
	990	SB6 P9	C·D－26	Ⅱb	磁器	碗	口縁～胴部	肥前系	－	－	(3.9)	白色	透明	草文
	991	SB6 P9	C·D－26	Ⅱb	磁器	碗	口縁～底部	肥前系	(10.8)	4.6	5.0	灰白色	淡緑色透明	菊花文
	992	SB6 P9	C·D－26	Ⅱb	磁器	碗	口縁～底部	肥前系	(11.2)	5.0	5.2	灰白色	淡緑色透明	花文
150	1000	祭祀	E－28	南北トレンチ	磁器	皿	口縁～底部	－	9.4	3.4	2.1	白色	白色	連点文
	1001	祭祀	E－28	先行トレンチ	磁器	碗	胴部～底部	肥前系	－	(6.0)	(3.3)	淡黄色	透明	－
	1002	祭祀	E－28	埋土	磁器	碗	胴部～底部	－	－	4.8	(4.2)	白色	透明	くらわんか手 五弁花文・銘
	1003	祭祀	E－28	埋土	磁器	碗	口縁～底部	－	(10.9)	(4.0)	5.7	白色	透明	梅文
	1004	祭祀	E－28	－	磁器	碗	口縁～胴部	－	(10.6)	－	(4.3)	白色	白色	草花文
	1005	祭祀	E－28	埋土	磁器	碗	胴部～底部	－	－	(5.2)	(4.3)	白色	透明	格子文・亀甲文
	1006	石列2	E－28	－	磁器	碗	胴部～底部	龍門司系	－	(6.0)	(5.3)	淡黄色	白色	線香立て
	1007	祭祀	E－28	埋土	陶器	山茶家鍋	口縁～胴部	苗代川系	(14.2)	－	(7.3)	明赤褐色	暗緑色	スス付着
	1008	石列2	E－28	－	陶器	甕	口縁～肩部	－	(15.8)	－	(7.0)	灰黄褐色	茶褐色	－
	1009	石列1	E－28	－	陶器	摺鉢	口縁～胴部	苗代川系	－	－	(5.7)	黄灰色	暗緑褐色	－
	1010	祭祀	E－28	埋土	陶器	摺鉢	胴部～底部	－	－	(9.6)	(6.8)	暗赤褐色	－	－
	1011	祭祀	E－28	Ⅰ	陶器	甕	口縁～胴部	－	(28.2)	－	(13.0)	橙色	淡黄褐色	－
152	1015	SD4	E－35	－	磁器	皿	口縁～底部	肥前系	(25.8)	(15.0)	3.9	白色	透明	輪花皿・龍の文様
	1016	SD4	E－35	－	磁器	皿	口縁～底部	－	(12.4)	(7.0)	2.8	白色	白色	格子文
	1017	SD4	E－35	－	磁器	皿	口縁～底部	－	(12.6)	(7.0)	3.3	白色	透明	輪花皿・扇文・梅文
	1018	SD4	E－35	－	磁器	碗	口縁～底部	－	(10.8)	(4.4)	5.2	白色	透明	梅文
	1019	SD4	E－35	－	磁器	碗	胴部～底部	－	－	4.4	(4.1)	白色	透明	草花文
	1020	SD4	E－35	－	磁器	碗	胴部～底部	－	－	4.2	(3.3)	白色	透明	雲文風
	1021	SD4	E－35	－	陶器	碗	胴部～底部	－	－	(4.2)	(3.6)	灰黄色	透明	波状文
	1022	SD4	E－35	－	磁器	筒碗	口縁～底部	肥前系	(8.0)	－	(6.2)	白色	透明	四方襷文・草花文
	1023	SD4	E－35	－	陶器	碗	底部	唐津焼	－	4.2	(3.4)	にぶい橙色	灰白色	－
	1024	SD4	E－35	Ⅱa直下	陶器	碗	底部	唐津焼	－	5.6	(2.8)	灰褐色	淡緑色	－
	1025	SD4	E－35	－	陶器	碗	口縁～底部	－	(17.0)	(7.0)	6.8	赤褐色	暗白色	－
	1026	SD4	E－35	－	陶器	土瓶	蓋	苗代川系	－	5.8	(2.4)	暗灰色	赤褐色	－
	1027	SD4	E－35	－	陶器	土瓶	注口	苗代川系	－	－	(3.6)	橙色	暗褐色	穿孔（3ヵ所）
	1028	SD4	E－35	－	陶器	土瓶	底部	苗代川系	－	(4.4)	(2.3)	にぶい橙色	暗緑褐色	－
	1029	SD4	E－35	－	陶器	鉢	口縁部	苗代川系	－	－	(7.0)	にぶい赤褐色	暗緑色	－
153	1030	SD4	E－35	－	陶器	鉢	胴部	苗代川系	－	－	(11.9)	にぶい橙色	黒褐色	－
	1031	SD4	E－35	－	陶器	摺鉢	胴部～底部	－	－	(13.4)	(7.2)	にぶい赤褐色	淡白色	－
	1032	SD4	E－35	－	陶器	摺鉢	胴部～底部	－	－	(10.8)	(5.6)	にぶい赤褐色	－	－
	1033	SD4	E－35	－	陶器	摺鉢	胴部～底部	－	－	(10.0)	(5.0)	褐灰色	－	－
	1034	SD4	E－35	－	陶器	甕	口縁部	薩摩焼	(46.0)	－	(13.1)	にぶい黄橙色	暗赤褐色	－
154	1038	石垣	D－35	－	陶器	碗	胴部～底部	－	(11.8)	4.4	5.9	白色	暗茶褐色	－
	1039	石垣	D－35	－	磁器	碗	口縁～底部	－	(11.0)	(3.9)	4.8	白色	透明	草花文
	1040	石垣	D－35	－	陶器	皿	口縁～底部	－	(9.2)	4.4	(2.7)	にぶい赤褐色	暗赤褐色	秉燭
	1041	石垣	D－35	Ⅱb下	磁器	瓶又は徳利	口縁部	肥前系	6.0	－	(3.2)	白色	透明	－

第39表　陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層	種別	器種	部位	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考
154	1042	石垣	D－35	①	陶器	瓶又は徳利	口縁部	－	－	－	(3.4)	にぶい赤褐色	灰緑色	－
	1043	石垣	D－35	①	陶器	鉢	胴部～底部	－	－	(7.2)	(5.7)	にぶい橙色	灰緑色	－
	1044	石垣	D－35	－	陶器	鉢	胴部～底部	－	－	(10.0)	(4.4)	にぶい橙色	暗赤褐色	－
	1045	石垣	D－35	－	陶器	摺鉢	胴部～底部	－	－	(9.2)	(2.7)	にぶい橙色	－	－
	1046	石垣	D－35	－	磁器	皿	底部	－	－	－	(1.9)	白色	透明	草花文・唐草文
	1047	石垣	D－35	－	陶器	甕	胴部	－	－	－	(19.1)	にぶい赤褐色	灰白色	－
	1048	石垣	D－35	－	鞴	羽口	－	－	－	－	(4.9)	灰色	－	－
155	1049	－	E－27	－	磁器	皿	口縁～底部	－	－	7.1	(3.2)	白色	白色	草花文・五弁花文
	1050	－	E－27	表土	磁器	皿	完形	肥前系	19.0	11.4	3.1	白色	透明	草花文・唐草文
	1051	－	D－27	表土	磁器	坏	口縁～底部	肥前系	18.0	6.4	5.0	白色	白色	漢詩・菊花文 横向きU字文
	1052	－	E－26	表土	磁器	碗	口縁～胴部	－	－	－	(5.1)	灰白色	透明	丸文
	1053	－	E－25	Ⅱc上	磁器	碗	胴部～底部	－	－	5.2	(3.9)	白色	透明	五弁花文
	1054	－	E－28	表土	磁器	碗	底部	－	－	5.4	(2.4)	灰白色	－	－
	1055	－	D－27	カクラン	磁器	碗	胴部～底部	－	－	4.8	(3.8)	灰白色	透明	くらわんか手 丸文・五弁花文
	1056	－	E－28	Ⅰ	磁器	筒碗	口縁～底部	－	(8.0)	(3.6)	5.8	白色	透明	花文・五弁花文
	1057	－	D－27	表土	磁器	筒碗	底部	－	－	4.0	(2.2)	灰白色	灰白色	花押文
	1058	－	E－28	表土	磁器	碗	胴部～底部	－	－	4.0	(3.0)	白色	白色	－
	1059	－	E－35	Ⅰ	陶器	碗	口縁～底部	肥前系	(9.4)	(3.4)	4.6	灰黄色	淡緑色	－
	1060	－	D－7	表土	陶器	碗	完形	－	11.3	4.4	4.8	灰黄色	浅黄色	－
	1061	－	C－26	Ⅱb	陶器	皿	口縁～底部	－	(12.4)	(4.8)	3.5	灰黄色	明褐色	－
	1062	－	E－27	表土	陶器	碗	胴部～底部	龍門司系	－	4.1	(2.8)	褐色	白色	－
	1063	－	E－28	Ⅰ	陶器	碗	胴部～底部	肥前系	－	(6.7)	(3.9)	黒色	暗茶褐色	－
156	1064	－	E·F－35	北東トレンチ	陶器	壷	口縁部	－	(22.0)	－	(10.3)	橙色	灰白色	広口壷
	1065	－	E－26	表土	陶器	鉢	胴部	－	－	－	7.2	にぶい橙色	茶褐色から灰白色	－
	1066	－	D－32	Ⅱa	磁器	鉢	口縁部	－	(15.4)	－	(6.6)	灰白色	透明	－
	1067	－	D－35	Ⅱ	陶器	甕	口縁部	－	(15.6)	－	(2.8)	灰黄色	暗緑色	－
	1068	－	E－27	表土	陶器	摺鉢	口縁部	－	－	－	(4.7)	赤灰色	赤褐色	－
	1069	－	E－28	表土	陶器	摺鉢	口縁部	苗代川系	－	－	(6.7)	にぶい赤褐色	暗緑褐色	－
	1070	－	E－27	表土	陶器	摺鉢	口縁部	－	－	－	(8.8)	にぶい赤褐色	暗緑褐色	－
157	1072	石列1	E－27	－	磁器	徳利	完形	肥前系	3.4	7.2	20.2	白色	透明	草花文
	1073	石列1	E－27	－	磁器	徳利	口縁～胴部	肥前系	(3.2)	－	(12.0)	白色	透明	－
	1074	石列1	E－27	－	磁器	徳利	胴部	肥前系	－	－	(7.7)	白色	透明	－
	1075	石列1	E－27	－	磁器	徳利	頸部～胴部	肥前系	－	－	(16.5)	白色	透明	－
	1076	－	D－26	トレンチ	陶器	瓶	胴部～底部	－	－	(6.2)	(9.7)	褐色	灰白色・褐色	－
	1077	－	E－28	表土	磁器	青磁小壷	胴部～底部	－	－	5.3	(3.4)	灰白色	明オリーブ灰色	－
	1078	－	E－28	表土	陶器	土瓶	蓋	苗代川系	－	4.3	(2.6)	赤褐色	暗赤褐色	－
	1079	－	E－28	表土	陶器	土瓶	胴部	苗代川系	(6.4)	－	(4.5)	にぶい黄橙色	暗赤褐色	－
	1080	－	D－33·34	Ⅰ	陶器	土瓶	体部～底部	苗代川系	－	3.2	(4.6)	褐灰色	暗茶褐色	－
	1081	－	E－34	撹乱	陶器	土瓶	蓋	－	－	(12.0)	(3.9)	黄灰色	茶褐色	－
	1082	－	D·E－27	表土	陶器	土瓶	蓋	苗代川系	(13.6)	－	(1.6)	にぶい赤褐色	－	－
	1083	－	E－28	表土	陶器	碗	胴部～底部	－	－	(5.0)	(4.2)	にぶい赤褐色	褐色	－
	1084	－	D－27	表土	陶器	徳利	胴部～底部	琉球焼	－	(6.6)	(16.2)	赤色	浅黄色	－
158	1085	－	E－35	Ⅰ	陶器	壷	口縁部	－	(24.0)	－	(4.8)	灰黄褐色	暗褐色	－
	1086	－	D－35	Ⅱ	陶器	甕	口縁部	苗代川系	(27.4)	－	(3.7)	黄灰色	褐色	－
	1087	－	C－27	カクラン	陶器	甕	口縁部	苗代川系	(28.0)	－	(4.3)	灰赤色	暗褐色	－
	1088	－	E－35	Ⅱa	磁器	仏飯具	底部	－	－	(3.4)	(3.1)	灰白色	透明	－
	1089	－	E－28	表土	陶器	仏飯具	胴部～脚部	元立院系	－	(3.6)	(5.2)	にぶい橙色	黒褐色	秉燭
	1090	－	D－27	表土	陶器	仏飯具	口縁～脚部		(3.6)	－	(3.8)	にぶい赤褐色	黒褐色	注口・把手
－	1105	－	D－26	Ⅱb	－	－	－	－	－	－	－	－	－	図版63

第40表　石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
14	3	－	E－27	Ⅱc	小型磨製石斧	蛇紋岩（川辺，長崎，熊本）	8.4	2.3	1.4	48.0	緑泥片岩製両刃 搬入品混ざり込み
16	49	－	D－26	Ⅱc	磨製石鏃	頁岩	2.6	2.3	0.3	1.9	薄くはがれる
	50	－	E－34	Ⅰ	打製石斧	安山岩	12.8	6.2	2.5	246.6	－
	51	－	C－29	Ⅲ	打製石斧	安山岩	4.7	6.3	1.2	38.1	－
26	111	SX3	C－23	－	砥石	砂岩	20.0	10.7	4.3	1288.5	－
32	171	SI5	C－26	Ⅱc	磨敲石	花崗岩	10.0	5.3	5.0	351.8	－
	172	SI5	C－26	－	凹石	砂岩	9.5	5.6	4.7	295.5	（赤変）被熱or風化
42	237	SI6	D－26	Ⅱc	砥石	砂岩	12.0	19.0	3.7	1494.5	－
65	418	竪穴状遺構	D－28	Ⅳ	砥石	砂岩	12.4	6.3	3.9	602.0	－
89	481	SX5	D－26	Ⅱc	石皿	安山岩	17.4	13.3	5.8	1841.5	－
109	742	－	E－28	先行調査	－	粘板岩製磨製石斧	(8.1)	7.3	1.5	130.9	－
	743	－	D・E－31	－	磨敲石	砂岩河原石	8.5	5.5	5.1	238.0	－
	744	SK39	E－29	Ⅱb	－	－	8.5	7.5	1.7	182.5	－
	745	－	D－28	Ⅱb	台石	砂岩製台石	6.5	3.0	3.7	107.1	－
	746	竪穴状遺構	D－28	Ⅳ	敲石	砂岩	13.2	7.5	4.6	469.5	－
	747	－	E－29	－	砥石	砂岩製砥石	7.1	9.2	1.4	120.1	－
	748	SK43	D－28・29	Ⅳ	石皿	安山岩	13.4	6.3	7.0	840.0	－
110	749	－	D－26	－	凹石	砂岩	12.3	11.1	4.4	1001.0	磨石
	750	－	E－29	－	砥石	粘板岩	9.9	3.1	2.5	93.5	－
	751	SK39	E－29	Ⅱb	砥石	花崗岩（天草石）	16.0	9.5	9.3	1411.0	－
	752	－	D－34	撹乱	砥石	花崗岩（天草石）	10.3	7.0	4.9	340.0	－
	753	SI10	E－27・28	Ⅱc	石皿	安山岩	21.0	17.0	7.2	5000.0	－
135	987	－	D－24	Ⅱb	滑石製石鍋片	滑石	(7.0)	1.8	1.1	29.3	スス
147	999	石列3	E－28	－	石臼	砂岩	8.9	19.0	5.9	1605.0	－
159	1092	－	E－29	Ⅳ	砥石	安山岩	13.3	12.9	2.4	596.0	－
	1093	－	C・D－29	Ⅲ	砥石	泥岩	10.0	7.5	1.4	147.5	－
	1094	－	E－28	表土	硯	天草石	6.8	6.0	2.0	98.3	搬入品
	1095	－	C－26	－	硯	天草石	7.5	5.8	2.2	126.0	－
	1096	－	E－27	表土	硯	赤間石（下関）	5.4	6.2	0.8	52.1	搬入品
160	1102	礫敷	D－25	－	－	ホルンフェルス	4.1	3.3	2.8	39.0	－
	1103	祭祀	－	－	田の神石像	凝灰岩	25.6	23.7	13.8	5400.0	僧侶型　笠部

第41表　鉄器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
58	327	SI12	E－30	Ⅳ	無茎鉄鏃	3.2	2.7	0.6	6.0	寸法及び重量は錆を含む
	328	SI12	E－30	Ⅳ	鉄製品	4.4	1.1	0.9	6.1	寸法及び重量は錆を含む
65	419	竪穴状遺構	D－28	－	鉄製品	9.0	4.5	0.7	147.2	寸法及び重量は錆を含む
	420	竪穴状遺構	D－29	Ⅳ	鉄製品	(5.9)	2.9	1.4	19.5	寸法及び重量は錆を含む
81	458	埋納	E－27	－	小型仿製鏡	（直径）7.7	－	0.3	25.6	寸法及び重量は錆を含む
100	608	SX7	C－29	Ⅳ	－	(9.0)	3.2	1.3	－	寸法及び重量は錆を含む
102	641	SX8	D－35	Ⅳ	鉄鏃	(6.1)	1.9	0.3	18.2	寸法及び重量は錆を含む
128	888	礫敷	E－25	礫敷遺構下造成土	鉄製品（棒状）	(37.8)	1.5	1.2	80.0	重量は土器片含む（５ｇ足らず？） 寸法及び重量は錆を含む
130	933	－	D－35	Ⅰ	刀子	4.5	1.7	1.6	6.4	寸法及び重量は錆を含む
138	993	SB6	C・D－26	Ⅱb	煙管	(6.2)	1.0	0.1	5.5	寸法及び重量は錆を含む
	994	SB6	C・D－26	Ⅱb	鉄製品（釘）	5.2	2.1	1.8	14.2	寸法及び重量は錆を含む
	995	SB6	C・D－26	Ⅱb	古銭	（直径）2.5	－	0.2	3.5	寸法及び重量は錆を含む
	996	SB6	C・D－26	Ⅱb	古銭	（直径）2.5	－	0.2	4.6	寸法及び重量は錆を含む
141	997	SK60	D－26	Ⅱc	青銅鈴	（直径）3.8	（短径）2.9	－	－	鈴
	998	SK60	D－26	Ⅱc	青銅鈴	（直径）3.7	（短径）3.0	－	－	鈴
150	1012	祭祀	E－28	Ⅰ	煙管	3.4	1.3	0.1	5.3	寸法及び重量は錆を含む
	1013	祭祀	E－28	Ⅰ	古銭	（直径）2.5	－	0.2	3.9	寸法及び重量は錆を含む
	1014	祭祀	E－28	－	古銭	（直径）2.3	－	0.2	1.8	寸法及び重量は錆を含む
153	1037	SD4	D－35	－	鉄製品（鎌）	(12.2)	（最大幅）4.0	0.4	114.4	近世 寸法及び重量は錆を含む
159	1097	－	E－35	－	鉄製品（鎌）	9.8	2.3	0.8	26.4	２個 寸法及び重量は錆を含む
	1098	－	D－28	Ⅱb	古銭	（直径）2.5	－	0.1	3.5	寛永通宝 寸法及び重量は錆を含む

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　分析の概要

平成29・30年度，令和元年度の発掘作業及び平成30～令和２年度における整理報告書作業において，樹種同定及び放射性炭素年代測定（AMS測定），比熱測定の分析を行った。実績は次の通りである。

なお，遺構番号については整理作業で変更したので，本文もそれに合わせて変更した。

第２節　樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　概要

六反ヶ丸遺跡（鹿児島県出水市六月田町803）からは，古墳時代や，古代の遺構，遺物が検出されている。今回は，出土した木材に関して，樹種同定を行い，遺構の時代観や用材に関する情報を得る。

２　試料

試料は，炭化材２点（№１～２），生材１点（№３）である。炭化材は№１が年代測定用試料，他は樹種同定用試料であるが，№１についても樹種同定を実施する。№３は３つの塊があり，生材は１点のみである。他は泥炭質の植物塊で，アカガシ亜属の葉などからなる。分析には生材を用いる。試料名などの詳細は，樹種同定結果とともに第42表に示す。

３　分析方法

（１）樹種同定

炭化材は木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成する。炭化材は双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を，現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982），Wheeler他（1998），Richter他（2006）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

（２）放射性炭素年代測定

炭化材は，試料を観察し，表面の土壌がついている外側をトリミングして，50㎎程度に成形する。トリミングした残渣は樹種同定に用いる。試料は，塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸，水酸化ナトリウム共に１mol/Lである。脆弱な試料は，アルカリの濃度を薄めて処理する（AaAと記載）。

試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge３を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし，測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に，米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ），国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C６等），バックグラウンド試料（IAEA-C１）の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。

また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線はIntcal13（Reimer et al., 2013）である。

４　結果

（１）樹種同定

結果を第42表に示す。分析の結果 №１，№３がツバキ属，№２がクヌギ節に同定される。以下に検出された種類の解剖学的特徴を示す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Cerris）　ブナ科
環孔材で，孔圏部は１～３列，孔圏外では年輪界に向かって径を漸減しながら，小径の道管が単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔，壁孔は交互状。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツバキ属（*Camellia*）　ツバキ科
散孔材で，管壁は薄く，横断面では多角形～角張った楕円形，単独および２～３個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し，壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性，１～５細胞幅，１～40細胞高。

（２）放射性炭素年代測定

結果を第43表，第162図に示す。試料は脆弱なため炭素

の損耗を防ぐために，アルカリの濃度を薄くしている。同位体補正を行った測定値は，1785±20BPを示す。

暦年較正は，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは，Intcal13（Reimer et al., 2013）を用いる。2σの値は，calAD140～327である。

5　考察

検出される種類のうち，ツバキ属は暖地において安定した森林を構成する要素（いわゆる照葉樹林）で，現在の周辺においても自然度の高い場所に多く生育している。また，落葉広葉樹であるコナラ亜属クヌギ節は，湿ったところを好み，谷筋や河川沢沿い，人里近くなどに明るい林地を作る。いずれも本遺跡周辺で入手しやすい種類であったと思われる。伊東隆夫・山田昌久編（2012）の出土木製品用材データベースをみると，県内の古墳時代における炭化材の出土例は少ないが，縄文時代～古代に範囲を広げてみると，いずれも出土例がある。これらは燃料材としての利用が考えられる。また，年代値は古墳時代始めの年代値を示し，遺跡の年代観と調和的である。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三，1991，日本産木材顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編），2012，木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社，449p.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社, 70p.［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

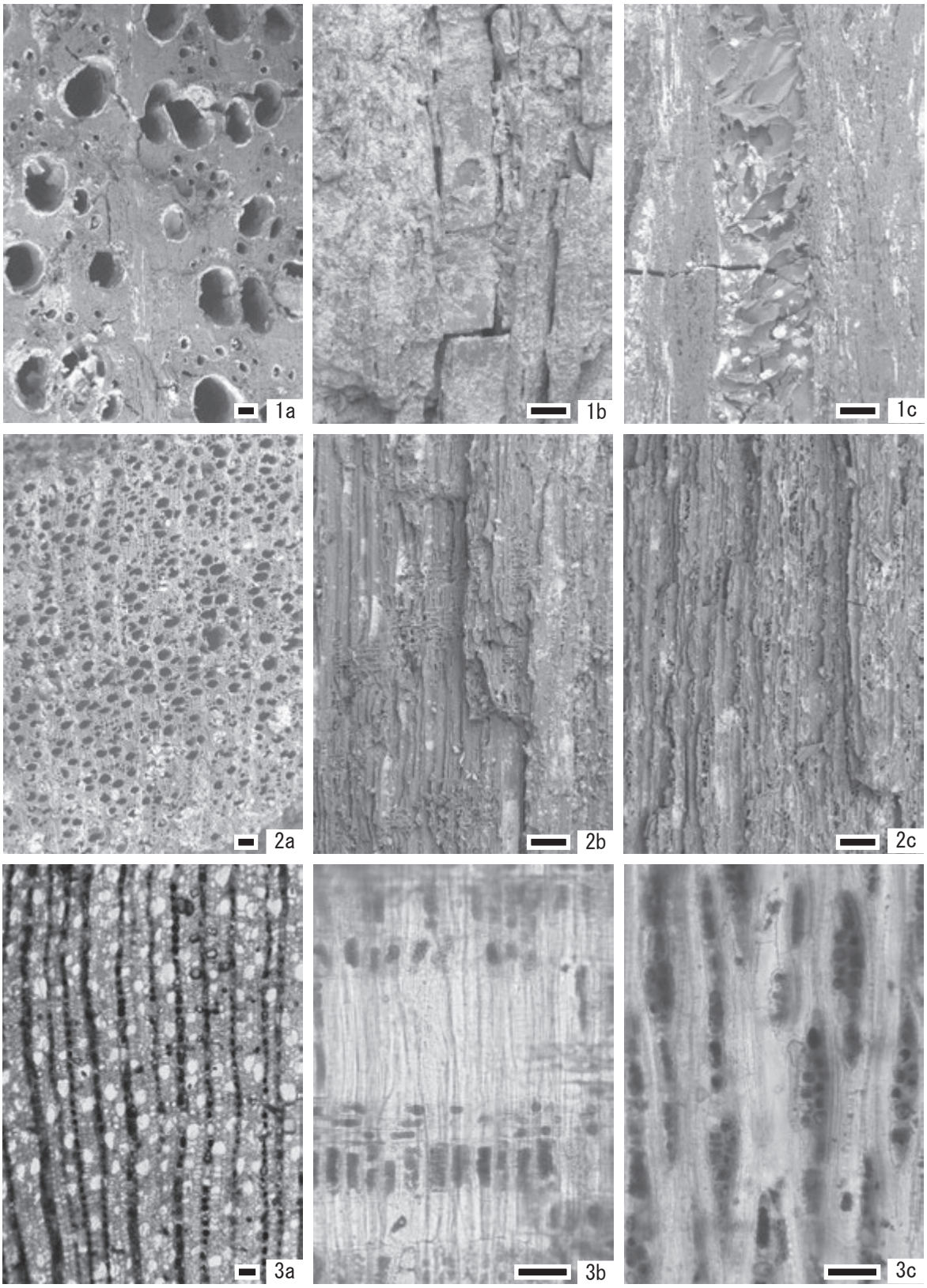
島地　謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織.地球社, 176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社, 122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第42表　樹種同定結果

No.	試料名		種類	備考
1	E-27区	竪穴建物跡８号-焼１	ツバキ属	ＡＭＳ試料
2	C-26・27区	土坑51号 セクション②層	コナラ亜属クヌギ節	
3	ＤＥ-25	礫敷遺構砂層	ツバキ属	生材，植物遺体（カシ類の葉など）



1. コナラ亜属クヌギ節(No. 3)
2. ツバキ属(No. 1)
3. ツバキ属(No. 4)

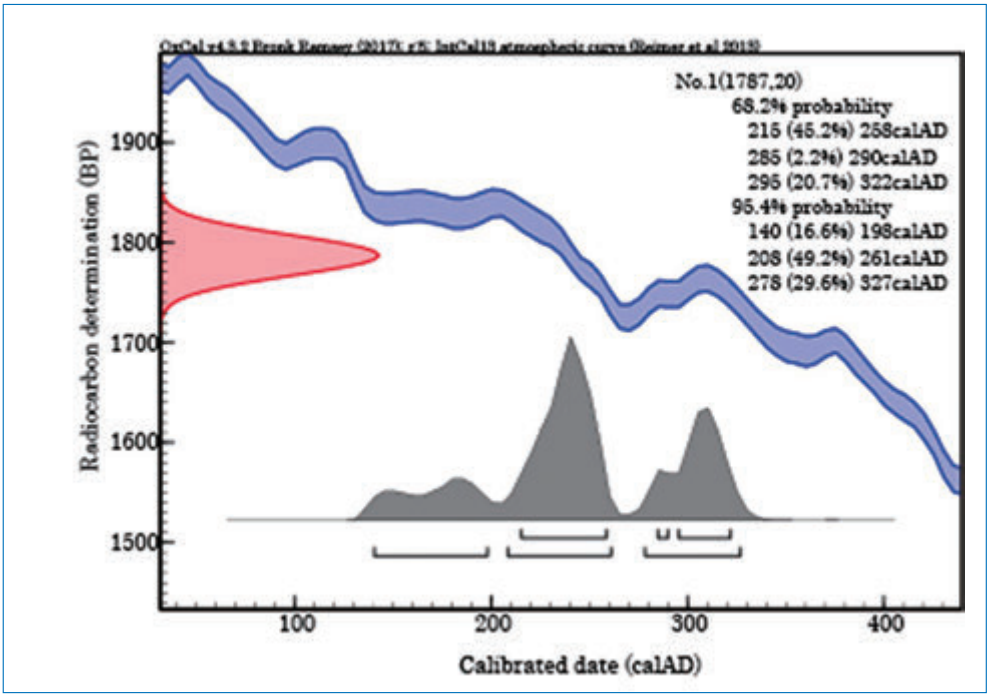
a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm

第161図　炭化材・木材

第43表　放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
					年代値			確率%		
1	E -27 区 竪穴建物跡 8 号 - 焼 1	AaA (0.05M)	1785 ± 20 (1787 ± 20)	-27.92 ± 0.46	σ	cal AD 215 - cal AD 258 cal AD 285 - cal AD 290 cal AD 295 - cal AD 322	1735 - 1692 calBP 1666 - 1661 calBP 1655 - 1629 calBP	45.2 2.2 20.7	YU- 10086	pal- 12262
					2 σ	cal AD 140 - cal AD 198 cal AD 208 - cal AD 261 cal AD 278 - cal AD 198	1810 - 1753 calBP 1742 - 1690 calBP 1672 - 1674 calBP	16.6 49.2 29.6		

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は，1950年を基準として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAAは，酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため，アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5）暦年の計算には，Calibl v7.1を使用。
6）暦年の計算には１桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは，Intcal13を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，１桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は，σが68.2%，２σが95.4%である。



第162図　暦年較正結果

第３節　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

（株）加速器分析研究所

１　概要

鹿児島県に所在する六反ヶ丸遺跡の測定対象試料は，竪穴建物跡，土坑，礫敷遺構下位路盤から出土した炭化物と炭化材11点である（第44表）。なお，これらの同一試料を対象に樹種同定が行われている。（別稿樹種同定報告参照）

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を科学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１㏖/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には，「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と第44表に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。

この標準試料をバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第44表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第44表に，補正していない値を参考値として第45表に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第44表に，補正していない値を参考値として第45表に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線状の暦年年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al.2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第45表に示した。なお，暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「calBP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

５　測定結果

測定結果を第44，45表に示す。

竪穴建物跡から出土した試料２点の^{14}C年代は，試料１が1910±20yrBPである。試料３が1290±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料１が66～124cal ADの間に２つの範囲で示され，弥生時代後期頃に相当する（藤尾 2009）。試料３が680～765cal ADの間に２つの範囲に示され，古墳時代終末期から古代初頭頃に相当する（佐原 2005）。

土坑から出土した試料１点の^{14}C年代は，試料２が1310±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料２が663～761cal ADの間に２つの範囲に示され，古墳時代終末期から古代初頭頃に相当する（佐原 2005）。

礫敷遺構下位路盤から出土した試料４の^{14}C年代は1920±20yrBP，暦年較正年代（１σ）は63～124cal ADの間に２つの範囲で示される。弥生時代後期頃に相当する（藤尾 2009）。

なお，試料１，４が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては，北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なると

の指摘がある（尾嵜2009，坂本2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合，ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は，４点の試料のうち，試料２が68%，試料３が64%のおおむね適正な値である。他の２点は，試料１が38%，試料４が29%で，炭化物としてはやや低い値である。試料には土が混じり，除去しきれなかった。試料1,4については，測定された炭素の由来に若干注意を要するが，測定結果に影響するほどではないと見られる。

竪穴建物跡６号出土炭化材の^{14}C年代は，５が1940±20yrBP，６が1920±20yrBP，５が1870±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は，５が25～80cal ADの範囲，６が56～123cal ADの間に２つの範囲，７が85～209cal ADの間に３つの範囲で示される。いずれも弥生時代後期頃に相当する（佐原2005，藤尾2009）。

土坑42号出土炭化材の^{14}C年代は，８が1780±20yrBP，９が1720±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は，８が230～325cal ADの間に２つの範囲，９が260～382cal ADの間に２つの範囲で示される。８は弥生時代後期から古墳時代前期頃，５は古墳時代前期頃に相当する（佐原2005，藤尾2009）。

土坑58号出土炭化材の^{14}C年代は，10が1240±20yrBP，11が1290±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は，10が695～860cal ADの間に５つの範囲，11が678～765cal ADの間に２つの範囲で示され，古墳時代終末期から古代頃に相当する（佐原2005）。

今回測定された試料はいずれも炭化材で，樹皮を確認できていない。このため，次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため，その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ，内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す（古木効果）。今回測定された試料には樹皮が残存せず，本来の最外年輪を確認できないことから，測定された年代値は，その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また，試料５～９が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては，北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009，坂本2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合，ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料となった炭化材には，土塊に包含された細片もあり，付着した土を十分除去できない場合があった。炭素含有率は，７，８，10，11が45%以上のおおむね適正な値であったが，５，６，９は30%前後のやや低い値を示した。

引用文献

Bronk Ramsey,C.2009 Bayesian analysis of radio carbon dates,Radiocarbon 51（1），337-360

藤尾慎一郎　2009　弥生時代の実年代，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，9-54

尾嵜大貴　2009　日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学１　弥生文化の輪郭，同成社，225-235

Reimer,P.J.et al.2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves，0,-50,000years cal BP,Radiocarbon 55（4）, 1869-1887

佐原眞　2005　日本考古学・日本歴史学の時代区分，佐原眞，ウェルナー・シュタインハウス監修，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集，ドイツ展記念概説　日本の考古学　上巻，学生社，14-19

坂本稔　2010　較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第５回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1970 Discussion: Reporting of14C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

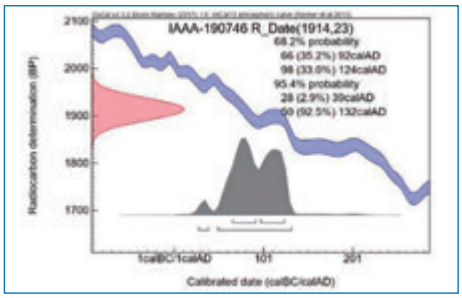
第44表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

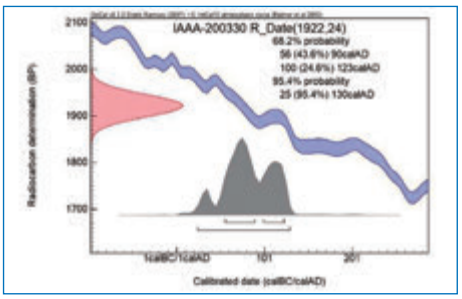
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-190746	1	竪穴建物跡８号	炭化物	AaA	-28.13 ± 0.16	1,910 ± 20	78.79 ± 0.23
IAAA-190747	2	土坑 51 号	炭化物	AAA	-26.75 ± 0.18	1,310 ± 20	84.92 ± 0.24
IAAA-190748	3	竪穴建物跡８号	炭化物	AAA	-24.31 ± 0.18	1,290 ± 20	85.19 ± 0.24
IAAA-190749	4	礫敷遺構下位路盤	炭化物	AaA	-25.37 ± 0.19	1,920 ± 20	78.76 ± 0.24
IAAA-200329	5	竪穴建物跡６号　炭１	炭化材	AaA	-29.31 ± 0.42	1,940 ± 20	78.50 ± 0.23
IAAA-200330	6	竪穴建物跡６号　炭２	炭化材	AaA	-29.27 ± 0.50	1,920 ± 20	78.72 ± 0.24
IAAA-200331	7	竪穴建物跡６号　炭７	炭化材	AaA	-26.97 ± 0.37	1,870 ± 20	79.25 ± 0.23
IAAA-200332	8	土坑 42 号　炭①	炭化材	AAA	-25.51 ± 0.35	1,780 ± 20	80.16 ± 0.24
IAAA-200333	9	土坑 42 号　炭②	炭化材	AaA	-26.27 ± 0.34	1,720 ± 20	80.78 ± 0.23
IAAA-200334	10	土坑 58 号　炭①	炭化材	AAA	-25.38 ± 0.45	1,240 ± 20	85.75 ± 0.24
IAAA-200335	11	土坑 58 号　炭③	炭化材	AAA	-27.54 ± 0.43	1,290 ± 20	85.17 ± 0.24

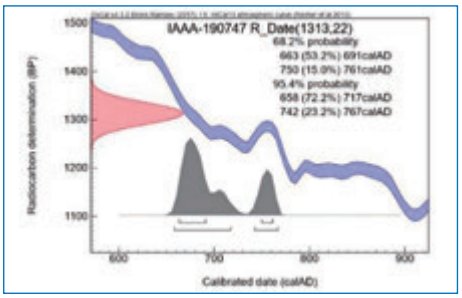
［ＩＡＡ登録番号：＃ 9775］
［ＩＡＡ登録番号：＃ A212］

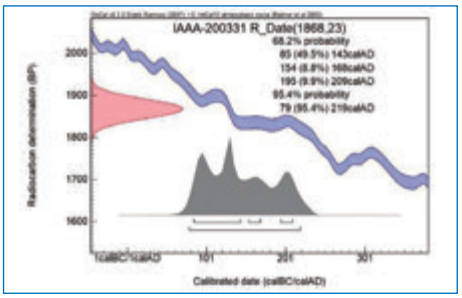
第45表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未方正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）

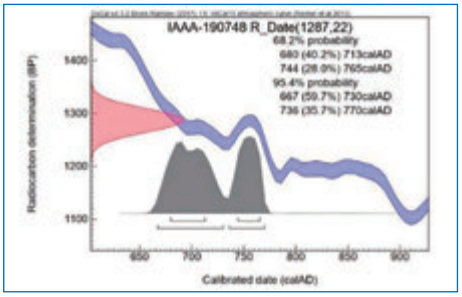
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-190746	1,970 ± 20	78.29 ± 0.23	1,914 ± 23	66calAD- 92calAD（35.2%） 98calAD-124calAD（33.0%）	28calAD- 39calAD（ 2.9%） 50calAD-132calAD（92.5%）
IAAA-190747	1,340 ± 20	84.61 ± 0.23	1,313 ± 22	663calAD-691calAD（53.2%） 750calAD-761calAD（15.0%）	658calAD-717calAD（72.2%） 742calAD-767calAD（23.2%）
IAAA-190748	1,280 ± 20	85.31 ± 0.24	1,287 ± 22	680calAD-713calAD（40.2%） 744calAD-765calAD（28.0%）	667calAD-730calAD（59.7%） 736calAD-770calAD（35.7%）
IAAA-190749	1,920	78.70 ± 0.24	1,917 ± 24	63calAD- 90calAD（38.2%） 99calAD-124calAD（30.0%）	27calAD- 41calAD（ 4.6%） 48calAD-131calAD（90.8%）
IAAA-200329	2,020 ± 20	77.80 ± 0.22	1,944 ± 23	25calAD- 80calAD（68.2%）	4calAD- 90calAD（86.1%） 99calAD-124calAD（ 9.3%）
IAAA-200330	1,990 ± 20	78.03 ± 0.22	1,922 ± 24	56calAD- 90calAD（43.6%） 100calAD-123calAD（24.6%）	25calAD-130calAD（95.4%）
IAAA-200331	1,900 ± 20	78.93 ± 0.22	1,868 ± 23	85calAD-143calAD（49.5%） 154calAD-168calAD（ 8.8%） 195calAD-209calAD（ 9.9%）	79calAD-219calAD（95.4%）
IAAA-200332	1,790 ± 20	80.07 ± 0.23	1,776 ± 24	230calAD-260calAD（29.7%） 280calAD-325calAD（38.5%）	143calAD-157calAD（ 2.1%） 167calAD-196calAD（ 5.3%） 210calAD-336calAD（88.0%）
IAAA-200333	1,740 ± 20	80.56 ± 0.22	1,715 ± 23	260calAD-279calAD（17.8%） 326calAD-382calAD（50.4%）	253calAD-304calAD（33.6%） 313calAD-391calAD（61.8%）
IAAA-200334	1,240 ± 20	85.68 ± 0.23	1,235 ± 22	695calAD-702calAD（ 3.5%） 708calAD-746calAD（35.6%） 764calAD-778calAD（13.1%） 792calAD-804calAD（ 7.0%） 842calAD-860calAD（ 9.0%）	688calAD-751calAD（44.0%） 760calAD-780calAD（14.4%） 787calAD-876calAD（37.0%）
IAAA-200335	1,330 ± 20	84.72 ± 0.23	1,289 ± 22	678calAD-712calAD（41.3%） 745calAD-765calAD（26.9%）	666calAD-730calAD（60.1%） 736calAD-770calAD（35.3%）

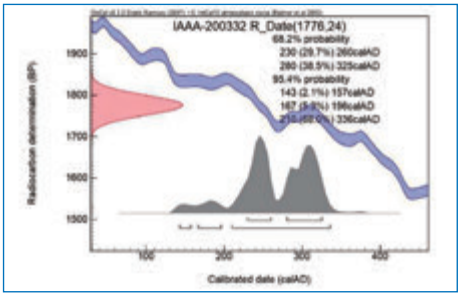


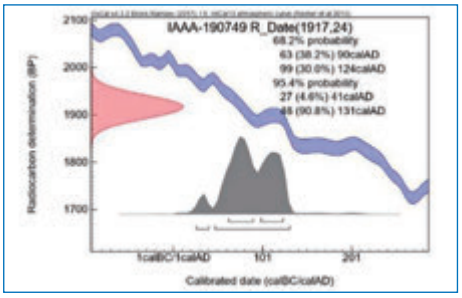


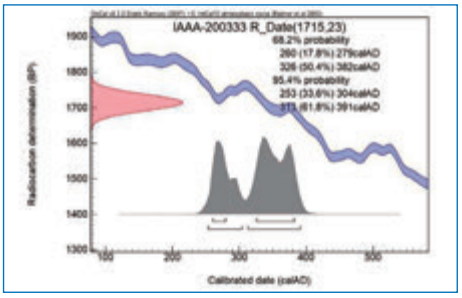


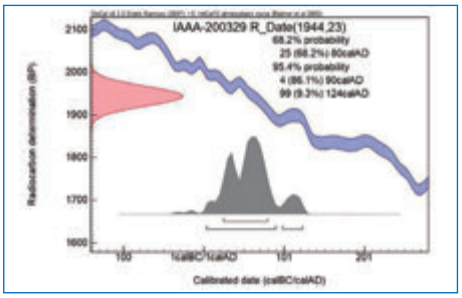


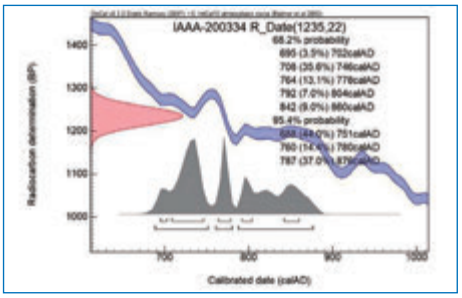


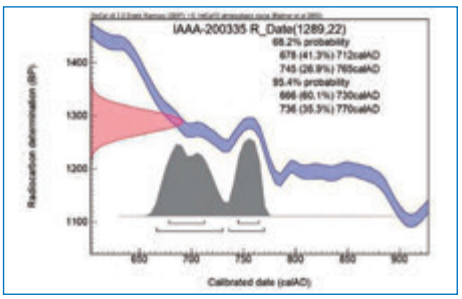












第163図　暦年較正年代グラフ（参考）

第４節　炭化材の樹種同定

（株）加速器分析研究所

１　試料

鹿児島県に所在する六反ヶ丸遺跡の試料は，竪穴建物跡６号から出土した炭化材３点，土坑42号および58号から出土した炭化材各２点計４点で，合計７点である。なお，これらの試料を対象に放射性炭素年代測定が行われており（別稿樹種同定報告参照），樹種同定と同じ破片を用いている。

２　分析方法

炭化材の多くは土塊中に複数の破片が認められる。十分な大きさがある試料については，分割して年代測定と樹種同定にそれぞれ供する。一方，小片しか認められない試料については，最初に樹種同定を実施し，顕微鏡観察・写真撮影に必要な最小限の破片を採取した上で残りを年代測定に供する。以下に樹種同定の方法について記す。

抽出した炭化材を自然乾燥させた後，双眼実体顕微鏡（NIKON製SMZ-10）で観察しながら木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製する。この際，脆い試料については，UVレジンを染み込ませて固化・補強する。作製した断面をアルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定し，破損防止のために周囲をUVレジンで固める。

走査型電子顕微鏡（株式会社日立ハイテクノロジーズ製SU3500）の低真空モード10～500倍で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982），Wheeler他（1998），Richter他（2006）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

３　結果

樹種同定結果を第46表に示す。炭化材は，広葉樹３分類群（コナラ属アカガシ亜属，クリ近似種，タイミンタチバナ）に同定された。なお，試料番号２,５の２点は，小片で脆い。いずれも柾目面の観察で道管が認められ，広葉樹であることは確認できたが，木口面での道管配列が観察できないため，種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科

放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線径は，最大で100～120㎛。道管の穿孔板は単穿孔板，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ　cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科クリ属

試料はいずれも保存状態が悪い。年輪界で割れており孔圏部の多くを欠く。僅かに残る孔圏部と晩材部における道管径の違いから環孔材と判断できる。晩材部の小道管は，多数が集まって火炎状に配列し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～15細胞高。

小片で孔圏部の多くを欠くことから，道管配列がよく似たコナラ節やシイ属との区別が困難である。これらの中では，道管径や配列の状況がクリに近いことからクリ近似種とした。

・タイミンタチバナ　*Myrsine seguinii* Lev.　ヤブコウジ科ツルマンリョウ属

散孔材。道管は単独または２個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板，壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性，１～５細胞幅，100細胞高以上。

４　考察

竪穴建物跡および土坑から出土した炭化材は，種類不明も含めて全て広葉樹材であり，不明を除く５点に３種類が認められた。確認された各種類の材質についてみると，アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる常緑高木である。木材は比較的重硬で強度が高い。クリ（近似種）は，二次林等に生育する落葉高木である。木材は重硬で強度と耐朽性が高い。タイミンタチバナは，暖温帯の沿海地に生育する常緑低木～高木である。木材は重硬な部類に入り，耐朽性が高い。

遺構別にみると，竪穴建物跡では，クリ近似種の利用が目立つ。クリ近似種の材質から，利用された木材の中に強度の高い木材が含まれていたことが推定される。

一方，土坑から出土した炭化材は，土坑37号がタイミンタチバナと種類不明の広葉樹，土坑46号が２点ともアカガシ亜属であり，土坑によって樹種が異なる結果が得られた。用材選択は土坑の用途・機能と関わる可能性があり，いずれの土坑でも重硬な材質の木材を利用したことが推定される。

引用文献

林昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181．

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176．

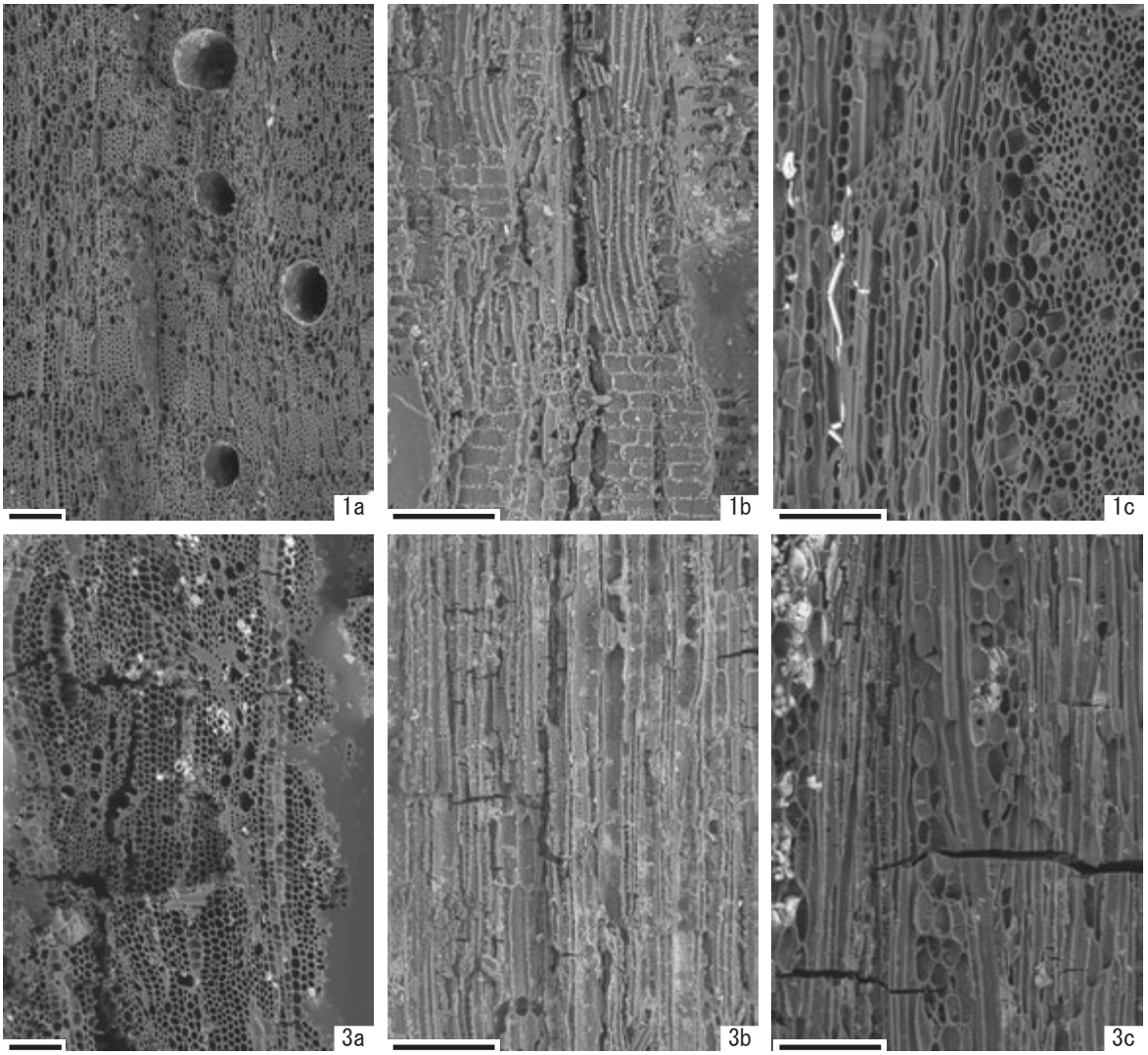
伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201．

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166．

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）, 2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）, 1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）, 海青社, 122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第46表　樹種同定結果

試料番号	遺構	取上番号	形状	樹種
1	竪穴建物跡６号	炭１	破片	クリ近似種
2	竪穴建物跡６号	炭２	破片	広葉樹（不明）
3	竪穴建物跡６号	炭７	破片	クリ近似種
4	土坑 42 号	炭①	ミカン割状	タイミンタチバナ
5	土坑 42 号	炭②	破片	広葉樹（不明）
6	土坑 58 号	炭①	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属
7	土坑 58 号	炭③	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属



1　コナラ亜属アカガシ亜属（試料番号６）　３　タイミンタチバナ（試料番号４）　a：木口　b：柾目　c：板目　各写真のスケールは 0.1 ㎜

第164図　炭化材

第５節　蛍光Ｘ線分析

公益財団法人元興寺文化財研究所

１　概要

小型仿製鏡１点（458）

銅鈴１点（997・998）

資料は鹿児島県出水市の六反ヶ丸遺跡から出土した金属資料で，銅鏡と銅鈴である。銅鏡は小型仿製鏡であり，古墳時代と推定されている。また，銅製の鈴は中世～近現代の層から出土した(*1)。これら資料を第165図，第167図に示す。

２　分析内容

資料の材質分析として蛍光Ｘ線分析を，資料材料の産地推定として鉛同位体比法(*2,3)を用いた。鉛同位体比法は資料の銅に含まれている鉛，あるいは製品を作る際に加えられた鉛の同位体比から，銅あるいは鉛の産地を推定する方法である。産地の情報は資料の特徴を明らかにする上で有用である。なお，鉛同位体比法による産地推定は日鉄テクノロジー株式会社と帝京大学文化財研究所平尾良光客員教授に依頼した。また，小型仿製鏡の鈕に残されていた有機質を観察するため，微小部観察を行った。観察箇所を第165図に示す（青丸）。

３　試料採取

資料より微小量の試料を採取し，蛍光Ｘ線分析，及び鉛同位体比法の試料とした。試料採取箇所を第165図，第167図に示す（赤丸）。小型仿製鏡では，資料破断面よりマイクログラインダーを用いて金属部分，及び錆部分を採取し試料とした（第166図）。銅鈴では，割れが生じて本体より容易に取り外せる状態となっている破片を採取し，試料とした（第168図）。

４　蛍光Ｘ線分析

（１）測定方法及び使用機器

蛍光Ｘ線分析は試料の微小領域にＸ線を照射し，その際に試料から放出される各元素固有の蛍光Ｘ線を検出することにより，試料の構成元素を同定する分析方法である。

測定にはエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置「EA6000VX」（株式会社日立ハイテクサイエンス，Ｘ線ターゲット：ロジウム（Rh））を用いた。測定は大気中で□1.2×1.2㎟コリメータを用い，管電圧50kV，照射時間120秒で行った。

（２）結果及び考察

検出された元素を第47表に，得られた蛍光Ｘ線スペクトルを第169図，第170図に示す。小型仿製鏡からは主として鉄（Fe），銅（Cu），スズ（Sn），鉛（Pb）を，微量元素としてケイ素（Si），ヒ素（As），銀（Ag），アンチモン（Sb）を検出した。この結果より，小型仿製鏡は青銅製と考えられた。一方銅鈴からは，主としてFe，Cu，亜鉛（Zn）を，微量元素としてSi，As，Ag，Sn，Pb を検出した。この結果より，銅鈴は真鍮製と考えられた。また，小型仿製鏡，銅鈴共に鉛同位体法に十分な鉛が含まれていることも明らかとなった。

５　鉛同位体比法

（１）鉛同位体比法の原理

今までの研究で，鉛には重さが異なる４種の同位体（204Pb，206Pb，207Pb，208Pb）が混在しており，鉛同位体の中で鉛-206（206Pb）はウラン-238（238U）から，鉛-207（207Pb）はウラン-235（235U）から鉛-208（208Pb）はトリウム-232（232Th）から自然の放射壊変で生成されることがわかっている。地球が生まれた時に，岩石などの中に他元素とともに鉛がウラン・トリウムと共存していれば，鉛の同位体は地球生成後の時間とともに生成され，既にあった鉛に付加される。地球の歴史のあるときに，地殻変動や火山活動で鉛が硫化物や塩化物などとして流動し，これら岩石から抽出されて鉛鉱床を生成すると，この時に鉛はウラン・トリウムから切り離されるので，鉛同位体の量と比が定まり，もう変化しない。各地域の鉛鉱床の鉛同位体比は鉛鉱物を作った岩石中のウラン・トリウム・鉛の量比の違い，および地殻変動などの鉛鉱床を形成する時期が一般的には異なるので，各鉛鉱床でそれぞれ異なった値となる。結果として東アジア地方における鉛鉱床では第171図（Ａ式図：207Pb/206Pb208Pb/206Pb）と第172図（Ｂ式図：206Pb/204Pb-207Pb/204Pb）で示されるような地域毎に鉛が分布する。両図は含まれる鉛同位体が異なるので，少々意味が異なっている。両図ではそれぞれの地域が日本，朝鮮半島，中国華北・華南などの領域として示される。未知資料の鉛同位体比を測定し，これらの図に載せた場合，両方の図で設定された同じ領域に含まれれば，その地域で生産された鉛が含まれている可能性が高いと示される。もちろん例外はある。鉛同位体比の表現方法として各種あるが，第171図（207Pb/206Pb208Pb/206Pb：Ａ式図）と第172図（206Pb/204Pb-207Pb/204Pb:Ｂ式図）の方式で示されることが多いので，本報告でもこの方式で表現する。この原理を用いて文化財資料に含まれる鉛の同位体比から銅や鉛の生産地を推定する方法を鉛同位体比法と称している(*4.5)。

地殻変動時には鉛とともに，銅・亜鉛・錫などの元素も類似して挙動すると言われ，銅製品に含まれる鉛は一般的には銅鉱床を生成した鉱床生成活動に付随した鉛で，銅鉱床を作る際に銅と鉛は類似した挙動を示す。最終的には銅と鉛は別々の鉱床を生成するが，鉛は銅から完全には分離されず，少量の鉛が銅鉱床の中に残される。それ故，銅を精錬した際に，昔の方法では共存した鉛を除ききれず，鉛は精錬した銅に少量含まれていることが普通である。また，銅あるいは青銅に鉛を加えて金属の性質を変えることがあるが，鉛は安価に精錬できる

ため，遠くから運ばれることは少なく，近くで精錬された鉛を利用することが多い。それ故銅鉱床の近くで採取された鉛であるため，鉛の同位体比から利用された鉛あるいは銅の産地を推定できる。

（２）鉛同位体比の測定方法

本資料の材料産地を推定するために鉛同位体比法を利用する。鉛同位体比を測定する方法として，表面電離型質量分析法，二重収斂型 ICP 質量分析法などあるが，本研究では表面電離型質量分析法を用いる。この方法で鉛同位体比を測定するためには本体から採取した微少量部分を使用する。表面電離型質量分析計で鉛同位体比を測定するときに鉛の純度が高ければ高いほど精度が上がる故，鉛を化学的な方法で単離する。測定用に採取した微少量（～１㎎）の試料に次のような化学操作を行って鉛を分離する。

試料を石英製ビーカーに入れ，硝酸 0.3ml を加え，１日放置して資料を溶解する。試料が溶解した後，蒸留水で ５-10ml に希釈し，電極に白金板を利用し，直流電圧 ２V で電気分解する。鉛は酸化され，二酸化鉛として陽極の白金電極上に析出するので，この白金電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で鉛を還元溶解する。この溶液の鉛濃度を ICP 法で測定し，0.2μgの鉛を分取する。この分取した鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に載せ，加熱固化する。以上のように準備したフィラメントを日鉄テクノロジー社に設置されている質量分析計（Finnigan MAT262）の中にセットし，測定諸条件を整え，フィラメント温度 1200℃で鉛同位体比を測定する。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料 NBS-SRM-981 で規格化する（＊6）。

（３）鉛同位体比測定の結果

鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比値を第48表で示し，第173図と第174図で図示する。

（４）結果と考察

鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比図（第173図と第174図）から，小型仿製鏡は中国華北の弥生時代後期に集中的に利用された材料である「a」領域に含まれ，銅鈴は日本産材料領域に含まれた（＊7）。測定された２資料は資料の種類と年代が異なるため，同一次元では考察できないので，それぞれを別々に考察する。

小型仿製鏡

本資料である小型仿製鏡は発掘状況から古墳時代の資料とされる。小型仿製鏡は一般的には弥生時代後期から古墳時代の資料であるとされ，いくつかの資料に関して，鉛同位体比が測定されている。古墳時代の一般的な銅鏡はそのほとんどが華南産材料で作られていると報告されているが，本資料は古墳時代に主流である銅鏡とは異なる小型仿製鏡なので，小型仿製鏡に関して調べてみると，第175図と第176図となる（＊7,8）。

第175図と第176図の分布図から判断すると，弥生時代と古墳時代の小型仿製鏡はそのほとんどが「a」領域に含まれている。いくつかは朝鮮半島産材料領域，あるいは華南産材料領域に含まれているが，それらのほとんどが「a」領域を中心として集まっている。それ故，六反ヶ丸遺跡から出土した仿製鏡は弥生時代に北九州を中心とした地域に拡がった小型仿製鏡と類似した材料を利用している。

古墳時代の小型仿製鏡も「a」領域を中心としているので，古墳時代に作られたとも考えられるが，弥生時代後期の資料が伝世などの形で，古墳時代まで残った可能性もあり，発掘で推定された年代が今後の考察の基本になるであろう。

銅鈴

本資料である銅鈴は日本産材料領域に含まれた。一般的に銅鈴は日本で作られたと推定されるが，材料となる銅は日本産であるとは必ずしも言えない。日本における銅製品（材料）の主生産地は各時代によって異なることがわかっている。すなわち，弥生時代・古墳時代は朝鮮半島と中国華北・華南，奈良時代・平安時代中期までは日本，平安時代後期・鎌倉時代・室町時代前半までは中国華南，室町時代後期は中国華南・日本，戦国時代は中国華南・東南アジア・日本，江戸時代は日本であるというおおまかな流れが示されている（＊9）。しかし，どの時代にも頻度は少ないが中国華南産資料や朝鮮半島産資料（材料）が流入しているのも事実である。また，鎌倉時代などに日本産材料が全くないとは言い切れない。しかしながら，このようにおおまかな材料（製品）の流れができていると考えると，本資料はどの時代の資料でもあり得るが，奈良時代・平安時代，あるいは室町時代後期から江戸時代という可能性が高い。そこで，一つの例として，平安時代資料と比較してみる（＊9）。

第177図と第178図では本銅鈴と平安時代の一般資料（小仏像，火熨斗［ひのし］，和鏡など）および長登銅山の鉛同位体比値とを比較した。平安時代の日本産銅はかなりの部分が長登銅山産の銅を利用しているように推定される。そこで，本資料である銅鈴の鉛同位体比を調べてみると，Ａ式図で長登銅山の値とは少々離れているが，Ｂ式図ではぴったり一致している。Ａ式図で長登銅山の値とこれだけ離れていると，長登銅山産材料であるとは言い切れない。ただし，長登銅山の中で場所により，鉛同位体比はばらついているので，長登銅山産の銅ではないとも言い切れないので，難しいところである。

６　微小部観察

（１）使用機器

微小部観察には，実体顕微鏡「Leica MZ 16」（ライカマイクロシステムズ株式会社），及び，デジタルマイ

クロスコープ「VHX-200」（株式会社キーエンス）を用いた。

（２）結果及び考察

観察された像を第179図に示す。鈕に通していたと考えられる紐の一部が観察された。ただし，残存状況が良くないため，繊維径などの詳細は明らかにならなかった。

引用文献

１）（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財センター：六反ヶ丸遺跡現地説明会資料 2018年11月10日

２）平尾良光：鉛同位体比法，「青銅鏡・銅鐸・鉄剣を探る」『文化財を探る科学の眼- ３』，平尾良光・山岸良二編，国土社（東京），p13-19（1998）

３）平尾良光：鉛同位体比法の応用ー歴史資料の産地推定ー，RADIOISOTOPES 57, p709-721（2008）

４）平尾良光，鈴木浩子：弥生時代青銅器と鉛同位体比，『古代青銅の流通と鋳造』，平尾良光編，鶴山堂（東京），p163-208（1999）

５）平尾良光編：「古代東アジア青銅の流通」鶴山堂（東京），p352（2001）

６）平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について，保存科学28，17-24（1989）

７）平尾良光：鉛同位体比の測定と分析，「第６巻，弥生・古墳時代，青銅・ガラス製品」『考古資料大観』，森田稔・井上洋一編，小学館（東京），p345-368（2003）

８）平尾良光，榎本淳子，鈴木浩子：古墳時代青銅製品の鉛同位体比，考古学雑誌 97，27-62（2013）

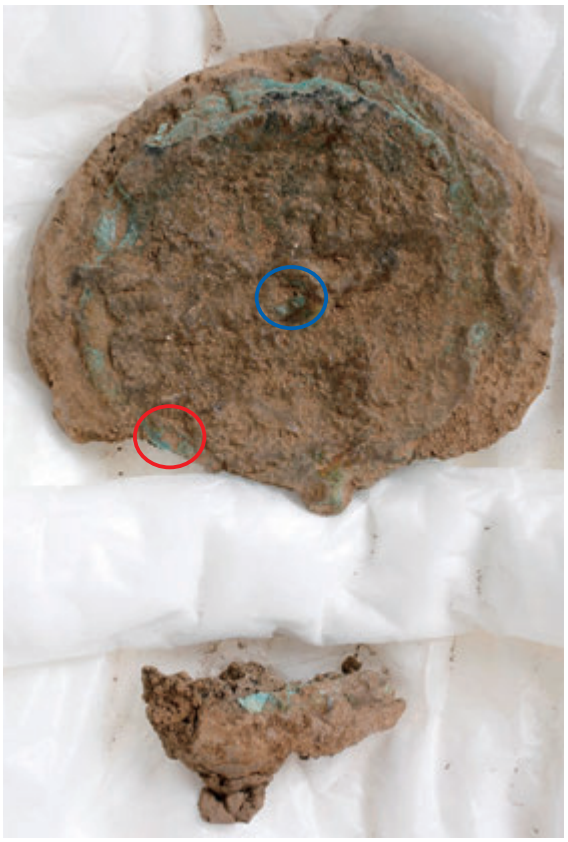
９）平尾良光：日本の歴史における産地推定のための鉛同位体比値，「帝京大学文化財研究所研究報告」17，p15-70（2018）（文責 山口 繁生）

第47表　蛍光Ｘ線分析による検出元素及び検出元素のピーク強度

原子番号	元素	元素名	ライン	ROI（keV）	強度（cps）	
					小型仿製鏡	銅鏡
14	Si	ケイ素	K α	1.60-1.88	341	298
26	Fe	鉄	K α	6.23-6.57	6577	4270
29	Cu	銅	K α	7.86-8.23	53804	124487
30	Zn	亜鉛	K α	8.44-8.82		15416
33	As	ヒ素	K β	11.52-11.93	1785	202
47	Ag	銀	K α	21.84-22.37	991	90
50	Sn	スズ	K α	24.91-25.47	5359	285
51	Sb	アンチモン	K α	25.99-26.56	330	
82	Pb	鉛	L β	12.41-12.84	26639	880

第48表　鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した試料の鉛同位体比

資料番号	資料名	測定結果				
		$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
NS 1 IC74	銅鏡	17.729	15.540	38.408	0.8765	2.1664
NS 1 IC73	銅鈴	18.432	15.615	38.654	0.8472	2.0972
	誤差（±）	0.010	0.010	0.030	0.0003	0.0006



第165図　小型仿製鏡
（青丸：微小部観察箇所，赤丸：試料採取箇所）



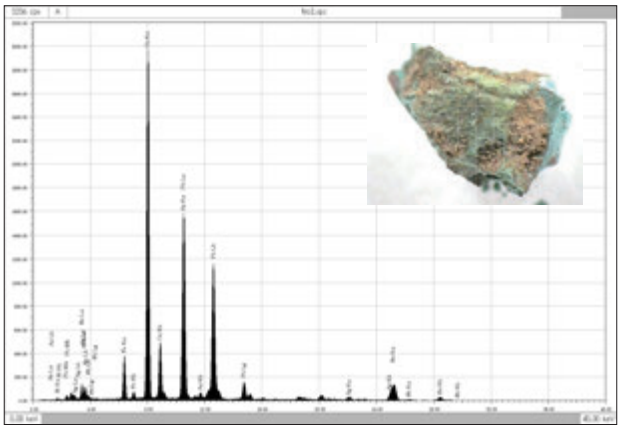
第167図　銅鈴（赤丸：試料採取箇所）



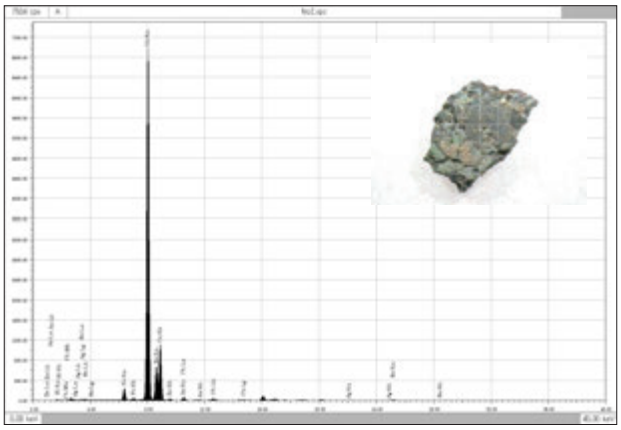
第166図　試料採取状況（小型仿製鏡）



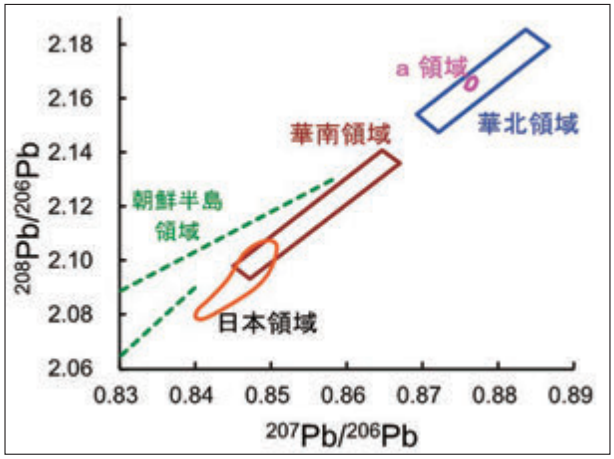
第168図　試料採取状況（銅鈴）



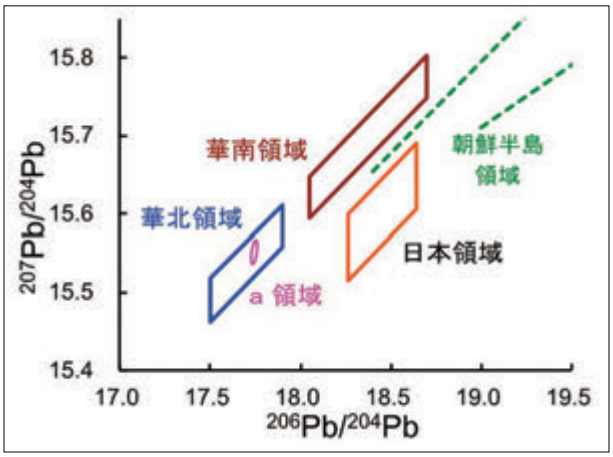
第169図　蛍光X線スペクトル（小型仿製鏡）



第170図　蛍光X線スペクトル（銅鈴）

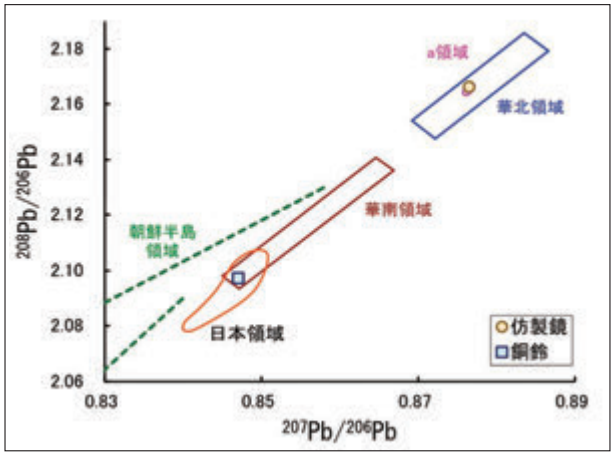


第171図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図
（Ａ式図）

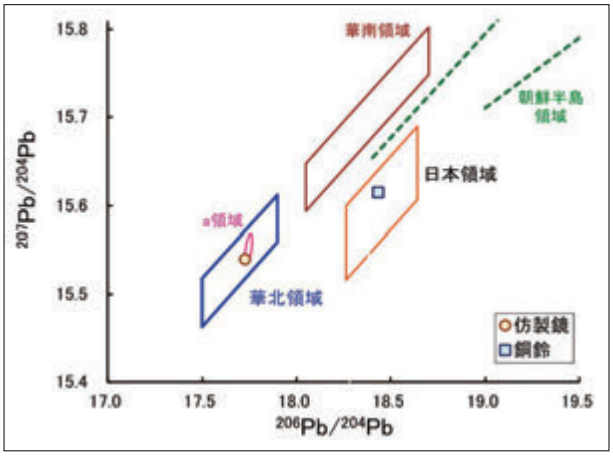


第172図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図
（Ｂ式図）

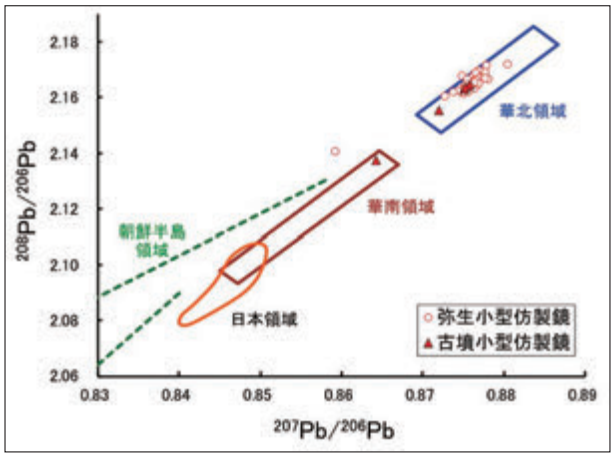
注）東アジアにおける各地域の主要な鉛鉱床が示す鉛同位体比の広がりを模式的に示す。
a 領域とは弥生時代後期の銅矛や銅鐸が集中して集まる領域である。



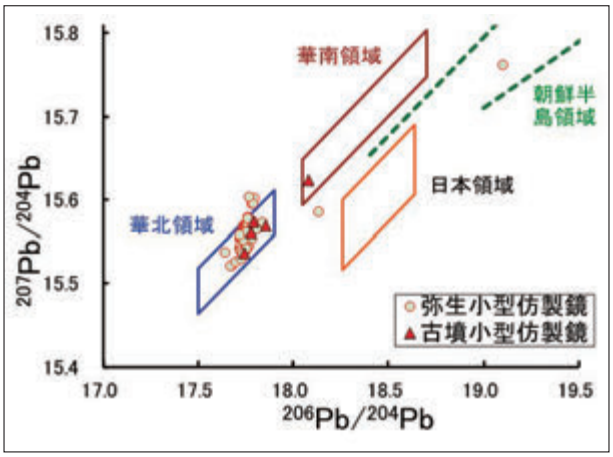
第173図　鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した
資料の鉛同位体比（Ａ式図）



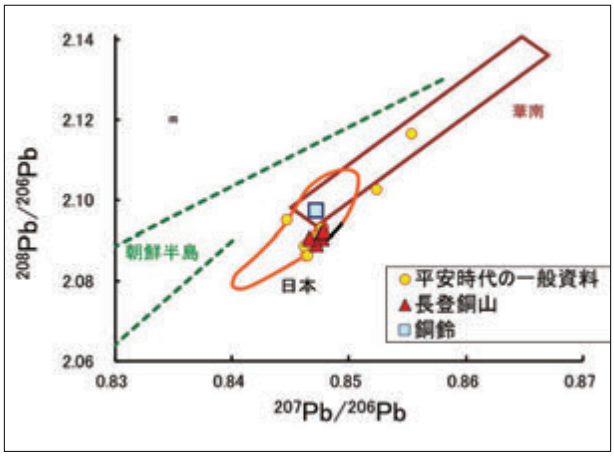
第174図　鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した
資料の鉛同位体比（Ｂ式図）



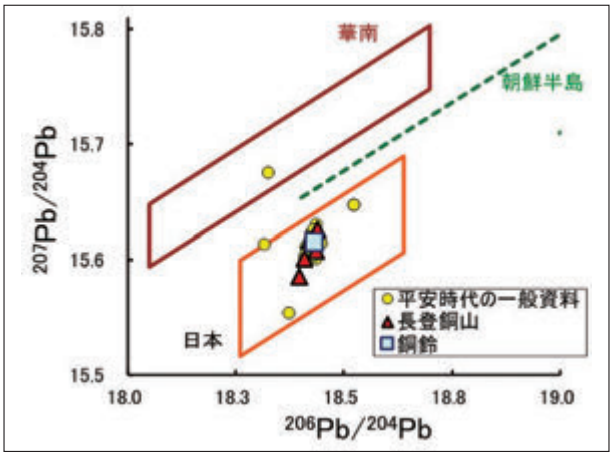
第175図　弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布（Ａ式図）



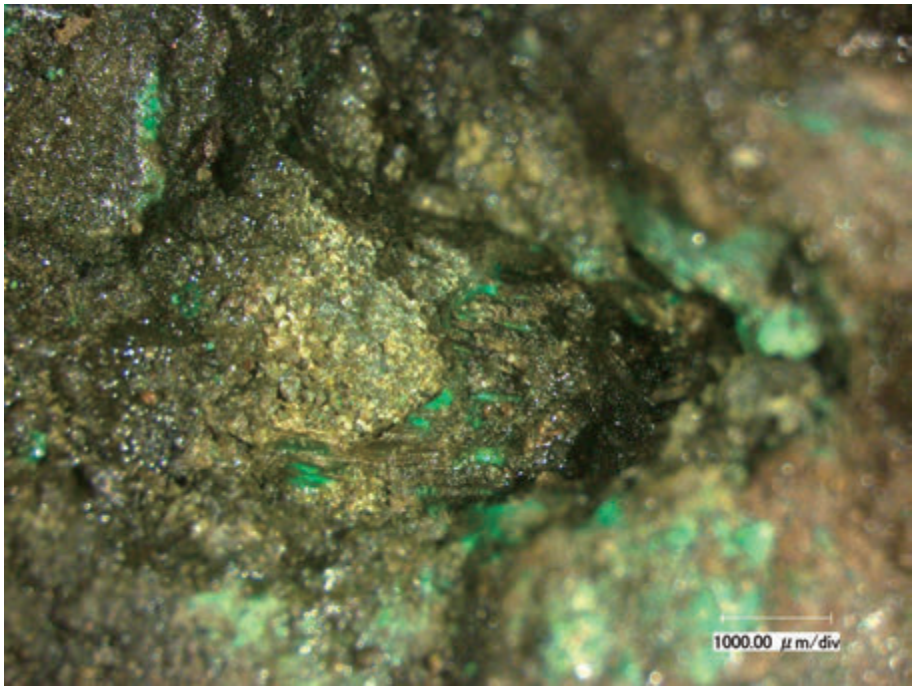
第176図　弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布（Ｂ式図）



第177図　銅鈴と平安時代資料との比較（Ａ式図）



第178図　銅鈴と平安時代資料との比較（Ｂ式図）



第179図　鈕穴の微小部観察像

第６節　焼土試料のルミネッセンス分析

下岡順直（立正大学地球環境科学部）
一般社団法人文化財科学研究センター

１　はじめに

遺跡より検出された焼土について，ルミネッセンス法を用いた理化学的分析を行った。ルミネッセンス法は，熱ルミネッセンス（thermoluminescence，TL）や光ルミネッセンス（optically stimulated luminescence，OSL）による年代測定（長友1999，下岡2018）として一般的には用いられるが，温度の関数としてルミネッセンス計測をすることから，石英や長石など測定対象鉱物の被熱履歴を推定する方法としても利用されてきた（長友ほか2003，西村ほか2007，下岡2016）。今回は，TL年代測定とともに，赤外光ルミネッセンス（infrared stimulated luminescence，IRSL）感度変化法（西村ほか2007，小畑，下岡2015）を用いて被熱温度推定を行った。TL年代測定法は，加熱によりTL信号がゼロリセットされてから現在までに浴びた自然放射線量（蓄積線量）を，１年間に吸収する放射線量（年間線量）で除することでTL年代を求める。IRSL感度変化法は，対象物が露光していても被熱履歴の評価が可能であるため，年代測定に供するよりも試料の扱いが容易である。そして，IRSL感度変化法は，IRSL信号が露光のみで加熱が生じなければ，放射線量に対するIRSL強度はほぼ変化しない（例えば，Rhodes 2011など）とされており，このような特性を活かして被熱温度推定を行う。

２　試料採取および処理

試料は，土坑58号で検出された焼土からブロック状に試料採取が行われた４試料（№１～№４）である。

（１）TL年代測定

１）土壌試料№１，№２において，約１lx程度の暗赤色下の暗室で，炭化物が付着している土壌表面を除去後，薄く土壌をはがすように試料採取

２）50℃恒温槽で乾燥後，乳鉢を用いて粉砕し，標準ふるいを用いて粒度分離

３）選別した粒度50～250㎛の試料に10％過酸化水素水溶液を加え，一晩静置，微細な有機物を除去

４）20％塩酸溶液を添加，60分反応させ，炭酸塩鉱物を除去するとともに，鉱物の表面をクリーニング

５）磁気分離後，白色鉱物に20％フッ酸溶液を加え90分反応させ，超純水で洗浄（石英以外の鉱物の除去，石英表面のエッチング）

６）50℃恒温機で乾燥後，50㎛の標準ふるいで篩別（「ナチュラル試料１」とする）

７）№１，№２の残試料で，年間線量測定，含水比（水重量を乾燥土壌重量で除した値）を計測

（２）熱温度推定

１）土壌試料№３，№４において，約180 lxの蛍光灯下で炭化物付着部分から試料採取

２）水簸（すいひ）後，沈殿物を除去

３）10％過酸化水素水溶液を添加し，微細な有機物を除去

４）20％塩酸溶液を添加，60分反応させ，炭酸塩鉱物を除去するとともに，鉱物の表面をクリーニング

５）篩別により粒度を約10～50 ㎛に調整（「ナチュラル試料２」とする）

３　測定

TLおよびIRSL測定は，立正大学に設置してあるOSL/TL自動測定装置NRL-99-OSTL2-KU（下岡ほか2015）を用いた。

（１）TL年代測定

№１と№２は，TL年代測定を行った。TL測定による蓄積線量評価には，多試料付加線量法（Aitken 1985）を用いた。まず，それぞれの「ナチュラル試料1」に小型X線管球で№１には7.8，15.5，23.2 Gyを，№２には４，８，12 Gyを付加照射した試料（以下，「付加照射試料」と呼ぶ）を作成し，TL測定を行った。また，低線量域補正（TL発光量が放射線量に比例しない低線量域の補正）をするために，「ナチュラル試料1」と「付加照射試料」をTL測定後，小型X線管球で№１には7.8，15.5，23.2 Gyを，№２には２，４，８，12 Gyを照射してTL測定を行った。TL測定条件は，窒素雰囲気で昇温速度5℃／sec，100～500℃まで連続昇温法により測定した。TLの検出波長は，310～440 nm（半値幅）である。

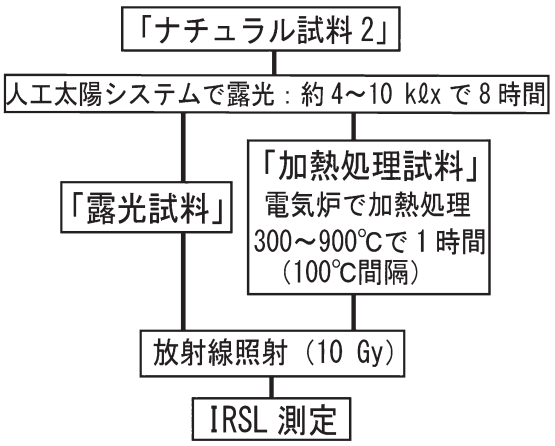
蓄積線量評価では粒径50～250 ㎛の測定試料を用いて，年間線量は一年間に鉱物が吸収するβ線，γ線および宇宙線の合計で評価した。まず，№１と№２の土壌を恒温機で乾燥させて含水比（降水量の変動などの不確定要素として，誤差を10％と仮定）を計測後に，所定のプラスチックケースに30 g封入し，立正大学に設置してあるキャンベラ製モデル7229P-7500Sのゲルマニウム半導体検出器を用いて計測した。そして，ウラン，トリウム，カリウムの濃度を求め，放射線量への換算式（Guérin et al. 2011）を用いて，それぞれ年間β線量，年間γ線量を見積もった。見積もった値は，試料を乾燥する際に求めた含水比を用いて含水比補正を行った。また，年間宇宙線量は，焼土を採取した土坑58号が表土下50 ㎝程度付近で検出されたと仮定して補正し，0.13 mGy/年とした。

（２）IRSL感度変化法による被熱温度推定

№３と№４の「ナチュラル試料２」はガラスシャーレに移し，約4,000～10,000 lx程度に設定した人工太陽システム（セリック社製SOLAX XC-100B形）を用いて８時間露光してOSL信号を人為的にゼロリセットした。その後，露光のみで加熱処理無し測定試料（以下，「露光試料」と呼ぶ）と，露光後に電気炉を用いて300～900℃まで100℃間隔で1時間ずつ加熱処理を行った測定試料（以

下，「加熱処理試料」とする）を用意した（第180図）。

「露光試料」と「加熱処理試料」は，小型X線管球（下岡ほか2015）を用いて10 Gy照射後，IRSL測定をした（図1）。IRSL測定条件は，励起波長890±30 nm，検出波長350～600 nm（半値幅）とし，160℃で60秒間プレヒート（測定前の加熱処理）後，測定温度60℃で100秒間行った（下岡，長友2001）。



第180図　IRSL感度変化法による被熱温度推定の測定手順

4　結果と考察

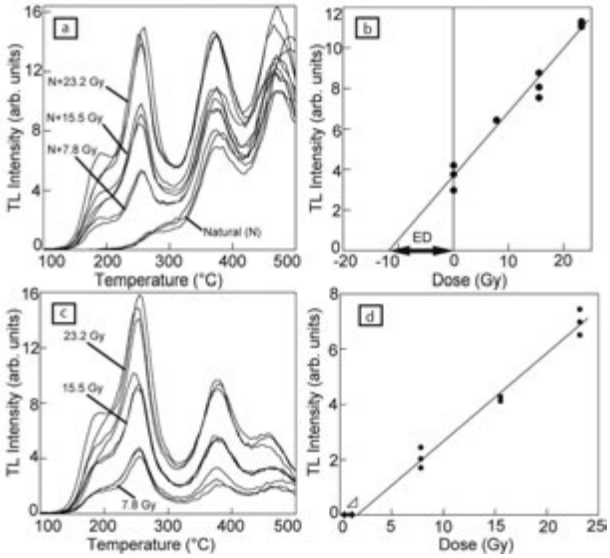
（1）TL年代測定

TL測定結果を第181図と第182図に示す。№1では，400～500℃付近のTLグローカーブ（第181図a）の形状が「付加照射試料」ごとに明瞭な区別は出来ず，ほとんど同じくらいのTL強度を示した。一方，低線量域補正用のTLグローカーブ（第182図c）では，放射線量ごとにTLグローカーブが明瞭に分かれたデータであった。低線量域補正用のTLグローカーブは，人為的に500℃まで加熱後にTL測定されている。このことから，№1から抽出した石英は必ずしもTL信号が完全にゼロリセットされるまでの熱量を受けていない可能性がある（大手前大学史学研究所編2007）。もしくは，被熱されていない石英を含んでいた可能性もある。№2においても，№1と同様のデータが得られた。このことから，№1も№2も得られるTL年代は見かけ上古い年代を示す可能性がある。

以上を念頭に入れながら，データ解析を行った。まず，各試料のTLグローカーブを用いて，温度に対して線量が安定しているかを「付加照射試料」のTL強度と「ナチュラル試料」のTL強度の比で検討するプラトーテスト（Aitken 1985）を行った。その結果，安定したTL強度が得られる温度領域（プラトー領域）として，№1では310～315℃，№2では290～295℃が得られた。次に，プラトー領域のTL強度を積算して生長曲線を作成し，最小二乗法により直線回帰を行い，その直線を外挿することで等価線量（ED）を求めた。低線量域補正（⊿）についても，プラトー領域のTL強度を積算して同様に求めた。蓄積線量は，等価線量と低線量域補正の和で求める。№1および№2の蓄積線量は，それぞれ13.3 Gyと6.3 Gyになった。

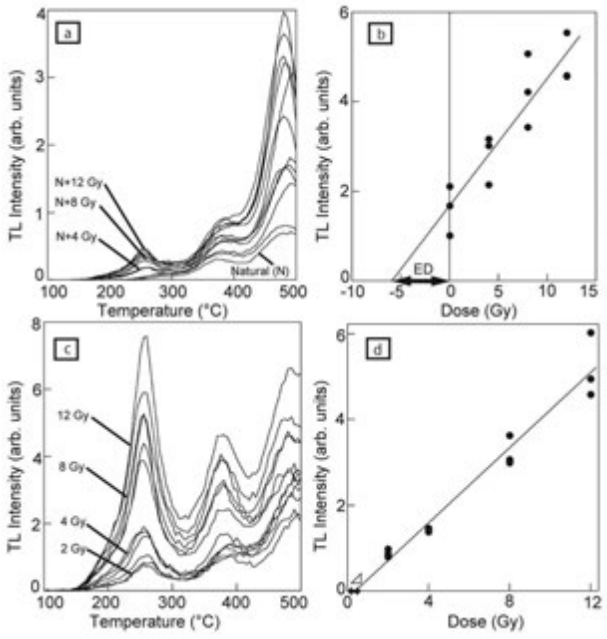
ゲルマニウム半導体検出器を用いて計測した土壌中のウラン，トリウム，カリウムの濃度は，№1および№2それぞれ2.21±0.08 ppm，11.99±0.43 ppm，2.14±0.06%と2.14±0.08 ppm，12.10±0.43 ppm，2.23±0.06%であった。これを年間β線量，年間γ線量に換算し，№1および№2の含水比それぞれ18±2%と18±2%で含水比補正をしてから，これらと年間宇宙線量を合計して年間線量を求めた。その結果，№1および№2でそれぞれ3.18±0.17 mGy/年と3.26±0.17 mGy/年であった。以上より，蓄積線量を年間線量で除してTL年代を求めると，№1および№2のTL年代はそれぞれ4.2千年前と1.9千年前となった。

№1および№2の試料は同じ土坑から採取した土壌であることから，同じTL年代を得られることが予想されたが，結果的にはかなり異なる数値が得られた。これは前述したとおり，№1および№2について十分な加熱がされていないために，測定に供された試料は見かけ上，生焼け状態と類似していると考えられる。試料採取時の肉眼観察でも，炭化物が付着していた土壌はまだらに赤色化している，もしくは赤色化を肉眼的に識別するのが難しい状態であった。今回は，炭化物が付着している部分の土壌を削り出してTL年代測定は試みたが，それでも生焼け状態という結論になった。



第181図　№1のTLグローカーブ（a，c）と生長曲線（b，d）

a,b：等価線量（ED）評価　c,d：低線量補正（⊿）評価



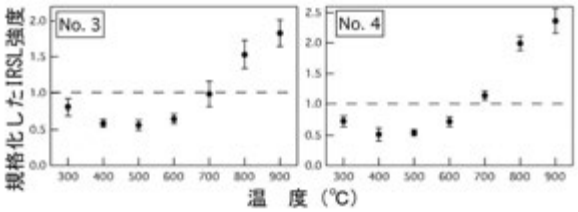
第182図　№２のTLグローカーブ（a，c）と生長曲線（b，d）

a, b：等価線量（ED）評価　c, d：低線量補正（⊿）評価

（２）IRSL感度変化法による被熱温度推定

№３および№４で測定した40～80秒間のIRSL強度をそれぞれ積算し，「加熱処理試料」のIRSL強度を「露光試料」のIRSL強度で規格化した。測定した試料ごとに段階加熱によるIRSL感度変化の結果を第183図に示す。その結果，№３は，600℃まではIRSL強度は１を下回るが，700℃でほぼIRSL強度は1となり，800℃以上ではIRSL強度が１を超えた。№４は，600℃まではIRSL強度は１を下回るが，700℃以上ではIRSL強度が１を超えた。

IRSL被熱温度推定では，次の方法で被熱温度を推定する。過去の被熱温度をT0，電気炉による加熱処理温度をT1とする。同一試料で同じ被ばく放射線量のとき，電気炉による加熱処理温度が過去の被熱温度を超えない時，すなわちT0＞T1もしくはT0=T1の場合，「露光試料」のOSL強度に対して「加熱処理試料」のOSL強度の感度変化はほとんど生じないもしくは小さい。これに対して，電気炉による加熱処理温度が過去の被熱温度を超えた時，すなわちT0＜T1の場合，OSL強度は感度変化を生じ，「露光試料」に対して「加熱処理試料」は系統的に変化する。そこで，OSL強度が「露光試料」とほぼ同じで一定に維持された後にOSL強度が増加へ変化する温度に着目すると，過去の被熱温度はOSL強度の感度が増加へ変化する温度付近であると推定できる。つまり，IRSL強度が低温側からみて感度の増加変化を起こし，かつ，「露光試料」のIRSL強度を超える（例えば，第184図の縦軸で１を超える）最初の変化点付近を被熱温度として推定する。この判定方法を用いて，№３および№４の被熱温度を推定した。№３では約700～800℃程度（約700℃付近），№４では約600～700℃程度（約700℃付近）に被熱した可能性が示された。なお，図４より№３のほうが№４よりも被熱した温度はやや高かったと考えられる。



第183図　各資料における段階加熱によるIRSL強度の感度変化

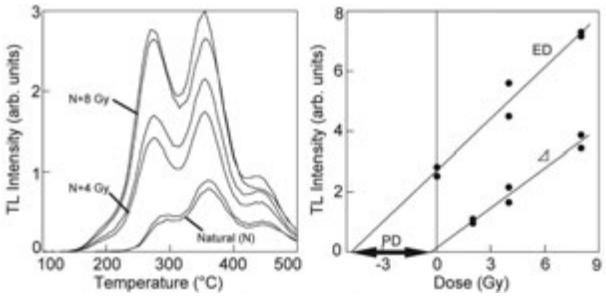
縦軸は，「加熱処理した資料」の IRSL 強度を「露光のみ試料」の IRSL 強度で規格化した値。加熱処理した温度

（３）補足実験

前述の４（１）より№１と№２は生焼け状態に類似しており，被熱された時代を示す数値を得ることができなかった。そこで，№３と№４について，光があたっている試料ではあるが暫定的に年代推定を試みた。年代測定の手順は３（１）TL年代測定に示した方法に準じた。結果を第184図，第185図に示す。№３は，500℃までTLグローカーブが「付加照射試料」で明瞭に区別できるデータであった（第184図）。これに対して，№４は№１や№２と同様に400～500℃付近のTLグローカーブ（第181図a）が「付加照射試料」で不明瞭なTLグローカーブ形状を示した（第185図）。以上の結果より，№３はTL信号がほぼ完全にゼロリセットするまで加熱されていた可能性があり，№４は№１や№２と同様に生焼けの可能性が考えられる。№４については，IRSL感度変化法による被熱温度推定では700℃付近の被熱が観察された。しかし，焚き火や炭火の熱は約700～800℃程度であることから，№４の被熱はおそらく炎が直に接して土壌が赤色化したことが推測され，TL信号が完全にゼロリセットするほどの熱量を受けるまでには至らなかったと考えられる。

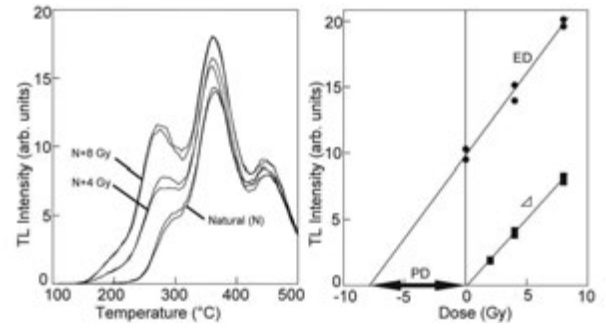
第184図，第185図より，№３と№４の蓄積線量を大まかに見積もった結果は4.4 Gyと8.0 Gyであった。これを，№１と№２の年間線量を加重平均した3.67±0.12 mGy/年で蓄積線量を除すると，TL年代は№３で1.2千年前，№４で2.2千年前と見積もることができた。この結果より，№３のTL年代が被熱された時代に近いと考えられ，№４のTL年代は見かけ上の年代である。なお，蓄積線量の評価は暫定的なものであるため，年代の誤差は評価しない。

以上をまとめると，分析に供された土壌試料№１から№４では，№３が十分な加熱を受けており，№２と№４が同程度で被熱は十分ではない，その次に№１という評価が可能であろう。



第184図　№3のTLグローカーブ（左）と生長曲線（右）

ED：等価線量，⊿：低線量補正，PD：蓄積線量



第185図　№4のTLグローカーブ（左）と生長曲線（右）

ED：等価線量，⊿：低線量補正，PD：蓄積線量

5　まとめ

今回遺跡の土坑で検出された焼土について，ルミネッセンス法によりTL年代測定およびIRSL感度変化法による被熱温度推定を行い，焼土の熱履歴について検討した。その結果，土坑内部では被熱が不均一であるものの，約700℃程度の熱を受けていることが確認できた。また，十分な加熱を受けていると評価できた№3では約1.2千年前という数値年代が得られた。

引用文献

Aitken, M.J.（1985）Thermoluminescence dating. Academic Press, 359 p.

Guérin, G., Mercier, N., Adamiec, G.（2011）Dose-rate conversion factors: update. Ancient TL, 29 -1, 5-8.

長友恒人（1999）「3章　ルミネッセンス法」『考古学のための年代測定学入門（長友恒人編）』古今書院, 59-76.

長友恒人・西村誠治・柴田昌児（2003）「TL/ESR測定による被熱変形した弥生土器の被熱温度推定」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』, 74-75.

西村誠治・長友恒人・鐘ヶ江賢二・長友朋子（2007）「IRSL法による弥生土器の被熱温度推定」『日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集』, 36-37.

大手前大学史学研究所 編（2007）『土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～』 考古学リーダー9, 六一書房, 340p.

小畑直也・下岡順直（2015）「ルミネッセンス法による被熱履歴推定の概要」『地質技術』5, 29-35.

Rhodes, E.J.（2011）Optically stimulated Luminescence Dating of sediments over the Past 200,000 years. Annual review of Earth and Planetary Science, 39, 461-488.

下岡順直・長友恒人（2001）「石英・長石を試料とした光励起ルミネッセンス年代測定法の基礎研究」『Radioisotopes』50, 381-389.

下岡順直・波多野智・田邊和明・森美比古・青木智史・阪江修（2015）「OSL/TL自動測定装置NRL-99-OSTL2-KUの設計製作とX線管球の線量率較正」『地球環境研究』17, 107-110.

下岡順直（2016）「福井洞窟12・13層炉跡のOSLを用いた赤色化土壌の被熱温度推定」『史跡福井洞窟発掘調査報告書』佐世保市文化財調査報告書第14集, 288-290.

下岡順直・清水隆一・北沢俊幸・川野良信（2018）「ゲルマニウム半導体検出器を用いたγ線スペクトロメトリーのシステム構築」『地球環境研究』20, 179-183.

下岡順直（2018）「熱ルミネッセンス，光ルミネッセンス，電子スピン共鳴年代測定法を利用した文化財科学研究」『考古学と自然科学』76, 37-55.

第７節　六反ヶ丸遺跡出土の小玉及び古銭について

県立埋蔵文化財センター南の縄文調査室

１　試料

（１）小玉　№4286（329）

（２）古銭　D-33区表土一括（未掲載）　　計２点

２　観察・分析方法

（１）形状観察

以下の機器を使用して，形状を観察し撮影を行った。

・双眼実体顕微鏡（ニコン製SMZ1000）による8～60倍観察

（２）成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット:ロジウム，Ｘ線照射径100㎛）を使用し，次の条件により分析を行った。

Ｘ線管電圧：15/50kV　　電流：自動設定

測定時間：200秒　　Ｘ線フィルタ：なし

試料セル：なし　　パルス処理時間：P3

定量補正法：スタンダードレス

（３）Ｘ線写真撮影

Ｘ線透過装置（HITACHI PI-CR-1506，広角撮影）を使用し，次の条件によりフィルムを用いて撮影を行った。

Ｘ線管電圧：90/120kV　　電流：3ｍＡ

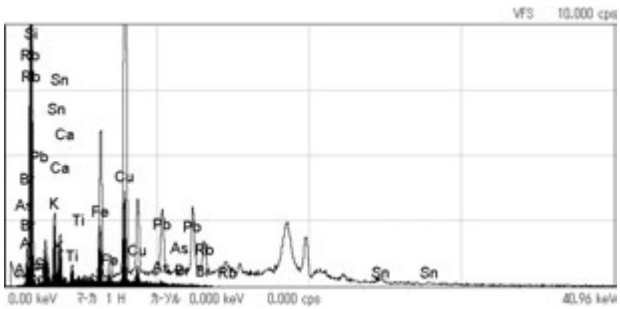
測定時間：60/120秒　　Ｘ線フィルタ：なし

試料セル：なし

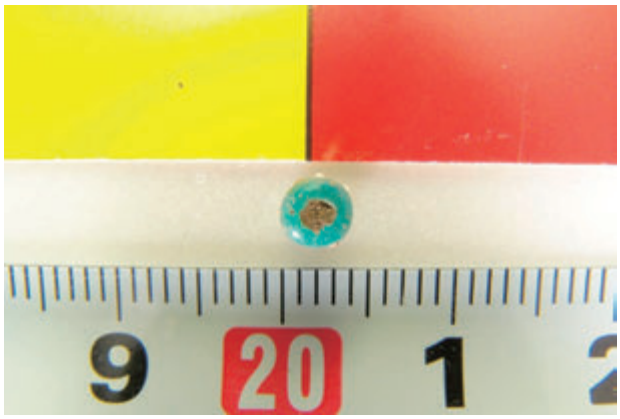
３　結果

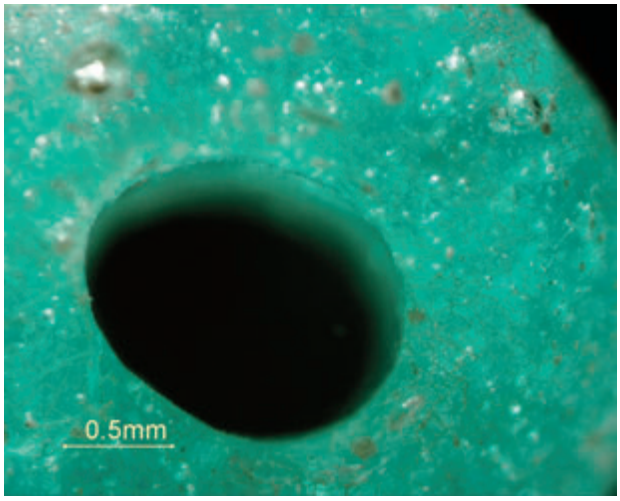
試料の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート（成分分析）とFPM定量結果，双眼実体顕微鏡およびＸ線透過装置による形状観察，撮影結果の一例である。

（１）小玉



第186図　スペクトルチャート





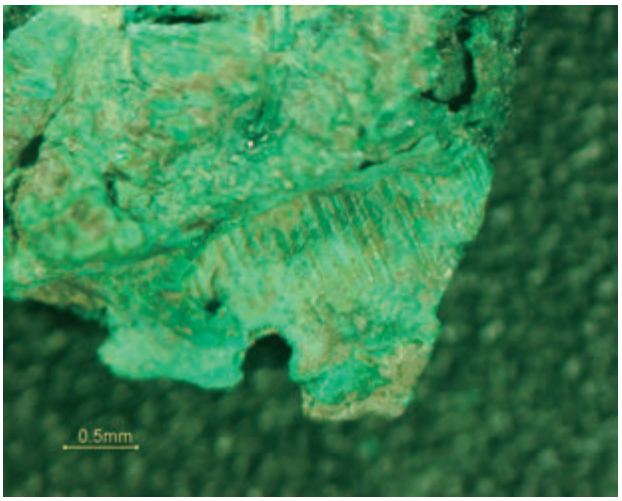
第187図　形状観察結果（双眼実体顕微鏡）

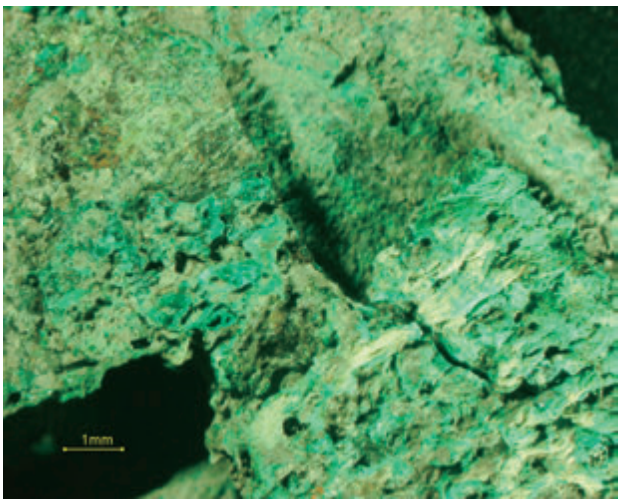
第49表　FPM定量結果

元素	ライン	強度（cps/mA）	質量濃度（%）
アルミニウム	K	14.31	6.81
けい素	K	283.48	75.69
硫黄	K	0.79	0.11
カリウム	K	34.50	5.60
カルシウム	K	18.74	2.60
チタン	K	13.92	0.50
鉄	K	140.74	1.86
銅	K	446.70	4.17
臭素	K	3.88	0.03
ルビジウム	L	32.96	0.25
すず	K	7.81	0.37
鉛	L	76.51	2.01

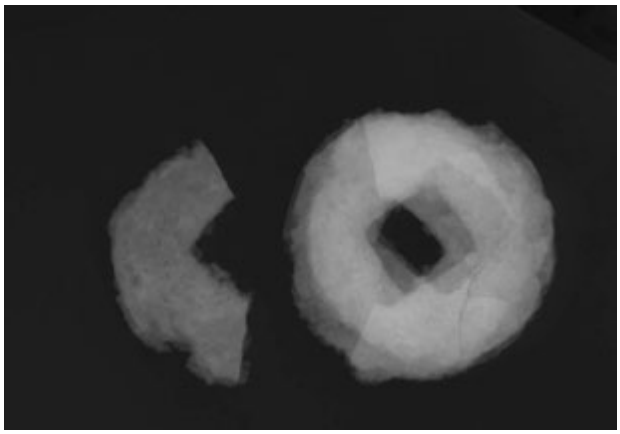
（２）古銭







第188図　形状観察結果（双眼実体顕微鏡）



第189図　Ｘ線撮影結果（Ｘ線透過装置）

４　考察

蛍光Ｘ線分析の結果から，試料（１）の小玉は，鉛ガラス（鉛バリウムガラス）の小玉と考えられる。双眼実体顕微鏡の観察から，ガラス内に含まれる気泡の形状や揃い方，中心部分の小口の長さが前後でほぼ同じことから，鋳型法によって製作されたと推測できる。一方，試料（２）の古銭については，一部の破損は見られるものの，３枚が折り重なっている。Ｘ線透過装置による撮影でも，文字の有無は確認できなかった。表面上の錆が，一部，繊維状になっていることは認められる。

注）これらの古銭３点については図化していない。
直径２㎝程度の薄い小形の銭で，種類は不明である。
表面に布がついていることから，袋に入れられていたものと思われる。

第Ⅵ章　総括

第１節　六反ヶ丸遺跡の立地

六反ヶ丸遺跡を取り巻く自然環境は厳しい状況であったのではないかと推察される。

自然堤防上に位置する微高地の遺跡ではあるが，本遺跡の中心である古墳時代に集落を形成している竪穴建物跡の埋土はシルト質の埋土で占められている。周りの土地より一段高い自然堤防上に位置するものの，遺構の埋土にシルトが多いということは，河川の氾濫が繰り返されていたことが推測される。趙氏の指導でもＡ地点からＢ地点西部に砂礫主体の河道堆積層があり，泥と砂礫からなる洪水堆積層が順次東へ付加していることが指摘されている。

本遺跡は六月田という集落に位置する。六月田は江戸時代からの集落であり，現在もその名を残している。六反ヶ丸という地は，河川近くで生活するのに昔から適した土地であったということと同時に河川の氾濫に対応しなければならないという厳しい環境にもあったとも推測される。

今回，氾濫原に位置する遺跡の発掘調査を行った中で課題も見えてきた。遺構の埋土は河川の氾濫により台地部で検出される遺構の埋土のようにレンズ状堆積をしていない遺構もあり，土層断面の分層や遺構の切り合い関係などの判断で困難を極めた。今回の発掘調査で得た経験を今後の調査方法に生かし，精度を高めていきたい。

第２節　古墳時代初期における小型仿製鏡

六反ヶ丸遺跡の竪穴建物跡８号上面で，小型仿製鏡が出土した。調査当時は，焼土・灰などを含む近世土坑を掘り込んだ埋納遺構の可能性もあると考えていた。しかし，検証した結果，最終的に土坑は竪穴建物の一部であること，鏡は建物埋設時に埋納したものと判断した。このことから，時期は古墳時代以降であり，弥生時代後期の資料が伝世などの形で，古墳時代まで残ったものと考えている。

また，成分分析から，青銅製で弥生時代に北九州を中心とした地域に拡がった小型仿製鏡と類似した材料を利用していることも分かった。

薩摩半島において小型仿製鏡は指宿市横瀬遺跡（小型仿製鏡：変形渦文鏡）・南さつま市芝原遺跡（小型仿製鏡），日置市向椿城跡（破鏡），薩摩川内市外川江遺跡（小型仿製鏡：内行花Ｓ字状文鏡），同麦之浦貝塚（破鏡：流雲文方格規矩鏡），伊佐市下鶴遺跡（破鏡）で出土例がみられる。これらの遺跡について共通しているのはいずれも河川の縁辺に位置していることで，ことに芝原・向椿城跡・外川江などの遺跡は河口に近い下流域にある。このことは米ノ津川下流域に立地する六反ヶ丸遺跡と類似している。

芝原遺跡では，小型仿製鏡など４面の鏡が集中して出土しており，河川脇において，鏡を利用した祭祀行為との関連も指摘されている。向椿城跡も11件の竪穴建物跡があり，眼下に江口川があり，さらにはその向こうに海を望む地にある。麦之浦貝塚・外川江遺跡も海こそ望めないものの河川脇にある。

六反ヶ丸遺跡も米ノ津川右岸に立地し，有明海を望む地にある。その景観は芝原・向椿城跡などと類似している。今後，これらの類例を集成し，検討していきたい。

小型仿製鏡以外にも竪穴建造跡12号からはガラス小玉（第Ⅴ章分析参照）が出土しており，鉛バリウムガラスが弥生時代後期～終末期に相当すると考えると，弥生時代後期の資料が伝世し，古墳時代の竪穴建物跡から出土した可能性がある。

第３節　出土土器の特徴と位置付け

六反ヶ丸遺跡の出土土器の大半は，古墳時代前期に位置づけられる。ここでは，本遺跡出土の古墳時代土器の形態的特徴について，指導所見等を基に考察する。また，当該期の他地域の編年（久住1999，檀2011など）を参考に，甕形土器に焦点を当て変遷を検討する。

出土土器は器種ごとの形態的特徴から，それぞれ第190図のように細分できる。なお，本分類は六反ヶ丸遺跡Ａ～Ｄ地点を総合的に検討したものであり，既刊のＡ・Ｂ地点の報告書で記載した分類に加筆・修正していることに留意されたい。

甕Ａ類は，頸部で屈曲し，頸部下の胴部に最大径をもち，断面形が台形状を呈する脚台を伴うもので，在地の成川式土器の特徴を有する一群である。調整がハケナデのもの（Ａ１）と，タタキ痕が明瞭なもの（Ａ２）に細分される。甕Ｂ類はいわゆる丸底甕で，古式土師器の特徴を有するものである。器壁は比較的薄く，タタキ痕や細かいハケ目が特徴である。甕Ｃ類が長胴のもので，天草や島原半島などの九州西部の土器に類似する。頸部の屈曲が明瞭で，内面側に段を有するものもある。器壁は薄く，ハケ目も細かいなど，丁寧なつくりが多い。

壷Ａ類は，短頸壷のうち球胴状もので，Ａ地点でのみ出土している。壷Ｂ類は長胴の短頸壷で，在地系と考えられる。口縁部は外傾または外反し，タタキ痕を伴うものもある。壷Ｃ類はいわゆる広口壷で，口縁端部はほぼ水平となる。胴部以下が分かる資料は少ない。壷Ｄ類は

二重口縁壷で，袋状口縁状のもの（Ｄ１），屈曲して内傾するもの（Ｄ２），屈曲して外傾するもの（Ｄ３），屈曲し広く外反するもの（Ｄ４）とバリエーションが豊富である。壷Ｅ類は肥後系の二重口縁壷で，口縁部が断面三角形状に肥厚するものである。

高坏Ａ類は，大型で坏部が深く，埦状を呈するものである。高坏Ｂ類は中・大型で，坏部が皿状を呈し，口縁部が広く外傾又は外反するものである。高坏Ｃ類は布留式系と考えられ，小型で坏部は埦形を呈し，長脚となるものである。器壁が薄く，胎土も精製されている。

以上の形態分類を系統ごとでまとめると，３つに大別される。１つめは，南九州系土器（成川式土器の影響が強い土器群）で，甕Ａ類がその代表例である。カキアゲ口縁となる点や，ハの字状に厚くしっかりした脚台を伴う点は在地土器の特徴である一方，タタキ痕が明瞭で器壁が薄い点は，中九州以北の影響が表れている。甕形土器以外では，壷Ｄ１～３類や高坏Ａ類といった北薩地域に特徴的な一群も該当する。２つめは，外来系で近畿Ⅴ様式／庄内式／布留式といった古式土師器の流れをくむもので，在地で変容したものである。甕Ｂ類や壷Ｄ４類，高坏Ｃ類などが該当する。また，甕形土器の胴部上半に水平方向のタタキ調整を施す特徴は，筑後地域を中心に熊本平野でも確認される。しかし，南九州の古墳時代の土器としては器壁が薄いとはいえ，本来の古式土師器と比べれば内面のケズリが弱く，器壁は厚手であり，これらは在地的な変容の要素ととらえることができる。３つめは，外来系でも北部九州の弥生後期土器の流れをくむもので，甕Ｃ類や壷Ｅ類が該当する。特に甕Ｃ類は島原半島・上天草地域の特徴に近く，天草下島・長島付近を経由した，有明海・八代海西回り島嶼伝いの土器の伝播や地域間交流等が想定される。

このように，北薩地域において少なくとも３つの系統があり，少量ながら出土する宮崎地域の土器を含め，多系統の土器が混在する様相がとらえられた点が，発掘調査の大きな成果の一つである。各遺構とも甕Ａ類と甕Ｂ・Ｃ類といった在地系と外来系が出土しており，破片資料であるが各類の出土量の比率には差異がある。今後，多系統の土器が出土する状況を踏まえ，当時の生活の在り方を検討することが課題である。

以上の形態分類を踏まえ，甕形土器に着目し，時期的な推移を検討する。本遺跡の出土資料は，甕形土器Ａ類のカキアゲ口縁の技法を伴う屈曲する頸部と胴部上半が膨らむ形態的特徴から，成川式土器の中でも中津野式土器段階から東原式土器段階に相当する。ただし，土器溜７は口縁部が直口気味に立ち上がる甕形土器や幅広突帯を伴う壷形土器，赤色顔料を塗彩した小型器種が出土するなど，新しい特徴を有する。

Ａ地点・Ｃ地点の竪穴建物跡で最も多く出土しているのは，甕Ａ類では頸部が緩く屈曲し，外反する中津野式土器古相から新相のものである。器面調整はハケナデ調整とタタキ痕が明瞭に残る（残す）ものがあり，口縁部がカキアゲ口縁状のものが多い。口縁部が短く外反・外傾するものから，次第に間延びし立ち上がっていく流れから，第191図のように大まかな推移をとらえられる。竪穴建物跡６号で出土した在地系の壷形土器（壷Ｂ類）も，古手の特徴を有している。また，Ａ地点の土坑４出土例は，頸部がすぼまり，頸部の屈曲にやや強い稜をもってわずかに外反する。そのため，上記に続く中津野式土器から東原式土器段階への移行期に位置づけた。

代表的な資料から大まかな時期変遷は検討したが，六反ヶ丸遺跡出土資料は，河川堆積の影響もあるためか同一遺構の中でも遺物が斉一的ではなく，甕形土器の頸部屈曲部から口唇部までの長短や外反の度合いに変異が大きい。しかしながら，大半の竪穴建物跡が中津野式土器段階に含まれるため，同じ河川堤防上で建替え等を行いながら推移していったと考えられる。

Ｂ地点竪穴建物跡２号出土の甕形土器Ｂ類は，久住猛雄氏の分類のＢ系統（近畿第Ⅴ様式系）の技術保持者による布留式系模倣土器とする所見があり，久住編年ⅢＡ期古相併行（東原式土器古相）に位置づけることができる。さらに，先述の土器溜７はＢ地点竪穴建物跡２号より新しい特徴を有しており，東原式新相（ⅢＡ期新相併行）以降に比定される。

第４節　土師器焼成土坑

本遺跡で検出された土師器焼成土坑は，鹿児島県内では南さつま市小中原遺跡と姶良市外園遺跡と木崎原遺跡で検出されている。

供膳・煮沸形態の土器を焼成したと考えられている南さつま市小中原遺跡の土坑は径180㎝，深さ70㎝，平面形は円形である。床面や埋土からは多量の土師器が出土している。

姶良市外園遺跡の土坑は東西約2.7ｍ×南北約3.0ｍの隅丸方形で，深さ0.26～0.3ｍである。焼成された器種は坏・蓋・皿などの小形の供膳具に限定されている。南さつま市小中原遺跡の類例と時期は同じで，８世紀後半～９世紀初頭である。床面や埋土からは多量の土師器が出土している。

木佐木原遺跡の土坑は180㎝×180㎝の正方形で，深さ20㎝である。焼成された器種として坏・埦の高台片などが出土している。時期は８世紀後半と考えられている。床面や埋土からは多量の土師器が出土している。

本遺跡では古代の土坑は９基検出されている。平面形は円形が多く，一部全体形は不明なものもある。その中でも床面や壁面が被熱により赤変している51号と58号の２基を発掘調査時に土器焼成土坑として認定した。

両遺構とも時期は放射性炭素年代測定により古墳時代終末期から古代初頭であると判断された。両遺構の平面形は隅丸方形である。土坑51号の規模は約2.2m×約1.8m，深さ約0.1mであり，土坑58号の規模は約1.8m×約1.9m，深さ0.3mである。焼成された器種は坏・皿類が大部分を占めている。床面や壁面は，被熱により赤変している。

両遺構で違いがみられるのはピットの総数とピット位置である。土坑51号は，床面に径５～15㎝程度の小ピットが32基検出されている。それに対して土坑58号は，焼土面に直径10㎝程度の小ピットが10基検出され，そのうち５基は下端ラインに沿うような位置で検出されている。

土坑51号の焼土上または床面にみられる小ピットは，姶良市外園遺跡の土器焼成土坑でも検出されており，覆い焼きを行う際の上部構造の支柱痕跡と考えられている。現地の指導においても，小田裕樹氏が小ピットについて，開放的な窯の上部構造（覆い）を支えた支柱など構築材の痕跡の可能性を指摘している。それに対して58号の小ピットの数は51号より少なく，焼成遺構の構造とどのように関わっているのかは今後の検討を要する。

次に，土器焼成土坑51号と58号の出土の土師器を比較する。土坑51号の土師器の種類は皿と坏である。皿は，底部残存で，ヘラ切りで，坏は底部の立ち上がりにケズリ調整を施し，ヘラ切りである。８世紀後半のものと考えられる。土坑58号の土師器の種類は坏と坏蓋である。どちらもヘラ切りである。大きさや形状を比較すると，土坑51号の土師器の方が，丸みをおび，大きい。土坑58号の土師器は小さい。大きさや形状から土坑58号の時期が新しいと考えられる。

古代の遺構や包含層出土の土師器の特徴としては，皿よりも坏の出土が多く，全てがヘラ切りである。時期的には８世紀後半を主体に９・10世紀もある。数例12世紀代までくだるものがある。また，土師器甕片がある。遺物は中世より古代が多いが，古代の遺構は掘立柱建物跡１棟，土坑と礫敷遺構と少なく，生活痕は薄い。

ただし，出土状況からみると，他の３遺構と出土している遺物は類似するものの，土坑内及び周辺から出土数が少ない点が異なる。

第５節　近世陶磁器とモイドン

近世の遺構としては，地域の祭祀場として現在も集落に点在する「モイドン」と想定されるものが検出された。モイドンとは薩摩・大隅半島では「モイドン（森殿）」あるいは「モイヤマ（森山）」とよばれる信仰対象の森のことである。なお，地元では「ウッガンサー（氏神様）」と呼称されていた。モイドンに伴う遺構は，本報告書では祭祀遺構と呼称した。いずれも巨木を取り囲むように円形や方形に石列が組んであり，上下構造をそれぞれ石列遺構１～５とした。

祭祀遺構の遺物としては，皿や線香立てと想定される仏具も出土している。また，古銭類の出土は若干みられるなど，信仰に関わる遺物が出土している。帰属時期は，近世の遺物も出土しているので，近世から近代まで継続していた可能性が考えられる。

地域の方に聞き取ったところ，巨木を中心に塚状の盛り上がりが２か所見られたそうである。全体が竹林や雑木林に覆われ，厚く積もった表土により，周囲を取り囲むような石列は表面からは確認できなかったということである。東側の巨木を囲む方形の石列範囲の塚の高さは調査当時で約50㎝ほどであり，西側の円形の石列範囲の塚の高さは約20㎝ほどであった。

近世の遺物は，肥前系磁器を主体とし碗・皿類や鉢，大型甕といった一通りの器種がみられる。時期は，17世紀から18世紀後半のものと比定される。特徴的なものとして，糸切り底や高台付きの摺鉢があり，天草や島原を含む西北九州の資料の可能性もある。陶器の中には，苗代川に似るがより器壁が薄く釉調が異なるものがある。

先述した摺鉢に加え，薩摩焼でも苗代川系，元立院系，龍門司系，さらに琉球陶器など，少量であるが遠隔地の複数の窯場の資料が出土している。二次流通の可能性もあるが，生産地と北薩地方との流通を考える上では重要な資料といえる。

引用・参考文献

久住猛雄　1999「北部九州における庄内式並行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩIX

久住猛雄　2015「「土師器」の中の「成川式」土器−中津野式から辻堂原式にかけて−」『成川式土器って何だ？−鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器−』

檀　佳克　2011「土師器の編年　①九州」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』

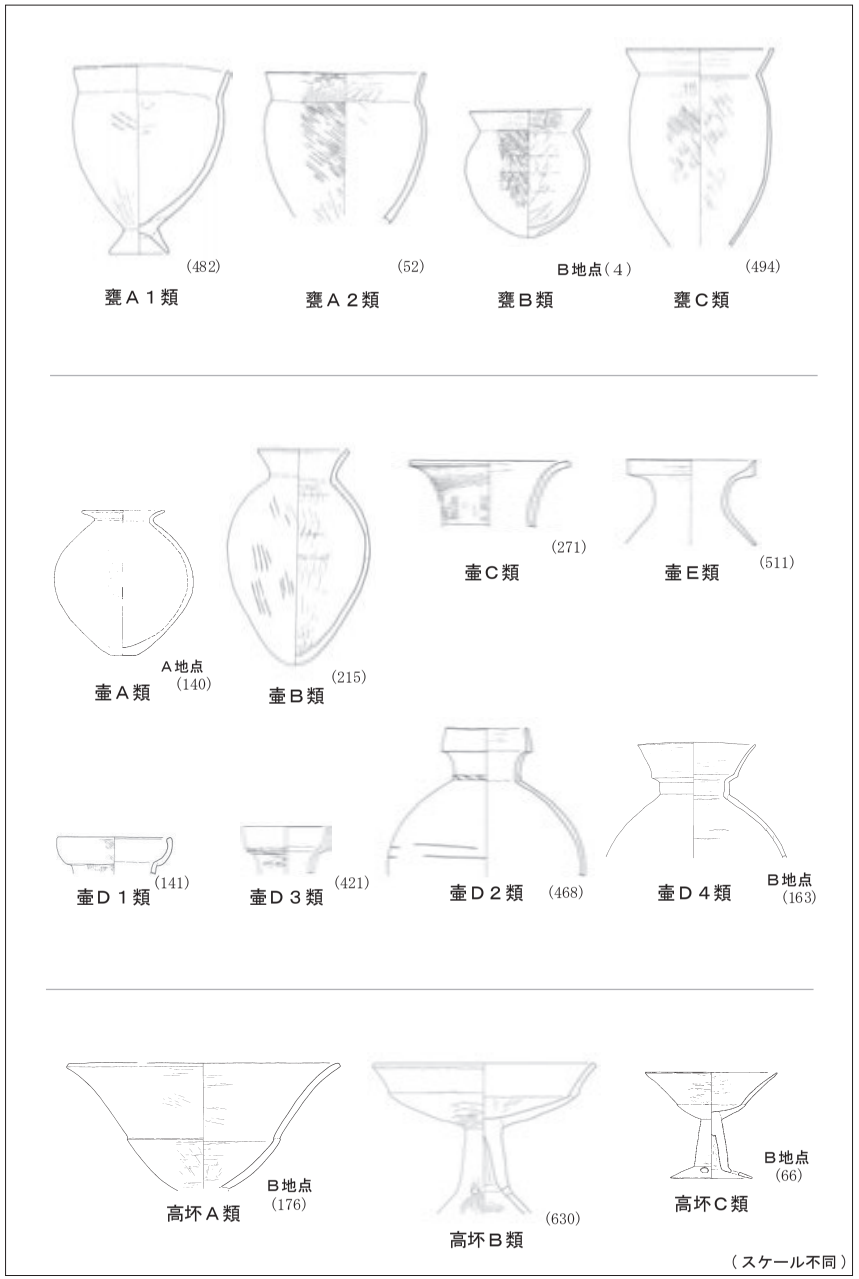
中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』６

中村直子　2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ？』鹿児島大学総合研究博物館

松﨑大嗣　2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料

上田萌子　大平和弘　押田佳子　浦出俊和　上甫木昭和春　2018「鹿児島県指宿市有形民俗文化財に指定されたモイドンの保全に関する現状と課題」ランドスケープ研究81（5）

※　本文中であげた報告書は割愛した。



第190図　六反ヶ丸遺跡　土器分類

久住編年	竪穴建物跡その他の遺構	甕形土器 A 在地系（成川式土器）	甕形土器 B 外来系（丸底甕）	甕形土器 C 外来系（長胴甕）
中津野式古相（北部九州ⅡA期～ⅡB期併行）	6号 C地点	(195) (203) (206)		
	1号 A地点	(75) (77)		(71) (72)
	土器溜５ C地点	(482)		(487) (493)
中津野式新相（北部九州ⅡB期～ⅡC期併行）	3号 C地点	(52)		
	土器溜３ C地点	(53)		
	土器溜４ C地点		(459) (460)	(461)
中津野式／東原式移行様式（ⅡC期～ⅢA期古相）	土坑４号 A地点	(131)		
東原式古相（ⅢA期古相）	2号 B地点		(4)	

（スケール不同）

第191図　六反ヶ丸遺跡　古墳時代土器編年（甕形土器）

第６節　古代の礫敷遺構について

Ｃ～Ｅ－24～26区にかけて検出された古代の礫敷遺構について検討したい。

１　礫敷遺構としての認識

六反ヶ丸遺跡の所在する一帯は，米ノ津川をはじめとする河川の流作用による扇状地形をベースとし，地下には礫層が広く堆積している。また，過去の地震によって生じたと考えられる液状化現象による礫層の上昇である，いわゆる「噴礫」も数か所で観察されている。言い換えると，本調査区は，掘り進めると，礫層に突き当たる確率が高い環境にあるということになる。

このような地域であることから，礫敷遺構が検出され始めた当初，「自然の礫層が顔を出したんだ」という感覚で掘り下げていた。それは掘削具の鋭利な部分で突きほぐしながら掘り進めるという極めて固い土壌との出会いでもあった。その極めて固い土壌を剥ぎ取ると礫がまとまった状態で検出され，「自然礫層が顔を出した」と考えていたわけである。

ところが極めて固い土壌の剥ぎ取りを進め，まとまりのある礫群の上面まで検出していくと，面としての広がりとともに礫の密度が高いことや部分的に土器片や須恵器・土師器片も含まれていること等が明らかとなり，単純に「自然のもの（自然礫層）ではないのではないか」という疑問が生じてきた。

そこで，複数の研究者に礫の堆積状況を観察・調査していただく機会を設けることとなり，「ほぼ水平に，かつ均一に堆積している」「構成礫の方向性に規則性がみられない」「礫を中心とした面と，その下位にある整地客土された搬入土層からなる」等の理由から，「自然の礫層ではない」とのコメントをいただいた。また，礫群の詳細な状態を把握する手段として，礫の数や大きさ（粒径測定）・平面分布・礫や土壌の組成等を調査することも有効ではないかとの指導を得た。

以上のような経過を踏まえ，人工構築物，つまり「遺構」としての認識のもと，より客観的な情報を整理するため，当該域の礫敷の状態を数値として把握する作業を実施することとした。具体的には，礫敷遺構（一部，周辺部を含む）を構成する礫をカウントすることとした。

２　礫敷遺構の実態

礫敷遺構はＣ～Ｅ－24～26区にかけて存在するのは前述のとおりである。六反ヶ丸遺跡は扇状地特有の河川網内に形成された微高地帯内にあり，礫敷遺構はその中に形成された高低差１～２ｍ程度の微小谷地形に構築されている。この微小谷は20m弱の幅があり，ほぼその全面で礫が検出されたが，礫敷の中心は断面形がほぼ逆台形状を呈する谷の東側底面にあり，その幅は約10～11mであった。

礫のカウントは，対象となる微小谷に１ｍ四方の小グリッドを設定し，その区画を最小単位として実施した。具体的には礫敷部分に，東西を「１」～「18」列と「28」～「30」列，南北を「あ」～「さ」列と「ろ」～「ん」列とする碁盤の目状のグリッド網を設定しカウントすることとした。その結果を記録したのが第50～65表である[註1)]。

表の凡例・見方については，第50～55表をP244に，第56～65表をP245に示した通りである。詳細については，それを参考にしていただきたいが，ここではそれらの表を用いて，礫をカウントした結果についての概要を紹介したい。

第50～55表は，礫敷遺構を構成していた礫と遺物の点数をサイズごとにカウントした一覧表である。カウントの合計は205,855点（2,880.9kg）であった。また，礫敷遺構と自然礫層の状態を比較するために設けた３つのグリッドの合計は40,485点であった。礫敷遺構が221グリッドの合計であったことを考慮すると，自然礫層がいかに多くの礫を含んでいるかがわかる。

カウント結果をテーマごとに可視化したものが第56～65表である。単純に各種点数をカウントした表が基本であるが，第57表は礫と遺物の重量，第58表はその体積を数値化した結果を示したものとなっている。

礫敷遺構全体の状況について示したのが第56表である。数値の多い部分を網掛けの濃淡で示したが，「あ」～「さ」列の「１」～「11」列に数値の高いグリッドが集中していることが分かる。数値のバラツキを見る変動係数（標準偏差÷平均値）をみても，「かな列」の場合，0.7～0.8台が多いのに対し，「数字列」は0.3～0.4台が多いことから，南北方向の列の方がバラツキが少なく安定した数値を示していることが分かる。つまり，礫敷は東西約10mの幅で帯状に安定した状態で広がっている状況が確認できるということになる。

このような傾向は，礫のみのカウント結果である第59表や第60表でも顕著であるし，各種遺物のカウント結果であるその他の表でも同様であった。

第56～64表では，東西軸と南北軸の数値の状況を折れ線で表現したグラフも提示した。それによると東西軸の「１」～「11」の列が台状に高くなっていることが分かる。つまり，東西幅約10mほどの高まりが南北方向に連なっているということが分かるのである。

ちなみに，南北方向の数値を示す折れ線グラフを見ると，各表ともおおむね北側に行くにつれ，数値が高くなっていることが分かる。数値が高いということは，より多くの礫が存在する（敷かれている）ということである。そもそも，礫敷遺構部分の微小谷は北側（八代海側）に向かって緩やかに傾斜していることを考慮すると，礫量の多さは，その傾斜を緩和するため，北側ではより多くの礫を敷いた結果を表しているものと考えられる。

第50表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（１）

区		礫																														土器											
		～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	～18	～19	～20	～21	～22	～23	～24	～25	～26	～27	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13
あ	1	527	327	218	124	68	20	4	5	3																		769	1,296	111	53	18	5	1	1	1							
あ	2	241	334	248	178	56	27	18	8	3	1	1																874	1,115	56	55	10	5	2	1								
あ	3	262	437	309	185	74	31	13	4	4	3	1		1														1,062	1,324	97	111	44	6	2	1	3							
あ	4	386	420	268	167	33	24	17	7	2	1																	939	1,325	115	97	34	5		2								
あ	5	1,514	741	459	230	104	53	22	11	6	1																	1,627	3,141	199	117	41	15	7	2								
あ	6	83	208	184	99	38	20	14	4	4			1															572	655	35	51	25	8	4									
あ	7	200	253	156	80	37	14	4	3	1	2																	550	750	64	51	14	10	1		1	1						
あ	8	876	367	206	113	35	12	3	2																			738	1,614	109	75	22	5	1			1						
あ	9	1,019	462	251	122	42	30	7	8	3	3	1	1															930	1,949	141	68	37	15	3		2							
あ	10	1,356	547	265	117	53	22	7	4	5	1																	1,021	2,377	180	85	27	7	6									
あ	11	603	302	118	45	27	19	1	3	1	2	2		1	2			1										524	1,127	121	66	16	3	1	2								
あ	12	267	102	42	19	11	5	2																				181	448	19	12	7	3										
あ	13	323	131	71	26	9	10	3	2	1																		253	576	57	32	12	3	2									
あ	14	170	121	56	30	16	9	1	1	1	1																	236	406	50	31	14	7	2	1								
あ	15	175	82	43	27	17	5	2	1			1																178	353	33	9	9	7	1	3								
あ	16	56	13	17	7	1	4	1	1																			44	100	10	10	4	5	5	1								
あ	17	85	26	19	13	9	3	2		1	1						1											75	160	15	10	8	5	1	1								
あ	18	44	17	6	7	4	1					2																37	81	7	1	7	2	2									
あ	29		2	1	4		1																					8	8													
あ	30	6	19	23	26	10	7	4	1	1																		91	97	2	2	1	1										
い	1	119	110	116	82	36	15	7	1	1				1														369	488	17	20	5	1										
い	2	680	364	251	136	60	24	14	5	4																		858	1,538	212	72	33	14	3	1			1					
い	3	920	457	293	173	77	33	11	7	3	4	2																1,060	1,980	201	128	31	9	2	1								
い	4	770	380	234	133	60	27	14	5	4	3																	860	1,630	214	96	27	7										
い	5	659	324	227	117	65	25	12	5	1	2	2																780	1,439	76	70	24	10	6	2		1						
い	6	824	456	306	140	78	35	12	7	8	4			1	1													1,048	1,872	125	88	29	10	2	2								
い	7	784	387	222	102	61	17	10	11	3	2	2																817	1,601	123	53	23	9	2									
い	8	1,327	607	350	169	57	26	8	6		2																	1,225	2,552	251	98	39	10		1								
い	9	807	611	220	104	48	21	9	4	1	4		1															1,023	1,830	126	48	24	6	2	1								
い	10	1,162	544	281	112	43	22	9	6	3					1													1,021	2,183	220	88	35	5	6									
い	11	754	376	175	94	33	12	6	1	2	1		1															701	1,455	172	79	30	7	2		1							
い	12	227	121	68	42	16	5	2		1																		255	482	48	17	7	2										
い	13	409	156	73	28	11	6	1	1	1		1																278	687	65	26	9	1	2									
い	14	244	140	76	38	14	4	2		2																		276	520	60	33	8	4										
い	15	270	130	74	25	16	6	7																				258	528	68	33	5	5	3									
い	16	139	99	63	40	14	6	2	3	2		1																230	369	71	35	13	8	2	1								
い	17	58	12	11	9	4		1				1																38	96	16	5	5		1									
い	18	27	7	3	3		1	1																				15	42	5	3	2											
い	29	2	9	8	5	4	1																					27	29		1											
い	30	2	8	10	1	4	4	1																				28	30													
う	1	170	168	137	76	45	7	5	4			2																444	614	33	22	12	4	4									
う	2	566	295	210	121	56	30	16	2	4	2																	736	1,302	105	71	15	5	3	1								
う	3	372	250	247	104	47	18	11	9		1	1																688	1,060	80	57	22	5	4	1								
う	4	313	255	218	119	53	24	16	6	7	3		1	1														703	1,016	84	67	17	5	1									
う	5	467	294	239	123	48	23	10	7	2	1																	747	1,214	130	68	25	7	2	3								
う	6	774	367	237	133	53	34	11	10	7	4	1			1		1											859	1,633	155	93	32	9	2									
う	7	709	326	190	92	36	13	8	4	6	1		2															678	1,387	107	48	16	2	2	1								
う	8	1,318	609	302	141	80	24	7	4	2																		1,169	2,487	272	125	36	7										
う	9	1,132	558	264	137	52	28	4	5	2	1																	1,051	2,183	201	92	22	10	6				1					
う	10	1,014	423	209	94	27	15	6	4		1																	779	1,793	223	60	24	9	5									
う	11	287	100	41	28	12	1	2	1		1																	186	473	32	18	4	2										
う	12	256	79	54	30	17	8	1	4	2																		195	451	49	17	2	1	2									
う	13	448	151	65	24	21	13	1	1	2	1																	279	727	94	32	12	2			1							
う	14	253	96	52	27	13	7	3	2		1		1															202	455	55	28	14	2		1								
う	15	175	82	55	30	12	7	4	2		1																	193	368	51	19	11	1	3									
う	16	195	79	61	20	13	3	1																				177	372	40	23	20	6	2									
う	17	50	24	15	12	8	3	2	1		1																	66	116	32	12	8	2										
う	18	17	8	4	2	1	2																					17	34	8	4	3											
う	29		1	1	6	3																						11	11													
う	30	2	5	9	9	6	5		1																			35	37	1												
え	1	257	220	201	134	69	29	20	4	1	1																	679	936	65	52	22	3	4	1	3							
え	2	439	294	207	130	62	18	10	1	2	1																	725	1,164	107	51	24	6	2	1								
え	3	294	252	234	120	68	26	7	8	2																		717	1,011	67	66	36	8	2	1	1							
え	4	262	261	235	138	70	21	10	10	7	2				1													755	1,017	116	87	35	13	1	1			1					
え	5	593	306	186	116	47	18	8	5	3	1	1																691	1,284	121	62	24	14	5	2								
え	6	717	391	236	126	44	23	7	10	3	2	2	1															845	1,562	156	96	37	10	3	1								
え	7	606	323	170	105	37	11	10	5	1	1																	663	1,269	124	70	25	11	1									
え	8	724	318	152	67	31	21	10		1	1		1															602	1,326	138	66	30	7	2		1							
え	9	803	336	182	75	41	23	14	8	5	1	1																686	1,489	135	73	31	6	1		1	1						
え	10	439	180	102	41	21	13	6	2	1		1																367	806	93	37	14	6	1									
え	11	336	108	43	20	10		2																				183	519	33	19	8	6		1	1							
え	12	131	71	46	29	7	3	1	1				1															159	290	23	23	7	1	1									
え	13	243	114	59	19	12	7	1	3	1	1																	217	460	57	26	13	3										
え	14	185	91	42	21	12	4	3	1	1	2																	177	362	38	25	7	1		1								
え	15	164	60	29	19	6	2	1				1	1															119	283	17	11	4	4	2	1								
え	16	156	67	43	24	13	4	1																				152	308	33	17	3	1	1									
え	17	46	17	9	11	6		2	2																			47	93	11	11	6	5		1								
え	18	18	1	2	3	1	3			1																		11	29	8	7	4	3	1									
え	29		1	1	1																							3	3													
え	30	1	1	2	3	5	3		1	2																		17	18			1										
お	1	132	180	260	206	92	52	18	10	2	1	1		1														823	955	63	58	31	6	2	1								
お	2	397	188	162	107	67	26	13	8	1		1																573	970	107	77	20	9	2	2								
お	3	267	260	193	125	50	21	5	3	2	1	1																661	928	85	71	30	10	2		2							
お	4	318	283	240	132	75	40	10	10	1	3			1														795	1,113	142	116	50	20	4	2								
お	5	803	423	231	135	59	26	9	4	2	1																	890	1,693	125	80	25	9	2		1							
お	6	819	487	253	132	66	38	17	8	4	1	1	1															1,008	1,827	203	96	36	14	1	2								
お	7	524	243	132	65	31	15	6	4	4																		500	1,024	106	60	16	11	1									
お	8	719	204	140	89	34	15	8	4				1				1											496	1,215	143	72	12	3		1								
お	9	668	244	131	69	36	15	9	5	3	1		1															514	1,182	96	54	18	4	3	2								
お	10	377	153	87	57	25	18	5	2	2	1																	350	727	68	38	19	8			1							
お	11	143	75	34	15	7	3																					134	277	18	16	5	1										
お	12	105	74	69	51	19	7	1		1																		222	327	25	33	21	5	4				1					
お	13	127	51	27	20	11	3	1	1		1																	115	242	35	21	6	2	2									
お	14	78	29	12	9	3	1	1		1	1	1																58	136	9	11	5	3										
お	15	114	24	24	6	6	4	2	1	1																		68	182	21	7	1	2	1									
お	16	82	39	19	7	7	3	2																				77	159	12	9	4											
お	17	53	20	19	9	6	2	1	1																			58	111	19	9	9			1								
お	18	56	29	9	8	3	4			1						1												55	111	15	10	5	3		1								
お	29	1	1	1	2																							4	5													
お	30	11	10	9	12	3																						34	45	2				6								

第51表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（２）

土師器													須恵器													焼物		その他	☆総計	総計	☆全計	全計	備考	区	
☆	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	☆	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	☆	計	☆	計								
79	190	33	20	5							25	58												0	0	104	248	1	873	1,544	874	1,545	土錘片～2	あ	1
73	129	20	11	5	1						17	37		2	2	1								5	5	95	171		969	1,286	969	1,286		あ	2
167	264	57	26	2							28	85			2	1		1						4	4	199	353		1,261	1,677	1,261	1,677		あ	3
138	253	20	14	2							16	36		1				1	1					3	3	157	292	1	1,096	1,617	1,097	1,618	縄文?～3	あ	4
182	381	36	13	2	1						16	52		1										1	1	199	434		1,826	3,575	1,826	3,575		あ	5
88	123	10	12	2	1						15	25		1	1									2	2	105	150	1	677	805	678	806	土錘～4	あ	6
78	142	11	12	1	1						14	25		1										1	1	93	168		643	918	643	918		あ	7
104	213	20	4	1		1					6	26		1										1	1	111	240		849	1,854	849	1,854		あ	8
125	266	5	4	3	2						9	14			1									1	1	135	281		1,065	2,230	1,065	2,230		あ	9
125	305	29	8	2	1						11	40												0	0	136	345		1,157	2,722	1,157	2,722		あ	10
88	209	9	2	1							3	12												0	0	91	221	1	615	1,348	616	1,349	～6に敲石?	あ	11
22	41	2	1								1	3												0	0	23	44		204	492	204	492		あ	12
49	106	3	1								1	4												0	0	50	110		303	686	303	686		あ	13
55	105	6	6								6	12												0	0	61	117		297	523	297	523		あ	14
29	62	6	2								2	8												0	0	31	70		209	423	209	423		あ	15
25	35	1	1								1	2												0	0	26	37		70	137	70	137		あ	16
25	40	8	1	1	1						3	11												0	0	28	51		103	211	103	211		あ	17
12	19	6	6	1							7	13												0	0	19	32		56	113	56	113		あ	18
0	0										0	0												0	0	0	0		8	8	8	8		あ	29
4	6	1	2	1							3	4												0	0	7	10		98	107	98	107		あ	30
26	43	9	12	2	1						15	24			1									1	1	42	68		411	556	411	556		い	1
124	336	84	24	5	1						30	114	1	1										1	2	155	452		1,013	1,990	1,013	1,990		い	2
171	372	32	14	4							18	50		1	1	1								3	3	192	425	1	1,252	2,405	1,253	2,406	線刻礫?1	い	3
130	344	49	23	5							28	77	5	3		1	1		1					6	11	164	432		1,024	2,062	1,024	2,062	石～6に穿孔?礫1,石～2にcob1	い	4
113	189	29	10	2							12	41												0	0	125	230		905	1,669	905	1,669		い	5
131	256	60	19	5							24	84												0	0	155	340		1,203	2,212	1,203	2,212		い	6
87	210	18	11	1							12	30												0	0	99	240	6	916	1,841	922	1,847	土錘1～4(分断), ﾌｲｺﾞ?5	い	7
148	399	31	5	3	1						9	40	1											0	1	157	440	1	1,382	2,992	1,383	2,993	～4鉄滓?	い	8
81	207	11	7	1							8	19								1				1	1	90	227		1,113	2,057	1,113	2,057		い	9
134	354	45	6	1							7	52	1											0	1	141	407		1,162	2,590	1,162	2,590		い	10
119	291	12	3								3	15												0	0	122	306	2	823	1,761	825	1,763	～2,5土錘	い	11
26	74	4	1								1	5												0	0	27	79		282	561	282	561		い	12
38	103	7	2	1							3	10						1						1	1	42	114		320	801	320	801		い	13
45	105	2	1	2							3	5												0	0	48	110		324	630	324	630		い	14
46	114	6									0	6												0	0	46	120		304	648	304	648		い	15
59	130	6	2								2	8												0	0	61	138		291	507	291	507		い	16
11	27	2	2								2	4												0	0	13	31		51	127	51	127		い	17
5	10	1									0	1												0	0	5	11		20	53	20	53		い	18
1	1										0	0												0	0	1	1		28	30	28	30		い	29
0	0										0	0												0	0	0	0		28	30	28	30		い	30
42	75	10	6	2							8	18												0	0	50	93	1	494	707	495	708	ﾌｲｺﾞﾛ?1	う	1
95	200	51	15	4							19	70			1		1							2	2	116	272		852	1,574	852	1,574		う	2
89	169	19	11	2							13	32												0	0	102	201		790	1,261	790	1,261		う	3
90	174	25	8	4	1						13	38				1								1	1	104	213	1	807	1,229	808	1,230	弥生小壺頸部?	う	4
105	235	18	11	1	1						13	31							1					1	1	119	267		866	1,481	866	1,481		う	5
136	291	30	14	2							16	46	1					1						1	2	153	339	1	1,012	1,972	1,013	1,973	石～17は敲石?,石～7に磨敲石1	う	6
69	176	22	6	4	1						11	33												0	0	80	209		758	1,596	758	1,596		う	7
168	440	39	11	3	1						15	54												0	0	183	494		1,352	2,981	1,352	2,981		う	8
131	332	37	12	2	1						15	52					1							1	1	147	385		1,198	2,568	1,198	2,568	～6須恵器：あて具痕	う	9
98	321	35	6								6	41		2	1									3	3	107	365	1	886	2,158	887	2,159	～5土錘1	う	10
24	56	13	2	1							3	16												0	0	27	72		213	545	213	545		う	11
22	71	3	1								1	4												0	0	23	75		218	526	218	526		う	12
47	141	1									0	1												0	0	47	142		326	869	326	869		う	13
45	100	7	4	1							5	12												0	0	50	112		252	567	252	567		う	14
34	85	3									0	3												0	0	34	88		227	456	227	456		う	15
51	91	3	1			1					2	5												0	0	53	96		230	468	230	468		う	16
22	54										0	0												0	0	22	54		88	170	88	170		う	17
7	15	2									0	2												0	0	7	17		24	51	24	51		う	18
0	0										0	0												0	0	0	0		11	11	11	11		う	29
0	1										0	0												0	0	0	1		35	38	35	38		う	30
85	150	33	17	5		1					23	56	1	1	2	2								5	6	113	212		792	1,148	792	1,148		え	1
84	191	40	15								15	55												0	0	99	246	2	824	1,410	826	1,412	晩浅1,弥壺口1:2点共～7	え	2
114	181	15	18	2							20	35			1									1	1	135	217		852	1,228	852	1,228	須恵器2分割	え	3
138	254	20	14	1							15	35												0	0	153	289		908	1,306	908	1,306	石～15は石皿?	え	4
107	228	18	9	2							11	29												0	0	118	257	3	809	1,541	812	1,544	北久1,縄2.石～8に石錘1	え	5
147	303	28	7	4							11	39	1											0	1	158	343		1,003	1,905	1,003	1,905		え	6
107	231	13	3								3	16		2									1	3	3	113	250		776	1,519	776	1,519	石～6に黒曜石1	え	7
106	244	16	3	1							4	20												0	0	110	264		712	1,590	712	1,590		え	8
113	248	15	5	1							6	21												0	0	119	269		805	1,758	805	1,758		え	9
58	151	7	1			1					2	9												0	0	60	160		427	966	427	966		え	10
35	68	2									0	2												0	0	35	70		218	589	218	589		え	11
32	55	2									0	2												0	0	32	57		191	347	191	347		え	12
42	99	5									0	5												0	0	42	104		259	564	259	564		え	13
34	72	2									0	2												0	0	34	74		211	436	211	436		え	14
22	39	5									0	5												0	0	22	44		141	327	141	327		え	15
22	55	3									0	3												0	0	22	58		174	366	174	366		え	16
23	34	2									0	2												0	0	23	36		70	129	70	129		え	17
15	23										0	0												0	0	15	23		26	52	26	52		え	18
0	0										0	0												0	0	0	0		3	3	3	3		え	29
1	1										0	0												0	0	1	1		18	19	18	19		え	30
98	161	30	16	6	2	1	1			1	27	57				1								1	1	126	219		949	1,174	949	1,174	石～8に磨敲石1	お	1
110	217	23	16		1						17	40		1		1								2	2	129	259		702	1,229	702	1,229		お	2
115	200	23	10	2							12	35												0	0	127	235		788	1,163	788	1,163		お	3
192	334	30	16	4	3						23	53		2	1									3	3	218	390		1,013	1,503	1,013	1,503		お	4
117	242	15	13	2	1						16	31	1											0	1	133	274	2	1,023	1,967	1,025	1,969	～1に黒曜石, ～8に石錘	お	5
149	352	29	17	8	1						26	55		1										1	1	176	408	1	1,184	2,235	1,185	2,236	棒状土錘1	お	6
88	194	17	5								5	22				1		1						2	2	95	218		595	1,242	595	1,242		お	7
88	231	26	7	3							10	36												0	0	98	267		594	1,482	594	1,482		お	8
81	177	8	3	3							6	14												0	0	87	191		601	1,373	601	1,373		お	9
66	134	17	4								4	21												0	0	70	155		420	882	420	882		お	10
22	40										0	0												0	0	22	40		156	317	156	317		お	11
64	89	2	2	1							3	5												0	0	67	94		289	421	289	421		お	12
31	66	5									0	5												0	0	31	71		146	313	146	313		お	13
19	28	2	1								1	3												0	0	20	31		78	167	78	167		お	14
11	32	1	2	1							3	4												0	0	14	36		82	218	82	218		お	15
13	25	2	2								2	4												0	0	15	29		92	188	92	188		お	16
19	38	6	1								1	7												0	0	20	45		78	156	78	156		お	17
19	34	6	1								1	7												0	0	20	41		75	152	75	152		お	18
0	0										0	0												0	0	0	0		4	5	4	5		お	29
6	8	1				1					1	2												0	0	7	10		41	55	41	55		お	30

第52表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（３）

区		礫																													土器											
		～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	～18	～19	～20	～21	～22	～23	～24	～25	～26	～27	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13
か	1	78	114	167	138	77	27	21	6	2		1	1				1											555	633	25	43	25	14	1	5								
か	2	458	224	167	105	53	26	20	8	1		1		1														606	1,064	169	77	21	9	5	2								1
か	3	247	188	146	90	94	31	11	7	7	2	2																578	825	88	64	37	17	3	1			1					
か	4	901	395	260	125	53	14	14	4		2																	867	1,768	170	78	32	4	3	1								
か	5	797	334	180	97	46	25	16	11	5		2	1															717	1,514	148	90	20	6	2	1								
か	6	963	389	236	99	69	21	10	7	1	3																	835	1,798	163	78	37	7	6									
か	7	805	362	182	93	40	23	16	6	2	1	1																726	1,531	158	76	32	12	6	1	1							
か	8	679	309	148	87	30	17	6	4		2	1																604	1,283	106	50	17	5	6		2							
か	9	435	188	121	74	30	16	11	3	1	1																	445	880	63	35	13	4	1	1								
か	10	564	241	139	86	31	22	9	3	2	1		1															535	1,099	107	47	18	10	2									
か	11	128	75	52	22	11	1	1	3	1																		166	294	57	35	17	12	4	1								
か	12	107	61	59	29	9	6	4	2																			170	277	15	26	17	3	1	2								
か	13	113	32	18	12	4	8	2	2				1	1														80	193	16	11	7	6										
か	14	164	38	24	17	7	8	3	2	1	1		1															102	266	27	8	5	5	2	2								
か	15	169	50	29	11	10	8	1	2	1	1																	113	282	43	21	8	2	3	1								
か	16	48	13	10	5	1	4	3	2																			38	86	6	3	1											
か	17	171	22	8	3	4	2																					39	210														
か	18	105	34	8	2	1																						45	150	14	4	4	1		1	1							
か	29					2		1																				3	3														
か	30	2	2	3		5	1																					11	13		1	1											
き	1	144	161	135	132	55	33	14	5		5		1															541	685	99	90	35	17	9	3	2	2						
き	2	198	162	180	97	59	27	9	6	1	1		1															543	741	81	84	27	11	6	1	1							
き	3	549	282	165	114	50	24	15	3	2		2																657	1,206	173	64	20	7	4		1	1						
き	4	1,519	529	237	152	62	33	10	10	5	1	4	1															1,044	2,563	226	99	33	12	6	1								
き	5	543	223	144	82	51	36	13	9	2	1	1																562	1,105	88	56	18	5	1									
き	6	1,185	497	223	147	61	28	11	4	1	2	1		1														976	2,161	239	85	38	12	4	2	1							
き	7	881	336	172	88	39	24	8	6	1	4		1															679	1,560	142	63	23	4	1									
き	8	664	269	126	68	21	13	9	3	3		1																513	1,177	157	62	12	9	2	1								
き	9	438	164	84	52	22	10	6	4	2																		344	782	68	35	16		1									
き	10	597	245	106	61	27	11	10	6	4	1	1																472	1,069	126	41	16	1	4		2							
き	11	117	42	38	26	7	2	2	1																			118	235	47	34	13	6	2	2								
き	12	186	64	47	31	9	7	3		1	1																	163	349	43	35	25	5	2									
き	13	289	97	43	22	18	6	5	2	1																		194	483	51	34	9	6	1	1								
き	14	233	99	34	14	11	5	2	4	1																		170	403	30	12	8	1	1		1							
き	15	208	59	27	8	9	2																					105	313	35	14	7	3	1									
き	16	68	20	13	10	4	1																					48	116	12	4	2											
き	17	65	12	4	6	5	2																					29	94	4	2												
き	18	47	12	4	7	2	1			1																		27	74	21	9	6			1								
き	30	2	4	1	2	1	1		1																			10	12		1												
く	1	159	157	103	69	66	21	6	6	1											1							430	589	73	60	24	4	2									
く	2	233	140	135	84	40	21	9	2																			431	664	80	59	19	8	3	2	1							
く	3	314	199	169	119	44	23	13	1	2		2																572	886	77	44	21	8										
く	4	824	453	251	159	84	33	10	7	5	3	2	1		1													1,009	1,833	151	61	23	4	1	1								
く	5	891	371	198	106	58	28	12	3	6					1													783	1,674	159	84	38	10										
く	6	866	338	218	123	44	20	11	7	1		1																763	1,629	119	59	28	7	2	1	1	1						
く	7	838	328	149	79	47	21	9	4	2		1	2	1														643	1,481	127	66	23	6	2									
く	8	1,198	391	178	113	52	16	3	3	5	2																	763	1,961	150	82	34	6	2	1	1							
く	9	637	238	127	66	24	16	5	1	3																		480	1,117	89	40	16	12	1	3								
く	10	712	285	120	84	29	20	8	3	1	2						1											553	1,265	141	75	24	9										
く	11	425	179	116	62	19	9	3	1			1																390	815	158	102	31	10	3	2								
く	12	154	59	46	32	13	10	2		1		1																164	318	45	21	18	9	1	2								
く	13	382	126	63	25	12	6	4	1		2																	239	621	61	29	15	4	1		2							
く	14	180	49	28	16	8	3	1	1	2																		108	288	24	7	4											
く	15	139	38	23	10	3	3	5	3																			85	224	27	11	6	2	2									
く	16	65	58	25	12	2	1	5	1	1																		105	170	16	11	2											
く	17	607	124	34	19	7	9	3	3	2		1		1		1												204	811	4	1	1											
く	18	137	35	13	8	4	3	2	1					2														68	205	20	7			1									
く	29			1	1		1																					3	3														
く	30		3	2	1	1																						7	7	1	1	2											
け	1	45	73	110	81	46	30	9	5	3																		357	402	31	56	23	15	2	1								
け	2	275	202	151	91	49	23	10	2			1	1															530	805	118	39	15	6	2		1							
け	3	752	347	165	107	58	32	5	4	3	2																	723	1,475	138	51	25	3	5									
け	4	736	459	269	138	62	32	13	7	6	3	1	1	1	2													994	1,730	147	78	30	16	3	1								
け	5	768	291	147	82	39	26	11	9	3	2	1			1													612	1,380	121	61	24	7										
け	6	928	367	199	126	57	13	17	7	3	2		1															792	1,720	151	96	30	13	2									
け	7	1,024	358	187	106	56	23	16	3	5	2	1			1	1												759	1,783	204	93	43	5	4	2	2							
け	8	883	380	224	77	43	18	10	2	1		1	1	1														758	1,641	145	64	22	5	3	2							1	
け	9	462	159	90	53	23	18	2	4	3																		352	814	83	56	22	8	4	2								
け	10	327	129	78	51	16	7	7						1														289	616	76	57	24	10	6	1	2							
け	11	210	95	57	25	11	3	4	2																			197	407	106	49	25	10	3									
け	12	123	51	51	39	25	9	5	1																			181	304	23	28	24	13	1	2		1						
け	13	151	46	28	12	3	9	6	1																			105	256	25	12	3											
け	14	179	52	12	13		4	1	2			1		1														86	265	35	7	6											
け	15	148	84	60	21	9	6	2	3	1																		186	334	39	14	8	2		1								
け	16	258	65	42	33	21	16	8	11	3	1		1		1					1								203	461	3	1									1			
け	17	479	81	31	3	9	4	3	1			1			1													134	613	9	1												
け	18	50	18	7	2	2																						29	79	12	4	1											
け	30	1	3	2	6	6	4	4	1				1	1														28	29	1													
こ	1	46	106	83	57	32	17	8	3	2	1		1				1											311	357	28	37	12	7	3	1								
こ	2	476	224	118	91	38	24	11	2	1	2																	511	987	102	29	14	2	1									
こ	3	562	239	131	90	36	22	5	5	1			1					1										531	1,093	104	60	14	2	2									
こ	4	1,148	352	171	108	30	21	13	4	1		1																701	1,849	117	61	15	6	1									
こ	5	763	268	164	93	25	14	9	2	1	1		1	1														579	1,342	127	65	23	2										
こ	6	499	208	137	71	38	18	10	2	3				1														488	987	84	31	17	6	1									
こ	7	406	112	65	40	17	4	8	5	1							1											253	659	35	19	10	2		1								
こ	8	638	192	105	51	28	12	7	1	2																		398	1,036	107	29	4	1										
こ	9	474	183	75	48	17	10	4	4																			341	815	63	27	15	2	3	1								
こ	10	551	184	88	29	9	6	2	1	2						1												322	873	104	57	15	7		1								
こ	11	225	100	34	19	4	5	1	2	2																		167	392	45	26	6	3	2			1						
こ	12	375	121	48	31	14	4	1	2		1																	222	597	40	17	5	3		1								
こ	13	296	90	30	15	10	1	2																				148	444	26	18	1	3										
こ	14	224	39	28	11	5	4	5	1																			93	317	9	7	1		1									
こ	15	206	71	26	20	7	6	1	1	1																		133	339	18	8	1											
こ	30	2	4	9	1	2	1																					17	19	2	4												
さ	1	202	94	72	43	18	8	7	1	2		1																246	448	83	49	11	7	1	1								
さ	2	387	147	72	38	29	11	8	5																			310	697	72	36	9	2										
さ	3	357	120	57	36	11	14	5	2	2	1		2	1														251	608	48	27	12	1		1								
さ	4	414	157	64	42	20	5	5	3	1																		297	711	94	31	16	5	1									
さ	5	535	214	97	55	36	8	2	1	1				1														415	950	94	27	13	8	1	1								
さ	6	189	86	72	35	10	12	7	6	1	2																	231	420	32	12	8	4		1								

第53表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（４）

土師器												須恵器												焼物		その他	☆総計	総計	☆全計	全計	備考	区	
☆	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	☆	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	☆	計	☆	計							
88	113	13	24	15	3	1		1			44	57			1	2	1				1			5	5	137	175		692	808	692	808	石～8に敲石	か	1
115	284	30	10	4	4		1				19	49		1										1	1	135	334		741	1,398	741	1,398		か	2
123	211	25	4	2							6	31				1								1	1	130	243	1	708	1,068	709	1,069	市来式1	か	3
118	288	32	7	2	1						10	42												0	0	128	330		995	2,098	995	2,098		か	4
119	267	24	8	2	1						11	35	2				1							1	3	131	305		848	1,819	848	1,819		か	5
128	291	27	13	1							14	41												0	0	142	332		977	2,130	977	2,130		か	6
128	286	11	8	1	1	1					11	22		1										1	1	140	309		866	1,840	866	1,840		か	7
80	186	23	6		1						7	30												0	0	87	216		691	1,499	691	1,499		か	8
54	117	19	6		2						8	27												0	0	62	144		507	1,024	507	1,024		か	9
77	184	14	1	1							2	16												0	0	79	200		614	1,299	614	1,299		か	10
69	126	3	4								4	7												0	0	73	133		239	427	239	427		か	11
49	64	3	3	1		1					5	8												0	0	54	72		224	349	224	349		か	12
24	40	7									0	7												0	0	24	47		104	240	104	240		か	13
22	49										0	0												0	0	22	49		124	315	124	315		か	14
35	78	4	1								1	5												0	0	36	83		149	365	149	365		か	15
4	10	3	1								1	4												0	0	5	14		43	100	43	100		か	16
0	0		1								1	1												0	0	1	1		40	211	40	211		か	17
11	25	3									0	3												0	0	11	28		56	178	56	178		か	18
0	0										0	0												0	0	0	0		3	3	3	3		か	29
2	2	2	1	1		1					3	5												0	0	5	7		16	20	16	20		か	30
158	257	37	19	1	2						22	59		2				1						3	3	183	319		724	1,004	724	1,004	靱痕付土錘1，鉄滓1	き	1
130	211	11	5	8	2						15	26			1				1					2	2	147	239		690	980	690	980	～8須恵器は3分割	き	2
97	270	45	11	2		1					14	59			1									1	1	112	330		769	1,536	769	1,536		き	3
151	377	34	18	5	2	1					26	60												0	0	177	437		1,221	3,000	1,221	3,000		き	4
80	168	10	4	1							5	15												0	0	85	183		647	1,288	647	1,288		き	5
142	381	47	14	5	1						20	67			1									1	1	163	449		1,139	2,610	1,139	2,610		き	6
91	233	22	10	1	1						12	34								1				1	1	104	268		783	1,828	783	1,828		き	7
86	243	12	3				1				4	16				1	1							2	2	92	261		605	1,438	605	1,438		き	8
52	120	11	2	1	1						4	15												0	0	56	135		400	917	400	917		き	9
64	190	15	1								1	16												0	0	65	206	1	537	1,275	538	1,276	～2鉄さい	き	10
57	104	6	1	1							2	8												0	0	59	112		177	347	177	347		き	11
67	110	2		1							1	3												0	0	68	113		231	462	231	462		き	12
51	102	9	2								2	11												0	0	53	113		247	596	247	596		き	13
23	53	13	4								4	17												0	0	27	70		197	473	197	473		き	14
25	60	5									0	5												0	0	25	65		130	378	130	378		き	15
6	18	5	1	1							2	7												0	0	8	25		56	141	56	141		き	16
2	6	2									0	2												0	0	2	8		31	102	31	102		き	17
16	37	1									0	1												0	0	16	38		43	112	43	112		き	18
1	1										0	0												0	0	1	1		11	13	11	13		き	30
90	163	22	11		3						14	36		1	2	1								4	4	108	203	1	538	792	539	793	～4に弥生突帯	く	1
92	172	17	16	3	3		1				23	40			2	1								3	3	118	215	1	549	879	550	880	～3に鉄?	く	2
73	150	17	7	3	3	2	2				17	34		1	4	1								6	6	96	190		668	1,076	668	1,076		く	3
90	241	27	4	2	1						7	34			1									1	1	98	276	2	1,107	2,109	1,109	2,111	～11に石錘，～12に凹石	く	4
132	291	15	7								7	22												0	0	139	313	1	922	1,987	923	1,988	～3焼物	く	5
99	218	25	4	3							7	32												0	0	106	250		869	1,879	869	1,879		く	6
97	224	10	7		2						9	19				1	1							2	2	108	245		751	1,726	751	1,726		く	7
126	276	22	9		1						10	32												0	0	136	308		899	2,269	899	2,269		く	8
72	161	8	1								1	9												0	0	73	170	1	553	1,287	554	1,288	～4古瀬戸?	く	9
108	249	25	6	1							7	32					1							1	1	116	282	1	669	1,547	670	1,548	～4に突帯付口縁部片	く	10
148	306	21	6	3							9	30												0	0	157	336		547	1,151	547	1,151		く	11
51	96	5	5	1							6	11												0	0	57	107		221	425	221	425		く	12
51	112	6	3	1							4	10												0	0	55	122		294	743	294	743		く	13
11	35	3									0	3												0	0	11	38		119	326	119	326		く	14
21	48	2	3								3	5												0	0	24	53		109	277	109	277		く	15
13	29	1	2								2	3												0	0	15	32		120	202	120	202		く	16
2	6	1									0	1												0	0	2	7		206	818	206	818		く	17
8	28	2				1					1	3												0	0	9	31		77	236	77	236		く	18
0	0										0	0												0	0	0	0		3	3	3	3		く	29
3	4										0	0												0	0	3	4		10	11	10	11		く	30
97	128	28	4	3	2						9	37			1					1				2	2	108	167	1	465	569	466	570	～5に土錘	け	1
63	181	20	14	7	1	1					23	43												0	0	86	224		616	1,029	616	1,029		け	2
84	222	23	9	1							10	33												0	0	94	255	1	817	1,730	818	1,731	～2に骨片	け	3
128	275	16	9	2	2						13	29												0	0	141	304		1,135	2,034	1,135	2,034		け	4
92	213	13	5		1		1				7	20												0	0	99	233		711	1,613	711	1,613		け	5
141	292	35	5	1							6	41		2										2	2	149	335	1	941	2,055	942	2,056	～5奇岩	け	6
149	353	33	6	1							7	40				1								1	1	157	394		916	2,177	916	2,177		け	7
97	242	9	1	1							2	11												0	0	99	253		857	1,894	857	1,894		け	8
92	175	14	2	2							4	18												0	0	96	193		448	1,007	448	1,007		け	9
100	176	7	10	2	1	1					14	21												0	0	114	197		403	813	403	813		け	10
87	193	8	5	1							6	14							1					1	1	94	208	1	291	615	292	616	～11打斧?	け	11
69	92	4	1	2	1						4	8												0	0	73	100		254	404	254	404		け	12
15	40	2	2								2	4												0	0	17	44		122	300	122	300		け	13
13	48	12	2								2	14												0	0	15	62		101	327	101	327		け	14
25	64	7	1			1					2	9												0	0	27	73		213	407	213	407		け	15
2	5										0	0												0	0	2	5		205	466	205	466		け	16
1	10										0	0												0	0	1	10		135	623	135	623		け	17
5	17		2								2	2												0	0	7	19		36	98	36	98		け	18
0	1										0	0												0	0	0	1		28	30	28	30		け	30
60	88	13	12	3		1	1				17	30		1										1	1	78	119		389	476	389	476		こ	1
46	148	28	6								6	34							1					1	1	53	183		564	1,170	564	1,170		こ	2
78	182	33	10	3							13	46												0	0	91	228	1	622	1,321	623	1,322	～2古瀬戸?	こ	3
83	200	29	9	2							11	40												0	0	94	240		795	2,089	795	2,089		こ	4
90	217	30	5								5	35												0	0	95	252	1	674	1,594	675	1,595	～8石皿?	こ	5
55	139	29	7	3	1						11	40			1									1	1	67	180		555	1,167	555	1,167		こ	6
32	67	10	4								4	14	1					1						1	2	37	83	1	290	742	291	743	～3ふいごロ?	こ	7
34	141	7	2								2	9						1						1	1	37	151		435	1,187	435	1,187		こ	8
48	111	6	1	1							2	8												0	0	50	119		391	934	391	934		こ	9
80	184	10	4	2							6	16												0	0	86	200		408	1,073	408	1,073		こ	10
38	83	3	1	2							3	6												0	0	41	89		208	481	208	481		こ	11
26	66	7	2								2	9												0	0	28	75		250	672	250	672		こ	12
22	48	7	2	1							3	10												0	0	25	58		173	502	173	502		こ	13
9	18	5	2								2	7												0	0	11	25		104	342	104	342		こ	14
9	27	3									0	3												0	0	9	30		142	369	142	369		こ	15
4	6										0	0												0	0	4	6		21	25	21	25		こ	30
69	152	18	6	3							9	27			1									1	1	79	180	1	325	628	326	629	～3緑釉片	さ	1
47	119	27	3	2	1						6	33												0	0	53	152		363	849	363	849		さ	2
41	89	15	2	1							3	18												0	0	44	107		295	715	295	715		さ	3
53	147	13	5	3	1						9	22												0	0	62	169		359	880	359	880		さ	4
50	144	8	4	1							5	13	1											0	1	55	158		470	1,108	470	1,108		さ	5
25	57	9	2								2	11												0	0	27	68		258	488	258	488		さ	6

第54表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（５）

区		礫																											土器											
		～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	～18	～19	～20	～21	～22	～23	～24	～25	～26	～27	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13
さ	7	296	99	61	38	23	7	7	1			1																237	533	39	31	10	3				1				
さ	8	190	71	28	23	8	2	1	1	1																		135	325	29	21	7	2	1							
さ	9	208	74	37	29	10	3		1																			154	362	7	5	8	2								
さ	10	184	44	24	11	3	3	1																				86	270	26	16	6	2								
さ	12	91	24	10	14	9	3		1																			61	152	7	5	3									
さ	13	141	41	18	6	3	2	2	2																			74	215	7	5	2	1								
さ	14	113	35	19	10	8	5	2							1													80	193	17	4	1	2								
さ	15	355	113	35	19	9	5	3	1																			185	540	29	6	1									
さ	16	306	85	40	12	4	4	4	1			2																152	458	12	3										
さ	30			2	2	1																						5	5			1									
ろ	29	1	15	7	12	4	4	1																1				44	45	5	6	2	1	1							
ろ	30	105	176	245	162	78	40	23	7	3	8	3	1	1														747	852	32	26	9	4	1							
わ	28	1	14	17	12	11	2	1				1																58	59	4	6	1	2		1						
わ	29	15	78	118	83	44	20	7	7	7	2	1	4	2		1				1								375	390	14	38	9	4	1							
わ	30	94	296	318	215	116	56	41	13	16	6	8	4	2		1						1	1				1	1,095	1,189	40	80	31	12	3	2						
を	28	1	4	10	6	3	4	2	2	1			1															33	34		1										
を	29	24	83	109	117	54	47	18	11	12	4	4		2	1	1	2		2	1	1							469	493	5	22	9	3				1				
を	30	218	309	378	283	175	113	52	48	19	11	8	7	1	2	1	1				1	1				1		1,411	1,629	32	40	22	5	6							
ん	1	119	150	145	78	46	20	5	1																			445	564	45	28	9	1								
ん	7	418	242	159	92	40	16	6	9	1	1	1																567	985	84	63	13	3								
計		82,385	39,251	24,039	13,674	6,377	3,044	1,390	724	358	172	97	55	31	18	8	10	2	2	3	4	2	0	1	0	1	1	89,264	171,649	15,753	8,663	3,278	1,070	343	119	44	11	4	3	1	1

自然礫層		礫																											土器											
		～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	～18	～19	～20	～21	～22	～23	～24	～25	～26	～27	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13
あ	5	8,005	1,579	514	209	97	51	33	12	9	1	3	3	1														2,512	10,517	7	1										
あ	10	13,443	2,777	901	397	191	65	36	14	12	5	2	2															4,402	17,845	2											
あ	15	9,263	1,970	512	203	79	37	20	10	5	3	4			1		1											2,845	12,108	4	1										
計		30,711	6,326	1,927	809	367	153	89	36	26	9	9	5	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9,759	40,470	13	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

補修土坑		礫																											土器											
		～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	～18	～19	～20	～21	～22	～23	～24	～25	～26	～27	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13
3		561	683	604	426	155	68	24	13	8	4	4	1	1														1,991	2,552												
計		561	683	604	426	155	68	24	13	8	4	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,991	2,552	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧表（第50表～55表）の凡例】

1．第50～55表は，礫敷遺構を構成していた礫と遺物の点数をサイズごとにカウントした一覧表である。いずれも故意に持ち込まれ，敷き積まれたものと考えている。礫は自然礫，遺物には焼物類（土器・須恵器・土師器）・石器等が含まれる。第50と51表，第52と53表，第54と55表がそれぞれ左右ページの見開きで通しの表を構成している。

2．項目名の「区」は，礫敷遺構に１×１mの小グリッドを設け，南北方向に「ろ～ん，あ～さ」，東西方向に「28～30，１～18」の名称を付したものである。全ての小グリッドが，１×１mの範囲を対象としているが，「さ」行のみは，堆積状況の確認を目的に削平を行っていたため，１m×0.5mの範囲を対象とした数値となっている。

3．項目名の「土器」は主として古墳時代の土器を指している。礫敷遺構の周辺には，古墳時代の集落跡が確認されている。「土師器」と「須恵器」は古代の所産と考えられるものを指している。それ以外の遺物については，「その他」の項目で記した。「その他」石器・石製品等が含まれるが，その内容やその他の遺物については，備考欄に記した。

4．２で示したように，一覧表の点数は礫と遺物をサイズごとにカウントしたものであるが，基本的には対象物の長軸の長さで分類する方法を採用した。項目にある「～２」とか「～３」がその数値を示している。それぞれ対象物の長軸の長さが「１㎝以上２㎝未満」，「２㎝以上３㎝未満」のことを示している。礫の最大は「～27」，つまり「26㎝以上27㎝未満」であったことを示している。ちなみに１㎝未満のものについては，点数は数えていないが，重量（第57表参照）には加算されている。

5．項目にある「☆」印は，「～２」を除いた数値である。これは，対象物の採取を調査の進捗に伴い随時複数のチームが行ったため，２㎝以下の極小礫の採取に誤差が生じている可能性があることから，より公平を期すため，参考までに「～２」を除いた数値を示した。

6．項目の「総計」は「礫」と「焼物」の合計数，「全計」は「総計」に「その他」を加えたものである。

7．第54，55表の下段に，「自然礫層」という項目がある。これは，そもそも礫敷遺構の下層に存在する自然礫層と礫敷遺構の構成物や状態を比較するため，３か所（「あ５」・「あ10」・「あ15」）の小グリッドをサンプル的に調査し，カウントした数値を示したものである。

8．第54，55表の最下段に，「補修土坑」という項目がある。これは，礫敷遺構の検出当初，礫の集合状況に濃淡があったことから，路面を補修した痕跡である可能性を考慮し，先行して濃密に集合部分の礫を一括して採取したものである。全面的な数量カウントを実施する前のことで，「を５」区付近に存在した礫敷を対象としたものである。

第55表　礫敷遺構構成礫及び遺物数一覧（６）

土師器													須恵器													焼物		その他	★総計	総計	★全計	全計	備考	区	
★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	★	計	★	計								
45	84	1			1						1	2	1											0	1	46	87		283	620	283	620		さ	7
31	60		1								1	1												0	0	32	61		167	386	167	386		さ	8
15	22	3	3		1						4	7												0	0	19	29		173	391	173	391		さ	9
24	50		3								3	3												0	0	27	53		113	323	113	323		さ	10
8	15	5									0	5												0	0	8	20		69	172	69	172		さ	12
8	15	3	1								1	4												0	0	9	19		83	234	83	234		さ	13
7	24	1	1								1	2												0	0	8	26		88	219	88	219		さ	14
7	36	5	1								1	6												0	0	8	42		193	582	193	582		さ	15
3	15	1									0	1												0	0	3	16		155	474	155	474		さ	16
1	1		2								2	2												0	0	3	3		8	8	8	8		さ	30
10	15	1	6	3							9	10		1	1									2	2	21	27		65	72	65	72		ろ	29
40	72	19	23	9	2						34	53					1							1	1	75	126		822	978	822	978		ろ	30
10	14	1	3	1	1						5	6					1							1	1	16	21	1	74	80	75	81	縄文晩期?1	わ	28
52	66	12	15	11	3		1				30	42	1		1				1					2	3	84	111		459	501	459	501		わ	29
128	168	53	80	30	9	3	2		1		125	178		2	2	2	2			1				9	9	262	355		1,357	1,544	1,357	1,544		わ	30
1	1		1		1						2	2					1							1	1	4	4	1	37	38	38	39	縄文晩期?1	を	28
35	40	19	20	12	3						35	54				1		1						2	2	72	96	4	541	589	545	593	黒曜石片3, 叩石1	を	29
73	105	44	32	17	6	1					56	100		1			1			1	1			4	4	133	209	1	1,544	1,838	1,545	1,839		を	30
38	83	15	2	1							3	18		1		1	1							3	3	44	104	1	489	668	490	669	弥生?～3	ん	1
79	163	20	4	4							8	28			1	1	1							3	3	90	194		657	1,179	657	1,179		ん	7
13,537	29,290	2,981	1,253	345	97	23	11	1	1	1	1,732	4,713	18	35	35	24	16	9	7	5	2	0	1	134	152	15,403	34,155	51	104,667	205,804	104,718	205,855		計	

土師器													須恵器													焼物		その他	★総計	総計	★全計	全計	備考	自然礫層	
★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	★	計	★	計								
1	8										0	0												0	0	1	8		2,513	10,525	2,513	10,525		あ	5
0	2										0	0												0	0	0	2		4,402	17,847	4,402	17,847		あ	10
1	5										0	0												0	0	1	5		2,846	12,113	2,846	12,113		あ	15
2	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	15	0	9,761	40,485	9,761	40,485		計	

土師器													須恵器													焼物		その他	★総計	総計	★全計	全計	備考	補修土坑	
★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	★	計	～2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	★	計	★	計								
0	0										0	0												0	0	0	0		1,991	2,552	1,991	2,552		3	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,991	2,552	1,991	2,552		計	

【礫敷遺構構成物の個別データ表（第56表～65表）の凡例】

1．第56～65表は，礫敷遺構を構成する礫や遺物に関する様々なデータを示した個表である。

2．第56～64表は，礫や遺物の出土状況をいくつかのテーマごとに上段・中段・下段の表やグラフで提示したものである。

　上段はそれぞれの小グリッドから出土した点数を記した表である。

　中段は礫敷遺構の東西を軸とした出土量をグラフ化したものである。

　下段は礫敷遺構の南北を軸とした出土量をグラフ化したものである。中段と下段のグラフでは，折れ線が高いほど出土量が多いことを示している。

3．第58表の体積に関する表については，体積＝長さの３乗として算出した概算である。この場合の長さは，設定したそれぞれのサイズの中間値を用いた。つまり，「～２」の場合，１以上２未満なので「1.5㎝」，「～３」の場合が２以上３未満なので「2.5㎝」となる。

4．第65表は，礫敷遺構とその下位に位置する自然礫の数を比較し，上段の表と下段のグラフで表現したものである。

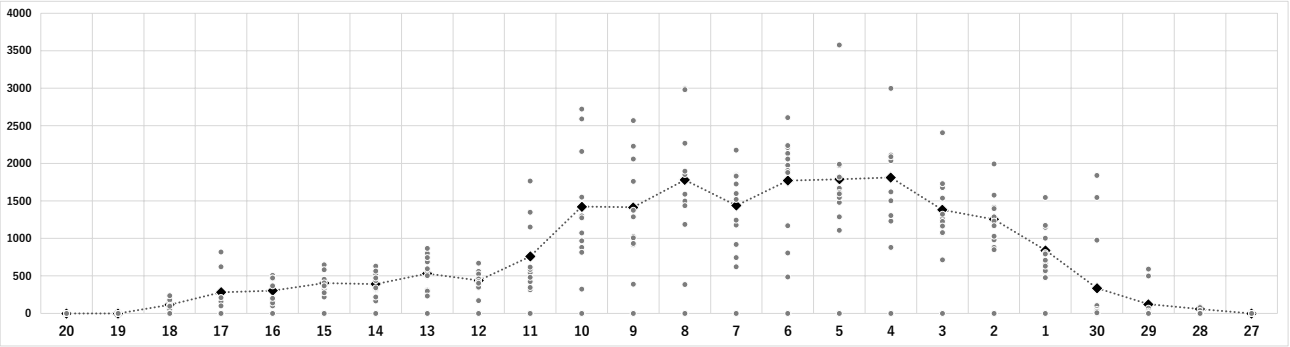
5．標準偏差は数量データのバラツキの大きさを見るための指標で，平均値を基準としてプラス方向もしくはマイナス方向に，データがどれくらい広がっているかを数値化したものである。

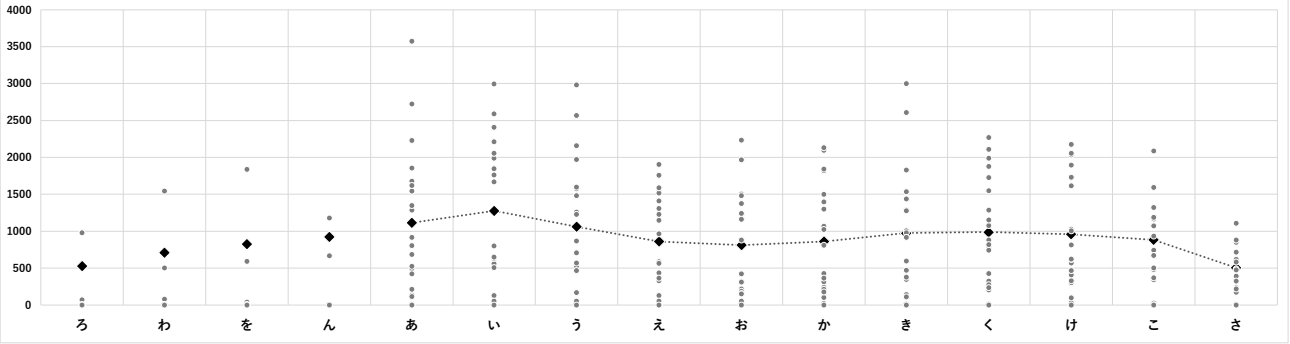
6．第56，59，60表に示した変動係数とは標準偏差を平均値で割った値のことである。変動係数は単位のない数値で，相対的なバラツキを表している。

第56表　礫敷遺構構成礫及び遺物の総数

礫・遺物の総数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差	変動係数
27																			
28		81	39													120	60.0	29.7	0.50
29	72	501	593		8	30	11	3	5	3		3				1229	122.9	225.6	1.84
30	978	1544	1839		107	30	38	19	55	20	13	11	30	25	8	4717	336.9	629.6	1.87
1				669	1545	556	708	1148	1174	808	1004	793	570	476	629	10080	840.0	317.8	0.38
2					1286	1990	1574	1412	1229	1398	980	880	1029	1170	849	13797	1254.3	335.9	0.27
3					1677	2406	1261	1228	1163	1069	1536	1076	1731	1322	715	15184	1380.4	448.1	0.33
4					1618	2062	1230	1306	1503	2098	3000	2111	2034	2089	880	19931	1811.9	580.3	0.32
5					3575	1669	1481	1544	1969	1819	1288	1988	1613	1595	1108	19649	1786.3	649.3	0.36
6					806	2212	1973	1905	2236	2130	2610	1879	2056	1167	488	19462	1769.3	658.6	0.37
7				1179	918	1847	1596	1519	1242	1840	1828	1726	2177	743	620	17235	1436.3	492.6	0.34
8					1854	2993	2981	1590	1482	1499	1438	2269	1894	1187	386	19573	1779.4	760.7	0.43
9					2230	2057	2568	1758	1373	1024	917	1288	1007	934	391	15547	1413.4	662.5	0.47
10					2722	2590	2159	966	882	1299	1276	1548	813	1073	323	15651	1422.8	764.8	0.54
11					1349	1763	545	589	317	427	347	1151	616	481		7585	758.5	489.6	0.65
12					492	561	526	347	421	349	462	425	404	672	172	4831	439.2	130.3	0.30
13					686	801	869	564	313	240	596	743	300	502	234	5848	531.6	231.5	0.44
14					523	630	567	436	167	315	473	326	327	342	219	4325	393.2	145.1	0.37
15					423	648	456	327	218	365	378	277	407	369	582	4450	404.5	124.2	0.31
16					137	507	468	366	188	100	141	202	466		474	3049	304.9	165.7	0.54
17					211	127	170	129	156	211	102	818	623			2547	283.0	255.4	0.90
18					113	53	51	52	152	178	112	236	98			1045	116.1	63.4	0.55
19																			
20																			
列小計	1050	2126	2471	1848	22280	25532	21232	17208	16245	17192	18501	19750	18195	14147	8078	205855			
平均値	525.0	708.7	823.7	924.0	1114.0	1276.6	1061.6	860.4	812.3	859.6	973.7	987.5	957.6	884.2	504.9				
標準偏差	640.6	753.3	921.9	360.6	968.3	969.6	871.4	641.9	692.9	735.1	842.0	732.2	724.4	534.0	291.6				
変動係数	1.22	1.06	1.12	0.39	0.87	0.76	0.82	0.75	0.85	0.86	0.87	0.74	0.76	0.60	0.58				

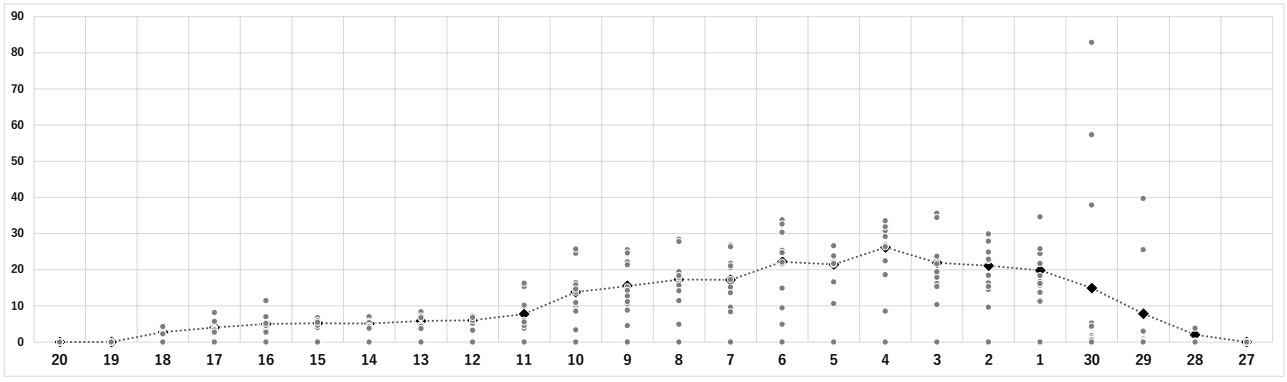


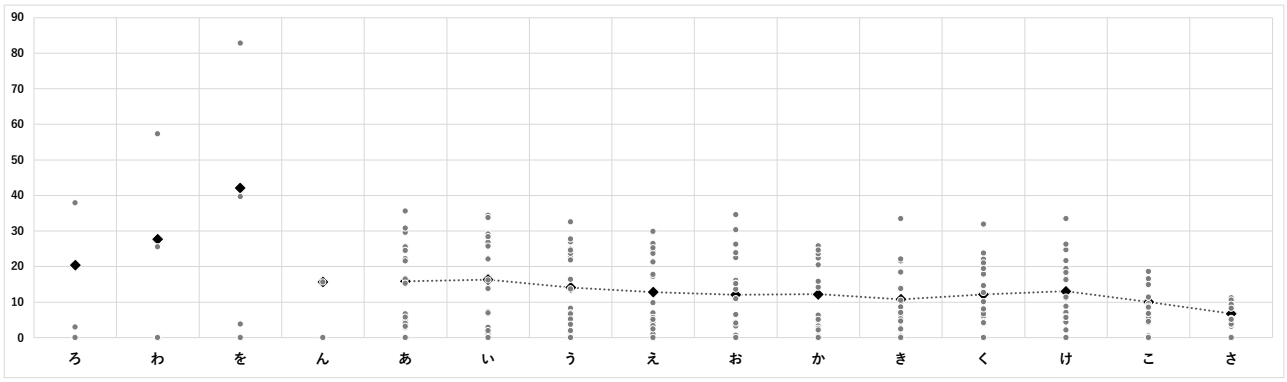


第57表　礫敷遺構構成礫及び遺物の重量

礫・遺物の重量（kg）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		0.2	3.8													4.0	2.0	2.5
29	3.0	25.5	39.7			0.7	0.4	0.8	0.1	0.3		0.1				70.6	7.8	14.5
30	37.9	57.3	82.8		5.2	1.2	1.7	1.1	0.7	0.4	0.4	0.1	4.3	0.5		193.6	14.9	27.0
1				15.7	25.6	13.8	13.7	24.4	34.6	25.8	21.7	18.3	16.7	16.1	11.2	237.6	19.8	6.8
2					29.6	27.9	24.9	29.9	22.5	22.9	18.4	14.5	16.3	15.3	9.6	231.8	21.1	6.7
3					35.6	34.4	22.8	23.7	16.1	23.7	21.6	17.9	19.4	15.3	10.3	240.8	21.9	7.7
4					30.8	29.1	26.9	26.5	26.3	22.4	33.5	31.9	33.5	18.6	8.5	288.0	26.2	7.4
5					22.2	26.6	23.7	21.5	23.9	23.6	22.1	23.8	21.7	16.6	10.6	236.3	21.5	4.4
6					21.6	33.8	32.6	25.3	30.3	24.6	4.9	22.0	24.7	14.9	9.4	244.1	22.2	9.2
7					15.1	26.8	21.8	17.2	13.6	20.5	8.6	21.0	26.3	9.6	8.3	188.8	17.2	6.7
8					16.5	28.4	27.8	17.8	15.3	15.7	14.1	19.4	18.3	11.4	4.9	189.6	17.2	6.7
9					25.5	22.1	24.6	21.3	15.2	14.2	10.5	12.7	11.1	8.8	4.5	170.5	15.5	6.9
10					24.5	25.7	16.4	9.8	10.9	15.8	13.8	14.6	8.8	8.5	3.3	152.1	13.8	6.7
11					15.3	16.2	5.7	5.0	3.8	5.6	4.5	10.1	6.0	5.5		77.7	7.8	4.5
12					4.9	6.8	7.1	5.1	6.5	6.3	6.2	6.0	7.1	6.8	3.2	66.0	6.0	1.2
13					6.7	7.3	8.3	7.0	4.2	4.8	7.1	6.7	4.4	4.3	3.7	64.5	5.9	1.6
14					6.7	6.7	7.0	5.7	3.6	4.8	5.3	4.2	4.4	4.2	3.8	56.4	5.1	1.2
15					5.8	6.9	6.7	4.2	3.8	5.1	4.7	4.0	5.9	4.6	5.4	57.1	5.2	1.1
16					2.8	7.0	5.2	5.1	3.2	3.3	2.7	4.5	11.4		5.1	50.3	5.0	2.6
17					4.0	2.9	3.7	3.4	3.3	2.6	2.7	8.1	5.7			36.4	4.0	1.8
18					3.2	2.0	2.0	2.4	4.1	2.2	2.4	4.2	2.2			24.7	2.7	0.9
19																		
20																		
列小計	40.9	83.0	126.3	15.7	301.6	326.3	283.0	257.2	242.0	244.6	205.2	244.1	248.2	161.0	101.8	2880.9		
平均値	20.5	27.7	42.1	15.7	15.9	16.3	14.2	12.9	12.1	12.2	10.8	12.2	13.1	10.1	6.8			
標準偏差	24.7	28.6	39.6		10.8	12.0	10.5	10.0	10.6	9.5	9.0	8.8	9.0	5.5	3.0			

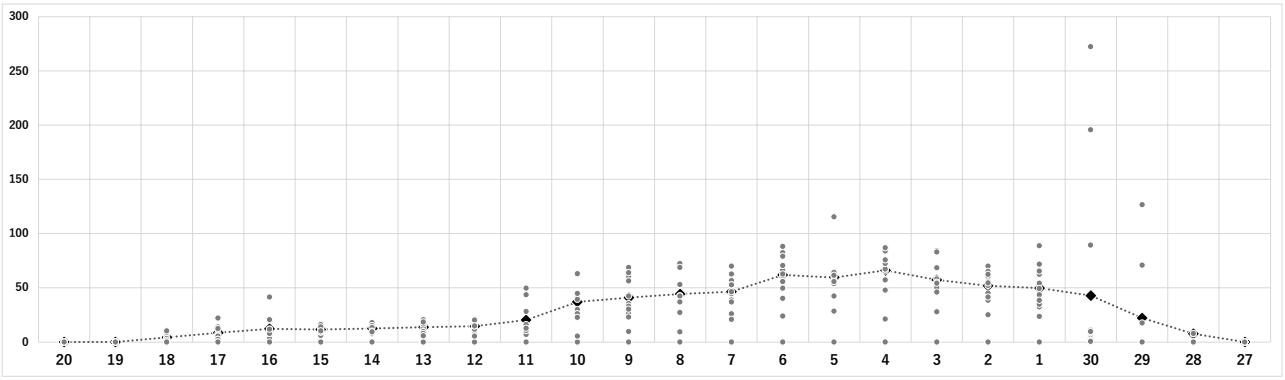


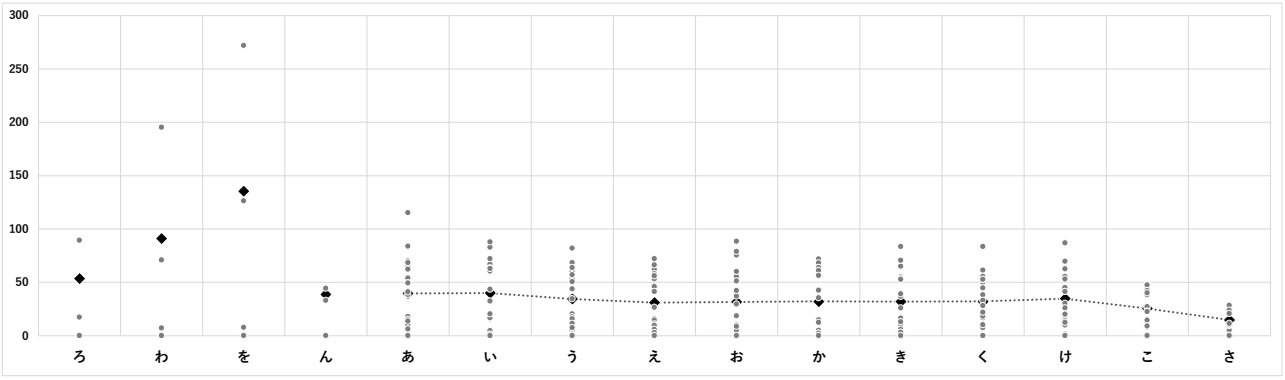


第58表　礫敷遺構構成礫及び遺物の体積

礫・遺物の体積（ℓ）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		7	8													15	7.6	0.4
29	18	71	126		1	2	1	0	0	1		0				220	22.0	42.8
30	89	195	272		11	3	4	4	3	2	1	0	9	1	1	597	42.6	85.5
1				33	54	32	35	62	89	72	65	49	44	38	23	596	49.7	19.3
2					70	65	60	52	55	62	54	38	45	41	25	569	51.7	13.2
3					84	83	54	58	51	68	55	50	54	46	28	631	57.4	16.1
4					65	67	67	72	76	57	83	84	87	48	21	727	66.1	19.0
5					115	64	57	53	60	64	54	61	56	42	28	655	59.5	21.2
6					50	88	82	66	79	61	71	56	63	40	24	679	61.7	18.9
7				44	39	63	51	46	37	56	53	53	70	26	21	558	46.5	14.3
8					41	72	68	41	43	42	37	53	53	27	9	487	44.3	17.6
9					69	61	64	56	42	35	26	33	30	23	9	449	40.8	19.1
10					62	63	44	27	30	43	39	45	26	23	5	406	36.9	17.2
11					49	44	12	10	7	14	11	28	16	13		203	20.3	15.0
12					10	15	17	12	19	15	15	17	20	15	5	160	14.6	4.2
13					17	17	20	16	10	13	16	18	10	8	6	151	13.7	4.8
14					18	17	18	15	7	15	13	9	10	8	9	138	12.6	4.0
15					15	17	16	11	7	12	6	9	14	9	10	127	11.5	3.6
16					6	20	12	10	5	5	3	8	41		12	122	12.2	11.4
17					14	5	8	6	5	2	2	22	12			77	8.5	6.4
18					6	1	1	3	9	2	3	10	1			38	4.2	3.4
19																		
20																		
列小計	107	274	406	77	796	798	691	621	634	643	609	643	661	408	237	7604		
平均値	53.4	91.2	135.4	38.7	39.8	39.9	34.5	31.0	31.7	32.1	32.0	32.2	34.8	25.5	14.8			
標準偏差	50.8	95.7	132.4	8.1	31.4	29.7	26.4	24.9	28.6	26.4	26.6	23.4	24.4	15.5	9.2			

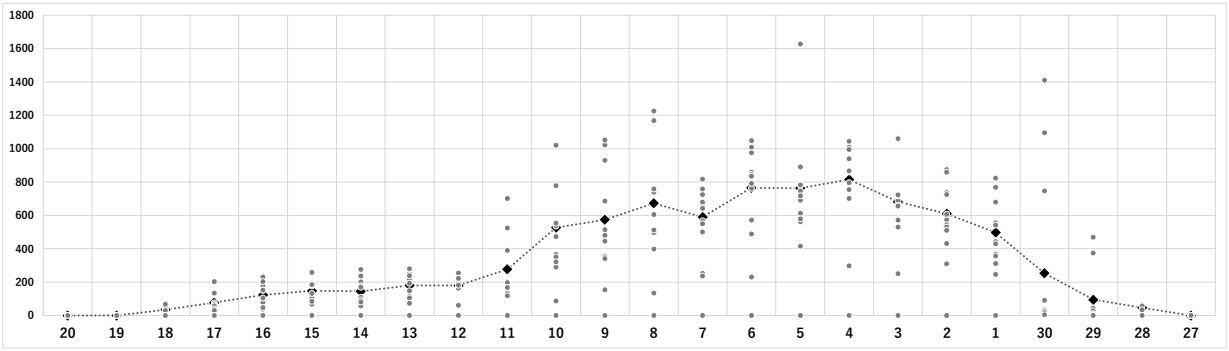


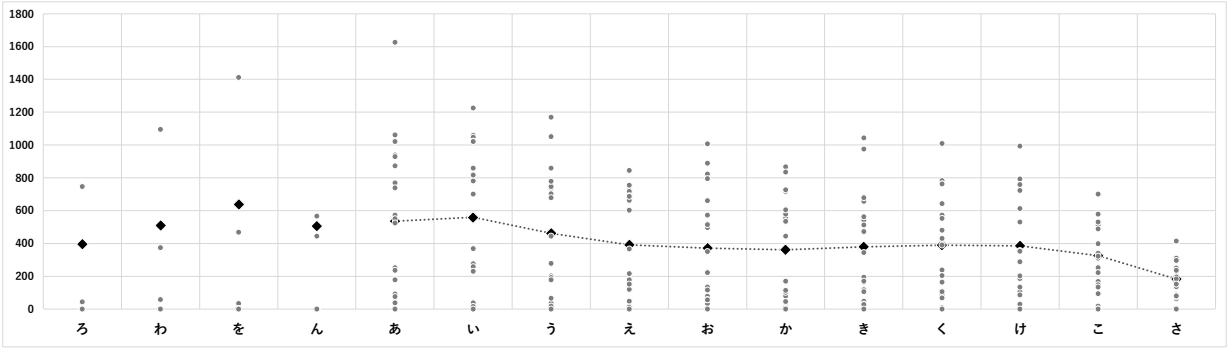


第59表　礫敷遺構構成礫数１

礫数（長軸2cm以上）（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差	変動係数
27																			
28		58	33													91	45.5	17.7	0.39
29	44	375	469		8	27	11	3	4	3		3				947	94.7	174.4	1.84
30	747	1095	1411		91	28	35	17	34	11	10	7	28	17	5	3536	252.6	469.7	1.86
1				445	769	369	444	679	823	555	541	430	357	311	246	5969	497.4	181.5	0.37
2					874	858	736	725	573	606	543	431	530	511	310	6697	608.8	174.5	0.29
3					1062	1060	688	717	661	578	657	572	723	531	251	7500	681.8	228.6	0.34
4					939	860	703	755	795	867	1044	1009	994	701	297	8964	814.9	209.8	0.26
5					1627	780	747	691	890	717	562	783	612	579	415	8403	763.9	314.5	0.41
6					572	1048	859	845	1008	835	976	763	792	488	231	8417	765.2	245.7	0.32
7				567	550	817	678	663	500	726	679	643	759	253	237	7072	589.3	183.6	0.31
8					738	1225	1169	602	496	604	513	763	758	398	135	7401	672.8	316.6	0.47
9					930	1023	1051	686	514	445	344	480	352	341	154	6320	574.5	305.0	0.53
10					1021	1021	779	367	350	535	472	553	289	322	86	5795	526.8	300.9	0.57
11					524	701	186	183	134	166	118	390	197	167		2766	276.6	196.4	0.71
12					181	255	195	159	222	170	163	164	181	222	61	1973	179.4	49.6	0.28
13					253	278	279	217	115	80	194	239	105	148	74	1982	180.2	78.7	0.44
14					236	276	202	177	58	102	170	108	86	93	80	1588	144.4	71.8	0.50
15					178	258	193	119	68	113	105	85	186	133	185	1623	147.5	56.9	0.39
16					44	230	177	152	77	38	48	105	203		152	1226	122.6	69.9	0.57
17					75	38	66	47	58	39	29	204	134			690	76.7	57.0	0.74
18					37	15	17	11	55	45	27	68	29			304	33.8	19.3	0.57
19																			
20																			
列小計	791	1528	1913	1012	10709	11167	9215	7815	7435	7235	7195	7800	7315	5215	2919	89264			
平均値	395.5	509.3	637.7	506.0	535.5	558.4	460.8	390.8	371.8	361.8	378.7	390.0	385.0	325.9	182.4				
標準偏差	497.1	531.4	704.3	86.3	449.3	416.5	367.1	307.2	332.7	309.7	319.7	300.3	302.6	195.4	109.3				
変動係数	1.26	1.04	1.10	0.17	0.84	0.75	0.80	0.79	0.90	0.86	0.84	0.77	0.79	0.60	0.60				

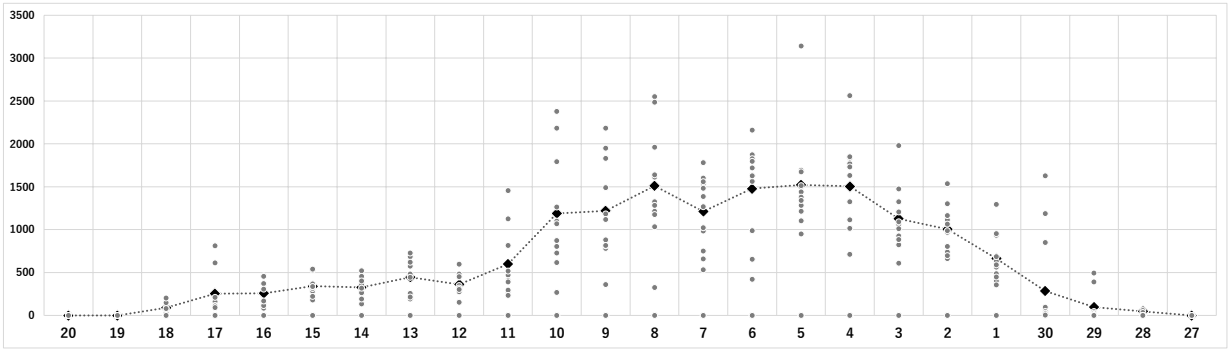


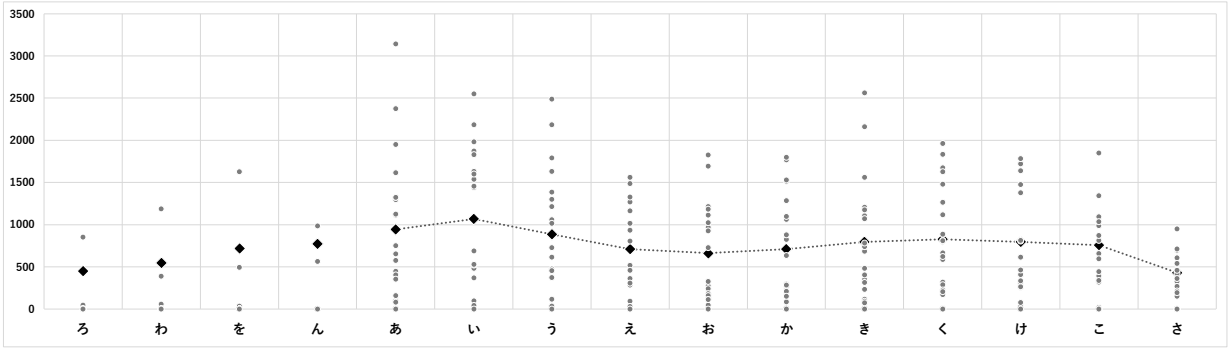


第60表　礫敷遺構構成礫数２

礫の総数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差	変動係数
27																			
28		59	34													93	46.5	17.7	0.38
29	45	390	493		8	29	11	3	5	3		3				990	99.0	182.6	1.84
30	852	1189	1629		97	30	37	18	45	13	12	7	29	19	5	3982	284.4	531.8	1.87
1				564	1296	488	614	936	955	633	685	589	402	357	448	7967	663.9	272.7	0.41
2					1115	1538	1302	1164	970	1064	741	664	805	987	697	11047	1004.3	271.2	0.27
3					1324	1980	1060	1011	928	825	1206	886	1475	1093	608	12396	1126.9	370.3	0.33
4					1325	1630	1016	1017	1113	1768	2563	1833	1730	1849	711	16555	1505.0	526.7	0.35
5					3141	1439	1214	1284	1693	1514	1105	1674	1380	1342	950	16736	1521.5	581.9	0.38
6					655	1872	1633	1562	1827	1798	2161	1629	1720	987	420	16264	1478.5	547.4	0.37
7				985	750	1601	1387	1269	1024	1531	1560	1481	1783	659	533	14563	1213.6	412.7	0.34
8					1614	2552	2487	1326	1215	1283	1177	1961	1641	1036	325	16617	1510.6	646.8	0.43
9					1949	1830	2183	1489	1182	880	782	1117	814	815	362	13403	1218.5	573.4	0.47
10					2377	2183	1793	806	727	1099	1069	1265	616	873	270	13078	1188.9	665.2	0.56
11					1127	1455	473	519	277	294	235	815	407	392		5994	599.4	406.8	0.68
12					448	482	451	290	327	277	349	318	304	597	152	3995	363.2	121.7	0.34
13					576	687	727	460	242	193	483	621	256	444	215	4904	445.8	195.2	0.44
14					406	520	455	362	136	266	403	288	265	317	193	3611	328.3	114.2	0.35
15					353	528	368	283	182	282	313	224	334	339	540	3746	340.5	110.5	0.33
16					100	369	372	308	159	86	116	170	461		458	2599	259.9	149.5	0.58
17					160	96	116	93	111	210	94	811	613			2304	256.0	266.0	1.04
18					81	42	34	29	111	150	74	205	79			805	89.4	58.0	0.65
19																			
20																			
列小計	897	1638	2156	1549	18902	21351	17733	14229	13229	14169	15128	16561	15114	12106	6887	171649			
平均値	448.5	546.0	718.7	774.5	945.1	1067.6	886.7	711.5	661.5	708.5	796.2	828.1	795.5	756.6	430.4				
標準偏差	570.6	580.9	821.1	297.7	846.7	816.7	732.2	531.6	571.4	616.6	713.3	631.4	616.1	461.0	241.9				
変動係数	1.27	1.06	1.14	0.38	0.90	0.77	0.83	0.75	0.86	0.87	0.90	0.76	0.77	0.61	0.56				

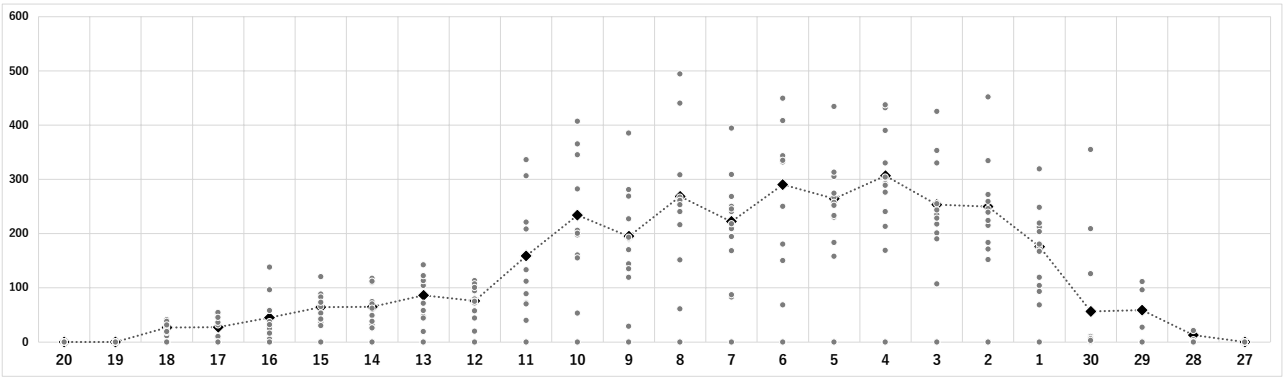


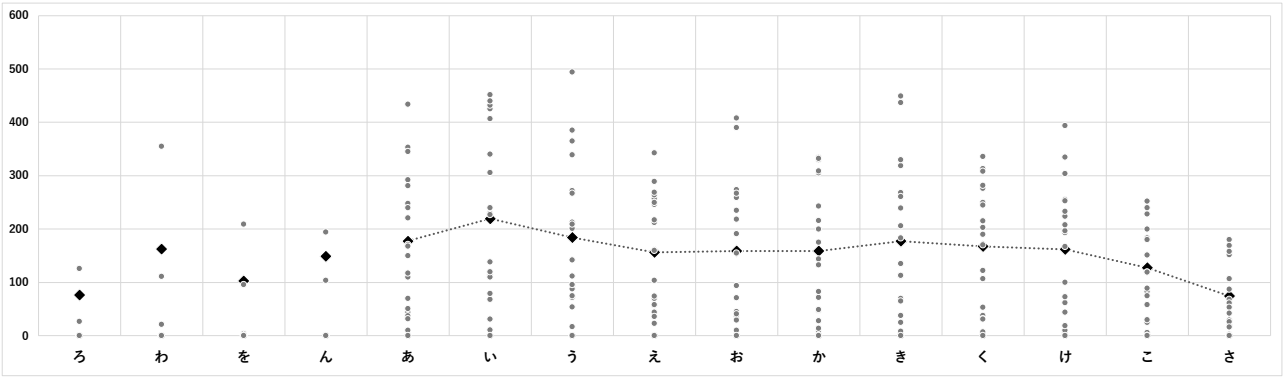


第61表　礫敷遺構出土遺物総数

焼物の総数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		21	4													25	12.5	12.0
29	27	111	96			1										235	58.8	53.1
30	126	355	209		10		1	1	10	7	1	4	1	6	3	734	56.5	109.7
1				104	248	68	93	212	219	175	319	203	167	119	180	2107	175.6	71.7
2					171	452	272	246	259	334	239	215	224	183	152	2747	249.7	84.1
3					353	425	201	217	235	243	330	190	255	228	107	2784	253.1	87.1
4					292	432	213	289	390	330	437	276	304	240	169	3372	306.5	85.9
5					434	230	267	257	274	305	183	313	233	252	158	2906	264.2	72.9
6					150	340	339	343	408	332	449	250	335	180	68	3194	290.4	115.4
7				194	168	240	209	250	218	309	268	245	394	83	87	2665	222.1	86.5
8					240	440	494	264	267	216	261	308	253	151	61	2955	268.6	119.4
9					281	227	385	269	191	144	135	170	193	119	29	2143	194.8	95.0
10					345	407	365	160	155	200	206	282	197	200	53	2570	233.6	105.2
11					221	306	72	70	40	133	112	336	208	89		1587	158.7	103.6
12					44	79	75	57	94	72	113	107	100	75	20	836	76.0	27.9
13					110	114	142	104	71	47	113	122	44	58	19	944	85.8	39.5
14					117	110	112	74	31	49	70	38	62	25	26	714	64.9	35.1
15					70	120	88	44	36	83	65	53	73	30	42	704	64.0	26.7
16					37	138	96	58	29	14	25	32	5		16	450	45.0	41.8
17					51	31	54	36	45	1	8	7	10			243	27.0	20.8
18					32	11	17	23	41	28	38	31	19			240	26.7	10.0
19																		
20																		
列小計	153	487	309	298	3374	4171	3495	2974	3013	3022	3372	3182	3077	2038	1190	34155		
平均値	76.5	162.3	103.0	149.0	177.6	219.5	183.9	156.5	158.6	159.1	177.5	167.5	161.9	127.4	74.4			
標準偏差	70.0	172.8	102.7	63.6	125.3	159.3	138.4	109.5	126.4	122.7	138.5	114.5	121.1	79.9	60.6			

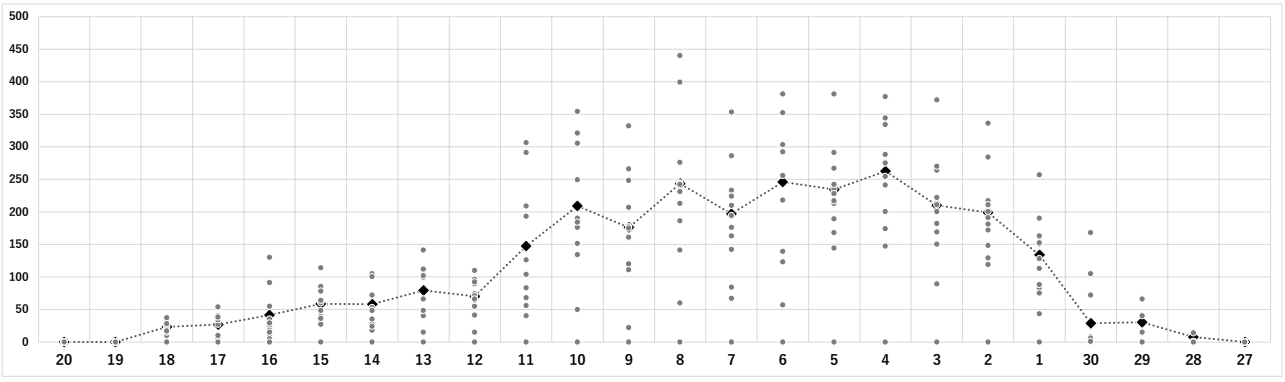


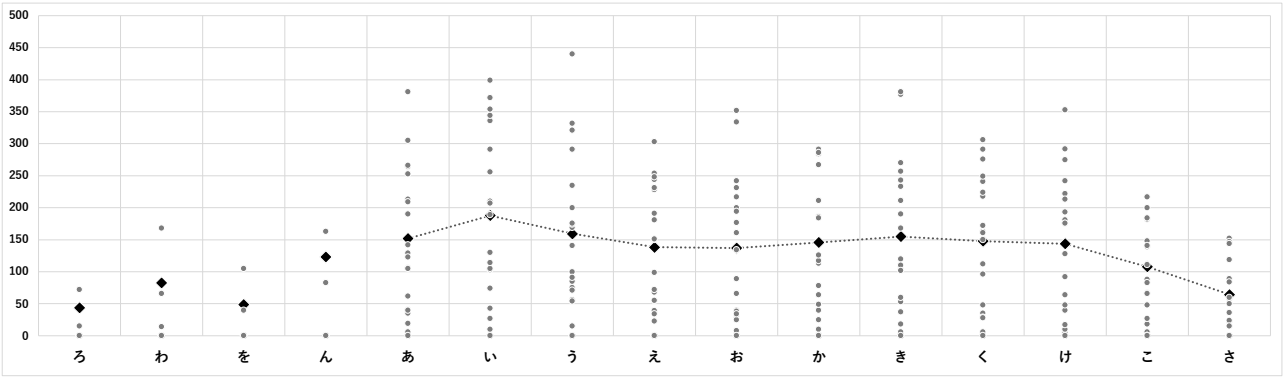


第62表　礫敷遺構出土土器数

土器の数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		14	1													15	7.5	9.2
29	15	66	40			1										122	30.5	28.6
30	72	168	105		6		1	1	8	2	1	4	1	6	1	376	28.9	53.0
1				83	190	43	75	150	161	113	257	163	128	88	152	1603	133.6	58.3
2					129	336	200	191	217	284	211	172	181	148	119	2188	198.9	64.4
3					264	372	169	181	200	211	270	150	222	182	89	2310	210.0	73.9
4					253	344	174	254	334	288	377	241	275	200	147	2887	262.5	71.7
5					381	189	235	228	242	267	168	291	213	217	144	2575	234.1	64.2
6					123	256	291	303	352	291	381	218	292	139	57	2703	245.7	101.0
7				163	142	210	176	231	194	286	233	224	353	67	84	2363	196.9	79.7
8					213	399	440	244	231	186	243	276	242	141	60	2675	243.2	106.0
9					266	207	332	248	177	117	120	161	175	111	22	1936	176.0	85.7
10					305	354	321	151	134	184	190	249	176	184	50	2298	208.9	90.2
11					209	291	56	68	40	126	104	306	193	83		1476	147.6	96.8
12					41	74	71	55	89	64	110	96	92	66	15	773	70.3	27.0
13					106	103	141	99	66	40	102	112	40	48	15	872	79.3	39.3
14					105	105	100	72	28	49	53	35	48	18	24	637	57.9	32.8
15					62	114	85	39	32	78	60	48	64	27	36	645	58.6	26.3
16					35	130	91	55	25	10	18	29	5		15	413	41.3	40.2
17					40	27	54	34	38		6	6	10			215	26.9	17.9
18					19	10	15	23	34	25	37	28	17			208	23.1	8.9
19																		
20																		
列小計	87	248	146	246	2889	3565	3027	2627	2602	2621	2941	2809	2727	1725	1030	29290		
平均値	43.5	82.7	48.7	123.0	152.1	187.6	159.3	138.3	136.9	145.6	154.8	147.8	143.5	107.8	64.4			
標準偏差	40.3	78.3	52.5	56.6	108.4	132.9	119.4	95.1	108.0	105.7	117.6	102.3	108.6	67.5	52.1			

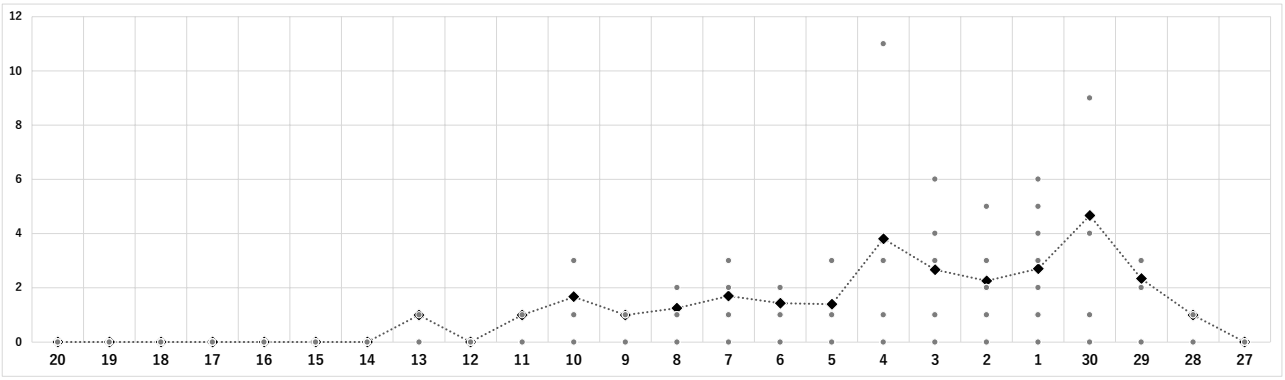


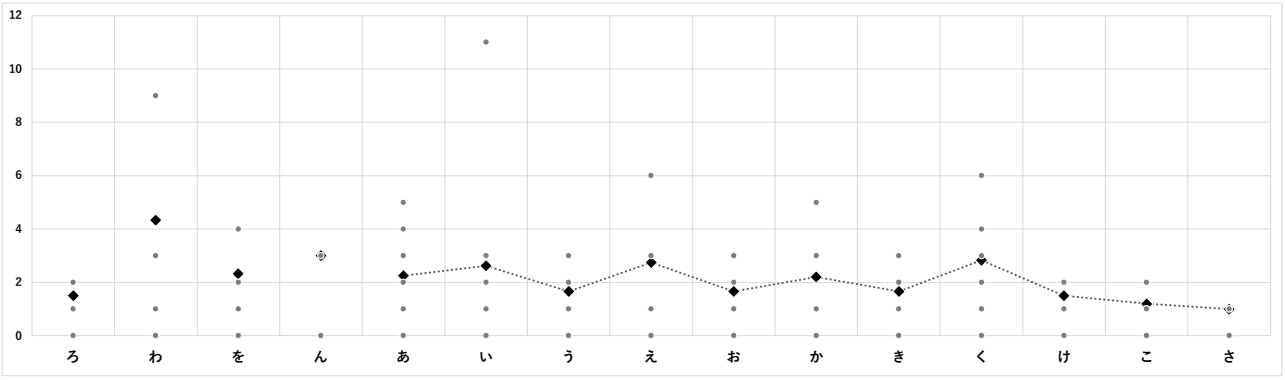


第63表　礫敷遺構出土須恵器数

須恵器の数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		1	1													2	1.0	0.0
29	2	3	2													7	2.3	0.6
30	1	9	4													14	4.7	4.0
1				3		1		6	1	5	3	4	2	1	1	27	2.7	1.8
2					5	2	2		2	1	2	3		1		18	2.3	1.3
3					4	3		1		1	1	6				16	2.7	2.1
4					3	11	1		3			1				19	3.8	4.1
5					1		1		1	3					1	7	1.4	0.9
6					2		2	1	1		1		2	1		10	1.4	0.5
7				3	1			3	2	1	1	2	1	2	1	17	1.7	0.8
8					1	1					2			1		5	1.3	0.5
9					1	1	1									3	1.0	0.0
10						1	3					1				5	1.7	1.2
11													1			1	1.0	
12																		
13						1										1	1.0	
14																		
15																		
16																		
17																		
18																		
19																		
20																		
列小計	3	13	7	6	18	21	10	11	10	11	10	17	6	6	3	152		
平均値	1.5	4.3	2.3	3.0	2.3	2.6	1.7	2.8	1.7	2.2	1.7	2.8	1.5	1.2	1.0			
標準偏差	0.7	4.2	1.5	0.0	1.6	3.5	0.8	2.4	0.8	1.8	0.8	1.9	0.6	0.4	0.0			

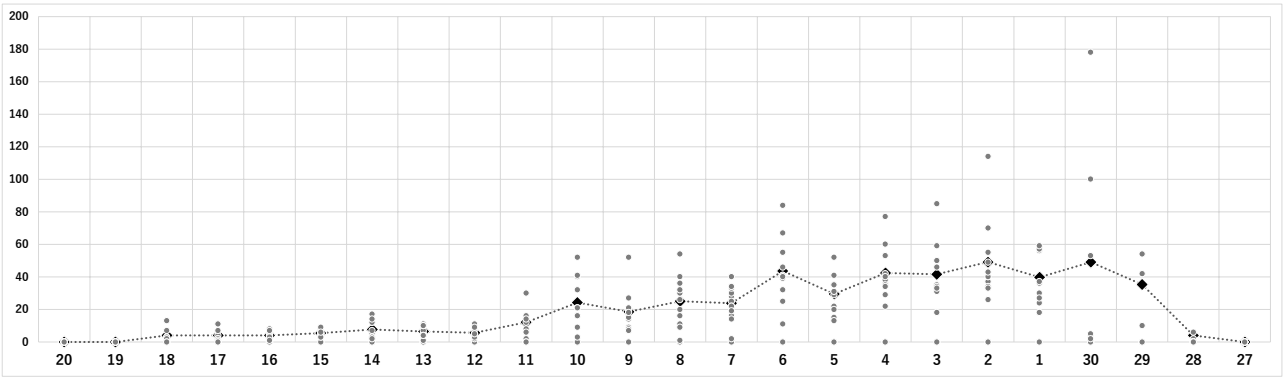


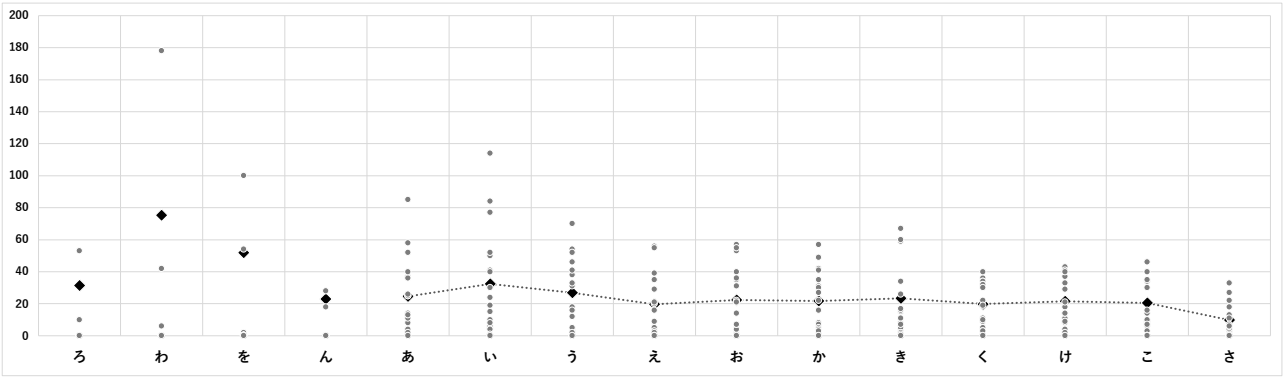


第64表　礫敷遺構出土土師器数

土師器の数（点）

区	ろ	わ	を	ん	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	行小計	平均値	標準偏差
27																		
28		6	2													8	4.0	2.8
29	10	42	54													106	35.3	22.7
30	53	178	100		4				2	5					2	344	49.1	67.9
1				18	58	24	18	56	57	57	59	36	37	30	27	477	39.8	16.6
2					37	114	70	55	40	49	26	40	43	34	33	541	49.2	24.6
3					85	50	32	35	35	31	59	34	33	46	18	458	41.6	18.0
4					36	77	38	35	53	42	60	34	29	40	22	466	42.4	15.5
5					52	41	31	29	31	35	15	22	20	35	13	324	29.5	11.5
6					25	84	46	39	55	41	67	32	41	40	11	481	43.7	19.8
7				28	25	30	33	16	22	22	34	19	40	14	2	285	23.8	10.3
8					26	40	54	20	36	30	16	32	11	9	1	275	25.0	15.5
9					14	19	52	21	14	27	15	9	18	8	7	204	18.5	12.6
10					40	52	41	9	21	16	16	32	21	16	3	267	24.3	15.1
11					12	15	16	2		7	8	30	14	6		110	12.2	8.1
12					3	5	4	2	5	8	3	11	8	9	5	63	5.7	2.9
13					4	10	1	5	5	7	11	10	4	10	4	71	6.5	3.3
14					12	5	12	2	3		17	3	14	7	2	77	7.7	5.6
15					8	6	3	5	4	5	5	5	9	3	6	59	5.4	1.9
16					2	8	5	3	4	4	7	3			1	37	4.1	2.3
17					11	4		2	7	1	2	1				28	4.0	3.7
18					13	1	2		7	3	1	3	2			32	4.0	4.1
19																		
20																		
列小計	63	226	156	46	467	585	458	336	401	390	421	356	344	307	157	4713		
平均値	31.5	75.3	52.0	23.0	24.6	32.5	26.9	19.8	22.3	21.7	23.4	19.8	21.5	20.5	9.8			
標準偏差	30.4	90.7	49.0	7.1	22.2	32.3	21.3	18.7	19.6	17.9	22.4	14.0	13.8	15.1	10.1			

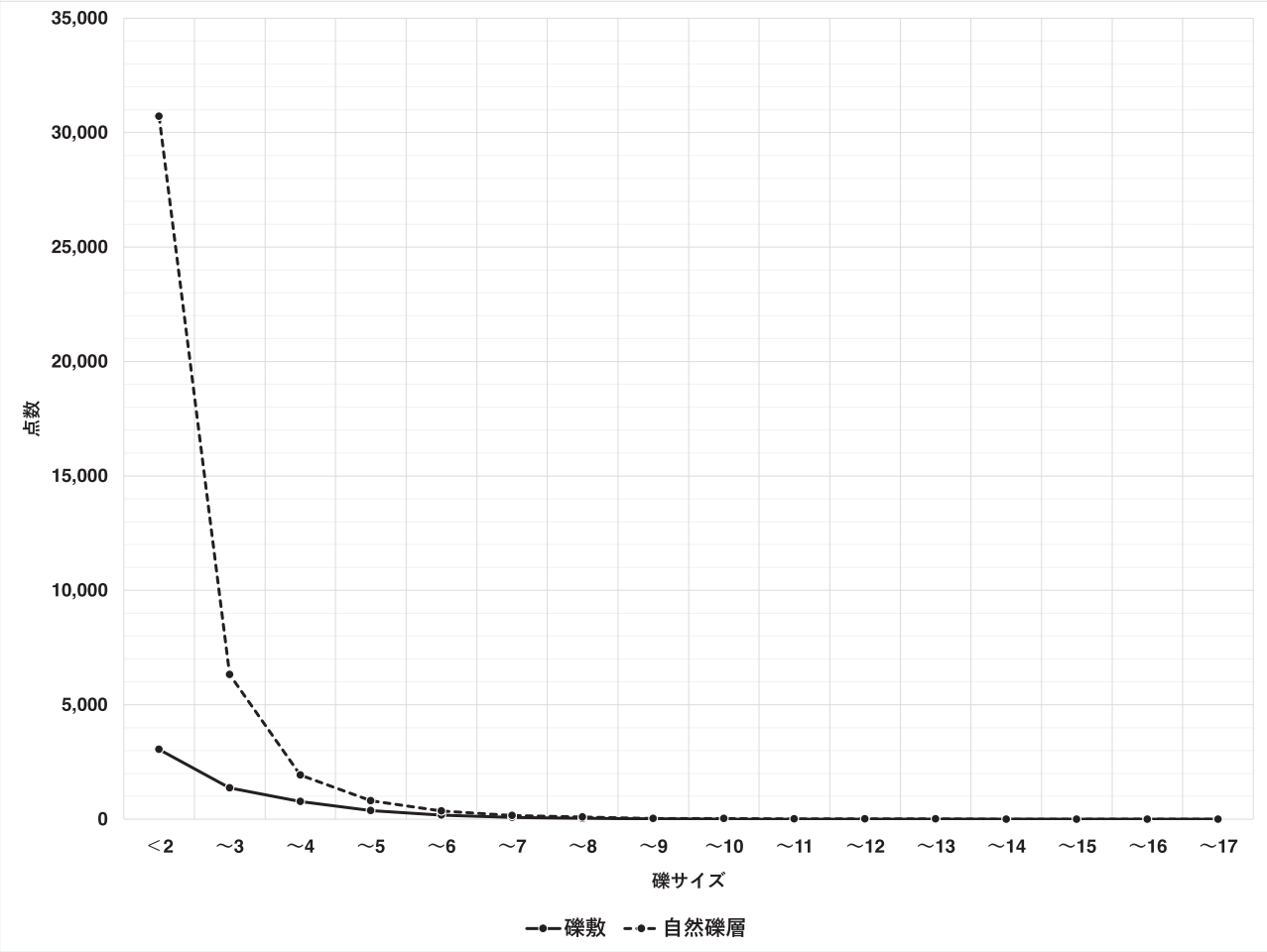




第65表　自然礫層（礫敷遺構下位）の礫数

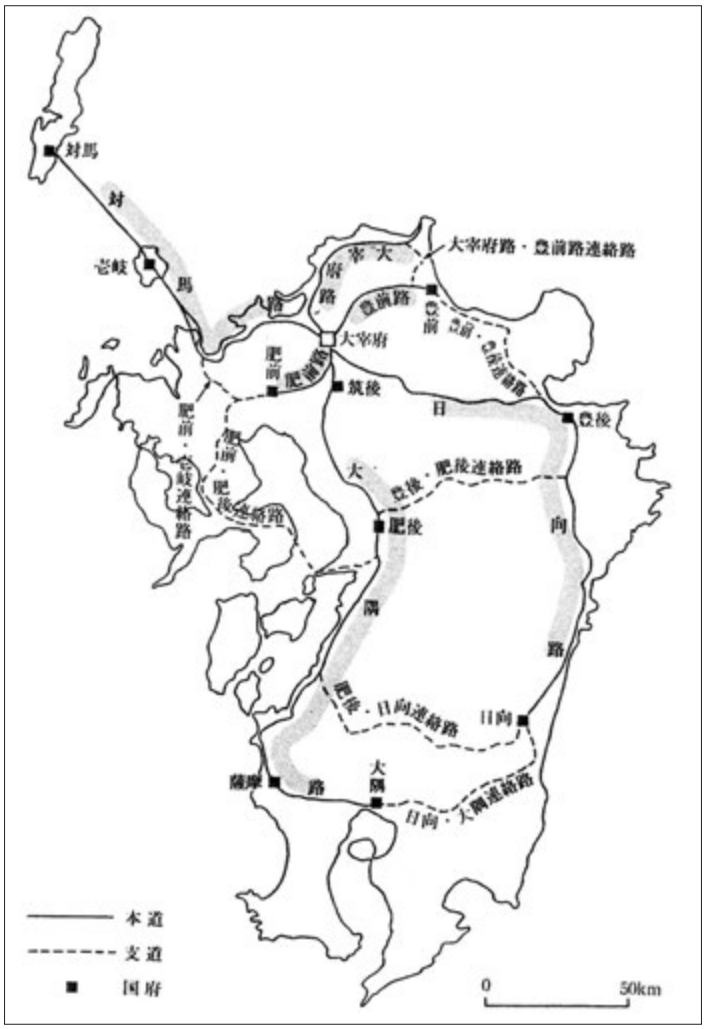
		＜2	～3	～4	～5	～6	～7	～8	～9	～10	～11	～12	～13	～14	～15	～16	～17	計
あ5	礫敷	1,514	741	459	230	104	53	22	11	6	1	0	0	0	0	0	0	3,141
	自然礫層	8,005	1,579	514	209	97	51	33	12	9	1	3	3	1	0	0	0	10,517
あ10	礫敷	1,356	547	265	117	53	22	7	4	5	1	0	0	0	0	0	0	2,377
	自然礫層	13,443	2,777	901	397	191	65	36	14	12	5	2	2	0	0	0	0	17,845
あ15	礫敷	175	82	43	27	17	5	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	353
	自然礫層	9,263	1,970	512	203	79	37	20	10	5	3	4	0	0	1	0	1	12,108
合計	礫敷	3,045	1,370	767	374	174	80	31	16	11	2	1	0	0	0	0	0	5,871
	自然礫層	30,711	6,326	1,927	809	367	153	89	36	26	9	9	5	1	1	0	1	40,470

（点）





第192図　六反ヶ丸遺跡周辺における古代官道想定図

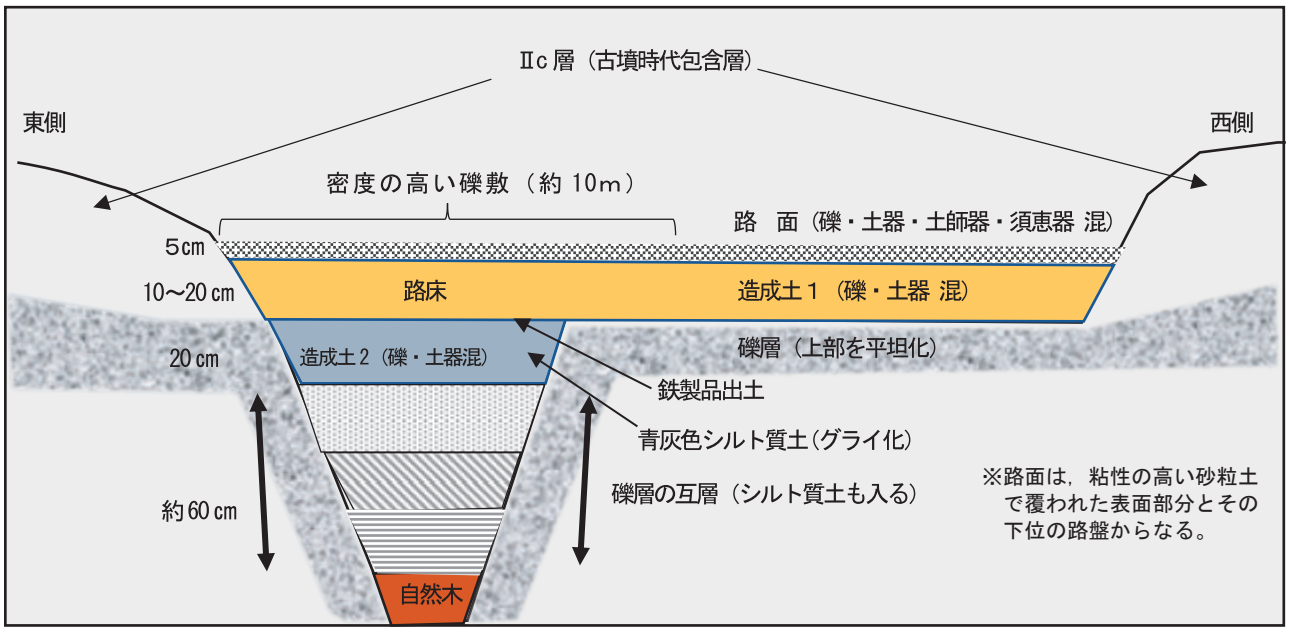


木本雅康「西海道の古代官道」
（『海路』第12号，海鳥社刊，2015年）より



深野信之「大隅国の道」
（『海路』第13号，海鳥社，2017年）より

第193図　九州および南九州の古代官道関係図



第194図　礫敷遺構断面模式図

礫敷遺構の構成物には，土器や須恵器・土師器等の焼物類も含まれている。それらの状況を示したのが第61表（焼物全体），第62表（土器），第63表（須恵器），第64表（土師器）である。それぞれの内容についてはP244の凡例３を参照して頂きたいが，第61表にもあるように，焼物もまた礫と同様の在り方を示していることが分かる。ただし，土器（凡例にあるように古墳時代の土器を指す）が濃淡こそあれ満遍なく広がっているのに対し，須恵器と土師器は，「１」～「11」列に多い傾向が見られる。標準偏差の数値からもそのことが言えるが，特に須恵器については，ほぼ「１」～「11」列に収まるという顕著な結果が得られている。

ここでテラス状の張り出し部（「28」～「30」列，「ろ」～「を」列部分）について説明しておきたい。本文でも記したように，礫敷遺構の一部にある平坦な張り出し部分のことで，第54，55表によると，他のグリッドに比べ，長軸15～27㎝の礫が異常に多いこと，須恵器や土師器の数量が多いことなどの特徴をあげることができる。礫敷遺構の中でも特殊な在り方が浮かび上がってくる。

第65表では，礫敷遺構と自然礫層との比較を示した。「あ５」・「あ10」・「あ15」の３グリッド内の上下にある礫集中部の礫をカウントした結果である。上位が人工的な礫敷，下位が自然堆積層との想定の下に調査したわけであるが，顕著に表れたのが，折れ線グラフでもわかるように，下位の小礫（特に長軸３㎝以下）が圧倒的に多いという結果であった。このことから，下位が水流による自然堆積で，上位が意図的に礫を選択して持ち込んだ堆積と判断する材料となった。以上の結果を踏まえ，礫敷遺構の性格について検討してみたい。

３　礫敷遺構の性格

礫敷遺構が存在する微小谷の堆積状況を示したのが上の断面模式図である[註２)]。礫敷の主体部は，幅10mの帯状を呈していることやその部分が極めて固い土壌で覆われていたこと，南北の調査区外へ確実に続いていくこと等から，道としての性格・機能が考えられる。道が形成される過程を時系列的に想定してみたい。

もともと存在した微小谷の東側ラインを軸とした道を設定することを目的として，まず谷を平坦化するための造成を行う。その際，谷周辺の両サイドにある土を利用する。この場合，古墳時代の包含層が表土下に存在することから，当該期の土器が混入される。この造成土を路床とし，その上位には周辺に存在する河川堆積礫を持ち込み敷設する。その際，礫の大小と共に須恵器や土師器等の焼物を混入させることで硬軟を意識した路盤を形成。最後にきめの細かな粘性の高い砂粒土で覆い路面を形成し道の完成となる。

第192図にあるように，六反ヶ丸遺跡周辺には８世紀初頭の創建と伝えられる加紫久利神社が所在し，礫敷遺構の延長線上には箱崎八幡神社の直線参道が存在すること，さらにその延長線には，『延喜式』にみえる古代の駅：市来駅にも想定される市来遺跡が所在すること等を考慮すれば，須恵器・土師器を含む礫敷遺構が古代の道路であり，規模からも官道としての可能性を想定できる結果を得ることができたと考える。今後，様々な切り口からの解明が期待される。

註１）第56～65表の作成には，前迫直人の協力を得た。
註２）福永修一が作成した。

図　版



①遠景　②全景

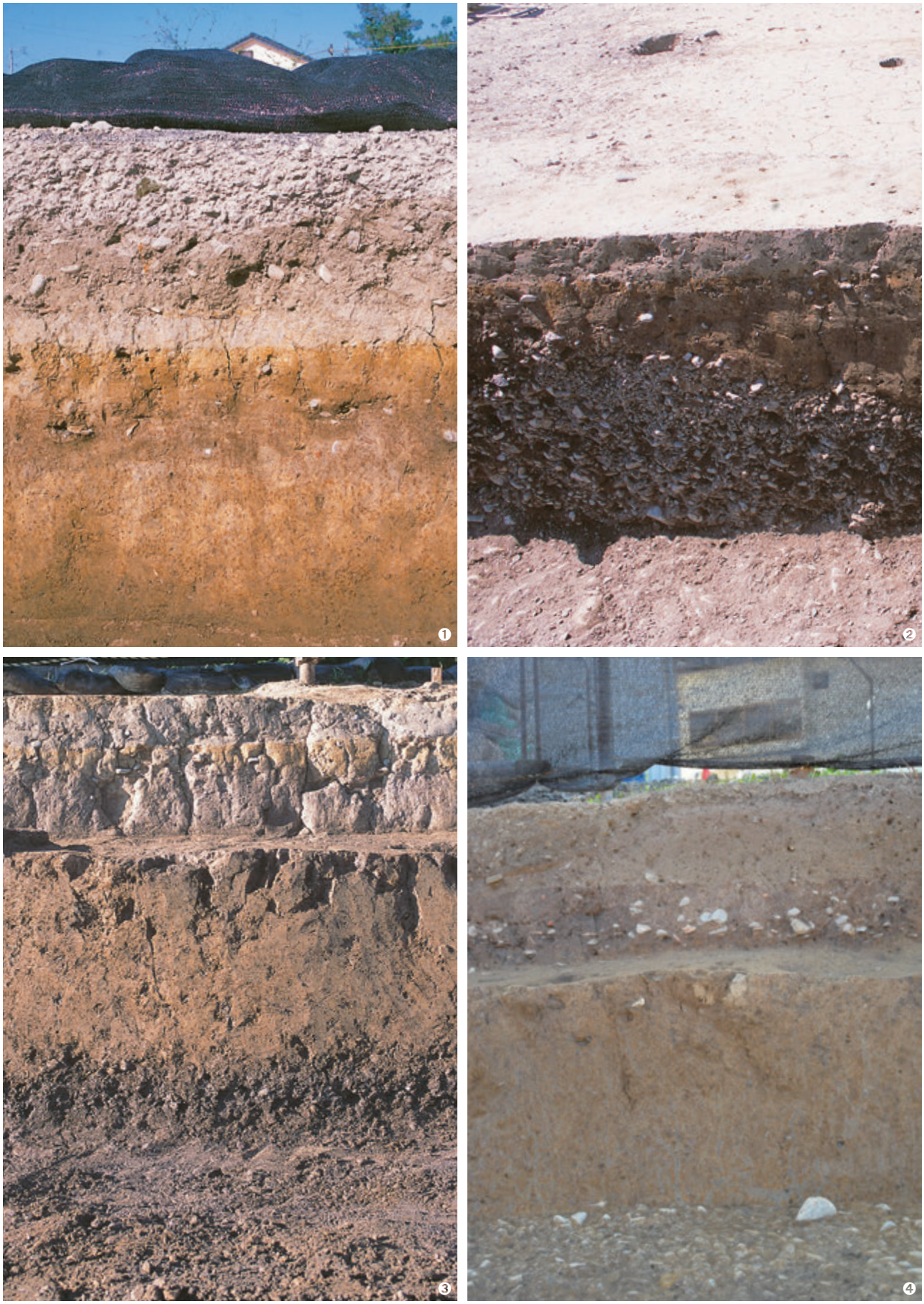
C・D調査区

図版2



①C調査区　②D調査区

調査区



①D－E28区西壁　②D・E30グリッド南北ベルト　③D区北壁　④D区南壁

土層断面

図版4



①３号完掘状況　②４号完掘状況

古墳時代　竪穴建物跡





①５号完掘状況　②６号（生活道下側）検出状況

古墳時代　竪穴建物跡

図版6



①６号（生活道下側）完掘状況　②６号（Ｃ調査区側）完掘状況

古墳時代　竪穴建物跡



①７号完掘状況　②８号焼土塊検出状況

古墳時代　竪穴建物跡

図版8

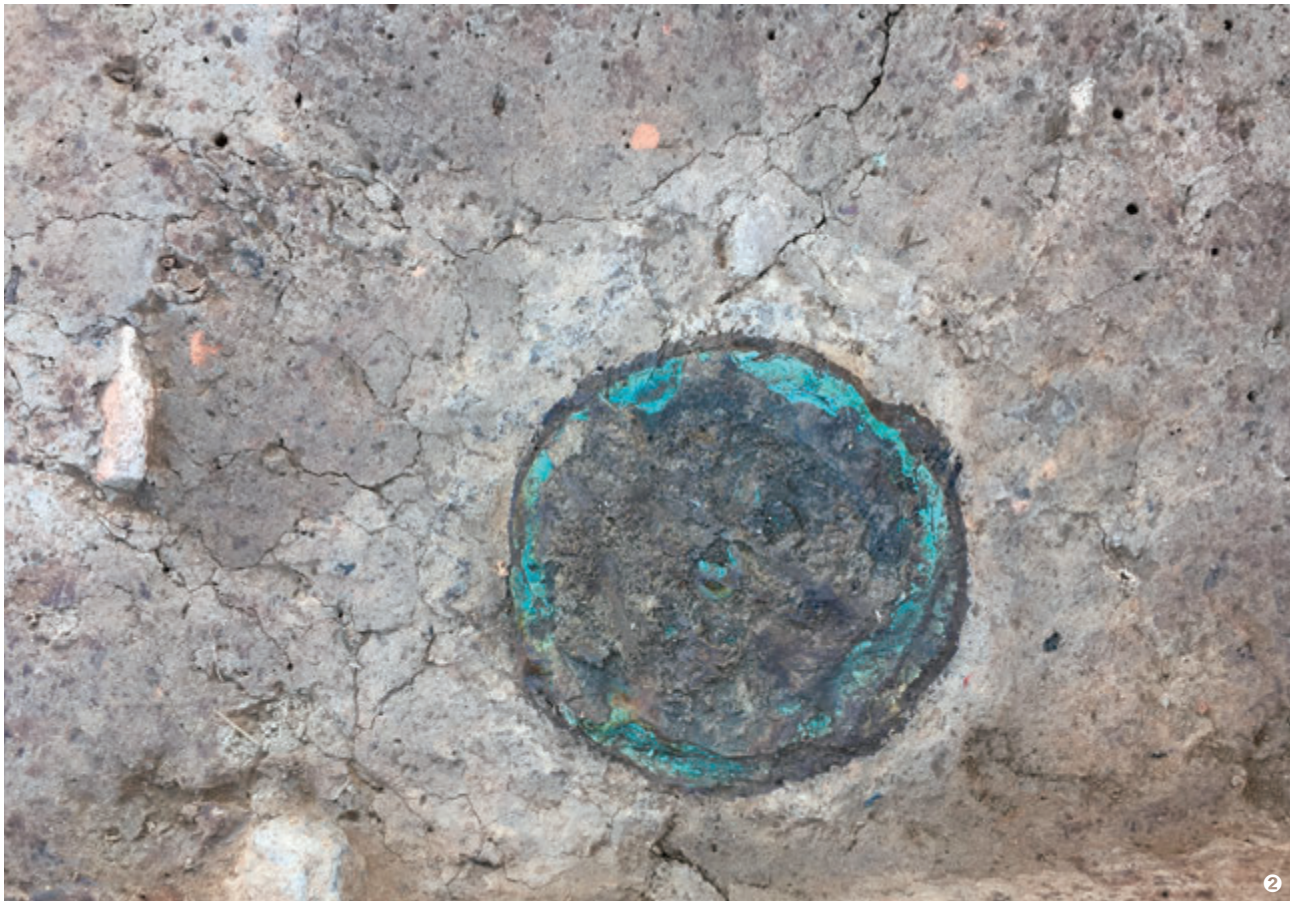




①８号焼土塊検出状況　②８号完掘状況

古墳時代　竪穴建物跡





①８号内出土状況（埋納遺構）　②出土状況（埋納遺構）

古墳時代　小型仿製鏡

図版10



①９号完掘状況　②10号完掘状況

古墳時代　竪穴建物跡



①11号完掘状況　②12号遺物出土状況

古墳時代　竪穴建物跡

図版12



①12号ガラス小玉出土状況　②12号完掘状況

古墳時代　竪穴建物跡



①D調査区側完掘状況　②生活道下側完掘状況

古墳時代　竪穴状遺構

図版14










①18号完掘状況　②19号完掘状況　③20号完掘状況　④21号完掘状況　⑤22号完掘状況　⑥23号完掘状況　⑦24号完掘状況　⑧25号完掘状況

古墳時代　土坑





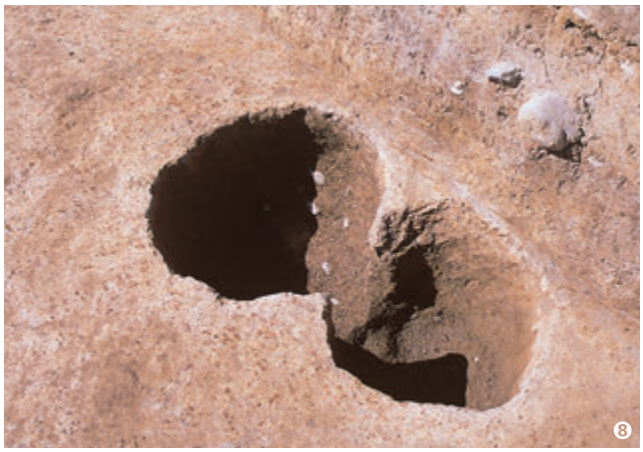










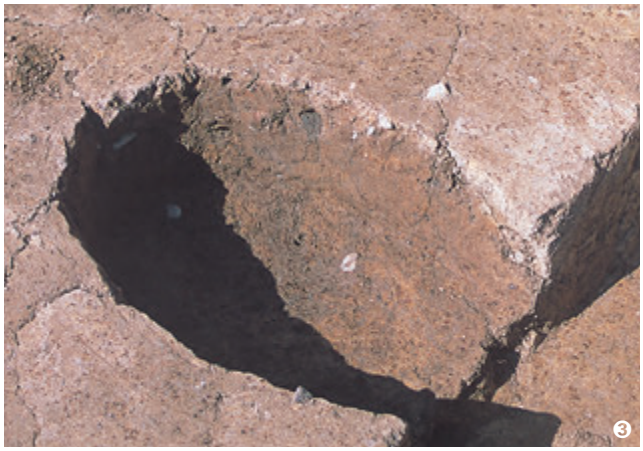


①26号完掘状況　②27号完掘状況　③28号完掘状況　④29号完掘状況　⑤30号完掘状況　⑥31号完掘状況　⑦32号半截状況　⑧33号・34号完掘状況

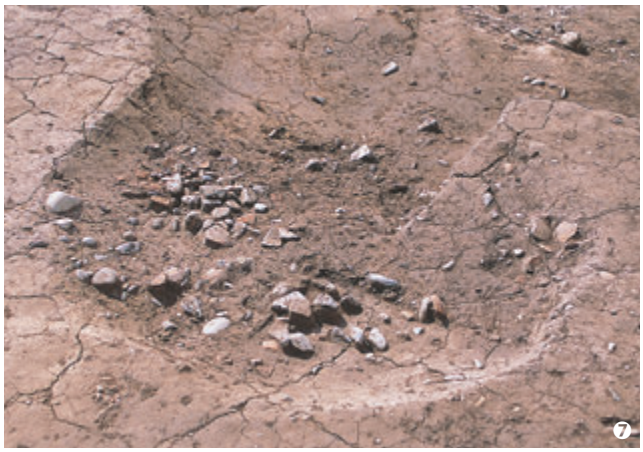
古墳時代　土坑

図版16










①35号完掘状況　②36号完掘状況　③37号完掘状況　④38号完掘状況　⑤39号完掘状況　⑥41号完掘状況　⑦43号完掘状況　⑧44号半截状況

古墳時代　土坑











①45号完掘状況　②46号完掘状況　③47・48号完掘状況　④50号完掘状況　⑤土器溜３遺物出土状況

古墳時代　土坑・土器溜

図版18



①土器溜４遺物出土状況　②土器溜５遺物出土状況

古墳時代　土器溜



①土器溜６遺物出土状況　②土器溜７遺物出土状況

古墳時代　土器溜

図版20



①土器溜７（小型丸底壷）　②土器溜７（壷）　③土器溜７（壷・鉄器）　④土器溜８（高坏形土器）　⑤土坑51号検出状況

古墳時代　土器溜・古代　土坑51号



①調査状況　②遺物出土状況(全体)　③遺物出土状況(皿)　④遺物出土状況(坏)　⑤完掘状況

古代　土坑51号

図版22



①52号遺物出土状況　②52号完掘状況　③53号完掘状況　④54号完掘状況　⑤55号完掘状況

古代　土坑



①検出状況　②調査状況

古代　土坑58号

図版24



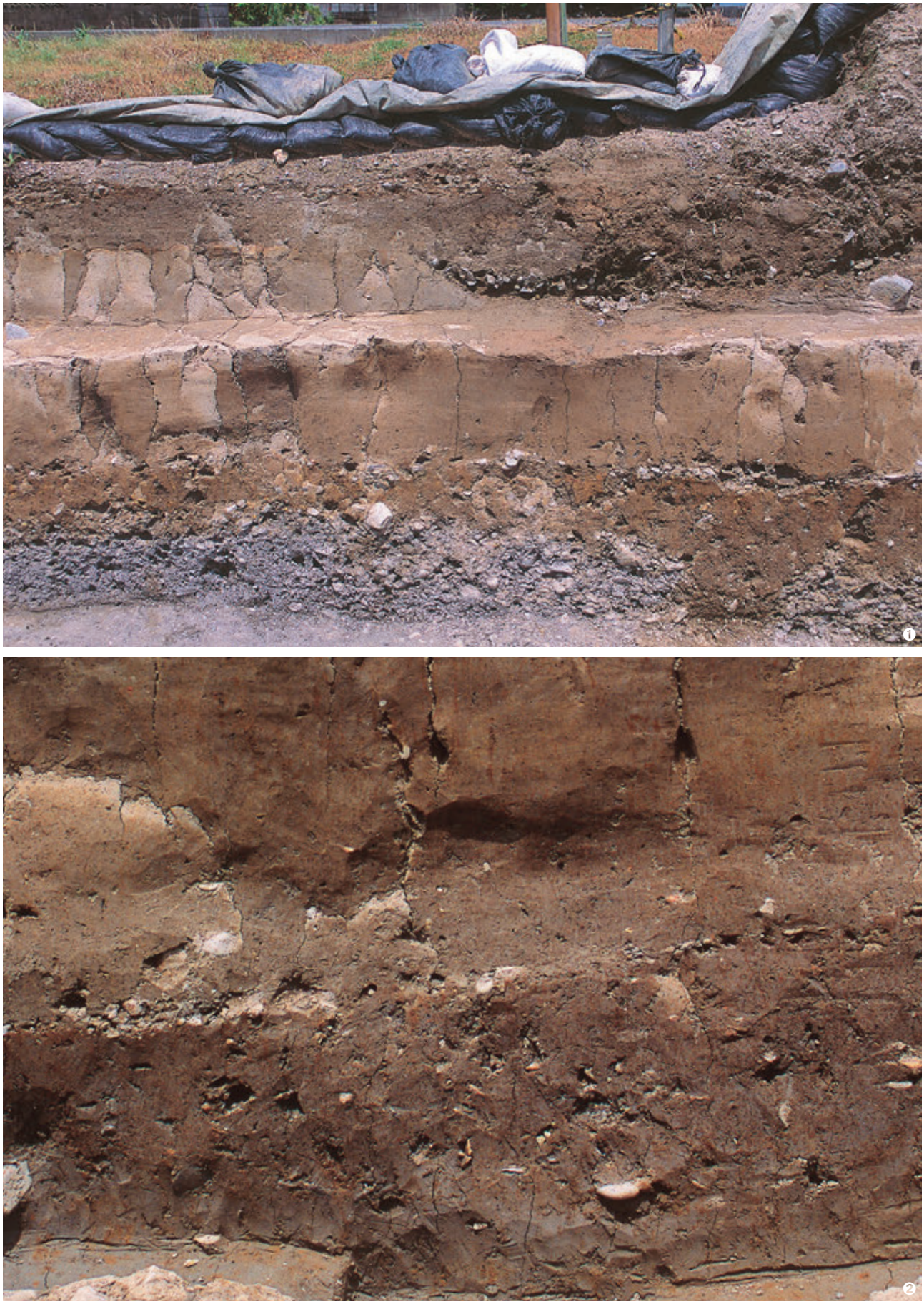
①完掘状況　②完掘状況

古代　土坑58号



①全景（東方向から）　②全景（西方向から）

古代　礫敷遺構



①北側断面１　②北側断面２

古代　礫敷遺構



①南側断面１　②南側断面２

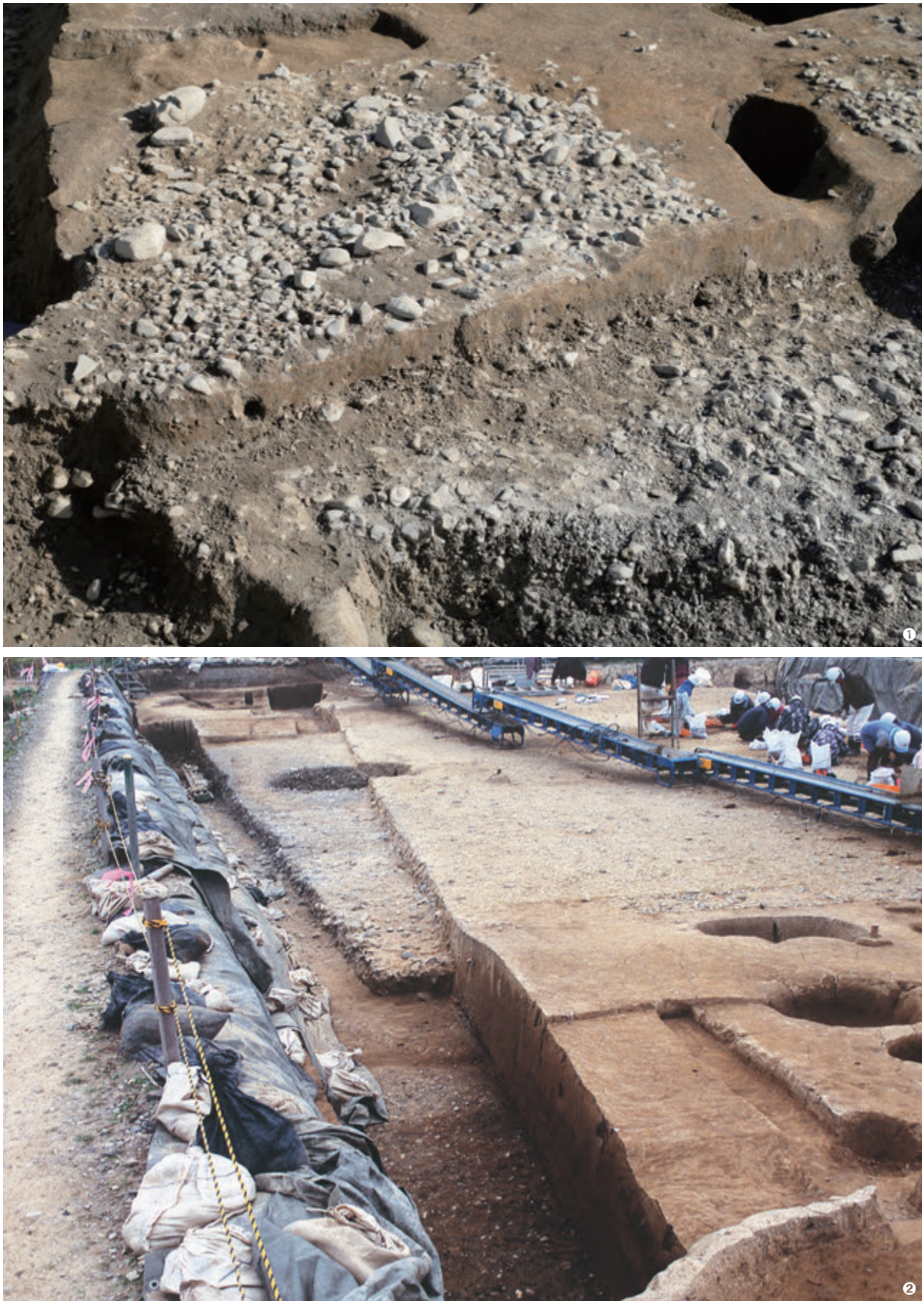
古代　礫敷遺構

図版28



①礫面１（近接）　②礫面２（近接）

古代　礫敷遺構



①入口テラス検出状況　②調査状況

古代　礫敷遺構

図版30



①造成面下の状況　②鉄製品出土状況

古代　礫敷遺構



①６号完掘状況　②７号完掘状況

近世・近代　掘立柱建物跡

図版32









①８号完掘状況　②60号鈴出土状況　③60号半截状況　④60号完掘状況

近世・近代　掘立柱建物跡・土坑





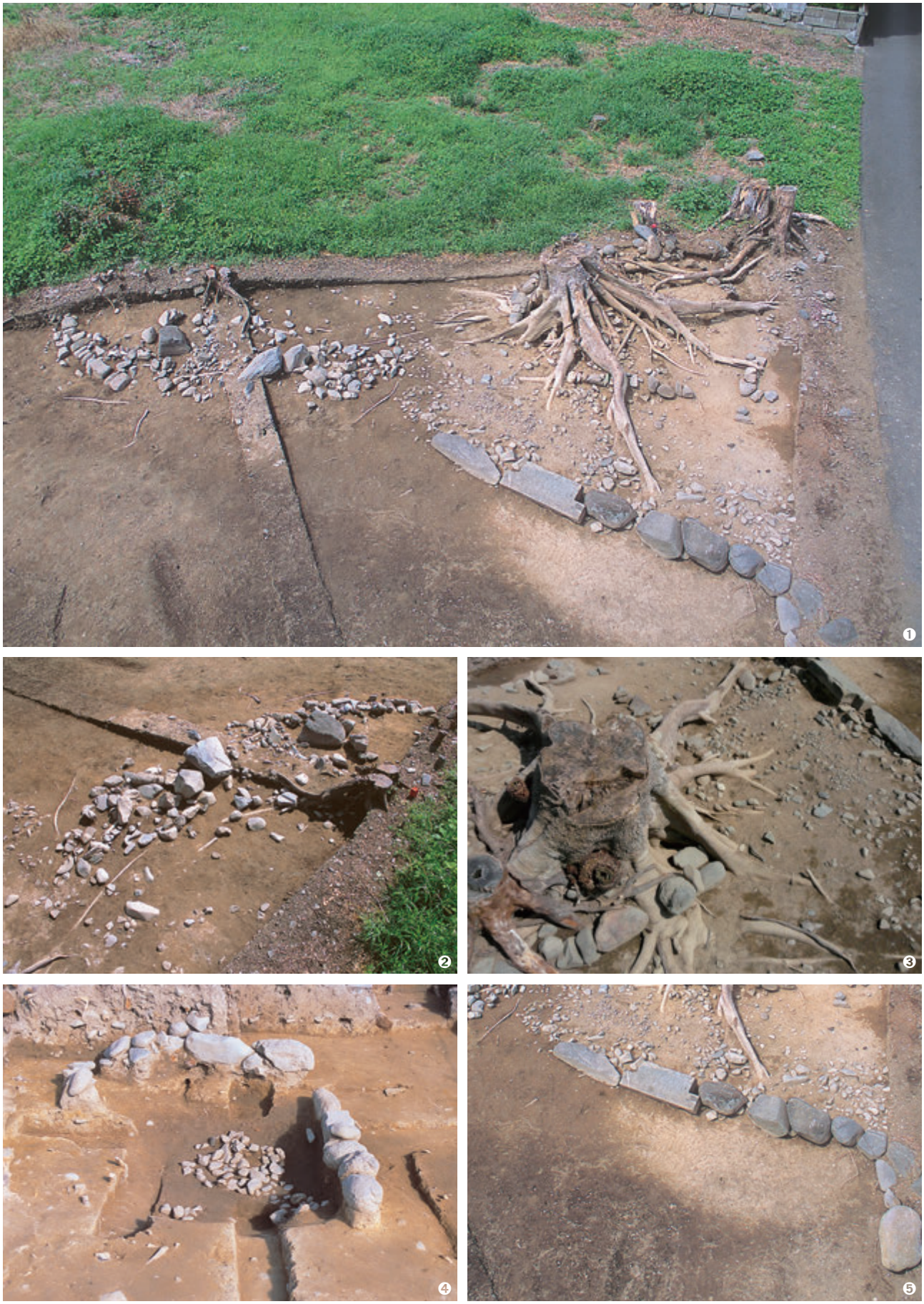





①61号完掘状況　②63号完掘状況　③64号完掘状況　④３号検出状況　⑤３号完掘状況　⑥４号西側・石垣検出状況　⑦４号調査状況　⑧４号完掘状況

近世・近代　土坑・溝状遺構・石垣

図版34



①祭祀遺構　②石列遺構１号　③石列遺構２号　④石列遺構３号　⑤石列遺構４号

近世・近代　祭祀遺構・石列遺構



縄文時代・弥生時代　出土遺物

図版36



古墳時代　竪穴建物跡３号・土器溜３　出土遺物

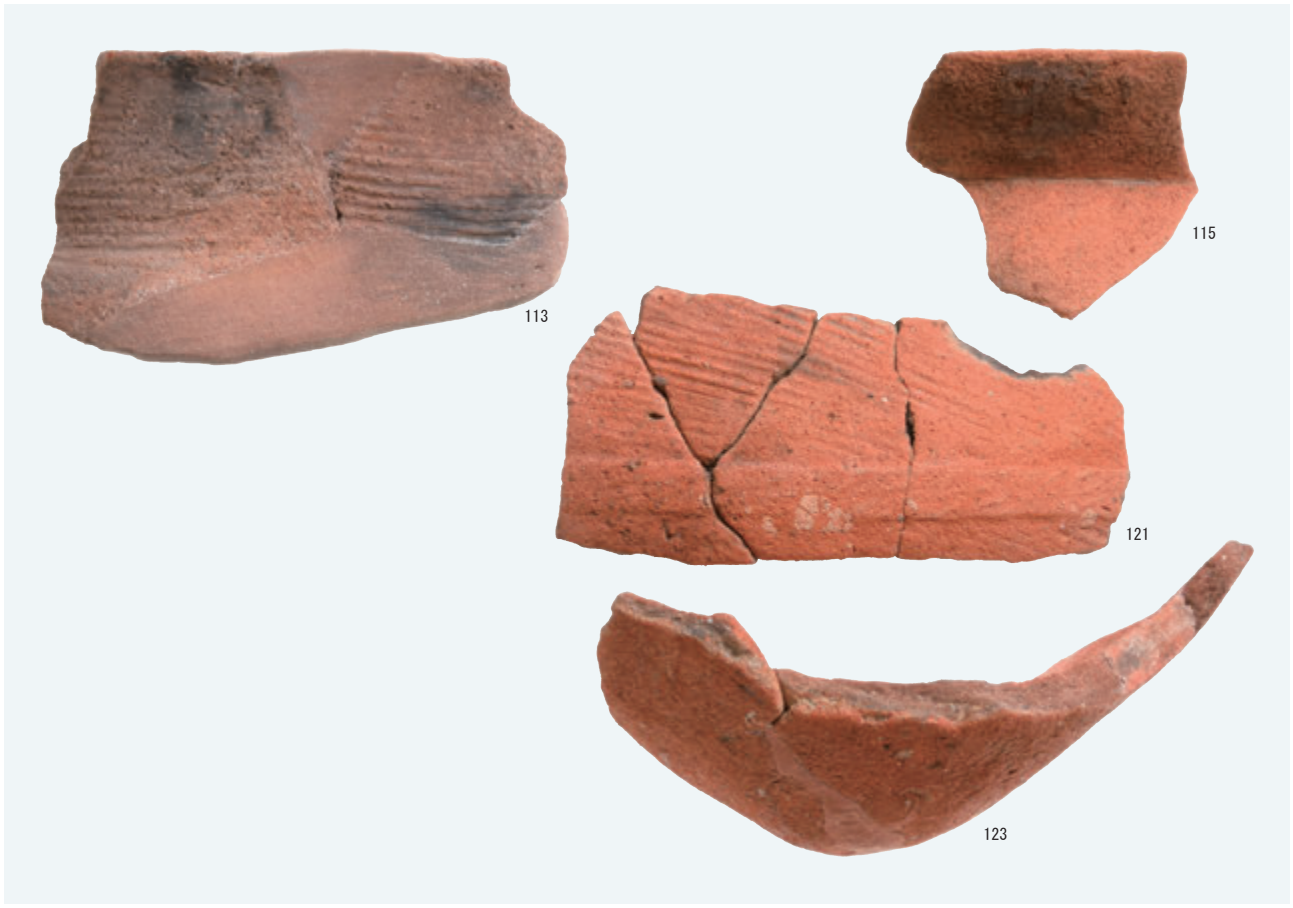


古墳時代　土器溜３　出土遺物

図版38



古墳時代　竪穴建物跡３号・土器溜３　出土遺物





古墳時代　竪穴建物跡４号・５号・６号・土器溜３　出土遺物

図版40



古墳時代　竪穴建物跡５号　出土遺物



古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物

図版42


177

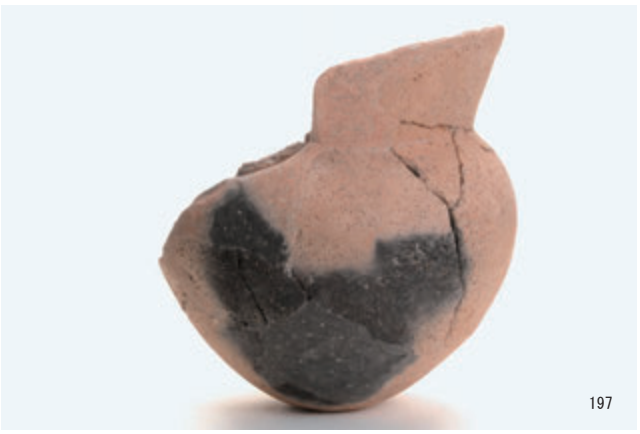

180


186


189


195


194


197

古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物


227


234


234


235


236

古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物

図版44


208


214


215


216

古墳時代　竪穴建物跡６号　出土遺物













古墳時代　竪穴建物跡７号・８号　出土遺物

図版46



古墳時代　竪穴建物跡10号　出土遺物







古墳時代　竪穴建物跡10号　出土遺物

図版48



古墳時代　竪穴建物跡11号・12号・竪穴状遺構　出土遺物


359


360


375


381


409

古墳時代　竪穴状遺構　出土遺物

図版50





古墳時代　竪穴状遺構　出土遺物

















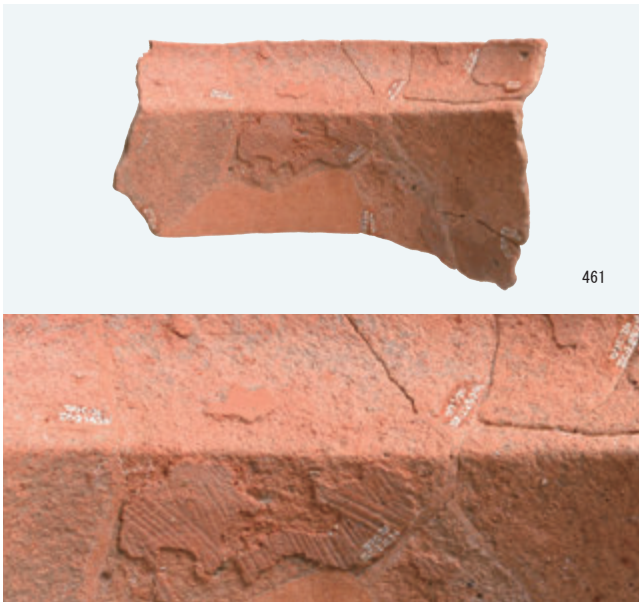
古墳時代　土坑28号・30号・39号・42号・43号　出土遺物

図版52


459


461


460


461


466


474

古墳時代　土器溜４　出土遺物


468


482


477


486

495

古墳時代　土器溜４・５　出土遺物

図版54



古墳時代　土器溜５　出土遺物











古墳時代　土器溜７　出土遺物

図版56



古墳時代　土器溜７　出土遺物







古墳時代　土器溜７　出土遺物

図版58


609


630

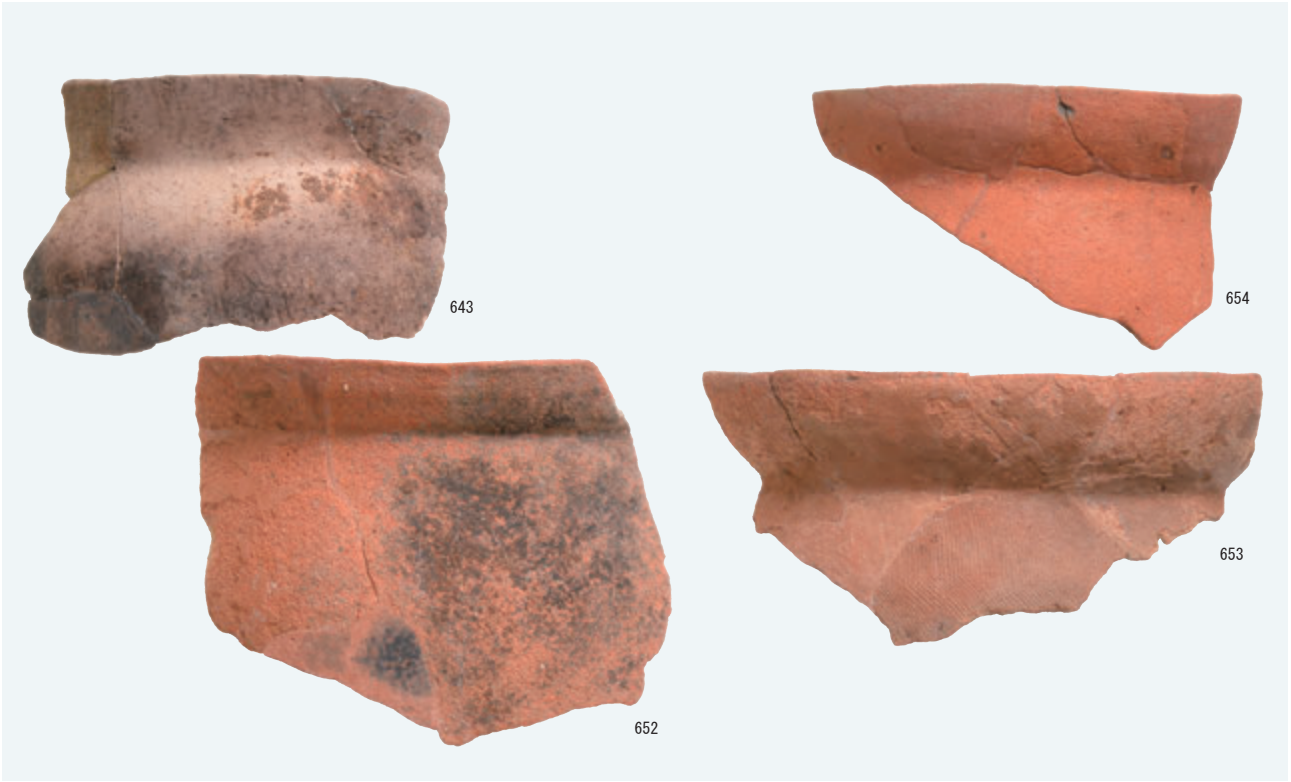

621
624
622
623


639


639

古墳時代　土器溜８　出土遺物







古墳時代　包含層　出土遺物

図版60



古墳時代　包含層　出土遺物


731


732


707
728
806
809
812


743 752 749
745 750 747

古墳時代　礫敷遺構・包含層　出土遺物

図版62





古代　土坑51号　出土遺物



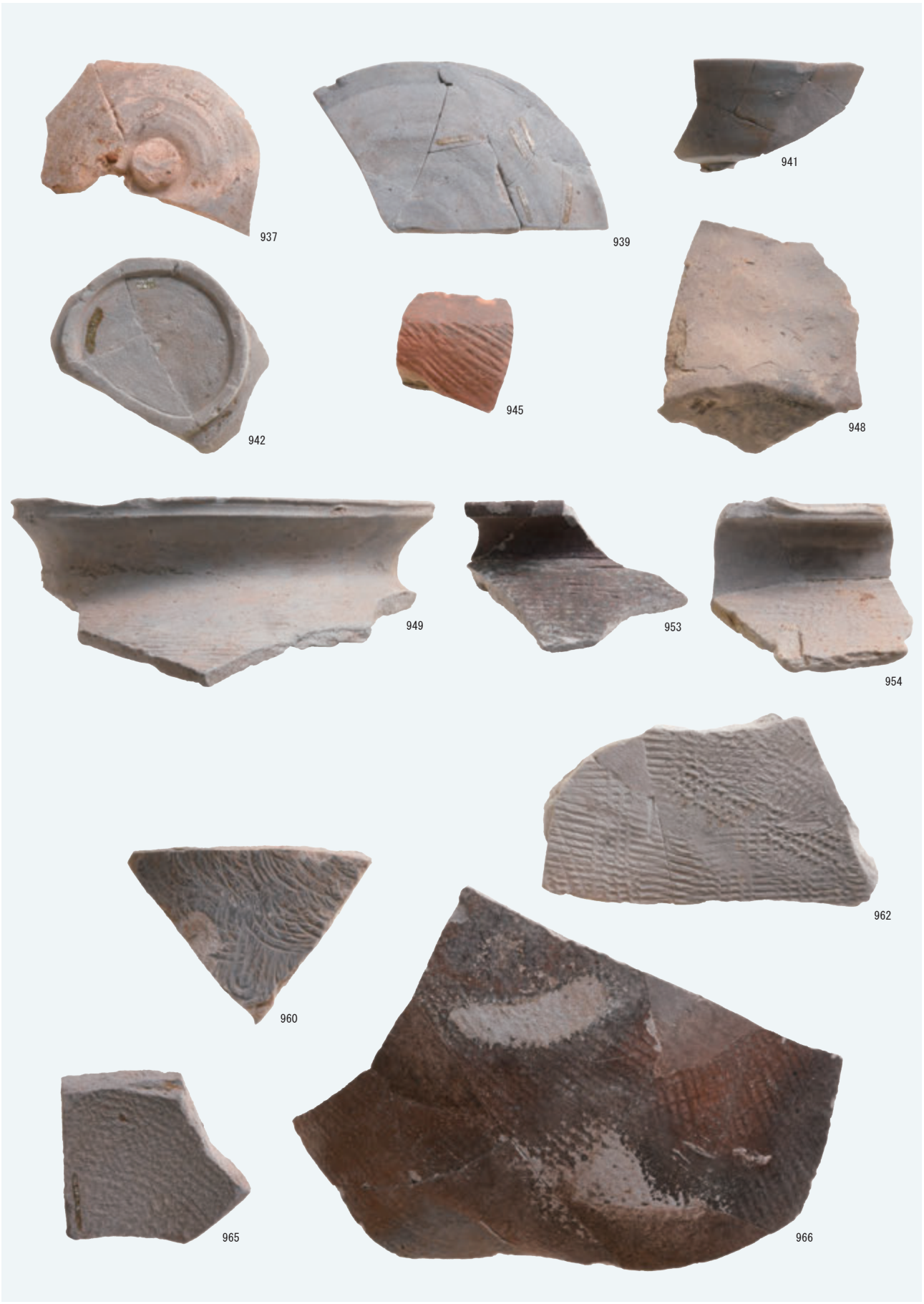


古代　土坑58号・礫敷遺構　出土遺物

図版64



古代　包含層　出土遺物



古代　包含層　出土遺物

図版66


967
981
982
968
969
970
971
972
973
974
975
977
976
978
979
980
983
984
985
986
987
988

中世　出土遺物



近世・近代　掘立柱建物跡６号・祭祀遺構・石列遺構３号　出土遺物



近世・近代　溝状遺構４号　出土遺物



近世・近代　溝状遺構４号・石垣　出土遺物

図版70


1049


1050


1051
1056
1059
1060


1064
1065
1061
1071

近世・近代　包含層　出土遺物


1080


1099


1088
1090
1091


1094
1095
1096


995 996
1013 1014
1098


997 998
458


1037
1097

古墳時代　埋納遺構
近世・近代　土坑60号・祭祀遺構・包含層　出土遺物

図版72


1072


1073
1074


1075


1076


1078　1082　1081

近世・近代　包含層　出土遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（42）
南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六反ヶ丸遺跡３
－Ｃ・Ｄ地点－

発　行　年　　2022年３月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-70-0574　　FAX 0995-70-0576

印　　刷　　株式会社イースト朝日
〒891-0122　鹿児島県鹿児島市南栄３丁目30-７
TEL 099-266-5522　　FAX 099-266-5523


鹿児島県